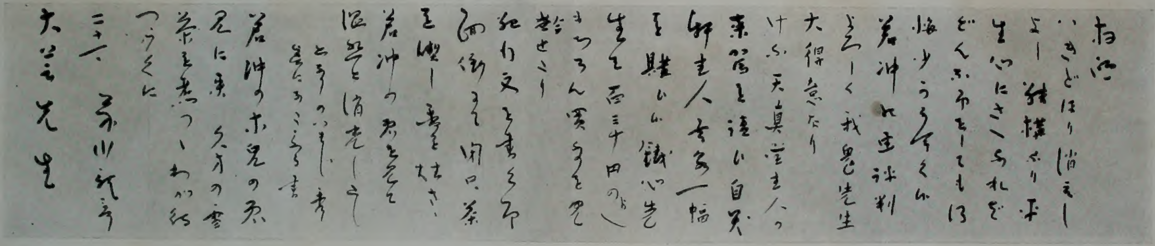
Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/akutagawarynosuk108800

芥川龍之介全集

第十巻

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5



書　翰（第四一九頁參照）

第十卷目錄

書翰

索引

書翰

明治四十二年

一　〔三月六日本所から。廣瀬雄宛〕

粛啓　御手紙難有奉誦致し候ジャングルブックは嘗て其中の二三を土肥春曙氏の譯したるを讀み（少年世界にて）幼き頭腦に小さき勇ましきモングースや狼の子なるモーグリーや椰子の綠葉のかげに眠れる水牛や甘き風と暖なる日光とに溢れたる熱帶の風物の鮮なる印象をうけしものに御座候原作に接したきは山々に御座候へども目下の樣子にては到底手におへなささうに候へばまづ／＼あきらめて

Rosmersholm をこつ／＼字書をひき居り候

ロスメルスホルムと云へば此篇ほどメレジュコウスキの所謂「死の苦痛卽ち生の苦痛」の空氣の痛切にあらはれたるは見ざる樣に思はれ候英譯一册にてイブセン通になる訣には無之候へどもボルクマンの懊惱。ゴーストの主人公の死。ドールスハウスのヒロインの決心。ザ、レデー、フロム、ザ、シーのヒロインの復活。皆この境に新生命の產聲をあげむとして叫び居り候へども殊に此ロスメルスホルムの男主人公と女主人公との最後ほど強く描かれたるは無之候ハウプトマンの「寂しき人々」は此作の感化を蒙る事多きよしに候へども嘗てよみたる「寂しき人々」の和譯にくらべてロスメルスホルムの方がはるかに力のつよき樣に感ぜられ候

恨らくは泰西の名著も東海の豎子には中々の重荷にて字書をひきて下調べをするときは何の事やら少しも判然せず代る代る譯をつける時に辛うじて事件の一部が明になり三度獨りでよみ返して見てはじめて全事件を望み得る次第に御座候殊に序幕にては暗示的な言の連發をうけて一方ならず閉口致し候

クオバデスもロスメルスホルムの間に繙き居り候へども中々捗らず時々先の頁を勘定してがつかり致

し候

今日はクオバデスとロスメルスホルムとの難解の個所を伺ひに上る豫定の所朝より客來にて一日中栄螺の如く囀りて且談り且論じ候まゝ遂に參上致し兼ね候此分にては雅邦會を訪ふも覺束なく相成申すは復活の後篇をよみ居り候

談話部の龍頭蛇尾に陥りたる委員諸君の遺憾はさこそと察せられ候へども小生にとりては少くも天恵に御座候ひき、「批評の態度」の愚稿に先生の玉斧を請ひて御迷惑をかけ候夜は、歸宅後書いては消し書いては消し遂には筒井君の所へ電話をかくるに至り候「果斷あり」と自ら誇りしが此果斷は順境にのみありて逆境にはあらず」其夜ひるがへして見たる「舞姫」の言我を欺かず候

これより學年試驗の完るまでは一週間禁讀書禁遠歩の行者と相成る筈に候遠足は散歩にて間にあはせ候へども禁書は兎も角も難行にて讀みたくてたまらぬ時は何となく氣のとがめ候まゝそうつと化學の教科書などの下にかくしてよむを常と致し候今度も此滑稽を繰返す事と思へば何となく滑稽らしくなく感ぜられ候あまり自分の事ばかり長々しく書きつらね候イゴイストは楞牛以來の事と御宥免下さるべく候　匆々

三月六日夜　芥川龍之介

廣瀬先生　硯北

二　〔三月二十八日銚子から。自筆繪端書、齋藤貞吉宛〕

青海原藻の花ゆらぐ波の底に魚とし住まば悶えざらむか

三月廿八日　銚子にありて　芥川狂生

明治四十三年

三　〔一月一日本所から。自筆繪端書、齋藤貞吉宛〕

遊びに來給へ柚味噌を御馳走してやるから

元旦　　　　　　　　　　　　　　　　龍　　生

四　〔四月芝から。山本喜譽司宛〕

Dear Sir

とう〳〵英文科にきめちやつたもう動かないつもりだ

文科の志望者は年々少くなつて今では一高が辛うじて定員だけもしくは定員を少し超過する位で地方には殆ど定員だけの志望者がないと云ふ、これと同じ運命にあるのが理科だ相だ

何處迄所謂 Industrial になるンだかわからない農科は近來秀才を吸收する新傾向を生じた相だ其一人が君なンだよ、大に得意になつていゝ

音樂がきゝたくなつた大へんきゝたくなつた今日も青年會館に音樂會がある行きたいなと思つたけれどやめにした、一寸變な氣がして思切つて出掛る勇氣がない、何時かもつときゝたくなつたら君に頼むから一緒に行つてくれ給へ獨ぢや何年たつたつて行けつこはない

勉强してるだらうね僕は矢張やれさうもないタイイスだけは讀ンでる

來られたら來ないか義理でいやいや來たンぢやアいやだ來てもかたくなつて遠慮しちやアいやだ遠慮しなくつても來てすぐ歸るやうに忙しいンぢやアいやだ

中々來かたが六づかしいンだよ大門行へのつて宇田川町で降りるぞ新橋――源助町――露月町――宇田川町）降りて少し先へ行くと道具屋と湯屋との間に狹い橫町があつて湯屋の黑い羽目に耕牧舍の廣告がある其橫町を向うへぬけると廣い往來へ出るさうすると直耕牧舍の看板がある狹い橫町があるからそれをはいると右側に図が立つてるその向うの右側に花崗石を二列に敷いた路次があるそれをはいるとつきあたりに門があるその門の內へはいるとどこかの代議士の御妾さんの家へはいるから其門をくゞつちやアいけない門の左に格子戸がある格子戸をあけると左に下駄箱があつて其上にロツキングの馬がのつかつてる

此處迄來ればもう間違なく僕の机の所へ來られる筈だ芝の家の玄關がこれだから

平塚の所から手紙が來て肋骨はぬかずにすンだとかいてある當分寢てゐるさうだ序があつたら見舞に行つてやるといゝあの黑犬さへ居なければ僕も行くンだけれど

さぞ細くなつたらうと思つたら淚が二しづくこぼれたでも二しづくきりつきやこぼさなかつた

本當に來られたら來給へ來る前にはハガキで知らせて吳れ給へ待つてるから

これからもよい〳〵手紙をかく淋しくなれば方々へ手紙を出す其度に返事はいらない此方から出した手紙も讀ンでも讀まなくつてもいゝ用がある時は狀袋に特にしるしをつけるから

末ながら皆さんによろしく　匆々

四月花曇の日　龍

喜　兄

川やなぎ薄紫にたそがるゝ汝の家を思ひかなしむ

ヒヤシンス白くかほれり窓掛のかげに汝をなつかしむ夕

夕潮に春の灯うつる川ぞひの汝の家のしたはしきかな

五　〔六月六日本所から。廣瀬雄宛〕

粛白　昨夜は失禮致し候今朝西川と山本と三人にて一高へ願書を出しにゆき候校門をくゞりし時一高の時計臺は九時半を示し居り候ひしも門衞のわれらに與へたる番號札の既に五十番に達したるに先驚申候玄關にて下駄をぬがせられ冷なるタヽキの廊下を跣足にて會計課へ受驗料を納め候へば會計係の人の小生をよびて「あく川さん」と云ふに再驚申候願書差出人の待合せたる所に至れば小使らしき紺の法衣を着たるが秣を切るやうな機械にて入學志望者の寫眞の（原）緣（代紙の部分）を無造作に切落し居候其後に洋服の老人と和服の中年の人とが願書と寫眞とを受驗票にひきかへ居り候しかも受驗者の多くが廿歳を越えたりと覺しき大人なるに三たび少なからず驚申候前年度の卒業生と一昨年度の卒業生（？）なる松崎と云ふ人に遭ひ候猶細川が其前年度の卒業生なる名前を知らぬ人と一緒に參り居り候ひしは聊意外に感ぜられ候

われらが願書を出せる間に白帽の幾人かが朗々と何やら歌ひながらすぎゆくと異樣なる教授服を着たる痩せたる先生のとほるとを見大に羨しく相成候暫待たせられたる後漸くわれらの番になりて願書を出し候ところ二部乙は山本が五十七番西川が五十八番小生の一部乙は僅に四十四番に候ひき猶丁度一緒になれる小生の知人は獨法にて八十六番に候由申し居り候一部甲二部甲三部等は既に百番以上に達せし樣に見うけられ候理科と文科の不振は之に徵しても明に候

受驗票と受驗の心得を記せる紙とを懷にして泥濘の路を唯今歸宅致し候何となく自己の生活が小さき段落をつけられたるやうな氣が致し候及第しても落第しても此段落は長く殘ることと存じ候

これより直に芝に歸りて再辭書をひき始むべく候空腹にして高心たりし昔を恥づるの心漸に此頃になりて木洩日の如く我胸に光りそめ候とりあへず御知らせ迄　匆々不悉

六月六日　　芥川龍之介

六「七月三日本所から。廣瀬雄宛」

廣瀬先生　玉案下

敬啓　先夜は失禮致候其節拜借の　DIMINUTIVE DRAMAS　面白く拜讀致居候淡々たるユーモアの水の如く溢れたる誠に此作者の特色なるべく唯今まで讀みたる所にては　THE AULIS DIFFICULTY　最心を惹き候

今朝山本より慶應入學に定め候由申來り候日下は試驗後早々とて大分興奮してゐる樣に候へば小生の申す事抔は聞入申すまじくもう少し落ちついた所で一高をすゝめて見るつもりに候へどもどうも小生の云ふ事より氣質と境遇との方が勝ちさうにて少々心配に御座候慶應は勿論理財科手紙は豐治より參りしのに候

昨日は中塚やら大塚やら神山やら筒井やら長島やらに逢ひ候鐵雄老漢は（TETSUYT　と御よみ下され度候）萬年漬の爲腸胃加太兒になり候由形容は多少枯槁致居候へども元氣は中々盛にて「吹毛劍を撲つて隻手之聲を切斷すれば如何」などと云ふ辛辣な事を澤山承つて參り候中塚は大分悲觀致居候へども來年は勿論一高を試むべく勉強も休暇後と云はずつゞいてやる由に候

今日朝來微雨獨座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候殊に其懷古七律の如き格調哀婉李義山に比すれば更に微、溫飛郷に比すれば更に麗、青蓮少陵以降七律を以て斗南第一人の名ありしもの誠に偶然ならず候

末ながら御旅行の幸澤ならむを祈り候　早々稽首

三日朝

芥川龍之介

廣瀬先生

七〔八月二十九日芝から。繪端書、齋藤貞吉宛〕

留守に御出でになつたときゝました是非又御出で下さい明日か明後日にはかへりますから綠葉の戰ぎにも火取虫の羽の色にももう秋がまゐりました Rodenbach の詩が思ひ出されますハガキを切らしましたからやなアメリカのヱハガキで御免を蒙ります

秋立つ日うろ齒に銀をうづめけり
獻上の刀試めすや今朝の秋

一九一〇年八月二十九日　　芝にて　芥　川　生

八〔九月一日本所から。繪端書、齋藤貞吉宛〕

御手紙の模樣では來年はもう一高を受けないやうにとれるうけるのなら一年を田舍で暮す愚を敢てする訣はないと思ふ多少の推測が出來ないのでもないが門外漢の位置から云つて深く御尋ねする事の禮でないのを信ずる北方ロシヤの白樺の林はツルゲネフに獵人日記の雄篇を齎したしステップの藍花の香はゴゴルにタラスブルバの中のあの美しい敍景を齎した「信州」も君に何物かを與へるにちがひないと思ふ折々の御通信を切に御願する猶出來ることなら出發前に一度僕を訪ねてくれないか　不悉

一九一〇年九月一日

書顔や甘蔗畑の汐曇り

明治四十四年

九 〔十月十七日新宿から。中塚癸巳男宛〕

敬啓　鹽原からは一昨日かへつて來た足の裏が兩方とも豆で一ぱいになつてしまつた寢ても坐つてもづき／＼痛む歩いては猶更痛む煙草の吹がらと飯粒とを一緒にねつて貼つて見たがどうも一寸癒りさうではない

豆は第一日に鹽原へついた時にもう足のうら一面に蔓延してしまつたのであるそして西川と口をきくのが面倒臭い程痛む仕方がないから手紙を二三枚かいたなり寢ころんで「こゝの宿屋は椎たけばかり食はせる」とか「女中がいやに丁寧ぶつてゐやあがる」とか獨りで勝手な不平をならべて見たさうすると西川が「中塚へは僕からハガキを出しとくぜ」と云つた西川は少し前からせつせとヱハガキへ萬年筆を走らせながら「この吼哮瀧のヱハガキは寮の始終寮歌ばかりうたつてる友達へ出してやらう」とか「明日は栗ようかんをおみやげに買つて行かうかな」とかくだらない獨語を云つて嬉しがつてゐたのであるもとより豆に恐縮してゐる際だから「よろしく頼むよ」とすぐに許可してやつたが西川は少し考へながら今度は「中塚はまたのんきぢやあないかな」と疑問のやうな疑問でないやうな事を云ひ出した外の奴がこんな事を云つたなら「俺は知らないよ」と答へてやるのだが西川だけに此方も眞面目な答をしなければならなくなつた何故眞面目な答をしなければならなくなつたときかれると少し説明が入る元來西川はあんまりこんな事を云はない男である眞鍮を金に見せようとするけちな了簡がないだけに決して顏だけ泣きつらをして腹の中では舌を出しながら笑ふやうな事をしない男である世の中には隨分おひやらかし半分に心配さうな顏をして見たりさも驚いたやうな顏をして見たりする奴がどこへ行つ

てもうぢやくゐるだからこんな奴をあつかふ時には僕も正當防衞として冷かすかさもなければおひやらかして追拂つてしまふ唯西川にはこれがない藥にしたくもこんな下劣なづうくしい所がないこれだから僕は眞面目になつたのである此時ばかりではない何時でも僕は眞面目になるのであるそこで「俺ものん氣になつては困ると思つてるんだ」と答へたそしてその上に「ことによると少しのんきになつてるかもしれないな」とつけ加へたさうすると西川は「どこか豫備校へでも行つてゐるのかね」と尋ねたそれから西川と僕との間には大體下のやうな對話が交換された

A「どこへも行つてゐないのだらう」

N「それで勉强する氣かな」

A「さうだらうと思ふ」

N「獨りで勉强するには餘程意志が强くないと怠けるからな注意しないといけない」

A「來年は是非はいらなくつちやあいけないんだからね俺も何時でものん氣ならざらむことを祈つてるんだ」

西川はだまつて「小梅業平町五十」と君の宛名を書いたそれから僕は寢ころんで十分ばかりモーパッサンの短篇をよんだら眠くなつて來た少し早かつたが二人共床へはいつて花のやうな赤い灯をながめながら話をしてゐると又西川が「中塚のとこから手紙でもくるかね」とき〻出した

A「うむ幽靈の木像の畫はがきと病氣見舞のはがきとがきた」

N「勉强をしてゐるやうかい」

A「してるんだらうと思ふ」

N「來年ははいらなくつちや駄目だからな」

A「〇〇君のやうに四年目に補缺ではいるなんと云ふんぢやあ心細いからな」

N「さうなつちやあ大變だ」

A「無精とのん氣さへ祟らなけりやあはいれるんだが」
N「のん氣になつてはいけないな」
それから話しがクラスの人物評にたつたが二十分も話してゐる中に御互に眠くなつたので 二人共に
以後に口をきくものは寐言と見做すと西川が宣言したそして寐てしまつた
甚くだらない事を書いたと思ふかもしれないしかしこれは僕等二人が正しく感じた事を正しく口にし
たものである僕はあの簗川の水音のきこえる温泉宿で豆だらけの足を重ねながら蕭然として「何處へ
も行つてゐないんだらう」と答へた時の感じを何時までも忘れないだらうと思ふそして今でもあの〳〵、
の事に頓着しない西川が二度まで自分から切出して話を君の上に移した事を思ふと我しらず眼のうる
むのを感ぜざるを得ないのである
僕は今新宿の君のしつてゐる二階の書齋でこれを書く書きながら涙が二つ落ちた僕たちは唯君が正し
い努力の歩を一歩づゝ進めることを祈る君が君の前に始終母上と祖母上とのいますことを忘れないや
うに祈る獨り母上と祖母上とのみならず君の父上も亦君の慰めを待たれる事を忘れないやうに祈るこ
れさへ忘れなければそれで澤山だ一高の寄宿舍に君の上を祈るものの少くも三人はあるのも忘れて
いゝ何も彼も忘れていゝ唯これだけを忘れるなと云ひたい君の爲に捧げた君の家族の銀の如く美しい
犧牲を忘れるなと云ひたい
くだらない事を長々とかいた夜がふけたから筆を擱く讀み返さないでこのまゝ封じるから御判讀をね
がひたい　不悪

十七日夜　芥川龍之介

中塚癸巳男兄　案下

一〇〔明治四十四年（推定）。山本喜譽司宛（寫）〕

雨の中を十一時まで獨りでぶらついた。君の家の前も二度通つた。たゞ何となく氣がいら／＼する、このいら／＼する思ひを君にしらせたいと思ふ。君より外にきいてくれる人はないと思ふ。

前に大きな陷穽があつて、僕の通る道が唯一すぢ其陷穽にどうしてもおちなくてはならぬやうについてゐたとしたら、どんなだらう。すべての力もぬけてしまふぢやアないか。病軀を抱いて痛飮する尾城の心もちになつて見れば、隨分氣の毒なものだと思ふ。しかも僕自身もこの憫むべき人間ぢやアないか。

レルモントフは「自分には魂が二つある、一は始終働いてゐるが一つは其働くのを觀察し又は批評してゐる」といつた。僕も自己が二つあるやうな氣がしてならない。さうして一つの自己はもう一つの自己を、絶えず冷笑し侮辱してゐるンだもの、僕は意氣地のない無價値な人間なンだもの、それはボルクマンもよみ、ノラもよんだのだから、何故自己の生活に生きないといはれるかも知れない、けれども僕は到底そんなに腰がすゑられない、僕は醉つてゐる一方においては絶えず醒めてもゐる。僕は囚はれてゐる一方に於ては、常に解放せられてゐる。生慾と性慾との要求を同時に一刻も空虚を感じないことはない。まるで反對なものがいつも同時に反對の方向に動かうとしてゐる。僕は自ら聰明だと信ずる、唯其聰明は呪ふべき聰明である。僕は聰明を求めて却つて聰明のために苦んでゐるのだ、其相搏つてゐる大きな二つの力の何れかゞ無くつてくれゝばいゝ。さうしなければいつも不安である、かうまで思弱るほど意氣地のない人間なんだもの。君は嗤ふかもしれないけれども嗤はれてもいゝ、しみ／＼かう考へこむのだから。

いつまでたつても僕はひとりのやうな氣がする。淋しい巡禮のやうな、悲しさが胸にわくよ、唯同じやうな（多少なりとも）感情を持つてゐる君が賴みになるばかりなのだもの。

君がゐなくなつたら僕はどうしていゝかわからないのだもの、いつか君にわかれる日がくるンぢやアないかと思ふと、わけもなくつまらなく感じられる、見はなされるやうな氣さへするよ君。

何をやつても同じ事だ、結局は同じ運命がくるのだし、誰でも同じ運命にあふのだから、しみ〲何のために生きてゐるのかわからない。神も僕にはだん〲とうすくなる。種の爲の生存、子孫をつくる爲の生存、それが眞理かもしれないとさへ思はれる。外面の生活の缺陥を補つてゆく歡樂は此苦しさをわすれさせるかもしれない、けれども空虛な感じはどうしたつて失せなからう。種の爲の生存、かなしいひゞきがつたはるぢやアないか。

窮極する所は死乎、けれども僕にはどうもまだどうにかなりさうな氣がする、死なずともすみさうな氣がする。卑怯だ、未練があるのだ、僕は死ねない理由もなく死ねない、家族の係累といふ錘はさらにこの卑怯をつよくする、何度日記に「死」といふ字をかいて見たかしれないのに。

さういへば其日記も此頃はやめてしまつた、過去何年の日記は、皆噓ばかりかいてある。唯あとで讀んで面白い爲なら、何も日記をつける必要はない、何故あんな愚にもつかない事を誇張して日記なんていつたらう。

どうしていゝかわからない。唯苦笑して生きてゆくばかりだ、さうしたらいつか年をとつて死んでしまふだらう。死なないまでも今の思想とはまるでかはつた思想を抱くだらう、どうせ「忘却」のかなしみはいつか僕を掩ふんだらう。

氣狂ひじみた事を長くかいた。けれども實際こんな考が起つてとめどがない。よみかへすと君に見せるのが嫌になるかもしれないからかきはなしで君の所へあげる。

誤字や脫字はよろしく御判讀を願ふ。

切に試驗をうまくやるのをいのる。

十一日夜十二時蠟燭の火にて　　　龍　生

明治四十五年　大正元年

一一　〔七月十五日新宿から。恒藤恭宛〕

御無沙汰をしてすまない
此間成績をみに學校へ行つた石田君だの大江君だの何だのに遭ふ前の日の午前に出る筈のがやつと翌日の午後になつて出たのである其上大へん暑い日であのアスフアルトのやうに空までが白く爛れてゐた折角暑い思をして見て來たものだから君の所へもしらせようと思つたが石田君が何でも大ぜいの人に通知をしなければならないと吹聴してゐた中に君の名もあつたから二度の手數をかけるのでもないとやめにした鈴木は氣の毒な事をした後藤さんは仕方がないにしても
休み前に思つた通りになる事は一つもない本もそんなに早くよめない旅行にも出かける氣にならない毎日ぼんやり硝子戸の外にふる雨の音をきいてゐるばかりだ人も滅多に來ない人の所へも更に滅多に行かない胃が少し惡くなりかゝつてゐるのが閉口だが其外は格別苦になる事もない布で大きな茶袋のやうなものを二つ拵へてその口に眞田紐をつけてその中へ足をつゝこんで紐を膝の上でしめて蚊に食はれない豫防をして本をよんだり晝寐をしたりしてゐる何時までも休みがつゞくといゝなと思ふ
入學試驗がすんだＫＡＮＩＰＡＮは多分いけなからうと思ふ問題は大へんやさしい殊に國漢なんぞは御話しにならん概してやさしすぎるあれでは採點の時先生の氣分の働く餘地が多からうと思ふ漢文を例の爲に御覽に入れる　豐太閤磊々落々氣象。似石勒。而其膽略過之。其代織田氏興。雖未免欺其孤兒寡婦。蕩掃海內。濟二百年塗炭之民。惜乎能治亂而不能成治也。其上豐太閤と石勒にＵＮＤＥＲＬＩＮＥをして固有名詞たるを示してゐる中學の二年生でもよめるにちがひない

紫紅氏の戀の洞を帝劇へ見に行つた大へんつまらないのでシアロツクホルムスと喜劇とは見てゐる氣になれなくつて早く電車にゆられながら家へかへつた唯眼にのこるのは中幕辨慶上使の幸四郎の辨慶とかく子のおわさばかりである蚊帳の中で横になる時何時までも舊劇を稱賞する——舊劇以外に稱賞し得るものを見出し得ないのを心細く思つた、しかしこれは作劇が文藝に興味を有する若旦那の手に委ねらるゝ限り續くのに相違ない

MYSTERIOUSな話しがあつたら敎へてくれ給へあの八百萬の神々の軍馬の蹄のひゞく杜の名もその時序にかいてよこしてくれ給へろせつちの詩集の序に彼は超自然な事のかいてある本は何でも耽讀したとかいてある大に我意を得たと思ふ一笑時々ろせつちをよむ願くは此詩人のやうに純なる詩の三昧境に生きたいと思ふ　ADIEU

御盆の十五日　　龍

一二〔八月二日新宿から。藤岡藏六宛〕

御不例中に手紙をかいて君の所へ出すばかりにして置いたが號外の連發される騷ぎについわすれてしまつたので書棚の上へのせたまゝ封筒の上に埃がたまるやうになつたその中に君のところから桃色の狀袋にはいつた君の手紙が來たので前の手紙を裂いて新に之をかく

御不例中に夜二重橋へ遙拜しに行つた姉が小學生が三人顏を土につけて二十分も三十分もおじぎをしてゐたと涙ぐんで話したときには僕でも動かされたが其内に御命に代り奉ると云つて二重橋の傍で劇藥をのんだ學生が出たら急にいやな氣になつてしまつた、電車へのつて遙拜にゆくつもりでゐたのがそんな奴ばかりの所へゆく位なら家にゐて御平癒を祈つた方が遙にいゝと考へるやうになつたさうすると直崩御の號外が出た、あけがたの暗い中に來た黑枠の號外を手にとつた時矢張遙拜に行つた方がよかつたとしみじみさう思つた

昨日(一日)は學校で御哀悼の式があつた在京の生徒が可成あつまつた講堂であの緋と金との校旗の下に菊池さんが哀悼の辭をよんだそのあとで可成長い菊池さんの話しがあつたさうしてそれが非常に暑かつた其前寮の委員が菊池さんの所へ寮生の御見舞狀を捧呈する爲に行つた所が夜の十一時すぎになつても歸つて來ない仕方がなく歸らうとすると路で先生にあつた所が先生は醉顏を風にふかせながら「陛下の御病氣はまことに痛心にたへない」とのべたそれがあの廿八日の夜だときいてゐるまた委員が谷山さんの所へ行つた時舍監は「こんな騷ぎなのに堀さんは淺草へ行つて遊んでるんだから仕方がない」と云ひ云ひ自分は酒をのんでやめなかつたときいたそんな scandal を聞いてゐるだけにあんな哀悼の辭より何の學問もない僕の母や伯母の方がはるかに尊いと云ふ反感が起つた實際崩御の號外が出た時には僕のうちのものは皆泣いたんだあんな調子ですべてをやつて行くんだから學校だつて駄目なんだと思ふ

もし旅が娛樂に關する催しの中に算入されないとしたならば僕は御停止がやんだら旅に出ようかとも思つてゐるまだ何ともきまらない時々僕のあたまの中には猪苗代の湖の靑い平面がきらりとうつる事があるあの近所へでも行かうかと思ふ

東京は暑いうんざりするほど暑いさうして場末だから僕の方は蚊が澤山くる灯をとりに黃金虫やうんかや羽蟻のやうなやつが澤山はいつてくる夏はほんとうにいやだ

ヒヤワタは一寸面白い。プリミチブなアメリカインヂアンの獸皮に描く畫のやうな圓葉柳のかげにふく蘆笛の聲のやうな感じがする、僕は Peace-Pipe. Hiawatha and Mudjekeewis. The Son of Evening Star. Hiawatha's Departure がいゝと思ふあの中に出てくる幽靈はあんまり感心しない何と云つても Longfellow では Evangeline がすぐれてゐるのだらうと思ふ

鈴木は大連から手紙をくれた支那料理の饗應をうけて支那の芝居をみにゆくのださうだうまくやつてるなと思ふ灰色の平原と靑い海の鋼鐵のやうな面とが眼にうかぶ紅い灯の光になげく鳳管や月琴の聲

が耳にひゞく此頃南清へ行けと人に誘はれたが金がないので斷つた滿洲は黍が疎にはえた中で黑い豚が鼻をならしてゐるやうな氣がするけれど楊子江の柳に光る日の光は是非一度あびたいと思ふ
Mysterions な話しを何でもいゝから書いてくれ給へ、文に短きなんて謙遜するのはよし給へ
如例靜平な生活をしてゐる時に圖書館へ行つて怪異と云ふ標題の目錄をさがしてくる此間稻生物怪錄をよんだら一寸面白かつた其外比叡山天狗の沙汰だの本朝妖魅考だの甚現代に緣の遠いものをよんでゐる何でも天狗はよく「くそとび」と云ふ鳶の形をして現はれるさうだ「くそとび」は奇拔だと思ふ
健康を祈る　　龍

一三　〔八月十六日汽車にて。端書、恒藤恭宛〕

酒ずきの豚のやうなる藥賣り醉ひて眠りて汽車に日くれぬ
何思ひ夕日に黃なる窓による首をたれし月琴彈きは（車中）
まひる日の靑草原にかなしきはつりがね草の夢の銀色（沿道）

木曾に向ふ　芥川生
一、八、一六、

大正二年

一四　〔六月二十一日新宿から。端書、淺野三千三宛〕

無試驗檢定にて愈〻入學許可せられ候由まづ〳〵御目出度存じ候
唯此上は體格檢査迄御健康に周密なる御注意を拂はれたくこれのみ切望にたへず候
朝來淡雲微風　昨日試驗をすませてより一日にして早くも無聊にたへず候　御暇の節は御來遊下され度待上げ候　不悉

六月廿一日朝　　芥　川　生

淺　野　君　案下

一五　〔七月十九日新宿から。淺野三千三宛〕

敬啓　御旅行中は御消息を頂き難有く御禮申上候北越の地は小供の時分に三州奇談とか云ふ隨筆にて黒部川の水源には椰子が生えてゐるの白鬼女川の主と白醜人の池の主とは夫婦だのと云ふ事をよんでより加賀と云はず越前と云はず能登越中越後皆一度行つて見たい土地と相成り居り候まゝ御はがきにも一層の興趣を感じ候何時の間にか三月をすぎ候廿九日迄は誰が入學を許可せらるゝかわからず候へども君と市川君とを加へて五人位は及第するだらうと思ひ候御互に試驗に苦めらるゝ學生も憫れに候へどもこんな制度を布かねばならぬ國も隨分憫れな國なるべく候八月初旬よりは多分留守に致すべく候へ共今月中は大抵毎日在宅仕る可く候へば御暇の節は御來遊下されたく願上候　草々不宣

十九日朝　　芥　川　生

淺野君案下

一六〔七月二十二日新宿から。藤岡藏六宛〕

藤岡君

まづ返事の遲くなつた事をゆるして貰はなければならない卒業式から今日まで人に訪ねられたり人を訪ねたり殆寧日なくくらしてしまつた花畠の芥子がさく、ちる、犬の子が生れる、柘榴がさく茄子がなる、とうとう玉蜀黍がなる迄殆何もせずに電車にのつたり人とアイスクリームをのんだりしてゐたその爲に方々からくる手紙もよんでは机のひき出しへ入れよんでは机のひき出しへ入れて返事をかく暇が一寸見あたらない暇はあつてもがつかりして一寸かく氣にならない僕の性分上返事の遲くなつたのは當然として君もゆるしてくれる事だらうと思ふ

唯本は少しよんだよんだと云ふ中には古ぼけた虞初新誌や剪燈新話や五才子書や金瓶梅のやうな小說が多い橫文字の本は殆よまなかつた晝寐は隨分する夜遲くかへつた翌日は時のゆるすかぎり十時頃からさへ寐るだから頭は割合にいゝ體も平調だ尤も胃が少し惡いやうな氣もするが大した事はない

一、二年の成績を見に學校へ行つた時に小栗栖君にあつた外は誰にもあはないからして偶然一緒になつた二十何人かは又偶然行路の人になつてしまふのだらうと思ふ

考へてみれば僕は大へんいゝ時に高等學校を卒業したやうに思はれるこんなに未練なくこんなに思慕の情を持たずに母校を去ることは滅多に出來るもんぢやあないしみじみ僕は僕の學校と寮とに對する反感を完全にしてくれた點に於て瀨戶先生と瀨戶先生の敎育方針とに感謝しなければならないと思ふその上僕は僕の中學を出た一高の先輩に對する尊敬と愛情とを全然失つた點に於ても〝寮及寮〟の組織する人々に感謝したいと思ふ僕等が一高へはいつた時僕らの先輩は僕らを迎へる會を江知勝でひらいたその時の記憶は今でも鮮かにのこつてゐる彼等は僕らに中學の生活の dry なことを力說したそれから

寮の生活の自由で愉快な事を繰返した單純な素朴な中學の生活になれた僕らは如何に彼等の眞面目な話に敬聽したらうけれども不幸にしてこれらの眞摯な語をきくと同時に僕らは又彼等が麥酒を鯨飲するのを見ないわけにはゆかなかつた彼等が餘興の名の下にでかんしよをうたひ逆立ちをするのを見ないわけにはゆかなかつた更に彼等以外の一高生かシャツ一枚に袴をはいて畑德利と下足札とをたゝきながら storm と稱する悪戯を廊下から廊下に演ずるのを見ないわけにはゆかなかつた彼等か中學の生活を″dry と云ふのも無理はない――この時から始まつた disillusion は卒業迄つゞいたどうしてしかく寮に謳歌する先輩を尊敬することが出來るだらうどうして彼等と共に中學の生活を dry と云ふ名の下に″一笑しさる事が出來るだらう弊衣の如くぬぎすてた一高生活を顧るごとにそゞろにチェスタアトンの語を思出さずにはゐられない

The wise men are those who have comedies in their heads and tragedies in their hearts.

僕はかく頭には喜劇を胸には悲劇を藏して人生の道上をあゆまなければならない君の二枚目のはがきは大へん面白くよんださうしてそれが當然だと思つたこれは君ばかりぢやない年々ひらかれる中學の同級會に出る度に僕も今更のやうに感ぜずにはゐられない事の一であるかうして皆他人になつてゆくんだなと思ふ俺は俺だけだと思ふ時には肉親の bond さへ利害關係の一致しない時には存外弱いものかもしれない(世間一般の上から)とも思ふ要するに我我は失望する爲に生きてゐるのかもしれないけれども失望しきつた處には自ら新しい望が芽ぐむ雜草をむしりとつたあとの土でなければヒヤシンスの花はさかない disillusion を經過したあとの心に生まれたのぞみでなければ力づよいのぞみとは云はれない僕等はさびしいけれどそれだけさびしくない人よりは強いと思ふ

之で筆をさしおくべコニアの赤い花にほひのうすい鳳仙花猫がなく晝のひざし――君の健康を祝し且祈る

龍

一七 〔七月二十四日新宿から。端書、淺野三千三宛〕

肅啓　廿五、廿六兩日中に御目にかゝりたく候へども御光來下さる可く候や伺上候時間は何時にても君の都合よきを御選び下され度候　不悉

廿四日

一八 〔七月三十日新宿から。端書、淺野三千三宛〕

わざ〳〵合格者御しらせ下され難有御禮申上候五人このまゝ通れば立派な成績なるべくきけば英法だけにても五十人餘分にとり居る由多少心配せられざるにもあらず候

××君まことに氣の毒に候あの通り勝氣にて感情のかちし性質故殘念さも人一倍なるべく僕は殊に自分にひきくらべて失望しさ加減が思ひやられ候それにつけても今後の一年の準備が大事と思ひ候へどこれには君に待つ所最多かるべく××君は才氣人に超ゆる天分の利あると共に其才氣に誤らるゝ事もなきにあらざる樣思はれ候まゝ一層君の刺戟と注意とを要すべく呉々も今後の御指導願上度候とりあへず御禮迄　亂筆不盡

一九 〔八月一日新宿から。恒藤恭宛〕

君の手紙をみて食指大に動いた　僕が日本海をみたがつてゐたのは君もしつてゐるだらう　君のかいた地圖は世間並の地理的符號の數の少い爲に山陰の海岸が悉 dune のつゞいた砂地のやうな氣を起させたが　日の御崎や玉造と云ふ名が隨分誘惑を逞くした「行からかな金もあるから」と思ふ又「あの一件を片づけないとこまるな」とも思ふ(この一件は實に厄介な一件なのだ)

さうして例の通低徊してゐる中にだんだん行けさうもなくなつて來たあの一件の爲に此頃は大抵半日

つぶしてゐるそれが來月五六日位までに埒があかないと或は江尻の御寺へゆけないかもしれないしかし今更自分だけ御免を蒙つてあの一件をあの友だち一人にあづけるのは甚横着だどうしても東京にもしくは東京と手紙で打合せが出來る所にゐなくてはいけない
それからあの一件で江尻へゆくのがのびのびになつてゐるのを一緒に御寺へゆく筈の友だちのこの暑さに旅行もせずに淺草の瓦屋根の下で僕をまつてゐてくれるそれを今になつて斷るのは甚すまない事になるどうしても旅には出られない義理だ
それでとうとう行かれない事になつたなつてみると不快だつた行かれないのが知れきつてゐながら部屋の中をぐる〳〵あるいて見た時々「矢張ゆかれないや」と思ふ
來年は君の都合のゆるす限り東北へ一緒にゆきたいと思ふさらい年は出來得べくば山陰の土をふみたいと思ふさうでも思つてあきらめる外はない甚心もちがよくない小供のうちにお花見へゆく氣になつてゐる日の朝起きて見ると雨がふつてゐる時のやうな氣がするいろ〳〵細い點まで僕を迎へる爲にしてくれた注意は難有く思ふ君をがつかりさせるのは氣の毒だがその氣の毒以上に僕自身行かれないのが甚不快だすまないがかんにんしてくれ給へ
あの一件の爲に此頃はろくに本もよめない手紙がかけず本も送れなかつたのは全くその爲なのだ〔削除〕
東京は暑い半曇半晴の日が多いから猶たまらない××が三部の試驗で落第した僕のほんとうに愛する後輩なんだから及落のわかつた日は一日見るものが何でも癪にさはつてよわつたあまり暇がないから
これでペンをすてる　さやうなら

二〇 〔八月八日不二見村新定院から。繪端書、淺野三千宛。裏面寫眞の下に「鐵舟寺の寶物」とあり〕

僕はこんな寶物をみるのがすきです本物でも贋でもかまはない唯其製作者か所持者が古ければ古い程

いゝのです丁度古老の口から中世紀の傳說をきいてゐる樣な氣がするからです眞贋とか作の善惡とかを標準にして寶物を拜見するほど人の好いのんきな事はないと思ひます此處には此外に蜷川新右衛門の念持佛と云ふしやれた觀音樣があります顏の長い未來派の作品の樣な觀音さまです

八日朝　　蜜柑の木の下にて　　芥川生

二一　〔八月十二日不二見村新定院から。淺野三千三宛〕

罫紙にて御免を蒙り候

御手紙難有く拜誦致候退屈なる折柄殊に難有く拜誦致候夏期學校の生活を彷彿し得たるだけにても難有く其人を知れる爲か殊に SNOB MIYAZAKI を添得て閉校式の餘興の一層興ありしが可笑しく候大分難有くが續き候へども實際難有かりしのに候

食物のこと同感に候殊に此頃は毎日海水浴をすると田舍料理の鹽からきを食ふとの爲甘い物に對する需要一層甚しく東京よりはるゞゝ持來れる甘納豆バナナケークデセールなど既に大半を平げてしまひ候人はパンのみにて生くるものにあらずとは云へ食物に囚はるゝは獨君たちのみならず候へば御安心なさる可く僕の如き送別會の小豆の條をよみしのみにても清水の町にゆで小豆の赤き提灯ありしを想起し食指大に動きし位に候

此頃毎日朝讀書手紙をかきなどし午後一時より近所の百姓の子二人つれて泳ぎにゆき候江尻の海水浴場は眼界稍ゝ狹く設備も不完全に候へども鵠沼逗子鎌倉などの如く紅紫染わけの水浴衣に靴をはきて水にはいる樣な奴がゐないだけ心地よく候又あまり泳ぎの名人も見えず僕なぞが曖昧な拔手をきるにも氣がねがなくてよく候水よりあがればあつき砂上に寢ころびてうとうと眠りながら海のつぶやくをきゝ稀に水瓜を食ひ候

海よりかへれば玉蜀黍の畑にて行水をつかひ候豆花豆葉のにほひと「行水のすて所なき虫の聲がうれ

しく候浴罷みて夕飯夜は月がよく候此邊は八月（舊）の望を豆明月と云ひ九月（舊）の望を芋明月と云ひ年二度の御月見を致居候豆明月芋明月の名野趣掬すべきもの有之候

龍華寺も鐵舟寺も近ければ時々遊びに參り候鐵舟寺には三中の三年生二人來り居り候二人共あんまり利巧さうでない生徒に候

散歩よりかへる時は胡麻の花のほの赤きと桑の葉のみどりなるとに月さし種豆南山下艸長豆苗稀とうたひたくなり候

曇りがちにて毎日不二を見ず海も濱も日はさしながら不二のみくもりたるのこり惜しく候（不二にて思ひ出し候西川の祖先は不二山に近き鷲の巣山にすみし山賊だか野武士だかの由にて嘗て共に不二の裾野をめぐりし時同人が遥に天際の崔嵬を指點して大に當年慓悍の風を欽慕せしをきゝし事有之爾來不二と云へば必鷲の巣山を思ひ鷲の巣山を思へば必西川を思ひ候今日獨桑圃黍畝を徑して茅屋楊柳の上に愛鷹の連嶺を見る聊故人を懷ふの情に堪へざるものなしとせず候）

一昨日は鐵舟寺に觀音樣の供養ありて提灯や行燈やさまざまの露店にて夜も賑しく候ひしがこの邊にては此日を稱して九萬九千日と申し候由東京の四萬六千日に比すれば五萬三千日多く一笑せられ候（まてよ東京のは九萬六千日かなとも考へ候やつぱり四萬六千日の樣な氣の致候まゝ一笑する事に致し候）

多きもの蚤と蚊蛇も時々見うけ候僕のゐる寺は禪寺にて主の和尚はサイダと云ふ語をしらず候禪僧などと云ふものはのんきなものに候三年喫麥飯の功なくしては到底この位超脱は出來なかる可く夜は時々共に本堂の廊下に坐して蚊を逐ひつゝ四十年前袈裟文庫を背負ひて東海道を往來したる雲水行脚の話をきゝ候例の臨濟の腋下三拳の話や婆子燒庵の公案の話なども出候

昨年この寺にありし僕の友人の教へし由にて百姓の子供は一高の寮歌を一つ二つ知て居り候夕方などには月を踏んで僕と共にうたひ候

寮歌を教ふるはよけれど仕舞にはでかんしよを教へてくれと云ふに困り候

乃木大將の銅像愈〻建設に近づき候由御目出度存候一高の講堂には(九月になれば見らるべく候 東京の鎌足と武内の宿禰との拙劣醜悪なる畫像を掲げあり候これに比すれば小さき乃木大將の BUST も勝る事萬々なる可く候

九月迄氣樂に且讀み且遊ばるゝがよかるべく候サロメをかきたる WILDE に DE PROFUNDIS(from the Depth)と云ふがあり BALLADS OF READING GAOL の詩と共に獄中の感想記に候へど INTENTION と稱する ESSAY を集めたるものと共に WILDE の思想をしるには最よろしかるべくたしか丸善にも中西屋にも一志の版が來てゐたと思ひ候僕も五年生のときひろひよみし事ありて "The final mystery is oneself" など云ふ句に UNDER-LINE したる本を未に藏し居り候小説には 'PICTURE OF DORIAN GRAY' と稱する代表作 柘榴の家、'HAPPY PRINCE' の所謂土耳古絨氈の如く愛すべき御伽噺有之 PLAY にも 'LADY WINDERMERE(綴り怪しく候)'S FAN' 'IDEAL HUSBAND' 'WOMAN OF NO IMPORTANCE' などの傑作有之候詩も前記の BALLAD の外 'SPHINX' 'RAVENNA' など有名に候歸京後でよろしくばどれでも御貸し申し候赤き鉛筆で印をつけし分は皆一志の版が出て居り候他は獨逸の HAMBURG か何かで(事によるとライプチッヒかもしれず)出てゐる二麻克の本と英國の五志版とありし樣に思ひ候十志ばかりの上等の本もあるやうに候 PICTURE OF Dorian Gray は美しき描寫と皮肉なる警句にみち居り 'A fine countenance is a more precious gift than a genius.' 'I like acting, for acting is more real than life.' など云ふ句も此中にあつたと思ひ候

Maeterlinck も劇と論文の有名なものは大抵英譯が出て居り候二志半の SATRO の譯最普通に行はるゝ樣に候奇蹟は獨譯だけのやうに思ひ候 Strindberg も 債鬼、伯爵令孃ユリア、死の舞踏、父、母の愛、'Swan white' 等の劇 'Blue Book' 'Legend' などの散文も英譯せられ居り候へども到底獨譯に及

ばず候 D'annunzio は死の勝利をはじめ薔薇のロマンス 百合のロマンス 柘榴のロマンスと稱せらる小說九册の英譯(HEINEMANN の版と PAGE の版とあり候)成りし筈なれど僕は半分ばかりか讀まざる爲確な事は云へず候へど讀みし分(死の勝利 生の焰 犧牲 巖上の三處女 逸樂の子)の英譯あるは確に候其外妹兄間の戀愛をかける死せる市と云ふ PLAY フランチェスカ ダ グミニと云ふフランチェスカの悲戀をかける MELODRAMA の英譯有之猶 GIOCONDA の英譯もある筈なれど之は今品切の由に候この作者の作も獨譯の方がずつと澤山出て居り候

ウィドとリルケは英譯はない樣に候リルケは西川の最愛好する作家に候續一幕物中の作者以外にも Tolstoi, Turgenief, Gorky, Andreiev, などのロシアものの英譯多く且大抵やさしく候へば一週に二三册づゝよめる可く候 Archer 譯の Ibsen きたなき紙のモーパッサンの短篇集など御存知の事と思ひ候大へんペダンチックになり候何も參考書なくしてかくの故書名に誤りもあるべく本屋の名もちがふかもしれず候へども大抵確なつもりに候

早いものにてはじめてロータスシーリースと云ふ紫色の本にて DAUDET の SAPHO をよみしより四年たち候四年たてど英語も獨逸語も吳下の舊阿蒙にていやになり候和文はよめず漢籍はわからず外國語はそら覺えでは何の役にも立ちさうもなくもう少しどうかした頭に生れ返つて來なければ駄目と思ひ候己を顧る暇もなく生活難を呼號する人々の大膽と幸福とは僕の健羨に堪へざる所に候

晝はあつけれど朝夕は秋思旣に天地に入れる心ち致候城下君の歸京も近かるべく夜獨り蚊帳をつる時などふと同君を思出づる事有之候

(城下君で思出し候信濃の(科野とかくのもさびたるにしかず)枕語「みすゞかる」は國の上へつく枕語中一番僕のすきなものに候「なまよみの甲斐」「つぬさはふ石見」「うちよする駿河」など皆及ばず候唯「空にみつ大和」は或は比肩するに足る可く候)

今月末迄止るつもりなれど氣が變ればもつと早くかへるかもしれず候毎日漫然と泳ぐのにも飽きさう

なればに候新聞によれば千里眼問題再燃の由本屋にきのみやりし福來博士の新著を待遠し　田舎の新聞が同問題の記事を少ししか出さぬが齒がゆく候

この頃よみし小說（アルチバァセフか何かなりしと思ひ候）の中に汽車の音の Onomatopoeie に Tra-ta-ta……Tra-Ta-ta と云ふを使ひしをよみ感心致候その汽車が鐵橋を渡る音が Trararach-Trararach（ch は獨乙の ach laut なるべく候）なるには更に感心致し候

いつ迄かくも際限なければやめ候これより泳ぎにゆく可く候

ペンを擱きてふと君たちの連中を思ひ候梶川君と有安君とは IMAGE がはつきり眼にうかびかね候

僕は人の顏を覺える事が下手な性分らしく候

又城下君を思出し候

破戒御よみになりし事有之候やまだならば御一讀御すゝめ申候

誤字脫字少からざる可く御判讀願上候　不悉

十二日午後二時

再　蜜柑の樹下にて　龍

淺　野　君　硯北

追伸宮崎は目下日本運輸會社自動車部の役員となり候へば今は源水の口吻を學ぶ暇もなかる可く候　一笑

二三　〔八月十五日不二見村新定院から。恒藤恭宛〕

其後君の返事を待つてゐたが來ないから之をかく朝六時頃起きて床をあげ部屋の掃除をする　朝飯は大抵少し糠くさいそれから机を西向の窓の下にうつして本をよむ窓の外は桑畑幅の廣い綠色の葉に露が眞珠のやうに光つて其間にうなだれた夾竹桃の赤い花を蜂が唸りながらふるはせてゆく上のにほひ八月の日光十時頃机を東の庭にむいた座敷へうつすもう簾一面に當つてゐた日が緣に落ちて座敷

には微涼が芭蕉の葉のほのかなにほひと共にうごいてゐる白つちやけた砂まじりの庭の土に山茶花枇杷　棕櫚竹が短い影をおとす　蟬の聲　晝飯をくつてから一時間午睡をするか新聞をよむかする新聞は國民で三重吉の桑の實を毎日おもしろくよんでゐる

一時うつと手拭を腰にさげて一高の夏帽子をかぶつて海水浴へ行く浴場は江尻の海岸で寺から約半里ある途は可成あつい桑の葉黍の葉の綠胡麻の葉のうす紅埃に白けた月見艸がしをれ乍ら路ばたにさいてゐる不二見橋と云ふのを渡る欄干の下を碧い水がみがいた硝子板の如く光り乍ら流れる半町ほど隔てた港橋の向ふには漁船の檣が林立して其上に晝の月が消えさうに白く浮んでゐる橋の袂の氷店の赤い緣をとつた旗の下をすぎると低い茅葺屋根の狹い町になる理髮店梨や西瓜を商ふ青物店機屋荒物屋それらの家々の間には玉蜀黍の葉がそよぎ黄色い向日葵の花がさしのぞく町はづれの松原を二三町行くと煉瓦燒場の低い板葺、美普教會の尖つた塔が江尻に近づいた事を知らせる路ばたの甘藷畑砂糖畑の向ふに青い海が的皪と光るのも見える輕便鐵道(清水靜岡間)の線路を一つ横ぎると江尻で魚屋の壁にはられたすゝびた江戸役者の似顏繪も宿驛らしいなつかしさを感ぜしめる江尻停車場の後をだらだらと海へ下る鐵道院の管理の下に營業する海水茶屋が三四軒葭簀張を海へ張り出して旗を立てたり提灯を吊つたりして客をよんでゐる無料休憩所へはいつて着物をぬぐ江尻の海岸は眼界が餘り廣くない右に長くさし出た三保の半島左にたゝなはる愛鷹の連嶺その間には伊豆の山々が曇つた日はかすかに鼠色に晴れた日にはさえた桔梗色に長く連つてゐるために殆水平線は見られないと云つていゝ唯鹽分の濃い潮流がつよい日光をうけるときは云ひやうのない美しい靑藍色をたゝへるのがうれしい設備も鎌倉や鵠沼に比ると不完全だが　靴をはいて泳ぐやうな人を見かけないのが取柄だらう

泳ぐのにつかれると濡れた體を熱い砂の上にふせてうとうととねむりながら懶い海のつぶやきをきくD'annunzio の Triumph of Death に Giorgio と Hippolyte が海水浴をする美しい描寫があつた藻のかをりと髮のかをりとの中に伊太利の海が鈍い銀色に光る官能的なあの passage はかうして砂の

上に寝て海の聲をきいてゐるとしみじみと心によびかへされる海の水は近い所は海水浴をする男や女の足にかきみだされて濁つた緑色につぶつぶと不平らしく泡をたてゝゐるが遠い所は濃い emerald green から indian blue に至るあらゆるうつくしい諧調をつくつて南の空をめぐる太陽の下にはればれと笑つてゐる Gorky の Malva の第一行に "The sea is laughing" とかいてある丁度その様に海が笑つてゐるのである日が傾いて砂の上に落ちるものの影が細長くなると濡れた手拭と猿股とをぶらさげてかへつてくる

玉蜀黍の畑で行水をつかひ夕飯をすましてから散歩にゆく龍華寺鐵舟寺へゆく事もある清水の町へゆく事もある豆の葉の黄色くなつた畑みちをあるくと何時の間にか月の光が土の上に落ちてゐるのに氣がつく蛙がなく「種豆南山下　草長豆苗稀」と云ふやうな田園詩の氣分をなつかしく思ふ鴟尾の・つかけた寺の門の上に月をみながらかへつて來て蚊帳をつゝて寝るその間に近所の子供や寺のおかみさんと話しをする事もある小栗栖君の不二見一村に於ける人望は大したものである八木君も中々信用がある僕に至つては到底あんなに評判がよくなりさうもない〔削除〕

毎日鹽からい田舎料理と鹽からい海水をのむので甘い物が戀しくて仕方がない尤も東京からデセールや甘納豆やバナナ、ケークなどを持つて來た事は來たがそれも一週間たゝないうちに食つてしまつた此近所の菓子は實にまづい仕方がないから清水迄ミルクセーキをのみにゆく事にしてゐる

蛙がどこにでも澤山ゐる蛇の顔に humanity があると云つたのは Walter Pater だが　僕には蛙の方が更に humanity がある樣な氣がする東京近在にはゐないが黒白染分けの小さな蛙が行水を使ふ時など鼻のさきへ來てすわつてゐると何だか口をきゝさうで氣味が惡い一寸佐藤修平のひまごのやうな氣もする Böcklin に「魚の王」と云ふ繪がある人の顔と魚の顔とを一緒にしたやうな醜怪な動物の肖像だが蛙をみると僕は必この魚の王を思ひ出す

もう一週間もしたら鵠沼へうつるかもしれない　さやうなら

八月十五日　　　　　　　　　　　　　　龍

二三　〔八月十六日不二見村新定院から。菅虎雄宛〕

粛啓　在校中は種々御薫陶を蒙り難有く卒業後早速御禮に上る可きの所胃を病みたると性來の懶癖との爲今日迄うち過ぎ申譯無之候小生本月始より駿州不二見村の寺に滯留致居候午前黒甜讀書午後水泳夜は手紙を書き新聞をよみ又は近所の農家の子供と共に月を踏んで唱歌など致候此手紙も本堂の八疊の間にて芭蕉と棕櫚竹とに渡る風をきゝつゝうす暗きランプの下にて認むるのに候
龍華寺鐵舟寺共に近ければ夕方にはよく散歩がてら遊びに參り候鐵舟寺の本堂の幅廣き緣に踞して碧蓮の香をかぐもうれしけれど更にめでたきは薄暮黍の葉のみどりなる胡麻の花のほの赤き畑みちを徑してかへり來る時に候種豆南山下艸長豆苗稀とうたひたくなり候小生の居る寺は禪寺にて主の僧のサイダーと云ふ語を知らぬのにも感心致候三年喫麥飯の勞を忍び痛棒熱喝の苦に耐へざれば到底これほど超越は致し難かる可く候其内に一度拜趨御話承り度存居候
末ながら御健康を祝し且祈り候　草々不宣

八月十六日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

菅　先　生　硯北

二四　〔八月十九日不二見村新定院から。廣瀨雄宛〕

敬啓　此寺に來りてより早くも十日をすぎ候午前は經机の上にて横文字の本をよみ午後は手拭をさげて泳ぎにゆく外變りたる事もなく夜は時々村の小供たち六七人遊びに參り月を踏んで共に唱歌したり本堂の緣に踞して小生の話す御伽噺を聞いたり致し候泳ぎに行く時も彼等は粟の穗桔梗の花鳥の羽などを耳にはさみて隨行致す事有之沿道目に觸るゝ草木昆虫を一々指點して小生に敎へてくれ候其爲此

頃は大分博識に相成ちんちろ柿と云ふのまで覺え候連日晴天の爲田の水涸れ小生の居る村にても雨乞ひの祈禱始り候祈禱者は一七日の間一切火食せざる由にて終日注繩をかけたる竹の下にて鐘をうち竹法螺を吹き居り候猶同村の某家にては數年來家内に病人の絶えざる爲易者を招きて卦を考へしめ候所家の下の土中二丈五尺にして甲冑刀劍あり家人の病むは其祟なりと申し候より早速土を掘らせ候ひしに果して二丈五尺にして甲冑一具太刀一振を得し由に候村の人々は皆易者の斷じ得て神に入るを賞し居り候へども小生は寧易斷を信じて直に二丈五尺の深きを掘りたる其家の主人の純朴さ加減に感心致候小生の居る座敷は不二は元より隣家の桑園すら見えず狹き庭に密生したる芭蕉棕櫚竹高野槇梅山茶花などに遮られて僅に空色を望むに止り候唯晩涼微風と共に生ずる時は一庭の竹樹竿々相摩し葉々相觸れて幽興の掬す可きものなきにあらず候龍華寺も近けれど小生は鐵舟寺の碧蓮を愛する事更に深く屢〻其本堂の欄によりて蓮香月色共に仄なるを賞し候

吉澤君の選に洩れたる氣の毒に候東京を出づる日大急ぎにて官報を見同君の名なきを訝しく思ひ候ひしも又例の如く慌てゝ見落した事と思ひ返し候所此寺に來りし翌日市川君よりの手紙によりてほんとうに名の出てゐなかつた事を知り候六人の group も之にて無試驗二人のみとなり候尤も割合にすれば$\frac{1}{3}$及第したのに候へばそれにて滿足致す可く候一笑

ぶらうにんぐはやめに致し候ぶらうにんぐさいくろぴぢあによりて讀むつもりに候上田敏氏のすきな「彫像と半身像」は何度かよみかへし候外のよりもやさしい樣な氣が致し候上田さんもやさしいからすきなんぢやあないかとも思ひ候

ぶらうにんぐの代りに鷗外先生の「分身」「走馬燈」「意地」「十人十話」などよみ候皆面白く候へども分身中の「不思議な鏡」走馬燈中の「百物語」「心中」「藤鞆繪」意地の「佐橋甚五郎」「阿部一族」十人十話の「獨身者の死」最面白く中でも「意地」の一卷を何度もよみかへし候

毎日海水を少しづゝのむのと鹽からき御菜を食ふとの爲甘い物が戀しく江尻清水の菓子屋は渉獵し盡

し候そろ〳〵 nostalgia が起り候へば其内に歸京のつもりに候　不悉

十九日朝　　芥川龍之介

廣瀬先生　硯北

二五〔九月五日新宿から。藤岡藏六宛〕

君の手紙をもらつたのは四日の夜遲くであつた投凾の日附は二日になつてゐるこれから返事を出したのでは間にあはないかなと思つたが兎に角出してみる半切をかひにゆくのもLETTERPAPERをかひにゆくのも兩方共きらした今は億劫だから一帖一錢五厘の紙で間に合はせる

東京へかへつてから何と云ふ事なくくらした罪と罰をよんだ四百五十何頁が悉心理描寫で持きつてゐる一木一草も hero の心理と沒交渉にかゝれてゐるのは一もない從つて plastic な所がない（これが僕には聊物足りなく感ずる所なのだが）其代りラスコルニコフと云ふ hero のカラクタアは凄い程強く出てゐるこのラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫賣婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節――ヨハネ）をよむ scene は中でも殊に touching だと覺えてゐる始めてドストイエフスキーをよんで大へんに感心させられたが英譯が少ないので外のをつゞけてよむ訣には行かないで困る　ブランドはよんだかね

僕はブランドにそんなに動かされなかつた今よんだらどうだかしらないが　イブセンでは僕は「人形の家」と「ガブリエルボルクマン」が一番すきだ夏休の始にヴイリエ　リイル　アダンの「反逆」をよんだ「『人形の家』に先つた『人形の家』」と云はれる程この戯曲は人形の家と同じ樣な題材を取扱つてゐるのが面白い一八七〇年に出たのだから「人形の家」より餘程先に（人形の家は一八七九年）性の關係の問題を捉へてゐる事になる　この間近郊をあるいたもうどこにも「秋」が來てゐる玉川の河原へ來たら白い礫の間に細い草がひよろひよろとはえて黄色くくれかゝつた空に流れてゐる雲までがしみじみ旅で

もしてゐるやうな心もちをよびおこさせる日野　立川　豐田——玉川の沿岸の村々は獨歩のむさし野をよんでから以來秋毎に何度となく行つた事がある村である欅の肌が白く秋の日に光る頃になると萱葺の庇につもる落葉の數が一日一日と多くなる村の理髪店の鏡の反射にうす赤い窓の容ではけたゝましく百舌がなき跛の黑犬も氣安くあるいてゆく街道の日なたには紺の手甲をかけた行商人の悠々とした呼聲がきこえる村役場の柵にさく赤いコスモスの花にも小さな墓地にさく桔梗や女郎花にもやさしい「秋」の眼づかひがみえるではないか

秋が來るのが待遠い

秋の歌

金箔に青める夕のうすあかりはやくも秋はふるへそめぬる
秋たてばガラスのひゞのほの青く心に來るかなしみのあり
秋風よユダヤ生れの年老いし寶石商もなみだするらむ
秋風は清國名產甘栗とかきたる紅き提灯にふく
額緣のすゝびし金もそことなくほのかに青む秋のつめたさ
銀座通馬車の金具のひゞきよりいつしか秋はたちそめにけむ
鳶色の牝鷄に似るペッツオルド夫人の帽を秋の風ふく
仲助の撥のひゞきに蠟燭の白き火かげに秋はひろがる
夕雨は DOME の上の十字架の金にそゝげり秋きたるらし（ニコライ）
すゞかけの鬱金の落葉ちりしける鋪石道の霧のあけ方
やはらかき光の中にゆらめきて金の一葉のおつるひとゝき
わくら葉の黃より焦茶にうつりゆくうらさびしさにたへぬ心か

九月五日朝

龍

二六〔九月十八日新宿から。淺野三千三宛〕

華墨拜誦仕候
御入寮の由何も經驗に候へば面白かる可く候一高の二年にて教はりたる獨乙語の教科書に〝ほれしおが
いたりあの宿屋にて蚤に食はれる話がありしより寮の二階で蚤が多くなると皆〝僕は昨夜はほれしお
だつたぜ〟と語りあひしものに候
更にくはしき寮生活の御感想うかゞひ度存候
校友會の種々の部より入會の勸誘に參る事と存候どの部にも小生自身關係した事なければ確な事は申
せず候へ共××部だけは時間の經濟の上よりも風儀の上よりも人に勸めない方がいゝ樣に承居り候へ
ば老婆心ながら御注意申上候
大學の講義はつまらなく候外の事はしらず候へ共獨乙語なぞは一高出身者が矢張よく出來る樣に見う
け候(少くも小生の科にて)一高にはいつた時のやうな活々した氣分は一年ごとに感じない樣になり遂
にはどんなものにも清新な興味をもつ事の出來ないぶるじよあの一人になつて仕舞ふやうな氣が致候
それではあまり心細かる可く候
土曜日曜には御歸省の事と存候御閑暇にも候はゞ御來遊下され度待上候　不悉

九月十八日朝　　芥　川　生

淺野三千三樣　硯北

二七〔十月二十三日新宿から。淺野三千三宛〕

演習は相應に面白かりし事と存候　同級のものが梢同級のものらしくなるは演習ありて後の事に候

文展御覧になり候や僕には書家の多くが水なり雲なりに對する一つ一つの心もちを描かうとせずにすべての心もちの和をその心もちの數で割つた商を描いてゐる樣な氣がせられ候あれでは駄目に候
演習より演習後の休みが羨しく候五時まで講義の筆記に忙殺せらるゝ身には殊にさう思はれ候
今度の土曜にもし御暇ならば御出で下さるまじく候や午後ならば殊によろしく候尤も此方からあがりてもよろしきのに候都合によりては日曜にのばしても來週にしてもよろしく候御返事なくば土曜午後御出の事と獨きめにきめる可く候
御轉居の由に候へど多分郵便配達が氣を利かして持ちまはつてくれるだらうと思ひ候まゝ元の御宿所へ出し候　不悉

廿三日朝　　　　芥　川　生

淺　野　君　案下

二八 〔十一月一日新宿から。原善一郎宛〕

十一月一日午前大學圖書館にて

原君　カナヂアンロツキイの寫眞やバンフからの御手紙は確に落手致しました難有く御禮を申しあげます
もう今頃は紐育で黄色くなつたプランターンの葉の落ちるのを見て御出の事と存じます東京もめつきり寒くなりました並木も秋の早い橡やすずかけは皆黄色く乾いてうすい舊色の天鵞絨の樣に枯れた土手の草の上に柔なひわ色の羽をした小鳥が鳴いてゐるのを見ますとワイルドの「黄色のシムフォニイ」とか云ふ短い詩を思ひ出します
角帽をかぶつてからもう三月目です講義はあまり面白くありません美文學の主任はローレンスといふおぢいさんで頭のまん中に西洋の紙鳶の樣な形をした桃色の禿がありますす人の好い親切な人でよく物

のわかつた人ですけれども殘念な事に文學はあんまりよくわかつてゐない樣ですいつでも鼠色のモーニングコートを着てズボンの下へカーキ色のゲートルをはいてゐます何故ゲートルなんぞを年中ズボンの下へはいてゐるのだかそれは未に判然しません今このおぢいさんの「Humour in English Literture from Goldsmith to Bernard Shaw」「Plots & Characters in Shakespeare's later plays」「English Pronounciation」をきいてゐます三番目のは Philological な講義でつまらないものです

文展がはじまりました吉例によつて少し妄評をかきます日本畫の第一科は期待以上に振ひませんでした小坂芝田氏や小室翠雲氏のさへ大した出來とは思はれません望月青鳳氏の猿の毛描きがうまいと云つてほめる人もゐますさうした事をほめれば成程ほめる事がないでもありませんそれは文晁の模倣が巧妙に出來上つてゐる事です文晁の悪い作より遙かにすぐれたものがあると云ふ事ですしかし之を自慢にするほど日本畫家は藝術的良心に缺陥はないでせうし又なからむ事を望みたいと思ひます津端道彦氏の「眞如」と云ふ佛畫の前へは東京觀光の田舍のおばあさんやおぢいさんが立つてをがんでゐますあんな手のゆがんだ片輪の佛さまをおがむ人たちはかあいさうです要するにこゝへ出品する人たちは見るも氣の毒な程貧弱な内生活をしてゐる人とより外は思はれません藝術にどれほどの理解と情熱があるかわかつたものではないと思ひます

第二科では私の興味を引いた作品が二あります一は牛田雞村氏の町三趣で一は土田麥僊氏の海女です町三趣はあまり遠近法を無視し過ぎた嫌がありますが私は之を今度の日本畫の中で最傑出した作だと思つてゐます「三趣」は朝と晝と宵とで朝の靜な町に漸く炊烟がほのめいて石をのせた屋根には鳥の群がなきかはし人通のない往來を紅い着物をきた小兒が母親らしい女に手をひかれてあるいてゆくのも晝すぎの時雨に並藏の水におちる影もみえずぬれにぬれた柳の間うす白い川の面を筏の流れるのもそれぞれ興をひきますけれど宵の町の軒行燈のほの赤くともる頃を二人づれの梵論子が坂つゞきの町の軒づたひに尺八をふきながら下りてゆくなつかしさは此作家のゆたかな藝術的氣分を感じさせずには

おきません

海女は此頃またよみかへしたゴーガンの「ノアノア」の爲に一層興味を感じたのかもしれません土田氏は私の嫌な作家の一人です昨年の「島の女」も私の嫌な作品の一でしたしかし海女のすぐれてゐるのはどうしても認めなければならない事實です六曲の屏風一双へ砂山と海とをバックにして今海から出た海女と砂の上に坐つたり寢ころんだりしてゐる海女とを描いたものです泥のやうな灰色の中に黄色い月見艸もさいてゐます赫土の乾いたやうな色の船もひきあげてあります

砂山の向ふにひろがつてゐるウルトラマリンの海は不讃同ですけれどもねころんでゐる海女の肩から腰に及ぶ曲線や後むきになつた海女の背から腕に重みを託してゐる所や海草を運んでくる海女や小供の手足のリズミカルな運動は大へんによくかいてありますデッサンも「島の女」より遥に統一を持つてゐます概して一双の中で右の半双海の出てゐる方はあまり感心しませんが左の半双は確に成功してゐます

唯誰もこの繪をほめる人のないのが悲觀です私の友だちは皆惡く云ひます先生にはまだ御目にかゝりませんが多分惡く云はれるだらうと思ひます私の知つてる限りではこの繪をほめたのは松本亦太郎氏だけです大觀氏は矢張たしかなものでした（昨年ほど人氣はありませんけれど）廣業氏の「千紫萬紅」はどうも感心しません栖鳳氏の「繪になる最初」は思ひきつて俗なものです山本春擧氏の「春夏秋冬」の四幅も月並です櫻谷氏の「驛路の春」は「勝者敗者」以來の作かもしれませんけれど私は一向心を動かされませんでした

玉堂氏の「夕月夜」と「雜木山」とも太平なものです「汐くみ」では多少なりとも何かつかまうとした努力がみえますけれど今年はまた元の銀灰色の霧と柔婉な細い木立との中にかへつてしまひました何と云ふ安價なあきらめでせう

彫刻にも目ぼしいものは見當りませんでした又私には彫刻はまだよくわかりません世間の人も大抵は

よくわかつてゐない様な氣がします內藤伸氏の氣のきいた木彫が欲しいと思ひました藤井浩祐氏の「坑内の女」や「若者」も評判の悪い割に私にはよく思はれました

洋畫では石井柏亭氏が頭角を現はしてゐますこの人の心はとぎすました鏡のやうに冷に澄んで居るのでせうその心の上に落ちる木の影石の影は寸毫も誤らない訓練を經た手でカンヴァスなりワットマンなりの上にうつされるのでせう此人の作品をみてゐると私はきつと森鷗外先生の短篇を思ひ出します今度の作品の中で船着きと云ふテンペラは其殊にすぐれたものだらうと思ひます「並び藏」と云ふ水彩「N氏の一家」と云ふ油繪もよく出來てゐました

南薫造氏は「瓦燒き」のやうな作品をもう見せてはくれませんけれどそれでも「春さき」はなつかしい作でした土は皆春を呼吸してゐる丘と丘との間に僅にみえる紫がかつた海も春を呼吸してゐる低い木の芽うす白い桃の花「春」は今 MOTHER EARTH に KISS をしてゐるのです唯私は「瓦燒き」以來の南氏の作品をたどつてひそかに同氏の藝術的氛圍氣が比較的薄くなりつゝありはしないかと思はれない事もありません今から切に其杞憂に終らむ事を祈ります

から上げてくると勢藤島武二氏の「うつゝ」と齋藤豐作氏の「夕映の流」をも數へなければなりません「うつゝ」は TOUCH は實に達者なものです「夕映の流」は私にこんな氣分になる事の出來る作者を羨しく思はせました

其他不折は例の如く角のはえた「神農」と稱する老人の裸體をかいてゐますし吉田博氏は十年一日の如くあの菫色を使つた「play of colors」に餘念のないやうに見うけられます

要するに多くの畫家はのんきですすべての氣分の和をその氣分の數の和で割つた商を描いてゐるんですある特殊の木なる概念をある時間の概念のうちに置いてかいてゐるのです彼等には天然色寫眞の發明は恐しい競走者の出現を意味するに違ひありません

Verdi の百年祭で音樂學校と帝國ホテルとで演奏會がありました兩方行つてみましたがあとの方で

TROVATORE の PRELUDE と MISERERE とのマンドリンをきゝましたザルコリがひくギターの太い澁い音が銀のやうなマンドリンの聲を縫つてゆくのがうれしう御座いました

　鳶色のギタラの絹をぬふ針かマンドリースのトレモロの銀

同じ日に藝術座が有樂座で音樂會をやりました新興藝術の爲に氣を吐く試みなんださうですがショルツのひいたドビュッシーや何かの外はあんまり感心したものはなかつたさうです前にかき落しましたが帝國ホテルでは RIGOLETTO の QUARTETTO がありました Soprano : Mrs. Dobrovolsky, Mezzo Soprano : Miss Nakajima, Tenor : Mr. Sarcoli, Baritone : Mr. Tham と云ふ順でしたがあの泣き佛と綽名した中島さんには大へん御氣の毒な話しですけれど西洋人が三人で日本人一人をいぢめてるやうできいててあんまりいゝ氣がしませんでした

自由劇場は帝劇でゴルキイの夜の宿をやりました昨夜行つてみましたが日本で演ぜられた此種類の芝居の中では一番成功したもののやうに見うけます役者の伎倆なり舞臺の裝置なりに始めて割引のない批判的の眼をむける事が出來且その結果それらの寧成功したのを認める事の出來たのは甚愉快です小山内さんはもつと愉快でせう

サロメはみましたか

鐘がなりました之から SWIFT と云ふ名前から早さうな西洋人の早い書取の授業をうけに行かなければなりません大急ぎで歌を二つ三つかいてやめます

　秋風よゆだやうまれの年老いし寶石商も涙するらむ
　秋たてばガラスのひゞのほの青く心に來るかなしみのあり
　額縁のすゝびし金もそことなくほのかに青む秋のつめたさ
　鳶色の牝鷄に似るペッツオルド夫人の帽に秋の風ふく
　『秋』はいますゝりなきつゝほの白き素足に獨り町をあゆむや

芥川生

追伸　これは講義をきゝながらかいてゐるのです今テニソンの「アサーの死」をやつてゐます「こゝのLはサイレントで發音はサッダアですサッダアは TO TAKE APART の意です」とか何とか SWIFT さんが云つてゐますこの人は私の見た西洋人の中で一番ジョンブルらしい西洋人ですその癖あめりか人でジョンブルではないのですが

講義をきゝながらかいた歌を御覧に入れます

CONCERT にて

ドヴロボルスキイ夫人も秋の夜はさびしと思ふことありや灯を

ポンプの如く立ちてうたふもそことなくさびしかりけり SIGNOR THAM は

秋の夜のホテルの廊を畫家南薫造のゆくにあひにけるかな

パァナァドリーチとかたる黒服の女は梟によく似たるかな

シニヨーリナ中島のきる紫の羽織もさむき夜となりにけり

FREE THEATRE にて　GORKY の"夜の宿"

赤シヤツのすりのワシカも夕さればふさぎの虫がつのるなりけり

のんだくれの役者のうたふ小唄より秋はランプにしのびよりけむ

わが友のかげにかくれて歌つくるこの天才をさはなとがめそ

肘つきてもの云ふときは SWIFT も白き牡牛の心ちこそすれ

之から READING の稽古がはじまるからやめます　さやうなら

龍

二九　〔十一月十七日新宿から。菅虎雄宛〕

敬啓　昨日は遲くより參堂種々御馳走に相成其上一夜の御厄介迄かけ御家族御一同様の御迷惑もさこ

そと恐縮に不堪難有御禮申上候　猶其節御願申上候如く何にても書いて頂き度近日學校迄御屆下さる可く候へば何分よろしく願上候

藤岡君は十七日鄕里の嚴君病氣危篤の旨急電に接し當夜直に伊豫宇和島に歸鄕致候爲御禮申上ぐる事もならざるより小生より先生によろしく申上げ吳るゝ樣云ひ來り候併せて同君の御禮をも御傳へ申候

草々不宜

十七日夜　　　　　　　　　　芥川龍之介

菅　先　生　梧下

三〇　〔十二月十日新宿から。淺野三千三宛〕

肅啓　試驗近く御多忙の事と存じ候小生の方も XMAS EXAMINATION 近く困り居り候一高の試驗と云ふものうけぬ前は何となく氣味惡きものに候一學期は小生も大に試驗勉强を致し火鬪を揮して十二時をきゝたる覺も有之候其御かげにて其時はあとにもさきにも唯一度獨乙語の百點をとつたやうに記憶致候折角御勉强なさる可く候

三中より雜誌參り候へば始から終迄一通り眼を通し候××君の諸作いづれもあまり感心致されず××君××君等のも一向面白からず思ひ候唯三年內野一太郞君の「井の頭辨天」を得再三讀みかへし候文の巧拙を問はゞ恐らく四年山田菊雄君に及ぶ人なかる可く候へども內野君の文は如何にもナイーブにて中學の三年生なる內野君以外に何人もかく能はざる事をかき居り候他の諸君が徒に空腹高心たる論議を費さるゝに反し又徒に淺陋なる色彩と幼稚なる感情とを呼號せらるゝに反しナイヴィテートを以て一貫したる內野君の文を得たるはうれしく思はれ候

××先生の「詩をよむ心得」一笑せられ候中學なるかな

此頃又柳宗元を少しづゝよみ居り候小生は最柳文を愛するものに候呂黎が柳州の文をよむに先だち必

薔薇水を以て手を洗へる誠にうべなりと思はれ候短かけれど至小邱西小石潭記に柳々州の眞面目を見るべく讀下清寒を生ずる心地せられ候

先夜城下君を訪ひ候少しさびしさうな事を申居り候其節例の group の會合ありし由きゝ候大に一高がりてはいらない連中を刺戟してやるがよろしく候御すゝめ申上候一笑

梶川有安兩君の近狀如何など思ひ候二十五日迄には一高も大學も試驗完る可く休みには御目にかゝり得る事と存居候

惡詩御笑ひ下され度候

　寒更無客一燈明
　石鼎火紅茶靄輕
　月到紙窗梅影上
　陶詩讀罷道心清

不宣

十二月九日夜　　芥　川　生

淺　野　君　梧下

大正三年

芥川龍之介

三一 〔一月一日新宿から。端書、淺野三千三宛〕

つゝしみて新年を賀したてまつる
「危險なる洋書」をとぢて勅題の歌つかまつる御代のめでたさ
大正三年一月一日

三二 〔一月二十一日新宿から。恒藤恭宛〕

自分には善と惡とが相反的にならず相關的になつてゐるやうな氣がす性癖と教育との爲なるべしロジカルに考へられない程腦力の弱き爲にてもあるべし
兎に角矛盾せる二つのものが自分にとりて同じ誘惑力を有する也善を愛せばこそ惡も愛し得るやうな氣がする也ボードレールの散文詩をよんで最もなつかしきは惡の讚美にあらず彼の善に對する憧憬なり遠慮なく云へば善惡一如のものを自分は見てゐるやうな氣がする也(氣がすると云ふは謙遜なるかもしれず)これが現前せずば藝術を語る資格なき人のやうな氣がするなり

同じ故郷より來りし二人の名を善惡と云ふなり名づけしは其故郷を知らざる人々なり
何にてもよけれどしかつめらしくロゴスと云はむ乎宇宙にロゴスあり萬人にロゴスあり大なるロゴスに從つて星辰は運行す小なるロゴスに從つて各人は行動すロゴスに從はざるものは亡ぶロゴスに從はざる行動のみもし名づくべくんば惡と名づくべし

ロゴスは情にあらず知にあらず意にあらず强ひて云へば大なる知なり所謂善悪はロゴスに從ふ行動を淺薄なる功利的の立場より漠然と別ちたる曖昧なる概念なり

自分は時に血管の中を血が星と共にめぐつてゐるやうな氣がする事あり星占術を創めし人はこんな感じを更につよく有せしなるべし

このものにふれずんば駄目也かくもかゝざるもこの物にふれずんば駄目也

藝術はこれに關係して始めて意義あり

今にして君の「WESEN を感得せしむるアートは最高也」といひしを思ふ君は三足も四足も僕に先んじたり

しひて神の信仰を求むる必要なし信仰を窮屈なる神の形式にあてはむればこそ有無の論もおこれ自分は「このもの」の信仰ありこは「藝術」の信仰なりこの信仰の下に感ずる法悅が他の信仰の與ふる法悅に劣れりと思はれず

すべてのものは信仰とならずんば駄目也ひとり宗教に於てのみならずひとり藝術に於てのみならずすべて信仰となりてはじめて命あらむ

藝術を實用新案を工夫する職人の如くとり扱ふものは幸福なり

自己を主張すと云ふしかも輕々しく主張すと云ふ

自分は引込思案のせゐかしらねどまづ主張せんとする自己を觀たしと思ふ
顧みて空虚なる自己をみるは不快なり自ら眼をおほひたき位いやなりされどせん方なし樽の空しさか否かを見し上ならでは之に酒をみたす事は難かるべし兎に角いやなり苦しいものなり
みにくき自己を主張してやまざるものをみるときには嫌惡と共に壓迫を感ず少しなれど壓迫を感す

自分はさびし
時々今から考へると一高にゐた時分に君はさぞさびしかつたらうと思ふ事あり
かく云へばとて君と今の僕と同じと云ふにはあらず君の云つてる事が僕にわからなかつたからなり何時でもわからないのかもしれねど

自分は新思潮同人の一人となれり發表したきものあるにあらず發表する爲の準備をする爲なり表現と人は一なりとは眞なりと思ふ自分は縊きれたる胡弓をもつはいやなりこれより絃をつながむと思ふ
アナトオル・フランスの短篇を譯して今更わが文のものにならざるにあきれたり同人中最文の下手なるは僕なり甚だしく不快なり

同人とは云へ皆歩調は別なり早晩分離せむか

この二三ケ月煮え切らざる日を送れり胃の具合少し悪きにいろいろな考へに頭をつかひし爲ないその爲に年賀狀の外どこへも手紙をかゝず君にも失禮した訣なり堪忍したまへ海苔は少し大袈裟なり胃病

で死んでも海苔を食ふはやめじと誓ひたり

忙しいだらうが時々手紙をくれたまへ僕もせいぜい勉強してかく今日の手紙は大抵日記よりのぬき書きなり幼きを嗤はざらむ事をのぞむ

歌も殆どつくらずつくる暇なし唯三首

　ともかくもむしやうに淋し夕空の一つ星のやうにむしやうに淋し

　こんなうれしき事はなしこんなうれしき事はなきに星をみてあれば涙ながるゝかな

　木と草との中にわれは生くるなり日を仰ぎてわれは生くるなり木と草との如くに

三三　〔三月六日逗子から。繪端書、藤岡藏六宛〕

三浦半島は豫想以上によかつた　菜の花と麥　不二がよく見えた　三崎へついたのは夜　城ヶ島燈臺の灯がみどり色にひかつてゐる　うすい霧　井川君によろしく

芥　川　生

三四　〔五月十九日新宿から。恒藤恭宛〕

僕の心には時々戀が生れるあてのない夢のやうな戀だどこかに僕の思ふ通りな人がゐるやうな氣のする戀だけれども實際的には至つて安全である何となれば現實に之を求むべく一に女性はあまりに自惚がつよいからである二に世間はあまりに類推を好むからである

要するにひとりでゐるより外に仕方がないのだが時々はまつたくさびしくつてやり切れなくなる

それでもどうかすると大へん愉快になる事があるそれは自分の心臓の音と一緒に風がふいたり雲がうごいたりしてゐるやうな氣がする時だ(笑ふかも知れないが。勿論妄想だらうけれどほんとにそんな氣がして少しこはくなる事がある

序にもう一つ妄想をかくと何かゞ僕をまつてゐるやうな氣がする何かゞ僕を導いてくれるやうな氣がする小供の時はその何かにもつと可愛がられてゐたがこの頃は少し小言を言はれるやうな氣がする平たくいふと幸福になるポッシビリチイがかなりつよく自分に根ざしてゐるやうな氣がするそれも仕事によつて幸福になるやうな氣がするのだから可笑しい
幸福な夢想家だと君は笑ふだらう

無智をゆるす勿れ己の無智をゆるす爲に他人の無智をゆるすのは最卑怯な自己防禦だ無智なるものを輕蔑せよ(ある日大へん景氣がよかつた時)

オックスフォードの何とかいふ學者が「ラムを讀んで感心しないものには英文の妙味はわからないESSAYS・OF・ELIAは文學的本能の試金石だ」と云つた有名な話があるさうだ上田さんのラム推奨の理由の一として御しらせする

試驗が近いんだと思ふとがつかりする試驗官は防疫官に似てゐる何となれば常に吐瀉物を検査するからだ眞に營養物となつたものを測るべき醫學者が來ない以上試驗は永久に愚劣に止るにちがひないノートをつみ上げてみるとほんとうにがつかりする

キヤラバンは何處に行ける
みやれば唯平沙のみ見ゆ
何處に行ける

行きてかへらざるキヤラバンあり
スフインクスも見ずに
砂にうづもれにけむ

われは光の涙を流さざる星ぞ
地獄の箴言をかゝざるブレークぞ

わが前を多くの騎士はすぎゆくなり
われも行かむと時に思へる

メムノンはもだして立てり
黎明は未だ來らず
暗し――暗し

何時の日か日の薔薇さく
ほのぼのと
何時の日かさくとさゝやく聲あり

象牙の塔をめぐりて
たそがるるはうすあかり
せんすべなさにまどろまんとする

三五　〔七月三十一日新宿から。藤岡藏六宛〕

路（對話）

霧ふかき日暮　中央に青銅の SPHINX あり　人の身長程の PEDESTAL 霧に遮られて此外には何も見えず

學生　二十一二歳　金鈕の制服　OVER-COAT　手に洋傘をもつ

第一節

學生　うす暗くなつた所を見ると日がくれるにも間がないと見える何と云ふひどい霧だらう何處を見ても一面に灰色をしてゐる三十分ばかり前まではあの教會の塔の下をあるいてゐたんだがもう今ではまるで路がわからなくなつてしまつた何の事はない灰汁の中を喘ぎながら泳いでゐる魚の樣なものだ（SPHINX を見る）おゝ　こゝに何か立つてゐる（近づきて前に立つ）SPHINX らしいな。まてまて何か PEDESTAL にかいてある（かゞみてよむ）ふん伊太利亞語だな E MANGIA E BEE E DORME E VESTE PANNI どういふつもりでこんな事を書いたのだらう悪い洒落だ（PEDESTAL に腰をかく）何しろつかれた此分では中々急にはうちへかへれさうもない第一今俺が何處にゐるのだかそれさへわからないのだからな　煙草に火をつけてすふ）一體俺は何處から來たのだつたかなえゝと朝十時に起きて飯をくつてそれから學校へ行つた學校では哲學史の講義を少しきいたと講義は SPINOZA で（微笑）

NOTWENDIGE FREIHEIT ときたものだ NOTWENDIGE FREIHEIT がいゝ(微笑)それから晝飯をくつて本屋へ行つて KANT を二册もらつて(ポッケットをさぐる)あの本はこゝにあるとそれから友だちと動物園へ行つて猩々と天狗猿とを見てかへりに珈琲をのんで四つ角にわかれたあの時から霧がふかくなつて五六町あるくうちにあの敎會の塔がぼんやり頭の上できえかゝつてゐたつけさうすると結局俺は今何處をあるいてゐる事になるんだらうB町の通りかなそれともK橋の大通かないやいやあすこいらにはこんな SPHINX なんぞなかつた筈だまてよ一體この市にこんな SPHINX なんぞがあつたかしらどうも俺は初めて見たやうな氣がするさうすると俺は道を間違へて一度も來た事のない所へ來てゐるのかもしれないそれぢあ愈〻うちへかへる事が覺束なさうだ

第二節

牧師　長き黑色の上衣　黑き SOFT-HAT　少しく跛なり

牧師　かう霧がふかくてはまるで方角がわからんて(PEDESTAL に近づく)はれるまでこゝにまつてゐる事にしよう(學生をみる)やあ失禮あなたもここで霧のあがるのを待つて御出かな

學生　えゝまあくたびれたから休んでゐるんです

牧師　(腰を下ろす)何にしろひどい霧ぢや一寸さきも見えぬ位ぢやて

學生　一體こゝは何處になるんですか御存知ありますまいか

牧師　此處かな此處は君B町の通りだて

學生　B町の通りにはこんな SPHINX なんぞなかつた筈ですが

牧師　いやいや　わしが覺えてから何時もこの像は立つてゐるがなよくわしなぞは若いうちにこの下で說敎をしたものぢやわしは牧師ぢやからな(學生を見る)

學生　私は一度もこんな SPHINX を見た事はありません何かあなたの御覺えちがひではありませんか失禮ですが

牧師 (不機嫌に)わしの記憶は確ぢやこゝはB町の通りで之をまつすぐにゆけば電車のある通りへ出られる筈ぢや いや此處かどこであつてもこれをまつすぐに行けば其處へ出なければならぬ筈ぢや

學生 そんなら矢張私の思ひちがひかもしれません(微笑)

牧師 失禮ぢやが多分さうであらう(空をあふぐ)まだ中々はれさうもないてもう彼是午になるだやらうが……

學生 午？ 冗談云つちやいけませんもう彼是四時すぎますぜ(笑)

牧師 四時すぎ？(學生を見る)君はどうかしてゐるやうぢやこれ見なさい(ポッケットより時計を出す)この通り十一時四十七分ぢやて十一時……

學生 私は生憎時計をわすれて來たのですがそれにしてももう午飯はとうにくつたのですから今十二時前だなんと云ふ事はある訣がありません

牧師 (立上る)しかし君時計の針が十一時四十七分を示してゐるのぢや時計の針が(腹立たしげに)君は頭がくるつてるやうぢや今が日暮だなぞと途方もないことを云ふ 氣狂ひでなければわしを愚弄してゐるのぢや(去る)

學生 (見送りつゝ笑ふ)自分の方が餘程どうかしてゐるんだ

第三節

教授 鼻眼鏡 杖 白き髯

教授 (ゆきすぎんとす)

學生 (よびかく)先生ぢやありませんか

教授 やあ(立ち止る)

學生 (立ちて帽をとりつゝ)ひどい霧です

教授 さうさね君はそこで何をしてゐるのだい(微笑)

學生　路がわかりませんしつかれたししますから休んでゐるんですが
教授　道がわからない？　これは君K橋の大通りぢやないか
學生　しかしこゝにこんな SPHINX がありますから
教授　あるさ昔からある SPHINX だから
學生　K橋の大通りにこんなものはなかつたと思ひますが
教授　あるとも(杖で地に線をひきつゝ)第一わしは今O町から三百歩ほどまつすぐにあるいて來たそれから左へ九十度にまがつて又七百歩ほどあるいたいゝかねそれから博物館の角をまがつてこゝまで來たのだから SPHINX の有無にかゝはらず此處はK橋の大通りでなくてはならぬ事になる
學生　しかし………
教授　まあ待ち給へそれでも不慥ならもう少しこゝにゐて見給へそのうちに霧がはれたら空がみえるにちがひない空がみえたらもう彼是日がくれるから金牛星座が見えるだらう君は金牛星座の見方を知つてゐるかね
學生　しりません
教授　ぢやあわしが敎へておかう(杖にて地を畫す)よいかねこれが………
學生　まあ待つて下さい一體その金牛星座をしるとどうかなるんですか
教授　方角がわかるさ從つてこゝがK橋の大通りだといふ事の證明になる訣だ
學生　しかし先生霧がはれゝば金牛星座なんぞをさがさずとも何處できいたつて路はわかります差當り困つてるのは霧がふかいからで霧がはれるのを待つ位なら心配はありません
教授　(眉をひそむ)君は惡い性質を持つてゐる目前の事實に拘泥するさうして眞理の追求を疎かにする甚いかん兎に角ぢやあ勝手に考へるさ(去る)
學生　(見送りつゝ)のんきなものだな(微笑)

第四節

女　羽襟巻（ボア）　鳩羽鼠の上衣　脊高し

女（學生をみてよびかく）失禮で御坐いますが　あの　S町の方へまゐりますにはどちらへまゐりましたらよろしう御座いませう

學生（ふりむく）さあ私も自分のゆく方角がわからないんですからとてもあなたの御役にはたちますまいよ（微笑）

女（微笑）まあ困りましたのねえ

學生　大に困つてるんです（元氣よく）この通りどちらをむいても霧の壁がたつてゐるんですからね

女　ぢやあなたはどうなさらうと仰有るの

學生　まあこゝにすわつてゐるんですね路がわかるまで

女　だつて何時までこゝにゐたつてわかりやうはないではありませんか

學生　しかしわからなければと云つて無暗にあるくわけには行きませんよ

女　あるくうちにはわかるかもしれませんわ

學生　〃かもでせう〃

女　えゝだつてそんな穿鑿は何にもなりませんわ此處がどこだか考へてるひまに一足でもあるいた方がいゝと思ひますわ

學生　あなたは中々理窟やですね

女（微笑）第一そんな事を考へてゐる中には日がくれてしまひますもの日がくれないうちに一足でもおあるきなさいましさうなさらないと今にきつと後悔なさいますわ

學生　しかしわからずにあるくのは危險ですよ

女　臆病ですわねあなたは（間）ぢやああたしと一緒にいらつしやい二人で路をさがせばきつとわかり

ますわ

學生　盲目（めくら）が盲目の手をひいてあるくのは猶危險でさあ

女　そんなら御勝手になさいまし私は私でまゐります（去る）

學生　（見送りつゝ）ふん（肩をそびやかす）

第五節

MASK　をかぶつた人　DOMINO

M　霧がふかいんで困つてゐるのだね（學生のそばへ腰を下ろす）

學生　誰だい君は（不思議さうに見る）

M　君の友達だよ僕がこんななりをしてるもんだから君にわからないのだらうこれから僕は假裝舞踏會（ファンシイボール）へゆくのだよ

學生　どこにそんなものがあるのだい

M　どこでもいゝよ

學生　どうも僕には思ひうかばないが君は一體誰だいPかねLかね

M　僕かね（笑）僕は君と始終一緒にゐるぢやあないか

學生　それがどうもわからないのだが

M　ぢやあわからないにして置くさ人によつて僕にいろんな名前をつけるからね

學生　僕は路がわからなくつてよわつてゐるんだが君はしらないかね

M　それはしりやうはないさしかし僕と一緒にこれから歩いたらわかるだらう

學生　君は今の女のやうな事を云ふね

M　今の女と云ふのはしらないがわかる事は確にわかるよ其女と云ふのは何だい

學生　今通りがゝりの女が僕にさう云つたのさ考へてるひまに一足でもあるけつて

M　うんあの女か　あれは僕もしつてゐるよしかし奴のは僕のと全ちがつてゐるよ
學生　何故
M　奴はあるくのを目的にしてゐるんだからねあるくのが面白いあるいてるうちに路もわかるかもしれないさうなるとどつちもいゝと云ふのさ僕のはさうぢやない路がわかる爲にあるくのだよ
學生　それは贊成だね
M　君は僕に贊成しなくてはならない筈なのだからね
學生　何故
M　まあそれはそれさとにかくわからせる爲に路を正しく一つ一つあるくのが必要だらう君のうちへかへると云ふ事がなくつちやあ路がわかる事が何の意味もないし路をわからせる事がなくつちやあるく事が何の意味もない事になるさうきまつたら一緒にあるかうぢやないか
學生　うんあるかう
M　(PEDESTAL の銘をよむ)何だ　E MANGIA E BEE E DORME E VESTE PANNI かこの SPHINX より外に何もしらなくなつては大變だからね兎に角路をしる事が必要だよそれから早くうちへかへるがいゝこの近所にうろついてるやうぢやあ生きがひがないからねぢやあ出かけよう(二人去る)

SPHINX　霧　夜　幕

上記の E MANGIA E BEE E DORME E VESTE PANNI は「のみくひして眠り衣つくるのみ」の意

卅一日夜　　　芥　川　生

藏　六　兄　案下

三六　〔七月二十八日千葉縣一の宮から。繪端書、淺野三千三宛〕

君は僕より一級上に堀内利器と云ふ專賣特許の井戸掘器械のやうな名の男がゐたのを知つてゐるでせう一の宮はあの堀内の故郷です堀内の故郷だけに又海も恐しく未開です海水浴と云ふのは名ばかりで實は波にぶんなぐられにはいるのだから堪りません海水浴場にある一の宮町役場の揭示にも泳げとは書いてないで背部を波にうたすべしとかいてあります悪くするとひつくりかへされて水をのみます始めての日などは可成鹽からい水をのまされました此未開な海に堀内がつかつてゐる所は天下の奇觀です手拭を後鉢卷きにして漢語で形容すると壯士慘不驕とでも云ひさうな風ですそれで當人は「此位きれいな海はないぜ」と得意になつてゐるのだから手がつけられません

三七 〔八月六日千葉縣一の宮から。菅虎雄宛〕

敬啓　大暑の候先生には御變りも無之候や伺上候小生は前月廿日より當地に參り居り水泳と午睡とを日課の如く致居候

一の宮の海は波高く砂荒く僅に三里を隔てたる大原さへ此處に比すれば寧雅馴なる感有之候海岸も砂丘多く所々に弘法麥と濱防風との青を點ずるも荒涼たる觀をなすに止り候海水浴客も他に比して少かる可く旅館も今年は殊に明き間多き由に候其爲風俗は他の盛り場の如く俗悪を極め居らず月三齋町にて開かるゝ市の如きも朴厚愛す可きもの有之候

舊領主加納家は代々名君を出す由に候へ共殊に當主加納子爵の祖父なる何とか院殿聰明の名あるものゝ如く古老の口に遺れる逸事尠からず候黑船渡來の節老侯近侍の士堀内村次加藤藤内の二人を召して一首の歌を示せし事有之候由歌は「黑船に一番槍を九十九潟先を爭へ村次藤内」村次言下に答吟すらく「我こそは一番槍を九十九潟藤内などは及び申さぬ」藤内亦聲に應じて「及ばぬか及ぶか今度九十九潟一番槍は加藤藤内」主從相顧みて粲然たりし由に候其堀内村次の孫は小生の友だちにて今年一高二部甲を卒業致候恐らく獨乙語は敎を先生に受けし事と存候其他一の宮川の上流に近き湖沼を洞庭と名

づけ櫻樹を其上に植ゑ樹間多賀城の古碑に擬せる石碣を立て櫻樹一百有五十株を天女に獻ずる文を碑面に刻したる皆老侯が風流の餘戯に候くだらなき事を長々と書きつゞけ恐縮に存じ候是にて擱筆仕るべく候　不具

八月六日　　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

菅虎雄様

三八　〔八月三十日新宿から。恒藤恭宛〕

僕は一月ばかり一の宮へ行つてゐた毎日義務のやうに泳いだりひるねしたりしてゐたその癖ひまが少しもなかつた運動をしつゞけにするのでうちにゐるときは新聞をよむのも億劫な程くたびれてゐたのである〔削除〕

いよ〳〵城下良平氏が京都へゆくお世話になる機會があるかもしれないからよろしく願ふ僕も來年の春休みには櫻をみにゆかうかと思ふさうしたら僕もよろしく願ふ

田端のうちは十月初めに引こせる程度に出來た二階の設計は君と二人で考へたのと大體同じだ圖の如し〔圖あり〕

炬燵をきつた今年の冬やすみに東京でお正月をするといゝ今度は今よりひろいから君がゐるのにも萬事に大分便利だ二階が二間あるから一間づゝ二人でゐる事が出來る

シユレーデルさんの奥さんの事が朝日に出てた日本の子供をよくそだてゝえらいと云ふだけにすぎないユンケルはどうしたかわからないあいつは愛國家だからこんな時に困るだらう

オイケンがなくなつたので三並さんもがつかりしたらう

最後に別封小包は君の妹さんに差上げて頂きたいもつとずつと早く送るのだが君が京都や土佐にゐた

のでかへるのを待つてゐたのだずつと早くではわからないかもしれないいつか綿を頂いた時に差上げるつもりで買つて來ておいたのだつまらないものなんだからお禮なんぞ云つて來ちやいけない勿論僕の家から差上るので僕からではない

ユンケル先生を憶うてうたへる　　先生の忠實なる門弟　壽陵余子

今ぞかも頭禿げたるユンケルはゆたにたゆたにものおもふらむ
ユンケルよ時こそ來ぬれ「ラインへ」の歌高らかにうたひ出よかし
國がため思ひなやせそ帶皮もカラアもゆるくなりにけらずや
眉目青く頭禿げたる獨乙びとその獨乙びと見ればかなしも
日本に住みもはつべき望さへあちこちとしもなりにけらしな

三九〔十一月一日田端から。淺野三千三宛〕

拜啓今般左記に轉居致候間御通知申上候敬具
田端停車場上白梅園向ふ横町　　北豐島郡瀧野川町字田端四百三十五番地
　　　　　　　　　　　　　　　　芥川道章
大正三年十月　　　　　　　　　　芥川龍之介

四〇〔十一月三十日田端から。恒藤恭宛〕

引越して一月ばかりは何やかやで大分忙しかつた此頃やつと壁もかわいたし植木屋も手をひいたので少し自分のうちらしいおちついた氣になつたがまだしみじみした氣になれないでこまる

學校へは少し近くなつたその上前より餘程閑靜だ唯高い所なので風あてが少しひどい其代り夕かたは二階へ上ると靄の中に駒込臺の燈火が一つづつともるのが見える

地所が三角なので家をたてた周圍に少し明き地が出來たこれから其處に野菜をつくらうといふ計畫があるがうまく行くかどうかわからない庭には椎の木が多い楓や銀杏も少しはある

たゞ厄介なのは田端の停車場へゆくのに可成急な坂がある事だそれが柳町の坂位長くつて路幅があゝ半分位しかないだから雨のふるときは足駄で下りるのは大分難澁だそこで雨のふるときには一寸學校がやすみたくなるやすむとノートがたまる此頃はそれに少しよわつてゐる近所にポプラ倶樂部を中心とした畫かき村があるだけに外へ出ると黑のソフトによく逢着する逢着する度に藝術が紺絣を着てあるいてゐるやうな氣がする歩いても大學迄四十分でゆかれるさうだ之はまだあるいた事がないんだから確には云へない僕は山の手線で上野へ行つてあれから觀月橋を渡つて岩崎の横を本郷臺へ上る不忍池のまはりは博覽會の建物のこりが立つてゐて甚汚い其中に敗荷が風に鳴つてゐるのが氣の毒な氣がする此分では今にほんとうにヨットが浮べるやうな事になるかしれない

セエヅンが來たので音樂會や繪の會が大分あるこなひだ近代音樂會で未來派の音樂をきいたあれなら僕にも作曲が出來る繪の會では美術院と二科會がよかつた文展はだめ二科會でみた梅原良三郎氏の椿にはすつかり感心してしまつたあの人が個人展覽會をやるといゝと思ふ美術院では安田靫彦氏のお產の褥がよかつた今村氏の熱國の卷も面白い大觀と觀山(殊に觀山)には不感服文展では世間の人が今更のやうに滿谷氏のポストイムプレシヨニズムになつたのを騷いでゐるがポストイムプレシヨニスチツクになつたのは滿谷氏ばかりぢやあない文展のどの洋畫にだつて(不折氏のやうな人のは別)影響の跡はみとめられる

それから前にかき落したが巽畫會も一寸面白かつた木村莊八氏が大分うまくなつた岸田劉生氏がボッチシエリやセガンチニのやうな色と線とをつかひ出したのも面白いがその眞似をしてモナ・リザの複寫のやうな馬鹿な畫をかいた奴もゐた

この次の日曜にはフイルハアモニイがある戰爭なんぞあると音樂會できつと青島陷落歌と云ふやうな

ものをやるからたまらない音樂會で思ひ出したが青島陷落の日に慶應の英語會へ行つたらユンケルが圓い座蒲團のやうな帽子をかぶつたおかみさんと一緒に來てゐたさうして「獨乙皇帝の野心は遂に破られたり」だの、「獨乙の軍國主義は破産せり」だのと云ふ演説をへんな顔をしてきいてゐた少し氣の毒だつた

此頃僕はだん〳〵人と遠くなるやうな氣がする殆誰にもあはうと云ふ氣がおこらない時々は隨分さびしいが仕方がない其代り今までの僕の傾向とは反對なものが興味をひき出した僕は此頃ラッフでも力のあるものが面白くなつた何故だか自分にもよくわからないたゞさう云ふものをよんでゐるとさびしくない氣がするさうして高等學校にゐた時よりも大分ピュリタンになつた

この前の君の手紙に繪の事があつたから云ふが繪にも僕は好みがちがつて來たほんとうと云ふとをかしいかもしれないが此頃になつてほんとうにゴーホの繪がわかりかけたやうな氣がするさうして之がすべての畫に對するほんとうの理解のやうな氣がするもつと大膽に云へば之がすべての藝術に對するほんとうの理解かも知れないと思ふ

之だけでは何の事だか君にはわからないに違ひないけれども語にすると肝じんの所がにげさうな氣がするしこれでも事によると君が同感するかもしれないと思ふから之だけにしておく

兎に角僕は少し風むきがかはつたかはりたてだからまだ餘裕がない僕は僕の見解以外に立つ藝術は悉く邪道のやうな氣がするそんな物を拵へる奴は大馬鹿のやうな氣がするだから大がいの藝術家は小手さきの器用なバフーンのやうな氣がする大分鼻息が荒いがまじめなんだからひやかしてはいけないそれから天才の眞似をしてるんでもないから心配しなくてもいゝ餘裕がないから切迫してゐる切迫してゐるとすぐ喧嘩腰になりさうでいけない一體僕は人の感情を害するやうな事をするのは大嫌なのだが此頃は反意志的に害しさうで困る

君が京都にゐる中に一ぺんゆきたい鼻息のあらい時にゆくと君があきれてしまふかも知れない尤もい

くらあらくつても自分のものがいゝと思つてゐるわけではない人のものがあんまり卑怯でいんきだから不愉快なのだ同時に自分のものも其仲間入りをするかもしくは其以下になりやすいのだから猶不愉快なのだでも少し位あらいのではあきれまいと思ふからやつぱり行きたい要するに君が京都へ行つたのはよくないあはうと思つても一寸あへないのはおそろしく不自由だ手紙では埒があかないし僕はいやになるほど文がまづいいくらほんとうをかいてる氣でもよみなほすとうそとしか思へないやうな語がならべてあるんでいやになる）ゆくには遠いし甚よくない

何だかする事が澤山あつて忙しい體は大へんいゝ胃病は全く癒つたいつか寮で君がいつたやうに朝おきた時にミゼラブルな氣もちがする事だけは少しもかはらない醫科の男に何故だらうつてきいてみたら血液の後頭部へどうとかする具合だらうつて云つたその男もあまりよくわかつてゐないのだから僕にはなほさらわからない

新思潮はとうの昔廢刊したそれでもあれがあつたおかげで皆かいたものがすぐ活字になる權利を得てゐる〔削除〕

僕はこの頃今までよんだ本を皆よみかへしたいやうな氣がする何もわからずによんでゐたやうな氣がして仕方がない

世の中にはいやな奴がうじや／＼ゐるそいつが皆自己を主張してゐるんだからたまらない一體自己の表現と云ふ事には自己の價値は問題にならないものかしらゴーホも「己は何を持つてゐるか世間にみせてやる」とは云つたが「どんなに醜いものを持つてゐるかみせてやる」とは云はなかつた〔削除〕

こなひだ逗子へ行つた時の事を思出して出來るそばからかく

驛路（はゆまち）はたゞ一すぢに青雲（あをくも）のむかぶすきはみつらなれるかも
烏羽玉の鳥かなしく金の日のしづくにぬれて潮あみにけり
海大海よ汝より更に無窮なる物ありこゝに汝をながむる

ねまくほしみ睫毛のひまにきらめける海と棕櫚とをまもりけるかも
唄聲（からごゑ）に老いたる海はしぶきつゝ夕かたまけて何かつぶやく
わが聞くは海のひゞきか無量劫おちてやまざる涙の音か
夕されば海と空とのなからひにくゞまりふせる男の子ちさしも
この海のかなたにどよむ海の音のありやあらずや心ふるへる

もうやめ　ずゐぶんまづい「烏羽玉の」と云ふのだけ少し歌らしいやうだ

四一　〔十二月十四日田端から。繪端書、秦豐吉宛〕

折角わざ〳〵お尋ね下すつても申上げる程の事は何もありません明治十七年の新富座實評判記と云ふのに大上吉として田之助の評判が少し出てゐます狂言は後風土記劇本讀と云ふので此時は一役しかしなかつたやうです和紙十枚ばかりのつまらない本ですがごらんになるなら御送り申上げます其外二三人聞いてみたのですが皆誰でも知つてゐる事の外はしりません私の母は相政の娘で田之助の女房になつた女にあつたさうですがあんまりいい女ぢやなかつたと云ふ事です菊池も別に詳しい事は知らないでせう

十八日に獨逸語の試驗をすますと暇になりますから伺ふかも知れません　匆々

二伸　其評判記に「きりやうはよけれど延つぺりした所は歌麿の女畫」としてあります柔艶な此人の藝風が目に見えるやうです

十四日　　芥川生

四二　〔十二月三十一日田端から。端書、恒藤恭宛〕

隆達にまなびて

薔薇はすがれて、さうよの
いのちの春が來るのは
いつであらうぞの
一月一日　　　　　　　　龍

四三　〔十二月三十一日田端から。端書、藤岡藏六宛〕

隆達めかして

薔薇はすがれて
さうよの
いのちの春の來るのは
いつであらうぞの

——I. I. XII——　　　　　　　　龍

井川君——武庫郡西の宮香爐園深田直次郎方

四四　〔大正二・三年(推定)。山本喜譽司宛(寫)〕

みれんものこよひもひとりおち方の、花火を見るとなみだしにけり
×
花火みにゆけりや君と問ふ時もかなしさつゝむわれとしらなく
×
夏ながら翡翠もさむき夜となれば、われと泣かるゝわれなりしかな
×

つげの櫛おさへさす手もほのぼのと白きがまゝに夏さりにけり

×

遠花火君と見る夜のかなしさに袂つゆけくなりにけるかな

×

風かよふ明石縮のすずしさに灯も消さばやといふは誰が子ぞ

×

水あかり君にふさふといふわれの君すかしみる水あかりはも

×

とく帯の絽はうすけれどこの情うすしとばかり思ひ給ひそ

×

ふさはねどわれら二人の戀のせてゆく自動車に夕立す今

×

夕立つやかはたれ時の金春を君といでゆく自動車の戀

×

金春の小路々々に灯はともり二上りなして夕立す今

×

えやわする君とゆく夜の自動車にわれらがつめる薔薇の花たば

×

その宵の牡丹燈籠のうすあかりなほわが胸にさすと知らずや

×

魂祭る新三郎のさびしさに似しさびしさも君あるがため

×

いやさらにさびしかれ君帶止の翡翠も今はけなばけぬべく

×

白玉の憂抱くと君が頬いよゝかなしくなりにけるかな

×

ものうげにわれをながめてうちもだすその明眸にかへむものなし

×

うたひ女のかなしさ知れと君が眼の燭を見るこそわりなかりけれ

×

君の手紙が來たのは卅一日だつたからやつぱり間にあはなかつた。今度は二三日前から知らせてくれ給へ、三日の外はいつでもいゝ。夜銀座でもあひたい、このごろのあつさにはよわる、有樂座かどこかの活動寫眞をみに行つてもいゝ。アトランティスはみた。つまらない、小說を勉強して三つもかき出した。

一日　　龍

大正四年

四五 〔二月二十八日田端から。恒藤恭宛〕

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出來ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂莫を癒す事は出來ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。

周圍は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は惡むべき嘲弄だ。

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。（僕自身にも）。僕は時時やりきれないと思ふ事がある。何故、こんなにして迄も生存をつゞける必要があるのだらうと思ふ事がある。そして最後に神に對する復讐は、自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある。

僕はどうすればいゝのだかわからない。

君はおちついてゐるかもしれない、そして僕の云ふ事を淺薄な誇張だと思ふかも知れない（さう思はれても仕方がないが）。しかし僕にはこのまゝ囘避せずにすゝむべく強ひるものがある。そのものは僕に周圍と自己とのすべての醜さを見よと命ずる。僕は勿論亡びる事を恐れる。しかも僕は亡びると云ふ豫感をもちながらも此のものゝ聲に耳をかたむけずにはゐられない。

毎日不愉快な事が必ず起る。人と喧嘩しさうでいけない。當分は誰ともうつかり話せない。そのくせさびしくつて仕方がない。馬鹿馬鹿しい程センチメンタルになる事もある。どこかへ旅行でもしようかと思ふ。何だか皆とあへなくなりさうな氣もする。大へんさびしい。

二月二十八日

龍

四六 〔三月九日田端から。藤岡藏六宛〕

わが心ますらをさびね一すぢにいきの命の路をたどりね
かばかりに苦しきものと今か知る「涙の谷」をふみまどふこと
ほこらかに恒河砂びとをなみしたるあれにはあれどわれにやはあらぬ
かなしさに涙もたれずひたぶるにわが日守(まもる)なるわが命はも
罌粟よりも小(ち)さくいやしきわが身ぞと知るうれしさはかなしさに似る
われとわが心を蔑(なみ)しつくしたるそのあかつきはほがらかなりな
いやしみしわが心よりほのほのと朝明(あさあけ)の光もれ出でにけり
わが友はおほらかなりやかくばかり思ひ上がれる我をとがめず
いたましくわがたましひのなやめるを知りねわが友汝(な)は友なれば
やすらかにもの語る可き日もあらむ天つ日影を仰ぐ日もあらむ
あかときかはたたそがれかわかねどもうすら明りのわれに來たれる
わが心やゝなごみたるのちにして詩篇をよむは涙ぐましも

少しおちついてゐる今日にも君の所へ行かうかと思ふがもう少しまつ事にする自分がもがいてゐる時に人が落ちついてゐるのを見るのは苦しいから

四七 〔五月十三日田端から。恒藤恭宛〕

熱があつてねてゐる、なほつたら君の手紙の返事をかかうと思つてゐたが急になほりさうもないから之をかく、ねながらかくんだから長い事は書けない、肺かと思つて大分心配した、試驗のしたくが出

來ないんでこまる。大變不愉快だ。

枕邊の藤の垂花ほのぼのと計溫表にさき垂りにけり
かすかなるかなしみ來る藤浪のうすむらさきをわが見守る時
水藥の罎にかゝれる藤の花わが知らなくにこぼれそめけり
人妻の上をしのびて日もすがら藤の垂花わが見守るはや
ほのぼのと戀しき人の香をとめば藤はかそけく息づきにけり
うすくこくにほへる藤の花がくり NOTE-BOOK に塵おける見ゆ
むらさきの藤さく下にちらばへるオブラードこそやらはましけれ
ひたものにたへがたければ藤の花花つみにつゝわが戀ふるなる
したしかる人みなとほしひえびえと夕さく藤はほのかなるかも
はつ夏の風をゆかしみ窓かけをひけばかつちる藤の垂り花
藤の花ゆりゆるゝむたほそぼそに香こそとひ來れ物思へとふごと
のみすてしコップの水にほのかなる藤のむらさきちれりけるかも
心ぐし藤の垂り花たまさぐりたまさぐりつつもの思ひにけれ
床ぬちに汗を流してわがあれば額をなづる藤の花かも
熱いでてやゝ汗ばめるわが肌をかいなづる風は藤のした風
うつゝなく眼をほそむれば藤の花睫毛のひまにさゆらげるかも
さきのこる鉢の藤はも夕かけてほの白みたる鉢の藤はも
やゝ疼む注射のあとをさすりつつわがひとり見る藤の花房
しくしくと注射の針のわが肌を刺すがに來るかなしみもあれ
日和雨ふりやまなくにしく〳〵と注射のあとの痛みやまずも

日和雨しく／＼ふりて濡緣の藤に光るとかなしきものか
きらゝかに日和雨ふる濡緣の藤はいつしかうなだれてけり
熱臭き小床ゆ出でて濡緣の藤の虫とる午のつれづれ
灯ともせば藤の垂り花ひそひそとNOTE-BOOK（シート）に影おとしけり
日かげと灯（ほ）かげとさして藤の影敷布にさすはあはれなるかも
わが友はいかにかあらむ入澤の池の藤浪みつつかあらむ
春日野の藤の花さき春日野の松の葉もえて夏づきにけむ
すくよかにあが友ありぬ此日頃あがいたつきは未愈らず
むらさきの藤散り散れどこの日頃わがいたつきは未愈らず
試驗注射をしてみたが反應がない。肺ではなささうだ。もうぢきなほるだらうと思ふ。心配する程の事はない。ゑはがきをありがたう、皆大へんよろこんだ。
豚（ぶた）じもの父は寢（ね）莫（ご）蓙（ざ）にはらばひて都をどりの畫はがき見たり
打日さす都踊りの繪はがきをあがながむれば祇園しし ぬばゆ
打日さす都大路の遲櫻誰が木履（こぼく）ゆちりそめにけむ

十三日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

恭　　様　梧下

四八　〔五月二十三日田端から。恒藤恭宛〕

病氣は殆いゝ尤もまだ醫者へは通つてゐるが
何しろ試驗が近いので弱るDickensのビブリオグラフイーを覺えるだけでも年號や何かがたくさんあつて大へんだそこへゆくとシエリダンとかフツドとか云ふ奴のビブリオグラフイーは遙にたちがいゝ

しかし何にしてもビブリオグラフイーはいけない愚劣極まるそれから語の使ひ方を覺える必要がある「his が my の意味で使はれる事を知つてゐるかそしてさう云ふ用法をシエークスピアが何度何と云ふ芝居の何幕目で使つたか知つてゐるか」と云ふやうな問題に答へるのだからやりきれないとにかく災なるかなだ

この頃ルイズの The Monk と云ふ小説をよんだ1798年に初版が出たきり殆完全な再版の出た事のない本ださうだそれほど時代に遲れてそれほど古色を帶びてゐる所が面白かつた魔法幽靈決闘暴動ルシファアなんどが出て來る舞臺はスペインで大部分は僧院內の出來事だしまひに宗敎裁判所の牢をやぶつてアムブロジオと云ふ坊主がルシファアと一しよに空をとんでにげ出すさうして結局ルシファアに殺されて靈魂が無窮の亡びにおちるそのあとに「ladies よ人の罪をゆるす事寛なるはわが罪をせめる事嚴なるが如く善事なり」と云ふやうな作者の御說敎がついてゐるラドクリフは暫く措くこのルイズからマテイユリンやメリイ・シエリーを經てポオを生んだと云ふ事は興味ある事實である僕は今メリイ・シエリイのフランケスタンをよんでゐる

この頃は Everyman's Library の愛讀者になつたねてゐる間もあれでバルザックをよんで大へん感心したリイドの「僧院と竈と」をよんで少し感心した

こなひだ內自分で肺病ぢやないかと思つてゐた頃は往來をあるく人間が悉く結核患者らしく見えたそして何故早く皆診察してもらはないんだらうと思つただから往來へ痰をはく奴なぞは大逆無道な動物のやうな氣がしたそれが今では又皆健康な人間らしく見えてゐるそして僕自身も時々往來へ痰を吐いてゐる〔削除〕

あとは皆健在なんだらうと思ふ學校へも Minimum にしか出ないからよくしらない病氣はなほつたが inability がまだつきまとつてよわる氣分が惡かつた時だからこの前の手紙は大へんありがたかつたもうやめる　さやうなら

四九　〔六月十二日田端から。淺野三千三宛〕

久しく御無沙汰しました御變りもありませんか
何時か一高の門の前で御目にかゝつた事がありましたがあの頃は私にとつて大へん不愉快な時でしたからさぞ不景氣な顏をしてゐた事だらうと思ひます今私の方は試驗です十五日にはすつかりすむのですがくだらない事を澤山暗記しなければならないので弱つてゐます其上この二三年來益〻興味のない事に努力が出來なくなつたのでしかも私が今聞いてゐる講義の中で專門の英文學の講義が一番興味がないので弱つてゐる上にも弱つてゐます
唯之がすむと休みになるのでさう思ふと少しは元氣の出ない事もありません
此頃はすつかり方々へ御無沙汰をしたものですから誰がどうしてゐるのだかさつぱりわかりません去年デュブスケイ先生の所へ夜學に通つてゐた時分にはよく小野田君にあひましたあの先生は今でも一高へ出てゐるのだらうと思ひますし小野田君も健在なのだらうと思ひます
廿日位には一高の試驗もすむでせうさうしたら市川君とでも來ませんか田端の停車場で下りて白梅園ときけばわかります尤も白梅園が私の家ぢやあないので其向ふ横町のつき當りが私の家なのです別に先輩風をふかしたい訣でもないのですが久しぶりで御目にかゝりたいやうな氣がしますから
匆々

十二日朝　　　　　　　　　芥川龍之介

淺野三千三樣　梧下

五〇　〔六月十二日田端から。恒藤恭宛〕

試驗は十日に始まつて十五日にすむ日數は短いが一日に二つある日がある位で中々充實してゐるから

厄介だ殊にこの一年來興味のないものには努力する事が益々出來なくなつて來たので餘計厄介だそして專門の英文學の講義が僕には一番興味がないんだから愈々厄介だ最後にまだ一週二回づつ品川の醫者へ通つてゐるんだからその上に厄介至極だと云つていゝ

今日沙翁の試驗があつたプリントを送るから見てくれ給へシエクスピアのソンネツトはW・H・にさゝげてあるがそのW・H・は誰だと云ふ推測を十ばかり書いてそれを誰の說にして誰の反對說ありと云ふやうな調子で批評すると一題でも隨分長くなるおかげで一生役に立たないに相違ないとしか思はれない名前や事實をむやみに覺えさせられた沙翁のソンネツトの初版は四つ切版で行數二千五百五十一行その中誤植三十六ヴイナス　アンド　アドニイスは同版で行數三千四十七行その中誤植六と云ふのはその一つにすぎない

體はいゝとも惡いとも自分にはわからないがそんなに惡くはなささうだ

差當り僕の頭は數字で一杯になつてゐるデイツケンスの著作年表ペトラルカのソンネツトの數十六世紀のソンネツト作家の作品總數沙翁のソンネツトの番號及シムベラインの幕數景數――實際災だ早く自分の事がしたくつてたまらないが仕方がないノートのよみきれない科目は半、創作的な答案を書いて間に合せてゐる

田端は若草――あらゆる種類の若葉で埋つてゐるその上に每日靜な雨がさあつとふつてゐる僕が雨期を愛するのは君もしつてゐるだらう僕は少しでもエステテイツシユな心のある人なら誰でも黴のはえる事位は度外視して雨期を愛すべきものだと思ふこの頃の雨に飽きた木の枝ほどうつくしくしだれてゐるものは外にない江城五月黃梅雨と云ふが黃梅黃麥新綠及び灰色の空の美しい諧調は西洋の詩に見られない美しさであらう雨のはれまを散歩すると家々門巷桐花と云ふ句を思出す槐影沈々雨勢來と云ふ句を思出す一川薰徹野薔薇と云ふ句を思出す僕は試驗後少くも半月は雨がふつてゐる事を祈つてゐる蚊は存外ゐない

堺野氏は氣の毒だ同情した心もちが可成よくわかつたから〔削除〕
帝劇で武者の「わしも知らない」をやるのは猿之助
早く自由にいろんな事がしたい僕にはする事したくてはならない事が澤山ある僕の友だちに一人今三
期の結核患者がゐるが病氣が病氣なので誰も見舞ひにゆかない姉さんと妹と三人ぐらしで姉さんもま
だ片づいてゐないのだから大へんだ病院へ入れておくのも苦しいらしいあゝなつちやあたまらないと
思つたしみじみさう思つたその人が野心家でないのはまだしもの幸かもしれない
どこへゆくともまだきまつてゐないがどこかへゆく

十二日夕　龍

井川君

五一　〔六月二十三日田端から。端書、淺野三千三宛〕

試驗も御すみになつた事だと思ひます、御都合がよろしければ御出下さいまし
はがきで日を伺へば御待ち申して居りますから　匆々

五二　〔七月二十八日田端から。恒藤恭宛〕

出かけるのが遲れたのは實はたのまれた飜譯物があつてそれが出來上るまでは東京をはなれられない
からであるこの月末迄にまだ百五十枚はかかなければならない考へてもいやになる
出雲は涼しいかね東京の暑さは非常なものだ大抵九十度以上になる裸でぢつと横になつてゐても汗が
だらだらでるだから弱つた事も一通りではないこれで二十何時間も汽車へのつてゐたら茹りはしない
かなどとも思ふ兎に角出雲へゆく迄の間が大分暑さうだが今をはづすと一寸行く機會もないだらうと
思ふから事故の起らない限り八月一日か二日位に東京をたたうと思ふ八月上旬は僕が毎年東京を出る

時になつてゐるのである實はしばらく手紙がこなかつたので或は都合が惡くなつたのかと思つて中途半ぱな心配も少しした

何にしてもかう暑くつてはやり切れないから用のすみ次第出たいと思ふその爲に呉々も出雲の湖水の上のすゞしからむ事を祈る

八雲たつ出雲の國ゆ雲いでて天ぎりふらむ西の曇れる

はろかなる出雲の國ゆ天津風ふきおこすらむ領巾（ひれ）なす白雲

そのむかし出雲乙女は紅の領巾（ひれ）ふりふりて人や招（ま）ぎけむ

紅の領巾ふる子さへ見えずなりて今あが船は韓國に入る

いづちゆく天の日矛ぞ日の下に目路のかぎりを海たゝへけり

こちごちのこゞしき山ゆ雲いでて驟雨（はやち）するとき出雲に入らむ

その上の因幡の國の白兎いまも住むらむ氣多の砂山

七月廿八日　龍

差支へさへなければ三日に東京をたつ五日には松江へゆけるだらうよろしく御ねがひ申します

龍

五三　〔八月十四日松江から。自筆繪端書、藤岡藏六宛〕

松江へ來てからもう十日になる大抵井川君とだべつてくらしてゐる湖水や海で泳いだりもした本は殆よまない少し胃病でよわつてゐる松江は川の多い靜な町である町はづれのハアン先生の家もさびしい井川君のうちは濠の岸にある濠には藺や蒲が茂つてゐる中で時々かいつぶりが鳴く丁度小さな鳴子をならすやうな聲だ廿日頃に東京へかへる　匆々

十四日午後　芥川生

五四 〔八月二十一日松江から。繪端書、淺野三千三宛〕

出雲は楯縫秋鹿十六嶋など云ふ地名から中海にあるそれこ舟まで何となく神代めいてゐます この、社も社殿の建築が上代の住宅の形式と一つになつてゐるので一層古事記めいた興味を感じさす神社は青垣山をうしろに静な森にのぞんだ神さびた所です

五五 〔八月二十二日田端から。恒藤恭宛〕

大へん御世話になつて難有かつた感謝を表すやうな語を使ふと安つぽくなつていけないからやめるがほんとうに難有かつた難有く思つただけそれだけ胃の悪い時には佛頂面をしてゐる自分が不愉快だつたただからさう云ふときは一層佛頂面になつたにちがひないかんにんしてくれ給へ
汽車は割合にすいてゐたが京都へはいる時には非常な雷雨になつたそれから翌日は一日雨でとうとうどこへもよらずにどしや降りの中を東京へかへつた途中で根岸氏が東京へゆく人を一人紹介してくれたので大抵その人と一しよにだべつてゐた
非常にくたびれたので未に眠いが今日は朝から客があつて今まで相手をしてゐたそれで之をかくのが遅れてしまつた詩を作る根氣もない出たらめを書く少しは平仄もちがつてゐるかもしれない

波根村路
倦馬登村路
冷煙七八家
伶俜孤客意
愁見木棉花
眞山覽古

山北山更寂
山南水空廻
寥々殘礎散
細雨灑寒梅

松江秋夕

冷巷人稀暮月明
秋風蕭索滿空城
關山唯有寒砧急
擣破思鄉萬里情

蓮

愁心盡日細々雨
橋北橋南楊柳多
櫂女不知行客涙
哀吟一曲采蓮歌

君にもらつた葡萄がいくら食つても食ひつくせなくつて弱つた最後の一房を龜岡でくつた時には妙にうれしかつた桃は横濱迄あつた旅行案内のすみへ

葡萄噛んで秋風の歌を作らばや

と書いたまだ駄俳病がのこつてゐると思つた

京都では都ホテルの食堂で妙な紳士の御馳走になつたその人は御馳走をしてくれた上に朝飯のサンドウイッチと敷島迄贈つてくれたさうして畫の話や文學の話を少ししたわかれる時に名をきいたが始め

は雲水だと云つて答へないやつとしまひに有合せの紙に北垣靜處と書いてくれた「若い者はやつつけるがいゝ頭でどこ迄もやつつけるがいゝ」と云つた後で給仕長にきいたら男爵ださうである四十に近いフロツクを着た脊の高い男だつた

一しよにのんだペパミントの醉で汽車へのつてもねられなかつたすると隣にゐた書生が僕に對して話しかけた平凡な顏をした脊のひくい青年である一しよに音樂の話を少しした何故音樂の話をしたかは覺えてゐない所がその青年はシヨパンの事を話し出したシヨパンの數の少い曲のうつくしさは音と音との間にある間隙に前後の音が影響するデリカシイにあると云ふのであるあとでその人のくれた名刺をみたら高折秀次としてあつた僕はこの風采のあがらない青年がシヨルツと一しよにシヨパンのノクテユルヌを彈いたのをきいた事がある高折秀次氏は昨年度の音樂學校卒業生の中で一番有能なピアニストなのである

僕はこの二人の妙な人に偶然遇つた事を面白く思つた何となく日本らしくない氣がするからである

うちへかへるとアミエルがきてゐた

皆樣によろしく殊にわが敬愛する完ちやんによろしくと云つてくれ給へもう一つの手紙は公の御禮の手紙だ

廿二日夜九時

五六　〔八月二十四日田端から。端書、石田幹之助宛〕

乞玉斧（朱圈はつけると詩がうまさうに見えるからつけた　咎め立てをしてはいけない）

冷巷人稀暮月明
秋風蕭索滿空城
關山唯有寒砧急

つしやい
　　擣破思郷萬里情
關山は一寸洒落れてみただけ天主閣も町も松江は大へんさびしい大概うちにゐますひまだつたらいら

五七　〔九月八日逗子から。繪端書へ成瀬正一と寄書、松岡讓宛〕

己は今こゝで成瀬の世話になつてゐる毎日梨を食つたり海へはいつたり本を二三頁よんだりする海へはいると云ふよりはくらげに刺されにはいると云ふ方が適當かもしれない己は利巧だから餘りさされないが成瀬は向ふ見ずでおまけに男がいゝもんだからくらげに惚れられて胸から腹をべた一面にくひつかれた今アンモニアをつけて療治してゐる最中である　（龍）

五八　〔九月二十日田端から。恒藤恭宛〕

あれ以來毎日平凡にくらしてゐる學校は今學年から火木金土の午前だけしか出ないだから大部ひまだ論文がこだはつてゐて何としても氣になつていけない尤も氣になつても何かしてゐるがトーデの本でミケルアンジエロのシスチナのチヤペルの畫をみて感心した感心したでは足りない頭から足の先までふるひ動かされたとでも云つたらいゝかもしれないあゝ行かなくちや嘘だと思つた何しろ今の所畫ではミケルアンジエロほど僕の心を動かす人はないあればたつた一人レムブラントだレムブラントは二度目のおかみさんの肖像のColour reproductionを手に入れてよかつたレムブラントが落魄した時に自畫像なんかたつた三ペンスでうつたさうだ今はどんな複製でも三ペンスよりは高い次いではゴヤだゴヤはドンナイサベラと云ふのに感心したから云ふ偉大な作家は皆人間の爲に最後の裁判の喇叭のやうな聲をあげて自分の歌をうたつてゐるその爲にどの位僕たちは心安く生きてゆかれるかしれないこの頃は少し頭から天才にのぼせてゐる

櫻の葉が綠の中に點々と鮮な黄を點じたのを見て急に秋を感じてさびしかつたそれからよく見ると大抵な木にいくつかの黄色い葉があつたさうしたら最的確に「死」の力を見せつけられるやうな氣がしたので一層いやに心細くなつたほんとうに大きなものが目にみえない足あとをのこしながら梢を大またにあるいてゐるやうな氣がした

新聞は面白くよんだ(自分のはあまり面白くもよまなかつたが)「秋は樗の上に立つてゐた」と云ふのに感心したまつたく感心してしまつた定福寺(ぢやうふくじ)の詩は未に出來ないその代り竹枝詞を一つ作つた

　黄河曲裡暮烟迷
　白馬津邊夜月低
　一夜春風吹客恨
　愁聽水上子規啼

あまりうまくない(削除)

すべての方面で随分いろんな事がいゝ加減に行つてゐるらしいいつまでそれですんでゆくわけもなからうからその内にどうとかなるのだらうがそれにしても大分呆れ返る

　わが指の爪のほそさに立つ秋のあはれはいとゞしみまさりけむ
　秋風はふきぬべからし三越の窓ことごとく白く光れる
　ふき上げの水もつめたくおつるおつる橡(マロニエ)の葉のわらけちるあはれ(これは大分窮した)
　橡(マロニエ)の黄なる木ぬれにゆきかよふ風をかなしときゝつゝ行くも(同上)

どうも今日は歌をつくるやうな氣分になつてゐなさうだからやめる又かく

　廿日夜　　　　　龍

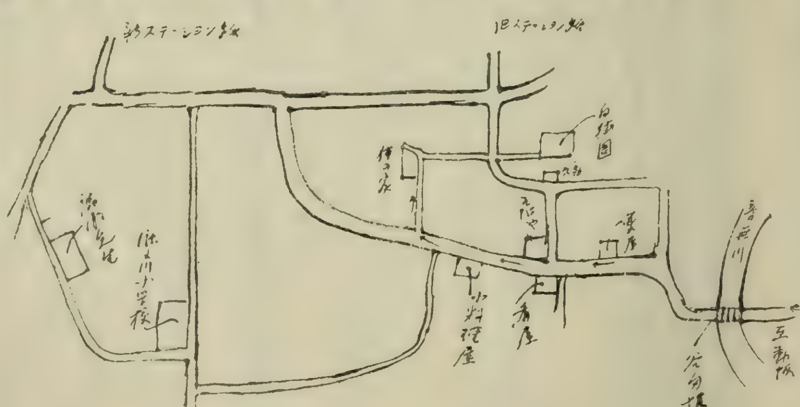
恭　君

五九　〔九月二十一日田端から。矢羽眞弓宛〕

勿論いゝ加減な地圖です動坂からなら↑の通りにお出でになるのが一番近い筈です私自身は先輩の所へ行くと氣がつまつていやですからあなたもさうぢやあないかと思つて心配してゐますそれさへなければ遊びに來て下さい

廿一日夜　　芥川龍之介

矢羽眞弓樣　梧下



六〇　〔九月二十八日田端から。矢羽眞弓宛〕

御手紙拜見致しましたあなたは私に一年前位から興味を持つて下さつたさうですがその點では私の方がもう少し前からあなたの事を知つてゐます尤も初めはあなたの名前が面白かつたのであなたの存在を(から申上げるのが失禮でなければ)みとめたのですがその後いろいろな人からいろ／＼な事を聞いて漸くあなたに對する私のある感情がきまるやうになりましたそこであなたと話してみたいやうな氣が可成り前からしてゐましたが先輩と云ふものの大嫌な私から推してあなたも嘸私の所へなぞ來るのが退屈でいやだらうと思ひましたからそこで遠慮して默つてゐましたあなたはこの間遊びに來いと云はれて勇氣がついたとお云ひですが私は又遊びに來てもよささうな事をあなたが云つたのでそれで勇氣がついてこの前の手紙を書いたのです

晝も碌な晝はありませんが遊びには是非來て下さい私の都合はいつでもいゝんですが早くから日がきまつてゐれば猶結構ですその日に外の人の來ないやうに出來ますから左に知らない人が二人私の所でおちあふのが私は大嫌なんです

廿八日

芥川龍之介

矢羽眞弓樣　梧下

六一〔十月九日田端から。端書、淺野三千三宛〕

拜啓大塚先生が Wilde の講義をするのについて House of Pomegranate が少し入るのですが御用ずみならどうにかして私の手もとまで御とゞけ下さいませんか右御ねがひ申上ます　匆々

六二〔十月十四日田端から。端書、淺野三千三宛〕

House of Pomegranates 確に落手仕候とりあへずこの段御しらせ迄　匆々

十一月十二日〔原〕

芥川龍之介

六三〔十一月十四日田端から。原善一郎宛〕

原君　大へん長い間御無沙汰をしました

いろんな面倒な事や忙しい事があつたので時々頂くはがきの返事がのび〳〵になつてしまひました相不變御壯健の事と思ひますがのすたるじあも起りませんか此十月の末に僕は田端へ越しました小野のうちから七町ばかり離れた靜かな所です其内に先生も丁度小野のうちと僕のうちとの中間位な所へ越してお出になる筈です

學校へは相不變出てゐますが講義のつまらないのには閉口です此頃は文科の講義をそつちのけにして

波多野さんの希臘哲學の講義を休まずきいてゐます大塚さんと波多野さんは僕の一番尊敬してゐる先生です

白樺ではブレークの展覽會をやるさうです日本ではブレークがはやつてゐるんです尤も詩の方も抒情詩人のブレークだけでミスチックとしてのブレークは本がないので誰もやらないやうです僕の友だちの一人も卒業論文をブレークにするつもりだつたのですがブレークの Complete Works を取寄せようとしたら絶版で一冊85圓になつてゐるのでとう〱お流れになりました

戰爭が始まつてから獨乙の本が來ないので少しこまゐます現に學校では KANT の講義をするのに本がなくつてよわつてゐる位です本と云ふ點では戰爭と云ふ氣もしますが其外の點では僕などは全戰爭があるやうな氣がしませんそれに獨乙に可成同情がありますこの夏一の宮にゐた時分はアメリカと戰爭が始まると云ふやうな風說がありましたが今では完く太平な氣がします

戰爭の記事をよんでしみじみさう思ふのは英國の弱い事です今度の戰爭に勝つても英國はきつとバルカン問題でロシアに甘くみられるでせう少し可哀さうな氣もします尤もアメリカと〔いふ〕英國文明の繼承者がある以上はもう亡びてもいゝんですが

戰爭があつたので日本へ來る筈のオイケンが來なくなりました年よりですから早く來ないと死にやしないかと思つて心配です何にしても戰爭はよくないものです

アメリカのセイゾンは面白ござんせう僕もどつかアメリカの大學の日本文學の教授の助手か何かになつて行きたいと思ひます尤も之はさう思ふだけでそんな甘い口のないのはわかつてゐるんですが

アメリカの詩人で日本で今はやつてゐるのはホイットマンですホイットマンばりの散文のやうな詩が澤山出ます其癖日本の詩人は Leaves of the Grass も碌によめない位英語が出來ないんですが

もうそろ〱冬が來ます冬になると日本人はよけいきたならしくなります自分もそのきたならしい仲間だと思ふと少しがつかりしますどうも冬は西洋人にかぎるやうです毛皮の外套の襟にうづめるには

黄色い題ぢやあ幅がきゝません

いつぞや頂いた Poor の本は面白く拜讀しました(大分むづかしい本でしたけれども)けれどもあの著者のやうに立體派や未來派に贊成する事は僕には出來ませんそれは理論は認めますしかし藝術は認められません(ピカソなぞは全くわからない繪が澤山あります)畫かきでは矢張マチスがすきです僕の求めた少數な繪で判斷して差支へないならほんとうに偉大な藝術家だと思ひます、僕の求めてゐるのはあゝ云ふ藝術です日をうけてどん／＼空の方へのびてゆく草のやうな生活力の溢れてゐる藝術です其意味で藝術の爲の藝術には不贊成です此間まで僕のかいてゐた感傷的な文章や歌にはもう永久にさやうならです、同じ理由で大抵の作者の作には不贊成至極です、鼻息が荒いなんてひやかしちやあいけませんほんとうにさう思つてゐるんです

此頃はロマン・ロオランのジヤン・クリストフと云ふ本を愛讀してゐます

昨日逗子の海岸からかへつて來ました其處ででたらめに作つた歌を御らんに入れます創作と主張とはうまく一致しないものなんですからまづくつても笑つちやいけません

　烏羽玉の烏かなしく金の日のしづくにぬれて潮あみにけり
　眠(ね)まくほしみ睫毛のひまにきらめける海と棕櫚とをまもりけるかも
　きらめくは海ぞも棕櫚の葉の下に目路のかぎりを鍍金するぞも

龍

六四　〔十一月四日田端から。自筆繪端書、久米正雄宛。PORTRAIT OF A "HŌKAN"〕

こんな畫をかくほどのんきになつてゐるドラマはどうした僕は小説をかき出した

四日夕　龍

六五　〔十一月十六日田端から。久米正雄宛〕

僕は一切の遠慮をすてゝ云ふ僕はすべての他の人間を輕蔑するだけそれだけ君を尊敬する僕と君とはニユーアンスがちがつてゐる僕にとつて君のニユーアンスは確に時としてエーゲルハフトであるしかし人間の大きさは（勿論藝術的と云ふ語に包括される精神活動から見て）ニユーアンスを超越する僕はその大きさの爲に不可抗に君にアンツィーエンされるのを感じてゐるさうして僕の爲に君の前に頭を下げる時の來ないやうに祈つてゐる

僕は之を書く時に一種の不安を感じない事もなかつたそれは僕をして之を書かしめるものは嘗君が僕を認めてゐるやうな口吻を洩したと云ふ事ではないかと思つたからであるしかしそれでもいゝと思つたから之を書いた

松岡や成瀨は事によると僕が君を甘やかしてゐると思ふかもしれない僕が調子のいゝ賞讚の辭をならべて君を煽り立ててゐると思ふかもしれない或は現に思ひつゝあるかもしれない（或は君自身さへさう思ふ事があるかもしれない）僕はさつき松岡の手紙の中で「君たち」と云ふ語をよんだ時には神經過敏にさう云ふ考へを松岡や成瀨に豫想せざるを得なかつた尤も彼等に何等の惡感も感じなかつた事丈は斷つておく必要がある僕はさう云ふ意味で所謂南寮の Gruppe に僕の立入る事が Gruppe の交情を破る事になるのを惧れるさうして僕の爲にこの僕の感じが極端な邪推である事を祈る松岡の手紙の中に「僕たちを驚かさないやうな物を書いてゐる中に誰も驚かさないやうな物を書くほど墮落する」と云ふやうな意味の事があつた僕は簡單に云ふ僕もその所謂墮落に陷る事があるかもしれないしかしその墮落は僕から云はせれば彼等にすら理解されないプロダクシヨンを出すと云ふ事だまして一般人には當然理解されないプロダクシヨンを出すと云ふ事だこれはそれほど重大に考へずとも趣味上の問題で僕は「僕たちを驚かさない物」を書きつゞける事がありさうな氣がするからそれで餘計かう云ふ誇張し

たうぬぼれを書きたくなつたかもしれない
僕は松岡からも成瀬からも好意を持たれてゐると思つてゐる僕もそれに相當する好意を持つてゐると信じてゐるしかしつきつめた所までゆくとそれがどの位心と心とをつなぐ力があるか疑はれる
この疑は君に對しても全然ない訣ではないしかしその場合には僕の反抗心が働いてさうなるやうな氣がする僕はさびしい唯君のみから或壓迫をうけるさうしてその壓迫によつてのみ或興奮を感じさせられる所詮僕は君を尊敬し同時に君を恐れるもし君を輕蔑すると云ふやうな矛盾した行爲に出るとすれば(將來に於いてだが)それはこの恐れからすると思ふより外にない僕は僕の爲にくりかへしてさう云ふ時の來ない事を祈る事實が僕をして僕の劣等を意識せしめもしくはせしめんとする時の來ない事を祈るさうして僕たちの間が今の僕と僕の友だちとの間のやうに荒ぶ時の來ない事を祈る
云ふ迄もないが僕の尊敬は Leistung の上からのみの尊敬ではない
あるセンティメンタルな感動の爲にこの手紙をかいた　僕はその感動の去つた時にこの手紙をみるのを恐れてゐる同時に君がこの手紙のセンティメンタリズムを晒ふ事を恐れてゐる僕は僕自身今感じつゝある感情が人生意氣に感ずと云ふ中學程度の感情に近い事を知つてゐるからである
これを封じて宛名をかいてそれから寢る

六六　〔十二月三日田端から。　恒藤恭宛

この手紙をかくのが大へんおくれたそれはさしせまつた仕事があつたからだ仕事と云つても論文ではない論文は一月の一日から手をつけて三月の末までに拵へて四月一杯で淸書する豫定になつてゐるまだ Text の來ないのがあつて弱つてゐる
胃病はあまりよくない體の調子は概していゝが〔削除〕
この頃毎日戰爭と平和をよんでゐるあんまり大きいので作としての見通しは殆まるでつかない部分

（それも可成長くに亙つてだが）には感心し得る限りの感心をしてゐる人物ではプリンスアンドレエが大好きだアンドレエのお父さんも妹もよく書いてあるアンドレエが死んだと思つてゐるとかへつて來るその途端にアンドレエの夫人が產で死ぬあすこは實にうまいアウステリッツでアンドレエが仆れて空をみる所もいゝがあすこの方が更にいゝこんなものを書いた奴がゐるのだと思ふとやりきれない日本なんぞまだまだ夏目さんにしてもまだまだ

ロシアの作家なぞは戰爭と平和のやうな作物が前にあると云ふ事によつて悲觀しないでゐられるのだらうか戰爭と平和ばかりではないカラマゾフ兄弟にしても罪と罰にしても乃至アンナカレニナにしても僕はその一つでも日本にあつたらまゐりさうな氣がする

兎に角いろんな事がしたいのでよわる論文をかく爲によむ本ばかりでも可成ある（テキストは別にしても）題は W. M. as Poet と云ふやうな事にして Poems の中に Morris の全精神生活を辿つて行かうと云ふのだがうまく行きさうもない
僕はすべての Personal Study はその Gegenstand になる人格の行爲とか言辭とか思想とか感情とかに reduce する事によつて始まると思ふ云はゞ外面的事象の內面化だその上でそれにある統一を作つて個々の事實を或纏つた有機體的なものにむすびつけるその統一を何によつてつくるかがさし當りの問題だが

この頃時々松江を思ひ出す平な湖の水面とその上に廣い空を思ひ出す空にはいつも鼠色の雲が蔓つてゐる今その空の下にその湖を橫ぎつてゆく小さな汽船は古浦へゆく船であらうその時僕の心の上にはかすかなかなしさが落ちて來る同時にある平和が生れて來る僕は靜に眼をその空と湖とに向けるさう

してそこに營まれてゐる生活を祝福する

田端はどこへ行つても黄色い木の葉ばかりだ夜とほると秋の匂がする

　樹木は秋をいだきて
　明るき寂莫にいざなふ
　「黄」は日の光にまどろみ
　樹木はかすかなる呼吸を
　日の光にとかさむとす
　その時人は樹木と共に
　秋の前にうなだれ
　その中にかよへる
　やさしき「死」をよろこぶ

子規の墓のある大龍寺にも銀杏の黄色くなつたのがある生垣の要もち、それから杉、それだけが暗い緑をしてゐるあとは黄いろばかりその路を大根をつんだ車がとほる籠の中へ黄菊の花ばかりを摘んだのを入れた車が通る車の輪の音子供の赤蜻蛉をつる歌（氣をつけてきいてみると歌の語はちがふが節は出雲の何とか云ふ妙な歌「あぶらやおこんにまけてにげるははちやないかな」と同じだ）百舌の聲（こいつは時によると馬鹿にたく山來る）――あとは靜だ時々王子へ散歩にゆく、小川、漆紅葉、家鴨、さうして柿をかつて來る

定福寺（ちやうふくじ）へはまだ手紙を出さずにゐる中々詩を拵へる氣にならない「定（ちやう）」の字はこの前の君の手紙で注意されたが又わすれてしまつた「定」らしいから「定」とかくそれとも「常（じやう）」かな「淨（じやう）」ではなささうだ

自分でつくる氣になつてつくる詩はある今日でたらめにつくつたのを書く

　叢桂花開落
　畫欄煙雨寒
　琴書幽事足
　睡起煮龍團

どうも出來上つた時の心持が日本の詩よりいゝ日本の詩も一つ今日つくつたのを書く何だかさびしい氣がした時かいた詩だから

　夕はほのかなる暗をうみ
　暗はものおもふ汝をうむ
汝のかみは黒く
かざしたる花も
いろなく青ざめたれど
何ものかその中にいきづく
かすかに
されどやすみなく――
　夕はほのかなる暗をうみ
　暗はものおもふ汝をうむ

もう一度眞山（しんやま）へのぼつておべんたうをたべたいさるとりいばらにも實がなつてさうして落ちた時分だらう山もすつかり黄色くなつたらう赤い土や松はかはらずにゐるだらうが
おべんたうの玉子やきはまつたくうまかつたあめ蝦もたべたい僕はくひしん坊のせゐか食べものを可成思ひ出す

入日空みたる男は土黒埴土(にぐろはに)こねがてにしてゐたりけるかも

かなしかる面輪に似ねとわが捏ぬる埴土もつめたく秋づきにけり

こんないたづらをして半日をすごした事もある油土は弟のを使つた弟はこの頃彫刻家になると自稱してゐるさうして不可思議な動物(人間だか豚だかわからない)の形を拈出してゐる完く語通り拈出してゐるのだから可笑しい

白菊の花なりしかも厨戸にわぎもはひとり花切りしかも

白菊の花を活けつゝあを招(ま)ぐとサモワル守(も)りてありぬわぎもは

うつゝなくあが見守りしも一とせのむかしさびけりあはれ白菊

菊みればかなしみふかしそのかみの菊もわぎももなしもわぎもも

白い菊をみんな誰かどこかへもつて行つてしまふといゝあれは人をセンチメンタルにしていけない實際いけない

ある單純な感情の中でさへ Vanity は無限にあるまして複雜な情緒をや固定した名の下に固定した情緒を豫想するものはブルヂョアにすぎない

人間の性格と周圍とその他百般の事象に Modify される或瞬間と或不可思議な感情よ情緒よそれを知る事は學問にも藝術にも出來ない唯「生活」するだけだ唯體驗するだけだ

殆この手紙をかき出した時には豫期しなかつたある感激に動かされてこの手紙を完る大きな風のやうなそれでゐて形のある光の箭のやうなものが頭の中を通りぬけたやうな氣がする今まで何だか人が戀

しいやうなそれでゐて獨りでゐたいやうな心もちにひたされながら何かしろ何かしろと云ふ聲がたえずどこかでしてゐると思つてゐたそれが今は皆どこかへ行つてしまつたこのまゝで何十年何百年でもぢつとして「たえず變化すれども靜止し流轉すれども恆久なる」一切をみてゐたいやうな氣がする何故だかしらない唯僕の意識の中にはある暗い眼が浮んでゐる何度もそれが近くのを見た眼である僕はこの心もちを失ふのを恐れるこの眼を失ふのを恐れる　かなしいやうな氣もちもする

平和にさうして健康に暮し給へ

龍

六七　〔十二月二十九日田端から。端書、齋藤貞吉宛〕

先日は新宿の方へ御出で下すつたさうで失禮しました久し振りで御目にかゝつて往年の〔四字除去〕を拜見したかつたと思ひます來月から僕たちの連中で雜誌を出すのですがとつて頂けば光榮に思ひます西川中原皆健在今年は卒業する筈です

大正四年十二月廿九日

芥川龍之介

六八　〔大正四年（推定）田端から。恒藤恭宛〕

十二日夜十二時

僕は愛の形をした hunger を恐れたそれから結婚と云ふ事に至るまでの間（可成長い少くとも三年はある）の相互の精神的肉體的の變化を恐れた最後に最卑むべき射倖心として更に僕の愛を動かす事の多い物の來る事を恐れた

しかし時は僕にこの三つの杞憂を破つてくれた僕は大體に於て常にジンリツヒなる何物をも含まない愛を抱く事が出來るやうになつた僕はひとりで朝眼をさました時にノスタルジアのやうなかなしさを以て人を思つた事を忘れないそして何人にも知らるゝ事のない何人にもよまるゝ事のない手紙をかい

てひとりでよんでひとりでやぶつた事も忘れない

僕は今靜に周圍と自分とをながめてゐる外面的な事件は何事もなく平穩に完つてしまつた僕とその人とは恐らく永久に行路の人となるのであらう機會がさうでないやうにするとしても僕は出來得る限りさうする事につとめる事であらう唯恐れるのは或一つの機會であるしかしそれは唯運命に任せるより外はない

僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな氣がする。しかし不幸にしてその新しい國には醜い物ばかりであつた。

僕は醜い物を祝福する。その醜さの故に、僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知る事が出來たからである。しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にまたよく知る事が出來たからである。

僕はありのまゝに大きくなりたい。ありのまゝに強くなりたい。僕を苦しませるヴアニチーと性慾とイゴイズムとを、僕のヂヤスチファイし得べきものに向上させたい。そして愛する事によつて、愛せらるゝ事なくとも、生存苦をなぐさめたい。

この二三日漸く Chaos をはなれてゐたやうな、しづかな、そのわりに心細い狀態が來た。僕はあらゆる愚にして滑稽な虛名を笑ひたい。しかし笑ふよりも先に同情がしたくなる。恐くすべては泣き笑ひで見るべきものかもしれない。

僕は僕を愛し僕を憎むすべての〔五字削除〕と共に大學を出て、飯を食ふ口をさがして、そして死んでしまふ。しかしそれはかなしくも、うれしくもない。しかし死ぬまで夢を見てゐてはたまらない。そして又人間らしい火をもやす事がなくては猶たまらない。たゞあくまでもＨＵＭＡＮな大きさを持ちたい。

かいた事は大へんきれぎれだ。此頃僕は僕自身の上に明な變化を認める事が出來る。そして偏狹な心の一角が愈〻SHARPになつてゆくのを感じる。毎日學校へゆくのも砂漠へゆくやうな氣がしてさびしい。さびしいけれど、僕はまだ中々傲慢である。

龍

六九　〔大正四年（推定）。久米正雄宛（寫）〕

風を引いてよわつた。少しなほつた時引越しの時しまつて見えなくなつた脇差や木刀が出たので、シヤツ一枚でそれを持つて、獨りで立廻りをやつた所が又風をひいて咽をわるくしてしまつた。その爲アラビアンナイツの飜譯が出來さうもない。僕の代に君が引うけてくれないか、熱があつてねてる。

十三日　芥川生

久米正雄樣

大正五年

七〇 〔一月十五日田端から。恒藤恭宛〕

かるたは最近に塚本でとつたその時僕はそこにゐるうまい人たちの中の一人であつた何にしてもかるたと云ふものはあまり一生けんめいにとる氣にはなれないものだもう來年のお正月までとらないだらうこの頃はある easiness を以てある量の仕事のかたがつくので割に愉快にくらしてゐるほんやくもすませた文ちやんは多分もらふだらうこなひだうちの伯母と芝の伯母と二人でみに行つた二人とも good opinion を持つてかへつて來たらしい尤も僕の前では遠慮して悪口を云はないのかも知れないが。僕自身も前より good opinion を持つやうになつた

雑誌が出たから送る僕は同人諸君のどの原稿にも感心しない僕のにだけ好意を持つてゐる寒さがめつきりつよくなつた昨日市村座へ行つたら國太郎の玉織姫がふじちやんによく似てゐた吉右衛門の熊谷が菊五郎の敦盛と玉織姫との屍骸をうす紅に小櫻をちらした母衣と古代紫の母衣とにつゝんで楯へのせて海へ流す時に殊にさう思つた

田端にてうたへる

なげきつゝわがゆく夜半の韮畑廿日の月のしづまんとす見ゆ
韮畑韮のにほひの夜をこめてかよふなげきをわれもするかな
シグナルの灯は遠けれど韮畑驛夫めきつもわがひとりゆく
ぬばたまの夜空の下に韮畑廿日の月を仰ぎぞわがする
ぬばたまのどろばう猫は韮の香にむせびむせびて啼けり夜すがら

韮畑韮をふみゆく黒猫のあのととばかりきゆるなげきか
　東京にてうたへる
刀屋の店にならべし刀よりしろくつめたく空晴れにけり
多の日のかげろふ中に三越の旗紅に身を細らする
日本橋橋の麒麟の埃よりかすかに人を戀ひにけらしな
二伸　今日これから文房堂へゆく神田はよくゆくから今後も買ふものがあつたら遠慮なく云つてよこしてくれ給へ　　龍

七一　〔三月二十七日田端から。端書、恒藤恭宛〕

とても志摩の島などで縹渺とした生活をする暇はない論文と云ふものが不消化なものを食つたあとの胃袋のやうに始終自分を威壓してゐる
　海遠く霞を餐せ小島人
　徐福去つて幾世ぞひるを霞む海

七二　〔四月九日田端から。松岡譲宛〕

大工と蚊とに煩されてゐる君の現狀をそいつはいい氣味だなと云ふ眼で僕は見てゐる實際あのはがきをよんだ時は失笑した越後の大工や蚊は中々話せると思ふ
僕は芋粥を書いてゐる今までの所は大過なく來てゐるやうな氣がするがよみ直さないから覺束ない十二枚でやつと「一」がすんだ「鼻」位には行くかと思つてゐる僕の友だちのうちへ久保万が來て「いつか手前共へ芥川さんがお出になつた時に新小説をごらんになつて『何時これへかけるやうになるか』なんて仰有いましたが今度はいよ／＼お書きになるさうで手前も雀躍にたへません」と云つたさうだ莫迦

にしてやがる君が成瀬に顔をほめられた方がよつぽど氣が利いてゐると思つたなんぼなんでも容容しさが甚しい僕は友たちに「久保田さんにあなたの雀をどりが拜見したいと云つてくれ」と云つてやつた赤木が讀賣の遊蕩文學撲滅論で盛に久保田吉井長田幹をやつつけてる後藤と近松の愚劣を極めてゐるのは言をまたないから問題外におくのださうだしかしあの議論を見ると遊蕩を主材とする小說を否定するのでなくて長田や何かの小說のやうな觀照の態度なり表現の技巧なりを非難してゐるらしいさうするとそれは遊蕩文學と云ふよりもつと外包のひろいものになつて來はしないか赤木の議論をよむとさう云ふ態度や技巧が遊蕩生活以外の材料をとりあつかつた場合にも非難さる可きかどうかわからない僕はあんな事を云ふより文壇の情話的傾向の跋扈を非難した方がいいと思ふ赤木の意もそこにあるのだらうがあの議論はピントが少しはづれてゐるだから逆に非情話的傾向による遊蕩小說は存在の資格を十分持つてゐるその上赤木が永井や小山内を遊蕩小說の中に數へないのは議論の行きがかり上確に不公平だと思ふ　また書く

九月朝　　　　　　　　　　　　　　　　龍

讓　　樣　梧下

七三〔四月(推定)九日田端から。秦豐吉宛〕

久米去り松岡去り成瀨去つて孤影獨り都門にある恰も賓雁の伴を失せるが如し八百八の巷陌既に秋風を動かせば偶〻紅燈の下に半宵の情を娛ましむと雖も孑然たる一身長安宍しきの憾を如何せんや是に於て机に凴り筆を呵して綺語を綴らむとすればこれ亦性來の魯鈍累を成して稿未完らざるにメ切の日徒に近く焦慮千端茫々として自失するに止るのみ寄語す故人健在なりや否や

頃日漫に想ひ恣に書して新演藝募集する所の懸賞脚本の梗概を得たり女主人公は淀君にして歌右衞之に扮すべく副主人公は大野道犬大野主理にして段四羽左之に扮すべし契機は大野父子の同じく淀君に

通ぜし結果としてこの兩副主人公の間に釀されたる嫉妬憎惡及その他父子の感情を描くにあり最後は大阪落城の日にして主理遂に父道犬を殺し淀君を斬らんとして得ず遂に自刃して死し淀君亦烈々たる高樓の猛火の中に嫣然一番男子の愚を哂つて焚死するに完る結構雄大落想清新憾らくはこれを完成すべき時間と勞苦とを斷く事を

赤桁平讀賣に遊蕩文學の撲滅を論ずるや精論旨稍粗なる憾ありと雖も聊以て滔々たる梅花紅綃帳裡の作家を覺醒せしむるに足るものあり桁平は材を柳暗花明の天地に取るを斥く事は寧非を作家の態度に難ぜんとす且桁平の遊蕩小說家を枚擧するや永荷風小薰等を逸して顧ず赤家の竪子一目を眇すと云ふも豈過言ならむや

予昨日再永荷風の「名花」を讀み忽然として一種の藝術的感興を得たり桁平亦之を感ず以て荷風を例外視せんとする乎

「名花」は實に材を蘭燈金釵の境に取るもよく好箇の藝術作品を得べき好例なり「名花」の荷風はかの庸俗哂ふ可き「隅田川」の荷風にあらずその筆を驅るや纖細清楚その想を行るや輕妙辛辣以て泰西名家の作に比肩すべしと云ふも敢て過褒にあらず是に於ても見るべし現代遊蕩文學の弊は作家の態度にあつて取材にあらざる事を

予亦桁平と共に現代に於ける情話的傾向を唾棄せんとすしかも遂に名花を以て瑚璉の一顆となさざるを得ず桁平と異る所以是にあり

目下門を閉ぢて客を避く蓋原稿の〆切日に違ふを恐るれば也爲に故人を叩いて婉約たる情話を聞くに暇あらず卽この尺素を成せり故人幸に魚雁相酬ゆる事あらば幸甚也

十五日以後に於て拜眉の期あらむ乎

忙中匆々艸筆亂毫不恭不恭

九日　　　　　　　　　　　　殘夜水明樓主人

秦　君　梧下

七四　〔五月二日田端から。端書、石田幹之助宛〕

又伺ひを立つる次第に候へども

(1)諸城とは支那のどの邊の町にや

(2)擧人淄川敎諭とは何の事にや

(3)陞𨥉山衞敎授涇縣知縣とは𨥉山衞の敎授にして兼任涇縣の知事たりしものにや　𨥉山衞とは何の名にや

右の三件いづれも淸朝の官制の地名に候へばどうにも素人の手ぎはには行きがたくよろしく御敎示下され度願上候　匆々

七五　〔六月田端から。恒藤恭宛〕

桐陰讀書篇

一

夏づくと桐の木ぬれをゆく雲のをりをりうすくかがよへるかも

二

ゆく雲のかがよひつつもきゆる時桐の木ぬれははるかなるかも

三

夕なびく雲をまもれば桐の木の木ぬれはるけみわが戀まさる

四

桐の葉の一葉一葉に日はなづみその幹白くかぎろひにけり

五
よみすてしギヨッツの上に日は光り蟻くろぐろと頁をよぎる
六
ゆきなづむ蟻を「自由」の横つづりわがよむふみに日の光おつ
七
ワイマアルのギヨオテの家の下部ともわがならなくに放古いぢりする
八
放古いぢるわれとギヨオテと天日の下に生くとふ不可思議もあり
九
蟻はいまギヨオテの立てる肖像（すがたゑ）のふちをわたると日に光りけり
十
桐の木と蟻とギヨオテと一つらに日にかがやくとかなしきものか

口頭試験が六日にある論文はうまく通つた　雑誌をおくる　君の方も忙しかろ

龍

恭　様

七六　〔六月七日田端から。端書、恒藤恭宛〕

「父」は最初ある事實があつた時、僕も君が云つたやうに感銘をうけた。それを moralisch にこじつけたのは、かいた時の心もちと關係者がゐるのとに左右された結果である。僕も今ではあの不自然に誇張された道德的感銘に對していやな氣がしてゐる。さうして二度とあんな事をするもんではないと思つてゐる。それから、もしこのはがきがつく迄に六月の新思潮がついてゐなかつたら早速はがきか

何かで注意してくれたまへ。事によると發送もれになつてゐるかもしれないから。（五月は東京堂の都合で寄贈が皆遲れたのだ）健康を祈る。

七七　〔六月十六日田端から。繪端書、藤岡藏六宛〕

君の方はいつから休みになる僕の方は十五日が試驗の最後の日だそれから一月位東京にゐてそれからどこへかゆかうと思つてゐるまだどこともきまらない試驗は今まで毎日いい加減にうけたから格別苦しくもなかつたお互に文學士になるのだと思ふと可笑しいその内にひまがあつたら來ないか

芥　川　生

七八　〔六月二十一日田端から。端書、藤岡藏六宛〕

夏目さんの所はこの次の木曜に延期してくれたまへこんどの木曜は成瀨が言語學の試驗にしくじつたので藤岡さんの所へ運動にゆかなければならないから

七九　〔六月二十五日田端から。端書、藤岡藏六宛〕

先生の方へは上ると云つて返事をしてくれ給へそれから君を誘ふよりも順路だから僕を誘ひに來ないか（新宿のりかへ）市内へ出て行くのは大迂囘だ

芥　川　生

八〇　〔七月二十五日田端から。恒藤恭宛〕

大へん返事が遲れてすまない新思潮は同人が少ないので萬障をくり合せて原稿をかく必要があるその爲月の上半分は忙しいその上ものを書くのが忙しいと妙に手紙を書くのが億劫になる同じやうな活動

だから原稿を書けば手紙を書く欲も同時にみたされるのだらうと思ふ僕は來月十日頃までは東京を離れられないだからとても隱岐へは行かれないと思ふ第一今年は雜用があつて金を大分使つた松江へゆくのさへ少々覺束ない

僕は來月の新小說へ芋粥と云ふ小說を書く世評の惡いのは今から期待してゐる偸盜と云ふ長篇をかきかけたが間にあひさうもないのでやめた書きたい事が澤山ある材料に窮すると云ふ事はうそだと思ふどんどん書かなければ材料だつて出てきはしない持つてゐる中に醱酵期を通り越すと腐つてしまふ又書く材料に窮するやうな作家なら創作をしてもしかたがない

長安句稿　一

花火

明眸の見るもの沖の遠花火
遠花火皓齒を君の涼しうす
花火やんで細腰二人樓を下る
君が俥暗きをゆけば花火かな
水暗し花火やむ夜の幌俥

七月廿五日　　　　　　　　　　　　　　龍

八一　〔八月一日田端から。端書、藤岡藏六宛〕

新小說のやつを今日からかき出した題は「芋粥」と云ふのにするつもりだその中に君の所へゆかう體がよくなつたら來てもいいまだ今日の外に小說を二つばかりかかうと思つてゐるこの頃は元氣だ

fragment de la vie

明眸の見るもの沖の遠花火

水暗し花火やむ夜の人力車

八二　〔八月十七日田端から。恒藤恭宛〕

Fragment de la Vie

I

夜をあさみかなしかる子はおち方の空をながむと花火見にけり
風かよふ明石ちゞみのすゞしさに灯もけさばやと云ふは誰が子ぞ
つとひらくふところ鏡空のむた花火をうつすふところ鏡
ぬばたまの夜空もとほくかつきゆる花火を見るとかなしきものか
とく帯の絽はうすけれどこの情うすしとばかり思ひたまひそ
夏ながら翡翠もさむしさいなげに眉ひそめつゝ鬢をかくとき
つりしのぶ二上りなしてふる雨の中にいささか青めるあはれ
きこゆるは人の歔欷(さくり)か夜をこめて秋づくままになけるみみずか
かざす袖の絽こそうすけれ空のむたちりちり落つる花火透き見ゆ
わが戀もかかれと見守る遠花火しかすがかなし暗にちるとき
きりぎりすなくや夜ふかくものうげにこのたをやめのかごとするとき
口ずさむ竹枝の歌のあはれさにみづから泣くと云ひにけらずや
ふためかす蝙蝠の羽のくろぐろと絽の羽織するわれを思ひね
見まじきは蝙蝠安の頬つぺたと夕まつ空にとべる物の怪
うたひやむ新橋(しんけう)竹枝みづからを吉井勇に擬すと哂ひそ

龍

II

みつみつし久米はしなしな夏蟬の紗の羽織着てゆきにけるかも
醉ひぬれば節を拍ちつゝ涙して李白をうたふわれをこそ見め
夏まひる菊池は今かひたすらに虱ひねりて綺語を書くらむ
越の海岸の松ふく濱風の光りを戀ふと行けり松岡
浪枕旅にしあれば成瀨はも思出とすらむ日本の女

III

蚊をはらひ又蚊をはらひわがペンの音ききすます夜ふかみかも
黃色の灯もこそゆらげ蚊をはらふわが手ゆ出でしいささかの風
夜ふかくひとり起き出でてのむ水の音のあはれを知る人もがな

○今日から一の宮へゆく九月上旬までゐるつもり以後は千葉縣長生郡一の宮町海岸一宮館へ
○スケッチブックはすぐ出した文房堂からとどいたらう
○君はいつごろ上京する
○藤岡君が出雲の方へ行つた
○たつ前で忙しい昨日までは〔二字不明〕の原稿をかいてゐた

十七日

八三　〔八月二十八日一の宮から。夏目金之助宛（寫）〕

先生

また、手紙を書きます。嘸、この頃の暑さに、我々の長い手紙をお讀になるのは、御迷惑だらうと思ひますが、これも我々のやうな門下生を持つた因果と御あきらめ下さい、その代り、御返事の御心配

には及びません。先生へ手紙を書くと云ふ事がそれ自身、我々の滿足なのですから。

今日は、我々のボヘミアンライフを、少し御紹介致します。今居る所は、この家で別莊と稱する十疊と六疊と二間つゞきのかけはなれた一棟ですが、女中はじめ我々以外の人間は、飯の時と夜、床をとる時との外はやつて來ません。これが先、我々の生活を自由ならしめる第一の條件です。我々は、この別莊の天地に、ねまきも、おきまきも一つで、ごろ／＼してゐます。來る時に二人とも時計を忘れたので、何時に起きて何時に寢るのだか、我々にはさつぱりわかりません。何しろ太陽の高さで、略〻見當をつけるんですから、非常に「帳裡日月長」と云ふ氣がします。それから、甚、尾籠ですが、我々は滅多に後架へはいりません。大抵は前の庭のやうな所へ、してしまふのです。砂地で、すぐしみこんでしまひますから、宿の者に發見される惧などは、萬萬ありません。第一、非常に手輕で、しかも爽快です。さう云ふ始末ですから、部屋の中は、原稿用紙や本や繪の具や枕やはがきで、我ながらだらしがないと思ふ程、雜然紛然としてゐます。私は本來久米などより餘程きれいずきなのですが、この頃はすつかり惡風に感染してしまひました。夜はそのざふもつを、隅の方へつみかさねて、女中に床をとつてもらひます。ふとんやかいまきは、可成清潔ですが、蚊帳は穴があるやうです。やうですと云ふのは、何時でも中に蚊がはいつてゐるからで、實際穴があるかどうか、面倒くさいから、しらべて見た事はありません。その代り、獅嚙火鉢を一つ、蚊帳の中へ入れて、その中で盛に、蚊やり線香をいぶしました。久米の說によると、いぶしすぎた晩は、あくる日、頭が痛いさうです。ではとさうかと訊きますと、蚊に食はれるよりは、頭痛のする方がまだいゝと云ひます。そこで、やはり毎晩、十本位づゝ燃やす事にきめました。頭痛はしないまでも、いぶしすぎると、翌日、鼻の穴が少しいぶり臭いやうです。線香さへなくなれば、もういゝ加減にやめてもいいのですが、こでこて買つて來たので、中々なくなりさうもありません。この頃は、それが少し苦になり出しました。

海へは、雨さへふつてゐなければ、何事を措いてもはひります。こゝは波の靜な時でも、外よりは餘

程大きなのがきますから、少し風がふくと、文字通りに、波濤洶湧します。一昨日、我々がはいつてゐた時でした。私が少し泳いで、それから脊の立つ所へ來て見ると、どうしたのだかゐる筈の久米の姿が見えません、多分先へ上つたのだらうと思つて、砂濱の方へ來て見ますと、果してそこにねころんでゐました。が、いやな顏色をして、兩手で面をおさへながら、うんうん云つてゐるのです、久米は心臟の悪い男ですから、どうかしたのかと思つて、心配しながら訊いて見ますと、實は、無理に遠くまで泳いで行つた爲にくたびれて歸れなくなつた所へ、何度も頭から波をかぶつたので、大へん苦しんだのださうです、さうして、あまり鹹い水をのんだので、もうこれは駄目かなと思つたのださうです。では又、何故そんなに遠くへ行つたのだと云ひますと、女でさへ泳いでゐるのに、男が泳げなくちや外聞がわるいと思つて、奮發したのだと云ふ事でした。つまらない見えをしたものです。事によると、この女なるものが、尋常一樣の女ではなくつて、久米のほれてゐる女だつたかもしれません。女と云へば、きれいな女は一人もゐませんが、黑の海水着に、赤や綠の頭巾をかぶつた女の子が、水につかつてゐるのはきれいです。彼等は、全身が歡喜のやうに、躍つたり、跳ねたりしてゐます。さうして、蟹が一つ這つてゐても、面白さうにころがつて笑ひます、濱菊のさいてゐる砂丘と海とを背景にして、彼等の一人を、ワットマンへ畫かうと云ふ計畫があるんですが、まだ着手しません。畫は、新思潮社同人中で、久米が一番早くはじめました。何でも大下藤次郎氏か三宅克己氏の弟子か何かになつたのかも知れません、とにかく、セザンヌの孫弟子位には、かけるさうです。同人の中には、まだ松岡も畫をかきます、しかし、彼の畫は、倒にして見ても横にして見ても、差支へないと云ふ特色がある位ですから、まあ私と五十歩百歩でせう。それでも二人とも、ピカソ位には行つてゐると云ふ自信があります。

いよいよ九月の一日が近づくので、あんまりいゝ氣はしません。先生にあやまつて頂くよりは、御禮を云ふやうになる事を祈つてゐます。

今日、チエホフの新しく英譯された短篇をよんだのですが、あれは容易に輕蔑出來ません。あの位になるのも、一生の仕事なんでせう。ソログウブを私が大に輕蔑したやうに、久米は書きましたが、そんなに輕蔑はしてゐません。ずゐぶん頭の下るやうなパッセエヂも、たくさんあります、唯、ウエルスの短篇だけは、輕蔑しました。あんな俗小説家が聲名があるのなら、英國の文壇よりも、日本の文壇の方が進歩してゐさうな氣がします。

我々は海岸で、運動をして、盛に飯を食つてゐるんですから、健康の心配は入りませんが、先生は、東京で暑いのに、小説をかいてお出でになるんですから、さうはゆきません、どうかお體を御大事になすつて下さい。修善寺の御病氣以來、實際、我々は、先生がねてお出でになると云ふと、ひやひやします。先生は少くとも我々ライズィングジェネレエションの爲めに、何時も御丈夫でなければいけません、これでやめます。

八月二十八日　　芥川龍之介

夏目金之助樣　梧下

八四　〔八月三十日一の宮から。自筆繪端書、石田幹之助宛〕

久米と二人で一の宮へ來て Vie de Bohème をやつてゐます盛にだべるので隣座敷の客はとうとう中てられて逃げてしまひました

枯るる菊のにほひも砂に蒸す日かな

八五　〔九月三日田端から。淺野三千三宛〕

今君のはがきを見ました

あの天狗は僕も知つてゐます昔西川や中原と夜どほし東京から歩いて御嶽へ登つた時に一しよに行つ

た木本と云ふ男が天狗に敬意を表するんだとか何とか云つてあの鼻を舐めました何でも妙に鹽がからかつたさうですその首がなくなつたのは非常に面白い僕は君のはがきを讀んだおかげで昔の壯遊を思出しました

何でも皆一圓足らずの金を持つて下駄ばきで出かけたんだから亂暴ですおまけに東京から青梅までは五六里だと誰が云ふともなくきめてゐたんだから尙亂暴ですその代り歸りは皆意氣地のないなりをしてびつこをひきひき死なないばかりになつて新宿へ辿りつきましたさうして新宿の僕のうちへ仆れたなり小一日ぐうぐうひるねをして行きましたそれ程僕たちの連中は莫迦の無鐵砲が揃つてゐたんです

君は健在ですか勉强してゐますか

僕は昨日まで一の宮の宿屋でぶら〳〵本をよんだり原稿を書いたり海へはいつたりしてくらしてゐましたそのあひまには畫をかいたり俳句を作つたりしましたさうして本職の仕事よりはさう云ふ事に餘程得意になれるのが愉快でした「砂遠し穂蓼の上に海の雲」と云ふのはその時の句の一つです序にもう一つ御披露すると「枯るる菊のにほひも砂に蒸す日かな」と云ふのがあります菊と云ふのは濱菊です枯るる濱菊とやるとあまり前半が新しくなりすぎるので屬性不明の菊で御免を蒙つてしまつたのです兎に角そんな事をして彼是半月以上ゐましたかへつて見ると東京の空氣が埃くさく煤煙くさいのに驚きます所謂塵務の氣があるのですねこの頃では時々もう少し向ふにゐればよかつたと思ひます

君ももう大學だつたかと思ひますが大學は一高より餘程つまらないからその氣でお出でなさい尤も醫科はさうでないかもしれないが

ぢやあかう云へませう大學生は概して下らないからそのつもりで相手におしなさい下らない人間はどこにもゐるゐるからつて自分を下らないレベルまで引下げる必要は少しもありません下らない奴はどんどん輕蔑してお進みなさい輕蔑は(根據のある限り)美德です

僕もその美德だけは持つてゐます

九月三日

淺野三千三樣　梧下

八六　〔九月六日田端から。恒藤恭宛〕

當分何もしずにぶら〳〵してゐたいと思ふ大學院へははいつたヘルンの居を訪ふ條は非常に面白かつた。それから竹〔殊に根岸〕もよい僕も出雲小品をかきたいと思つてゐる

さかり來て人思ふ（も）われぞ砂山の黄菊濱菊さはなさきそね
すべしらになげく心か夕白む波の穗がくり千鳥とぶ見ゆ
ほのかなるひとはな茄子（なすび）かぎよりて人は遠しと思ひけるかも
珠ひろふ海女のくびすによる水の水明りすとかなしきものか
いさな取海はけむれどきららかに夕澄みにけれ一むら千鳥

イミテエシヨン　オブ　タゴオル
海此岸（かいしがん）に砂の塔つく童子ありその塔の上に二日月すも

六日夜　　　　　　龍

恭　君　梧下

八七　〔九月二十日田端から。助六由緣江戸櫻（すけろくゆかりえどざくら）番附〔明治三十九年五月二十七日午後一時より〕の縮端書、秦豐吉宛〕

この歴史的な畫はがきを一枚さし上げます暑いのに原稿書きで毎日まゐつてゐます
廿日からひまになる豫定外交官試驗なるものはまだすみませんか先日送つて下すつた本は確かに落手しました御手數をかけて甚恐縮です　匆々

八八　〔九月二十五日田端から。勸進帳番附繪端書、秦豐吉宛〕

もう一枚序にさしあげますシュニッツラアーベントは二三枚でよければおひきうけ申しますからその節はおしらせ下さい
中央公論へは新渡戸さんをかいたので社會的反響が僕にとつて不快なものでない事を祈つてます作としてはグルードで駄目二十八秀句はそのうちにお拂ひをします新小說六十錢につき今貧困の極に達してゐます

八九　〔十月八日田端から。端書、恒藤恭宛〕

こなひだは雨のふる停車場で二時間ばかり君を待つたそれからうちへかへつた　夜君のはがきが來た「手巾」は僕はそんなに得意でもないが世評はいい今新小說の爲に小說を書いてゐる　　龍

九〇　〔十月八日田端から。端書、松岡讓宛〕

今午前二時だ今日久米が新思潮を持つてやつて來たさうして夜十時半頃かへつたそのあとでねられなかつたのでカラマゾフをよんだそれから新思潮をよんだ今このはがきを書くのは君の青白端溪をよんだ感銘が消えないうちにと思つて書くのであるあれは非常にいい作そのものの出來もいいがそれよりも書いてゆく君の力量が直下に人に迫つて來る所が恐しいさうしてその力量なるものが僕に云はせれば絕え間なく努力する所から生れて來る根强い力量だそれだから恐しい作そのものの難は描寫上の取捨選擇が十分でなかつたと云ふ憾があるたとへば最後に枯山の心理を書いてあるがあれはあすことより前に書くべきではないだらうかさうして最後は老詩人猗々軒主人のアインザアムハイトで結ぶ方が有力ではないだらうかまださう云ふ氣のする所が一つか二つあつた　がそれにも關らずあれは大へんい

いぐづぐづしてはゐられないと云ふ氣が痛切にした殊に僕は今昔けなくつてまゐつてゐるあしたから勉強だ

九一　〔十月十九日田端から。端書、石田幹之助宛〕

道程の無事を祈る
Obscene Book は外になかつたら石印の一番やすい金瓶梅を買つて來てくれ給へ
右おねがひ旁〻送別の爲に
　青鞋のあとをとどめよ高麗の霜

九二　〔十月二十四日田端から。原善一郎宛〕

先達は函根からお手紙を頂きましてうれしく拜讀致しました
亞米利加に御出の間は御無音にすぎて何とも申訣ありませんあれは手紙のとどくのが遲い事を思ふと何となく書くのが億劫になるのです
この頃僕も文壇へ入籍屆だけは出せましたまだ海のものとも山のものとも自分ながらわかりません
三の谷へは僕も近い間に上りたいと思ひますこちらへも御出で下さい（御出の節は御面倒ながらはがきを下さるやうに願ひますさうしないとうちにゐないかもしれませんから）西洋の畫の話をいろ〳〵伺ひたいと思つてゐます

一月廿四日　　芥川龍之介

原善一郎樣

九三　〔十月三十一日田端から。原善一郎宛〕

拜啓　昨日は行く約束をして行かないで大へん失禮しましたあの朝雨がふつてゐるのに悲觀してぼんやりしてゐると小野がやつて來てお天氣だつたら同行する丈の義俠心を持つてゐたが降るのを見たらそれが消滅したとかう云ひます

そこで僕も少し勇氣が沮喪しました何しろ横濱のどの方角が本牧でそこへゆくのには如何なる方便によつたらいいんだか判然しないいんですから

それからいろ〳〵小野を勸誘して見ましたが何しろ老獪な彼の事ですから中中同行を承知しませんその中にとうとう僕が君へ電話をかけて小野の分まで斷りを云ふ事になつてしまひました　で雨の中を動坂まで行つて自動電話をかけたんですが小野の敎へてくれた長距離電話のかけ方なるものが全然出たらめなのでどうしても君の所へかかりませんそこでやむを得ず電報をうちました

電報では小野の分を傳達しませんでしたからここに書きます彼は來月十二日とかの日曜に僕を君の所へつれて行つてくれる相ですさうして萬事親切に案内してくれる相です

序ながら僕は君の所へ去年の夏矢代と二人でちよつとお庭を見にゆきましたさうして四阿のやうな所で田舍の女のやうな人の沸かしてくれるお湯をのみました

が、どこをどうしてあすこまで辿りついたかまるで覺えてゐません

　ひとはかりうく香煎や白湯の秋

卽興のつもりで書きましたが月並なので弱りました

芥　川　龍　之　介

廿九日

原　善　一　郎　樣

九四　〔十一月四日田端から。原善一郎宛〕

拜復　わざ〳〵御手紙を頂いて恐縮です

明日曜には就職口の相談で横須賀へ行かなくてはなりませんですからそのかへりに時間があつたら伺ひますあてにしずにおまち下さい

書を拜見する好機會を逸するのは至極殘念ですが原稿の〆切期日が迫つてゐたり就職問題が起つてゐたりするのですからどうも意に任せません呉々も遺憾です

矢代におあひでしたらよろしく云つて下さい小野も長距離電話のかけ方を教へるのがでたらめだつた點でせめる價値がありますあの先生にもその旨御傳へ下さい　以上

十一月四日

芥川龍之介

原善一郎樣

九五　〔十一月十三日田端から。菅虎雄宛〕

拜啓　其後は御無音にすぎましたが先生は相不變御壯健の事と存じます今度私は（畔柳先生から御聞き及びでせうが）海軍機關學校の先生になりましたついては鎌倉に住んで横須賀へ通ふやうにしたいと思ひます誠に御面倒を願つて恐縮ですが御近所に賄つきのよい間貸しは御座いますまいか位置は山に近い方よりも海に近い方が望みですさうして坂の下まで行かない所にしたいと思ひますそれから妙な事ですが前の下宿人が肺病や何かだと神經に障りますからさうでない所でないといけません廣さは六疊乃至八疊で結構です辨當は學校で出ますから下宿で食べるのは朝夕二食だけです日曜や土曜は大抵東京へ歸りますからその間も下宿では食事をしませんどうか大體かう云ふ條件でいい所がありましたら御教へ下さいまし赴任するのは十二月一日からですがもしその間に見つかりませんでしたら差當り横須賀で宿屋住ひをしてもいいと思つて居りますが出來るならそれ迄に鎌倉へ移りたいと思ひます勝手ながら右御願ひまでに此手紙を書きました

十一月十三日

芥川龍之介

菅　虎　雄　様

九六　〔十一月十六日田端から。山宮允宛〕

拜復　わざわざ御親切にお世話下すつたのをお斷りするのは至極恐縮ですが前に引受けた向陵社の飜譯さへ持ちあつかつてゐる際ですからやむを得ませんどうか不惡御恕し下さい最近に海軍機關學校へ奉職することになりましたから今後は多分鎌倉にすみますそれについては色々畔柳先生の御盡力を煩しましたとりあへず御返事まで　以上

十一月十六日　　　　芥　川　龍　之　介

山　宮　允　様

九七　〔十二月二日鎌倉から。繪端書、松岡讓宛〕

ここへ來た八疊の間でちやんとしてゐる授業は火曜から　あの何とか漆を塗つてくれないかあいつはよく利くゆうべ獨歩の「たき火」と云ふ小品をよんで涙をこぼした夕がたの雨のふつてゐる海のけしきはべらぼうにさびしい鎌倉には一種のＳＣＨＡＮ多し

二伸「しゆつたい」（デキル、オコル等の意）とは本字でどうかくかをしへてくれたのむ

九八　〔十二月三日鎌倉から。久米正雄宛（寫）〕

全速力で小說を書いて居る中々苦しい第一朝の早いにはやりきれないぜ六時におきるんだからな久しぶりで辭書をひいて譯を考へてゐると一高時代を思ひ出す

鎌倉の物價の高いのにはあきれかへる何でもぼるのにはかなはない人間もあゝ虛心平氣でぼれるやうになるには餘程修行が入るだらう駄辯慾絶對に不充足

二伸赤木君の宿所をしらせてくれ

鎌倉四首

齋藤茂吉調（モツク採り）

宵月は空に小さし海中にうかび聲たき漁夫の頭

北原白秋調

漁夫の子ＯＮＡＮＩＳＭしてひるふかし潟はつぶつぶ水はきらきら

吉井勇調

夕月夜片眼しひたる長谷寺の燈籠守もなみだするらむ

與謝野晶子調

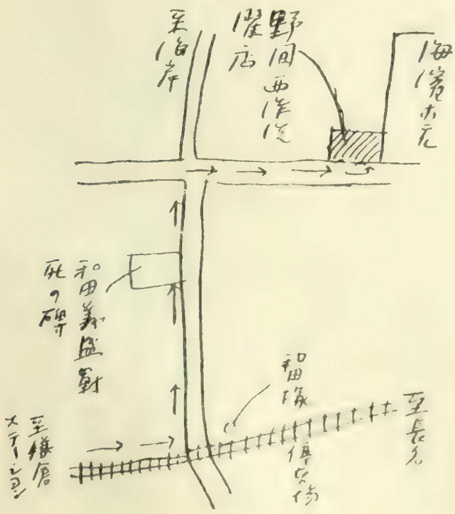
星月夜鎌倉びとの戀がたり聞かむととべる蚊喰鳥かな

十二月三日　鎌倉にて　芥川龍之介

久米正雄様

九九〔十二月五日鎌倉から　端書、松岡讓宛〕

菊坂の醫者の所へ行つてプロタと丸藥とを一週間分づつもらつて持つて來てくれ代はこつちへ來てから辨償するそれから丸藥の方は水曜一ぱいしかないんだから君がくるより先へ小包で送つてくれたのむどうも經過が悪いので悲觀してゐるこなひだの藥は送つたらうね僕の所は和田塚の電車停車場からすぐだ和田塚までは電車の線路を歩いてくれば來られるからその先を圖に



する（線路は通行禁止の札が立つてるが歩いて差支へない）

一〇〇　〔十二月十三日鎌倉から。芥川文宛〕

お手紙二通とも拜見しました難有う毎日さびしく暮してゐる身になるとこれほど嬉しいものはありません今東京からかへつたばかりです東京へ行つては二晩つづけて御通夜をしてそれから御葬式のお手傳ひをして來ました勿論夏目先生のです僕はまだこんなやりきれなく悲しい目にあつた事はありません今でも思ひ出すとたまらなくなります始めて僕の書く物を認めて下すつたのが先生なんですからさうしてそれ以來始終僕を鞭撻して下すつたのが先生なんですから

かうやつて手紙を書いてゐても先生の事ばかり思ひ出してしまつていけません逝去されたあくる日に先生のお孃さんの筆子さんが學校へ行かれたら國語の先生の武島羽衣が作文の題に「漱石先生の長逝を悼む」と云ふのを出したさうですさうしてそれを黒板へ書きながら武島さん自身がぽろ／＼涙をこぼすので生徒が皆泣いてしまつたさうですそれから又先生の主治醫の眞鍋さんは醫科大學の先生をしてゐるんですが大學生は皆大山さんの容態なぞは一つもきかずに先生の病狀ばかり氣にしてききに來たさうですさうして眞鍋さんが先生を診察する爲に學校を休むからと云ふと大學生は皆口を揃へて「自分たちの授業なぞはどうでもいいから早く行つて夏目先生の病氣をなほして上げて下さい」と云つたさうですさう皆に大事に思はれてもやつぱり壽命は壽命で仕方がなかつたのでせう實際もう一年でも生かしてあげたかつたと思ひますが　何だかすべてが荒涼としてしまつたやうな氣がします體の疲勞が恢復しきらないせゐもあるのでせうあした早く起きなければなりませんからこれでやめます

匆々

十二月十三日夜　芥川龍之介

塚本文子様　粧次

一〇一 〔十二月十七日鎌倉から。松岡讓宛〕

精神的にも肉體的にも疲勞したといふか何だかぼかんとしてゐる尤も原稿は書きつゝあるが甚遅々としてゐて進まない時々菅さんの所へ行くので少々法帖趣味を解して來たこれから追々あてゝやる單に智識のみならず己の字も着々としてうまくなりつゝあるこの手紙ではわからないが
一體夏目さんは己たちの爲に少し早く死にすぎたねこの頃痛切にさう思ふ
それから丸藥がなくなつたんで悲觀してゐるんだが菊坂の例の醫者の所へ行つて一週間分貰つて何か紙箱へ入れて送つてくれないか代は廿二日にかへるからその時拂ふこいつは大至急やつてくれ一回飲まないとどうも神經で病狀がどん／＼昂進するやうな氣がして仕方がないからどうか早にたのむ
菅さんと昨日宗演老漢にあひに行つた鮟鱇によく似てゐる小さな唐畫をかけた書齋が甚閑靜でいい尤も宗演は金口の煙草を吸つたりチヨコレートの銀紙をむいて食つたりするぜあれは何だかインコングラスだそれから夏目さんの爲に歸源庵へ行つた今は無住だが修竹老梅二つながら蕭條として非常によかつた今度君が來たら案內する　藥おねがひ申す　以上

十七日朝　龍

松岡君

一〇二 〔十二月十九日鎌倉から。恒藤恭宛〕

就職轉居それから夏目先生の病氣最後に先生の逝去そんな事情で今までは何一つ落着いて出來なかつたその爲つい手紙をかく機會もなかつたやうな次第である君の手紙は確に落手したさうして大へんいい心もちがしたあれだけの事をあのまゝ書いても小說になりさうな氣がする君から見るとこの二三週間の僕は大分いろいろな苦しい目にあはせられた先生の死顏を見た時の Shock は未だありありと覺

えてゐる鎌倉は淋しい菅さんの所へよく行つては書談を闘はすおかげで法帖趣味はかなりわかり出した二三日前にやはり菅さんと二人で宗演老師をたづねた序に夏目先生が籠つた事のある歸源庵へ行つて見た萬法歸源と書いた門の額から修竹と疎梅とを點綴した庭まで皆氣に入つた
ここへ來てから變なゆとりが出來た松林の中や禪寺の庭をぶら〳〵歩いてゐても一向退屈しない時によると往復二里近くの道を圓覺寺から要(カナメ)山の方まで散歩する尤もこれは百般の塵勞に忙殺されなくなつた最近の事だが。これから落ついて仕事にとりかゝりたい雅子(まさこ)さん――と云ふより奥さんによろしく

十二月十九日　　　　龍　之　介

恭　様

二伸　僕は廿二日東京へかへるさうして一月九日までゐる

一〇三　〔十二月二十日鎌倉から。久米正雄宛(寫)〕

君が來るかと思つて待つてゐたが來ないので少し失望した、少しだよ。今力餅をくひながら小説をかいてゐる、鎌倉權五郎のエネルギイを借りようと思つて

十二月二十日朝　　　　龍

久米正雄様

一〇四　〔十二月二十一日鎌倉から。松岡讓宛〕

とうとう出來なかつた、「指」と「いか物」と「槍沙汰」と三つかきかけて、三つとも失敗した。やになつちまふ。六號を送る、もう少し書きたい事があるが時間がない。何だか悲觀しちまつた。

廿一日朝　　　　龍

一〇五　〔大正五年（推定）田端から。芥川文宛〕

文ちやん
少し見ないうちに又脊が高くなりましたねさうして少し肥りましたねどんどん大きくおなりなさいやせたがりなんぞしてはいけません體はさう大きくなつても心もちはいつでも子供のやうでいらつしやい自然のままのやさしい心もちでいらつしやい世間の人のやうに小さく利巧になつてはいけません××××のやうになつてはいけませんあれではいくら利巧でも駄目ですほんとうの生れたままの正直な所がないからいけませんあれの持つてゐるのはひねくれたこましやくれた利巧ですあんなになつてはいけませんすなほなまつすぐな心を失はずに今のままでどんどんおそだちなさい
それはむづかしい事でも何でもありません何時までも今のままでいらつしやいと云ふ事です何時までも今のやうな心もちでゐる事が人間として一番名譽な事だと云ふ事です私は今のままの文ちやんがすきなのです今のままの文ちやんなら誰にくらべてもまけないと思ふのです

えらい女――小説をかく女や畫をかく女や芝居をかく女や婦人會の幹事になつてゐる女や――は大抵にせものですえらがつてゐる馬鹿ですあんなものにかぶれてはいけませんつくろはずかざらず天然自然のままで正直に生きてゆく人間が人間としては一番上等な人間ですどんな時でもつけやきばはいけません今のままの文ちやんは××××を十人一しよにしたよりも立派なものです何時までもその通りでいらつしやいそれだけで澤山ですそれだけで誰よりもえらうござんす少くとも私には誰も外にくらべものがありません
これはおせじではありません私は文ちやんに嘘なぞは決してつかないつもりです世間中の人に嘘をつ

く必要がある時でも文ちやんにだけは嘘をつかないつもりです私の云ふ事をお信じなさい私も文ちやんを信じてゐます人間は誰でもすべき事をちやんとして行けばいいのです文ちやんもさうしていらつしやい學校の事でもうちの事でもする丈をちやんとしていらつしやいしかしそれから何か報酬をのぞむのは卑しいもののする事です學校の事にしてもいい成績をとるために勉強してはいけませんそれはくだらない虚榮心です唯すべき事をする爲に勉強するのがいいのですそれだけで澤山なのです成績などはどんなでもかまひません成績は人のきめるものです人に自分のほんとうの價値は中々わかりませんですから成績なんぞをあてにするのはつまらない人間のする事です

世間には金と世間の評判のよい事とばかり大事にする人が澤山あります又實際金持や華族がえばつてゐますしかし金持のえばれるのは金がえばるのですその人間に價値があるからではありません華族がえばるのもその肩書がえばるのですその人間がえらいからではありませんえばつてゐる華族や金持が卑しいやうに華族や金持をありがたがる人間も卑しい人間ですそんな人間の眞似をしてはいけません學校の成績も同じ事ですさう云ふ虚名をあてにしてはいけません自分のほんとうの價値をあてにするのです自分の人格をたのみにするのですすなほな正直な心を持つた人間は淺野總一郎や大倉喜八郎より神樣の眼から見てどの位尊いかわかりません

お互に苦しい目や樂しい目にあひながら出來るだけさう云ふ尊い人間になる事をつとめませうさうして力になりあひませう

そのうちに兄さんとでも遊びにいらつしやい私は毎日忙しいさびしい日をくらしてゐます出來るだけたびたび文ちやんにもあひたいのですがさう云ふわけにも行きませんきつといらつしやい待つてゐますみんなで文展へ一度行きませうかこれでやめます

大正六年

一〇六〔一月二日田端から。江口渙宛〕

今日鎌倉から轉送して來た星座を拜見しました尤も灰野さんの飜譯はよみませんがあとはみな一息によみました中ではあなたの蓋が群を拔いてゐるやうですね天刑病者と蓋と云ふ幷べ方は稍〻コンベンショナルに墮ちる傾がありますがその傾がある丈それ丈又必然さがあるやうですそれからスタイルにぐんぐん押して行く力強さがあるのに驚きました佐藤君のものはモルナアでも書きさうな氣の利いたものですがあの作品の中の「日本」と「西洋」とがどうもぴつたり合はないやうな氣がしますそれでもあの小品を讀んだ時に私は思はず微笑しましたあれを書く作者の心もちは幾分か私にも理解出來さうな氣がしますから久保君の小說には日本の自然主義のナツハシユマツクがあるやうです木村君のは木村君らしいものでした失禮ながら二つとも今の私にはあまり興味がありません思つた儘を亂暴にかきつづけました御哂ひ下されば幸甚です

一月二日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

江口渙樣

一〇七〔一月五日田端から。菅忠雄宛〕

拜啓　御手紙難有うございました何も鎌倉の事を忘れたわけではありません唯人に訪ねられたりして匆忙とした生活をつづけてゐる丈ですその爲に落ちついて手紙一本書く暇さへありません今書いてゐるこれが手紙らしい手紙を書く第一の手紙ですこの正月に私は大阪朝日新聞へ妙な短篇を一つ書きま

した文章世界のと新潮のとは君も知つてゐるでせう所がその三つが三つ共氣に食はないので少々悲觀してゐます尤も悲觀してゐると云つても自分に對しての問題で人の作品と比較して惡いと思つてゐる訣ではありませんですから人が惡口を云へば腹を立てます

忠雄さんが東京へ出てこられないとは困りましたねその內にうちへ子供たちを集めてかるたでもとらうと思つてゐましたさうしてその時忠雄さんが東京へ出て來られると大へん都合がいゝと思つてゐましたぢやあ駄目ですね忠雄さんの俳句はあれで結構です僕なんぞのやうな技巧派よりあなたのやうな態度で作る方がいい句が出來さうです精々御作りなさい何しろ東京の寒いのには驚きます殊に夜は非常に風がつめたい手水鉢の水は毎朝もう凍ります皆さんに殊に高ちやんによろしく　以上

五日朝　芥川龍之介

菅忠雄樣

一〇八　〔六年(推定)一月八日田端から。藤岡藏六宛〕

九日の午後に鎌倉へゆきますですからもしお金の都合が出來たら同日の午前に僕の所へ持つて來て下さいもし都合がつかなかつたらあとで書留にして鎌倉へ送つて下さい鎌倉の宿所は御存知の事と思ひます

八日　龍

藏六君

一〇九　〔一月十八日鎌倉から。松岡讓宛〕

雜誌の新年號をいろいろよんで見たその感想を書いて駄辯慾充足の手段にしようと思ふ太陽の「乾いた心」と云ふ白鳥の小說は可成うまいそれつきりのものだけれど整然と書けてゐるあの位の腕があれ

ば材料次第で恐ろしいものが書けるにちがひない序があつたら讀んで見給へその後で「日は輝けり」をよんだから氣の毒になつたむだも不足も餘計眼についたからだらう第一力のラックが不思議だつたあれ程パウアフルなる可き事件を書いてゐるのに。文章もずゐぶんまづい。が、全體として、貧しき人々の群」よりはよくはないかと思ふ谷崎のは二つともくだらないものだ詩」と云ふ語が日本ではあまり容疎をかくす四天（よてん）になりすぎるひきぬくと必面（つら）あかりでナッシングが宙乗りをするんだからかたはない「日本武尊」にはいやに大きな所があるそこが身上だ新形式とか何とか云ふのはこじつけた屁理窟にすぎない、運命觀とか何とかと云ふのもくだらない批評家のさかしらだ買つてやれるのは武者の大きなつかみ所にある大きく自分の感情を生かした所にある唯日本武尊の女に甘い所は武者の女に甘い所をリフレクトしすぎて少し可笑しくなつた美夜須姫との關係を橘姫にはなす所なぞは可成虫がよくつて愚劣だと思ふ星湖の「お歌さんの幻影」と云ふのは僕には謙遜すれば不可解だしなければ愚作だ一體星湖と云ふ男はほんとうにあれ程頭の惡い男なんだらうか田山のは皆駄目だね中央公論の坊主と藝者との話なんか俗惡極るあいつの自然主義を標榜して自然主義の小説が書けないのは禿頭が毛はえ藥の廣告をしてゐるやうなものぢやないか里見の「失はれた原稿」も駄目だあれこそ書きなぐりだね近松の「女難」は恐れてよまない長田の「海月寺」にはあてられた何を書いてゐるんだか恐らく當人にもわからないのにちがひない僕が竹のや主人なら「海月寺ゆゑくらげに似て何ともえたいのしれぬものと申すべし」とか何とか云つてやる德田さんのはとりつき場がないので未だよまない水上のは半分で失敬した事に滿足してゐる早く黑潮と新公論とが見たいが送つてくれるといいと思つてゐる

からやつてずつとよんで見たら何だか心細くなつたあんまり周圍が貧弱だから。（僕の中村孤月君に贊成するのは恐らくこの一點だけだらう）こなひだユーゴーがノートルダムドパリを書く所をよんで感心したつけ十二月一日の寒さに窓もあけたままつめたいのも何も忘れて書いたんださうだ何しろあんな途方もないものを一年たたない中に書いちやつたんだから悲觀するそれから何とか云ふフランス人

の書いたメモアに或日ユーゴーが自分で紙とインキを澤山かつて行つたのでどうしたんだらうと思つたら翌日からノートルダムを起稿したと云ふ所があつてやつぱりべらぼうによかつたあんな景氣は文壇にも個人々々の作家にもないね先生が始めて小說を書き出した時などはさう云ふ景氣だつたらう僕は高等學校にゐた時のやうにむやみに本をよんでゐる何だか自分にもわからないがむやみによみたいからよむ今シルレルのロイベルをよんでゐるよその前にホフマンのへんてこな話をよんで少し怪談が書きたくなつたが見合せたハウフの話なるものも今度始めて少しよんだ兎に角名のあるやつは皆相當にうまくつていやに自由に行きたい所へ行つてゐんだから叶はないちよいと有名な奴でもさうなんだからなあこの頃二つ俳句を作つたから書く

寫生

霜どけに守衞の見る龍舌蘭
日暦の紙赤き支那水仙よ

十八日夜　　龍

松岡讓樣

一一〇〔一月二十九日鎌倉から。原善一郎宛〕

拜啓　昨日は松井老人同道にて參上色色御馳走になり難有く御禮申上げます
瑞魔天を見た事は一生わすれませんあんな甚大な感動をうけた事は今迄殆ないと云つてもよい位です
あゝ云ふ所へゆかなければ駄目です少くとも行かうとしなければ
尤も行かうと云つても今の人間には行かれないのかも知れませんが
何にしろ大へんなものです又三溪園小集の時には上りたいと思つて居ります三溪園そのものの冬枯も甚面白く思ひました

即興
笹鳴くや横笛堂の眞木林

以上

一月廿九日

芥川龍之介

原善一郎様

一一 〔二月八日鎌倉から。夏目鏡子宛〕

奥さん
久米や松岡が泊りに行つたり何かしてゐるのに僕獨り安閑と鎌倉にゐるのは何だかすまないやうな氣がしますからこの手紙を書きます
先達は明暗や寫眞を難有うございました確に久米から頂きましたこなひだも東京へかへりましたが原稿の〆切を控へてきゆう〳〵云つてゐたので上れませんでした今でもきゆう〳〵云つてゐますさうして時時先生の事を思ひ出します
今までよく皆に惡く云はれた小説で先生にだけほめて頂いたのがありますさう云ふ時には誰がどんな惡口を云つても平氣でした先生にさへ褒められればいいと思ひました小説を書いてゐると何よりもこの事を思ひ出します鎌倉にゐると淋しいので閉口します學校も格別面白くはありません時々まちがつた事を敎へて生徒につつこまれます生徒は皆勇猛な奴ばかりであらゆる惡德は堂々とやりさへすれば何時でも善になるかの如き信念を持つてゐます(事によるとこの信念は軍人の間に共通な信念かもしれません)だから私のあげ足をとるのでも私を凹ますのでも堂々とやつつけられますこんどの九日會は金曜になりますから出られないでせう土曜日は朝授業がありますから
奥さんは松岡の書いた御連枝と云ふ小説をよみましたか暇があつたらよんで下さい傑作ですから

それから久米の鐵拳制裁なるものも彼の道樂記念として讀んで下さい
今飯を食つたばかりです腹が苦しい程はつてゐますさうしてこれを書いてゐると自然に健啖な奧さんの事が思ひ出されます　以上

二月八日　芥川龍之介

夏目鏡子様

一一二〔二月九日鎌倉から。恒藤恭宛〕

君はどうしてゐるボクは相變らず本職と別職との間にはさまつてきゆう〳〵云つてゐる雅子さんも御變りなからうね正月に牛込の方へ賀狀を上げたいと思つたが宿所がわからないので見合せた
その中に少し長いのを書きたいと思つてゐるがまだまとまらない菅さんと時々書談をやる菅さんの子供とは親友になつた皆お母さんのないせゐか人懐しい鎌倉はいいねここで永住してもいいとだん〳〵思ひ出した宗演のゐる寺なんか至極閑寂だ　疎梅　修竹　清流　淺沙　苔石　蕭寺　佛塔と云ふやうな漢詩の小道具が鎌倉にはみんな揃つてゐる
この頃原の所で繪をみて以來大に日本の人を尊敬し出した昔の日本人は大分えらい天平期の奴はその中でも殊にえらいあの時分の數名の書家にくらべると雪舟さへ小さくなる古畫と一しよに雅邦觀山を見たらまるで見られなかつた
ボクはその後十七字をヒネクル癖がついた

日暦の紙赤き支那水仙よ
中華有名樓の梅花の蘂黃なり
柚の實の明るき古寫本を買ひし

學校所見

霜どけにあり哨兵と龍舌蘭と
炊事場の飯の香に笹鳴ける聞きしか
二月九日夜　　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

一一三　〔二月十七日鎌倉から。山宮允宛〕

今日英詩鈔を大體拜見しましたヴェルリイブルの先生たちのはまだよみませんが　中ではやつぱりイエーツの〝羞らふ羞らふ〟が一番名譯です中でなくとも日本の譯詩中でも名譯ですA・E・といふ先生は非常に特殊な技巧家ですねしかし思想は存外月並な點もありますねグレーヴス先生は非常に愉快ですね少しデリカシイが欲しい時がありますが　ナイヅさんやシマンズ先生には今更何も云ひませんトドハンタアと云ふ先生の小曲もアイルランドの江戸子のやうな勢のいい所があつて結構ですそれからよみながらこれは誤譯でないかと思つた所も少しありますたとへばA・E・の Truth の二行目の deed はやはり splendid deed ぢやないでしようか、 reality ではどうもあとへのつながりが悪いやうです hero は功業をたてた氣でゐるが豈計らんや功業なる眞理が後人には邪魔になるんでせうそれから Graves の Rose and Rue の五行目にある The gard'ner はマガイヤではありませんか（The とありますから）花屋の息子なるマガイヤ君がそばに立つてゐて花を四つくれたんでせう序にその次のスタンザになる to speak your damask cheek の訛も to speak は as to としてはいけますまいか普通の語法ではさうするやうですがさうしてその方が無理なくわかりさうですが。その外シマンズ先生のヴェニスの itself beholding from itself aloof も日本語では逆に譯した方がよくはないでせうかこれはほんの心もちの問題ですが序に書きますから云ふ心もちの問題は外にもう少しありますがこれで代表させてやめておきませう
以上はほんの無責任な考ですから重く見ないで下さいさうして僕の方の誤譯だつたら笑つて下さい僕

は今頭が混沌としてゐますですから碌な事は書けも考へも出來ません　以上

芥　川　生

山　宮　様　梧下

一一四　〔二月二十六日田端から。端書、菅忠雄宛〕

體の調子が惡いので學校を休む事にしました水曜頃歸ります

廿六日

芥　川　龍　之　介

一一五　〔三月五日鎌倉から。池崎忠孝宛〕

色々御配慮に與つて難有う早速承知します尤も今後十日ばかりは中央公論で忙しいのでちよつと阿蘭陀書房氏にも御眼にかゝれません勿論印税でです八分でもよろしい唯著者にくれる本をもう五部もましてくれると猶いいんですがさうゆきますまいか右とりあへず御返事まで

三月五日

龍

池　崎　忠　孝　様

一一六　〔三月九日鎌倉から。江口渙宛〕

拜啓　毎度星座を難有うこの前のをよんだ時にすぐ手紙をかいたんですが途中でやめましたこんどのはまだよまないからこの前の事を書きます岡目八目だと思つて笑つてよんで下さい「貴様は國賊だ」が矢張お世辭でなく一番いいやうです　が作自身は途中から使ひ出した仄筆によつて大分效果が弱められてゐはしませんか馬車の落ちる所迄と同じ行き方でどこ迄も正筆で夜逃げまでまつすぐに書いた方がもつと力強くなりさうな氣がします萬造寺君のは少し困りました久保君のは文章世界情調があり

ます木村君の半處女は廣津和郎君がほめゐるさうですが僕にはどこがいいかわかりません一體僕は木村君とは最縁の遠い人間らしいやうです佐藤君が小說を書かないのはさびしい今月フランスの人生悲劇の譯が出てゐますがあれはつづかむ事を祈りますおしまひの方が殊にいい作品ですからさうしていろんな暗示を含んでゐる作品ですから

それから君の了齋評には贊成です實際ミラクルはもつと長く書く氣でゐたんですがいろんな事に妨げられて時間がなくなりあんな風に壓搾してしまつたのですあれも久米の罪です暇があつたら書き直したいと思つてゐますがどうなるかわかりません僕は今中央公論を書いてゐます黑潮の誤植に弱つたので大に原稿をきれいに書く算段をしてゐますが中々うまく行きません出來たらよんで頂きます今迄と少しちがつた行き方をしてゐるものですこの間又山椒大夫をよんでしみじみ鷗外先生の大手腕に敬服しました僕は二度よんで始めてうまさに徹する事が出來たのですあのうまさはとても群衆にはわからないでせうああいふ所まではいりこまなくつちや駄目ですねえこれはふと思ひついたから書き加へます

三月九日　龍

江口様　梧下

一一七〔三月十五日鎌倉から。端書、松岡讓宛〕

深夜の愚癡

小說をわが書きをへずまゐりゐる夜半をはるかに鷄もこそ啼け
中央公論はじまりしよりの駄作にもなりなむとする小說あはれ
手も腰も痛くなりたる苦しさにつところぶせば夜半をなくか鷄
ぼんやりとしたる頭をもちあぐみ聞き入りにけり夜半のくだかけ

今にして思へば久米の「嫌疑」は傑作なるかなとかこちぞわがする

一一八 〔三月二十二日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

はがきで失敬阿蘭陀書房氏に都合がよかつたら今度の月曜の午前に來るやう御云ひ下さいませんかひまだつたら君もどうです

龍

一一九 〔三月二十七日田端から。端書、菅忠雄宛〕

拜啓又々流行性感冒に犯され發熱39.6より38.3の間に呻吟致し居候へば猶二三日は臥床致す可く御序の節野間へ其旨一寸御知らせ下され度願上候

一二〇 〔三月二十九日田端から。松岡讓宛〕

今日鎌倉から回送して來た君の手紙をみた床の上でスッパイつばきをのみこみながらよんだまだ體の調子がほんとうでない學校も永久にやめちまひたい氣がする創作も氣のりがしない唯かうやつてボンヤリ生きてゐる丈でそれ丈で可成苦しいやうな氣がするそれ丈で生きてゐる義務を果してるやうな氣がする「偸盗」なんぞヒドイもんだよ安い繪双紙みたいなもんだ中に臨月の女に墮胎藥をのませようとする所なんぞある人は莫迦げてゐると云ふだらうその外いろんなトンマな嘘がある性格なんぞ支離滅裂だ熱のある時天井の木目が大理石のやうに見えたが今はやつぱり唯木目にしか見えない「偸盗」も書く前と書いた後とではその位の差がある僕の書いたもんぢや一番惡いよ一體僕があまり碌な事の出來る人間ぢやないんだ

熱が高くなつた時(一度ある一度は久米と赤木が來たあとで)は死にさうな氣がしていやになつた死ぬ

としたらアンマリくだらなさすぎるから　あんまり今までの僕のやり方が馬鹿すぎるから　何だか考へも書く事も秩序立たないやうな氣がするまだ疲れてゐるせゐだらうそれでもこなひだ病間にサイーて詩を一つ作つたよ

山閣安禪客
經淋世外心
空潭煙月出
處々聽春禽

それから詩をつくる氣にもなれない唯漫然と空バカリ見てゐる何だか情無くつていやになるよ

廿九日　　龍

松岡君

一三一　〔四月五日鎌倉（推定）から。佐藤春夫宛〕

拜啓　今日汽車の中で、星座の今月號をよみました、さうしてあなたの六號をよんで　大に恐縮しました　褒めて頂くのが難有い以外に　恐縮した理由があるのです

この手紙は　その恐縮した理由を説明したいから書くのです――あなたは　僕と共通なものを持つてゐると書いたでせう　僕自身もさう思ひます　或はあなたの小説をよんだと云ふ事が、僕の小説を書き出したと云ふ事に影響してゐるかも知れません、と云ふ意味は、あなたの小説に感化されたと云ふ事ではなく、あなたの小説を見て、僕が小説を書くのに幾分か大膽になれたと云ふ意味です　かう云ふものを書く人もあると云ふ事が、僕をして僕の作品を發表するのに　多少氣を強からしめたと云ふ意味です　あなたは、これを僕のお世辭だと思ふかも知れません　が、お世辭として役立つ程、僕はこれを確定した事實として、云つてゐるのではないのです　兎に角あなたの小説を讀んで、僕が何等

かの意味で親しみを感じた事は事實です　さ〔う〕してその親しみを　圓光の昔からあの犬の話の今日まで持ちつづけてゐる事も、事實です　が、僕が共通なものを持つてゐると思ふのは、それだけではありません　僕もあなたのやうな完成慾を持つてゐます

僕は以前に　この慾の爲にディレッタントで一生を完るより外に仕方がないと思つた事がありましたさうしてその事に一種の得意をさへ感じた事がありました　勿論その中には、完成慾以外に、リディキユールな位置に身を置きたくないと云ふ見得も交つてゐたでせう　が大部分は　確に漢語で云ふ眼高手低の心もちに祟られてゐたのです

それが　ふとした機緣で勇猛心を起す氣になつたのです　勇猛心と云ふと、大に自贊してゐるやうで恐縮ですが、まあ猪突の勇氣を出したのです　これも事によると一時の氣まぐれでうつちやつて置けば二三ケ月で消滅する性質のものだつたかも知れません　が友だちとか先輩とかが、それを煽動した爲に、とうとう今日まで　その臆面なさを持ちつづけてしまひました

しかし未に完成慾の祟りを超脫した訣では毛頭ありません　寧、何もしなかつた昔よりは一層その爲に苦しめられてゐます　ですから僕は僕自身の作品に關して、傲慢でもあり謙遜でもあり得るのです僕の藝術的理想から云へば、僕の今書いてゐるものの如きは實に憐む可き氣がしますが、それでも有象無象に何とか云はれると　腹を立てない訣には行きません――かう云ふ心もちが僕は存外あなたにもありはしないかと云ふ氣がするのです　さうしてさう云ふ點でも　あなたと僕との間には　共通なものがありはしないかと云ふ氣がするのですどうです　さう思はれませんか

もしさう思はれないにしても　假にさう思はれるとして、先をよんで下さい――するとあなたの僕論なるものは　大體に於て僕自身僕の藝術に對して持つてゐる毀譽褒貶(もし幾分の己惚れが許されるなら)と同じ事になる訣です、さう云ふ議論を活字で拜見すると云ふ事は、多少僕にとつて氣味の悪い事にちがひありません　と同時に愉快な事にもちがひありません　さう云ふ意味で　僕はあの六號

をよんだ時に大に恐縮した次第です
僕もあなたのやうに ヒユマントラヂェディを譯さうと思つた事があります それから齊藤君の歌にも 恐らくあなたと同程度の推服を持つてゐます 唯犬に對してだけは 全然あなたと同感が出來ません 僕はストリントベルクと共に犬が大きらひです
僕はこれだけの事が云ひたくて あなたにこの手紙を書きました さうしてここまで書いた時に 始めてあなたにかう云ふ手紙を上げると云ふ事が 失敬ではないかと云ふ氣がし出しました これはあなたと僕とがまだ口をきいた事もないのに氣がついたからです しかしそこの所はあなたが堪忍して下さる事として 御免を蒙る事にします 僕の我儘なのを怒らないで下さい
それから我儘序に、もう一つおねがひします 僕を流行兒扱ひにするのはよして下さい 實際人氣なんぞは少しもありません 大抵の人にはイカモノだと思はれてゐます 僕はこの頃存外世間には 中村孤月君と說を同じくする人の多いのを知りました
あなたが犬さへ縛つて置いて下されば おたづねする氣もあるのですが、この二三週間は久原稿を書くのに追はれさうなので 當分はさうも行きません
この調子で書いてゐると はてしがありさうもありませんから、この邊で切り上げます 以上

四月五日朝　芥川龍之介

佐藤春夫樣

二伸 Sqq は Sequ と同じで Sequentibus の略です 辭書に in the following places の事だと出てゐる筈です 僕は前にしらべた事があるので、差出がましい事ですが 御しらせします

一二二（四月二十四日鎌倉から。端書、松岡讓宛）

オランダへはその旨云つてやつた（久米がゆくなら前以て行く日を北原君に通知しとくといいあれは

忙しやだから)
菅先生には前にきいてみたが覺えてゐられなかつたその文句を若し君が知つてるなら書いてよこしてくれそれを見せたら思ひ出されるだらう至急たのむ

一二三 〔四月二十五日鎌倉から。端書二枚、松岡讓宛〕

「偸盗」の續篇はねもつと波瀾重疊だよそれだけ重疊恐縮してゐる次第だ始は一日に三四枚づつかいたがしまひには一日に十七枚書いて我ながら長田幹彦位にはなれると思つたよ何しろ支離滅裂だからこの頃支離滅裂なりに安心しちまつたがね今月號をよんぢまつた以上は續篇もよんでくれ僕が羽目をはづすとかう云ふものを書くと云ふ參考位にはなるだらうとにかくふるはない事夥しいよ
この間××にあつたらあいつは erste nacht に Dreimal も Braut を苦しめたさうださうしてその後も morgen-begattung をやつてるんださうだあきれたね何が Homo-sexual だかわかりやしないこんどあつたら牛耳つてやれよ京都の舞妓はピグミイみたいで何だか氣に食はなかつた sex の感じがないだけならいいが sex 以上に自然な人間らしい所がないやうな氣がするやつぱり寺が一番いいよ寺の中でみると繪や佛像も博物館にあるより餘程いいね庭のいいのも少し見たよ奈良で鏡を一つ買つて灰皿にしたが古道具屋をもつとゆつくりあさるひまが欲しかつたつけ貧乏でとてもおみやげなんか買ふ餘裕はないからだめだ何しろ奈良の天平貞觀の彫刻は大したもんだつたこれからひまと金さへあればあつちへ行つて見たい氣がする

一二四 〔四月鎌倉から。端書、恒藤恭宛〕

白浪も寄せこぬ里ののどけさはさゝぬ門べにひるがほの花

一二五　〔五月一日鎌倉から。秦豐吉宛〕

一中節　新曲　戀路の八景　　　宇治紫川

シテハ心なき身にもあはれはしみじみとツレハたつた秋風面影の何時か夢にも三井寺や入りあひつぐる鐘の聲シテハまつたれをばごらんぜよ神代以來の戀の路ツレハ瀨田の夕照いまここにほつと上氣のしをらしさかざす屛風の袖さへも女ごころの三下りハ花薄根ざしはかたき石山や合ノ手ハ鳰のうきねり身ながらもナヲニハあだに粟津いせいらんとほんにせはしいころびねの合ノ手シテツレハあらしははれてひとしぐれぬれて逢ふ夜はねて唐崎のコトウタハ松もとにふく風たらで琴柱におつる雁がねはツレハ石が堅田の文だよりああなんとせう歸帆もしらできぬぎぬのはやき矢ばせの起きわかれねみだれ髮のふじ額比良の暮雪をさながらにかはせどつきぬ初枕うるはしかりける次第なり

論文をかき了つて新曲をつくる愉味御高察下され度候この曲邀くして餘情ありまことに江戸趣味の極まれるものと存候御高覽の上は久米へも御序の節御見せ下さる可く小生一世一代の作と云ふはかりにてもその位の價値は可有之と愚考仕候まづはとりあへず新曲御披露まで

五月一日　　　　芥川龍之介

秦　豐　吉　樣

二伸例の件小生の知人の宅に子供が生れし爲その人に催促するわけにもゆかず目下一向發展致さず候

三伸「歸帆も知らで」は悪の如くに候へどこは文政頃より江戸にポピユラアなる地口の一つに候へ

ば用ひ候註釋まで　匇々

一二六　〔五月三日鎌倉から。恒藤恭宛〕

拜啓　母の病氣は大分よくなつた尤も年が年で衰弱が甚しいからまだ床を離れられないまだ醫者が二度づつ來てゐる一時は皆氣遣つたがもう大丈夫らしい乍憚安心してくれ給へ
これから鎌倉はいい平地からだん〳〵高い所へ移つて行つた春が今は山々の上にある新綠と云ふ語では云ひ足りない複雜な光澤のある若葉がどの山にも一ぱいになつてゐるさうしてその上で時鳥が啼くいろんな事で忙しいが暇もある事はある。この頃僕はデクソンの字引きをよんでゐるが割に面白いどうもいい加減な小說より遙に字引きをよむ方が面白いやうだいろんな事を覺える丈でも甚有益だよ僕のは半英學勉强上だからプラクチカルにやつてゐるがさうでなく悠々と大きな字引きをよんだらもつと面白いにちがひないこつちは莫迦に暖いもう夏らしくなつた(すべてが)異人も大分はいりこんで來たがきれいな奴は一向ゐない犬が皆氣が荒くなつて無暗に吠えるのは閉口だ胃病は少しも起らない

若葉に掘る石油井戶なり
若葉明きぬれ手の石鹼の匂
異國人なれど日本をめづる柘榴
花柘榴はらしやめんの家の目じるし

三日　　龍

恭　樣

二伸　雅子さんによろしく

一二七　〔五月七日鎌倉から。松岡讓宛〕

第一番に雜誌の事を至急知らせてくれ氣になるからボクの方は入學試驗前で、會議ばかりあつて、暇がない。僕まで「私は教育本部案に贊成でございます」つてな事を云ふんだ笑ふたよ。その爲土曜は三時までひつぱられて、四時からは松井主席教授辭任送別會へつれてかれた
森田さんが「その妹」を評して、「なぜ廣次はあんまにならないんだ」つて云つたつてね。名言だと思ふがどうだい。日本の淨瑠璃には亭主の金の才覺(サイカク)の爲に女房が傾城になる話が澤山あるだらうおれなんか西洋で云つたら大悲劇だ傾城と云ふ字を淫賣婦とすればその感じがすぐわかるしかしその事自身は日本では大した悲劇の中へはいつてゐないぢやないか泉鏡花でさへ身を賣つた女の悲劇は、身を賣つた事の beyond に――その以後の葛藤に置いてゐる。僕は何だかこの頃東洋流のやり方によりヒロイツクな點があるやうな氣がして仕方がない。こなひだ境野黃洋の本をよんだら、日蓮上人が龍の口へゆく前に、八幡樣の前で惡口を云つたのは、嘘だと云つて抹殺してあつた尤もな事に思ふ。あんな往態を演ずる位ならえらくも何ともない。一體(原文五字缺)が僞書だとなれば、日蓮上人の山師的な所が大抵なくなるわけだから、うれしい。
少しマクヨ僕は三部作を計畫中だ始は奈良朝中途は戰國時代の末、おしまひは維新前後だ中心は外國の神と日本の神との克服しあひにあるそれから「偸盜」を大部分書き直しかけてゐる九月にどこかへ出してもらふつもりだ。その頃迄には地藏樣を發表しろよ。久米の復讐をよんだ。僕は前半だけいいがあとはイカンと思ふ。「エロスの戲れ」の方がいいだらう。何だかおしまひの方が變に醜い氣がする事實の醜さではないコンシイヴのし方が醜いのださうしてそれが時によるとよく久米のものに出る醜さのやうな氣がするのださうは云ふものの始の方の確實な描寫はやつぱりあいつだと思つた。が、それにエムファサイズするのは、他人に對してだ
あの新小說で、本間久雄の評論(モリス論)をよんで、悲觀しちまつたあなつちや救はれない。救はれない以上に氣の毒でしやうがない。君は黑潮へ書く事にしたかいこなひだ鎌倉へ中根が來た僕はか

けないから（六月號）久米と君とを推薦したがどうしたかしら。その時中根の話で正宗の事をきいて面白かつた正宗なんて、ヘンナ奴だ××××が、先生の書を賣つたんぢやないかと云ふ嫌疑に對して、最近有力な證據が上つた菅さんから目下ロどめされてるんだが　今度あふ迄に話せるやうにしとく×××のやつ、そんな事をしておいて、新思潮の表紙なんか何とか云ふんだから凄じいや「思潮」をよんだ何だか「甘さ」を感じて悲觀した。それより、和辻氏の文章世界の評論をよんで、身につまされた。マキツてゐた時だつたから。卒業論文はもう立派に出來上つて立派に學校へをさまつたんだらうと思ふ。この頃江口氏にあつたらあの人はもう一年のばすつて云つてゐた。この頃××と大に肝膽相照してゐるらしいね、××はまだ猛烈に細君を苦しめてゐるかしら披露會をやるつて云つてたが、何時だい　この頃鎌倉ぢやむやみに紙鳶をあげる何しろ途方もなく大きい奴を十四五もあげるんだから、唸りがうるさくつてやり切れない大きな奴は二間半に一間位ある

こなひだ少し女にほれかかつたが都合があつて、見合せた。當分勉強だ

五月七日　　龍

松　岡　君

一二八　〔五月十七日鎌倉から。端書、松岡讓宛〕

西鶴は一代男がいるんだが困つたこんど日曜でも午から遊びに來ないか

偶感

花曇り捨てて悔なき古戀や

一二九　〔五月二十五日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

拜啓　もし君が都合がよかつたらこんどの水曜日（30?）の午後四時頃鎌倉へ來て僕と駄辯をふるはない

か翌日に丁度休みだから一晩と一日完全に名論を承れる且承らせる訳になるかゞだから暇を作れない事はなからうと思ふからこれを書いた鎌倉へ返事をくれ給へ　場所は小町園にしよう　以上

その外いろいろのうちあはせは君の返事後にする　頓首

一三〇　〔五月二十七日田端から。中根駒十郎宛〕

拝啓　私の本（新進作家叢書の中の）の件ですが阿蘭陀書房と交渉の結果「羅生門」の中の短篇は一篇以上とつて貰つては困ると云ふ事ですそこへ「偸盗」なるものは到底あのまゝで本にする勇気になしその上改作をこの九月に發表する雑誌まできまつてゐるのですからとても新しい本の中へは入れられませんすると私の作品を集めてもとても二百枚にはなり兼ねますが加ふるに阿蘭陀書房からは新思潮を出して貰ふ約束があるので「羅生門」の中の作品をとるのに強い事が云へません右様の次第ですから同叢書の私の本は見合せる事にして下さいませんか私も金の備る事なのですから出せるなら出したいのですがこれではどうにも仕方がありません御氣の毒ですがこの段不悪御諒承下さい　頓首

廿七日

芥川龍之介

中根様

一三一　〔六月八日鎌倉から。端書、松岡譲宛〕

二伸今夜鎌倉へかへります阿蘭陀ではその一篇も極短いものでなければ困ると云つてゐます　以上

元より書くよ書きたくつてウヅウヅしてゐるんだから田端の方へ送つといてくれ給へこんどは甚情緒纏綿たるものを書いてゐる

一三二〔六月十日鎌倉から。江口渙宛〕

拜啓　色々本の事では御厄介をかけました佐藤君へも渡して頂けましたか黑潮の佐藤君の小說は成功の作ではないやうな氣がします部分部分は例の如くうまいけれど　あれを堀口大學がほめたさうですが大學にほめられたんぢや佐藤君も浮ばれないでせう星座の佐藤君の短い小說(戰爭の)の方があれよりいいでせうあの方は全體の書き方が新しいしつかみ方もしつかりしてゐるやうです殊に書き方には可成同情が持てますがもう一息と云ふ氣がしないでもない

君の大學評論の小說は大學評論には少し勿體ない作品の價値とか何とか云ふ事をはなれてかき上げる技倆――云はゞ腕をあげたなと云ふ感じが一番先にしましたそれを作者から作品の上へ反射させると全體がたるみなくしつかりしてゐると云ふ事になります僕も愚圖々々しちやゐられないと云ふ氣になりました久保君から僕に日々へ書けと云ふ命令がありました近々かくつもりです尤も廿四日以後でないとかけませんが――十五日から金剛へのつて航海見學といふものに出かけるんです

和辻君と森田君との論爭には可成興味がありますその上兩方に同情出來さうな氣もします「感じる」と「描く」との力點の相違などは實際批評家と作家との見方の差を示してゐるやしませんか目下新小說の爲に僕にしては情緒纏綿たる小說を書いてゐます　以上

六月十日　芥川龍之介

江口渙様

二伸もし羅生門論をおかきだつたらその新聞を私の所へ送つて下さい願ひます

一三三〔六月十六日鎌倉から。江口渙、佐藤春夫宛〕

拜復　羅生門の會は少々恐縮ですがやつて下されば難有く思ひます文壇の士で本を送つたのは森田

鈴木　小宮　阿部　安倍　和辻　久保田　秦　谷崎　後藤　野上　山宮　日夏　山本の諸君です
但廿二日（金曜ですぜ土曜は廿三日でさあ）にかへれません廿四日の日曜なら徴兵検査の爲かへるので甚都合がよろしいその夜か夕方ではどうですか場所と時間とはきまり次第田端の方へ御一報下さい江口君の新聞も田端へねがひます　以上

六月十六日　　龍

江口　渙
佐藤春夫　兩大人

一三四　〔六月二十日鎌倉から。端書、松岡讓宛〕

愈々今日フネにのる事になつたこの頃胃を悪くしてゐるから醉ふだらうと思つて聊恐れてゐる二十四日の夕方かへる豫定だ

かはたるる靴の白さやほととぎす
明易き夜をまもりけり水脈（みを）光り

羅生門の會をしてくれるさうだ廿八日頃にのばして貰つた久米によろしく

一三五　〔六月三十日鎌倉から。江口渙宛〕

啓　こなひだは色々お世話様でした僕論は學校で中と下とを拜見しました少し褒めすぎてます殊に「貉」なんぞは下らないものですよそれから小道具の悪い中「運」の鶯は古いのを又々承知の上で使つたんですあれは幾分古い情調に興味を持つた作なんですから　「忠義」の時鳥はお説通り活字になつた時から不愉快で仕方がないんです「羅生門」は當時多少得意の作品だつたんですが新思潮連には評判が悪かつたものです成瀬が悪評の張本だつたやうに想像してゐますが

今日久米の小說をよみました少し態度が判然しないやうですねもつとウィド流の與多を飛したら面白かつたらうと思ひますあれぢや存外ポアンが引立たなくはないですか傘をさして步いて來る女の描寫はうますぎる位うまい坪內さんの名殘星月夜と云ふものが好評なのには驚きました谷崎君まで褒めてゐたでせう書き方はうまいかも知れないがあれだけの事を書いたつて仕方がないぢやないですかつまりうまさは全然技巧だけにある訣ですそれを技巧嫌ひの早稻田連がほめるのは可笑しい寧ろ鐵面皮すぎるやうな氣がします
この頃は每日海へはひります大分黑くなりました
夏休みはどうしようかと思つて考へてゐます　以上

六月卅日　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介　頓首

江口渙樣

一三六　〔六月。岩國錦帶橋の繪端書、松岡讓宛〕

由字の驛長と話したら尺八道樂だが蚊が多いので吹けないと云ふそのせゐか國產の第一は蚊帳ださうだ

蚊帳釣つて吹かばや秋の一節切

龍

一三七　〔七月一日鎌倉から。松岡讓宛〕

例の件につき土曜日に赤木の所へ集る筈だつたが芝の叔母の所に用が出來て夕方まで行かれない日曜は午後から新潮の何とか云ふ人が來る(中根かな)だから土曜日の夜か or 月曜にしてくれないか Sō-yen arts を忘れてゐたが今日送る　頓首

芥川 [illegible]

十日

忝崗子仙君

一三八 〔七月六日鎌倉から。芥川文苑〕

先達はお手紙難有う丈夫に平凡にくらしてゐます早く夏休みになればいいと思つてゐますまだ十五六日ありますから待遠しくつて仕方がありません下宿もちう可成り飽きましたすべてが利害關係だけで情味がないのだからやりきれません今からお料理の稽古をして置いて一しよに住むやうになつたら御馳走をたべさせて下さいうまいものなら何でも好きです

こなひだは横須賀から山口縣の由宇と云ふ所まで軍艦で行つてそこから岩國と京都とによつて歸つて來ました京都へは鰊河屋の菓子をたべによつたのです甘みのうすい上品な菓子ですこんど京都へ行つたらおみやげに買つて來てあげませうか鎌倉へは異人が大ぜい來てゐます夕方に彼等が大ぜい散歩してゐるのを見ると西洋菓子が歩いてゐるやうで大へんきれいですこなひだ異人のおばあさんが日本人の店で買物をして困つてゐたから通辯してやりましたさうしたらうれしがつて何度もお禮を云ひましたそれ以來顏を覺えて往來であふと向うから挨拶します尤ももう今はゐなくなつてしまひましたがボクのうちの前の不良少女は毎日おしろいをつけてすましてゐますこの暑いのによくあれで根氣があるなと思つて大に感服してゐますその鄰りの薪屋では昨日誰か死んでお葬式がありました今朝前を通つたらそこのお上さんが涙をぼろ〳〵こぼしながら大きなお饅頭を食べてゐました何だか譯のわからない可笑しいやうなへんな氣がしましたいろんなくだらない事を澤山書いたからもうやめます 以上

七月六日　　芥川龍之介

塚本文子様

二伸　小説をかくのとかけないのを斷るのとで忙しい思ひをしてゐますその爲この手紙を書くの

が一日ばかり遅れました皆さんによろしく

一三九 〔七月十二日鎌倉から。松岡譲宛〕

拜啓　手紙讀んだもう直き夏休みで東京へ歸るから久米と二人でかたをつけるこの頃萩原朔太郎氏の「感情」を見てゐると大にあゝ云ふ小雜誌が羨しくなつたよ何しろ暑いのには閉口だ學校はまだあるんだからやりきれない鄭板橋と云ふ明人の橄欖軒と云ふ法帖を見て以來僕は大に氣が强くなつたよ吾だの役だのと云ふ字を書いてゐて甚僕と同臭味だ今にあゝ云ふ字で新思潮の表紙を書いてやらうかな越後へ行くと云ふと夏ながら甚涼しさうだねちよいと一しよに行つて良寛を見たい氣もするよこなひだ鵬齋を見たが中々うまいね良寛の良いものは嘸うまいだらうと思ふしかしあの先生たちは少し淡々として力が乏しすぎる所がありはしないか
今月の小說は皆だめだね(僕のも入れて)但し久米の女が傘をさして來る所はうまいと思つたよ　頓首

七月十二日　芥川龍之介

枩崗道人　淸鑒

一四〇 〔七月十八日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

ガイダタマをなしたよ唯人造ダイヤだがねボクはもうぢき東京へゆく桐佐ででも一杯やらうよこの間の車中の句を錄して君の蒙をひらかう

朝焼くる近江の空やほととぎす
麥刈りし人のつかれや晝の月

一四一　〔七月十九日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

今二度目の君のはがきを見た東京へゆかずに大船か國府津で乘りかへてかまくらへ來いよ西洋菓子やうな French & American belles がゐて面白いからボクはこの間彼等の一人に通辯してやつたクラタの「出家とその弟子」をよんで感心したよ君には多少の縁があるからしらせるとにかくトランクを持つたまま來いよ　こんだの俳句は少しうまかつた最近の名句を一つかく

蛇女みごもる雨や合歡の花

一四二　〔七月二十五日田端から。江口渙宛〕

拜啓　先達の夜は御留守に上つて失禮しました昨日かへりましたからその中に又御たづねするかも知れません新聞の僕論は確に拜受しました御禮申上げます東京へかへると暑くても何でも方々ほつつき歩きたい氣がします少し久保田万太郎情調に浮かれてゐる形があります一つ淺草の句を書きます

天に日傘地に砂文字の異艸奇花

頓首

七月廿五日

芥川龍之介

江口渙樣

一四三　〔七月二十六日田端から。松岡讓宛〕

拜啓　昨日鎌倉から歸つた「偸盜」はとても書き直せ切れないから今年一ぱい延期して九月は新しいものを二つ出さうと思つてゐる。が、例によつて間に合はせ仕事にたらなければ好いと思つて心配してゐる　二三日中に阿蘭陀と會見する筈だ東京はべらぼうに暑いはだかでゐてもまだ暑いんだからやり

切れない暑さは生存意志を滅却せしめる　やつとカラマゾフが完りに近づいた小説もあの位長いとげんなりする。が隨分感心した七月の「白樺」に出た志賀の小品が面白かつたが君はよんだかい「出家とその弟子」には本質的に大分感心した武者の「その妹」なぞより餘程好い一々ほんとうに當つてあるさうしてそのほんとうが大分我々に近い　古い靈肉の爭ひなんぞ書かずに靈相互の爭ひを書いたのも切實だ何しろ勉强する事だよ

蝙蝠やゆすりそこねて二朱一つ

人相書に曰蝙蝠の入墨あり

これは機關學校教官の餘戲だ　頓首

龍

讓　様

一四四　〔八月四日田端から。菅忠雄宛〕

拜啓　御無沙汰してすみません齒が痛くつて熱が出て弱りきりました甘いものを食つたからぢやありません親不知齒が生えるので腫れたのです　小說はまだ出來ませんこの暑いのにウン〳〵言つて書いてゐます　弟が御厄介になるさうでどうかよろしく願ひます僕のやうに敏捷ぢやありませんから高ちやんやヒロ(字をわすれちまつたのです)ちやんの健康を祈ります　先生はやつぱり裸になつて大きな字を書いてお出ですか私は今でもあの方外を見ちや感心してゐます赤木桁平にあぶなく心王の方を持つて行かれさうになりましたがとう〳〵剛情を張つてやりませんでした

機關學校の手紙は確に頂きました急用でも何でもないんです　まだ齒が痛いので少し弱つてゐます暑くつても東京はいいですよ　頓首

八月四日

芥川龍之介

菅忠雄様

一四五〔八月十五日田端から。池崎忠孝宛〕

ボクは中々小說が出來ない十五日の〆切をのばして貰ひさうだ惡詩を一つ獻じるその中ゆく頓首

龍

赤木桁平先生淸鑒

心靜無炎暑
端居思渺然
水雲涼自得
窓下抱花眠

學弟　椒圖道人百拜

一四六〔八月十五日田端から。松岡讓宛〕

飛札を以て啓上　今日文章世界の加能作次郞君來訪十月特別號の爲君に四十枚ばかりの短篇を書いて貰ひたく僕よりたのみ吳れとの事に候へばこの段謹んで御通知申上候　〆切は來月十日の由　その後僕苦心慘澹しても小說の出來ぬに惱み居候次第よろしく御憐憫下され度候當用のみ　頓首

芥川龍之介

松岡讓様

一四七〔八月二十一日田端から。菅虎雄宛〕

肅啓　御無沙汰致しましたが御變りもございませんか先日一寸弟の所へまゐりましたが家事上の相談

に忙しく御宅へ上る暇がございませんでしたこなひだ迄原稿で忙しうございましたが今は甚泰平な日を送つて居ります詩を一つつくりましたから御笑覧に入れませう

即今空自覺
四十九年非
皓首哈秋霽
蒼天一鶴飛

二十六年の非では引立ちませんから少々かけ値をして四十九年と致しました勿論皓首と申す程白髪などはございません鶴は私の宅の近所へよく來る白鷺を少し高尚にしたのでございます　頓首

八月廿一日　　　芥川龍之介

菅虎雄様　梧下

一四八　〔六年（推定）八月三十日小石川郵便局から。端書、久米正雄宛〕

今日は非常に面白かつたが、ああなると malicious joy を感ずるよりああ云ふ動物と話すのがより退屈になるので駄辯が振へなかつたのは遺憾である君の健康を祈る

一四九　〔九月三日田端から。端書、菅忠雄宛〕

本はたしかにうけとりました色々お手數ありがたう今大阪毎日へかいてゐるので忙しいスキミン不足でよわつてゐます電氣が來ないので（アラシの爲）蠟燭の光でかくのですからくたびれますこの頃は至る所に秋を感じます樹にもさうして肉體にも　頓首

一五〇　〔九月十三日田端から。菅忠雄宛〕

あなたは私にあやまる必要も何もありません弟は小町園が待合だと云ふ事を知らなかつたのですさうして私が小町園の女中と關係でもあるやうに思つたのです（あなたもさう思つてゐたかも知れませんがさう思ふと苦笑が出ます）しかし私がその誤解を解きました。だからもう心配する事も何もないのです

私は來年結婚します勿論さう云ふ前に、外の處女と關係する程墮落してはゐませんその邊も御安心なさい。機關學校の教官と作家とを區別しなくともいいのです。

あなたがゐなくなつて淋しくなつたしするから、私は横須賀へ轉居します先は横須賀市汐入尾鷲梅吉方です明日移ります　日曜にでもひまがあつたら、遊びにいらつしやい。

十三日夜　　芥川龍之介

菅　様

二伸ツルゲネフだけは私の持つてゐる全集の一册ですからなくならないやうに氣をつけて下さい
これはよく御願ひします

一五一　〔九月十六日田端から。大田黑元雄宛〕

拜啓　先達は貴著を頂いて難有うございました早速御禮を申上げる筈の所急に横須賀へ引越したり何かしたのでとうとう今日までのびてしまひました頂いた本は頂いた晩にすぐ讀んでしまひましたさうしてこんな事を考へました

「舞踊には舞踊の本質的な内容がある彫刻や繪畫の内容になるものとそれとは勿論同じではないだから印象派以來意味のある畫が輕蔑されるやうに舞踊にもきつと繪畫的だつたり彫刻的だつたりする舞踊が輕蔑される時が來る又來なくてはならない」と、かう云ふ事を考へたのですが如何でせうつまりですな私に云はせると舞踊の内容（と言つて惡ければその表現するもの）は微妙な運動の感じだと思ふ

のです馬車が止つてゐて動き出す時にその輪を見てゐると進行しようとする方角とは反對の方へ少し動くやうに見える――あゝ云ふ時の微妙な車輪の動き方ですなあゝ云ふ動き方が木の枝にも人體にもあつてそれは舞踊でなければとても現せやうがないと思ふのですさうしてそれが舞踊の正に表現すべきものだと思ふのですだから前の「　」内の說が出て來ましたこれは平凡すぎるほど眞理だと思ふのですがいけませんか

今うん〳〵云つて文章世界の原稿を書いてゐますあした横須賀へかへります　頓首

九月十六日　　　　芥川龍之介

大田黑元雄様

一五二〔九月二十日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

二伸　私のこんどの宿所は横須賀市汐入五百八十尾鷲梅吉方です　以上

一五三〔九月二十日横須賀から。端書、池崎忠孝宛〕

轉居

横須賀市汐入五百八十尾鷲梅吉方　芥川龍之介

この通知は君への通知たると共に夏目さんへの通知だよ　ボクは文章世界で實際脂をしぼられたよへんてこなものを書いて責をふさいぢやつたいくら何でも一日半ぢや碌なものは書けない君のを少しよんだよんだ所は大によかつたが發賣禁止になるからつて直す訣にもいかなからうこの前奥さんに御馳走になりかかつた御禮を云ふのを忘れた君からよろしく云つてくれ給へ

今これを出さうと思つたら君の手紙が來たやつぱり新思潮再興の必要があるナア會はどうしたいまだ久米から何とも云つて來ない

轉居

横須賀市汐入五百八拾尾鷲梅吉方　芥川龍之介

倣魏華岳太華夫人廟碑體

一五四　〔九月二十三日(午とあり)田端から。端書、江口渙宛〕

今日二科會及院展を見たり悪歌三首を以て恭しく江口大人の粲正に供す

梅原君の椿
まつぴるま椿一本光りたれ赤はぽたぽた青はぬるぬる(倣北原白秋調)

安井君の女
ふくだめる脾腹の肉のうごかずば命生けりと誰か見るべき(倣齋藤茂吉調)

山村君の八朔
夕月はほのかに白し八朔の遊女がふめる外八文字(倣吉井勇調)

一五五　〔九月横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

お手紙難有う小島にもよくたのんで置きます澤木さんにも、精々勉強なさい英語か何かのわからない所は御質問に應じます右御返事まで　頓首

龍

一五六　〔十月四日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

新潮の長與氏のものにはボクもちよいと感心した「哀れな少女」よりいいやうだ病院へ行く所なんぞはしつかりしてゐるしかしあの人のフイロソフイには大分虫のいい所があるね但し安價な肯定ぢやない

肯定も否定もせずに或問題を途中で抛り出してセンティメンタルになつちまふんだあれは俗だと云ふと可笑しいが「和解」をおもしろくよんだよ朝飯をくひながらあれをよんでゐて學校を遲刻したおやぢがよく書けてゐると思つた君がよんだもので面白いのがあつたら知らせてくれ早速よむから、谷崎發電所は面白いか　ボクの印象では久米の駄辯に驚いたアイツはどうかしてゐるよ

一五七　〔十月十二日横須賀(推定)から。端書、菅忠雄宛〕

お手紙難有う　お見舞に上らうと思ひながら例の通り多忙でまだ鎌倉へも參れませんいつ頃御引越しですか　今大阪毎日へ原稿二三日までと電報をうちに來た所ですからキユウ〳〵云はされてはやり切れない但日曜はゐますからいらつしやい(今度の日曜にゐません)　横須賀はいやな所ですボクは家を持つたら鎌倉へ引越しますお宅がその頃鎌倉にない事と思ふとさびしい

みかへればわが身の綺羅も冷やかに

一五八　〔十月十二日横須賀(推定)から。端書、松岡讓宛〕

君の小説はどうしたボクは悲觀してゐるどうしても或ところより先へはいれないのだ頭もはいれないし文章もはいれないのだ抑〻出から祟つたらしい材料それ自身にもはいれない所を持つてゐるのだが、君もまゐつてゐてくれればいいやうな氣がするこれはイゴイズムではなからう　この間チエスタアトンをよんだら「普通の　labour　はいそげば近路をする　mental labour　はその代りに遠路をする」とかいてあつた實際から遠路ばかりしちややり切れないやつと二十枚書いた

一五九　〔十月十二日横須賀(推定)から。端書、池崎忠孝宛〕

行くよ　相客は僕に不快を與へるやうな人でも更に差支へない殊に　soft sex　ならばだね　「和解」を

讀んで以來どうも小說を書くのが嫌になつた　頓首

一六〇　〔十月十三日橫須賀から。端書、石田幹之助宛〕

君の手紙を見たボクも例の如く多忙をきはめてゐる殊に東京へゆくと半分は用事の爲に行くやうなものだからうちにもよくゐないしゐて客に接しなければならん甚厄介だ
もし小閑を得たら君も一度こつち(ヨコスカ)へやつて來たまへ但土日月はゐないからその外の日だれ金に來て土にかへれば一しよにかへれるモリソン文庫は是非一ぺん拜見したい

　　革（カハ）の香や舶載の書に秋晴るる

一六一　〔十月十八日橫須賀から。端書、薄田淳介宛〕

拜啓右手の神經痛と校務の多い爲に原稿が大へん遲くなつて申訣ありませんそれから六回の始の方の對話中「宗伯？」「　樣へお出になりました。」の　樣は「山本樣」として頂きます御面倒でも校正の節御書き入れ下さい今日時事の文藝消息を見ると私が大阪朝日の依囑により短篇黴菌を書いてゐると出てゐます每日と朝日の間違ひはまだしも馬琴と黴菌との間違ふに至つては失笑の外ありません嘗私は電話で立田川と云ふ相撲と間違へられた事がありますが馬琴のやうに黴菌に間違へられる事を思へばまだしもの方でせう　頓首

十月十八日　　芥川龍之介

一六二　〔十月二十五日橫須賀から。端書、松岡讓宛〕

「每日」に馬琴が出だした插繪でボクの書いた人間が出てくるのはへんな氣のするもんだ出來は或部分は甚惡いしかしちよい〳〵傑作な所もあるモウ一つ書けと云ふから書かうかと思つてゐるがそれにし

てもそれは新年へだ　早く「法城を護る人々」の顔が見たいなボクにあの小説を書かせればこんな插畫をかくよ〔この下に何かわからぬ繪あり〕

〔西田さんの本をよんだかフヂヲカ曰二千五百年の名著だとよみたいがムヅカシさうでいかん〕

圓光のある中外を送つたよ　奥さんはまだかへらないかいかへつたら菅さん行をすすめて一しよに來ないか湘南の秋光は中々いいよ僕は小閑を得ると汽車でわざわざ逗子鎌倉へゆくが一人ではつまらない

　雁は見ず墮（オロ）落せと聲を聞く夜にて

一六三　〔十月二十七日横須賀から。端書、夏目鏡子宛〕

端書でごめんなさい奥さんがお歸りださうだからこれを書きます

こんどの水曜日(卅一日)は休日で僕は横須賀で退屈な時間をつぶさなければなりませんそこで奥さんがその日に菅さんの所へお出でになると僕も鎌倉へ行つて一しよに泰平な日を送れる事になるから至極便利ですが如何でせうなるべくさうなさい切におすすめします鎌倉は今中々景色がよろしい松岡も大に來たがつてゐますだから是非お出でなさい　以上

一六四　〔十月三十日横須賀から。端書二枚、松岡讓宛〕

用を先にかく　ボクにはＳＯＬＬＥＮと云ふ事の意味がしつかりわからないのだがそれを出來る丈分るやうに書いてよこしてくれないか(常識的にしかわからないのだ)

西田さんはボクもよみ出したえらい人がえらい事をし出したもんだと思つて驚嘆しながらよんでゐる實際こつちの不眞面目な所へ棒喝を食つてゐるやうな氣がするねボクなんか餘計さう思つた

ボクは今後頼まれて而して書く事はやめにしたさうしなくつちや敎師をして生活費を得てゐる甲斐が

ないその位なら作家商賣をやる方が餘程氣が利いてゐる一年に一つ位書ければそれで本望だ[illegible]つちや一年位韜晦するのもいいと思つてゐるそれから今後新聞雜誌の文藝批評は一切縁を切つ[illegible]ない事にするつもりだあれを讀んで幾分でも影響をうけないには餘りに僕は弱すぎるから[illegible]少しづつでもしつかり進むつもりだ乘らないつもりでも調子にのつてゐた自分をかへり見ると[illegible]類だこれから尻を落ちつける今氣がついてよかつたと云ふ氣がするよ何にしても前途遼遠だ(以上の一)

奥さんに天長節にお出がなくつてがつかりしましたつて云つてくれ給へ僕の美辭麗句も一向誘惑力がなかつたかなと思つてゐる　もし都合がよかつたら天長節の日の午前ボクが電話をかけるまでうちにゐてくれ給へいやもし天長節の日がひまでなかつたらゐても仕方がないもしひまがあつたらゐてくれ給へさうすると時間をきめて君に來てもらふから。鎌倉あたりでおち合つて悠々と雲でも眺めたい雲でなければ煙でもいい實際今鎌倉には至る所で落葉を燒く煙が上つてゐる夕方は尚でもその匂がする月並だが俳味があるね

今月の久米の小說はいかんねうまい所はうまいが書かうとした事がふらふらしてゐるよ And it may be unfavourable for Kume himself, I fear. Deciples が何か云ひさうだと思ふ　昨日後藤に會つたら君の帝文の小說をほめてゐた猶久保勘によると「法城を護る人々」の方が固いさうだ後藤は「和解」は惡作で「異端者の悲しみ」の方が遙かにいいと云つてゐたさうして又肥つてゐた實際羨しいよ　ボクは悪靈もよんでゐるカラマゾフ程ではないがずゐぶん感心させられる(以上の二)

一六五　〔十月横須賀から。松岡讓宛〕

ここに二人の許嫁の男女があるさうしてそれが如何なる點でも幸福だとするその時その許嫁の男がこんど××の書いたやうな小說を書いたとする――としてもその間には何の波瀾も起らなくはないだらうかだから××のあれを發表したと云ふ事は周圍とかフイアンセとかに對する眼があいてゐないと云

ふ愚によるのだが、周圍は存外わかつてゐたかも知れない同時にそれ丈フイアンセに對しては盲目同樣ぢやなかつたらうかこんな考へ方をするとあいつが氣の毒にもなつて來る
それから又あいつがあんなものを書くのは實際以上に幸福な自分を書いて慰めてゐると云ふ事もありさうな氣がするこれはフイアンセに對して盲目なのと矛盾するかも知れないしかし盲目ならんとする努力と見れば矛盾ではなくなるだらう强ひて自分を幸福に書いて自ら慰めると云ふ事には多少の同情がない事はない僕は君にわかれてからこんな二つの考へ方であいつをよりよく見る事が出來さうな氣がして來たさうしてさう見る事が義務のやうな氣もして來たそれは愚だし愚だけに腹が立つがさう見ればあいつに對する好意だけは失はれずにすみさうに思ふよ愚の方ぢや我々もいつどんな愚をやるか知れないからね
しかし愚は愚だね歸つてあの小說を見たら又しみじみさう思つたよ僕は君に話した通り純粹にはあの件の成立を喜んでゐないからそれだけあの小說を發表した結果にしても冷淡になり得られるのだがそれにしても愚なのでがつかりする　何か變動が起るかも知れないし又起りさうだがその原因はやつぱり自然に背いた罰だと思ふどうもあの事を考へるとへんに不安になつていけない
十一月になつたら三土會前に來ないか一日ゆつくり遊びたいから

龍

讓　君

一六六　〔十一月三日橫須賀から。端書、池崎忠孝宛〕

君の秋宵雜筆を見て少し困つたあれはボクの書かうとしてゐるやうなものなんだから。ああ云ふ形式が一番樂でいい僕も近々に書かうと思つたが君のが出ちや當分やめだ僕は眞山民君より元遺山君の方がすきだねすきと云ふより實際えらいと思ふのだこんど君が來たら見せるから讀んでくれ陶韋杜王と

かまへて来るとどうしても遺山へ来なくつちやをさまらないのだ今夜晴れた空を見て何か作つた

　天の川見つつ夜積みや種茄子

(ヒマがあつたら來ないか日曜にはゐるから)

一六七　〔十一月十三日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

何度も手紙を書いてやめにしたあれはああなるのが自然の意志だと云ふ氣がする一度上つて兄さんにも御話ししたいが多忙で(今卒業試〔驗〕だ)日曜にかへつても碌に暇がない君からよろしく申上げてくれ給へ「法城を護る人々」は力作だと思ふ材料の fulness から云つても態度のつきつめた所から云つてもさう思ふ唯あれ丈の長さに書いたのでは材料の整理が十分につきかねるあの二三倍の長さに書いて然るべきものだらうしかしそれは君も氣がついてゐるだらうと思ふその外に申し分なしだ自然描寫は輪奐の美を極めてゐるね　以上

一六八　〔十一月十四日横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

お手紙難有う胃が悪くつちやいけませんねこの間は赤木の駄辯に退屈させられたでせうその中に新潮社から「煙草と惡魔」を送らせますモウ少し待つて下さい野間からもう面倒臭いから郵便物の轉送は斷ると云つて來ました至極尤もですお序の節私からと云つて禮を云つて下さいとりあへず御返事まで

一六九　〔十一月十七日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

學校の進級會議で三土會には出られないこの頃實に多忙だ(學校が)ボクは新年號に探偵小説を書いてゐる最後の賃仕事と云ふ氣がするから大に與太をとばしてゐる　が内心は少しはらはらしてゐるよあんまり與太すぎるからねしかし一寸面白い事は面白い

病氣がなほつたら鎌倉へでも遊びに來ないかそれから奥樣にも傳言してくれ給へ天高く馬肥ゆるの候菅さんの所へ出かけませんかつて。菅さん所でなくつてもいいんだ。久しくお目にかからないから一寸奥樣の話がききたい氣がする　以上

一七〇　〔十一月二十一日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

拜啓君が用がある由江口から聞いた僕はこの頃目がまはる程忙しい新年號と人に約束した社交的の訪問とで忙殺されるのだだからもし君が都合がよかつたらもう少し待つてくれないかしかし急を要するなら今でもいゝ但それもそつちへ行けるかどうかわからない午後でも鎌倉あたりで落合ふなら都合もいゝこれは少しも遠慮せずに返事してくれ給へ僕は今度の事件で或は一番深い經驗をしてゐるのは久米よりも寧君ぢやないかと思つてゐるとりあへず返事まで　頓首

一七一　〔十一月二十三日横濱から。端書、松岡讓宛〕

拜復ぢやお互に暇になつてからにしよう××にはそんな彌縫策なんかしないやうによく云つたんだけれど萬一そんな氣も出たかも知れないこなひだ會つた時大分冷水をあびせるやうにしてやつたのだがボクは今日原の御馳走で横濱へ來たこれをへんなレストランで書いてゐるそばのピアノでボイが何かひいてゐる甚横濱らしい
こんど新小説へ「開化の殺人」と云ふものを書く一種の探偵小説じみたものだ
先生沒後一年とは早すぎる位早い
　人去つて空しき菊や白き咲く

一七二　〔十一月二十五日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

折角だが多忙で上れなかつた今夜これからヨコスカへ歸る新年號の如きも引きうけたの[illegible]る序に名句を披露する　以上

　たそがるる菊の白さや遠き人
　白菊や匂にもある影日なた

　十一月廿五日　　　　　　　　　椒　圖　道　人

一七三　〔十二月一日横須賀(推定)から。端書、池崎忠孝宛〕

Que m'importe que tu sois sage
Sois belle et sois triste.
　　　　　　　C. Baudelaire

徂く春の人の名とへばぽん太とぞ
　その人の舞へるに
行けや春とうと入れたる足拍子
　その人のわが上を問へるに
暮るるらむ春はさびしき法師にも
われとわが睫毛見てあり暮るる春
　一九一七年日本の詩人思を日本の校書に寄するの句を錄す

一七四　〔十二月三日横須賀から。菅虎雄宛〕

拜啓　來る九日夏目先生の一周忌の節先生も御出でになるだらうと思ひますが當日式後御暇なら田端

の私宅へ御立寄り下さいませんか方外の額を御らんに入れたうございますから　右御誘ひまで　頓首

十二月三日　　芥川龍之介

菅虎雄様

一七五　〔六年（推定）十二月六日。端書、久米正雄宛〕

拝啓　八日午後二時半と三時との間に銀座カツフェパウリスタにて落合ひたし返事待つ大至急　以上

一七六　〔十二月八日田端から。薄田淳介宛〕

拝啓　新年號を二つ書くので大分くたびれますからなる可く〆切るのはおそくして下さい出來るなら來年へ少しはみ出したいのですが、題は「開化の殺人」としておいて下さい或は「踏繪」と云ふのになるかも知れませんが、なる可く暇を澤山下さい原稿料よりも書く暇の長い方が難有いのですだから外の人の原稿をとつて私のがおくれてもいいやうにゆとりをつけて置いて下さいその點をよろしく願ひます　以上

十二月八日　　芥川龍之介

薄田様　侍史

一七七　〔十二月十日田端から。久米正雄宛〕

君の事が日々に出てゐるのを見た（ボクの事も出てゐるが）あんまりいい氣なもんぢやない菅さんに敎へられて往來で新聞を買つてよんだが實際妙な氣がした××さんもあゝなると少し氣の毒だね
ボクは心臟の調子が惡いので一枚もかかずにしまつた肺の方は少しも掛念ない由大に安心した但喉は大分こはしてゐる煙草は當分のめない

何しろ世の中はでたらめなものだな
　木枯らしやどちへ吹かうと御意次第
　　十二月十日　　　　　　　　龍
　久米正雄様

一七八〔十二月十一日田端から。下島勲宛〕

拜啓　漱石先生遺墨出來候間御眼にかけ候ゆゑ〳〵御覽下さる可く候小生未風流地獄の業を脱せず廿日頃までは呻吟致す可くよろしく御同情願上候　頓首
　十二月十一日　　　　　　　我鬼生
　空谷先生　梧右

一七九〔十二月十四日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

手紙みた十二月號にろくなものはないらしいボクの名を騙つて雄辯で金をとつた奴がゐる黒潮でかたらうとしたやつと同一人だ物騷で仕方がない戯作三昧は土曜にかへつたら送る休みは二十日から奥さんが菅さんへ來られると云つたが二十日か二十一日に來られると一しよに東京へかへれて甚都合がいいんだがなその旨奥さんに言上してくれボクは九日以來ノドをひどくこはして悲觀してゐる夜は完く出られない煙草も當分のめない新年の新小說へは西鄉隆盛と云ふへんてこなものを書いたから出たらよんでくれ新潮は「首を落す話」で失敬したどうもウハキをしてゐるやうな氣がしてくだらなくつていやだ來年はベンキヨウしたい僕は最近橫須賀の藝者に惚れられたよそれを小說に書かうかと思つたが天下に紅淚を流す人が多いからやめにした愈來年から鎌倉へ定住する東京へ來いとすすめてくれた先輩もあるが(グレエフエはいくらだつたいこんど拂ふ)

一八〇〔十二月十八日横須賀から。端書、松岡讓宛〕

拜啓　その後九日會で酒と煙草とをやつた爲にすつかり喉の具合を惡くし又痛くつて悲觀してゐるそれでとても孤影蕭然として二十二日まではゐられないから十九日に東京へかへらうと思ふ鎌倉へは借家を見にゆくからその後出直してもいい兎に角二十日に君の所へ行つて話さうどうも喉頭結核になりさうな氣がして心細い　頓首

二伸これを書いたら丁度君の手紙が來た宛書きは彷敦煌斷簡だよ

一八一〔十二月二十日横須賀から。端書、菅虎雄宛〕

はがきで失禮致します　今日より東京市外田端四三五へ參りますから以後御用の節はその方へ御申し越し下さいまし　右御通知まで　以上

十二月廿日

芥川龍之介

二伸猶借家がございましたら御敎へ下さるやう願ひます

一八二〔十二月二十二日田端から。下島勳宛〕

拜啓　御病氣如何ですか御大事になさい　先生が御病氣だと甚僕まで心細い氣がしますそれから申兼ねましたが漱石先生遺墨御用ずみでしたら使の者に御渡し下さいませんか今日日曜で來た人が見たいと申してゐますから　右御願ひまで　頓首

十二月廿二日

芥川龍之介

空谷先生　梧右

一八三 〔十二月二十二日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

拜啓明廿三日夕方より御來駕下され度願上候久米も參る筈に候　頓首

芥川龍之介

一八四 〔十二月二十六日田端から。菅忠雄宛〕

拜復　御手紙拜見しました學校が廿日に休みになつたのでこつちへ歸つて來て居りますもし借家が見つかつたら教へて下さい借家さへあれば一月から鎌倉へ住みます貧乏だから十五圓位でなくつちやいけませんそれから寢坊だから停車場に近くないと困ります但電車の利かない所で停車場から七八町離れてゐるよりも電車の利く所で十町離れてゐる方が遙にいゝ事は勿論ですその二つさへ條件が一致すれば少し位ケチなうちでも我慢しますどうか骨を折つて見て下さい
新年號のあとで大阪毎日を頼まれたので又弱つてゐます鎌倉へ行つたら高濱さんへつれて行つて下さい句でもやつて閑寂に暮したいと思ひます　頓首

十二月廿六日

芥川龍之介

菅　忠　雄　樣

二伸　本の小包は君があけて見て下さいさうしてもし像越君の本だつたらその旨僕へ知らせて下さいさうすると宮崎氏へ禮狀を書きます本は當分君の所へ置いて下さい(だから宮崎氏の所も教へて下さい)洗濯屋へはその外何もゆかなかつたでせうかその小包に宮崎氏の手紙でもついてゐなかつたかと思ひますもしついてゐてそれを讀まないと買つてくれと云ふのを貰つたつもりでますやうな事になるかも知れませんから　以上

三伸　拜啓　こなひだ上つた時君が留守で一寸殘念でしたその節先生にお願ひした簞笥と書棚は

明日か明後日着くさうですから何分よろしく願ひます東京殊に田端は寒くつて悲観してゐます
以上
十二月廿六日　芥川生
忠雄君

一八五　〔六年（推定）田端から。島谷洋服店宛〕

相着を着に歸京したれど相着なし
初袷なくて寂（サビ）しき歸省かな
お早く御願ひ申す
芥川龍之介

一八六　〔六年（推定）鎌倉から。日夏耿之介宛〕

黒潮は人に借してありませんゲスタロマノルムは御とどけします　それからもう一册マリアの本は私が持つてゐるよりあなたが持つてお出での方が天下の爲になりさうですから失禮ながら差上げますどうか御笑納下さい　今小説をかくので大多忙です
龍
日夏様梧右

大正七年

一八七〔一月一日田端から。端書、菅忠雄宛〕

忠雄さんは何時までそちらにお出でですか僕は來週中でも鎌倉へ行つてさがして下すつた家を見たいと思ひます　頓首

一八八〔一月十九日田端から。恒藤恭宛〕

僕は來月に結婚する結婚前とも思へない平靜な氣でゐる何だか結婚と云ふ事が一つのビズネスのやうな氣がして仕方がない　僕は子供が生れたら記念すべき人の名をつける僕は伯母に負つてゐる所が多いから女だつたら富貴子男だつたら富貴彥とか何とかつけるつもりだ或は伯母彥もいいと思つてゐるそのあとはいい加減にやつつけて行く夏目さんが中年に生まれた第六子に伸六とつけたのは大に我意を得てゐる實は伯母彥と云ふ名が今からつけたくて仕方がないんだ
この頃は原稿を皆斷つてのんきに本をよんでゐる英國の二流所の作者の名を大分覺えた

爪とらむその鋏かせ宵の春
ひきとむる素袍の袖や春の夜
燈臺の油ぬるむや夜半の春
葛を練る箸のあがきや宵の春
　春の夜の人參湯や吹いて飲む

この間運座で作つた句を五つ錄してやめる

一八九〔一月二十三日横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

拜復　いろ〱家の事で御心配をかけました今度の金曜日の二時頃上りますから見せて頂きますもしその日行かれなかつたら翌土曜日の午前中に上ります夏目さんの御墓の石刷も先生へ御とどけ申す爲に持つて來て居りますからそれもその節持つて上ります　以上

龍

一九〇〔一月二十四日横須賀から。松岡譲宛〕

手紙見た久米はうつちやつて置くがいゝ　僕の結婚はいづれ通知する公務の關係と家事の關係で日どりはまだはつきりしない大體きまつてゐるがまぎはへ來て變るかも知れないとにかく來月である事は事實だ但これも久米始め誰にも公表してない僕の細君と學校との關係上結婚の完る前に公にしたくないからだ　何しろくだらない用が多くつてうるさくつて仕方がないその中で小説を書くんだからやり切れないよこいつ一つ書いちまへばあとは書いても書かなくつてもいゝんだと思つてそれを樂しみに書いてゐる久米には實際こまつたものだと思ふよこの頃あいつの創作上の問題に關係してしみじみさう思つた結局匙をなげるのかなとも思ふとにかく惡い所を愈惡く出して來た事は確だもう何と云つても仕方がない　以上

芥川龍之介

松岡譲様

二伸金をうけとつてくれこの中へ封入したから

一九一〔一月二十九日横須賀から。端書、池崎忠孝宛〕

留守に御枉駕を辱くし恐惶々々今後は大概午前中にお出で下されば間違ひなしこの頃友失ひ戀しく
惆悵この事也暇だつたら又來てくれ給へ

寫懷二句

片戀や夕冷え冷えと竹婦人

青奴わが楊州の夢を知るや否

一九二　〔一月二十九日横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

お手紙東京から廻送して來て今日拜見しました明水曜日午後三時二十分横須賀發の汽車で參りますとりあへず御返事まで

いろいろ難有うございました　頓首

一九三　〔一月三十一日横須賀から。薄田淳介宛〕

拜啓　御歸阪の事と思ひますからこの手紙を書きます　御上京の節は折角御たづね下すつたのに何の御もてなしもなく甚失禮しましたあの夜讀松亭で久保万にあひ鴻之巣行きをすゝめられましたが三土會へ來る人に僕の學校の用むきを傳へる必要がありましたから缺席しましたそれも序に御諒察を願ひます　小說目下進行中です二つ書きそくなつたので三つ目です出來次第御送りします　その節御話しの件もよろしく願ひますこの三月から生活狀態が少しちがふので月收がふえると非常に氣が强くなるのです　近々鎌倉に移轉する筈です　三浦半島もこの頃は中々寒氣が甚しいので寒がりの私は大に閉口してゐます唯東京へかへる途中で所々の日だまりに梨の返り花がさいてゐるのは聊人意を强くするに足ります

灰墨のきしみ村鬢の返り花

一月卅一日

芥川龍之介

薄田淳介様 梧下

一九四 〔一月三十一日横須賀から。菅忠雄宛〕

昨日はどうもいろいろ御世話様になりましたあとでいろいろ考へるとどうもその松林の中のうちの方がよくなつたのですが、それは實際ぢきに明きませうか便所が一つなのと井戸が遠いのとはどうも少し不便さうです日當りは少し位惡くつてもよろしい元來僕は北向きの暗い部屋が一つ欲しいのです書齋にするのですから もし明くのなら近いうちに見せて頂きに上つてもよろしい手金は二圓だからすてゝもかまひません 半月位ならその方を待ちませう 御面倒ながらお返事を頂けないでせうか（田端の方へ） 以上

一月卅一日朝

芥川龍之介

菅忠雄様

一九五 〔二月田端から。恒藤恭宛〕

女の名は

加茂江（カモエ）（下加茂を紀念するならこれにし給へ）

紫乃（シノ）（子）

さざれ（昔の物語にあり復活してもいゝ名と思ふ）

茉莉（マリ）（子）

糸井（イトヰ）（僕の友人の細君の名珍しい名だが感じがいゝから）

これで女の名は種ぎれ男の名は

治安
樓蘭(二つとも德川時代のジヤン・ロオランの飜譯一寸興味があるから書いた)
哲。　士朗(この俳人の名はすきだ)
俊。　山彥(原始的詩歌情調があるぜ)
そんなものだね
書けと云ふから書いたがなる可くはその中にない名をつけて欲しいその中の名をつけられると何だかその子供の運命に僕が交渉を持つやうな氣がして空恐しいから

一九六　〔二月一日田端から。江口渙宛〕

啓　高等工業學校の中原虎男君を紹介します同君は高等工業の文藝部の講演會の事で君の盡力を得たいのださうです不惡御取計らひ下さい
二月一日　　芥川龍之介
江口水鄉先生　梧右

一九七　〔二月一日田端から。端書、松岡讓宛〕

おたづねに從ひ御返事する　僕は明二日結婚する細君は當分うちに置いて僕だけ横須賀で下宿ずまひをするつもり(二伸約束上成瀨へもよろしくしらせてくれ給へ)鎌倉にはまだ適當な借家が見つからないとにかく貧乏で悲觀してゐるこれが僕の書いた唯一の結婚通知狀だこの後も書かないだらうと思ふ
頓首

一九八　〔二月五日橫須賀から。松岡讓宛〕

僕は今日ユーディットをよんだいや今もよみつつあるさうして恐しい感激に打たれつつあるこの壯大な力はどうだ僕は何んとも云ふことは出來ないあの基督教と異教との峻辣を極めた對立の中に肅々として動いてゐる恐しい運命を見せつけられる時一たまりもなく僕は掃蕩されてしまふ我々の書いたもの我々の仲間の書いてゐるものは餘りに見すぼらしい餘りに何でもなさすぎる神の靈感によつて兄を打ち殺せと叫ぶダニエル一人を描いてさへ我々の仲間の作品に何十倍する價値のあるものが生まれるか知れないのだそれをここにはホロフェルネスがあるさうして更に「自然苦」の如きユーディットがある何と云ふ段ちがひだこの如く捕へこの如く描いてこそ眞の悲劇は誕生する誰かこれを書くものはないかいや或は吾々の中の誰かがこれを書かなければならないのではないか僕は恐しい氣がするあらしの海を前にしてそれへ舟を出せと云ひつけられたやうな氣がする出せと云ひつけられたものは無數にゐる。僕もその一人だ君もその一人だしかしあらしは澎湃とした波を煽つてゐるする事はやり切れなく恐しい事だ僕はいい加減な情調や哲學が一時に頭から吹きとばされてしまつたやうな氣がする君はよんだ事があるかないなら是非よんでくれあるのでも昔だつたらもう一度よんでくれすべてが今のまゝでは駄目だ自分も駄目だ日本の文壇も駄目だ

これは學校で書いた興奮してゐるから後でよみかへしたら變な事が書いてあるかも知れないしかし變な事でも書かないではゐられない僕の心もちを知つてゐてくれ紙がなかつたからこんなものへ書いた何だか一時も早く頭の中に持つてゐる「阿闍世王」を書きたくなつたそれにはまだいろんなものを讀まなくてはならないそれが待ち遠い氣もするいら立たしい氣もする　がどうしてもやらなければ駄目だ僕はこれから貧乏しても勉強にさしつかへない丈の金を拵へる僕は新思潮創刊當時の情熱が又かへつて來たやうな氣がする一しよにやらうや

こなひだ谷崎にあつたあいつも恐しい勢で勉強してゐるよ當分は佛教のコスモロギイをやると云つてゐたつけ倶舍をよむのを樂しみにしてゐるんだ僕は今うちから通つてゐる近々鎌倉へ移るつもりだ新

婚當時の癖に生活より藝術の方がどの位つよく僕をグラスプするかわからないひまがあつたら遊びに來てくれ久米があんなになつて見ると僕は君の外に道づれはないこれでやめる又ユーディットなどお

さやうなら

龍

小島君　梧下

一九九　〔二月五日田端から。小島政二郎宛〕

拜啓　お手紙拜見致しました御心配には及びません文債を負ひながら私は相不變ぶらぶらなまけてゐます今日風暖梅香艸堂無客甚泰平です　頓首

二〇〇　〔二月五日東京から。端書、菅忠雄宛〕

拜啓先達はお手紙難有う今日學校で聞くと八幡前の天松と云ふ天ぷらやの持家で停車場から近い所（クロガネ井戸へまがる横町の手前、八幡前の通の裏通り）に一軒あるさうですからそれを見ながらその松の中の家も拜見に出るつもりです日は今度の木曜日の午前にしようかと思ひますもし御暇だつたら御在宅下さいさうして又僕を案内して下さい僕は二月二日に結婚しました　以上

二伸當分田端から毎日橫須賀へ通ひます

二〇一　〔二月十日田端から。加能作次郎宛〕

拜復　とても書けませんよ駄目ですどうか堪忍して下さい天下に辭を一にして斷つてゐるだから已むを得ません

それからいつぞやの愛蘭土神話集の原稿御面倒ながら牛込區東五軒町廿八坂崎侃氏宛書留小包にて御

送り下さい書留小包料は三土會でも御眼にかゝり次第御辨償しますどうか御手數でもよろしく御取りはからひ下さい
とにかく當分書かずに營養分を攝取します　頓首

二月十日　　芥川龍之介

加能作次郎様

二〇二〔二月十三日横須賀から。薄田淳介宛〕

拜復　朶雲奉誦、問題の性質上學校の首席教官とも一寸相談して見ましたが大體差支へあるまいといふ事ですから條件第一で社友にして下さい齟齬するといけないから念の爲その條件を下へ書きます
一、雜誌に小說を發表する事は自由の事
二、新聞へは大每(東日)外一切執筆しない事
三、右二、を大每(東日)紙上で發表して差支へない事但その文中「公務の餘暇なる」字を入れる事(勿論社友と云ふ事でなく執筆を新聞では大每に限ると云ふ事を發表するのです)
四、報酬月額五十圓
五、小說の原稿料は從前通り
これでよかつたらその旨田端四三五私宛返事して下さいいけない場合も同樣田端宛御一報願ひます又目下讀賣の依賴で七枚ばかりの小品を一つ同社の爲に書きましたがこれは契約前のものとお見なし下さい多分今度の日曜附錄にのる筈です小說は私の結婚でちよいと中斷されましたもう四五日待つて下さい早速送ります　以上當用のみ末ながら色々御盡力の御禮を申上げます　頓首

二月十三日　　芥川龍之介

薄田淳介様

二〇三　〔二月十五日田端から。端書、恒藤恭宛〕

御長男の生まれたのを祝す御母子の健康を祈りながら

　春寒く鶴を夢みて產みにけむ

　二月十五日　　　　　　龍　之　介

二〇四　〔二月十五日田端から。端書、松岡讓宛〕

來る土曜日の晩もし都合がよかつたら晩飯を食ひに來てくれないか惡かつたら返事してくれ給へ、僕も生活上「一身がきまる」やうな時期へ來たそんな話もいろいろしたい

　　　　　　　　　　　　芥　川　龍　之　介

一伸ゆうべ奧さんと天ぷらをくひに行つて誰かに上衣をぬすまれた夢を見た

二〇五　〔二月十七日田端から。南部修太郎宛〕

拜啓「三田文學」確に落手致しました就いてはあの帶封にあなたの御名前が書いてありましたがあれはこの次からやめにして宛名も書記か何かに書かせて下さい一々あなたから送つて頂くと云ふ意識が伴ふと何だかお禮を云ふ必要があるやうな恐縮するやうな窮屈なやうな氣がしていけませんそれに僕は筆無精だからとてもさう云ふ心もちを一々行爲で現す事がむづかしさうに思ひますから失禮かとも思ひますが右御禮旁々御斷りまで

　二月十七日朝　　　　　芥　川　龍　之　介

南部修太郎様

二〇六　〔二月二十二日横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

お手紙難有う　又前の松岡先生のお宅を借りる事になりさうです今僕の友人が便所井戸などについて交渉中です　以上

二〇七　〔二月二十六日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

蕊艸庵を鎌倉へ結ぶ事にした庭には蓮池があるそのほとりに芭蕉が五六本いづれも雨を聽くのにはよささうな氣がする海へも餘り遠くない來月十日頃には家移りもすむかと思ふ荊妻と僕と小婢とそれに事によると伯母も來るかも知れないこれから靜に日を送りたいと思つてゐる

敲詩了芭蕉に雨を聽く夜あらむ

芥川龍之介

二〇八　〔二月二十六日田端から。端書、松岡讓宛〕

金曜日は教務打合せ會があつてどうにも休めない二日が駄目だとすると九日の晝間にしたらどうだらうどうもそれより外に仕方がないやうだ本をありがたうあの日の中にうちへ屆けてくれたまだ一枚もよまない　小說は依然として行き惱みの體だ

マドロスパイプを東京へ忘れて來たのでまづい朝日でがまんしてゐる

春かへるおぼつかなさや粉煙草

龍

二〇九　〔三月一日横須賀から。封緘端書、薄田淳介宛〕

拜復　私の新規に書き出したのは十回か十五回の短篇です題は「地獄變」としました今いろん[illegible]俗事に追はれてゐるのでとても長篇の稿はつげません地獄變は四五回出來てゐますから十日兩日中に東京から出來ただけ送ります　やつと借家を見つけたので近々鎌倉へ移りますさうしたら少しは落着くでせう今日東京へかへります東京へかへるのは瀧田樗陰君に原稿の催促をされにかへるやうなものです

淡雲微雨　學校の梅花は滿開です　以上

三月一日　　　　芥川龍之介

薄田淳介樣

二伸　久米にも仰せの旨取りついで置きます

二一〇 〔三月五日田端から。江口渙宛〕

啓　信州上田の人山極恕堂君君に會ひたいと云ふ差支へのない限り御引見下さいその中遊びに行く今小說を書くので毎日うん／＼云つてゐる　頓首

我鬼

水鄉先生　梧右

二一一 〔三月七日田端から。端書、松岡讓宛〕

九日には夏目さんへゆくから君にあへるだらう午頃ゆくもし都合がよかつたら外へ出よう夜は高等學校の會へ顏を出すつもりだ　小說大にしどろもどろになりながら書いてゐる谷崎君の模倣じみて少し氣がさすが元來はそんなものぢやないんだ出來たらよんでくれ　以上

二一二　〔三月十三日横須賀から。端書、菅忠雄宛〕

うちを御知らせ下さいまして難有うございます　が、松岡先生のお出でになつたと云ふ家にもうとりきめてしまひましたから仕方がありませんあすこは井戸水を樋で引き便所も二つ建てましてくれるさうです　來週中にはひきこしますからさうしたらお遊びにお出で下さい先生によろしく　頓首

二一三　〔三月十五日横須賀(推定)から。端書、池崎忠孝宛〕

三士會は忙しくつて出られさうもなくなつた暇に任せて絢爛體の句を作つたから書く

一本の牡丹に暗し月の蝕
蟻地獄隱して牡丹花赤き
眼を病んで孔雀幾日やつくる春
遲櫻極樂水と申しけり

その中に何時か東京で遇はう又僕が越してしまつたら鎌倉へ君が來てもいゝだらうとにかく君の所藏の obscene pictures を見たいと思つてゐるよいのがあつたら買つても可なりだ　以上

この間は御馳走さま　龍

二一四　〔三月二十七日鎌倉から。端書、松岡讓宛〕

その後御無沙汰した愈今度の金曜日にこつちへ轉居する事にした唯土日は相不變東京に行くからその時又鋪物をさがしにぶらついてもいい。この頃横須賀の山は所々に木蓮が咲いて甚風流である。君に遇ふ手續に關しては君の命令通り行動するから田端まで端書をよこしてくれ但都合は日曜の午後が一

番いい　以上

二一五　〔三月二十九日横須賀から。薄田淳介宛〕

拝啓　原稿用紙で失禮します　續稿十枚今日送ります後はもう四五日御待ち下さい　今日これから横須賀を引拂つて鎌倉へ移ります鎌倉の宿所は鎌倉町、大町、字辻、小山別邸内です今後僕に關する用向きは一切こちらへ願ひます　それから今朝爲替で五十圓頂きましたが、あれは例の件の纏つた結果ですか或はこの前の原稿料ですかどちらとも判然しないから伺ひます　新家庭の寫眞では僕の細君は大に不服を唱へて居ますそれから僕の家内一同あなたの御家族のおとしよりが御若い時は嘸美しかつたらうと云つて居ます

久米は伊藤博文を主人公にした小説を書くさうです谷崎君や豐島は何を書くかまだ判然しません　五月の末か六月の始僕は江田島へ出張しますその時は多分大阪でお目にかかれるだらうと思ひます　この頃學校では採點表を作るのに忙殺されてゐますその間に何時か木蓮がすつかり咲いてしまひました横須賀は東京から見ると五度程暖さがちがふやうです御健康を祈ります　頓首

三月廿九日

芥川龍之介

薄田淳介様

二一六　〔四月十三日京都から。繪端書、松岡讓宛〕

鴨東の妓がＴＡＸＩ驅る花の山

傚東洋城先生呑奮體

十三日

嵐山　龍

二一七　〔四月二十四日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　御手紙拜見しました過日來神經疲勞の爲一切讀書きを廢してゐたので例の件の纏つた御禮も申上げず甚恐縮しました實はまだ頭の調子が少し惡いのです「地獄變」は有島さんのがまだ中々すみさうもないから安心してゐたのですあと少しですから勉强して二三日中に送りますあれはいやにボンバスティックで氣に食はない作品ですが乘りかかつた舟だから仕方がありません　その中に「顧眄」と云ふ隨筆を書きますそれがすんだら後で秋にでもなつたら「日本武尊」を書かうかと思つてゐます　とりあへず御返事まで

病中

熱を病んで櫻明りに震へゐる

四月廿四日　　龍　之　介

薄田淳介様

二伸　豐島も一二回は書き居る由久米もとりかかつてゐるさうです　以上

二一八　〔四月二十九日鎌倉から。松岡讓宛〕

拜啓其後愈腦神經衰弱と確定當分一切を拋下して遊ばうかと思つてゐるが公務は相不變多いし（現に「米國の海軍教育」なるものの字句修正をやつてゐる）入學試驗問題調査の期は迫るし悲觀してゐるその爲廿六日も御無沙汰した伯母が東京へかへつたので留守番が細君一人になつたのもその理由の一つだいづれそのうち行く僕をみてゐる醫者は臭ボッをのみ人參をのみ散歩ばかりしてゐろと云ふんだがさううまくは行きはしないおまけにその中で兎に角毎日の小說だけは片づけなければならない始末だ

冷眼に梨花見て轎を急がせし

四月廿九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

讓　様　梧下

二一九　〔五月七日鎌倉から。原善一郎宛〕

拝啓　先達は結構な御祝ひものを難有う
その後相不變貧乏暮しをしてゐます學校の先生をしてゐるのも嫌で仕方がないがさうしないと獨立して食へないのだからやむを得ない甚憫然な次第です
だから小說も尻を据ゑて書けませんよく西洋の小說や芝居には自分の知らない叔父さんか何かが死んで思ひもよらない財產が舞ひこんで來る事があるからさう云ふ事でもあればいゝと思つてゐますこれは僕ばかりぢやない日本の知識階級の人間は皆さうでせうさうしてそれがどの位彼等の活動を拘束するか知れないのです
君のやうに衣食の心配を超越してゐる人はかう云ふ苦しみを知らないんだから結構ですだからそれ丈に又かう云ふ事が珍らしいかと思つてちよつと書きました泣き言のやうで一向珍らしくも何ともなかつたら御免なさい
もう二三日すると東京へ入學試驗の成績調査に出張しますそれから月末に兵學校を參觀に出かけます
中々忙しいその中で書くんだから小說だつて甚氣乘りのしないものしか出來ません
尤も高濱さんを先生にして句を作る位な閑日月はあるのです君がまた俳句を續けてゐるのなら運座でもしませうか

夕しぶき舟虫濡れて冴え返る

不悉

五月七日

芥川龍之介

原善一郎様

二伸　奥さまによろしく

二二〇〔五月七日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓「茶話」難有うございました昨日一日で一氣に讀了しました甚面白く思ひました箚問答の如きはいゝペニソスのある話ぢやありませんかあれを二十枚位に書くと立派な小說が出來さうですあゝ云ふものが每日出る新聞に僕が高給を貪つて時々小品を書くのは少々恐縮ですこれは御世辭ぢやありません茶話を皆讀んで實際さう思つたのです勿論聊情無い氣もしましたさしづめ十回ばかりつゞく顧眄と云ふ隨筆を書く氣ですがどうも變に氣が引けますさう云ふ意味で茶話をよんだのは僕にとつて有害でした地獄變は大に持て餘してゐますあとは二三回で完らうと思つてゐます　一昨日の晩有島生馬君が來ての話に每日の小說をまだ書き上げないので弱つたとか云つてゐましたやつぱり僕のやうに神經衰弱黨の一人なのださうです　以上

五月七日

芥川龍之介

薄田淳介様

二二一〔五月九日横須賀から。菅忠雄宛〕

拜啓　句稿虛子先生へ御見せ下され度願上候猶その節いづれ參上仕る可き旨よろしく御申し傳へ下され度目下の所多忙の爲殆寸暇を得ず句も大抵は往復の汽車の中にて拈來拈去致居候明十日より入學試驗檢べの爲上京十六日迄止る可く候　以上

五月九日

龍

忠　雄　様

二二二　〔五月十五日田端から。薄田淳介宛〕

地獄變やつと退治しました皆で七十三枚か四枚だと思ひます稿料は鎌倉の方へ御送り下さい　目下僕は入學試驗委員で東京へ來てゐます毎日中々忙しい
隨筆は五六回續くものでもいゝのですか長すぎれば二三回に切りつめてもよろしい　踏繪は中々出來ません元來春の季題だから初夏になつては駄目らしい
　傾城の蹠白き繪踏かな
　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍
薄　田　様　梧下

二二三　〔五月十六日田端から。小島政二郎宛〕

拜復　入學試驗準備で五六日東京へ來てゐました今日午後鎌倉へ歸ります
地獄變はボムバスティックなので書いてゐても氣がさして仕方がありません本來もう少し氣の利いたものになる筈だつたんだがと毎日、新聞を見ちや考へてゐます　御伽噺には弱りましたあれで精ぎり一杯なんです但自信は更にありませんまづい所は遠慮なく筆削して貰ふやうに鈴木さんにお頼んで置きました
多忙は申上げる迄もありませんけれど時々學校まで雜誌記者氏に襲はれるのには恐縮しますそれが皆押しが強いので此頃大分一々會つてゐるのが損なやうな氣がし出しました　文章倶樂部か何かの文章觀（諸家の）を見ると皆「雨月」を褒めてゐるでせうあれは雨月の文章が國文の素養のない人間にもよく判るからなのです王朝時代の文章に比べて御覽なさい雨月の文章などは隨分古口氣泥臭味の多い文章

ですから
序に書きますが雨月の中では秋成が「ものから」と云ふ語を間違つて「なる故に」の意味で使つてゐる所が二つあるさうですこれは谷崎潤一郎氏に聞きました一つは確「白峯」でしたあんな學者ぶつた男が間違つてゐるんだから可笑しいでせう
此頃高濱さんを先生にして句を作つてゐます點心を食ふやうな心もちでです一つ御目にかけませうか
夕しぶき舟虫濡れて冴え返る
頓首
五月十六日
芥川龍之介
小島政二郎様

二二四 〔五月二十日横須賀から。端書、池崎忠孝宛〕

又君に會ふ機會を失したのを遺憾に思つてゐる　その中に出張を仰せつかつて關西に行くがこの頃の暑さぢやどうもあんまり難有くない一向にこの頃怠けてゐる
罪深き女よな菖蒲湯や出でし

二二五 〔五月二十九日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　突然明日から十日ばかり關西出張を仰せつかりました來月の四日か五日位までは參觀で忙しい思をするでせうその以後一度大阪で御目にかかりたいと思ひますどうせその間京都にゐる筈ですから宿から一應御都合を伺ひますが
體島ももう原稿はお送りした事と思ひますいづれ拜眉の節いろいろ申し上げる事もありませう　頓首
五月廿九日
芥川龍之介

薄田淳介様

二二六 〔六月四日厳島から。繪端書、菅忠雄宛〕

出張でこゝへ來ました宮島は箱庭です一向感心しません體を大事にして精々御勉強なさい　以上

四日　　芥川生

二二七 〔六月四日厳島から。繪端書、江口渙宛〕

僕にこのべらぼうに澤山の杓子が怪物じみて甚無氣味だつた

六月四日　　龍

二二八 〔六月十日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　過日來阪の節はいろいろ御親切な御もてなしに預り難有く御禮申上げます　相島様菊地様はじめ皆々様へよろしく御鳳聲下さい　猶小生の句三句我鬼と云ふ名で今月のホトトギスに出てゐますから相島さんの一驚を博したいと思つてゐます　以上

六月十日　　芥川龍之介

薄田淳介様

二伸　二三日中に「光悦寺」と「舞妓」と二つ短い一回分位の随筆を送ります小説と小説とのつなぎにでもして下さい「顧問」はそのあとにします　あの日例の龍村氏とえもん町へ行つて酒をのみました藝者は京都より大阪の方が美人ですね皆三十に手のとゞきさうなお婆さんだつたが大分敬服しましたあすこから宗右衛門町あたりは東京あたりの狹斜と又ちがつてゐて面白い　一體大阪の町もぶら／＼歩いて見ると町らしい中々面白い景色が見つかります第一川が美しいあれで成金さへ

ゐなければもつと好い所ですが

龍

二二九　〔六月十一日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

京都や大阪で大分人に會つたり畫を見たりした藝者は京都より大阪の方が美人が多いね一人大阪の藝者にちよいと惚れたよ大阪の町は夕方から夜へかけて川が中々美しいあれで成金がゐないともつと好い處だがなその中に會つて駄辯りたい　頓首

二三〇　〔六月十一日鎌倉から。小林雨郊宛〕

拜啓　過日來滯洛中は種々御世話樣になり其上御馳走樣にまでなり難有く厚く御禮申上げます光悦寺紀行もう脫稿の上發送しましたから近日活字になるだらうと思ひますさうしたら御讀み下さい尤も大分君もその中へ引き合ひに出ました

さて歸つて來ると又平凡庸俗な生活が始まるのには閉口です殊にこの頃の溫氣ぢや私如き人間は何をする勇氣も起りません　いづれ近日中君が東京へ來られるか私が京都へ行くかしてお目にかゝれるだらうと思ひます何ならこつちへ出ていらつしやい鎌倉なら一通りの御案內は出來さうです　頓首

六月十一日　芥川龍之介

小林雨郊樣

二三一　〔六月十八日鎌倉から。池崎忠孝宛〕

前の日まで行くつもりだつたが雨がふり出したので面倒臭くなつてやめちまつた大分方々へ御無沙汰をした爲會ひたい人が出來たが君には特に會ひたいどうも君の駄辯を聽かない事一月に及ぶと生活力が萎びてくるらしい　この前の手紙にいかんよ僕の方の敎官の一人が芥川さんどこかの御婦人から手

紙が來てゐますつて云つたぜ僕はひやりとした
今大へんな探偵小說を書いてゐる　さうさう序でだから御注意申すが君のフロオベエル論の中にプロシヤ軍がヴエルサイユへ向つて進むと云ふ句があつたがあれはいかん當時の王宮はテユイルリイにあつたのだ
此頃は毎週かへるが應事多忙で人を訪ねるひまもない來々週の weekend にでも君と會はう　頓首
六月十八日　　龍
赤木桁平樣

二三三　「六月十八日鎌倉から　端書三枚、小島政二郎宛」

小島さん
三田文で褒めて下すつたのはあなただと云ふから申し上げますあの作品はあなたのやうな具眼者に褒められる性質のものぢやありませんこの間よみ返して大分冷汗を流しました
それから說明と云ふ事に就いて私の文章上の說明癖なるものはそれが鑑賞上邪魔になるとあなたが云ふ範圍では so far 私も抗議を申し込む資格はありません然し「あの小說の中の說明」になると私にも云ひ分がありますと云ふのはあのナレエシヨンでは二つの說明が互にからみ合つてゐてそれが表と裏になつてゐるのですその一つは日向の說明でそれはあなたが例に擧げた中の多くですもう一つは陰の說明でそれは大殿と良秀の娘との間の關係を戀愛ではないと否定して行く(その實それを肯定してゆく)說明ですこの二つの說明はあのナレエシヨンを組み上げる上に於てお互にアクテユエエトし合ふ性質のものだからどつちも差し拔きがつきませんそれで諄々しいがああ云ふ事になつたのです勿論そこには新聞小說たらしめる條件も多少は働いてゐたでせうこれは不純と云はれれば不純です　がこの方は大して重大な問題にはならないでせう

最後に三田文は八月(九月でもよろしい)にして頂けないでせうか昨日歸つたばかりでまだ一向落着きませんその爲新小說も新時代も前約に背いて御免を蒙りました大分前から引き受けたので大に恐縮ですがよろしく御取計ひ下さい書くものはきまつてゐます「龍の口」と云ふ怪しげなものです今日鈴木さんの御伽噺の雜誌を見ましたどれをよんでも私のよりうまいやうな氣がします皆私より年をとつてゐて小供があるからそれで小供の心もちがうまくのみこめてゐるのだらうと思ひます失禮ですがあなたはもう奥さんがおありですか

もう少し私の旅行時期が早いと大阪ででも落ち合へたのですね　以上

芥川龍之介

二三三　〔六月十八日鎌倉から。端書、小島政二郎宛〕

前の三枚のはがきを書いちまつてさてあなたの住所を忘れたので困りましたそれから困つたなり一週間ばかりすぎました困つてゐる事は依然として同じですそこで窮餘の一策として出たらめな番地を書きます賢明なる郵便脚夫氏はどうにか君の所へとゞけてくれるでせう　以上

二三四　〔六月十九日鎌倉から。松岡讓宛〕

拜啓　旅行からかへつたらがつかりした中央公論に探偵小說を書く約束をしたのでいやいやへんなものを書いてゐるどうも才能をプロスティテュウトするやうな氣がして心細くていけないそれに探偵小說のつもりで書いてゐても探偵小說でなくなりさうなのだ

それから大分前から欲しがつてゐるのだが先生の「遺墨」を二三册頂けないか勿論實費で　京都や大阪であつた人は皆眞面目に先生の書を認めてゐたよ何でも京都のどこかに先生と津田さんと合作した畫帖があるんださうださうしてその畫帖を見ると技巧はまづいが書品は遙に先生の方が高いのださうだ

僕の如きは前からさう云ふ意味で先生の畫に敬服してゐたから甚だ氣が強くなつた東京に[illegible]の香取先生の如きは先生の畫に大に推服してゐる

御面倒ながら遺墨の件返事たのむ僕の分を人に送る約束をしたので一册も貰へないとなると困るからだよろしく願ふ　以上

十九日朝

芥川龍之介

松岡讓君

二三五　〔六月二十三日鎌倉から。端書、小島政二郎宛〕

拜復弟さん御逝去の由新聞で拜見御悔み申し上げます

私のはがきあれで御役に立つなら何時でも活字になさい但あまりし榮えはしませんよ

鈴木さんのは假名と漢字の使ひ方ばかりでなくすべてがうまいやうですとてもああは行きません　今度亦鈴木さんのおだてに乘つて一つ御伽噺を書きました出たらよんで下さい

德田秋聲小山内薰誠は小島政二郎などは驚きます昔の狂言にだつてそんなのはありますまいどこかのゴシップで「面あかり」を出して上げませうか　頓首

芥川龍之介

二三六　〔七月二十日鎌倉から。小林雨郊宛〕

拜復　來雲奉誦　京都紀行は近日の日曜附錄に載る筈紙面の都合で延びたのです　京都行も此頃の暑さでは到底決行する勇氣がありませんそれから少し長いものを書かうと云ふ野心もありますだから私などにかまはずに御旅行なさいさうして大に面白い所があつたら教へて下さい私も暇があつたら出かけますから　鎌倉へはこれから久米赤木などと云ふ連中が來る筈です皆で素人藝の半截を描いて展覽

會をしようなどと云ふ恐しい計畫もありますが實行するかどうかわかりません
あなたの所で見た仙崖が面白かつたから鎌倉へ歸つて探しましたさうしたら一つ見つかりましたが甚怪しいから見合せました妙な福祿壽のやうな動物の上に歌か何か書いてあるのです　北淸がすんだらこつちへ御出かけなさい建長や圓覺は又京都とはちがつた寂びのある寺ですから　頓首

即興
鎌倉は谷々月夜竹の秋

七月廿日

芥川龍之介

雨　郊　先　生　梧下

二三七　〔七月二十二日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　久米はさう云つて置きました二三日にあの男も鎌倉へ來るさうですさうしたら小說も出來るでせう　この間泣菫文集と云ふものをひつくり返して見たら「光悅寺」の事が出て來たから驚きましたあなたは茶席の出來ない前に行つたんだから甚幸福です
今日の新聞に出てゐる後藤外相の晚餐會の席上で里見君が三鞭酒と白葡萄酒と間違へたと云ふのは誤聞ですあの會は色々な意味で面白かつた誰かあすこにゐた連中が小說に書くと好いと思ひます　その中又何か書きませう

晝の月霍亂人の目ざしやな

鎌倉も暑くつてやりきれません　頓首

七月廿二日

芥川龍之介

薄田淳介様

二伸　地獄變評を書いたのは小島政二郎氏だから驚きますそこで僕が抗議を申し込んだらその又

手紙が活字になつて現れました

菊池寛と云ふ男も僕の友だちなのですがその中に何か一つ毎日に書かせて見ませんかそんなに悪いものは書くまいと思ひます

二三八　〔七月二十三日鎌倉から。端書、江口渙宛。江口旬庵樣とあり〕

連句をしに來い

見本左の如し

ほし店や名所饅頭黄金飴　龍
飛ぶ蝙蝠も松にかくるゝ　正
鳥居から八幡までの天の川　〃
馬にひきそふ太刀取の役　龍
大町や積蓼の上に雲の峯　〃
異人の妻の日傘から傘　正

暇だつたら是非來い。(正)「來い(龍)」

二三九　〔七月三十一日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜復　菊池へ云つてやつたら新聞社へ出てゐるので新聞へは書けなからうとか云つて來ました猶當人から御返事申すだらうと思ひます　久米は東京日々の誰かと長篇を書く約束の下相談だけある由これも當人から何とか申上げるでせう何でも後藤外相の招待會は己が書くよとか何とか云つてゐました八月一杯は少しむづかしいかも知れませんが書きたいものがあるから書きます題は日本武尊か或は素戔嗚尊　鎌倉はもう避暑客で一ぱいです　頓首

日傘人が見る砂文字の異花奇禽
七月卅一日
芥川龍之介
薄田淳介様　梧下

二四〇　〔八月十三日鎌倉（推定）から。南部修太郎宛〕

一筆啓上　御賴みの原稿漸脫稿なまけ者の事とて延び〻〻に相成申訣無之候　但「龍の口」はまだ孵らずやむを得ず見合せ候　猶御閑暇の節は御來駕下され度願上候　これから新小說の小說にとりかゝる所大急ぎにて如斯候草毫粗紙よろしく御判讀下さる可く候　頓首
八月十三日
芥川龍之介
南部修太郎様

二四一　〔八月二十五日鎌倉から。和氣律次郎宛〕

拜啓　あなたとはあなたの本を古本屋で買つて以來の御馴染だから序文位は御引受け申してもよろしい但あなたが本をデディケートする女性なるものは私の小說が好きだと云ふ御話しだがそれは作品の上で人間はあなたが一番好きなんだらうと思ふさう思ふと聊心細い氣がします　頓首
八月廿五日
芥川龍之介
和氣律次郎様

二四二　〔八月二十七日鎌倉から。小島政二郎宛〕

拜啓　この間は失禮あのあとで皆で電車通りへ出たら十一時頃なのにも不關まだ電車があつたんだから驚きましたこの頃は料理屋の帳場さへ信用に關る噓を平氣でつく世の中と見えます

運座の結果ははつきり覺えてゐませんが君のだと思はれる句が二句ばかり拔けたやうでした當日は菊池も忠雄さんもゐないのでとうとうとらずじまひ

あの節一寸御話したやうにもし僕が東京へ舞ひ戻れる機會があつたら然る可く僕の爲に運動して下さい目下愈〻地方の小都會氣風がいやになつてゐる所ですから

運座の節作つた僕の句を書きます但皆出たらめですよ

　淺草の雨夜明りや雁の棹

　雁啼くや廓裏畠栗熟れて

　雁の棹傾く空や晝花火

　藩札の藍の手ずれや雁の秋

その外久米の句に

　米一揆がんがら雁の雲の下

　新小判青くも鏽びぬ月の秋

江口の句に

[illegible]　明眸は君に如くなし月の秋

これは勢以子女史に獻じたんださうですから大に色氣のある句なんでせう君の句を書いて送りませんか　今度東京でもう一ぺんあんな顔ぶれで運座をしたいと思ひます南部さんは句作しませんか　頓首

　八月廿七日　　　　　　　　芥川龍之介

　小島政二郎樣　梧下

二伸　往復はがきの件早速南部さんの方へ返事しましたいろいろ御手數難有う

二四三　〔八月三十日鎌倉(推定)から。端書、小島政二郎宛〕

「よしず」の句至極結構ですあの晩僕の外にも二三人あれを拔いたかと思ひます　愈〻來月から田舍教師職がまた始まるんだと思ふとうんざりします實際一日も早く東京へ舞ひ戻りたい

ふるさとを思ふ病に暑き秋

二四四　〔九月三日鎌倉から。南部修太郎宛〕

拜啓　原稿の事で色々御厄介をかけ甚恐縮です雜誌今日屆きましたその御禮も序に申上げますその中に何かの機會で御目にかかりませう　今月の三田文學の六號にあなた（だらうと思ふ名前から見當をつけたのだから間違つたら御免なさい）の書いた中で中央公論の祕密と開放號の件は大に異見を持してゐるからそれもその節高見を仰ぎますと云ふと大袈裟だがあれで私も退治されてゐるとなるとあなたにその不平を開陳しようと云ふのです今は忙しいから遺憾乍ら辯じてゐる暇はありませんこないだ小島君が來て一しよに泳いだり運座をしたりしました鎌倉はもうまるで秋です　頓首

九月三日　芥川龍之介

南部修太郎樣

二四五　〔九月四日鎌倉から。小島政二郎宛〕

拜復　今御手紙拜見しました假名使ひは元來私の甚不得手な點なんだから今後よろしく御教導を仰ぎます私のし易い誤謬は是非私に話すか書くかして知らせて下さいさうすると非常に助かります作そのものは唯今の所多少の自信があります私としては好い方でせう　原稿料は一切御心配には及びませんいくらでもよろしいそれほどまだ商賣氣のある作家にはなつてゐないのです東京舞戻りの件何分よろしく願ひます　今月の早稻田文學で誰かに私は大にやつつけられてゐるさうですねわざわざ友だちが知らせてくれましたあすこには豪傑が大ぜいゐすぎるからちよいとその號を

買つて見る勇氣も起りません
小説を一つ書くことは恥を一つ書く事だとお思ひなさいさうすればどんどん書けます是非お出かけなさい今客と一しよに酒を飲んだあとですこの頃又東京が戀しい

即興

松風や紅提灯も秋どなり

九月四日　　芥川龍之介

小島政二郎樣梧下

二四六　九月十九日（推定）鎌倉から。端書、江口渙宛」

（流るるは夕鷺か橋の下）

拜啓　御面倒乍ら佐藤春夫氏の小説をよんでインスピレーションを得たいから帝文前月號送つてくれないか僕は「袈裟と盛遠」式のものを書きためて Men and Women のやうなものにしたいと思つてゐる計畫ばかり色々立ててゐるが一向實行されさうもないこの頃すつかりブラウニング信者になつた
以上

二四七　「九月二十二日鎌倉から。小島政二郎宛」

拜啓　あした一日休みがあるから御伽噺をやつて見ますどうせ好い加減ですよそれでようござんすか「奉教人の死」の二二はね内田魯庵氏が手紙をくれたのは久米から御聞きでせう所が今日東京にゐると東洋精藝株式會社とかの社長さんが二百圓か三百圓で讓つてくれつて來たには驚きました隨分氣の早い人がゐるものですね出たらめだつてつたら呆れて歸りました慶應の件來年から海軍擴張で生徒が殖え從つて時間も增すのと戰爭の危險も略〻なささうなのとで急に每日の横須賀通ひが嫌になつたので

す來年の四月頃からでも東京へ舞戻れれば大慶この上なしそれときまれば今年末位にこつちをやめて三ケ月位遊ばうかと思つてゐますさう云ふ次第だからよろしく御取り計らひ下さいもし必要なら上京の節澤木氏に御目にかかつてもいゝと思ひます何しろ横須賀はもう全くいやになつた　以上

黒き熟るる實に露霜やだまり鳥

これはこの間虚子の御褒めに預つたから御らんに入れます

九月廿二日　　　　　　　　　　芥川龍之介

小島政二郎様　梧下

二四八〔十月九日鎌倉（推定）から。池崎忠孝宛〕

先達は失敬した　朝らくに汽車に間に合つてかへつた但 frau や僕のうちへは君の下宿へ厄介になつた事にしてあるから然る可く心得てくれ給へもし今度の日曜にでも君が來た時僕のうちでその禮でも云つてバツが合はないといけないから特に斷つて置く次第だ

この頃非常に遊び廻りたい氣がしていかん　日曜にはなる可く來給へ　さやうなら

十月九日　　　　　　　　　　龍

赤木平先生

二四九〔十月十日鎌倉から。端書、菅忠雄宛〕

枯野抄骨を折つたものですから世評に關りなく自分では或程度の滿足を持つてゐますまた胃が惡くつて弱つてゐます尤も甘いものを食ふのは少しも前と變りませんどうもだん〳〵惡くなるやうです

頓首

二五〇 〔十月十四日横須賀から。小島政二郎宛〕

拝啓 御伽噺は甚いゝ加減なもので恐縮し切つてゐます長い方が短いのより餘程わけはない「蜘蛛の糸」の方がもつと苦しみました それから目下御尋所か甚心もとないのですが御都合で御金が貰けたらこちらへ送つて下さい もう一つ例の件もし纏るものなら來月一ぱい位に辭表を出したいと思つてゐますからその方もよろしく願ひます
この頃京都の知つてゐる畫かきから龔半千の山水畫帖を送つてくれました御暇の節田端へ御出でなさいませんか御らんに入れますこの前の日曜は田端で一日ごろごろしてゐましたきりして

桃の花青雀今日も水に來ぬ

菊の酒酣むや白衣は王摩詰

と云ふやうな句を澤山製造しました句としての面白味は兎も角も匇忙たる塵務に疲れると僕はかう云ふ境地が戀しくなるのですこれはあなたなら同情して貰へると思つたから序にちよいと書き加へましたこれでやめます

即興

笹鳴くや雪駄は小島政二郎

十月十四日

龍

二五一 〔十月十六日横須賀から。松岡讓宛〕

大分御無沙汰した この間眼を悪くしたので君の眼病を想到したボクのは唯煙草をのむのでマッチをすつたら火が眼の玉へとびこんだのだそれで大分眼かくしをさせられて弱つた片つぽしかないと本をよむんでものを書くんでも見當がつかないそれでももう癒つた癒りすぎて東京へ行くときれいな女

ばかり目に立つていけない
これから書くものがたまつてゐるのにも弱つた 2/3 はちつとも書きたくないものばかりだそんなものよりボクの今描いてゐる南畫の方が遥に有意味だと思ふんだがこれは誰も買つてくれないから仕方がない　皆さん御變りはないか奥さん(小さい方の)に子供が出來たと云ふ事を菊池にきいた御目出度くつて結構だボクの所は形迹杳然だ房事過度のせゐぢやないかと思つてゐる但これは人の程度を知らないからだよ
俳句は非常に上達して目下大に新進俳人氣分を漂はせてゐるもう菊池なんぞ眼中にない　新思潮を見たかいいつどうしたかわからない中に五代目が出來たので少し面を喰つたどうも鎌倉にゐると自然疎外される形になつていかんしかもあの六號をよんだ時は聊生意氣だと思つた小說は我々の時代とは段がちがふと思ふが贔屓眼だらうか「異象」の方がずつと好いやうに思ふ何でも今に我々を今の新思潮でよんで御馳走するとか何とか云つてゐるさうだがまだ一向御招待をうけないその代り原稿を書けと云ふ命令が來た斷つた　この頃しみじみ横須賀がいやになつてゐる　以上

十月十六日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

忝 嵩 讓 様

二五二〔十月十八日横須賀から。小島政二郎宛〕

御手紙並に御金確に落手いろ〳〵御手數ありがたう御ざいました
「赤い鳥」卷頭の鈴木さんの御伽噺うまく書いてあるので大に感心、たとへば野上さんのなどにくらべるとまるで段がちがつてゐますあれは技巧がうまいとか何とか云ふ問題ぢやありませんもつと本質的な表現上の大問題に原因してゐるのです何と云つたつて三重吉だよと自分の御伽噺が蹣跚としてゐる丈に餘計敬服してしまひました　あなたの水滸傳は以下九紋龍が靑州かどこかで囚はれて梁山伯の同

勢が助けに行く所まで書くのですかあれはああ書きこなしたから進むんだからそこまで行くのは大變でせう少し心配になつたから伺ひます尤もそこまで押し通せればそれ丈私の敬服も增加する次第だから御遠慮なくどんどんおやりなさい
學校の件はよろしく願ひますこの頃半分がたもう東京へ舞ひ戾れた氣になつてゐるんだから出來損ふと少々心細い何しろ來年から生徒が殆三倍近くも殖えて授業時間も今の倍以上になるんだと云ふから大變です然る可く御察し下さい
王摩詰は王維ですあの人の詩は淡々としてゐてしかも無限の趣があつて甚よろしい尤も赤木桁平先生などは惡く云ひますが、私には彼の惡く云ふ所が好きなのだから仕方がありません
私が三田の先生になれてあなたも三田へ來られると大に氣が強くなるからなる可くあなたもさうされん事を希望します但これは私の氣が強くなる事を本意にした說なんだからあなたの一身上の問題に影響を與へる資格なぞはなささうですしかしそれがあなたにとつてもよい限りなる可くさうおしなさいと勸めたいのです我々が皆一しよになつてゐたらそこに起るお互の人格上の影響から別々にゐたのでは出來ない何かが生れさうな氣はしませんかさうして事によるとそれが我々の痕跡を後代に殘す事が出來さうな氣はしませんか　卽興の句はちつとも惡意はないのですよあれはあなたの印象をその儘句にしたのですちよいとうまいでせう　以上

龍

小島様

二五三〔十月二十一日横須賀から。小島政二郎宛〕

拜復　昨日東京から歸つてあなたの手紙を見ました學校の件いろいろ難有う俸給は勿論東京へ行ける事が目的なんだから少し位少くつても差支へありません休日二日とれなくば一日でもよろしい（僕の

方來年の四月位から休日は日曜ぎりになりさうな形勢なり）時間は今持つてゐるのが一週五時間その前は十二時間、この十一月から十二月頃までは六時間その先は三月まで八時間と云ふ風に一定してゐないけれどまあ一週八時間と云ふ所が通常です尤も僕の方は御役所式で朝八時から午後三時まで時間の有無に關らず縛られてゐるのだからそれが一番苦になるのです今なぞはまるで授業のない日が二日もあるがやはり汽車へ乘つて横須賀まで出かけなければならない右樣の次第で十時間以上の授業時間があるにしても授業がない時歸れればその方が僕には難有いのですその邊の事情も御都合で澤木さんまで云つて下すつてもよろしい何しろ四月から先になると海軍擴張が始まりさうなので弱つてゐるのですどう考へても僕の機關學校へ就職した理由と海軍擴張とは根本に於て相容れさうもない俗用を長々と書いたら肩が張つていやな氣になりましたこれから少し泰平な事を書きます

今度の日曜は上京するから遊びに來ませんか龔半千の外に大雅と蕪村との十便十宜がありますこれもちよいと敬服に價するものだからその節御らん下さい謝春星先生もえらいがやつぱり頭の下るのは九霞山樵ですな實際大雅と云ふ男は畫聖の名を辱めない人間です僕は雪舟にすら院畫らしい鋭さを嗅ぎつけますが、大雅に至つては渾然としてゐて更にさう云ふ所が見當りません東洋の畫の難有味を味得しようと思つたら大雅を見るのに限ります　僕の小說は久米が急に完つたので大急ぎで今日一回書いて送りました久米は「芥川をおどかしてやるんだ」と稱して完にしたんださうです怪しからん次第だがかうなつて見るとやむを得ないからこれから晝夜兼行で書き飛ばします勿論社の方の注文は早い事と或きまつた長さ（三十回乃至四十回）とを要求してゐるのですからその範圍でうまいものが出來るかどうか覺束ない次第です　菊池に聞くと時事の安樂椅子で僕が褒められたり退治されたりしてゐるんださうですが神奈川版にはあれがのらないから非常に長閑でよろしい新聞小說も月評子の舌頭に轉ぜられないのが僕には何よりも結構です

いくら書いても際限ないからやめます　以上

學校にて　芥川龍之介

十月廿一日

小　島　様　梧下

二五四　〔十月二十四日横須賀から。端書、小島政二郎宛〕

もう一度御さそひ申しますが日曜に來ませんか午後だと猶結構です江口も來るかも知れません僕は原稿に追はれてゐるので一日の清興を恣にしたいのです　頓首

十月廿四日　芥川龍之介

二五五　〔十月二十四日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　今度ばかりはあなたにも御迷惑をかけて恐縮したし私自身も狼狽して一方ならず弱りました手は神經痛だし眼は一方燐寸の火がはねて繃帶してゐるしするから一重に久米の義俠心に依頼してなる可く小說を長く書いてくれと頼んであつたのですが彼はそれを全然無視して一つ芥川を面食はせてやるんだ」とか何とか云ふ調子で急に十回にしてしまつたなどとは實に不埒だと心得ます私の大阪每日新聞社に負つてゐる責任は半分がた久米の爲に損害を蒙つたと申してもよろしい　が、やつと間に合はせましたからこれからは每日中絶せずに書いて行きます尤も右樣の次第で少々急ぐ必要があるから出來榮は始から餘り自信がありません今日五回へはいつてやつと本文へとりかかつたがどうも是非が甚怪しいのです插畫を描く名越さんに對しても甚面目ないがどうも大目に見て頂く外はありませんしかもあれを書いてしまつてから五つ斷つてまだ二つ殘つてゐる新年號へ何か書かなければならないのだから全く心細くなりましたあれも精々長く書きますがさう無際限にも延ばされないから然る可く後の小說を御準備下さい何時か有島生馬さんが御社から依頼を受けたやうに聞いてゐましたがまだ出ないやうに思ひますもし有島さんだつたら私から手紙を書いて懇願してもよろしい何しろ羽織が引か

れないで何時までも高座に控へてゐるのぢや冷々していけません
御詫び旁〻やつと手紙を書く暇を得て　以上
　　即興
　原稿はまだかまだかと笹鳴くや
　　十月廿四日朝
薄田淳介様

二五六　〔十一月三日鎌倉から。端書、小島政二郎宛〕

スペイン風でねてゐます熱が高くつて甚よわつた病中髣髴として夢あり退屈だから句にしてお目にかけます
　凩や大葬ひの町を練る
まだ全快に至らずこれもねてゐて書くのです　頓首
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

二五七　〔十一月五日鎌倉から。端書、小島政二郎宛〕

退屈だから又これを書きますお互にこの風はいゝ加減に御免を蒙りたいもんだ尤もかう云ふ事があるといろんな餘技を恣に出來て便利です今日も床の上で繪を描いたり句を作つたりしましたこの歌もその際の產物です
　向つ尾に二もとある松朝燒くる空をいたしと二もとある松
　朝燒のほのめく所向つ尾の二もと松はゆらぐともせず
それから小說集の名「傀儡師」にとりきめました外にもいろいろ考へたのがありますがどうもこれが一

番よささうですいけませんか　以上

芥　川　生

二五八　〔十一月九日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　四回送りました　この頃やつと話をしつかり進行させられるやうになつて來ましたどうも今までの所は氣に食はないこれからはもう少し小說らしく動いて行きます何しろ今までが今までだから評判は惡るかないかと思つて大に社の爲に氣づかつてゐますそれから名越さんの插畫も內容より上等なので恐縮ですあなたからよろしくその恐縮の意を御傳へ下さい今度ばかりは實際少し評判が氣になり出しましたインフルエンザは御用心なさいなつたらちよいとでも無理をしちや駄目ですよ忽猛烈にぶり返します私も起きて一回原稿を書いたんでひどい目にあつたのです島村さんもさうだらうと思つてゐます昨日床をあげました

病中鬖髴として夢あり

凩や大葬ひの町を練る

十一月九日　　　　　　　　龍

薄　田　學　兄

二五九　〔十一月十七日田端から。小島政二郎宛〕

昨日は留守にして失禮致しました夜歸りました履歷書同封で御送りします然る可く御取り計らひ下さい實は今日これを持つて上るつもりでゐましたが雨が降つたので勇氣が挫けました今夕又鎌倉へ歸ります當用のみ　以上

十一月十七日

芥　川　龍　之　介

小島政二郎様

二六〇〔十一月二十日鎌倉から。齋藤貞吉宛〕

君の手紙を見て大に久濶を感じたさうして甚だ愉快だつた僕の本は三種あるが横須賀では手にはいらない今度の日曜東京へかへるから送ります（尤も一册處女作品集は絕版になつてゐるかも知れない）皆あんまりうまくないがまあ友だちが書いたんだと思つて讀んで見てくれ給へ

西川は相不變こつこつ農科大學の硏究室へ通つて勉强してゐる中原は少々道樂をしてゐると云ふ噂だが詳しい事は知らない飯塚は確か外國語學校を卒業した筈だこれも一向消息に通じてゐない筒井は久住と姓をかへて沖商會の重役になつてゐる山本は三菱へ出て目下支那遍歷中あとは誰がどうしてゐるんだかさつぱり知らない僕も支那へ行きたいんだが銀相場は上つてゐるし金（カネ）は更になし行きたい行きたいだけで暮してゐるその點で君などは大に羨しいよ一體上海ぢや一月いくらで暮せるだらう安ければ僕も一月位行つてゐたい金瓶梅を始め痴婆子傳、紅杏傳、牡丹奇緣、燈蕊奇僧傳、歡喜奇觀などの淫書をよむとどうも支那人の開化した野蠻性が面白くなつて來る上海の本屋であゝ云ふ淫書が澤山出てゐるらしいがもし上記の外のものがあつたら送つてくれ給へ金は大金でない限り送るから

來春上京の節は是非一度拜顏の榮を得たい僕は日曜を面會日にしてその日は東京市外田端四三五僕宅にゐるあとは神奈川縣鎌倉町大町辻僕宅にゐて學校へ通つてゐる手紙は鎌倉の方へ貰つた方が便利です手紙も時々はよこし給へ僕も精々勉强して書くから何か面白い話があつたら手紙の中へ書いてくれ給へこの頃材料拂底で皆弱つてゐる一體日本の小說家は貧弱で碌な生活が出來ないからそれで早く行きつまるんだ事によると小說家になる前に實業家か何かになつてうんと金を儲けて樂に生活出來るやうにするのが何よりも急務かも知れない

今谷崎君が上海邊へ行つてゐる時分だと思ふもしこの手紙がついた後で君が彼に遇ふ機會があつたら

僕の友人だと云つて彼と話して見給へ頭の善い江戸つ子肌の面白い男だから　これでやめる　さやうなら

學校にて　芥川龍之介

十一月廿日

西村貞吉君

二六一〔十一月二十一日鎌倉から。小島政二郎宛〕

拝復　色々御手數難有うございました私如き曖昧な才能の所有者があれ程の御手數をかけるに價するかどうか考へると少々心細くなつて來ます何だか君に買ひかぶられてゐるやうな氣がして甚恐縮に感じて仕方がないしかし買ひかぶらせようと努力した覺えはないんだからその點で僕は安心の尻を落ちつけてゐますどうか今後も然る可く御取計らひ下さい目下書きたくもない小說を書くので晝も夜も忙殺されてゐます尤も日曜はその息ぬきに東京へかへつて人に會ひます句は全く作つてゐる暇がありません強ひて出たらめを書けば

縫箔の糸に今朝冬の光り見よ

十一月廿一日　龍

小島政二郎様

二六二〔十一月二十四日田端から。松岡讓宛〕

拝啓　君が肺炎で入院したと云ふ事は人が知らせてくれた當時僕もインフルエンザのぶり返しでひどく衰弱してゐた辭世の句も作つたその位だから遙に君の病氣はどうだらうと氣づかつたその後やつと元氣を恢復して一昨日京都の井川君が久しぶりで鎌倉へ來たのと一しよに東京へ來た井川君もあひたいと云ふので菊池をたづねたさうして君がもう心配はないと云ふ事を聞いた安心した御互に今度は命

拾ひをした方だらうと思ふ僕の辭世の句は
　見かへるや麓の村は菊日和
と云ふのだ今はもうピン〳〵して原稿を書いてゐる君も大事にし給へ今日は井川君御夫婦が來るので一日外へ出られない　頓首
　十一月廿四日　芥川龍之介
松岡讓様

二六三　〔十二月八日田端から。下島勳宛〕

敬啓　今日上つて御診察を願はうと存じました處朝から人が參りつゞけにて上る事が出來ず不本意ながら是より漱石先生第三回忌逮夜へ參りそれより鎌倉へ歸る事に致しますインフルエンザ後少々咳が出つゞけ肺病ではないかと心配して居るのですがとうとう御診察を願へず又一週間教室の白墨の埃を吸ふ事故大に心細く感じて居ります
長々拜借の十便十宜難有御返却仕ります本日持つて上る所右様の次第にてこれも不本意ながら使に持たせて差上る事になりました大雅の耕便汲便釣便濯農便防夜便眺便などは世界中どこへ持つて參つても比類ない傑作と存じます蕪村も筆力縱橫孤峯頂上に向つて廬を結ぶ底の手腕には甚敬服しました但大雅ほどポカンとした處韲々然韲々然たる所がないのはやつぱりその人の然らしむる所でやむを得ないのだらうと愚考致します　讀賣の句は小生の出したものではなく誰かが好い加減に句屑を集めて勝手に發表したものでありますどんな句がどれ程出てゐたかまだ小生は一向存じません饒舌不休これでやめます　頓首
　十二月八日　芥川龍之介
下島先生梧下

二六四　〔十二月十日鎌倉から。恒藤恭宛〕

ボクの出たあとで君が來たと云ふはがきを見て驚いた朝から一日待つてゐたのだからもう來ないと思つて出た出ても夏目さんの家へ行くのには遲すぎたから御逮夜の御馳走のある御茶屋へ行つてちよいと御燒香してすぐ鎌倉へ來たどつちかもうちよつと早いか遲いかするとよかつたんだが實際殘念だ就いてはこの殘念を埋め合せる爲もう一度ちよいとあひたいからせめてもう五六日出發をのばし給へ僕の方は十八日から休になるがその前の十五日の日曜にもかへるからその時君を訪問しても好い十四日の土曜は學校に夜英語會があつてかへれない中央公論は十五日締切だからどうしてもその日までにすましてしまふあとは自由だから樂にして話せるそれから御出の節御土產を頂いたさうで難有う出來るなら延し給へさうして出來る事と信じ且祈る

十二月十日　　　　龍之介

恭　様

二六五　〔十二月二十三日鎌倉から。端書、小島政二郎宛〕

今日は東京で或はあなたが來やしないかと思つて待つてゐました　が見えなかつたから唯今鎌倉に立ち戻つてこれを書きます句は僕ならかうやります

むだ話火事の半鐘に消されけり

實際むだ話を書くのにはあきあきした今度の日曜にでも風呂敷を以て金剛經を受けとりに御出なさい

二六六　〔十二月二十五日鎌倉から。中根駒十郎宛〕

拜啓　背文字送ります　校正は明日朝まで待つて下さい　以上

廿五日

芥川龍之介

中根様

二六七　〔十二月二十六日鎌倉（推定）から。恒藤恭宛〕

拜啓　先達中は失禮　あれから中公の原稿が出來なくつてねとう〳〵中公の社員が鎌倉へ來て出來る迄宿を取つて待つてゐると云ふ始末だつたやつと一日徹夜して書き上げたのは廿日だつただからそれ迄ははがき一本書く暇もなかつた出たらめなものだが活字になつたら讀んでくれ給へ
昨日菅さんが來て夏目さんの風月相知を非常に褒めてゐた大王可福より遙にうまいさうだ夏目にしては傑作だと云つてゐた大に勇氣を得た
田端まで無駄足をさせた事は君よりも奥さんに氣の毒な氣がするのだからよろしく御詫びを願ふ　今少しひまだから散歩したり本を讀んだりしてゐる
　瓦色黄昏岩蓮華ところどころ
これはお寺の屋根のスケッチ　以上
　十二月廿六日

龍之介

二六八　〔十二月三十日田端から。端書、江口渙宛。我鬼先生松下逍遙の圖あり〕

ずつと東京にゐるから遊びに來給へ

大正八年

二六九〔一月三日田端から。端書、中塚癸巳男宛〕

賀正　日曜に遊びにござれ梅の花

一月三日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

二七〇〔一月四日田端から。端書、南部修太郎宛〕

世の中は箱に入れたり傀儡師

二伸これは新年の句本の廣告ぢやありません

芥川龍之介

二七一〔一月四日田端から。端書、薄田淳介宛〕

世の中は箱に入れたり傀儡師

二伸これは新年の句本の廣告ぢやありません

芥川龍之介

二七二〔一月四日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

赤木大人楹下

若し暇だつたら七日午後二時頃から來給へ皆で運座でもしようと思ふ午前からでもいい　頓首

二七三〔一月十二日鎌倉から。薄田淳介宛〕

拜啓　突然こんな事を申上げるのは少々恐縮ですが私はあなたの方の社の社員にしてはくれませんか私は今の儘の私の生活を持續して行く限りとても碌な事は出來さうもない氣がするのです碌な仕事が出來ないばかりではないあなたの方の社から月に五十圓の金を貰つてゐながら一向あなたの方の社の爲になる仕事が出來ないだらうと思ふのです今の私はあなたの方の社から來る金と學校の報酬とで先づ生活だけは保證されてゐる訣ですがいくら飯を食ふ心配がなくつても自分のしたいと思ふ仕事も出來ずしなければ義理のすまぬ仕事も出來ないと云ふ事は決して愉快な事ぢやありませんそこでいろいろ考へた末にこの手紙をあなたへ書く氣になつたのです社員にしてくれませんかと云ふ意味は唯それ丈の外に私の知己としてあなたに相談する心算も含んでゐるのですあなたはこの問題をどう片づく可きものだと思ひますか社員になれるなれないの問題より先にこれに關して腹藏のないあなたの意見を聞かしてくれませんか

その爲に私の社員になると云ふ事の意味を說明します私が社員になると云ふのはあなたの方の社へ出勤する義務だけは負はずに年に何囘かの小說を何度か書く事を條件として報酬を貰ふと云ふ事です勿論さうすれば學校はやめてしまつて純粹の作家生活にはいるのですつまり私とあなたの方の社との今の關係を一部分改造して小說の原稿料を貰はない代りに小說を書く囘數を條件に加へて報酬を一家の糊口に資する丈增して貰ふと云ふ事になるのですそれが出來たら私も少しは仕事らしい仕事に取りかかれはしないかと思ふのですこんな事を考へるのは或は大に虫が好すぎるかも知れませんしかし今の私はその虫の好さを承知の上であなたに相談しなければならない程作家生活の上の問題に行き惱んでゐるのです前にも書いた通り甚だ突然で恐縮だとは思ひますが一應私の爲に考へて見てはくれませんか實はこの事を考へた時大阪へ行つてあなたに會つてその上で御相談申さうかと思つたのですが差當

つて原稿を書かなければならない爲に手紙で間に合はせる事にしました私の考へが手紙では十分盡しない憾があるのですがその邊はよろしく御諒察を願ふより外はありません　當用のみ　頓首

一月十二日

芥川龍之介

薄田淳介様

二七四　〔一月十九日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

原稿まだ落手せず一體久米は本當に出したのかしらん目下少し待ちあぐみの體

朝夕や薫風を待つ樓の角

一月十九日

龍之介

二七五　〔一月十九日田端から。大田黒元雄宛〕

拜復　御手紙拜見しました拙著を御もとめになつたさうですが私も今日新潮社からあなたの方へ一冊御送りするやうに申して置きました四五日内には御手元へとゞくだらうと思つてゐます戲作三昧は私の友達の間にも一番評判の好い作品です尤も今讀むと書き足りない所が多いので甚不滿を感じてゐますまだ五六年たたなくては腕がきまらないから碌なものは書けません

即興

世の中は箱に入れたり傀儡師

一月十九日

芥川龍之介

大田黒元雄様

二七六　〔一月二十七日田端から。廣瀨雄宛〕

拜啓　先達は御手紙難有御座いました英語を習ひたいと申すのは日本橋橘町大彦の主人で模樣の圖案や何かするのに西洋の參考書類を見る必要上習ひたいと云つて居るのですですから大した素養は入らないので唯一通り本が讀める程度になれば善いのだらうと存じます當人は頗個性の鮮な人間で文學や美術の上にも中々一家の見識を持つてゐます（年は私より三つか四つ上です）しかし執着心の强い人間ですから英語を習ふにしても存外ものになりはしないかと思ふのですどうか右樣の事を御含みの上よろしく御物色下さいませんか報酬は先方も私も然る可き額がわからないので困つて居りますから先生の御目がねできめて頂きたいと存じます　又拙著一册差上げます御笑覽下さい

即興

世の中は箱に入れたり傀儡師

廿七日

芥川龍之介

廣瀨雄樣

二七七〔一月三十一日鎌倉から。池崎忠孝宛〕

拜啓　君はまだ僕に腹を立ててゐるかもしさうでなかつたら本を出したに就き一册獻上したいのだがどうだらう貰つてくれる意志があつたら返事をよこし給へさもなか〔つた〕らまだ腹を立ててゐるものと思つて送るのを見合せる當用のみ　以上

一月卅一日

芥川龍之介

池崎忠孝樣

二七八〔二月一日鎌倉から。中戸川吉二宛〕

あなたの六號を讀んだからこの手紙を書きます僕はあなたのあの晩のあなたのおとなしいのが意外だ

つた　と云ふ意味は前に僕のうちへ來た時のあなたはあの晩に比べると遙に活潑々地の體であつたと云ふ事ですだからあの晩あなたをつかまへて僕が饒舌を振つたのはその意外の感じを表白しただけあなたを冷評する意志は更になかつたのですしかもその意外な感じは——と云ふよりその感じを起させたあなたは前に僕が考へてゐたあなたより餘程殊勝な、氣の弱い、それだけ可愛氣の多いあなただつたのですつまり前にあなたをもつと鼻つぱしの强いやうに考へたのは僕の誤解だからそれはあやまりますしかし僕の評價に於て向上したあなたと應酬した饒舌を僕の皮肉のやうにとつたのはあなたの誤解だから訂正しなくつちやいけませんこれは餘計な事だが今度の新思潮の同人の中で僕がものになると思つてゐるのは失禮ながらあなただけなのですだから猶更あなたを退治する理由なんぞありやしません殊にあの晩は惡戲氣さへ持ち合せてゐなかつた　その中谷崎君を訪問する時御目にかゝりませう或はあなたを訪問する時谷崎君に會ふと云つてもよろしい　頓首

二月一日　芥川龍之介

中戸川吉二樣

二七九　〔二月四日鎌倉から。南部修太郎宛〕

拜啓　正月に描いた二つの作品が私の今までの傾向と多少異つてゐるのは事實です里見弴君はそれを或身動きを示すものだと云ひました　が、その身動きは今までの私のフィイルドを全然捨てる爲の身動きぢやありませんそれ程まだ私は或「眞」のカルトに雷同する勇氣はないのです私は唯私の今までのフィイルドを廣くしたいのですこの間人と話した時に私は冗談に出來るなら僕は名刺へナテュラリスト、ロマンティシスト、シムボリスト etc. と云ふ風にありとあらゆるイストの名を書いてふり撒きたいと云ひましたと云ふ意味は題材の上でも觀照の上でも私は今までより——或は今までの誰よりも自由でありたいのです又さうしなければ噓だと信じてゐるのです今日三田文學の六號を讀んでふとあな

たに是だけの辯解を書く氣になりました批評家としてよりは寧友人として私はあなたにかう云ふ心もちを了解して貰ひたいからです　頓首

二月四日　　　芥川龍之介

南部修太郎様

二八〇〔二月五日鎌倉から。小島政二郎宛〕

拜啓　あなたの批評が出る時事新報を待ちくらしたが未に出ません神奈川版は時々文藝欄を省略するから出ずにしまつたんだらうと思ひますもし切り拔きがあつたら僕によませてくれませんか今日三田文學を讀みましたあなたの六號は少し僕を褒めすぎてますこれでも存外見かけ倒しの所が多い人間なのだからあんまり買ひ冠らないで下さいその方が僕の爲にもあなたの爲にもなります所で「綠の黑髮」と云ふ語がありますなあの綠と云ふのを高等學校時代に先生から黑が綠に見える云々の說明を聞いた事がありますが僕私に思ふにあれは枕辭で本來畔にかかるものだらうと思ふのですがどうですかさう云ふ說が外にあるのならあまり威張れないがなければ僕は創見の權利を主張します新國學者の高說が伺ひたいものですな

この頃は私は入校試驗問題を作らされてゐるので大に困つてゐますと云ふのは私の讀んでゐる本の性質上適當な問題になるやうた文句がちよいと見つからないのです God, love, Poetry, ideal, etc. ——いくら本をあけて見ても碌な字は出て來ませんその爲今更のやうに僕がプロゼイック・カルテュア(?)を缺いてゐる事を發見しました滑稽だがこれは僕にとつて頗眞面目な事實なのですしかもさう云ふ難儀な目にあひながら新小說の原稿へ取かかつてゐるんだから非凡でせう勿論碌なものも書けさうな氣がしませんが今年は筆ならしの爲少し澤山書いて見ようかと思つてゐます現に最近佐藤春夫のアナトオル・フランスの飜譯の序を書く事まで引受けました書くと云へば菊池がこの間の詩論を匿名子で發

表したのには少し驚きましたあの原稿料は少くとも三分の一位僕が貰つてもよからうと思ひます前回はあの翌日彼と新橋停車場の二階で飯を食つた時又一應鬪はせたのですその節の僕の議論は大凡見當に根據のある名論たのだからいづれあなたもそれで惱ませられるものと覺悟してゐて下さいこの間あなたに會つた時「官能描寫の文學」論をするのを忘れました菊池はあの程度のものなら洋書にあると云ふ說ですが僕はやはり川柳點の外にちよいとあれ程穿つたのはあるまいと思ひます業平の句は殊にうまい但し引例があれだけは少なすぎますなそこで序に煽動しますがああ云ふ研究をもつと外のものへも向けて見る氣はありませんか德川時代の戲作だけでもずゐぶんいろいろな問題がありさうに思ひます（勿論考證は老大家に一任した上でもです）文化史的な研究は津田左右吉氏がやつてゐるから今度は藝術批評の立場から手をつけるのですな　ここまで書いて氣がついたら途方もなく長い手紙になつたからもう切上げる事にします　頓首

芥川龍之介

小島政二郎様

二伸　結婚問題の件御序での節で好いから南部氏へ話して下さい

二八一　〔二月七日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

十日午後四時頃から遊びに來てくれ給へもし來られなかつたら一報してくれ給へだがなる可くは都合して來てくれ給へ　頓首

田端にて　龍

二八二　〔二月八日鎌倉から。薄田淳介宛〕

朶雲奉誦　先達菊池の件につき御たづねになつた事を菊池に傳へた所昨日やつといろいろ考へて見たが文藝欄擔任の記者としてなら兎も角社會部の記者として働く氣はない旨あなた迄答へてくれと云ふ

返事が來ました　今拜見した御手紙のやうな條件なら喜んで御世話を願ふだらうと思ひます　勿論私自身も更に異存ありません　但二つ同時に話が起つてゐるので或は何かの拍子から私の話が菊池の話の邪魔をする事がないとも限りませんもしそんな事があつたら御遠慮なく私の話を拋棄して菊池の便宜を計つて下さいこれは萬一の爲を思つて豫めあなたに御依賴して置きます　猶今後ともよろしく御世話を願ひます私の爲にも菊池の爲にも

左記の句得意なのだがどうでせう

青蛙おのれもペンキぬり立てか

二月八日　　　　芥川龍之介

薄田淳介様

二八三〔二月八日鎌倉から。小島政二郎宛〕

開化の良人はね途中から時間がなくつて書き崩しちまつたのですだから大川の場から先は腹案通りに行かなかつた部分なので本にする時はあすこから先も前のやうに層々疊々體に書き直します

あなたの評論は菊池に借りる事にしましたあなたが貸さなくつても菊池が貸してくれる所大に天網恢々疎にして洩らさずだと思ひますさう思ひませんか何でも菊池の說によるとほんとうに名評論ださうぢやありませんか江口も褒めてましたぜ

枕辭說の反對の理由はどう云ふのですか私は「唐衣」が紐から「日も」などの枕辭になるより遙に穩だと思ふのですがさうぢやありませんか畔と云ふ語が昔なかつたのなら勿論私も降參しますそれから綠の畔と云ふ語が一つも見當らなければやはり降參してよろしいさもなければまだ自說を固守します尤もこの自說はね聊その尊嚴を缺く惧れがあるが實は汽車の中で午ねをしながらふと思ひついたのですだから事によると少し寐ぼけてゐるかも知れない

句は一向怠けてます最近のに曰
　青蛙おのれもペンキ塗り立てか
早く君の小說がよみたい江口のは小供と犬もまづくはないですよ
　八日
　　　　　　　　　　　　芥　川　龍　之　介
　小島政二郎様

二八四　〔二月十二日。高濱虛子宛（寫）〕

　風流懺法後日譚に就て
風流懺法のつゞき、毎度面白く拜見、我々若輩が書きてはとてもあゝ云ふ味は出ず、敬服の外無之候。
　頓首
　　二月十二日
　　　　　　　　　　　　芥　川　龍　之　介
　虛　子　先　生　梧下

二八五　〔二月十七日田端から。池崎忠孝宛〕

拜啓　初版賣り切れ再版中々出來上らなかつた爲やつと今日新潮社より本をうけとり差上げる運びになつた遲くなつたのは決して勿體をつけてる訣でも何でもないと御承知下されたし　僕今風邪にて臥床中僅に淸閑を得て嘉道六家絕句と云ふものを讀んでゐる尤も熱はいくらもないその中貴意を得ようと思ふ　頓首
　　二月十七日
　　　　　　　　　　　　芥　川　龍　之　介
　池　崎　忠　孝　様

お手紙難有う竹藪に雪の積つた歌結構だと思ひました小說も奮發してあすこまで向上御させなさい

蠟梅や枝疎らなる時雨空

二月十九日

二八六　〔二月十九日田端（推定）から。端書、友常幸一宛〕

二八七　〔二月二十日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　其後間もなく又インフルエンザにかゝり床についてゐます但し熱はいくらもないので大した事もあるまいと思ひますそれでこの手紙を書くのが大分遲れました　御手紙二通共確に拜見病氣が癒り次第早速學校の方もやめられるやうに取り計らひます今の東日の紙面では文藝欄を設ける事も無理かとは思ひますが出來るなら設けると好いと思ひます大每だけ設けても好いやうなものだがやつぱり東京の新聞にないと文壇との關係が密接にならないのでいけません　病氣の爲新小說へ書きかけた短篇も中途で御免を蒙りました床の上で俳句を作つたり絕句を作つたりしてゐますその一つ

怪しさや夕まぐれ來る菊人形

二月廿日　　芥川龍之介

薄田淳介様

二八八　〔二月二十三日田端から。小島政二郎宛〕

僕はまだねてゐるんだから好い加減辟易しちまひました君は何日位ねましたかどうも僕のはたちが惡いんぢやないかと思つて大に神經を惱ませてゐます尤も熱は餘りないから床の上で大分書物を讀みました就中ヘルン先生の大きな本を二册讀破する事が出來たのは全く風のおかげですその外厚いもので

は野叟曝言と云ふ荒唐無稽な支那の小說を半分ばかりよみましたこれは永久に半分から先をよまぬ積りる勇氣はなささうです

久米も江口も大分好い由菊池から聞きました菊池の退社はがきは君の所へも行つたでせう彼も江口も近々田端界隈へひつこすさうですさうして君と僕とを加へて田端組の會を一月に一回やつて大に―何をするんだかわからないがまあ大に何かやるつもりださうですこの頃菊池は御召しのきものを着てゐますよ

さうさう菊池より慶應の方を一旦運動を願つて置いて中途で變心したのが澤木さんや何かに不快な思ひをさせやしませんでしたかこれは少々氣が咎めるから伺つて置きます尤も慶應の方がもう少し早くきまると僕も振つてもう一度 it や that の講義をする氣はあつたのですが機關學校の方はこの年度變りを機會として遠慮たく授業時間もふえさうなので思ひ切つて作家生涯になり了せましただから心中可成不安ですが兎に角のりかゝつた舟だし行ける所までは行つて見ようと思つてゐますしかしこれからリイダアを讀む必要がないんだと思ふと可成愉快です

　歸らなんいざ草の庵は春の風

龍

小島政二郎樣

二伸その中小說を拜見おさせなさい病氣が癒つたら私も一度伺ひます　頓首

二八九　〔二月二十四日田端から。下島勳宛〕

拜啓　昨夜は失禮仕候その節御約束の近世僧寶傳拜借願ひ度候　猶矢張御話しの高泉の書小生などの手にも入るものに候やこれ又伺上候　頓首

二月廿四日

芥川龍之介

下島先生梧右

二九〇　〔二月二十四日田端から。薄田淳介宛〕

拜復　朶雲奉誦謄本その他早速送ります小說は菊池が先に書く筈、もうとりかかつてゐるからその中御送りするでせうそのあとで私が書きますその前に學校の方が片づき次第（もう辭意だけは首席教授まで手紙で云つてやりました）入社の辭を書かうかと思ひますがどうですか
菊池に就き　社をやめようとしたので時事が急にひきとめ運動にかかつたやうです何でも大每と同じ待遇をするから居てくれと云ふとかですしかし勿論あなた及私に對する義理上菊池がその引きとめ運動に乘る惧は萬々ないだらうと思ひます唯かうなると菊池が大每の客員になつた上短日月の間に首にでもなつたら私が大に氣の毒だがまさかその事はないでせうなこれは當人も多少氣にかけてゐるやうだから私からも念の爲伺つて置きます　何しろいろいろ御手數をかけ甚難有く御禮を申し上げますおかげで私も it や that をふりまはすのをやめて東京へまひ戻れるのだと思ふと俄に肩が輕くなつたやうな甚愉快な氣がします句に曰

歸らなんいざ草の庵は春の風

二月二十四日　　　　　　　　　　芥川龍之介

薄田淳介様

二九一　〔二月二十五日田端から。菅虎雄宛〕

拜啓　何時ぞや御願ひ申上げました「羅生門」の題箋參上の節書いて頂く筈でございましたが生憎風邪をひいてこちらで床に就いて居りますから失禮ながら手紙で御願ひ致す事になりました何とぞ同封の紙に一番細長いのには「羅生門芥川龍之介著」あとは二つとも「羅生門」と御認めの上御送り下さいませ

んか右とりあへず御願ひまでに恐縮ながらこの手紙を書きました　草々頓首

二月廿五日　　　　芥川龍之介

菅　先　生　梧下

二九二　〔二月二十六日田端から。端書、松岡讓宛〕

ふだんの煙草が祟つてのどをこはして弱つたその爲少し計りの熱がとれないで困るもう寢てゐるのに飽き〳〵した御見舞御禮まで　頓首

春日既に幾日ぬらせし庭の松

二九三　〔二月二十八日田端から。片山廣子宛〕

敬啓　御見舞下すつて難有う存じます私の方はもう二三日中に床をはなれられさうですがそちらの御病氣は如何ですか氣候不順の際呉々も御大事になさい私の方からも御禮旁〻御見舞まで　頓首

卽景

時雨れんとす椎の葉暗く朝燒けて

二月廿八日朝　　　　芥川龍之介

片山廣子様　粧次

二九四　〔三月三日田端から。下島勳宛〕

拜啓　今日天氣の好いのを幸鎌倉へ立ち歸ります病中は何から何まで先生の御厄介になり難有くいづれ御禮には上りますがここでも一こと御挨拶を申上げます　これから愈學校がやめられるのだと思ふと甚愉快な氣がします

歸らなんいざ草の庵は春の風

惡句御一笑下さい　頓首

三月三日　芥川龍之介

室谷先生　梧下

二九五　〔三月六日鎌倉から。岩淵百合子宛〕

拜啓　あなたの御手紙も句會の通知も私が風をひいて東京でねてゐる間に來たのでどちらもやつと今日拜見した次第ですもし前に讀む事が出來たら句會へも出かけるのだつたと大に殘念に思つてゐますこれは決して好い加減な形容ぢやありませんと云ふのは私も近々ここの學校をやめて東京へ舞ひ戻る事になつたので御暇乞ひ旁〻あなたの所へも上りたいと思つてゐたのですだからそれが句會なら猶更都合が好いと思つたのです　所でものは相談と云ふから申上げますが近々又雀の舍俳句會をあなたの所で開きませんかさうして私を出席させてくれませんかさうすると私は〔六字不明〕のみならず横須賀にも御暇乞ひをする〔九字不明〕會に出席します　私の都合は十五日以前の金土日がよろしい時間は午後でも夜でもかまひません（朝は學校があるからちと困ります）會は元來私はみずてんだから句會が歌會になつても恐れずに出席します　以上の條件で私の爲にあなたを訪問する機會を大袈裟にしてくれませんか右御相談旁〻御手紙を拜見した御返事まで

この頃教育業をやめるのだと思ふと甚愉快ですそのせゐか汽車の中から見る景色も皆春氣を帶びてゐるやうな氣がしてなりません

春に入る竹山ならん微茫たる

三月六日　芥川龍之介

岩淵百合子樣

二九六　〔三月七日鎌倉から。中根駒十郎宛〕

拜啓　菅先生の標題御送りします一番大きいのは黑地へ白ぬきにして扉としあとは表紙と背にするの算です「君看双眼色不語似無愁」は在來の版を使ひあれを赤地（朱の色）へ白ぬきで出して下さい校正は「鼻」による事その他はよろしく願ひます　頓首

三月七日　　　　　　芥川龍之介

中根駒十郎樣

二伸　羅生門出來の上は二三冊ください

二九七　〔三月八日田端（推定）から。菅虎雄宛〕

拜啓　過日は羅生門標題早速書いて頂き鳴謝の外無之候その後御禮に參上致す可きの處小生實父流行性感冒にてとうとう入院まで致居候爲多忙の餘諸方樣へ御無沙汰仕る事と相成候段よろしく御諒恕下され度願上候　頓首

三月八日　　　　　　芥川龍之介

菅　先　生　梧下

二九八　〔三月八日田端（推定）から。薄田淳介宛〕

拜啓　學校の方今月中に後任を見つけ來月匆々よす豫定でしたが幸後任もすぐありさうなのでもう少し早くやめられるかも知れませんやめたら菊池と一しよに東京の社の方へ顏を出しに行きます入社の辭出來次第送りますから學校の方の片がついた通知を御受取りの上掲載して下さい（辭令は今朝確に拜受）文藝欄の出來る事を私も菊池も望んでゐます　頓首

三月八日

芥川龍之介

薄田淳介様

二伸　二月分の俸給が屆かないのですがあれは今度の整理上貰へなくなる可き性質のものなのですかそれならそれでもよろしいが念の爲ちよいと伺ひます再々會計課へ金が來ない來ないと云ふのも體裁が惡いからあなたを煩はせるのですがそれでも內心少々恐縮してゐるものと御察し下さい

二九九　〔三月九日田端から。下島勳宛〕

拜啓　例の件色々難有く存じます參上する心算でしたが原稿の〆切が近く大繁忙の爲お金はこの手紙と同封で御屆け申す事にしましたどうかよろしく御取計らひ下さい　軸は二つとも書齋にぶら下げて大喜びで見てゐます　頓首

三月九日

芥川龍之介

下島先生　梧右

二伸　いづれ手の明き次第參上する心組です　以上

三〇〇　〔三月二十五日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

拜啓　僕今度學校をやめるのに就いて借りた本を皆返す必要あり就いてはボオドレエルと國史八面観とを横須賀市白濱海軍機關學校生徒科敎官室內僕宛至急(僕は今月一ぱいでよす)送つてくれ給へ。君の所までとりに上つても好いのだがおやぢが死んだのでいろいろ俗用が多いからその暇がないのだ右當用のみ

芥川龍之介

三〇一　〔四月二日鎌倉から。井上猛一宛〕

拝啓　御手紙難有うございました實はあれを拝見した時は私のおやぢの御通夜の時だつたのです其後何かと多忙なのにとりまぎれとうとう今日まで御無沙汰してしまひましたさて二上り新内の儀聞く事なら何時でも御辭退は申さない私ですが作る方はうたふ方同様何とも以て御引き受け致しかねます私が二上り新内を作つた——そんな事を聞いた日にはこの頃は五位鷺が鶴に化ける位な悪口を云ふやつが友だちと稱するものの中にも大ぜいゐますそれ丈でもとてもとりかゝらうと云ふ勇氣はありません平に御ゆるしの程御願ひ申し上げます　それから近々私も東京へ舞戻る事になりましたから自然お目にかゝる機會も多からうと思つてゐます就いては御暇の節は御近所から——少し遠いけれど御遊びに御出で下さい私も御邪魔に上るかも知れませんから

即興

夜櫻や新内待てば散りかゝる

四月二日　　　　芥川龍之介

井上猛一様

三〇二　〔四月三日鎌倉から。端書、池崎忠孝宛〕

本確に落手御休神を乞ふ小生まだ免官の辭令出ず尻の落ちつき所に窮しつゝあり

遠火事の覺束なさや花曇り

三〇三　〔四月十五日田端から。江口渙宛〕

拝啓　前にも一度話したと思ふが新潮社の新進作家叢書に君の集を加へる事愈中根氏が引きうけたか

ら都合で早速原稿をまとめて貰へないか纏めて新潮社内中根駒十郎氏宛送つてもよしもう少し後でよければ僕が貰つて新潮社へ持つて行つても好い元來は中根氏が參上してお頼みすべきだが今非常に繁忙で印刷所の方から手が離されないから僕からよろしく君に交渉してくれろと云ふのだそこでとりあへず此手紙を書いて貴意を得る事にする　僕は今中央公論を十八日迄に書き上ぐべき義務があつてうんうん云ひながら小説を書いてゐるだから君の用件につきちよいと君の所へ行きたかつたが十八日或は十九日か廿日までは行かれさうもないよろしく取計つてくれ給へ

白木蓮(ハクレン)に聲を呑んだる雀かな

四月十五日

芥川龍之介

江口渙君

三〇四　〔四月二十八日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　やつと今日鎌倉からこちらへ引き移りました小說の件承知しました四五十回の短篇を書く事にします讀みそくなつた小說程無駄な記事はないさうですからそれ以上長くない方が新聞として得策かと思ひますから　今月末か來月始めに菊池と二人で御地を經由長崎まで旅をしますその節拜眉を期して居ります

二十八日

芥川龍之介

薄田淳介様

二伸

偶懷

引き鶴や我鬼先生の眼ン寒し

三〇五　〔四月三十日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓　今日縱橫談なるものを讀む三斗の背汗　あれは小生の輕佻浮薄性と君の輕佻浮薄性と一しよになつて二重の輕佻浮薄性を帶びた形がある　但小生のしやべつた事に間違ひ一つもなければ恐縮した迄にて文句は更になし尤も今後續いて出る諸先生の縱橫談にして小生のそれ程縱橫でなかつたとしたら甚不公平な次第故以下よろしく誰のもあの程度にはめを外させて貰ひたいと思ふ

四月卅日　　芥川龍之介

佐々木茂索樣

三〇六　〔五月七日長崎から。繪端書、芥川宛〕

長崎へ來た　永見さんの厄介になつた　長崎はよい所にて甚感服す　支那趣味と西洋趣味と雜居してゐる所殊に妙なり異人、支那人多勢ゐる町は大抵石だたみ　橋は大抵支那風の石橋ロオマ傳教のお寺が三つある皆可成大きい昨日その一つ（大浦の）へ行きガラシーと云ふフランスの坊さんと小半日話したりかへりに町を步き掘出し物をした故そちらへ送る　以上

三〇七　〔五月八日長崎から。繪端書、小島政二郎宛〕

天雲の光まぼしも日本の聖母の御寺今日見つるかも

五月八日　　龍

大浦に日本の聖母の寺あり

三〇八　〔五月八日長崎から。繪端書へ菊池寛と寄書、南部修太郎宛〕

天雲の光まぼしも日本の聖母の御寺今日見つるかも（大浦の天主堂）
龍

三〇九　〔五月八日長崎から。繪端書、芥川宛〕

長崎も大分見物した故明日大阪へ向ふ筈途中どこかへ一二泊するか知れず體は至極丈夫なり用の節は大阪毎日へ宛てて願ひます　以上
八日

三一〇　〔五月十日長崎から。繪端書、松岡讓宛〕

長崎へすんでギヤマンを集めたり阿蘭陀皿を集めたり切支丹本を集めたりして暮したくもなつたよ
龍

三一一　〔五月十日長崎から。繪端書へ菊池寛と寄書、江口渙宛〕

瑠璃燈のほのめく所支那人（アチヤ）來たり女を買へとすゝめけるかも
龍

三一二　〔五月十三日大阪から。繪端書、松岡讓宛〕

白壁や芭蕉玉卷く南京寺
十三日
大阪にて
龍

三一三　〔五月十七日京都から。繪端書、小島政二郎宛〕

時々傾觴に辟易す

酒前茶後秋立つ竹を描きけり

聊歸心を催す

我鬼窟の實梅落つべき小雨かな

唯今醉興な連中と夜半タキシイを走らせて渡月橋まで月見に行つてかへつた所

十七日　午前二時祇園梅垣にて　龍

三一四　〔五月十七日京都から。繪端書、下島勳宛〕

粉壁や芭蕉玉卷く南京寺

五月十七日　芥川龍之介

下島勳様

三一五　〔五月十九日田端から。端書、恒藤恭宛〕

無事歸京早速小說にとりかかる

この頃や戲作三昧花曇り

いろ／＼御世話になつて難有うお母様によろしく細田枯萍氏の事を思ひ出すと可笑しくつていかん

醉ひ足らぬ南京酒や盡くる春

三一六　〔五月十九日田端から。南部修太郎宛〕

啓　昨日長崎から歸りましたいつか折角御出の所を留守にして甚恐縮したからその中改めて御出でを願はうと思ふがどうですか小島氏とでもしめし合せた上御一報下されば幸甚　旅行中あなたの月評を

讀まずにしまひました一體月評は滅多に讀まないがあなたのはあなたに對する信用から讀むのですこれは御世辭ぢやありませんその代り不服な時は遠慮なく駁論を吹つかけますからその心算で御出でなさい尤も下の關門司間の連絡船の上で菊池の「マドック先生」が退治されてゐるのは一寸拜見しましたあれに就いても申上げたい愚見があるが拜眉の節に讓ります
長崎は好い所ですね大に感心しました聖福寺や崇福寺のやうな支那寺は殊に風流でよろしい唯非常に荒廢してゐるので氣の毒ですあれはどうにかならないものですかな　頓首

五月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

南部修太郎君

二伸　鼻山人にもはがきを出して置きました　以上

三一七　〔五月十九日田端から。端書、小島政二郎宛〕

昨日かへりました南部君とでもしめし合はせて一日遊びに來ませんか三宅大人にも御光來願へれば光榮です小說は出來ましたか早く活字にして御見せなさい鎌倉から荷が來たので我鬼先生は古道具屋兼古本屋へ質にとられたやうな形になつた自分ながら甚氣の毒です　頓首

三一八　〔五月十九日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　滯阪中は御馳走になつたり方々見物させて頂いたり難有く御座いました御禮申上げますしかし演說には辟易しました演說をしなくてもよいと云ふ條件がないとちよいと編輯會議にも出席出來ませんな　あれから京都に二三日滯在して昨夜やつと歸京しました明日から小說にとりかゝります

この頃や戲作三昧花曇り

五月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

薄田淳介樣

三一九 〔五月二十二日田端から。和氣律次郎宛〕

拜啓 在阪中はいろ／＼御厄介になり難有う福田屋で恐縮した事は未に忘れませんあれから京都へ行つて二三日ゐましたが一度夜の十一時すぎに自働車で嵐山へ河鹿を聞きに行つたのは風流でした但し春寒料峭として渡月橋の上ではいくら麥酒を飲んでも醉はなかつたんだから悲慘です歸京後は例の如く文債の催促で毎日恬匆忙と消光してゐます來月は是非遊びに御出でなさい 頓首

五月廿二日　　芥川龍之介

和氣律次郎君

三二〇 〔五月二十三日田端から。永見德太郎宛〕

拜啓 其後は御變りもなく御消光の事と存じますさて小生等の滯在中は何から何まで御世話樣になり難有く厚く御禮申上げます別包は誠に粗末なものですが御孃樣と坊ちやんとに差上げて下さるやう御願ひ致します其日帖は早速署名の上御送り申しませう又寫眞も難有拜受致しました右遲れながら御禮まで 頓首

五月二十三日　　芥川龍之介

永見德太郎樣

三二一 〔五月二十三日田端から。端書、南部修太郎宛〕

朶雲拜誦午後は大抵ゐますから御出で下さい但前以て御通知下されば更に都合がよろしい蜜柑は御褒めに預りて光榮だが相成る可くは百回位の長篇であなたを感服させるやうになりたいと思つてゐます

頓首

三二二　〔六月六日田端から。南部修太郎宛〕

拜復　君は溫泉へはいつたり悠々長篇の計畫を立てたりして甚呑氣さうだが僕は月評を書いたり朝(路上と改題)を書いたり毎日うんうん云つてます月評ぢや大分諸君子を退治ました江口渙が痛快だと云つて褒めてくれたから本望です　君の小說の批評を書きました序の時讀んで下さい　あの件差當り僕に御まかせなさい　目下一日も早くひまになつてゆつくり本でも讀みたいと思つてゐます　頓首

六月六日朝　　　　芥川龍之介

南部修太郎君

三二三　〔六月十五日田端から。菅忠雄宛〕

拜啓　御手紙難有う　其後如例匆忙たる日を送つて居ます小說が一向捗取らないので大に閉口して居ます中戸川氏の小說は恐らく今月の創作中で第一の傑作だらうと思ひますあれでもう少し前半が油が乘つてゐたら更に申分がなかつたらうと思ひます

鹿兒島へ御出の由嘸御寂しいだらうと同情してゐます勉强も大事だが體も一層大切にしなくつちやいけませんね僕はこの頃大に感じる所があつて精々養生をしようと思つてゐます　次の歌は湯河原の久米へ送つたものだからその關係上君にも序に御覽に入れます

谷水の光は寒し夕山のまほらを見れば人立てり見ゆ

あしびきの岩根は濡れて谷水の下光りゆく夕なりけり

夕影はおぎろなきかもほそほそと峽間を落つる谷水は照り

頓首
芥川龍之介

六月十五日
菅 忠 雄 様

一伸　先生によろしく申上げて下さいこの頃拓本や法帖を見るのが面白くなりましたがこれは全く先生の所でいろんな書を拝見したおかげです一生の得をしたと思つてゐます呉々もよろしく申上げて下さい　猶荊妻からお母様や姉様によろしく申上げてくれと云ふ事でした末ながら私からも姉様の御縁談を御祝ひ申上げます　以上

三二四　〔六月十七日田端から。端書、池崎忠孝宛〕

朶雲奉誦御尋ねの本持ち合せてゐない先達は久しぶりで快談出來て甚愉快だつた其後愚圖々々小説ばかり書いてゐる一向面白い事もないいづれ遊びに行かうと思つてゐる平子鐸嶺論出來たら頂けないか
頓首

三二五　〔六月十八日田端から。南部修太郎宛〕

拜復　もう一度向うへ手紙を上げよう〳〵と思つてゐてとう〳〵出さずにしまつたり　その後路上更に捗取らずまた二三回の所を徘徊してゐる始末徘徊する所が路上だとせめては洒落れて置かうと思ひ居候
例の件近々僕の細君の兄まで話して見る心算その後にて何とか方向を定むべく候三宅周太郎先生僕を見立てて花川戸の助六と做す豈敢へて當らんや私に自ら擬すれば即躄勝五郎なるべし日夜遲々として路上に在り唯初花の侍するなきを憾むのみ好笑々々　菊池とでも一しよに近々參堂仕る可く候　頓首
六月十八日
芥川龍之介

南部修太郎君

三二六 〔六月二十三日田端から。畑耕一宛〕

朶雲奉誦　よろしく御取計らひ下さいゴシツプの材料を一つ送ります　それから菊池のパラソルの件書きませんか　頓首

廿三日　　芥川龍之介

畑　君

三二七 〔八年(推定)六月二十三日田端から。端書、中島汀宛〕

土曜日の稽古日曜に御延期被下度右御ねがひ迄　匇々

六月廿三日　　芥川龍之介

三二八 〔七月二日田端から。佐佐木茂索宛〕

敬啓　當日の句記憶に殘れるは唯左の一句のみ艸稿は既に悉廢紙と致し候

眼底にうごめくものや白絽幮

芥川龍之介

茂索先生　梧右

三二九 〔七月二日田端から。江口渙宛〕

本を難有う

黑ばえやたそがるゝ矢帆赤かりし

渙　君　梧下

三三〇〔七月三日田端から。南部修太郎宛〕

僕の路上はもう大阪に出てゐる但し愈出でゝ愈愚作になりさうなので少からず悲觀してゐるこの頃人に會ふ元氣さへなし尤も今月讀んだ小說は片端から輕蔑してゐる君のはまだ讀まないんだから安心し給へ）僕は目下日曜日以外は一切面會謝絕うんうん云つて書いてゐる餘り丈夫でない肉體とこの頃の天候と俗衆の批評と自己の能力に對する疑と——これだけを相手にして戰ひながら書くんだから時々は甚心細くなる可哀さうだと思つたら何時か妹さんの御給仕でお茶をのませてくれ給へ　以上

三三一〔七月四日田端から。小島政二郎宛〕

新聞小說出來面白からず每日鬱々として消光句を拈する元氣もなし胸中黃梅雨の天に似たりとも申すべきや乎御憫察下さる可く候

但し諸先生の小說が皆小生よりうまいと思つてゐる次第にても無之傲慢不遜なる事は平日に異らず候思ふに小生の如きは精衞の海を埋めんとするものなる可きも既に海を埋めんとする以上燕雀よりはえらきに相違なかる可しと存候唯白頭に至つて猶海を埋めざる可きを想ふ小生たるもの豈心細からざるを得んや小生の自惚れと弱音とは蓋し兩方とも此處に存す可く候餘は拜眉の期に讓るべく草々不宣

七月四日　　　　我　鬼　生

霸　南　先　生　案下

三三二〔七月五日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

バルタザアルは一寸面白い作品だからおよみなさい君はね行住坐臥に職業を以て終始してゐるでせう（たとへば運座へ來ると句を雜誌へ出さうと云ふ如き）所が當方は君を唯佐々木茂索氏として見てゐるだけなんだからそこに困る事が出來てくるのです今後はなるべく非職業的に御交際願ひたいと思ふがどうですか

三三三 〔七月六日田端から。江口渙宛。封筒に多幡四三五とあり〕

啓 畫は難有う但しぬめはとても書けないよ小島氏に畫箋紙を持ちこまれてさへ大に辟易した位謙遜なんだから 君の短篇集を出すやう春陽堂を煽動して置いたがまだ交渉はないか

七月六日　　芥川龍之介

江口渙先生 梧下

三三四 〔七月八日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

日曜は面會日と云ふと大袈裟だがまあ在宅する日です茂索先生の御來駕を得れば茸堂爲に光彩を生ずるだらうと思ひます「疑惑」惡作讀む可らず

三三五 〔七月八日田端から。端書、南部修太郎宛〕

もう一週間ばかり待ち給へその中に何とか返事をする「黑焦げの人形」讀んだ可と云ふべからざるも亦不可とも云ふべからざる作品と愚考僕の「疑惑」よりはそれでもよさゝうだ但ほんの少しばかり　以上

三三六 〔七月八日田端から。岡部雀司宛〕

染雲奉誦外に尊譯も拜見しました御叮嚀な御挨拶で反つて當方が恐縮に感じた位です今後もちよいと

御通知さへ下されば何時でも御遠慮なく御譯し下さい私の作品の英譯は私自身企てた事がありますが忙しいので今は全く中絶してゐます一つにはとても飜譯のやうにゆかないので途中で匙を投げてしまつたのです末ながら拙作を選んで下すつた御厚意を感謝します亂筆字を成さず御判讀下さい　頓首

七月八日　　芥川龍之介

岡部様　梧下

二伸拙作中閑三郎なるものは佐渡に住んでゐた貉の名です詳しくは馬琴の燕石雜誌に出てゐます右御參考まで　草々

三三七　〔七月十四日田端から。岩野美衞宛〕

拜啓日本主義に出てゐたあなたの詩感服しましたあれなら成程あなた以外に書く人はないかも知れませんそれだけ申上げる爲にこの手紙を書きましたあなたに胡麻をする意志も批評家らしい顏をしようと云ふ僭越な量見もないのです唯私の感服を感服として受けて下さい　失禮ながら御返事には及びません

七月十四日　　芥川龍之介

泡鳴先生　梧右

三三八　〔七月十七日田端から。端書、南部修太郎宛〕

疑惑は惡作だ　が必しも惡作で始終すべき作品ぢやない　と云ふ意味は少し筆を入れゝばものになると云ふ自信がある多作させたくないと云ふのは急作させたくないと云ふ意味だらう急作は大分こりてゐるしかし僕の急作時代は偸盗當時だよ今は疑惑位なものだ　以上

三三九〔七月十七日田端から。端書、南部修太郎宛〕

君は悪作をしなくつていかん悪作をしないやうな人間は結局凡作に終始するものと思ひ給へしくじつても好いから本氣になつてどんどん書かなくつちや噓だ自分の悪作は他人の悪作より百倍も教へる所が多いものだよその意味で僕は今大に路上に教へられてゐるあれは幸にして東京へ出ない　以上

三四〇〔七月二十四日田端から。池崎忠孝宛〕

拜復合歡の花位心得てゐない奴があるものか僕は植物學なら君より遙に大家だと云ふ自信があるんだ君の淸閑は甚羨しい僕なぞは風流地獄に落ちて毎日うん〳〵云つて小說を書いてゐる遊びに行きたいがそれと暑いのとで到底門を出る勇氣がない江口の會では多分會へる事と思つてゐる久しく會はないから可成樂しみだこの前君が來た時は妙に嬉しかつたよ　序に近吟を承らせよう

山の月冴えて落葉の匂かな

榾焚けば榾に木の葉や山暮るる

こんな境涯が今の僕には住し易いのだ　頓首

芥川龍之介

赤桁平先生　侍史

三四一〔七月(推定)二十五日鎌倉から。繪端書へ久米正雄と寄書。江口渙宛〕

江口君　中央公論では第一里見第二サトウだよ(但これは小說だドラマには久米がゐるからね)谷崎氏のなどは書きなぐりで氏自身も恐らく自信がなからうと思ふ僕は「金と銀」時代に久米が褒めた時から過褒だと思つてゐた續篇を見るに及んで更にその感を深くしてゐるマアタンギイの閨なる繪の描寫か

らして甚しい〻加減だと思ふが如何里見のは題にかまはず是非よんで見給へ大したものではないが人の才筆が最もよく動いた作の一つだと思ふ僕の事は敢て辯じない

龍

三四二　〔七月二十九日田端から　佐佐木茂索宛〕

おぢいさんとおばあさんの話」原稿八枚目の裏の「漫然と作らぬ」から九枚目の裏の最後の行まで説明に過ぎて情味を殺ぐ事少からず一工夫ありたきものと思ふ又息子の遊學(?)もう少しはつきりと書いた方よろしきやうに思へど如何にや全篇の感銘は小春の縁側で日に浴する如く惜快く感じたりそれからもう一つ難癖をつければおぢいさんの哄笑どうも氣に食はず出來得べくんば人の悪いにやにや位にてすまされたし　次いでうまきは「手」なれど小生は内容に同情なし寧「女の手紙」の輕妙なるを取るなりの作品もう少し巫山戯てもよきやうに思ふ但し悪く洒落れず「今蓮に」程度の笑が欲しいのなり序に失禮ながら「手」の中に出て來るゴオチエの小説御讀みなされしや否やちと覺束ない氣がした故貴意を伺ふ事然り　「ピユリタンの塊壁」はもつと突込みて書くべきものにあらずやと思ふ内容は「女の手紙」よりも更に同情ある位なりあれを白粉氣はもとより色彩もなるべく乏しく平押しに押したら手ごたへのある作品が出來さうに思はるれど如何これ又序にあの作品中「蜜柑」が的皪となつてゐる所あり的皪と字共に白きをいふものなれば(東坡の有名な詩に的皪梅花草棘間などあり)黄色いものには不向きなるべし　「マギユラ」は内容書き方も同情あり唯それを兩方とも投げたる所甚同情に價せず何故もつと力を入れなかつたか不思議千萬なり

之を要するに五篇中「おぢいさん etc.」と「女の手紙」と「手」とは完成せる作品にして他は未完成の作品と申すべき乎その完成たると未完成たるとを問はずへんな神經の鋭さあり恰もマクベスの短刀の如く時々窓際に怪しげな光を放つ所賴もしげに感じたり私に思ふおぢいさんetc.程度の作品一ダアスを

書かば文壇に名を馳すること必しも難からず加藤君の言中れりされど私に又思ふ作者常に易々として事を成し易々たらざれば卽事を廢す其間自ら骨力の未薄きを憾まずんばあらず三汀先生の言必しも亦中らずとなすべからざる也依つて僕君に勸む易々たらざる所に向つて常に一歩を着けよ蒙茸を開き榛莽を破るの所恐らくは羚羊のよく千峯萬峯を越ゆる底の骨力成らんかこれ獨り君に勸むる所たるのみならず僕亦平常自ら鞭撻する所たり茂索先生以て如何と爲す　この手紙匆卒として冗談のやうに書きたれど必しも上調子のものにあらず僕の己惚を遠慮なく云はしむれば君自身の眞面目に考ふべき問題にも多少は觸れたといふ氣あり文章の浮華なるに煩さるゝ事なく僕の云はんとする所を味讀せらるれば幸甚なり　麤拙芥孤字態を成さず恐惶々々

七月二十九日　　　　芥川龍之介

佐々木茂索様

三四三　〔七月三十日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓「路上」の出來どうも思はしからず少しも早く纒りだけつけて切り上げたけれど後の小說の都合は如何にや reserve の原稿一つあれば後は菊池に賴みてもよろしく候小生は支那旅行をしない限り九月頃又書いても差支へ無之候それから久保田万太郎君何時ぞや尊臺に原稿を賴まれその儘すつぽかしてしまひし爲甚恐縮に存じ居る由近々小說書くべき旨申居候へども如何取計るべきかこれ又貴命を待ち候當用のみ

七月三十日　　　　芥川龍之介

薄田淳介様

二伸右の件御面倒ながら至急御返事願上候この頃「路上」に氣を腐らし何をしても面白くなく甚閉口致居候中央公論の「疑惑」所々で人に褒められ候も小生の見によれば同じく愚作にてこれ又褒め

られる丈不快千萬に候　以上

三四四　〔七月三十一日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓　ゴオチエが小說はマドモアゼル・モオパンなり必しも僻書に非ず御閑暇の節御一讀あれ」を言るは不遜なれどその不遜を敢てせしめば僕一時（二十三歲前後）精神的に革命を受け始めてゲエテの如きトルストイの如き巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時あり僕をしてその境地に置きしもの種々複雜なる事情あれどジアン・クリストフの影響大なりしは今に到つて忘る〻能はず今にして思へば當時の僕は始めて天日を仰ぎしもの〻如く唯天日あるを知つて諸他の星辰あるを知らざりしが如し（例せばゲエテの大を知れどテイク、ホフマン以下獨乙羅曼派の諸家の特色を輕蔑すべきものとして却けたり）されど天日を知らざるものにして如何ぞ諸他の星辰を知るを得んや是當時の僕なくして現在の僕あらざる所以なり同時に又當時の僕の如くトルストイ　ドストエフスキイを說きて他を顧みざる幾多年少の豪傑に同情なき能はざる所以なりこの故に僕をして文學の要を說かしめば直に一指頭上を指して先天日を知るべしと道破せん人或は僕の一指によりて天日の仰ぐべきを知り翻つて僕の作品の燐火に似たるを哂はんか僕は唯低頭して僕の天分薄きに忸怩たらんのみ自家の燐火たるの故を以て他の天日を誣ひんとするは商賈の子唯之を善くせん藝術の士は善くする能はず

君の書中ゲエテに及ぶの語あり僕私に君の爲に喜ぶ君既にゲエテの大を看取せば（但月並の看取にあらず）更に猪突の勇を鼓して彼の奧所に味到せよ一卷のファウストよく君の爲に神の如き彼を彷彿せしめん

僕君の先生を以て居るものにあらず故に言の先生ぶらん事を惧る或は既に先生ぶりたらん事を惧る請ふ大きな顏をするなと哂ふ勿れ僕の本意唯君をして僕の世界を看一看せしめんとするにあり言偶君を强ひんとするものあるは彼等の巨匠が僕を動かす事大なるに存するのみ

僕今も猶夜坐して彼等の作品に對する時彼等の靈旋風の如く來つて僕の書齋に滿つるが如き心地す僕が生きんとする勇氣を感ずるは誠にかゝる瞬間なり彼等の靈一として苦惱のスティグマタを帶びざるなししかも又天上の微笑常にその面に輝けるを見る彼等既に生きんとして惡鬪したり僕豈戟折れ楯挫くるを辭するものならんや　僕を驅つて創作に赴しむるものは斯の如き感激なりこの感激を共にせざる時、或はせざるに至りし時百年の故舊も僕にとつて（創作上のたり實生活のにはあらず）路上の行人と選ぶ所なし而して僕は路上の行人の中に佇むものなり故舊を數へて五指に滿たず僕輿に乘じてこの手紙を書く孟浪杜撰の言多からん元より廢紙に屬すべきものなり請ふ一讀過の後反故籠に投ぜよ　頓首

七月卅一日　　　　芥川龍之介

佐々木茂索様

三四五　〔八月一日田端から。端書、南部修太郎宛〕

路上なんぞ讀んぢやいかん讀んで少し感心したりなんぞしちや猶いかんもう一日も早くあの小說を打ちどめにしたい昨夜菊池小島氏を拉して中華第一樓へ行つた　以上

三四六　〔八月十五日金澤から。秦豐吉宛〕

朶雲奉誦　東京へ歸り次第早速貴意の如くとり計ふべし

〔四行半削除〕

それから君、久米へ勢以子と小生との關係につき怪しからぬ事を申された由勢以子女史も嫁入前の體殊に昨今は緣談もある容子なれば爾今右樣の事一切口外無用に願ひたし僕大に辯じたればこの頃は久米の疑全く解けたるものの如くやつと自他の爲喜び居る次第なりこれ冗談の沙汰にあらず眞面目に御

賴み申す事と思召し下されたし谷崎潤一郎へでも聞えて見給へ冷汗が出るぜ
九月初旬よりは東京に居る可く日曜は必在宿の豫定に候間御光來下され度道樂者どもも少々は[illegible]
參り候　この頃僕の句も新進作家にて君の水仙の句にも劣らず名句を盛に吐き居り候へば左に二三[illegible]
錄すべく御感服御嘆賞御愛吟御勝手たるべく候

宵闇や殺せども來る灯取虫
もの云はぬ研屋の業や梅雨入空（これをツイリゾラと讀む素人の爲に註する事然り）
時鳥山桑摘めば朝燒くる
青蛙おのれもペンキぬりたてか（この句天下有名なり俗人の爲に註す事然り）
秋暑く竹の脂をしぼりけり
松風や紅提灯も秋隣（この句谷崎潤一郎が鵠沼の幽棲を詠ずる句なり勿體をつける爲註する事然り）

八月十五日　　　　芥川龍之介

秦とよ吉様

二伸　君の原稿は何月號へのせる心算にや　除隊後に書くと云ふのにや隊にゐて書くと云ふのにや　もし隊にゐて書くなら匿名で書くにや
右諸點に關して田端四三五小生宛御回答を得ば幸甚なり
近來句あり

春の夜や蘇小にとらす耳の垢（美人の我に侍する際作れる句なり羨しがらせる爲註す事然り）

三四七　「八月二十三日金澤から。藤岡藏六宛」

拜啓　君の所へ手紙出すべく思ひ居りし所宿所忘れて出されずやつと今出し得る次第と思はれたし
上總屋と云ふ家は御茶屋にて、金澤の御茶屋は皆青樓の一種なり淫を鬻ぐものは女中なれば五十錢で

遊べる由卽大に辟易して一晩も泊らず退却したりそれよりここの病院は特等三圓といふ安價なれば、直に入院　今日まで無事消光の所、突然寢冷の爲風をひき目下熱の爲に苦しめられつゝあり　不快甚しく、日夜悶々

朝寒やねればがさつく藁蒲團

病室の膳朝寒し生玉子

熱の苦を忘れん爲、僅にこんな句を作り居る次第御憫察下され度しその爲中央公論の小說も半分しか書けず甚弱る

八月廿三日　　龍　之　介

藏　六　先　生　梧下

風ひき熱高し廿六日かへる

三四八　〔八月二十九日田端から。薄田淳介宛〕

肅啓尊翰前後三通共病中落手昨今漸快方に赴き候まゝこの書認め候まだ熱も少々あり原稿は勿論讀書さへ醫者より禁せられ居候へ共「大正八年度の文藝界」はメ切日限までにはどうにか執筆致し得可き心組みに候俸給の事その他いろいろ御配慮辱く御禮旁〻御返事まで如斯に御座候

八月廿九日　　芥　川　龍　之　介

薄　田　淳　介　樣

二伸

病室の膳朝寒し生玉子

三四九　〔八月三十日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

この頃評判の雲坪の畫二幅今手もとにあり一人見るのは勿體ないと思ふが夜でも見に來ませんか但卅一日の夜まででそれから先は返してしまひます

三五〇　〔八月三十日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

雲坪の幅二　隆達筆隆達節卷物一　手もとにあり卅日卅一日兩日夜分にでも見に來ませんか一人で見るのは勿體ないやうな氣がするから　以上

三五一　〔八月三十一日田端から。端書、松岡讓宛〕

御無沙汰してすまない暑いのにうだつてゐる小說もかけない君なんぞは眼が悪いと云ふエキスキユウズがあるだけまだ氣安いのだこの二三日僕はあらゆる自信を失つちまつたやうな氣になつてゐるその中行く奥さんにもよろしくそれから君の奥さんにもよろしく　頓首

（本は確にうけとつた）　芥川龍之介

三五二　〔九月十一日田端から、佐佐木茂索宛。封筒に後學芥川龍之介拜とあり〕

拜啓　サンエスとは何の雜誌なるか萬年筆廣告の爲なりや否や僕この頃世事に疎ければ高教を賜つた上で句を寄せようと思ふ

我鬼窟時々俗客を迎へるに閉口すこの間も××××と云ふ半可通來り岡を怒らせ遂に僕まで怒らせたりあゝ云ふ連中には今後露骨に悪意を表して會はない事にしようかと思ふ僕は半可通の教育を天職と心得ざるが故なり特殊とでも平凡とでも勝手な名をつけるがよしオペラの廣告やコレラの注意を組みこんで新小說と題をうつからが山師的なり今村氏のやり口とんと僕の腑に落ちず當分執筆を見合せようかと思ふ

九月十一日　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

茂　索　先　生　梧右

三五三　〔九月十一日田端から。端書、南部修太郎宛〕

君の批評は月評へまはした妖怪が谷崎程書けてないなどと云ふのは目靑葡萄の如きものの云ふ事だぞの内に日曜にでもやつて來給へインテレクトが妖怪文學に必要なる所以を說明して聞かせるから。あれでも路上より傑作だと思ふが如何

三五四　〔九月十三日田端から。南部修太郎宛〕

啓

妖婆の辯

一、我等が佐藤春夫の作品にヒユウマンインテレストなきを不足とするは彼の書く小說の全部が然る故なり妖婆一篇にヒユウマンインテレストなき事我作品の價値に何の減ずる所か是あらん

二、僕自身谷崎より遙に妖氣ある事夙に菊池寬の證明する所なり妖氣なしと云ふは君の僕に關する知識不十分より來る

三、「指紋」に次ぐ事甚不服なり（但發表の先後を以て次ぐとするならよし）「指紋」と僕の小說との關係及その次ぐ所以承らん事を期す

四、インテレクトと妖氣との關係亦その節に讓る

五、僕豈特に妖婆に自信あらんや鏡花に去る遠からざるは自ら愧づる所されど君の理窟に對しては不服ならざるを得ず故に辯ずる事然り幸に來つて論戰一場する事を吝む勿れ　以上

九月十三日　　　　　　　　　　　　　　　　　我　鬼　生

南部修太郎君

三五五　〔九月十四日田端から。佐佐木茂索宛　封筒に388句稿在中とあり〕

勳章の重さ老軀の初明り
暖かや蕊に蠟塗る造り花
この匂藪木の花か春の月
時鳥山桑摘めば朝焼くる
赤百合の蕊黒む暑さ極まりぬ
秋風や水干し足らぬ木綿糸
夏山や空はむら立つ嵐雲
山の月冴えて落葉の匂かな
黄昏るゝ榾に木の葉や榾焚けば
凩にひろげて白し小風呂敷

秋風の句を夏山の句と入れ換へられたし題は我鬼句抄署名は唯我鬼

三五六　〔九月十六日田端から。端書、南部修太郎宛〕

君のはがきを再讀したり正に「佐藤氏のは」とあり我鬼先生甚恐縮す但し他の諸點は僕の眼擦過的なりと思はず或は貴意の如く君の「文拙きに依る」なるべし日曜午後貴臨を吝む勿れ鼻山人でも立合へば更に妙三宅氏も來ないかな皆でどこかで飯を食ふと好いと思ふが如何

三五七　〔九月十八日田端から。端書、南部修太郎宛〕

どつちでもよしとにかく君を鎧袖一觸すれば足る日曜午後光來を待つべし　頓首

我鬼生

三五八　〔九月二十二日田端から。菅忠雄宛〕

御手紙難有う　妖婆の續篇を書いてゐたので大へん御返事が遲れましたあれは通俗小説のやうな氣がして嫌なんですが　あなたが面白く讀んで下さればやはり滿足です　僕はこれからいろんな物を書かうと思ひます滑稽な物も妙に人が書かないから二つ三つ書いて見たい死ぬまでに二百位短篇が書けなくつちや、幅が利かないやうな氣がしますがどうですか　長篇も書きたいこの頃バルザックの「失はれし幻」(イリュウジオン・ペルデュ)を讀んで大に感服してゐますあんな力强い長篇は日本にありませんね横文字でないとあなたに勸めるのだが、上下ともぎつしりつまつて383ある長篇だし、ちよいと御讀みなさいと云へないのは殘念です

菊池の中央公論の一幕物、非常に好いと思ひますがどうですか　あなたは好い所へはいつてお目出たいと思ひます外の事は兎も角、語學はやつて置いて損にならないから、折角御勉强なさい。根柢が怪しいと駄目だから、初步の内に氣をつけて、よく覺えるやうにするのですな

私の所の額だの、傀儡師の表紙だのから田端にゐる藝術家鑑賞家の一部では、大分お父樣崇拜が始まつてゐますお父樣の書を頒つ會を組織しようとか云ふ企てがあるやうですが、どうなりますか。結構な事だと思ひます私は夏中一度鎌倉へ參上するつもりでしたが、病氣の爲上れなくなつたのは殘念です　阿父樣によろしく申し上げて下さい

私は日曜には必在宅します(午後)いろいろな人間が來て、いろいろな事を話して行きます暇があつたら菊池でもひつぱつて御出でなさい　それから私の弟が事によつたら上智大學へはいるかも知れないのですが、學校の規則書があつたら、私まで一部御送り下さいませんか

昨日湯にはいつたら、胸のホクロに毛が一本はえてゐました。
秋風や黒子に生えし毛一根

二十二日

忠　雄　様

瀧

三五九　〔九月二十四日田端から。瀧井孝作宛〕

拜啓　留守に君が來た事を聞いて甚殘念に思つた僕も倪雲林や惲南田の畫集を君に見せたかつたのだ拓本は二つとも面白く拜見した中岳嵩高靈廟碑の方はもう少し判然とした字があつたらさぞよからうと思つたこれはよいにつけさう思ふのだ禮器碑は時々いやに肥つた字のあるのが氣になるがあれは磨滅した部分なんだらう全體は如何にも快い夏目先生は隸が嫌だつたがこれを見せたら嫌でなくなりさうな氣がする安ければ僕も買ひたい君の手で買へるなら買つてくれぬか僕の所には君の名前を書いた傀儡師が餘程前からある何時も君に上げよう〳〵と思つて忘れてしまふのだ今度は來た時君の方から催促してくれ給へ送るのは面倒臭いから　この頃は一向句を作らない今日不忍池の側を通つて卽景の句を一つ得た

秋風にゆらぐや蓮の花一つ

九月廿四日

後學　我　鬼　生　拜

折　柴　先　生　梧下

三六〇　〔九月二十六日田端から。端書、南部修太郎宛〕

啓　切符難有う廿八日午後四時までにパウリスタの二階で落合はう遲れちやいかん　四時までの事　以上

九月二十六日　　龍

三六一〔十月三日田端から。室生犀星宛〕

啓　高著難有く拜見あの詩集は大へん結構な出來だと思ひます私が今まで拜見した詩集の中でも一番私を動かしました昨夜は一晩あれを耽讀しました私の詩を贈ります私が一生に一つの詩になるかも知れない詩です下手でも笑つちやいけません「愛の詩集」はもつと度々讀んで見る心算です御禮まで　頓首

十月三日　　我鬼

室生犀星樣

愛の詩集　　芥川龍之介

室生君。
僕は今君の詩集を開いて、
あの頁の中に浮び上つた
薄暮の市街を眺めてゐる。
どんな惱ましい風景が其處にあつたか、
僕はその市街の空氣が
實際僕の額の上にこびりつくやうな心もちがした。
しかしふと眼をあげると、
市街は、――家々は、川は、人間は、
みな薄暗く煙つてゐるが、

空には一寸もぼんやりと物凄い虹が立つてゐる。

僕は悲しいのだか嬉しいのだか自分にもよくわからなかつた。

室生君。

孤獨な君の魂はあの不思議な虹の上にある！

三六二　〔十月五日田端から。端書、齋藤貞吉宛〕

六日午後御來駕ありたし右念御返事斯くの通り（七八兩日塞り九日は面會日故來客ありて厄介ならん）

二伸　電車は動坂終點下車、人力車にのり芥川と申されたし（白梅園前と註解あらば更によし）代金三十錢以下二十錢以上電車とは市内電車の事なり

龍

三六三　〔十月八日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

君はまだ僕に對して悶くなる風ありこれは悶くたらざらんとするも亦悶くなる一種として云ふなり僕は君程センシティーヴプラントたらずもつと安心してかゝられたし但君が顏を赤くしたりするは僕の如き老獪漢には羨しき事の一つなりそれから新小說はうつかりしてゐた爲原稿料の相談を忘れたり先方のつけ價にてよろしきや否や念の爲伺ひたし

三六四　〔十月八日田端から。端書、南部修太郎宛〕

君の三田文の小說讀んだあれで百枚押して行ければまづ感服しても好い僕は來月の新潮へ雜感を書いた君も必啓發される所があるに違ひないから是非讀んでくれその內又どこかへ落合つて話さないか今度は僕が借が出來た　以上

三六五　〔十月十日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　あの原稿は新小説で入ると云はない限り差上げてもよろしい兎に角今度僕が今村と會ふまで待つてくれ給へバルザックの冗漫は非常なものだ殊にシヤグランなぞは甚しいだから君のやうな山椒派が不滿なのは當然だと思ふだが冗漫だと知つたなら少くともその點妖婆と趣を一にしてゐるのを認めやしないか僕目下糞を食ふやうな心もちで大正八年度の文藝を論じてゐる息抜きに句を作るが一向ものにならない

天心のうす雲菊の氣や凝りし

芥川龍之介

佐々木茂索樣

三六六　〔十月十一日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

二伸「蛙」讀めりや　何か面白い本があつたら知らせてくれ給へ知らせた上で貸して貰へれば猶難有い面白くさへあれば何でも讀む

一しよに不折の所へ參る可く申候所今日往來で自轉車とぶつかり足を痛め候間やめにいたし候右不惡

以上

三六七　〔十月十二日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

今日は約束を果さないで失敬

白菊は暮秋の雨に腐りけり

この頃暮方寂しい時こんな句意に似た心もちがする　以上

三六八　〔十月十五日田端から。端書、南部修太郎宛〕

妖婆愈出でゝ愈愚なり今度は自分ながら辟易したあやまるよ僕は年鑑の稿が出來ないので旅行所ぢやない小說は愚作を書くが句は大分進步した敬服させる爲に一句書く「埋火の灰に赤しわが心」

十月十五日　　　　龍

三六九　〔十月十五日田端から。小島政二郎宛〕

この頃妖婆續篇に辟易して句ばかり作つてゐます瀧井や佐々木は大分惱ませたから今度はあなたを惱ませます

虹ふくや亂れゆゝしき川の蘆
夕燒や霧這ひわたる藺田の水
べたべたと牡丹散り居り土の艷（ツヤ）
何の肉赤き厨ぞ軒の雪
時雨るゝや軒に日殘る干し大根
白菊は暮秋の雨に腐りけり

戀

埋火の灰に赤しわが心

どれを拔きますか皆落第ぢや心細い　この頃凡兆に敬服してゐます几董は纎巧すぎるやうな氣がします二三日寒山落木を讀んで明治三十年以後の子規の句境が乾坤獨步なのに驚いたあれは實に大したものです

十月十五日　　　　我　鬼

三七〇　〔十月二十一日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　手紙のなくなるのは不安だなあの中には君に封筒を書いて貰つた禮や何かあつたから餘計僕も不安だよさういへば少しのろけてもゐたやうな氣がするそれを君以外の人間に見られるのは恐れるなこの間は君がむきになつて怒つた所を見て甚愉快だつた瀧井の怒るのは度々僕が怒らせつけてゐるから珍しくもないが君のは始めてだから面白かつたよ君は怒ると平生不明瞭な言語が急に明快になるあれは怒の一德だその上色が白いから艶且凄だよこれからもあゝ云ふ場合には遠慮なく怒り給へ丁度この手紙を出して一日位すると君の書いた封筒の手紙が屆く筈だから返事を書くのは見合せてくれ給へぶつかると可笑しいから

その後多忙で句所ぢやない今强ひて歌一首を案ずれば

秋を深み古江に落つる夕山の木草の影は澄み徹るかも

龍

茂索先生　梧右

二伸　號を何とかつけないかね手紙をかくとき無風流でかけないから澄心亭主人とか綠梅洞々主とか僕の持合せの號を進上しようか

三七一　〔十月二十二日田端から。岩野英枝宛〕

拜復　日日へ玉稿送つて下すつた由私からも難有く御禮申上げます社の方からすぐ知らせてくれたならもう少し早く御禮も申せた筈と殘念に思つてゐます

あなたが社交が下手だつたら私如きものは下手以下です（尤も偶〻新潮記者は社交上手にしてくれま

したがつてその點どうか御安心の上御つき合ひ下さい　泡鳴先生の御宅へも一度出たいと思つてゐますが性來の無性に祟られて未にその機を得ずにゐますいづれその内に拝趨する時があるだらうと思つてゐます

末筆ながら今度手紙を御書きの時は況や封までなすつた時は「變だ」と云ふ氣がして破つたり何かなさらないやうに希望します　とりあへず御禮旁〻御返事まで　粗紙草卒よろしく御判讀を願ひます　頓首

十月廿二日朝

芥 川 龍 之 介

岩 野 英 枝 様 粧次

三七二　〔十月二十七日田端から。小島政二郎宛〕

拝復　凡兆の佳句左の通り

時鳥何もなき野の門構

肌寒し竹切る山のうす紅葉

涼しさや朝草門に荷ひこむ

朝露や鬱金畠の秋の風

初潮や鳴門の浪の飛脚船

など君の選に洩れたれど大好きなり「禪寺の」「門前の」「灰捨てゝ」「下京や」皆好「町中や」は「時雨るゝや黒木つむ屋の窓明り」と共に巧を極めすぎたる氣がすれど如何

「朸」はオウコです但し假名遣ひは當てにならず「窓」は俗惡な創作生活を打破する記念に書いたのです

澤木さんに獻じたのは慚愧の意を表し旁〻精進の志を決する爲でしたこれから手堅く押して行きたいと思つてゐますどうも今年の創作生活は新年から調子が狂つてゐた

廿四日待つてますからいらつしやい「何菊や」と云ふ句作つた筈はないが何ですか「白菊は暮秋の雨に

腐りけり」ですかあれは新しがつたのですよこの間茂索折柴等を相手に歌を作りましたその時の僕の作を御披露します

秋雨の降り來る空か紅殼の格子の中に人の音すも

鹽草に光はともし砂にゐて牛はひそかに眼を開き居り

外の連中の歌も紹介しようと思つたがやめました　頓首

芥川龍之介

小島政二郎様

二伸　「埋火のほのかに赤しわが心」は傑作だと思ふがどうですか　やけて鑑賞的態度が不純になつてゐるとくだらなく見える惧がありますがな

虹ふくや江の蘆五尺亂れたる

凩や目ざしに殘る海の色

三七三　〔十月二十七日田端から。薄田淳介宛〕

薄田さん　今日は大阪毎日の學藝部長へ書くのではありませんあなたへ書くのです　昨日富田砕花が横須賀へ來て私のところへ泊りましたさうして二人であなた論をやりましたどうも詩人は葛城山の歌時代の人たちの方がうまいと云ふ事になつたのです　富田は知りませんが私などは中學の四年生位だつたと思ひます早稻田文學の特別號か何かであの歌が出ました(前に書いたものを何とか云はれるのは不快な事もあるものですだからもし私が今あなたに幾分の不快を與へてゐるとしたらそれは大目に見て下さい私は今私の中學生だつた時分の事を考へて昔に返つたやうな心もちになつてゐるのです)當時まだ一中の學生だつた秦豐吉が文章世界の投書家で萎歌と云へば今より餘程有名な位でしたそれが日記文か何かの募集に應じて當選した中に「夜葛城山の歌を讀む神韻縹渺たり」と書いたものです私

は三中だつたから直接秦を知らなかつたが、その一行で大に肝膽相照らした氣がしましたそれが一高へはひり大學へ來るやうになつて秦や何かと知り出してから自然とよくあなたの事が話題に上りました殊に赤木桁平の如きは「公孫樹下に立ちて」か何かの中に出て來る地方が彼の故郷なので末に「ああ日は南伊太利亞の」をよく覺えてゐるので驚きましたさう云ふ因緣が纏綿してゐる所へこの六月に京都へ行つて下加茂の友だちをたづねて一しよに飯を食つてゐたら何かの拍子でその男と私との間に「一花心興がりて」と云ふ文句が出だしたのです「一花心興がりて」かねなどといふ工合で會話の中へ出たのですからこれもあなたには不快かも知れませんが我々の心もちには少しも惡意はないのです二人とも同じ詩をそらで覺える程よんでゐて場所が下加茂だつたんで偶然話頭に上つたのですそれが最近私は「ああ大和にしあらましかば」を讀んで大に感心しました富田とあなた論をした時の論據はその時の感心だつたのですさうしてその感心の附錄には年毎に私の頭が下がつて行く推古から天平貞觀の彫刻に對する尊敬――まあ奈良朝思慕がくつついてゐたのです富田のやうなホイットマンやトラウベルの好きな人でさへその感心に同意すると云ふ事は私にとつていい教訓でしたそれは完成した藝術品は何時までも生きると云ふ事ですこれは誰でも知つてゐる事でせう　しかしそれが自分と近い時代に實例としてあると云ふ事は非常に心丈夫です　今日富田が歸つたあとで急にこれだけの事が書きたくなつたから書きました

最後に私のしどろもどろな小說があなたの手で新聞に出ると云ふ事に私が甚恐縮してゐると云ふ事實を書き加へて置きます

芥川龍之介

薄田淳介様

二伸これを封じる時、御手紙を頂きました原稿料も確に落手しました　以上

三七四　〔十月二十八日田端から。佐佐木茂索宛〕

見合は先方が絢爛としてゐないから多分不調だらうこの頃君の手紙が一週に二三通來るので家中君の健筆に敬服してゐる邦枝が時事へ僕の歌を出した由辟易した
　祝砲やお降りあればどろどろと
藤森氏正直で好い氣がした　頓首
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

三七五　〔十月三十日田端から。端書、小島政二郎宛〕

明日曜の午後來ませんか少し御目にかけたいものがあります　以上
　時雨るゝや屢〻暗き十二階（途上卽景）

三七六　〔十一月三日田端から。畑耕一宛〕

啓　××さんの原稿送ります　先方へは僕が社の方へ推薦し社の方から斷る形式にして頂くのですからその邊然る可く御含みを願ひます長すぎるとか原稿がたまつてゐるとか然るべき口實をつけて斷つて頂くのですな××さんが僕への云ひ分には「何時掲載されても好いから掲載してくれろ」と云ふのですからその邊も御承知置きを願ひます　頓首
　　十一月三日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介
　畑　君
二伸　講演會今から少からず辟易してゐます　以上
三伸　その上に猶辭を設けて返事ののびた詑びを云つて下されば好都合です（學藝部が多忙だと

か何とかく僕は外を當つて見たのですが皆駄目でその儘原稿を送るのが今日までのびのびです

三七七　〔十一月四日田端から。池崎忠孝宛〕

本確に落手僕疎懶小說を書くに懶く人を訪ふに懶し僅に吟興を催せば即以て自ら懷を遣るその内何とか來て貰ふかしたいと思つてゐる

山の月冴えて落葉の匂かな

病　我　鬼

桁　平　先　生　梧右

二伸　目下風邪で寢てゐる大した事はない

三七八　〔十一月四日田端から。岩野英枝宛〕

拜啓　先達は失禮しました　あなたの原稿が新聞へ出なかつた理由は左の通です　あなたの原稿を頂戴したと云ふ僕の通知が遲れた爲あなたの原稿の方が先へ社へ着いたので社ではそれを菊池へ廻送したのださうです（受取つた男が僕の住所を失念してゐたので菊池でもよからうと思つたと云ふのだから驚きます）所が菊池は旅行中なので原稿は小石川中富坂の彼の家へ屆いた儘今日までそこにあつたのださうです

右樣の次第につき菊池が歸つて來たのでやつとすべてが明になりました近々掲載の運びになるだらうと思ひます一時はあなたの原稿が途中紛失したのではないかと思つて大分心配しました　つい僕の疎漏からあなたにもいろいろ御迷惑をかけて甚恐縮に思つてゐます以上とりあへず御詫びまで　頓首

十一月四日朝

芥　川　龍　之　介

岩　野　英　枝　樣

君の印象中「感銘は滅多にない」とありあれは「滅多に間違はない」の誤植なり君が年中石心鐵腸の無感銘人だと思はれさうで困つてゐる君の歌二首とも好い紫の花の比ぢやない僕は新年號にとりかかつたまだ講演は草稿も出來ない　さやうなら

唱和一首

秋の日のほがらほがらに照るところ菊を買ひ持て行くなんぢはや

三七九　〔十一月五日田端から。江口渙宛〕

三八〇　〔十一月九日田端から。下島勳宛〕

啓　昨日はわざわざ講演御來聽下され難有くも恐縮に存候壇上にては眼ちらつきよく分らざりしも菊池の講演を傍聽致せし節不圖も御出になる事を知りし次第に候其折御挨拶申上ぐ可き所混雜中意に任かせず缺禮仕候今夜にても參上致さんと思ひ居候へども日曜の面會日にていろいろな人間參る可く拜謁致し難かる可きやも知れず候間この手紙にて御禮旁々御詫び申上候　小生の講演もうかうかしやべる事も有之候へどあの演壇の暑さなみ大抵ならず且存外時間のかかりしに當惑し尻切蜻蛉にして止め候唯もつと氣が顚倒するかと存候所存外逆上せざるものと發明致候へば今度からはもう少し講演らしい講演を致す可く候　草々頓首

十一月九日　芥川龍之介

空谷先生　梧下

二伸　先日晶子女史歌會へ參り候所小生の歌ちつとも拔けず漸く二點を得しのみに候御一笑までに當日好評なりし歌と最も不評なりし小生の歌とを御らんに入る可く候

戀に燃え反逆に燃え紅の火花を散らすわが心の臟　萬造寺齊作

入日さす草の家なれば麥飯にわが食すものは蝗麻呂かも　　小生作

三八一〔十一月十日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

明十一日午と十二時半との間白木屋四階に待たれたし平田さんの子病氣につき岡と平田さんへ行く事當分延期になつたその爲國展見物を右十一日に繰上ぐ

三八二〔十一月十一日田端から。與謝野晶子宛〕

拜啓先達拜趨缺禮致しましたまた今日は高著を頂き難有く御禮申上げます　歌會の節は小生も江口も會費を差上げる事を失念致し甚恐縮に存じて居ります　もし御面會日等の定めがございましたら御知らせ下さいませんかその節參上萬々貴意を得たいと存じます　右とりあへず御禮まで　頓首

十一月十一日朝　　芥川龍之介

與謝野晶子様　粧次

三八三〔十一月十一日田端から。小田壽雄宛〕

啓　君の手紙愉快に拜見僕に何故冷眼に世の中を見るかと云ふ質問も青年の君としては如何にも發しさうなものと考へますが僕には現在僕の作品に出てゐる以上に世の中を愛する事は出來ないのだからやむを得ませんのみならず愛を呼號する人の作品は僕にとつて好い加減な嘘のやうな氣さへするのです僕は世の中の愚を指摘するけれどもその愚を攻撃しようとは思つてゐない僕もさう云ふ世の中の一人だから唯その愚(他人の愚であると共に自分の愚である所の)を笑つて見てゐるだけなのですそれ以上世の中を愛しても或は又憎んでも僕は僕自身を僞る事になるのです自ら僞る位なら小説は書きません要するに僕は世の中に pity を感ずるが love は感じてゐない同時に又 irony を加へるより以上に

憎む氣にもなれないのですから云ふ態度は今の君にとつて物足りないものかも知れませんけれども年齢は早晩君をそこまで導くでせう僕は教師をやめてのびのびした學校生活は大嫌だつたのですだから生徒の事も今はよく覺えてゐない覺えてゐるのは一年の時から教へた君の class だけ位です君の健康を祈ります　頓首

十一月十一日　　　　　　　　　　芥川龍之介

小田壽雄様

三八四　〔十一月十三日田端から。薄田淳介宛〕

啓　用件を書きます

(一)江口の小説貰へます本月中に谷崎と一しよに題を知らせます

(二)里見の小説は「今年竹」の續篇ださうですが題を變へる事、長さを五十回以内にする事等の條件にして頼みませうかどうしますか御差圖下さい

(三)久保田が小説を書く由申上げて置いたと思ひますがこの間久保田に會つた所あなたから何とも御照會がないと云つて妙な顏をしてゐましたこれ又貰ひませうか止めますか同様御差圖下さい

(四)龍村平藏氏事今度淸浦氏、正木校長等の主催で日本橋倶樂部に展覽會を開きますその後大阪でも開くさうですがあなたにも作品を御一瞥願つた上出來得べくんば發起人の一人になつて頂きたいと云ふのですが如何でせう作品が非凡な事は私が保證しますもし御差支がなかつたら御名前を貸してやつて下さいませんかいづれ貴意を得る爲に龍村氏或はまだ氏が滯京中だつたら氏の代理人が參上するでせうからその節よろしく御指導を願ひたいと思ひますこれは龍村氏から吳々もあなたに願つてくれと云ふ頼みでしたから序を以てこの手紙に書き添へます御諾否だけ二三日中に私まで御一報下されば更に好都合です

以下雜談です風ばかり引き續けて弱りましたその風聲でこの間講演をやりました大變たへいだつたので餘計辟易の至りでした編輯會議にでも時々出席して演說の稽古をして置けばよかつたと思つた位です風は未にぬけませんこの手紙もまだ水洟を垂らしながら書いてゐます年鑑の原稿が遲れたのも一半は風の罪と御思ひ下さい新年の小說は十二月十五日頃までに十回位仕上げたいと思つてゐます　以上

この頃の句

竹林や夜寒の路の右左

十一月十三日夜　　芥川龍之介

薄田淳介様

三八五〔十一月十五日田端から。端書、小島政二郎宛〕

龍村氏展覽會是非御一覽を請ふ今日見て今更の如く感服右御勸誘まで　頓首

十一月十五日　　芥川龍之介

三八六〔十一月十八日田端から。佐佐木茂索宛〕

今日茂索二世より來書その返事のやうな顏をして君に手紙を書く事然り　SSへ小品動物園を送つた輕佻浮薄なものにつき君の如き博雅の君子はなる可く見ないやうにしてくれ給へ但し原稿料はなる可くよくしてくれるやうに斡旋してくれ給へ尤もちよいとうまい所もある
この前の日曜君甚おとなしかりし爲氣の毒のやうな氣がしたり既に佐々木茂索たり谷崎潤一郎ありと雖も何かせんこれからもつとしやべつてくれ給へ君も小島も秋風の惡口一つ云はなかつたのもさもあるべき事ながらさもあるべくすぎるのはいけないよ　新小說の小說悉讀んだ佐々木茂索作る所のおぢいさんとおばあさんの話を以て壓卷と爲す　頓首

十一月十八日　芥川龍之介

佐々木茂索君

三八七　〔十一月十八日田端から。中根駒十郎宛〕

拜啓　内田の件早速御承諾に預り難有く御禮申上候同人は陸軍士官學校教授兼海軍機關學校教官と云ふ御役人にて夏目先生の御弟子の一人なれば飜譯には出たらめもなかるべく存居候住所氏名は小石川區高田老松町四十三内田榮造につき今後は一切の御交渉直接同氏へ願ひたく候但右樣の腰辨故日曜以外はひるま在宅致さざる可く手紙にて一應御照會の上御會ひ下され度候右とりあへず御禮旁〻御返事まで　頓首

十一月十八日　芥川龍之介

中根駒十郎樣

二伸　伊藤氏にも然る可く傳言仕る可く候

三八八　〔八年（推定）十一月十九日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

天暗し一本杉や凍てゝ鳴る

門内の敷石長き寒さかな

松風や人は月下に松露を掘る

「天暗し」嚇したやうで氣に食はねど初五字思ひ當らず赤鯉の句「つき出した手のこぶし」「はすかひに赤鯉」二句をとる

三八九　〔十一月二十三日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　勉強する由結構な事だ僕もこれから勉強するつもりだ二三日前香取先生や龍村さんと一しよに飯を食つて兩先輩の半生の話を聞いたらしみじみ僕などは增長しすぎると思つた香取先生が米鹽の資にも困つて前の細君が逃げてしまつた話や龍村さんが破產して自殺もしかねない氣になつた話などは僕一人聞くのさへ勿體ない兩先輩と自笑軒を出た時などはほんたうに名人傳を讀んだやうな氣がした子規は三十六で死んでゐる僕などは餘程しつかりせぬとあの年では碌な事一つせずに了りさうだ　齊藤茂吉から手紙が來てしみじみとみ文讀みし後にはりつむる心おこりくるを君につげなむと云ふ歌を書いてよこした僕の新潮の感想を讀んでくれた歌だ僕があの感想を書いたのは童馬漫語に刺戟せられる事多かつたのだからこの歌は殊に嬉しく讀んだ何にしても精進せぬと內の寂しさをどうする事も出來ぬ但し勉強するにしても田端へは時たま來てくれ給へ　僕は手習ひもしたい篆刻の趣味もわかるやうになりたい陶器漆器いづれも見る眼が欲しいものだ書畫骨董を見る人は文壇の批評家よりずつと落着いてゐて叮嚀親切に各の作品を玩味するあの玩味する態度だけでも學んで損にはならぬやうに思ふ僕などもずつと落着かないと今分の所碌な小説は書けないのだから

　この頃の句二つ

江の空や拳程なる夏の山

夏山や幾重かさなる夕明り

　十一月廿三日　　　　　　　　　　我鬼拜

大芸居主人　梧下

二伸　中西屋へは早速行つてみるつもり O. Henry は兎も角外の本も來てゐさうな氣がする
SSSも金をくれるなら早い方が好いな月末の拂がたまつてゐるから

三九〇　〔十一月二十四日田端から。小島政二郎宛〕

啓　頃來鼠小僧次郎吉を書き居る所江戸詞始末に了へずつぐづく森の石松の御苦心に想到したりあの詞へ批を打ちし事全く增長慢のなす所と大に後悔

それから藤野古白の句にかう云ふがあり

傀儡師日暮れて歸る羅生門

まるで小生の出す本を豫言したやうで氣味の悪い位暗合の奇を極めたものと存候

門内の敷石長き寒さかな

十一月廿四日午後　我　鬼　拜

把栞軒御主人　榻下

三九一　〔十一月二十六日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　江の句水蘆の方遥に句品上なる如しあれは貰つて僕の句にするよ水蘆と來ると打ち透かすも活きて來るのだ夏山の句未考その內あれも改作してものにするその時も亦氣がついたら手傳つてくれ給へ小穴君からはがきが來た君たちは皆揃ひも揃つて同じやうな字を書くねまさか腹の中から拓本にくるまれて生まれて來た訣でもあるまいに　これは惡まれ口だ　小穴君の作品はまだ讀まないこの間はあの人が來てくれたのでいろいろ面白かつた

昨夜往來で句を得た

稻むらの上や夜寒の星垂るる

十一月二十六日　我　鬼

折　柴　先　生

三九二　〔十一月二十六日田端から。小穴隆一宛〕

原稿拜見しました左に遠慮のない所を申し上げます話の方は概して言ふと材料そのものの面白みが勝つてゐてあなたでなくては書けないと言ふやうな趣が乏しい成程讀んで面白いのは事實だがそれは未地のまま素材を抛り出した面白さだと心得ますその難が一番少いのは回想記ですそこであなたの話が何故材料の面白さ以上に出ないのだらうと考へると第一にはさう言ふ材料をとり扱ふあなたの主觀い力が十分中まで滲透してゐないせゐではないでせうか「悲しき誕生日」などは殊にその爲に折角の材料が活きなかつたやうな氣さへしますそれから書き方ですなあなたの文章は荒削りで力があつて甚氣持ちが好いが餘りあなたの獨合點だけでどしどし書いてしまふから讀者は時々話の中で途方に暮れる事がありますたとへば「志一さんの話」の中で「母は誰だらうと思つて戸を開けると云々」と突然あなたの阿母さんを點出するが讀者にはちよいとあれが誰の阿母さんだか判然しない――さう云ふ所が可成ありますこの二點が滿足に出來たらあなたの話は皆立派なコントになるでせうそこで元へ返りますがあなたの話は材料の面白さが勝つてゐる逆に言へば表現が十分でないその表現の中でも人間を書くのに行爲から心理を書く場合(外で內を說明する場合)は心理として書く場合より遙にうまい宮島先生を見ても先生が「さうであつたか」と急に柔しくなる所はまづいが末段の「一月ばかりたつての朝云々」の所は淡々としてゐても成功してゐます最後に作品の出來を言へばやはり第一は回想記でせうあれははんたうの哀情があつて文章も中々面白い私のやうな擢れつからしの人間には書けないものです(唯 father などと云ふ英語はどうも嫌味です)あれだけのものが書ける人は海紅同人にも多くはないのでせう折柴など感心しなければ折柴の方が悪いのです詩は「われ唯一度きみを欺けり」だけ面白く讀みました「斷章」は最も辟易します序ながらあの中の鷄の畫を愉快に眺めました但腹の所の三筆ばかりの線は甚好きません以上は私の出放題な批評です勿論私自身の事は大抵棚へ上げた批評と御思ひ下さい忘れたが馬のつるむ話は最も素材だけ抛り出したものですつるみそくなつた馬の爲にももう少し親切に書いておやりなさいもう一つ忘れたが大島風景小品畫會の文は好きですな偉らがつたり殊勝がつたりし

ないで甚心もちがよろしい但しあれを讀んですぐ入會する氣になる程感服するかどうかわかりません　妄言多罪

十一月廿六日夜　　芥川龍之介

小穴隆一樣

三九三　〔十一月二十六日田端から。端書二枚、岩野英枝宛〕

御手紙拜見久米の御嫁さん何分よろしく願ひます

先達は失禮しました　イタリヤ軒の話も面白く奉誦好い出來と存じます　それから昨日社へ參つた所前申上げた通り記事輻輳で當分文藝欄休みの由追つて來月から同欄を始めたら玉稿載せたいと云つてゐましたもう少し御猶豫願ひます　妻よりもよろしく　頓首

十一月二十六日　　芥川龍之介

三九四　〔十一月二十九日田端から。端書、小島政二郎宛〕

この間は御馳走さま　しろざんの風呂敷なるもの德川時代にあつた由しろざんとは白棧ですか　御商賣柄御尋ねしますこんどの小説に使ひたいのですから

稻むらの上や夜寒の星垂るる
竹河岸の竹ひゞらぐや夕凍てて

三九五　〔十二月十四日田端から。端書、岩野英枝宛〕

久米のお嫁さんいろ〳〵難有うございました十日會で御目にかゝつて御禮申上げる所年末の原稿を書くのが多忙な爲とう〳〵行けなくなりました未に出來上らないで毎日催促されてはうん〳〵云つてゐ

る始末です御禮まで　頓首

十二月十四日

三九六　〔十二月十四日田端から。端書、小穴隆一宛〕

御句拜見涙尿滂沱たる句の方好きです又何時か來て話を聞かせてくれませんか

枯藪に風あり炭火起す家

これはボクの癇積を句にしたのです

三九七　〔十二月十七日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　この間は失禮おふくろの病人の爲僕が名代に法事へ行つたのだ　結婚問題も滿足に解決が出來た由御目出度い事だ　それから石印難有う　あの印面は杉宮之印と毛驪之印とだらうかそと讀み兼ねるから敎へてくれ給へ素人らしい好い印だがあれで中々器用に手がはいつてゐるね僕が篆刻をやればもつと荒削にやる　やつと今日で新年ものが書き上げられる筈だ家も探して置かう家賃は二十圓位で好いか

極月に取急ぎたる婚儀哉　　碧童

襖つくろふ俳諧の反故　　我鬼

と云ふのはどうだ

十二月十七日

芥川龍之介

折柴先生　梧右

三九八　〔十二月十七日田端から。小島政二郎宛〕

拜啓　さて又御願ひがあるのですが「春雨物語」を御持ちになりませんか僕も持つてゐたのですが誰かゞ持つて行つてしまつたのです僕が讀みたい訣ぢやないお隣の香取先生が讀みたいのださうです御持ちなら取りに參上しますそれから書齋を片づけたら何時か君の持ちこんだ紙や短册が出て來て大に恐縮しました紙は今度來た時御持ちなさいとても窰恐しくて書けません短册は近日御茶を濁しますそれから金剛經の拓本一度差上げると云つたものが何時までも書齋にあると借金をしてゐるやうで不愉快ですこれ又今度御出の節御持ち歸り下さい誰か外の人にやつても一向差支へありませんこの間留守に瀧井が來て石印を二つ置いて行きました呉れたのかなと思つて押して見たら妙な號が彫つてあるのでこりや貰つた次第ぢやなかつたとあきらめました所があとで折柴のよこした手紙によるとやつぱり呉れたのださうでしたおかげで何度も頭の中で禮を出したりひつこめたりしました碧童刻だとか云ふ事で嫌に樸訥らしく見せかけた印です今度來たら御覽に入れます如斯僕は平氣で貰ひます君も僕の上げる拓本なぞは平氣で御貰ひなさい　やつと小說も今日で新年號の文債を償却する筈です君の小說は出來ましたか五六日前痼癪が起つた時作つた句を御披露します

曇天や蝮生きゐる罎の中

十二月十七日朝　　　　我鬼

把栗軒御主人　榻下

三九九　〔十二月十八日田端から。水守龜之助宛〕

拜啓　新潮の原稿御約束しました所昨夜より急に發熱し今日猶床に就いてゐます醫者曰流行性ではないが風邪だらうと、それ故どうも執筆する勇氣が起りません昨晩も半枚書いて見た所熱が八度になつたので止めました右樣の次第に就き寄稿の件は不惡御容赦下さいこれで頭痛腰痛咽喉痛がないと原稿を書く苦勞がなくなるだけ甚天下泰平なのですが方々痛い爲不愉快です　以上

臘月十八日
水守龜之助樣
芥川龍之介

四〇〇 〔十二月二十二日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

こんな句はどうだい
風落ちて枯藪高し冬日影
人絶えし晝や土橋の草枯るゝ
雲遲し枯木の宿の照り曇り
龍

四〇一 〔十二月二十二日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

更にこんな句はどうだい
龍膽や風落ち來る空深し
冬空や高きに拂(ハタ)きかくる音
夏山や峯も空なる夕明り
はがきで點をつけてくれないか一時間ばかりに六つ作つたらくたびれた　頓首
龍

四〇二 〔十二月二十二日田端から。小島政二郎宛〕

啓　春雨物語難有う早速香取先生に持たせてやりました
「魔術」は「蜘蛛の糸」程詩的でないから渾然としないのは當然です其代り「蜘蛛の糸」に無い小說がある

でせう小説を書く事は必しもなさざる可らざる事ではないでせう僕も昔は誰にでも書け〳〵とすゝめましたが今はそれ程煽動しませんアクションが一番尊いとは思はなくなつて來たからです書きたかつたら御書きなさい書きたくないのにうん〳〵云つて書くのは(職業なら知りませんが)莫迦げてゐます僕は唯書きたいから書いてゐるのに過ぎませんさうして同時に又書きたい事が必しも書きたくない事より高等だとは思つてゐないのですだから僕も書きたくなつたら何時でも書くのをやめる心算です藝術の士の踏むべき道は舶來の道ばかりぢやありません日本人は洋服が似合はない限りトルストイやユウゴオになれない方が自然なのですさうは思ひませんか

又駄辯を振ひましたこれでやめます　頓首

十二月廿二日　龍

小島政二郎様

二伸　御句「人だかり」の外二句共好いと思ひます

風落ちて枯藪高し冬日影

人絶えし晝や土橋の草枯るゝ

雲遲し枯木の宿の照り曇り

こんな句はいけませんか僕は十八世紀調を鼓吹しようと思つてゐます　以上

四〇三　〔十二月二十三日田端から。端書、江口渙宛〕

大毎の小説の題と材料の大體を東區大川町大毎社内薄田淳介氏まで知らせてくれ給へ至急

この頃の句一つ

人絶えし晝や土橋の草枯るゝ

二伸　今君の手紙見たこれは句を見せる爲出す

四〇四　〔十二月二十九日田端から。佐佐木茂索宛〕

語を寄す書き飛ばす稽古なんぞする事勿れ如何にあせつて見た所で君善く一夜にして牛込天神町よりヤスナヤポリヤナへ轉居する事を得ん僕は尻を落ちつける工夫を積まんとす蓋し書き飛ばす稽古をしてもう懲り懲りしたればなり君幸に僕の愚を再する勿れ私に思ふ君の短は伸び難きにあらずして伸び易きにあり書き飛ばす稽古なぞした日にはこの短遂に補ふの日無からんとす僕君の手紙を見て驚きたり恐らくは君が想像する以上に驚きたるならん故にこの書を寄す君もし君の法器たるを知らば深く自ら重んじて文壇に充滿する小乘嘗糞の徒の眞似をする勿れトルストイの褌を拜領して感涙止め難きものは廣津和郎の持ち役たらしめよ成瀨正一にしてロオランの玄關番たるも君の知つた事にあらざるべし長與善郎がドストエフスキイの駒下駄を買占めるも彼自身の勝手たらん佐々木茂索は常に佐々木茂索たらざる可からず佐々木茂索たる可からんば一拳石を積んで山と成す程根氣を持つ事肝腎なりあせる可らず怠る可らず僕自身この根氣の必要を感ずる事今の如く切なるは非ざるたりされば將に君に望む書き飛ばす稽古なんぞしちやいかんすると君の天分が荒む惧がある　以上

十二月廿九日　　我鬼生

大芸先生　梧右

四〇五　〔十二月三十一日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

「葱」評あんな冷やかしはいかんあれを讀みながら句を得た川柳かな

牛込に春陽堂や暑き冬

秋の字を入れたかつたがはいらなかつたと思ひ給へ　龍

四〇六　〔大正八年田端から。下島勳宛〕

拜啓雲坪二幅と隆達の卷物長々拜借難有く存候小生參上御返し致す可き所唯今菊池江口參り居り候間下女に持たせて上げ候に付御落手下され度願上候　早々不悉

龍之介

下島先生侍史

四〇七　〔大正八年田端から。端書、小島政二郎宛〕

二十九日午後二時頃から運座をしますが來ませんかなる可く御出でなさい

榾焚けば榾に木の葉や山暮るゝ

四〇八　〔大正八年田端から。端書、瀧井孝作宛〕

例の運座二十九日午後二時より催す事としたり御出席の上一同の手並を見てくれ給へ君の「弟の死」?は好い出來ですなあとの寫生文はまだ讀まない

芥川龍之介

四〇九　〔大正七・八年田端から(推定)。佐藤春夫宛〕

拜啓　ジイドのワイルドこの者に御渡し下され度上る筈の所氣が重くなりやめに致し候　頓首

龍

佐藤樣

大正九年

四一〇〔一月二日田端から。端書、南部修太郎宛〕

啓來る六日泡鳴先生我鬼窟へ參り候間御來駕の上御淸話下さるまじく候や伺上候　草々

芥川龍之介

四一一〔一月九日田端から。小島政二郎宛〕

啓　Blood & Sand は Ibanez の作と知り候 Ibanez は Spain の Zola と稱されし人、作風御想見なさる可く候未見の書ながら恐らく大兄には向かなかる可き乎この頃素堂句集を讀み天明に至つて蕪村の出でたる偶然ならざるを知り候言水は目下諸方詮索中短歌私鈔など讀むと歌も作りたくなります　なこんな調子の歌を

藤咲くや日もうら〳〵と奈良の町

一月九日　我　鬼

小　島　樣　梧右

四一二〔一月十三日田端から。端書、小島政二郎宛〕

昨日社へ參り候所自由畫展覽會の相談永びき候爲典山を聞きに行けなくなり再三君の所へ電話をかけしも不通とう〳〵お流れになり候といあへず御詫びまで

二伸　十六日夜參りたけれど如何にや

四一三〔一月十七日田端から。中戸川吉二宛〕

拜啓　高著を頂き難有う君はインフルエンザにて入院中の由僕もインフルエンザで寢てゐる始末だ精々癒りつこの競爭をしよう　右とりあへず床上よりお禮まで　頓首

一月十七日　　　　芥川龍之介

中戸川吉二樣

二伸　裝釘の黑い色はロオルをかけなかつた方がよかつた　再版からロオル無しにしては如何

病我鬼拜

四一四〔一月十七日田端から。中戸川吉二宛。封筒に小石川病院內流行性感冒患者中戸川吉二樣とあり〕

物干しへ蒲團と机とを出して原稿を書いてゐると僕の知つてゐる女が「これを捨てて下さい」と云つた受取つて見ると死んだ金魚だから物干しの下へ捨てた下には蒼い海が少し見えたするとその女が「あなたも捨てゝお貰ひなさいよ」と云つた「あなた」と云はれた女はお夏に違ひなかつたお夏は手のひらへ何か入つてゐるのを僕の手のひらの上へあけた見ると水の中にぼうふらが五六匹泳いでゐた何故かその時中戸川が燒かなければ好いがと思つた「水族館でござい」と云ふ聲がした聲の主は春樹さんだつたパッチに尻端折りで皮の鳥打帽をかぶつてゐた何が水族館かと思つたら扇子で僕の手のひらの中のぼうふらを指してゐた太鼓持のやうな嫌な奴だなと思つた雷が鳴つた僕の知つてゐる女が「雨がふるからこつちへおはいんなさい」と云つたその女はお夏と一しよに二階にゐた二階には朱ぶちの夏目漱石の額があつて鏡蒲團が澤山敷いてあつた　お茶屋か何かの大廣間らしかつた實際雨がぽつ〳〵降つて來た　上を見たら向うの屋根の上に繭玉のやうな雲が靑い空に白くぽつ〳〵浮んでゐた「あれは雷が鳴るから電氣で雲が細(こまか)くなつたんだ」と僕が春樹氏に說明した春樹氏は何時か谷崎潤一郞になつて

「田端は地震がなくつて好いな」と云つた僕は谷崎と田樂鍋を隔てて坐つてゐたそばに野上臼川君がゐたその外雜誌記者らしい人が二三人ゐた窓の下に稻田と雜木樹が見えた「狸はどうです」と野上君が云つた「狸は出る」と谷崎が云つた――そこで目がさめた「反射した心」を讀みながら寢てしまつたのだつた獨りでにやにや笑つた夢の中のお夏の顏は覺えてゐない病中の御慰みまでにちよいと書いてごらんに入れた　以上

一月十七日　　病　我　鬼

中戶川樣

四一五　〔一月十八日田端から。小林直太郎宛〕

拜復　玉稿唯今落手すぐに新潮社へ送りました何分〆切の時間に遲れてゐるので間に合へば好いがと思つてゐます　實はあの玉稿も直接あなたの方から新潮社へ御送り願つても好かつたのですが又さう願ふ心算でゐました私はその旨高橋君まで特に念を押して置かなかつた事を大に後悔してゐます今度のあなたの小說の事徹頭徹尾私のインフルエンザが災して思ふやうに御斡旋出來なかつたのは遺憾ですがこれも天運と御諦め下さい私はまだ床を離れられません　頓首

一月十八日　　病　我　鬼

眞　木　珧　樣

四一六　〔一月十九日田端から。森林太郎宛〕

拜啓　友人佐々木茂索氏を御紹介申上げます　氏は天眞堂と云ふ古玩をあきなふ店の御主人でその天眞堂の命名を先生に願つた事があるさうですから實は私が御紹介申上げるまでもないのですが氏の何でもと云ふ依賴によりこの狀認めました　何でも今度主宰する事になつた時事新報文藝欄の用向きで

御差支へのない限り先生の御眼にかゝりたいのださうですどうかよろしく御取計らひ下さいまし右御願ひまで　草々不宣

一月十九日　芥川龍之介

森　先　生　梧下

四一七〔一月十九日田端から。端書、小島政二郎宛〕

啓「炭を割る」の句一代の名吟我鬼先生一誦殆病懷を忘る歸命頂禮々々々々

一月十九日　病　我　鬼

四一八〔一月十九日田端から。江口渙宛〕

啓　とう〳〵流行性感冒に罹つて寢てゐる頭痛腰痛喉痛交〻加はつて閉口だそこへ秦豐吉が來て評論集を出したいと云ふのだが君の評論集を出す本屋で秦のも引受けてはくれないだらうか秦は今度獨乙へ行くので過去の仕事の片をつけて行きたいのださうだから部數が少くつても印税が少くつても文句を云ふまい活字にさへして貰へれば本望なのだから原稿は皆で五百五十枚あるが本屋の希望でその中から好いのだけ選拔しても好いさうだ所載雜誌は三田文學と早稻田文學とが主だと云ふ事だ君から一應紹介を願へれば幸甚だと思つてゐる右とりあへず御願ひまでこの手紙を書いた　頓首

一月十九日　芥川龍之介

江口渙　君

二伸　寢てゐると落着いた氣になるのは難有いこの二三日うん〳〵云ひながらも何處か浮婆を離れた長閑さを味つた秦に貰つた支那の淫書が少しある欲しければ進上するがどうだ「牡丹奇緣」「杏花天」「燈蕊奇僧傳」等皆一讀の價値のあるものだよまだ書けばいろんな事があるが床の上で面

倒だから見合せる事にした　以上

病我鬼拝

四一九　〔一月二十日田端から。友常幸一宛〕

啓　過日は羊羹を難有う　まだ御禮状も上げない内に流行性感冒に罹り未に床を離れません　この手紙も寢ながら書いて上げるのです　小說は松の内に拜見しました出來はよくありません民三とお美代との關係を書くにしてももつと簡潔に要領だけ捉へて書いて行かなければ駄目です民三自身にとつては戀愛の思ひ出だからいくら瑣末の事でも面白いかも知れませんしかし讀者の身になつて見れば退屈する方が當然ですそれから文章は「です」と「だ」とが雜居してゐましたあれもどちらかへ片づけたいと思ひます唯所々の自然描寫だけは決してまづくありませんあれはあなたが歌人として自然を見るのに多少コツを得てゐるからだらうと思ひます

原稿は同封で御返しします頭痛喉痛腰痛等交ゝ加はつて苦しいからこれで擱筆します　頓首

一月廿日朝　芥川龍之介

友常幸一様

四二〇　〔一月二十九日田端から。長尾武男宛〕

啓　御手紙拜見しました遠慮のない所を左に御答へします

東京はあなたのやうな青年の自活するのに存外容易な所ぢやありませんしかしあなたがどうしてもさうしたければ御說の如く新聞社や雜誌社のやうな所にでも口を御求めになるのが好いでせう唯申し上げて置きたいのはその口も容易に見つからない事と見つけた上でも生活は決して樂ぢやないといふ事です新聞の校正掛なら中學卒業の學力がある以上勤るには相違ありませんしかしこれ又早急には口を見つける事が困難でせう現に私の知つてゐるものにもさういふ口を探してゐるものが二三人あります

が私も氣の毒ながらどうしてやる事も出來ません東京はあなたの町よりも或點では餘裕があると同時に或點では又より以上に切迫してゐる所なのです
現在私はインフルエンザで床に就いてゐますこの手紙も床の上で書きました讀みにくい所はよろしく御推讀下さい最後に私はあなたの考へてゐるやうな偉い人間でも何でもないといふ事を申し上げますそれからもう一つ今後返事を要する手紙を御よこしの場合でも紙は元より郵券の封入も御免を蒙りたい事を申し上げますこれで筆を擱きます　頓首

一月二十九日　　芥川龍之介

長尾武男様

四二一　〔九年(推定)二月八日田端から。井上猛一宛〕

拜啓　毎度新内の會に御案内下すつて難有く御禮申します今日は是非上るつもりの所この雪で田端まで歸る事を思ふと何分寒がりの意氣地なしなので參上する勇氣がなくなつてしまひました右不惡御諒察下さいその中に何とかして上りたいと思つてゐます今天然自笑軒主人遊びに參り下で三味線の音がしてゐる所二階は障子の外の雪行火原稿用紙水仙これから發句でも作らうかと思案中です　頓首

二月八日夕　　芥川龍之介

富士松加賀路様

四二二　〔二月十日田端から。小島政二郎宛〕

啓　御伺ひしたき事三件あり
一、宮森麻太郎氏は眞面目にあゝ云ふ文藝觀を持つてゐるにやその眞面目とも冗談とも判然せぬ所應對してゐて甚不安なりもし眞面目ならば不安は一變して恐怖となる可し如何

二、君たちの連中の中に色の白き小肥りの大様なる人あり君と上野のパウリスタにて快談し居りし人と同じきか或は似たる心地す僕あの顔好きなり誰だか教へてくれ給へ僕は挨拶されても名前を知らず少し閉口した

三、水上氏のパロディー中井汲氏がアナトオル・フランスと芥川龍之介とを云々したとありどんな事を云々したのにや御存知なら高教を請ふ

右三件御託宣を待つ　謹上再拝

この頃の句

蠟梅や枝疎なる時雨空

二月十日　　　芥川龍之介

小島先生　梧右

二伸　秀眞先生の色紙出來たり今度御光來を待つて進上仕るべし

四二三　〔二月十日田端から。端書、小穴隆一宛〕

紙はたしかに君が持つて行きましたよなくなしたら今度又買つて置きませう君の方の紙へ書いて下すつてもよろしい折柴の小說俳句を散文にひき直したやうなものですまだ小說道の心得がないですな
以上

四二四　〔二月十九日田端から。小林直太郎宛〕

拜啓　二三日前新潮社から水守君の手紙に添へて私まであなたの原稿を返して來ました何でも編輯がすんだ後だつたので割込ませる訣に行かなかつたのださうです私が病氣になつたり何かしてぐづぐづしてゐなかつたら間に合つたのだらうと考へると甚御氣の毒な氣がします來月號の新潮へでもと思ひ

ましたがこれ又當分新進作家の紹介を見合せるとか云ふ事ですから如何ともする事が出來ません就いては原稿は私の手許へ一時御預りして置きませうかそれともあなたまで御返ししませうか御面倒ながら御返事を願ひたいと思ひます尤も差當つてどこへ載せると云ふ目算も何もないのですが、右とりあへず當用のみ　頓首

二月十九日　　芥川龍之介

眞木　珧　様

二伸　末筆ながら高橋氏へもよろしく御鳳聲を願ひます目下俗用の多い爲同氏へも委細手紙で申上ぐ可き所御免を蒙らなければならないと思ひますから　以上

四二五　〔二月二十五日田端から。小島政二郎宛〕

啓

一戰國策――張儀魏王に說いて曰天下の遊士日夜腕を搤し目を瞋らし切齒以て從(合從ですな連衡に對する)の便を言ひ以て人主に說かざるなし人主その辭を覽てその說に牽かる惡んぞ眩せらるゝなきを得んや臣聞く積羽舟を沈め群輕軸を折り衆口金を鑠かしむ積毀骨を銷す云々つまり衆口鑠金と同じです

二「君見ずや宋家の天子鄂王を捨つるを」です鄂王は岳飛の事鄂王に追封され武穆と謚せられたからですだから後にある「兩河百郡非舊主」と云ふのは岳將軍が招討使の任にあつた河南河北を指して兩河と云つたのですしかし宋家はまづいですな前に漢家の來たのだから此處は宋の姓趙を使つて趙家と行きたい所ですそれにしても家字の重なるのは面白くないどうも光瑞先生は僕より神經が粗いやうです大氣焰でせうこの頃高泉　慧林兩禪師の書を手に入れかゝつてゐるので大分鼻息が荒いのです

それから前に書き忘れましたが沈舟畏積羽は支那の詩に多いインヴェルジョンで積羽畏沈舟と同じで

すこの種の用法は詩で倒裝句と云ひます左傳に室於怒。市於色。(實は怒於室色於市の意)とあるのが古い所ださうです有名な例は杜甫の

久撫野鶴如雙鬢(實は雙鬢如野鶴)

東坡の

魚鼈化兒童(實は兒童化魚鼈　洪水の詩ですから。)

右御答へまで本があるともつと詳しい註が出來る所學生時代に三國史談の類を大抵賣り飛ばしたので調べたくも調べられませんこの位で我慢してお置きなさい　頓首

二月廿五日　　我鬼生

小島先生　梧右

四二六　〔三月三日田端から。端書、小島政二郎宛〕

島秀才示於予香奩體和歌二首卽戲答見贈

我鬼先生枯坐處
松風明月共蒼々
何知老魔頼禪宗
一夜乍來脂粉香

一笑一笑

三月三日

霸南先生　淸鑒　　我鬼拜

四二七　〔三月十一日田端から。南部修太郎宛〕

啓　「星かげ」「死神」共に不好君亦這般の惡作を成す或は凡作に終始するに勝らん珍重珍重　惡作を成すとも凹まざらん事を要す佳作十を出すも惡作二十佳作十を出すも同じ事なり這般の惡作中より頂門の一針を得來るもの始めて是好漢なり君不見や上手の手よりも水が洩るを況や君の如き僕の如き下手の手笊の如きに於てをや但し惡作に慣るゝ可らず君の惡作を成す所以のものは私に思ふに easy-going の故なり文章は或は雕琢せん這個の内容と寸分も不離たる表現に於ては「死神」「星影」共 easy-going たる觀なしとせず文章の苦心と表現の苦心と一なるが如くにして實は二、君まづこの局所に悟入せよ僕遲蒔きながら昨今漸くこの旨を會す君亦何ぞ悟入し難しとせん悟入せずんば三十棒、頃來日々風流地獄に墮つ、僅に小品二、小説は三分の一だけ稿成りしのみ、窮狀幸に同情せよ

「葱」は決して惡作ならず嘘だと思つたら本を讀むべし二三嫌な文句あれどあれはあれにて完成せるものなり君の非難の如き馬を責めて鹿たれと云ふに類せずや否やウイドのルスティッヒニヒストリエン中「葱」の如くなるもの幾何あるか故に云ふ「葱」型の作品全部を非とするはよし「葱」を非とするは會する能はず君以て如何となすか

廿日頃どこかで會ふべしその時異議あれば論陣を整へて來れ僕この頃衝天の氣あり誰とでも更に論戰を辭するものに非ず但し飯は君の奢る番だよ

一句を拈して曰

鯨裂く庖丁の光寒き見よ

三月十一日　　　　龍

修太郎様

四二八 〔三月十三日田端から。佐佐木茂索宛〕

江西歌仙

短夜や仙桃偸む計
　今宵羅帳のそよとだもせぬ
涼しさや白蓮揺ぐ枕上
　落ちて鳴るらん銀の簪
川風や菖蒲の占もしるしあり
　手すりに倚るは明眸の人
禁公表艶麗無比可祕々々

四二九　〔三月十三日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

啓

信子女史が襟の事で夫に叱られる所に
「信子は默つて眼を伏せて上衣の塵を拂つてゐた」とありそれを
「信子は默つて、眼を伏せて、薄濁つた〔朝〕日の光の中に、上衣の埃を拂つてゐた。」と（句讀もこの通り）
御改め下さい。
さうしてその次の「夫はその上衣へやけに」云々以下パラグラフのしまひ即「脱ぎ捨てた儘になつてゐた」まで御削り下さい

　句にして曰

　抜き殘す赤蕪いくつ餘寒哉

　　三月十三日　　我鬼

樗陰先生　梧右

四三〇 〔三月十五日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

啓 病人家内にあり且亡父の一周忌の命日や逮夜にて毎日俗用多く原稿捗取らず恐縮致し候ぎり〳〵の所明朝まで御待ち下され度願上候 頓首

三月十五日 芥川龍之介

樗陰先生 梧右

二伸 今三四枚出來てゐる所の前後つゞき具合にて差上兼ね候

四三一 〔三月十六日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

偶成

簾外松花落
几前茶靄輕
明窓無一事
幽客午眠成

このはがきつくかつかぬかためしに出す一詩三十分

我鬼生

四三二 〔三月十六日田端から。端書、小島政二郎宛〕

偶成

簾外松花落
几前茶靄輕

明窓無一事
幽客午眠成

實は夜遲いのでひるねするのです

我鬼拜

四三三　〔三月十六日田端から。端書、小島政二郎宛〕

題室谷居士畫竹

水邊幽石竹幾竿
細葉疎枝帶嫩寒
唯恐新秋明月夜
無端紙上露團々

又一つ拵へたから差上げます忙中詩で半日つぶしました

我鬼拜

四三四　〔三月十六日（推定）田端から。瀧田哲太郎（宛）〕

啓「姉さんがいらつしつた時には誰もゐなかつたのね」とか何とか云ふ言葉あり（三回の中程）その姉さんを「お姉様」に改められたし
やつと稿了　出來の程甚心もとなくて閉口

即興

石渡る鶴危さや春の水

龍

四三五　〔三月十七日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

原稿差上げます但し（四）の前半は書けてゐるとは思はれませんもし明日の晩（十八日の晩まで）暇があれば書き直したいと思ひます（二枚半ばかり）しかし御都合もあるだらう！と思つて兎に角一應さし上げますもし明日の晩までひまがとれたら朝御使に御持たせ下さい間に合はなかつたら不本意ながらあきらめます　右どちらでもよろしく御とり計らひ下さい　頓首

十七日夜　　芥川龍之介

樗陰先生

二伸

簾外松花落
几前茶靄輕
明窗無一事
幽客午眠成

と云ふのはどうですか徹夜して居ねむりをしてゐる所を詩にしたのです

四三六　〔三月二十二日田端から。佐佐木茂索宛〕

古詩一首

寂兮○無雩路
亞柯○與風蘆
頽兮○恩顧士

黄雲呼鵙哉。

註曰

○ノ虚字をとるとセキフウロ、アカブロ、タインコジ、オウウンコジとなる。非凡手、自感歎久之。

新作二句

恐るべき屁か獨り行く春夜這ひ

速達の戀一蘇活春風裡

註曰

前句は滑稽中痴情の本然を描き後句は艶艶裡又狀袋を書いて貰はんとす、非凡手、自捧腹久之

二伸　ほんたうに狀袋を三四枚書いて送つてくれたまへ、たのむ。たのむ。

二十二日　　龍

茂　兄

三伸　裡だよ裡ぢやないよ。裏と同字でその衣を唯「へん」にしたのだよ。衣十里といふ字なのだから。

四三七　〔三月二十二日田端から。小島政二郎宛〕

啓　古瓦樓の詩一つ獻上　この詩蘇峰學人などよりうまいと思ふがどうでせう　七律が一つ出來ると甚得意です

二月の竹の句結構と存じます「さら〳〵と」もいゝですよ負けない氣になつて僕も三月の竹の句を作つた

三月や大竹原の風曇り

三月二十二日　　我鬼拜

古瓦先生　梧右

二伸　詩を讀む氣があつたら「絶句類選」と云ふものから御始めなさい好い絶句ばかり澤山集つてゐます時代も清までありますよく行はれた本だから何處にでもありませう高くつて一二圓です(薄葉刷はもつと高い)安い活字本は五十錢位

春陰

似雨非晴幽意加
輕寒如水入窓紗
室中永晝香煙冷
簷角雲容簾影斜
靜處有詩三碗酒
閑時無夢一甌茶
春愁今日寄何處
古瓦樓頭數朶花

我鬼散人

古瓦先生　清鑒

四三八　〔三月二十三日田端から。小穴隆一宛〕

啓　鶏の畵確に落手大よろこびで柱にぶら下げて見てゐます難有うございました

私雨と云ふ言葉ありますよ或一地方だけに降る通り雨の事だと思ひますポルトレエ・ド・ラ・グランド・メエルはもしあなたの御祖母さんならラの代りにmaと言つた方が好いのぢやないかと思ひますが如何ですか

追々春めいて來たのに相不變僕は原稿でうん／＼言つてゐます甚悲慘です句も一向作りません其の代り漢詩を少し作り始めました

三月や大竹原の風曇り

と言ふのはいけませんかゝが「さらさらと二月の竹に日影哉」と言ふ句を作つたから負けない氣を出して三月の竹の句を作つたのです

いづれ御目にかかつてから御禮申す事にします　頓首

三月二十三日　芥川龍之介

小穴隆一君

四三九　〔三月二十三日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

もう間に合はないかと思ひますが「秋」の二〇回目、御亭主が襟をとり換へようとしてそれが皆洗濯屋へ行つてゐる爲腹を立てる件に

「信子は默つて、目を伏せて、うす濁つた朝日の光の中に、上衣の塵を拂つてゐた。」と云ふ言葉がありますあの「うす濁つた朝日の光の中に」を削つてくれませんか、「信子は默つて、目を伏せて、上衣の塵を拂つてゐた」とするのです

度々御面倒をかけて恐縮ですが然る可く御とり計らひ下さい　頓首

三月廿三日　芥川龍之介

樗陰賢臺

四四〇　〔三月二十三日田端から。池崎忠孝宛〕

朶雲奉誦　相不變健在で何より結構だボクは風を引いて寝たり起きたりしてゐたもう全快したが

例に依つて拙著一册進上した暇な時讀んでくれ給へこんな詩を作つた

簾外松花落
几前茶靄輕
明窓無一事
幽客午眠成

實は夜原稿を書く爲ひるまくたびれて寢てゐる所だもう一つ序に披露する

似雨非晴幽意加
輕寒如水入窓紗
室中永晝香煙冷
簷角陰雲簾影斜
案有新詩三碗酒
牀無殘夢一甌茶
春愁今日寄何處
古瓦樓頭數朶花

古瓦なる人間に寄せた春陰の詩だが井ノ哲先生の七律より少しうまいと云ふ自信がある如何序にもう一つ

水邊幽石三竿竹
細葉疎枝帶嫩寒
唯怕清秋明月夜
無端紙上露團々

これは題空谷居士墨竹と號する詩だよ

どうもこんな事をして遊んでゐる方が小説を書くより面白いので困る　奥さんによろしく　頓首

三月廿三日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

赤木桁平様

四四一　〔三月二十六日田端から。小島政二郎宛〕

啓　君の近所にも火事があつたさうですね僕の所も一昨夜隣の香取さんから火事が始まつて危く類焼の災に罹る所でした發見したのは僕が最初ですその時はもう隣の工場の羽目を燃えぬいた火が僕の家の垣根を燒いてゐました一家悉裸足になつて水を運んだのだから大笑ひです
君が漢詩と俳句とで鑑賞の標準が大分ちがふのは愉快です俳句は穏健派だが詩は颯爽派ぢやないですか時代で云ふと唐派黨でなくて元明以後黨の所があるやうです題畫竹の詩なぞきはどくつていけません籬外松花落の五絶の方が遙に自信がありますあの方が悠々としてゐると思ひませんか
律は少々改めました

似雨非晴幽意加
輕寒如水入窓紗
室中永晝香煙冷
簷角重雲簾影斜
案有新詩三碗酒
牀無殘夢一甌茶
春愁今日寄何處
古瓦樓頭數朶花

律の三、四句　五、六句は前後とも聯句だから一句だけ褒めちやいけません褒めるなら兩方一しよに

御褒めなさい一句だけぢや褒貶になるんだから作者は閉口します　どうも詩や俳句の方が小說を書くより氣樂で泰然としてゐて風流なやうです、小生の竹の句「三月や」が駄目ですな何が三月だか自分でも判然しないんだから呆れます

川上や桃煙り居る草の村

と云ふのはいけませんか桃源の詩を俳譯したのです

水輪の句は「ゆら〳〵と」も惡いとは思ひません但し月舟先生か何かにあんな句があつたやうな氣がします

「昔々ある男が御伽噺の本を出すのに百五十枚になつたら出さう〳〵と思つてゐました　が、一年たつても二年たつても、中々百五十枚になりませんその中にその御伽噺を讀ませようと思つた子供が皆大人になつてしまひましたとさ」と云ふ御伽噺はどうです

即席の句

曇天の水動かずよ芹の中

古草にうす日たゆたふ土筆かな

吹かるゝや塚の上なるつぼ菫

だん〳〵まづくなりさうだからこの邊で切り上げます　頓首

三月廿六日　　我　鬼

古　瓦　先　生　梧右

四四二　〔三月二十七日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　御無沙汰しました　どうもこの間から素戔嗚尊の戀愛が書けないで殆閉口してゐますその爲雜誌の小說も書けず舊稿や未定稿で御免を蒙つた始末です神代小說なんぞ書き出さなければ好かつたと

聊後悔してゐます但エピックのやうなものを小說で行つて見たいと思つて書き出したのですから或程度うまく行つたらあなただけでも喝采して下さい續いて彥火々出見尊と日本武尊をも書いて見る心算です
先日山本有三があなたへ紹介狀を書けと云ふ事でしたから書きました御會ひ下さいましたかあれは中々見かけによらぬ色男です　菊池、江口その他へも小說を書くやう傳へました里見氏にも是非書いて貰ひたいと思つてゐます　以上

三月廿七日　　　　　　芥川龍之介

薄田淳介樣

二伸　原稿三回分送ります　あとも二三回宛送らせて下さい　「影燈籠」一冊送りました御落手下さつたことと思ひます

四四三　〔三月二十七日田端から。端書、小穴隆一宛〕

星赤し人無き路の麻の丈ケ
曇天の水動かずよ芹の中

四四四　〔三月二十九日田端から。端書、南部修太郎宛〕

啓僕目下毎日うん〳〵云ひながら新聞小說を書いてゐる但し君がどこかで落合ふやうにして置いてくれれば遇ひたい今月末でも來月始めでもよし一切君に任す時間は午後六時頃から　拜

四四五　〔三月三十一日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

啓　「秋」御褒めに預つて恐縮です自分では不慣れな仕事なので出來が好いのか悪いのか更にわからな

くて閉口してゐます壽陵余子は壽陵に余子あり歩を邯鄲に學ぶ未邯鄲の歩成らざるに壽陵の歩を忘る即蛇行匍匐して歸るとか何とか云ふ文章が韓非子にあるのから拵へた號です余子は唯青年と云ふ意味でせう僕自身西洋を學んで成らずその內に東洋を忘れてゐる所が邯鄲壽陵兩所の步き方を學び損なつた青年に似てゐると思つたからです

何だか「秋」の出來榮えが氣になつて甚不快ですその不快を俳句にして曇天二句を作りました

曇天や蝮生き居る罎の中
曇天の水動かずよ芹(せり)の中

三月卅一日　我鬼

瀧田先生

四四六　〔三月三十一日田端から。松岡讓宛〕

朶雲拜誦　その後外からも御催促があつたので春陽堂の當てにならない所以を發見したとりあへず僕の手許の本を送る始の方だけ少し讀んでくれ給へ「きりしとほろ」上人傳だけ自信があるあとは可（一字不明）故紙也　この頃暇があると詩を作るが中々先生の律程には行かん先生の詩もしまひの方程うまくなつてゐるやうだ今に傑作が出來たら御眼にかける今でも但し蘇峰學人なんぞより少しうまいつもりだ

遺懷
星赤し人無き路の麻の丈ケ

三月卅一日　芥川龍之介

松岡讓様

二伸　金之助先生にあつた由あの家はちやちやだがあの御婆さんは好い御婆さんだ大に僕の戀愛に

同情してくれた丈でもたのもしい戀愛と云ふより失戀かな當時の句に曰

埋火の仄かに赤し我心

東洋城でも三舍を避けるだらう健羨隨意好笑々々

四四七 〔四月一日田端から。恒藤恭宛〕

茅簷帶雨燕泥新
苔砌無人花落頻
遙憶輕寒覓水上
長隄楊柳幾條春

乞玉斧

我鬼

恒藤恭様 侍史

二伸 その後御無沙汰した僕病氣勝ちで困る風なども去秋から殆引き續けだ松岡は魚眼眞珠株式會社社長になつた成瀬は支那へ遊びに行つた菊池は胃病で困つてゐる久米はよく働きよく遊んでゐる皆さん御變りないだらうね僕も近々父になる何だか束縛されるやうな氣がして心細い拙著一册送る始めの方を少しよんでくれ給へ

龍

四四八 〔四月一日田端から。端書、小島政二郎宛〕

「芹の中」の句折柴を感心させて古瓦先生を感心させない理窟なし「セリの中」を「ゴミの中」と讀んだんぢやありませんか一笑一笑負けない氣になつて句を作つて曰

星赤し人無き路の麻の丈ケ

四四九　〔四月四日田端から。畑耕一宛〕

啓　月評明日から送りますその前に中川君の文章を一回のせて下さい同封して御送りします序ながら私も同君の畫の好きな一人だと云ふ事を申上げて置きます　頓首

四月四日　　芥川龍之介

畑耕一様

四五〇　〔四月四日田端から。下島勳宛〕

啓　屛風早速御揮毫下さいまして難有く存じます結構な御出來で皆大さう悅んで居ります　それから墨竹も厚く御禮申上げますあれでは唯今こんな詩を作りました御笑ひまでに御覽下さい

題空谷居士墨竹

水邊幽石竹三竿　細葉疎枝帶嫩寒
唯恐淸秋明月夜　無端紙上露團々

あの畫には水石ともありませんが便宜上詩の中へは採用しましたこの邊が素人藝の妙と御思ひ下さいさもないと到底詩などと號する代物らしくも思はれませんから

いづれ御禮に參上しますが先づとりあへず感佩の意だけ手紙で申上ます　草々

四月四日夜　　我鬼生

空谷先生侍史

四五一　〔四月四日田端から。佐藤春夫宛（寫）〕

啓　この間となりの香取氏の所で天岡欣一氏に遇つた君のfatherの友だちだとか云つてゐた　君の事

を春ちゃんと稱してゐた　序に僕の事も龍ちゃんと云ふので閉口した何でも西洋へ行くとか云つてゐた　旅費二萬五千圓だとか云つてゐた、僕に樂燒の皿を一つくれる約束をした　しかし[illegible]いところを見るともう忘れたのだらう、ボク毎日糞を嘗めるやうな思ひをしながら[illegible]ゐる一日も早くやめたい一心だけだ、天岡氏の事を思ひ出す機會があつたからこの手紙を書く　頓首

四月四日

芥川龍之介

佐藤春夫樣

四五二　〔四月九日田端から。瀧田哲太郎宛（寫）〕

啓　今日「秋」を讀み候一つ二つ氣になる所なきには候はねどまづあの位ならば中央公論第一の惡作にても無之かる可き乎と聊安堵仕候　谷崎君の鮫人も追追佳境に入るやうにてまづは結構に存候鼠小僧次郎吉續篇は當分執筆の勇氣無之七月の特別號には何か外のものを書かせて頂く可く候　この頃忙中の閑を偸んで詩を製造致居候七律一首出來ると大に天狗に相成候その內傑作御らんに入れ御あて申すべく候　まづは「秋」を讀み候安堵御知らせまでにこの狀相認め申候　頓首

即興

草庵や秋立つ雨の聞き心

四月九日朝

我鬼

樗陰先生

四五三　〔四月九日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　手紙難有う「秋」は大して惡くなささうだ案ずるよりうむが易かつたと云ふ氣がする僕はだん／＼あゝ云ふ傾向の小說を書くやうになりさうだ　君の句「櫻が咲く妹夭折すべし」が一番よいあとは三句

とも出來は同一水準にあるかと思ふ「妹踏みたり」の句も可成同情は出來るが云ひ畢せてゐないと云ふ氣がする云ひ畢せてゐると云ふ點では「わが生まれた日だ」が出來てゐるかも知れない――前に同一水準と云つたがこれを書きながら端書を見てゐると「出あるく」がだんだん善くなつて來た「夭折すべし」の次にはこれが好い
加藤氏の事よろしく頼む
「秋」を讀む
草庵や秋立つ雨の聞き心
四月九日朝
我　鬼　拜
折　柴　先　生　梧右

四五四　〔四月十一日田端から。松岡讓宛〕

啓　本を送る遲れついでに九日會へ持つて行かうと思ひながらその日に用が出來て行かれなかつた爲今日まで延引した次第だ匆饒でもつけるやうで甚恐縮だが不惡受取つてくれ給へこの頃は新聞へ萎の如き小說を書いてゐるので忙しい夜起きてひるは大抵寢てばかりゐる
簾外松花落
几前茶靄輕
明窓無一事
幽客午眠成
これはその寢た所を詩にしたのだ　頓首
四月十一日
我　鬼
松　岡　樣

四五五　〔四月十一日田端から。水谷教章宛〕

啓　昨夜東京日日より電報まゐり十四日より横濱版にも素戔嗚の尊掲載の爲これまでの梗概を一回分書く事と相成り月評とそれとにて殆徹夜の始末御迷惑の段は幾重にも御察し申上候へどももう一日二日御待ち下さるまじく候やもし間に合ひかね候はゞ來月號に御まはし下さるもよろしく候　以上

四月十一日　　我鬼

水谷様

四五六　〔四月十二日田端から。端書、南部修太郎宛〕

南部修太郎三田文學編輯を辭す

杳として鮭の行方や春の水　　古瓦我鬼合作
　南部の山も下萌えにけり　　赤風呂
花咲いて鮭を食ふ人ありやなし　　本湯天
　此修の字は江馬か南部か(鼻)

四五七　〔四月十三日田端から。佐佐木茂索宛。封筒に牙旗生とあり〕

短夜や稿料盜む計
　洩れて危し××の首
川風や菖蒲の假名はしやうぶ也
　などゝほゝゑむ小島先生
あら可笑し白檀匂ふ枕紙

寢顔見たきは赤風盧(アカフロ)の戀
禁公表落想警拔可祕々々

四五八　〔四月十三日田端から。端書、南部修太郎宛〕

啓自笑軒は嘘也更科で御免蒙つた「秋」は三十枚なれど近々三百枚で感服させる事あるべし御用心々々々實際僕は一つ難關を透過したよこれからは悟後の修業だ日曜には何時か御來臨を請ひたいな御互に勉強しよう

四五九　〔四月十三日田端から。水谷敎章宛〕

忙中落筆の爲事實違ひあり校正の節左の個條御改删を請ふ
　發端の中の
光尙はすべて綱利に
正保二年の春は寬文七年の春に
御面倒ながら間違ひなきやうに御注意下され度願上候　頓首
　十三日午後　　我鬼
　水谷様
二伸　原稿今切りが悪いのですが明日一ぱい待つてくれませんか新聞小説と兩方で毎日殆ねる間もない位なのです　以上

四六〇　〔四月十四日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

桃咲くや砂吹く空に兩三枝

桃咲くや日影煙れる草の中
桃咲くや泥龜今日も眠りけり
桃咲くや水に青きは鴨の首
白桃はうるみ緋桃は煙りけり
　一句抜けゝゝ

四六一　〔四月十五日田端から。小島政二郎宛〕

　　俳消息(但粗製濫造の事)
　神戸の男とも女ともわからぬ人句を求む一句
山中や實黑の垂枝時雨れたる
　酒間運座あり題春夜
春の夜や小暗き風呂に沈み居る
　同扇面に題す
白桃は沾(ウル)み緋桃は煙りけり
　同短册にのたくる
晝見ゆる星うらうらと霞かな
　同器物を讃みこむ運座を催す寒暖計に當る
花散るや寒暖計は靜なる
　室賀文武へやる手紙のはしに、この人は耶蘇教なり
朝焼の空どよもして蝗かな

路上卽景

霜解けや竹むら黃ばむ路の隈

或男「秋」の惡口を云つて來る貴樣にはわからないのだと返事をする

幽石を知らず三竿の竹の秋

伊東忠太の伊土開戰圖に題す楚人冠囑

花葛のからみ合ひたる夜明かな

おとなりから白酒貰ふ返事

白酒や障子さしたる風曇り

「解放」の寄稿を斷る

沈む日や畑打ちやめば海の音

どれか御採用になりませんか

四月十五日　　　　　　　　　　　　　我鬼拜

古瓦先生

二伸　董其昌の日照悟と文徵明の赤壁之賦とを買ひました今度御目にかけますうますぎて飽きさうですが

四六二　〔四月十六日田端から。水谷敎章宛〕

啓　殘りは明朝早くとりに御よこし下され度く候今晚とりに御よこしになつても駄目に候勝手ながら右念の爲申し加へ候もうこれ以上は日延べ仕るまじく御安心下され度候

四月十六日　　　　　　　　　　　　　龍

水谷樣

二伸　昨日はいろいろ御世話様に相成、難有御禮申上げし外、御面倒ながら「後亡失」

四六三　〔四月十七日田端から。水谷致章宛〕

存外長くなりどうしても終らず今日午後もう一度御使ねがひたく候　頓首

龍

水　谷　様

四六四　〔四月十七日田端から。水谷致章宛〕

啓　今夕か晩もう一度御使ひを下さい今度はきつと間に合せます

即興

春寒やのび損ねたる日陰獨活

四月十七日

龍

水　谷　様

四六五　〔四月十七日田端から。水谷致章宛〕

啓　大團圓の始に「兵衛はその二三日前から痢病の床に沈んでゐた」の一行あり、あの一行校正の節全部抹殺して下さいつまり大團圓の最初の一行は「喜太夫は從つて宿を變へて云々」になるのです　以上

十七日夕

我鬼

水　谷　様

二伸　猶「三」の末頃に「執拗く」と書いた記憶ありあれも「執念く」に御訂正を請ふ

三伸　大團圓の最初の行に「つけ覗ふ」と書いた記憶ありもし「覗ふ」とあらば「狙ふ」になされたし

急ぐとこの通り頭が混亂します自分ながら噴飯の位

四伸　又思ひ出した一囘中左近が敵打の一行に追ひつく所に甚太夫の言葉で「われらの助太刀では心もとないと御思ひか」とか何とか云ふのがありもし「われら」だつたらそれは「身ども」に御改めを請ふこんなに途中で直す事空前なり絶後ならん事を祈る

四六六　〔四月二十二日芝から。端書、佐佐木茂索宛〕

叔母死去廿五日には參上する目下芝に泊つてゐる

廿二日　　龍

四六七　〔四月二十六日田端から。小島政二郎宛〕

啓「睨み合」を讀みましたあれは傑作です恐らく三田文選中第一の傑作でせう菊池が褒めるのは決して過褒ぢやありません「森の石松」などより遙によろしい感服しましたあれなら今の日本の文壇では何處へ出しても立派たものです君があゝ云ふ短篇の作者であると云ふ事は非常に嬉しい氣がします何故今まであれを讀まなかつたかと云ふ氣もしますあんな調子のものは僕なぞにはとても書けません恐らく又誰にも書けないでせう

細い所の詮義をすると「その一」のpp 243が少し文章の調子が張りすぎてゐます「た止め」があすこだけ多いせゐでせうそれから「その三」のpp 264の加藤屋の御亭主と唐物屋の御亭主との喧嘩がもう少し手加減が欲しい氣がします（「鋭い眼光」と云ふやうな言葉が氣になるせゐもあるのでせう）その次に「その五」の最後の一句が「夜更の町は云々」が聊臭い憾がありますあれはもつと碎けた語法に取換へた方がよささうですしかしこれらは白璧の微瑕です全體は前にも云つた通り甚御手際の好いものですあれを一つ書いてゐれば南部の作品の月評をしたつて更に俯仰天地に恥ぢませんあんな作品を書いてゐな

がら自信がないと云ふのは不思議です謙譲の美徳も過ぎたるは猶及ばざるが如しと心得ます僕ならとうに大天狗になつてゐます茂索、折柴の輩にも早速一讀させたいと思ひます勿論彼等が感服するかしないかはわかりませんしかし感服しなければ莫迦なんだから御安心なさいとりあへず感想だけ　頓首

四月廿六日　芥川龍之介

小島政二郎様

二伸　僕も「睨み合」に發奮して「偸盗」の改作にとりかゝりたいと思ひます

蜂一つ土塊嚙むや春の風　頓首

四六八　〔四月二十七日田端から。端書、菅忠雄宛〕

和加布難有う

即興

春寒き小包解けば和布かな

軒先に和布干したる春日かな

赤ん坊比呂志と命名菊池を名づけ親にしたのです先生によろしく　拜

四六九　〔大正九年（推定）五月三日田端から。宮本勢助宛（寫）〕

拜啓　過日は長野草風氏から御教を請ひたい旨御願ひ致しました所早速御承知下され難有く御禮申上げます。

本日朝參上致す心算で居りました所、急に風をひき外出する事が出來なくなりました遺憾ながら快くなる日まで參上の機を得なからうと思つて居ります。

右至急御斷致したい考で午前中他出する家内のものに御宅へ電話を御かけ申すやう頼んで置きました所、唯今歸つて來てどうしても電話番號が見つからなかつたと申して居ります。それが本人の疎忽か御宅に電話のあるやう伺つてゐたのが私の疎忽かわかりませんが、兎に角參上致せない旨を唯今まで申上げずにゐた事が甚申譯のない氣が致します。何れ拜眉の上御詫申上げますが、かやうな次第故不惡御宥免下さい。

以上とりあへず御斷り旁〻御詫びまでにこの手紙を書きました。

粗紙草毫この上熱も少々あり文意も通じまいかとの懸念があります。これ又よろしく御判讀下さい。

返す〲失禮な事ばかりにて愈恐れ入つて居ります。草々不宣

五月三日午後七時　芥川龍之介

宮本先生　侍史

四七〇〔五月五日田端から。端書、小島政二郎宛〕

昨夜は失禮十五日前後に聞きに行きませう　と云ふ時前にもう一度御通知します

白南風（しらはえ）の夕浪高うなりにけり

五日

四七一〔五月九日田端から。南部修太郎宛〕

拜復　君の支那旅行の經費算用の綿密なのには敬服したなる可く都合して一しよに行き給へボクも貧乏旅行をする心算だから

小說は拶取つてゐるかいＳＳＳへボク關係の評論を書いた由今日藤森氏から聞いた樂しみにしてゐる

不服な所があつたらすぐ抗議を申し立てるから　この頃小島氏の「睨み合」と云ふものをよみ感服した

「森の石松」所ぢやないと思ふが如何「一枚繪」もよささうな氣がしてゐるこの頃スサノヲ先生を念入りに書いてゐる日下先生は太古の放蕩を始めた所だ中戸川の小說少し困りやしないか（社會的に）但し「緣なき衆生」より出來は好いかと思ふが　君の小說の傑作にならん事を祈る　頓首

九日夕　　我鬼

修太郎様

四七二〔五月九日田端から。與謝野晶子宛〕

拜啓　御健勝の事と存じます

さて今日、三田文學五月號所載竹友藻風先生の函嶺紀行拜見拙作中時代錯誤の多い事を知りましたこれは當人も昔よりさもありさうな氣が致し居る事故御遠慮なくいくつでも御教示下さいませんか衣食住とも昔の事さつぱりわからず大いに閉口致してゐる際御面倒ながら折返し御返事を頂ければ幸甚と思つて居ります

この新年來一度參上したいと思つてゐながら雅俗共多用の爲未にその意を得ません庶事故人に禮を失はしむるものと不悪御憫察下さい

右とりあへず御願ひまで　草々不宣

五月九日　　芥川龍之介

與謝野晶子様

四七三〔五月九日田端から。端書、小島政二郎宛〕

少々閑になりましたが十五日を除き奥山をきくに好い日を御教下さいその日モサクも誘ひませんか

頓首

龍之介

四七四　〔五月十一日田端から。與謝野晶子宛〕

拜啓　早速御返事を頂き難有く存じます御教へも厚く御禮を申上げますまだ外にもいろ〳〵間違つてゐる事が多さうですがいづれ改版でもする時は直して置きたいと思つてゐます

序ながら竹友先生の紀行文は決して不愉快に思つた訣では無之日頃服裝や器物の事が不安心でゐるものですからあれを讀んだのを幸教へて頂きたいと思つたのですその旨も不惡御諒察下さいあの文章は鐵幹先生が詩を作られる事を知つただけでも愉快です

この頃人の書畫帖に下手な畫を描いた上同じく下手な詩を題しました景物に御らんに入れます

窮巷賣文偏寂寞　寒厨缺酒自清修
拈毫窓外西風晩　欲寫胸中落木秋

いづれ小閑を得次第參上したいと思つてゐます　頓首

五月十一日夕　　芥川龍之介

與謝野晶子樣　粧次

四七五　〔五月十一日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

色紙二枚今日出來畫をかいた贊は兩方とも出來損ひの形日曜に遊びながらとりに御出下され度候贊の詩を作つてゐたので又大阪から電報をかけられた　頓首

芥川生

四七六　〔五月十八日田端から。南部修太郎宛〕

啓　とにかく君が馬力を出して書いてゐる勇氣は感心だそれには頭を下げても好い現在位な速力でも

つと好いものをどん〱書いてくれゝばもつと頭を下げても好い但し僕の頸の骨は存外強いから容易に作品の上ぢや曲げないが、スサノヲも二十回位まではたぐつたがこの頃は大に身を入れて書いてゐる出來の悪い所は身を入れて書いてもあの位なのだと思つてくれ評論家としての君の強みは(今度の三田文の小說を見てもわかるが)手落ちなく全局を書きこなす所だ兩方とも大事にしなくつちやいけない大事にさへしてゐれば必そこから好い作品が生まれる芥川龍之介が頭を下げなくても天下が頭を下げるやうな難有いものが生まれて來る　菊池新潮の文壇偶語にて片上、木村毅、鈴木善太郎、中戸川の四名士に當つた由慓悍なのに聊驚いた　まあ精々勉强して早く長篇を書き上げ給へ僕は九月にもう一度諸君を感心させる　さやうなら　頓首

五月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

南部修太郎様

四七七　〔五月十八日田端から。小穴隆一宛〕

ふと君の事を思ひ出したる歌

つゆぐもの光かそけし隆一は鼻の先見てけふもゐるらむ

君が畫をかけてわがゐる草の家の天嚮(あまひびき)かせて降る大雨かも

五月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　我　鬼

隆　一　様

四七八　〔九年(推定)五月十八日田端から。中島汀宛〕

園林春已に容し

陂港雨新に足る
泥深くして黄犢健に
桑老いて柴䅳熟す
豐年逋負(租税)少く
村社酒肉に饜く
微風酔を吹いて醒む
起つて和す飯牛の曲

作者放翁は陸游也陸放翁は花石湖、楊誠齋と共に宋末の三大詩宗と稱せらる詩意は晩春初夏の候村家歳豐にして生計を樂めるを云ふ丁度今頃床がけにするに適當ならむ　筆者杏坪が賴杏坪なる事は御存知なるべし　以上

五月十八日　　龍

中　島　様

四七九　〔六月三日田端から。水守龜之助宛〕

拜啓　先達は折柴君の原稿で御迷惑をかけました早速御採用下すつて難有く存じます七月號の小品はこれから少し旅行しようと思つてゐるので書けさうもありません不悪御赦し下さいあなたの日記の中に僕の皮肉云々と云ふ事が出てゐたが何だつたか僕には思ひ出せません兎角おしやべりなものだから口禍ばかり招きますしかし碧童が藥を賣つたりあなたがおせんべいを賣つたりしてゐるのはちよいと風流ですなこれは御世辭ぢやありません實際昔の人のやうな氣がするのです　頓首

石菖やわれは古錢を商はん

六月三日朝　　芥川龍之介

水守龜之助様

四八〇 〔六月三日田端から。和氣律次郎宛〕

拜復 いつぞやはマリア・マグダレナ難有うあれを頂いた時御禮と一しよに影燈籠を御送りしたつもりでゐた所春陽堂に問合はせたら送つてない事が判然したので早速後から御送りしたのです
飜譯の御作とりあへず春陽堂の今村氏までその旨手紙で云つてやりました直接あなたの方へ御返事させる筈ですしかしこの頃どの雜誌でも飜譯を載せたがらないやうですからどう云ふものかと思ひますもしあなたにその意志があれば新潮社から本にして出してはどうですかそのジャック・ロンドンの作なるものに戀愛の話がありますかあればすぐにウェルテル叢書の中へ加へられるだらうと思ひます折返し御返事下さればすぐに新潮社へかけ合つて上げます右とりあへず當用のみ　頓首

六月三日　芥川龍之介

和氣律次郎様

四八一 〔六月四日田端から。佐佐木茂索宛〕

Stratz の本 Die Schönheit des weiblichen Körpers と Die Rassen Schönheit des Weiles と二册買つた。Der Körper des Kindes も欲しいが金が危しいから遠慮した。君が買つて貸してくれると甚都合が好い目下素戔嗚の傳を書き終つて大に氣樂になつてゐる。昨日は×××の勘定を拂つた。あの晩のは七十圓と少しだつたよ。×××も莫迦にならん。
この手紙を書き終つてつらつら思ふ横文字入りの手紙はへんなものだね　頓首

六月四日　我鬼

大芸先生　梧右

四八二　〔六月五日田端から。南部修太郎宛〕

啓　君の轉換期にある藝術を讀んだ僕は僕の創作に注意してくれる良友を持つてゐる作家として僕は幸福な人間である君の評論はその幸福に對する僕の感謝を新にしてくれた差支へなかつたら近々一しよに飯を食はう　頓首

六月五日　　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

南部修太郎君

四八三　〔六月十四日。寄書の端書、佐佐木茂索宛〕

我鬼も來て切つて落すや淺黄幕　　三汀
薫風や銀鞘來べき廓夕　　我鬼
ナゼニオ前ハスグ來ナイ　　（マサ〳〵）

四八四　〔六月十五日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　君の手紙を讀んだ
あてがたければ書けないと云ふのは尤だと思ふ。しかし君の場合はあてがない訣ぢやない。僕は何時でも君として恥しくないやうな作品が出來たら中央公論へも持ちこむと云つてゐるのだ。翅鳥や此間の題のきまらない小説でも新小説とか何とか云ふ所なら何時でも持ちこんで上げて好い。そんな事には遠慮なくもつと僕を利用すべきものだ。
しかし實際問題を離れての話だが、君に今最も必要なものは專念に仕事をすべき心もちの修業ではないか。菊池などは小島が一枚繪を何時までも突ついてゐるのを自信の足りないやうに云ふがあれは輕

蔑するよりも寧ろ買つてやつて好い事のやうに思ふ。さうしてあゝいふ根氣の好さが尤も君には缺けてゐるやうに思ふ。小島はすべての點で君より弱いかも知れない。しかし仕事の上にかけると僕自身も意外だつた位底強い辛抱氣を持つてゐる。あの辛抱氣がある限り僕は藝術家としての小島政二郎は救はれると信ぜずにはゐられないのだ。翅鳥やあの題のきまらない小說は實際君自身の云ふやうな短時間の中に出來たかどうかそれは問ふ必要はない。しかし、あれらの作品にはどうも一氣に書き流したやうな力の弱さが感ぜられる。筆鋒森然と云ふ言葉と反對な心もちが感ぜられる。ああ云ふ心もちをなくなす事が（作品の上から）――ああいふ書き流しをしない事が（仕事の上から）少くとも君を成長させる第一歩ではなからうか。さうしてそれは文壇的進退より更に君にとつては重大な問題なのではあるまいか。もし君が焦燥を感ずるとすれば、かういふ點にこそより多く焦燥を感じてよいと思ふ。これは文壇全體のレベルと君の作品との比較を取つた上の議論ではない。同時に又僕自身の事は全然棚へ上げた上での議論だ。さう思つて讀んでくれる事を望む。

序ながら云ふが僕は此處一二年が君の一生に可成大切な時期になつてゐるのではないかと思ふ。如何にこの時期を切り抜けるかと云ふ事が君の將來を支配する大問題なのではないかと思ふ。僕は君の作品を推薦するだけの役には立つ。小島や瀧井も能動的に或は又反動的に君を刺戟する事は出來るかも知れない。しかし大事を決定するのは飽くまでも君自身の動き方一つだ。僕等は冷淡なのでも何でもないが、さう云ふ窮極の問題になると袖手傍觀するより外はない。これは君にとつて寂しい事だと思ふ。亦僕等にとつても寂しい事だと思ふ。けれどもさうするより外はないのだ。君は坂の中途の車が動き出したと云ふ。車の動いてゐる事は自力かも知れない。しかしそれならもう一歩進めてその自力の動き方を正しい方向に持續さすべきだ。さもなければ君は滅ぶ。

僕等は皆「した事」と「しようとしてゐる事」とを一つにしてゐる。殊に他人を見る場合には他人の「した事」と自分の「した事」＋「しようとしてゐる事」とを比較しやすい。しかし「しようとしてゐる事」と

「實際した事」との距離が何の位大きいか、それは少しでも仕事をしたものならすぐに了解出來ると思ふ。滅ぶと云ふ意味は君が「した事」或は「した事」の繰り返し以上に「しようとしてゐる事」を「した事」まで持ち來す事なくして終ると云ふ意味だ。さうしてその「した事」の總量は現在君の輕蔑してゐる作家たちの「した事」の總量より事によると小さいかも知れぬと云ふ事だ。實際君は此處一二年（勿論一生さうだけれど特に）餘程しつかりすべきものだと思ふ。

久し振りで長い手紙を書いた。これでやめる。原稿（翅鳥その他）は何時でも送つてよこし給へ。然る可く取計らふから。以上。

十五日朝　　我　鬼

佐佐木茂索君

四八五　〔六月十六日田端から。中西秀男宛〕

拜啓今日高工の方が見えたと云ひますがあなたぢやありませんか女中が名を記憶してゐないのです日曜は久米や何かが來て皆と一しよに夕飯を食ひに行つたのです

二十一日を除きあとは大抵夜なら在宅しますから何時でも御都合の好い時遊びに御出でなさい　ブラックウッドの「柳」を讀みましたか少し面倒臭いでせうこの間金鈴社の講演會へ行つて西洋の怪物の講演をしました　序の節宿所を教へて下さいこれは仕方がないから學校宛で出します　以上

芥川龍之介

中　西　君

四八六　〔六月十六日田端から。下島勳宛〕

川のさち澤山にありがたく存候いづれ御禮にまゐる可く候まづはとりあへず御返事まで　頓首

鯉か來たそれ井月を呼びにやれ

六月十六日

我鬼

容　谷　先　生

四八七　〔六月（推定）十七日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

昨日は失禮その節は結構なものを難有う　頓首

秋海棠が簇つてゐる竹緣の傾き

四八八　〔大正九年（推定）六月二十四日田端から。宮本勢助宛（寫）〕

啓　その後は御無音に打ち過ぎ失禮致しました。もし昨今御差支へがありませんでしたら拜趨の上御教を受けたいと存じます。御都合の時日を御指定下されば幸甚と存じます。

右とりあへず御詫旁〻御願ひまでにこの手紙を書きました　草々不宣

六月二十四日

芥川龍之介

宮　本　先　生　梧右

四八九　〔六月二十五日田端から。小島政二郎宛〕

啓　一枚繪を讀みました妄評を試みると

一　あれはもつと長く書く可きものだらうと思ひますやはり君の最初の計畫通り六十枚でも七十枚でも書いた方が好かつたのでせうあれだけではどうも十分に描くべきものを描きつくしたと云ふ氣がしません

二　說明が勝ち過ぎた事も事實ですこれは考へ方によると說明が不足とも云へるかも知れません徹頭

徹尾說明的手法を使つたら又別樣なエッフェが出來たかも知れないと思ふからですだから說明が勝ち過ぎたと云ふ意味は所謂描寫と說明とのはぎ合せが――或は客觀描寫と主觀描寫との食附き方がうまく行かなかつたと云ふ事になりますつまり「彼は江戶つ子の二階で飯を食つてゐた」と「彼の心には食欲の滿足と共に遊蕩欲が動いて來た」とが――かう云ふ二種類の描寫があの一篇全體から見てバランスがとれてゐないのです說明的手法で押し通すか描寫的手法で押し通すかその選擇は君の自由ですどつちでも死身に骨を折つたら自然と神會する所があるでせうこの二つの描寫のバランスのとれてゐない事は一章の中ばかりでなく章と章との間にもありますたとへば(四)は全然客觀描寫で行つてゐると(三)は殆主觀描寫で持ち切つてゐます(四)は大詰だからあれで好いと云ふ說もあるかも知れないが前の各章があゝ說明を交へて來たら主人公が一枚繪を見た時のサイコロジイもやはりアナリシスを加へるのが至當でせう

三　內面的に立ち入つて論ずると主人公の心もちが實感として生きてゐないのが缺點です實感として生きてゐる事があらゆる藝術に必要かどうかその邊は僕も保證しませんしかしあゝ云ふ小說にこの一事が必要な事は我人共に認める所です成程お浪とのよりを戾す主人公の心もちにはちやんとアナリシスが加へてあるしかしそのアナリシスが單にアナリシスに止つてゐるのは殘念です齊しく解剖と云ひますが藝術家の解剖は屍體解剖ぢやありませんどこまでも生體解剖です

四　そこで全體の出來映えを云ふと好い出來ではありません唯あれだけの大問題と取組み合つたのだからしくじつても打ち死です犬死ぢやないから御安心なさい一人前の作家になるにはあゝ云ふ打ち死を何度となくして行かなければならないのです君も僕もして行かなければ御同樣に浮ばれないのです「かけおち」や「沖の岩」を今後何百篇書いて成功するより君自身の藝術的成長の上から云へばあゝ云ふ打ち死一つの方が餘程爲になるでせう僕なぞは既に手傷だらけです一つ位の手傷にへこたれちやいけません

五　又實際的な問題に移つて考へると、世間（友だちも世間の一部です）は作品の出來が悪いと遠慮なく悪口を云ふと云ふ事實を御記憶なさいその作品の出來不出來に關係のある創作當時のいろいろな事情――〆切日とか作者の心理的或は生理的狀態とかその外雜多な世間的事情とかは一度作品が發表された以上その作品の是非の批判には全然勘定にはひらないのです云はゞ世間は作品の是非にそれ程冷酷な批判を下すのですですから作家となる以上どこまでも君の作品だけにものを云はせる心算で御出でなさい作家は世間多くは編輯者との義理に免じてどんな悪口を云はれても仕方がないと云ふ覺悟をするか或は作品の完成を期する爲に世間多くは編輯者との義理を脚下に蹂躙するかどちらかに徹底しなければ世間の批判に堪へるだけの尻が据らないものなのですこれは文字の上では容易ですが實際に當つてみるとそんな手輕に出來る覺悟ぢやありません存外苦しい覺悟なのですしかしこの覺悟を持つ事は苦しくつても何でも必要です苟も筆下に萬法の眞面目を捉へようとするものには猶更必要な事なのです

六　いろいろ妄評を試みましたが一、二、三に云つてある事は僕自身能くするから云ふのぢやありません僕自身の作品を棚へ上げて、（棚へ上げないと云へない事もありさうだから）君だけについて云ふのです先輩振つて生意氣な事を云ふと腹を立てちやいけませんそれから僕自身の氣もちから云ふと一、二、三は君自身も早晩氣づく事だらうと思ひますだから云つても云はなくても好いと云ふ氣がしてゐますそれらより反つて五に書いた覺悟をしつかり腹に入れてゐたら君は滅多に惡作をしたいだらうと思ふのです君自身さう思ひませんか

七　昨夜はちと用があつて御先へ一足失禮しました不惡諸先生へ御とりなし下さい

芥川龍之介

六月廿五日朝

小島様

四九〇　〔七月一日田端から。恒藤恭宛〕

啓　君の手紙を見て驚いた實際驚いた　郵便局の莫迦が始ははがきの(二)を置いて行き(一)は君の手紙と殆同時に來たのだだから餘計驚いた　さぞ君も奥さんも御力落しだらうと思ふ比呂志を見てこいつに死なれたらと思ふと君たちの心もちも可成わかるやうな氣がする僕の子もいやにませてゐるから何だか不安にもなり出したおやぢが君の手紙を讀んで泣いたおふくろや何かも泣いた文子は泣きながらぽかんと坐つて「まあどうしたんでせうまあどうしたんでせう」と愚痴のやうな事を云つてゐた女や老人は涙もろいものだと思つたそれが羨しいやうな氣も少しした二番目の御子さんはどうした?　病氣の名が書いてなかつたが何病かななどと思つてゐる

悼亡一句

五月雨や鬼蓮の莟咲きもあへず

七月一日　　　　　　芥川龍之介

恒藤恭様

二伸

御悼みの歌一首

ひんがしの國にかなしき沙羅木(ぼく)の花さきあへぬ朝なるかも

芥川龍之介

恒藤雅子様

四九一　〔七月三日田端から。端書、南部修太郎宛〕

來給へ、待つてゐる寫眞難有うあの位君が好い男に寫るなら僕も映してくれ　以上

芥　川　生

四九二　〔七月三日田端から。中西秀男宛〕

啓　返事がおくれてすまないと思つてゐますその後引きつゞき忙しいのです六日(月曜)に暇だつたら來ませんか(午後)僕は新聞では避暑した事になつてゐますが實はまだ東京にゐるのであれは客よけです ランヴィタシオン・オウ・ヴォアイヤアヂュは好いでせう僕は昔からあの中の「スマトラの忘れなぐさの花」なぞと云ふ文句が好きなのです「月」「薄明り」「窓」その外まだボオドレエルの中には好い散文詩が多い筈ですゴオティエの名高いボオドレエル論を讀みましたか

風ふけば心かなしもスマトラの忘れなぐさの香やふきて來し

七月三日　　　　　　　　　　我　　鬼

中西秀男様

四九三　〔七月八日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　昨日櫻實一箱持ち君の見舞に行きし所いくら叩きても戸不開隣の家へ行きて尋ねたれば引越しの由なり。小島へ行きしがこれも逗子へ行きて留守だと云ふ。小島の姉さんに櫻實一箱贈りて歸る。時節柄大事にし給へ。毎日暑く僕も半病人になつてゐる。草々。

七月八日　　　　　　　　　　芥川龍之介

佐々木茂索様

四九四　〔七月八日田端から。齋藤茂吉宛〕

拜啓　今月のアララギを讀み御病氣の由承知氣になり候まゝこの狀認め候　御容態如何に候や時節が

ら隨分御大事になされ度候御職業がら御手落ちは無之事と存候へども念の爲申添へ候
この頃のうん氣にて小說家業もつらく僅に夜凉を迎へては息をつき居り候
押し照れる月夜靜けみ動かざる簾の上に馬蠅一つ
歌のやうなもの御一笑下され度候　草々
七月八日　芥川龍之介
齋藤茂吉樣

四九五　〔七月八日田端から。和氣律次郎宛〕

啓　御滯京中は失禮しました本を敎へて下すつて難有う新潮社の方は最近の好機に話をつけます葡萄牙の尼の手紙はゴスの French Profiles と云ふ本の中にあります暑さにて辟易の外ありません僅に夜凉を迎へて息をついてゐます
押し照れる月夜靜けみ動かざる簾の上に馬蠅一つ
七月八日　我鬼拜
和氣先生
二伸　唯今畫借フラ・アンジェリコ落手難有く御禮申上げます小包の取扱ひが粗漏なので箱が滅茶々々に壞れて來ました郵便局の莫迦に腹が立ちます
三伸　あなたの將來の奥さんで僕の小說を愛讀して下さる方によろしく云つて下さい　我々頑健な人間もこのうん氣には恐れるから弱い方は猶更御困りでせうから暑いと原稿を書くのも一骨です商賣換へさへしたくなります
小澤碧童は藥を賣り水守龜之助はせんべいを賣る
石菖やわれは茶漬を商はん

四九六　〔七月九日田端から。端書、南部修太郎宛〕

大阪毎日東京日々の爲に短篇小説(十五六回)一つ書いてくれないか來月中位に　以上

芥川龍之介

二伸　中戸川の現住所教へてくれないか

四九七　〔七月十五日田端から。南部修太郎宛〕

啓　君の手紙を見た君は手紙の中と新聞の月評とでは「南京の基督」に對する批評を別な調子で書いてゐるそれがどうも愉快な氣がせぬ僕には月評を書いてゐる君が僕の作品を或程度褒めながらしかも褒めた事によつて世間の輕蔑を買はないやうに用意してゐるやうな氣がするこれは僕の邪推かも知れぬしかし調子が違つてゐる事は事實だ又その點を看過しても純粹に理窟の上から云ふと君はあの作品に藝術的陶醉(エクスタシイ)(君の言葉を借りる)を感じながら君の心にアッピイルする何物かがないと云つてゐる藝術品が君に與へるものは何故藝術的陶醉のみではならないか君の心にアッピイルする何物かとは如何なる摩訶不可思議なものかその點にどれだけ君が眞面目な考察をしてゐるか疑問だと云ふ心もちがするる又君はあの作品を評して僕が遊びが過ぎると云つてゐる遊びが過ぎるとはあの種の作品を書く事かそれとも特にあの作品に現れた僕の態度を指して云ふのかもし前者ならば僕は卽座にトルストイ、フランス、バルザックその他近代の大家の作品を十までは擧げる事が出來るそれらが何故遊びであるか君の答を聞きたいと思ふもし後者ならば君に問ふあの日本の旅行家が金花に眞理を告げ得ない心もちは何故遊びに墮してゐるか僕等作家が人生から Odious truth を摑んだ場合その曝露に躊躇する氣もちはあの日本の旅行家が惱んでゐる心もちと同じではないか君自身さう云ふ心もちを感じる程殘酷な人生に對した事はないのか君自身無數の金花たちを君の周圍に見た覺えはないのかさうして彼等の幻

を破る事が反つて彼等を不幸にする苦痛を嘗めた事はないのか――それも君に問ひたいと思つてゐる又この二つの他に遊びの義を求めれば僕の仕事の仕方に遊びがあるかあの二十何枚中にたるんだり亂調子になつたりしてゐる所があるか、それも君に問ふのを躊躇しないもし夫George Murryを點出したのを非難するに至つてはあの作品のテエマを理解しないか、全然それを否定するかだから又多言を要せずだと思ふ
眞面目になると云ふ事は作品中の人物に眞面目な事を云はせるのみではない僕等の日常生活を內外とも立派に處理する事だ僕は君が寸毫の惡意を持つてゐるとは思はないしかし君の眞面目さはもつと鍛錬せねばならぬと思ふ先輩顏をするのではないが遠慮なく不服を書く君も遠慮なく答へて貰ひたいそれまでは君と會はないつもりだ

七月十五日朝　　　　我鬼

南部修太郎君

四九八 〔七月十七日田端から。南部修太郎宛〕

一、手紙と月評の差は今後なる可く少く願ひたい不快に感ずるのはその差が僕の憎僞感を刺戟するからだその外の理由はない
二、僕の邪推は邪推として取消す
三、作品の批評 in sick に對する君の考は全然見當違ひだから左に個條を分けて反問する
1君が藝術的陶醉と共に「讀者のモラルを動かし(註に曰モラルを動かすとは意味をなさずモオラル・コンシエンスを動かすの意か)或はそれに觸れる物」を求めるのは單に君の好みか否か好みなら自由だしかし客觀的な理由があるならそれを聞きたい近代の文豪の作品には藝術的陶醉(君の所謂)のみしか與へぬ作品も澤山ある。君が好み以外にそれらの作品を非とするなら(少くとも藝術的により劣つて

ゐるとするなら)その理由は聞き物だと思つてゐる

2 George Murry を點出しなくとも賣笑婦の信仰を憐んでゐる作者の態度は通じるかも知れんしかし憐みながらそのイリュウジョンを破らうか止さうかとためらつてゐる心もちは通じない云ひかへれば憐んでゐるよりも一歩先の心もちは通じないこれは自明過ぎる程自明の理だ(通じさせなくとも好いと云へば議論にならぬそれは個人的の好みの差だから)たとへば「憐むべき彼はパンを石と思へり」と云ふとする成程その時作者が彼を憐んでゐる心は通じるだらうしかしそれだけの文句では「予は彼にその石なる事を告げんか否かに躊躇せり」と云ふ心もちは通じないと思ふ通じたらその讀者は千里眼だ君にはこれが自明の理とは思へないか

附記　賣笑婦が健全でも傳染した梅毒の爲に相手の男が死ぬ場合は多くある殊に外國人に移つた場合は餘計多いそれを莫迦げた事だと思ふのは君の見聞が狹いからだ且君の使ふフイクションと云ふ語義はひどく低級な意味があるやうに思ふそんな用語例はどこにもないフイクションに悪い意味があればそれは fact に對する場合だ

3 Odious truth 云々の條は更に個條を分けて反問する

(イ)金花の梅毒か治る事は今日の科學では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだいくら君が治るものかと威張つても治るのだから仕方がないもし君が今日の泌尿器醫學の記載を覆す事が出來るのなら僕は君に降參するさもなければ君が降參すべきだ

(ロ)、(イ)及び2の附記により君の所謂莫迦げた事が莫迦げた事でなくなつた以上 Odious truth 云々の一半は既に不必要になつたと思ふ。しかし更に云ひ餘した點を云ふと

(a)金花にとつて基督が無頼漢だつたと云ふ事は Odious truth に違ひないぢやないか傳染した梅毒の爲に被傳染者が先に死ぬ事が科學的に事實であり且梅毒の一時的平癒が同じく科學的に事實である時

詞だけのみならず讀者にとつても Odious truth と感じられる事が可能ぢやないかそれでも感じないと云ふならば仕方がない結局個人的な見方の差に歸すべき事だから水掛論はせずに打ち切る事にする唯論理で押して行ける限りは Odious truth と號しても差支へないと思ふがどうか

(b)もし差支へないとすれば「遊んでゐる」と云ふ言葉は取消すべきかどうか勿論差支へある場合(即 a に君が no と答へる場合)はこの「b」の問題は始から起らない筈だから君は當然答へなくもよいのだ4トルストイ　バルザック etc. の作品は「あの種の作品」の例に擧げたのだ「あの程のうまさの作品」の例に擧げたのではないだから「あの種の作品」を否定せずあの作のみに就いて君がものを云つてゐる今、當然問題にはならない筈だそれは明に彼等の作品の方がうまいこの「うまい」と云ふ意味は勿論君に云はせると「遊んでゐない」と云ふ事になるのだらうが

以上四項に亙つて述べた所に猶君が服さないならもう一度答へ給へ但「1」は大問題だから輕率に答へてくれないやうに望む念の爲に例を擧げて(1)の問を說明すると(「好み」の場合は問題はないが)たとへばメリメの「カルメン」ポオの「赤き死の假面」の如き作品(あれが「南京の基督」とすつかり同傾向だと云ふのぢやない君の云ふ「藝術的陶醉」のみを與へる所の作品と云ふ意味だ)が君にとつて藝術的により望ましくないと思はれる場合その理由を說明せよと云ふ事になるのだ猶「カルメン」「赤き死の假面」が藝術的陶醉以上に君の心もちにもアッピイルする物を與へるならそれを事實(作品中の記載)によつて說明し且それらと「南京の基督」の與へる感銘との差を示してくれ給へ(勿論それがメリメやポオと僕との巧拙に歸するやうな論理の埒外に逸する場合は水掛論に終るから、さうならない限りに於て論じて貰ひたい)

末ながら書き加へる僕は君に些の惡意も持つてゐない君の人格を非議するものがあつたら僕はまつさきに君の爲に戰ふ一人だと思つてくれ給へ問題はすべて議論の上にある　以上

七月十七日　我　鬼　拜

南部修太郎君

四九九〔七月二十二日田端から。下島勳宛〕

啓　御獲物御裾わけにあづかり難有く御禮申上候

即興

明易き水に大魚の行き來かな

同月同日　夜來花庵生

空谷先生　臺啓

五〇〇〔七月二十三日田端から。近藤博宛〕

啓　薤露行は挽歌の意、挽歌とは人を葬る時柩の車の紼を引く者の歌に候薤露行或は薤露歌は「薤上ノ露何易レ晞。露晞明朝更復落。人死一去何時歸。」と申すものを最も古しと致し候こは漢の田横の自殺せし時横の門人の作りし歌に候漱石先生があの小說に薤露行の名を題されしは一篇の結構ランスロットとギネヴィアとの戀の破綻を描くと共に所謂「美しき少女エレン」の美しき最後をも描かれし爲かと推察致し候草枕の中の峠の茶屋が何處かは存ぜず候又存ずる必要もなきやに愚考仕候へども如何にや虞美人草は藤尾の家が何區何町何番地なるかを明らかにせざるも面白かる可く我輩は猫であるは苦沙彌先生の原籍が何縣何市何町にあるを問はず批評し得べく候右亂筆ながらとりあへず御答までに如斯に御座候　頓首

七月廿三日　芥川龍之介

近藤博様

五〇一〔七月三十一日田端から。小穴隆一宛〕

啓みちのく青根温泉へ入湯に赴き候爲當分留守に致候碧童先生への御禮は歸京の節に致す可く缺禮の段はよろしく御とりなし置き下され度候香取先生貴臺風景の畫を中々うまいと褒められ候も小生の軸の方よろしき由にてあの鷄一羽とられ候我鬼の印その後むやみやたらに本へ押し居り候二つ宛押したる本もあり自ら笑止に存居候碧童句集早く拜見致度候

岩根踏みわが戀ひ行けばしらしらと青峯(ネ)の山に雲わくらんか

七月卅一日　　　　　我　鬼　拜

小　穴　隆　一　樣

五〇二〔八月四日青根から。端書、佐佐木茂索宛〕

日かげへ手紙を出したよ損した此地海拔二千四百尺まるで未開の境だ周圍の風物悉高山の氣を帶びてゐる御面倒ながら西洋剃刀一挺買つて送つてくれないか家へ云つてやつてもへまな物をよこすと困るから君に歎願する皮はいらない便祕で困つてゐる遙に大橋房子孃の健康を祈つて擱筆

五〇三〔八月五日青根から。端書、瀧井孝作宛〕

うさぎやのもなか送つて頂ける由難有し此處は海拔二千四百尺の溫泉なり周圍の風物悉高山の氣を帶びてゐる但し便祕の爲頭の具合惡く碌な小說も書けさうぢやない奥さんによろしく僕は肉食交合二つながら絕緣だ　さやうなら

五〇四〔八月九日青根から。端書、瀧井孝作宛〕

もなか難有う但悉つぶれて餡の塊りになつて來た新潮の僕の小說南部のなどとは品が違ふと思ふが如何君の小說は果して白眉だつたではないか　以上

龍　之　介　記

樹下獨坐　我鬼畫　〔官製端書に、ペン畫にて大樹を描きその下に我鬼羅漢を配せるもの。〕

五〇五　〔八月九日青根から。端書、南部修太郎宛〕

君の「夏の旅と自分」とを讀んだ淺間山が一番面白い噴火口へ立つての君自身の感じはどうにか纏めれば小說になるしかしだね　rigid にリッギットなどの假名をふつちや英語の御里が見えるリッヂッドだよあれは。それから雲乎山乎吳乎越乎とは何だい皆で八字になるぢやないか山陽詩鈔位は讀んでなくちや駄目だねあれぢや漢文の御里も見えるぜ後進の英雄以て如何となす。
木村毅「虫の知らせる話」を褒む君の知己だね噴飯々々

五〇六　〔八月十二日青根から。繪端書、下島勳宛〕

啓　この地僻遠の爲食物悪く且田舍の湯治客多きに弱り居候されど高山の秋早く（此處は海拔二千四百尺）夜は既に虫聲屋を繞つて生じ候

人遠し明る間早き山桔梗

十二日　　　　我　鬼　拜

下　島　勳　樣

五〇七　〔八月十七日青根から。佐佐木茂索宛〕

古瓦宗匠曰「夏は障子を紗張りにして廣い庭のまん中に茶室めいた庵住みがしてみたい（三田文學あつめ汁）

我鬼居士曰「おらあまつぴらだ螢ぢやあるめえし大芸居先生以て如何となすそれから南部の「夏の旅と私」を讀むべし、「クリムソン色の空」あり、雲乎山乎吳乎越乎と八字並んでゐる所あり、十和田湖上ロオレライを想ふあり、いやはや、川柳に曰「坊ちやん御成人とかく籐椅子によりたがり」

五〇八　〔八月十八日青根から。端書、瀧井孝作宛〕

入日さす赭土路の馬の跡坂は急なるこの若葉かも
葉卷やつとついた最中も難有う奧さんの御病氣如何
十八日　　我鬼拜

五〇九　〔八月二十日青根から。繪端書、薄田淳介宛〕

入日さす赭土路の馬の跡坂は急なるこの若葉かも
行く春の山の巖間に水は滴り巖根を見れば苔靑む見ゆ
季節は歌の便宜上二月ほど繰上げそろ、年鑑、短篇承知仕候御手紙こちらへ轉送されし爲漸昨日拜見致そろ　以上

五一〇　〔八月二十日青根から。繪端書、下島勳宛〕

入日さす赭土路の馬の跡坂は急なるこの若葉かも
行く春の山の巖間に水は滴り巖根を見れば苔靑む見ゆ
季節は歌の都合上二三ヶ月くりあげそろ　以上
あをね　我鬼生


樹下独坐

下島勳様

朶雲唯今奉誦小供毎度御厄介になり難有く存候當地は旣に秋意動き居候

五一一〔八月二十日青根から。端書、小穴隆一宛〕

ゆく春の山の巖間に水は滴り巖根を見れば苔靑む見ゆ
入日さす赭土路の馬の跡坂は急なるこの若葉かも

五一二〔八月二十一日青根から。端書、松岡讓宛〕

小說出來ず大にへこたれて居り候おはがきうれしく拜見致候御句も感佩致候夏山木々の茂り無氣味な位盛に候

我鬼拜

樹下獨坐　我鬼〔插畫參照〕

五一三〔八月二十六日青根から。繪端書、中西秀男宛〕

思はずこんな山の中に長い間ゐましたもう二三日中にかへります此處は海拔二千四百尺薄は穗がなびき桔梗は花が咲いてまるで秋風が立つたやうです
二伸この前出した手紙はどうも宛名に番地を書かなかつたやうな氣がします瀧のある畫はがきが屆きましたか

靑根　芥川生

五一四〔八月靑根から。繪端書、小穴隆一宛〕

燈下讀書

谷幾つ越え來て此處に火取虫

青根温泉のある所は海拔千何百尺とかの由周圍の風物皆高山の趣あり小生は目下温泉宿の土藏の二階に陣取り居りこれから小說を書き出す所　以上

五一五　〔九月二日田端から。與謝野晶子宛〕

拜啓高著御惠贈下され難有く御禮申上げます目下風邪にて臥床中故熱のさめ次第ゆる〳〵拜見致したいと存じて居ります　頓首

九月二日　　芥川龍之介

與謝野晶子樣

五一六　〔九月五日田端から。小穴隆一宛〕

合掌　今日神田へ行つて短册と少し好い墨とを買つて來ました玉川堂の店へはひつて好い墨をくれと云つたらいきなり十七圓の墨を出されたには驚いたそれから少し好い墨を買ふ事にしました値だんは當分祕密です來月の「人間」の爲に雜筆を書いた中一個所君の話を擧げました序に君が話した事を書いちまひましたから不惡御高免下さい大して御迷惑はかからない心算です

ゆうべ天ぷら屋へ行つたらペリカンの雛つ仔の天ぷらのあつた夢を見ましたその天ぷら屋が又海岸にあつて緣側の下まで波が來るのです吉原のお幸ちやんと云ふ藝者や武者小路實篤と逢ひましたペリカンの雛つ仔と云ふのは何だか蜥蜴みたいなものでした目がさめた時はもつと詳しく覺えてゐたが今これ以上わかりません　さやうなら

九月五日　　我鬼拜

隆一樣　梧右

二伸　お序での節香取秀眞老へ御禮の手紙をやつて下さいませんか僕があの御金を着服しない證據までに　無理に貰はせた上無理に御禮を云はせて恐縮です

五一七〔九月八日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　昨夕電氣と文藝社の事を頼みし人の所へ行き話したるにあの社の當事者は零餘子に萬事を賴みし爲差當りその手から仕事を引き離す訣にも行かぬ由しかし雜誌が零餘子ではうまく行かぬに相違なければ早晩何とか始末をつける事になるべくその節はよろしく願ふと云ふ口上だつたさう云はれて見れば仕方なき故君の名だけ先方に通じて戻つて來たどうもこの口は至急どうと云ふ訣には行かぬと思ふ猶僕も外に何かあるか氣をつけて置くから精々君も當分は現狀に辛抱する事にし給へ冗員淘汰がやかましい昨今だから改造の口もそんなに難有くないものではないのだよ相談がてら君の所へ行く心算だつたが暑さに負けて手紙にした　以上

昨日作つた歌

石燈籠立ちの佗しき夕空にあがりて消えし螢なるかも

九月八日　　我　鬼　拜

折　柴　先　生

五一八〔九月十日田端から。端書、小島政二郎宛〕

偶成

瑟々侵階月
幽人帶醉看
知風露何處

我鬼窟主人 〔「我鬼」の捺印あり〕

五一九 〔九月十三日田端から。佐佐木茂索宛〕

昨日は藥を難有う古瓦樓主人も貰つた由何だか君が藥の廣告でもしてゐるやうな氣がした可笑しかつた御禮まで
又剃刀の代を上げるのを忘れた
　藥煮るわれうそ寒き夜ごろ哉
十三日　我鬼拜
大芸先生

五二〇 〔九月十六日田端から。小島政二郎宛〕

啓
あのメリヤス屋の店にある棚(商品の箱がつまつてゐる)もケンドンと云ひますかあの壁側の



のやうな所です御面倒ながらはがきにても御敎へ下さい　以上
十六日夕　我鬼
古瓦先生
昨夜歸途得短韻
十載風流誤一生
愁腸難解酒杯傾

煙花城裡昏々雨
空對紅裙話舊盟
　　　　我鬼生

五二一　〔九月二十日田端から。佐佐木茂索宛〕

夕影の鞍馬の山に人住めり嘯虎と云ひてこの紙作る
はろばろと人が持て來し封筒の黄なるが裏に嘯虎の印あり

九月二十日　　目下風邪引籠中　我鬼拜

大芸先生

五二二　〔九月二十二日田端から。端書二枚、小穴隆一宛〕

〔一枚の端書には水虎問答之圖（次頁挿畫參照）あり〕

赤らひく肌(はだへ)ふりつつ河童らはほのぼのとして眠りたるかも
この川の愛(めぐ)し河童は人間をまぐとせしかば殺されにけり
短夜の清き川瀬に河童われは人を愛(かな)しとひた泣きにけり

この頃河童の畫をかいてゐたら河童が可愛くなりました　故に河童の歌三首作りました　君の畫の御禮に僕の畫をお目にかけ併せて歌を景物とします　以上

五二三　〔九月二十三日田端から。佐佐木茂索宛〕

腸の腐る病と聞きければわが腹さへも痒くなりにけり
氷嚢の下にまなこをつぶりつゝわが腦味噌の腐る日おもほゆ


水虎問答之図

もう少しまじめに歌を考へん熱はあれども頭は鋭き
入つ日にさ庭の草のけむるときわが腦味噌の腐るを氣づかふ
目なかひにかゞやく星の今宵赤し人の腸腐れんとすも
　屋根草のうら枯早み腐れたる腸持ちて生くる人あり
まだ熱あり、時々起きて原稿を書く、苦しみ云ふばかりなし、腸の腐る方が樂だといふ氣がする、あの藥もまだ使はない

病　我　鬼　拜

五二四　〔九月二十五日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　先達はお歌難有く拜見仕りました　菊池事外に至急返事のわかる方法がありませんでしたから速達で問ひ合せましたが今以て何とも返事がありませんもう一度都合を問ひ合せてやりますかもし菊池が不參でしたら私が誰か一人出品してもよいと存じますその旨鹿島さんへ御傳へ下さいそれから會の日十月の一日か三日かだと更に都合が好いのですがもう御とりきめでせうか今日餘儀なく二日の夜ある音樂會の切符を買はせられたのですこれも序に御願ひ致します私が菊池へも行け先生なり鹿島さんなりへ上れると好いのですが風邪がまだ碌によくならぬのに原稿の〆切でうん〳〵云つてゐますから手紙にて御免蒙ります右當用のみ　頓首

九月廿五日　　芥　川　龍　之　介

香　取　先　生

五二五　〔九月二十八日田端から。香取秀眞宛〕

啓　今日菊池田端へ參る旨申しに參りました一日には同道參上します

〔このところに河童(二匹)の繪あり〕
御差支へがなければその節御さそひ致します
三日月や二匹つれたる河太郎
九月廿八日　　　　　　　　　　　　我　鬼　拜
香　取　先　生　侍史

五二六　〔十月一日田端から。佐佐木茂索宛〕

つまらぬはどうせうき世と知りながら茂索は今日ものおもひ庭の夕日にちりたまる秋海棠の花見ればなにゆゑ何故か涙が湧くと云ふほんにお前は暮れたやむファン・ド・シエクル末世の子心は細き竹椽や好いた女と露が散る卓の家ずまひ山ずまひ七日七晩寢てゐたらちつとは胸も晴れ晴れと小說書く氣になりやせぬかええじれつたいしよんがいな
と云ふのはどうだいその癖僕自身ちつとも小說を書く氣にならず弱つてゐる中央公論の小說も半出來のまゝうまいかまづいか自分にもとんと見極めがつかない多分まづからう少し世の中がいやになつて近年になく憂鬱になつた但病氣はもう全快　頓首
十月一日　　　　　　　　　　　　我　鬼
大　芸　先　生

五二七　〔十月一日田端から。小島政二郎宛〕

おみまひ難有う存じますもうよくなりました但中央公論の小說やつと半分しか書けず大に弱りましたそれも一枚二枚づつ渡したのでうまいかまづいか自分にも更にわかりません活字になつたら御叱正を請ひたいと存じます茂索腸の腐る病の由驚きましたがさうでない由にて安心この紙並に封筒は茂索の

兄さんくらまの嘯虎山人の作です中々凝つたものでせう病中大にトルストイを研究して大分通になりましたあいつは歐羅巴漫遊中學校ばかり見て歩いた教育狂です三十歳までのトルストイには驚きませんが三十歳以後の彼は非凡です猛然として「戰爭と平和」を書き出した時の彼は懦夫を起たしむる概がありますす　以上

實二句

梅檀の實に風聞くや石だたみ
草の實や門を出づれば水暗し

皆胸中蕭索の意です　頓首

十月一日　　　　　　　　我　鬼

古　瓦　先　生

五二八　〔大正九年（推定）十月一日田端から。宮本勢助宛（寫）〕

敬啓　御手紙難有拜見致しました御厚志難有く御禮申上げます確この前も御手紙を頂いた時、風邪の爲參上の機會を失したと存じますが、今度も一週間も以前から床に就いて居りました爲、御返事ものびのびに相成り申譯なく思つて居ります。漸昨日床を離れましたから早速拜謁御教へを請ひたいと思ひますが本月五日では如何ですか。午前午後共御都合好い時に參上したいと存じます。御面倒ながら端書にて時間を御指定下されば、この上の好都合はありません。どうかよろしく御取計らひ下さるやう御願ひ致します。

右失禮御詫び旁〻當用までに、この手紙を認めました。

十月一日　　　　　　　　芥　川　龍　之　介

宮　本　先　生　侍史

五二九　〔十月十一日田端から。下島勳宛〕

合掌　度々御手紙を頂き難有く存じます昨今目のまはる程多忙の爲御返事も差上げず甚恐縮に存じて居ります玉稿明晩にでも持參拜趨したいと存じて居ります井月上人の句漱石先生の書などいろいろ御話を伺ひたいと存じます右とりあへず御返事まで大急ぎこれを認めました　再拜

十月十一日　　我鬼生

空谷先生　座右

二伸これから劇評を書く爲いやな芝居を見に參ります

五三〇　〔十月十六日田端から。佐佐木茂索宛〕

新曲賣文八景、

かなしきは、うき世なりけり身一つの、外にはたのむ椎の木の、木陰もさらに嵐ふく、鳰の湖なる漁舟、わたしや苫洩る雨にぬれ、身すぎ泣く泣く楫枕、夢もむすばぬ苦しさを、知るは浪風蘆ばかり、一つ浦屋の漁師さへ、粂も政二も榮一も、今夜ばかりは上機嫌、一杯機嫌、色機嫌、大津女郎衆の買ひ論に、さぞや顔にも夕燒けの、勢多の長橋なかなかと、時もうつれば唐崎や、まつ間せはしき夜の雨、比良の暮雪か女菩薩を、抱けば煩惱卽菩提、樣がためなら命も捨てよ、帶もやるやる笄も、閨の誓は堅田なる、雁の折り伏す蘆の穗の、寢くたれ居ると思ふさへ、なじみ重ねたかの君に、わたしや粟津の青あらし、つらいかなしい逢ひたいと、心矢ばせの歸り帆や、いつそこの儘向う地へ、舟をやろかと思つても、魚籃には魚もあら波の、しぶきうき世のすべなさに、男の意地を三井寺の、鐘鳴るまではやつしつし、やつと打つたる網がくれ、見えしは鯉か石山の、秋の月より夜もしるき、漁は金鱗二千丈、語るも聞くもいとほしき、作家修業の八景は、多情多恨のわが茂索、君が爲とぞ三重

しつかりし給へさうしてえらくなつてくれ給へ誰でもみんな樂ぢやないのだ

十六日午後　　　　　　　　　　　　　　　　我　鬼　拜

佐々木茂索樣　侍史

五三一　〔十月十六日田端から。小穴隆一宛〕

寂しもよ月の縮のある古德利誰か描きけんこの古德利
小杜に菊は香ぐはしとろとろと入谷の兄貴醉ひにけらずや
碧童は醉ひ泣きすらん隆一は眠るが常ぞ古原草は如何に
この鳥は何鳥ならん紅菊の菊の花見て啼けりや否や
隆一が醉ひて書きたる菊の花その花小さしあはれを感ず
御會式の夜ルをかきかく鰹節音冴えぬれば醉ひがてぬかも
男三人醉へばまさびしこの宵は日蓮上人の御命日かも
夜深み歸り來れば枕べに隆一が描きし菊の花あり
醉ひ居れば薄き羽織も脫がなくにただに筆とる龍之介われは

十月十六日

小　穴　畫　宗　梧右

五三二　〔十月十七日田端から。下島勳宛〕

合掌　御畫頂戴致し又井月の短册拜見致させ下され難有存候明日御出立御歸省の由旅中御恙無之やう祈上候唯今小穴隆一參り居り口にて一句示し候間ごらんに入れ候　珍重

雨降るや竹の匂ひの古疊

十七日　　　　　　我　鬼

室谷先生

二伸　昨夜御來駕下され候由留守にて失禮致候



五三三　〔十月二十一日田端から。小穴隆一宛。插畫參照〕

田端之河童　二十二日ハ出ラレマセンドウカオユルシヲネガヒマス二十五日スギナラ又御一シヨニ屁子玉ヲトリニマイリマセウドウカ入谷ノ兄貴ニヨロシク

本郷之河童　ヘン　イクヂノナイヤラウダナ

五三四　〔十月二十一日（推定）田端から。香取秀眞宛〕

拜復　一、二、三どの日にてもよろしく候皆樣の御都合にて御きめ下され度願上候目下風をひき弱り居候床の上にて句など作り氣晴らしを致すのみに候　頓首

秋の日や竹の實垂るゝ垣の外

二十一日　　　　我　鬼　拜

香取先生　梧右

二伸　先達は結構なる品々難有御禮申上候草々

五三五　〔十月二十四日田端から。小澤忠兵衛宛〕

肅啓傘の御歌格段に結構と存じますあれは何度讀んでもうれし

くなりますさて親戚に病人あり日曜はそちらへ參ります萬一御來駕を得ると恐縮ですからこの端書きを差上げます

爐の灰にこぼるゝ櫧の木の葉かな

と云ふのは落第ですか？

五三六　〔十月二十四日田端から。小穴隆一宛〕

鴉瓜よろし百舌の句も惡しからず章魚に似たるの蜘蛛、感じは通ずれど最も劣るべし

小說の出來そくなふ日天が下の百舌もとんびも落ちよとぞ思ふ

日曜來可らず親戚に病人ありそちらへ行く

五三七　〔十月二十七日田端から。小島政二郎宛〕

啓　碧童氏の歌を御めにかけます字も出來がよろしい龍字の印は碧童氏自用のもの僕とは關係も何もありません僕も昨日のたくりました　頓首

生きの身のあはれを求むるわれなれば五錢の踊り今日も見に來し

舞姬の一人はかなし錢を乞ふ手のおしろいも剝げてゐにけり

我　鬼　生

古　瓦　軒　主　人　御床下

五三八　〔十月二十七日田端から。下島勳宛〕

合掌　御旅先よりの御はがき並に今日は御手紙の外結構なる品頂きありがたく存じそろ井月翁の材料も御集まりの由御同慶の至に存じそろその後賣文糊口の爲匆忙たる日を送り居り候へどもたまたま興

を得河童の歌少し作り候間御ためにかけ候御笑ひ下され度候　頓首

川郎のすみけむ川に蘆は生ひその蘆の葉のゆらぎやまずも
赤らひく肌もふれつゝ河郎の妹背はいまだ眠りて居らむ
わすらえぬ丹の穗の面輪見まくほり川べぞ行きし河郎われは
人間の女をこひしかばこの河の河郎の子は殺されにけり
いななめの波たつなべに河郎は目盞冷たくなりにけらしも
川底の光消えたれ河郎は水こもり草に眼をひらくらし
水底の小夜ふけぬらし河郎のあたまの皿に月さし來る
岩根まき命終りし河郎のかなしき瞳をおもふにたへめや

廿七日朝　　　我鬼

空谷先生

五三九　〔十月二十九日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓今君の手紙讀んだ僕は風を引いたと見えて熱が少し出た但し明日はもう起きられると思ふから心配する程の事はない君が瀧井と議論した時腹を立てたのは天下の公論だよ又腹を立てる程の氣魄があるから好いんだ瀧井も腹を立ててゐたらうこれ亦腹を立て得ぬやうだら瞎漢だ
君がこの前の日曜に來なかつたので封筒を書いて貰へなかつたのは遺憾である相成る可くは君の方の封筒へ四五枚名前を書いて返事と同封して送つてくれないか「月　日」と云ふ字も入れてくれゝば感謝する大芸居の芸は香艸だから田崎草雲の書室の名も芸何とか草堂だつたと思ふ大芸の意味如何赤風盧は赤風呂と云ふ湯屋がありさうでいかん大芸居の方が遙に好い

時雨るゝや晝も火ともるアーク燈

十月廿九日午後　　　　　　　　　　　　龍

大芸居御主人様

五四〇　〔十月三十日田端から。小穴隆一宛〕

啓　この間の柘榴はもう裴潢匠へやつてしまひました尤も上等な表装ぢやありません紙表装です三四日前晩翠軒へ參り八大山人や王石谷などの畫の本を求めましたこんど御出での節おめにかけます八大山人は新しい人ですな明末清初頃の人です道理で畫がハイカラだと思つたこの頃倪雲林とどうとか云つたのは梅道人の間違ひです

それから日曜には俗客が多いから御光來の節は火曜日の夜來ませんか俗客と云へば昨日大俗客來り神がかりになる男がゐるから一しよに御研究になりませんかと云ふ何でも泉鏡花や喜多村綠郎もひきずりこまうとしてゐるらしい大に辟易しました

今日風輕日暖閑庭黃葉可愛　さやうなら

十月卅日　　　　　　　　　　　　我　鬼　拜

倪　小　隆　先　生

二伸　ボク目下大雅堂の畫を一枚手に入れかかつてゐます變な人間の繒です多分袋入りの琴を携へた僮か何かでせううまく手にはひつたら碧童先生にも見て貰ひます

昨日の途上吟

時雨るるや層々暗き十二階

五四一　〔十一月一日田端から。佐佐木茂索宛〕

感狀

上野竹之臺合戰之刻單騎跋ミ破ニ備寶比兵守之陣一短兵遂ニ散ッ仁木餌擾介之軍一候段前代未聞無ニ比類一者啻
子曰自顧直雖ニ千萬人一我往矣佐々木之振舞希代之強勇也因爲ニ恩賞一一生之間短篇長篇詩歌戲曲作リ取勝
手宛テフ行者也感狀合而如レ件

大正九年十一月一日

羽賀宅阿入道承ル

佐々木左衛門尉どの

五四二　〔十一月八日田端から。香取秀眞宛。封筒に御返事にはに不及候とあり〕

冠省　その後皆々樣御さびしく御消光の事と存じ候さて花瓶の事枕草紙第二段に月に日の條に
おもしろくさきたる櫻をながく折りておほきなる花瓶にさしたるこそをかしけれ
とあり、又第二十段清涼殿の雅遊にも
勾欄のもとに青き瓶の大なるをすゑて櫻のいみじく面白く云々
とあり候へば兎に角あの時分はもうありし事と存じ候なほあとは氣づき次第申上ぐ可く候　頓首

十一月八日

芥　川　龍　之　介

香　取　秀　眞　樣

五四三　〔十一月十日田端から。下島勳宛〕

拜啓　蓬平の畫拜見させて頂いて難有うございました朴訥な所があつて愛す可き畫だと思ひますもう少し御早いと昨日は山本鼎氏が來てゐたので見せられる所でしたそれだけ殘念に思ひますその節山本氏が見せに持つて來たロシアの子供畫集御目にかけます手本を與へたり教師が惡教育を與へたりなぞしないと小供はかう云ふ面白い畫を書くのです二三日中に山本君が來る時までに見て置けばよろしいのですから御ゆつくり御らん下さい

即興
庵の秋蓬平ならば山指かん
十一月十日
我　鬼　生
空谷先生　梧右

五四四　〔十一月十一日田端から。小島政二郎宛〕

啓　この頃賣文渡世の忙しきに弱つてゐます十五日には行かうか行くまいか目下勘考中です　濡れそむるの句は折柴近來の佳作と倣すあれがわからないやうぢや駄目です但しあれは時雨と云ふ前書きつきですさもないと何故濡れるのだか判然しない　「お律と子等」の批評を書いて下さつた由感佩しますあれは未完ですもう二三回通夜や墓の事を書かないと纏りません（今度はお絹を主人公にして）但しもう嫌氣がさしてゐます
近吟一
笹が根の土乾き居る秋日かな
十一月十一日
我　鬼　拜
古瓦樓主人　梧右

五四五　〔十一月十一日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　手紙を出しといて來ないなんぞといふそんなフリボラスな態度で淑女に對しちやいかん房子女史が用があつて歸つたから好いが上つて何時までも待つたら僕まで困るからな十四日に小島も來る由差支へなければお房さんをもう一度招待し給へ新年號にそろそろ惱まされ居るには悲惨だ小閑を偸んで遊戯の文字を並べる外に樂しみはない

笹が根の土乾き居る秋日かな

十一月十一日　　我鬼

大芸先生　梧右

五四六　〔十一月十六日田端から。下島勳宛〕

伊豆ゆ來し蜜柑十あまり盆に盛りこれ食をしませとわがたてまつる

井月のほ句寫し倦む折々はこれ食をしませとわがたてまつる

十一月十六日　　三拙生拜

空谷先生　梧右

五四七　〔十一月廿二日京都から。繪端書、芥川宛〕

やつと講演後の騒ぎをすませ當地に來ました今夜すぐ東京へかへる筈の所宇野浩二に誘はれ木曾一見にきめました久米、田中は當夜キ京菊池は廿四五日まで大阪滯在我々は廿四日キ京の筈、大阪及京都より小包を出しました受取つて下さい

五四八　〔十一月二十二日京都から。繪端書へ宇野浩二と寄書、江口渙宛〕

宇野耕右衛門先生にお守りをされてゐるまあボクも面白かつた

峽中に向ふ馬頭や初時雨　　芥川龍之介

五四九　〔十一月二十二日京都から。繪端書、小穴隆一宛〕

大阪道頓堀の café にゐたら川向うの家の物干に猿が一匹這つてゐましたその上に畫のお月樣がありました歌か句になりませんか　頓首

二十二日　京都驛にて　芥川龍之介

五五〇〔十一月二十二日京都から。繪端書、小澤忠兵衛宛〕

今日一日時雨の中に宇野浩二先生と京都の町を歩きまはりました一軒紙のれんを青竹にとほした饅頭屋がありましたあなたと一しよならはひつて饅頭を食ひたいと思ひました　頓首

二十二日　芥川生

五五一〔十一月二十四日諏訪から。佐佐木茂索宛〕

白玉のゆめ子を見むと足びきの山の岩みちなづみてぞ來し

二十四日　龍

五五二〔十一月二十四日諏訪から。繪端書、下島勳宛〕

二伸　但し宇野僕二人この地にゐる事公表しないでくれ給へ

京阪より名古屋へ出て木曾の紅葉を見て當地へ來ました二三日中に歸京する心算です

井月の瓢を何處へ暮の秋

二十四日　下諏訪　我鬼

五五三〔十一月二十四日諏訪から。繪端書、中西秀男宛〕

京阪をへめぐり昨夕此處へつきました此處は宇野浩二先生の第二の故郷です今度は宇野先生が案内に

立つてくれました　頓首

廿四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

五五四　〔十二月三日田端から。小穴隆一宛〕

啓　この間辛氣くさいのあまり碧童先生を訪ねいろいろ聞いて貰ひましたおかげで家へかへつたら小說を書く氣分になれましたこの頃人に四王呉惲の畫集を借りました南田が一番好いやうです今度お目にかけます碧童先生の所で見た君の歌皆よろしあの中僕が頂戴した二首で云へば後の歌の方より好きなり今度大阪にて矢野橋村と言ふ南畫家の御馳走になる健筆家です六月から今日までに屛風六枚折二双二枚折二双尺八位な絹本双幅十便十宜の小幅幷せて二十一枚その外長巻も一つ書いてゐます但し書品は君に比べると段違ひに下等です

　ぬばたまの夜さりくればその空にいまあかあかと彦星たるる

註に曰これでも戀歌です、頓首

　十二月三日　　　　　　　　　我鬼

　倪隆一先生　侍史

二伸　大阪堀江の妓僕に曰

油　├───╯　○○◯

と言ふのが讀めますか僕曰よめない妓曰教へて上げまほか僕曰教へてくれ妓曰油ハタカシ夜ハナガシコマルコマル大コマルさうだつしやろ僕曰なある程　以上

五五五　〔十二月六日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　六枚目の末かと思ふ「たとひ及ばないまでも」とある所「たとひ及ばない事があつても」と改められ

たし一體に今度の小說むづかしき漢字少からず何卒校正に念を入れて頂きたし　以上

六日夜　雲　田　生

折　柴　先　生

二伸　今日は一枚なりあと少しかきたれど持つてかれると續けるに困る故止める事にした

五五六　〔十二月六日田端から。瀧井孝作宛〕

折柴先生　これも六枚目なりしと思ふ。「主人は微笑を洩らしながら、斜に翁の顏を云々」とあり。其處がもし「洩らしながら」になつてゐたら、「含みながら」に改められたし。「洩らしながら」以外だつたら、その儘に置かれたし。約束の日限切れたれどもう眠くて書けぬ。山本社長には平あやまりにあやまる故、明日夜まで待つてくれ給へ。中途で切るのは困る。よろしくたのみ入り奉り候。

雲　田　生

五五七　〔十二月六日田端から。小穴隆一宛〕

題倪先生隻鷄之圖

明燭似風消慘悽
清香如水滌塵迷
展將一幅澄心紙
寫得中秋白羽鷄

臘初六日　雲　田　生　拜

雲　林　庵　主　侍史

二伸　この詩一時ばかりにて成るうまいかまづいかよくわからず但し小島政二郎の句よりはうま

い自信があります

五五八　〔十二月六日田端から。小澤忠兵衞宛〕

合掌　御手紙難有く頂きました相不變毎日原稿に惱まされてゐます　昨日も折柴改造の社長と同道にて參り何でも六日中に脱稿を頼むとの事にて今日は嫌々ながらずつとペンを握りつづけですその後私雲田と云ふ號をつけると申した所、大分諸君子にひやかされました雲田の號がそんなに惡いでせうか　小穴先生に聞けば蜆川あたりはの御歌書箋紙に御書きになつたのがある由頂戴出來るなら頂戴したく思ひますそれから河郎舍の印も頂戴しないとつぶされてしまふ由欲張つてゐるやうですが頂かせて下さいこれも小穴先生の入知慧です何しろ原稿の催促ばかりされてゐる爲一向歌も句も出來ません仕事をしまつたら一日ゆつくり風流三昧にはひつて見たいと思つてゐます風流三昧と云へば小穴先生に素ばらしい鷄の畫を貰ひました意淡にして神古るとでも云ひたさうな畫ですあゝなると河童ではとても追ひつきませんこの頃でも時々氣が滅入つて弱ります

僅に一首

苦しくもふり來る雨か紅がらの格子のかげに人の音すも

その内又參上愚痴を聞いて頂きます　頓首

十二月六日　　　　龍　之　介

衷　平　先　生　侍史

五五九　〔十二月七日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓一度君の所へ行きたいと思ひながら行つた事がない九日の夜參上したいが都合はよろしいか今からでは返事も待つてゐられさうもないが大した差支へがなかつたら都合がよろしい事にしてくれ給へ

ボク今王煙客、王廉州、王石谷、惲南田、董其昌、が出て來る小說を書いてゐるそれでたつた二十枚所まづ洞庭萬頃 煙波を咫尺の間に描いてゐる形だよ小島の短篇を一つ預つたがまだ讀了しない半分位までは素直に行つてゐるらしいがね今日折柴に貧乏話を聞かせられて同情した原稿の催促をされるのもあまり面憎くなくなつたから妙なものだね今晩これから八枚程書かねばならん君にすれば半夜の仕事だが僕は中々一骨だ

　雪竹や下を覗けば暮るゝ川

臘初七日　　我鬼

大芸先生侍史

五六〇　〔十二月七日田端から。小穴隆一宛。封筒に雲田屋我鬼兵衛とあり〕

ボクは今王煙客、王廉州、王石谷、惲南田、董其昌の出現する小說を書いてゐる皆登場してたつた二十枚だから大したものさ、洞庭萬里の雲煙を咫尺に収めたと云ふ形だよコイツを書き上げ次第鮫洲の川崎屋へ行きたいが君つき合はないか入谷の兄貴も勿論つれ出すさ

五六一　〔十二月十日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　驚いた事には昨日が九日だつたさうだ僕は今日が九日だとばかり思つてゐたその爲折角君の所へ行かうとしたのは駄目になつた今度は原稿の片づき次第にする十二日の日曜は執筆多忙の爲面會謝絕だまだ改造と「赤い鳥」の續稿を書いたばかりだ中央公論の「山鴫」は未に出來ん

　春日さす樺の木の芽の事を繁みわが山鴫は立ちがてぬかも

と云ふのは歌になりませんか今樗陰先生來り三汀が行方不明で困ると云つてゐた　以上

十二月十日　　雲田生

大芸先生

五六二　〔十二月十四日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　装潢は一切君の兄さんの説に任してくれ給へバヒシケ以外の事は何も僕にはわからないから　この間の歌ふかぶかとして雪を見ると云ふ一首及第しかし君の歌は概して玄人だよ古瓦先生の歌などはどうも素人臭を帯びてゐるいろいろな物を貰ふ由貰つて困らないのは獨身中だけだよ今のうち澤山貰つて置き給へ女房が出來ると貰つたものの始末に窮して川へ抛りこむやうな事にもなる註ニ曰コレハノロケナリ

山鳴の歌(君の)は何の事だかよくわからぬ君自身にもわかるか怪しいぜ　かう忙しいと聊小説を書かぬ君が羨しくもなる僕も金があると賣文糊口なぞはせずに隱逸の志を遂げるのだがな　因に云ふ伊藤左千夫は好い年をして妾を持つてゐた由彼の歌の艶つぽい所以だね

十二月四日　　我鬼　拜

佐々木様

五六三　〔十二月十四日田端から　小穴隆一宛〕

夕暮やなびき合ひたる雪の竹

臘月十四日　　我鬼

小穴先生

二伸　まだ忙しいのに困り居りそろ袁平先生に「夜來の花」の爲御迷惑をかける事恐縮の外なし今日御禮狀を出しそろ萃の字の句袁平先生の御説御尤にそろされどあれにても句意を通ずべしと存じそろ但し素人考故あまり當てにはなさるまじくそろ　頓首

五六四　〔十二月十四日田端から。端書、小島政二郎宛〕

夕暮やなびき合ひたる雪の竹

臘月十四日　　　　　　　　我　鬼　生

古　瓦　先　生

五六五　〔十二月十四日田端から。小澤忠兵衞宛〕

拜復　お母樣が御怪我の由一日も早く御全快になるやうに祈ります私の母なぞも七八年前に庭石で打つた腰が未に時時は痛むさうですその時に養生が足りなかつたからでせう御宅でもさう云ふ事のないやうに大事になさる事が肝要だと思ひます

雲田の號は嫌味の由ではもう少し考へた上つける事にしませう小穴先生から最仲の雅號を御えらびの由承りました好い感じの字面ですが人はモナカと讀みはしませんか

夜來の花の字を澤山書いてゐて下さる由これも小穴先生から拜承大に恐縮しましたあまりその方が立派になると表裝ばかり堂々とした假畫のやうな本が出來上ります聊原稿を集めるのが無氣味な氣がして來ました難有く御禮を申上げます

相不變忙しいのに辟易してゐます一年位何も書かずに畫や字の稽古ばかりしてゐたい氣がしますしかし貧乏の爲當分は隱逸の志を遂げられません甚情無い氣がします　昨夜鐵舟の書を二圓ばかりで買ひました眞か贋かよくわかりません字はあまりうまくもないやうです今度御出での節御覽下さいこの暮は小金を懷にして少し道具屋歩きをして見ようかと思つてゐます山梔子の御句結構に存じますしんみりした美しさを感ずるのですな後學の及ぶ所にあらずあれを見て發憤して忙しい中に句を考へて見ましたが一つも物になりませんでしたどうも小說に追はれてゐると俳骨も何もなくなるやうです　目下

山鴫と云ふのを書いてゐますトルストイとトゥルゲネフの出て来る小説ですまだ中途ですが一向霸氣を具へさうにもありません

即興

春日さす樺の木の芽の事を繁みわが山鴫は立ちがてぬかも

臘月十四日　芥川龍之介

東平先生　侍史

五六六〔十二月十八日田端から。香取秀眞宛〕

鴨も御歌も難有うございます

手賀沼の鴨を賜る寒さかな

わが庵や鴨かくべくも竹柱

天岡先生を懐ふ

叟一人巴里に食ふ鴨寒からむ

臘月十八日　我鬼拜

香取先生

五六七〔十二月二十八日上野から。端書二枚〕〔へ小穴隆一と寄書。小澤忠兵衛宛〕

水鳥の一羽はかなし松にゐて羽根切るは見ゆ音は聞えず　我鬼即興

大年や藥も賣らぬ隱君子

〔我鬼醉墨。徳利の繪あり〕

歳末青蓋翁へ御歳暮一句

烏瓜屆けずじまひ師走かな

小穴先生の驥尾に附するの句

お降りや竹ふかぶかと町の空　　我鬼拜

〔小穴隆一筆、門松の傍に子供に似たる犬の繪あり〕

清凌亭の御稻さんの御酌にて小穴先生と飲み居候

五六八　〔十二月二十九日田端から。端書、小島政二郎宛〕

新年の句を作りました

お降りや竹ふかぶかと町の空

二十九日　　雲田子

五六九　〔十二月二十九日田端から。下島勳宛〕

短日や味噌漬三ひら進じそろ

臘二十九日　　我鬼

空谷先生　侍史

五七〇　〔十二月三十日田端から。香取秀眞宛〕

信州諏訪の湖の蜆少々ばかりしんじそろ

山國の蜆とゞきぬ春隣

萬葉の蛤ほ句の蜆かな

襟巻のまゝ召したまへ蜆汁

臘末　　　　　　　　我鬼　拝

香取先生　侍史

五七一　（十二月田端から。端書、小穴隆一宛。小函嶺隠士雲田とあり）

君ボクの家の近所に切通しの路があるの知つてるだらう(鳥居の前からまつすぐに崖の上へ出る所)あすこを通る一人の男曰「箱根のやうだね此處は」ボク貧乏なりと雖も名勝函根の如きものの側に住んでりや光榮だ右御報知まで　以上

五七二　（大正九年田端から。香取秀眞宛）

拜啓　唯今は失禮致しました歸りました所方外の菅先生が見え先生の大雅の話が出ました所大に見たがつて御出でになるのですが恐縮ながら一寸拜借願へますまいか使の者に御渡し下さると難有いと存じます右とりあへず御願ひまで　頓首

廿八日　　　　　　　　龍之介

香取先生　梧右

五七三　（大正九年（推定）田端から。香取秀眞宛）

啓吉井勇の歌御めにかけます内證で吉井にさゝげる歌を作りましたから是亦御らんに入れる事にしました天岡氏の宿所書序を以て使の者に御渡し下されば幸甚です　頓首

我鬼生

香取先生

ひさかたの天主の堂に糞長くまりはまるとも歌なよみそね
長崎の南京でらの痩せ女餓鬼まぎはまぐとも歌なよみそね
黑船の黑き奴の瘡の膿なめばなむとも歌なよみそね

五七四　〔大正九年(推定)田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　先刻は失禮致しましたその節拜見した花瓶(菊の模樣のある)先方へ見せに遣しますから一兩日拜借願へますまいか我儘ばかり申上げ甚恐縮ですが唯今賴み手參りその旨申しますから御願ひ致します　草々

六月廿七日午後　芥川龍之介

香取先生

大正十年

五七五 〔一月六日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　昨晩はわざ〳〵御光來下さつた所留守にて恐縮　昨日始めて外へ出たのにてそれまでは毎日ゐたのにと思つた　それから歳旦の名書難有う　仲内先生からも歌や句を貰つた　僕何時ぞやのお降りの句以來句も歌も作らず大阪の新聞へ變な小說執筆中　あの南畫の本もただ一册しか見ず昔は一枚仿雲林をやつて失敗した　天神の古道具屋の鉢君が買つたですか昨夜行つたらもうなかつた人手に落ちたのだと少し口惜しい　僕も中の字のつく號がつけたくなつた爲いろいろ考へた宗中（コレハ小堀遠州の號）　空中（本阿彌光悅の子の號）　などつけたいのは人がもうつけてゐる　且中としようかと思つたが未定、中の字のつく號は惡くすると男藝者じみるのでむづかしい　昌中、玄中、童中、呆中、寂中、景中、素中、了中、皆落第　昌中はどうかと思つたがこれ亦未定田中と云ふのを考へたらタナカだつたので困つた　いづれ年始廻り完結次第仲内先生を訪ねます

一月六日　　未生子　旦中

一游亭主人　梧右

五七六 〔一月六日田端から。小澤忠兵衞宛〕

拜啓　昨夜は御來駕を得た所留守にて何とも殘念に存じましたしかも正月になつてから元日の夜は除きあの日始めて外へ出たのです大阪毎日へ怪しげな小說を書き出した爲又多忙になりました但しこれは一週間ばかりすると片づきますその上でゆつくり優游します僕この頃思ふに雅號に二種あり一は文

那直輸一は日本特製でありますつまり漱石は前者最仲は後者なのですなそこで僕も日本雅號を一つつけたいと思つていろいろ考へて見たのですがどうも好いのにあたりません光悦の子の空中、小堀遠州の宗中、なぞ中の字の號が好いと思つても最仲の向うを張る程のは一つも遭遇しないのです姓名判斷によると了中と云ふ號が好いさうですが何だか男藝者じみる爲ためらつてゐます序に見て貰つたら最仲はあなたに大へん好いさうです但しこの姓名判斷家は素人ださうですから餘り當てにはなりません日本及日本人の選句をなさる由僕は舊傾向故投句出來ません聊殘念な氣がしますそれから齋藤茂吉氏の「あらたま」一部差上げるつもりのがあります故御買ひ求めにならずに下さい可成好い歌があるやうです僕は歌も俳句もなまけてゐます唯この間人に金瓶梅を一部贈る時歌二首を添へてやりました御高覽に供します

老らくの身を忘れむはこのふみに玉子の酒もけだし若かざらむ

かにかくにこの長ふみを讀まゝくは霜月はつか藥喰ひの後

われわれの鬼趣帖に題して頂いた歌中ろくろ首の歌壓卷と存じます「ぬばたまの雨夜を化けて」の御歌にも敬禮したのですが「ぬばたまの」が「雨夜」にかかる例があるかどうか心配に思つてゐます近々御目にかかります　以上

一月六日　　我　鬼　拜

最　仲　様　まゐる

二伸　別紙は前に書いて出さずにしまつた手紙です序に御らん下さい

拜啓　御手紙拜見しました今度も御歌は結構に存じます雅號の事最仲はモナカと讀む讀まないに不關だんだん好い氣がして來ました藻中、御尤好音悉最仲に及びません號を御改めになるなら是非最仲になさい江戸百年の風流が上品にまとまるとあの號以外に出ない事になります雲田の悪口などはいくら

云つてもかまひません遠慮なく申上げると僕の句なり歌なり或は又趣味全體はもつと露骨に批評して頂いた方が好いのですその批評が當つてゐたら僕はすぐ禮拜します當つてゐなかつたらもう一度押し返します古人は道の爲には師弟を問はないと云つたさうですが我々の間では風流が卽道ですから御互に遠慮のない方が道の爲になるだらうと思ひます僕は新到の雲水ですがそれでも說がある時は異說でも僻說でも述べる氣でゐますまして久參の衲子たる先生は僕なぞの理窟に間違つてゐる所があつたらかまはずピシピシやつて下さい「山鴫」は全然出來そくなひました

五七七　〔一月九日田端から。香取秀眞宛。封筒に東南離芥川龍之介とあり〕

この間は御歌を難有うございました惡歌を御返し致します
　一杯の酒ものまねど夜語りのあとはうつべしわれをよばさね

頓首

一月九日　　芥川龍之介

香取先生　侍史

五七八　〔一月十日田端から。端書、小穴隆一宛〕

布佐川行きの件もう一週間御延期願はれまじくや僕その頃までには小說脫稿仕るべし二天の布袋鬪鷄を看るの圖は原家所藏ボクも一見せし事あり俊逸無双但その隣へ大雅をかけたらやはり位負けがした
頓首

二仲圓中名號ナリ圓中ニシヨウカ

五七九　〔一月十三日田端から。玉林憲義宛〕

啓　今朝あなたの手紙を見ましたあなたの手紙は好い手紙です私は愉快に讀みました時に私の所へも知らない人が手紙をくれます書生に置いてくれと云ふ手紙もあります原稿を見てくれと云ふ手紙もあゝります色紙や短册を書けと云ふ手紙もあります私はさういふ手紙が來ると大抵顔をしかめますさうして斷りの返事を書きますあなたの手紙はそんな手紙ぢやないそれだけでも旣に愉快ですその上あなたの手紙には我我三十前後の人間には失はれた純粹な感情があるやうですもう一度繰返すと私は愉快にあなたの手紙を讀む事が出來ましたしかしあなたを知らない私には何をあなたに注意して好いかわかりません唯私が誰にでも云ふ事を書けばあなたが何になるにしても勉强おしなさいと云ふだけです勉强おしなさい私も負けずに勉强します　以上

一月十三日　　　　　　　　　　　芥川龍之介

玉林憲義様

五八〇　〔一月十五日田端から。小穴隆一宛〕

十七日午前御光來下されまじくや僕の本の事にて新潮社の男君に御めにかかりたしと申す十六日夜はゐません小窓の小は小生も不贊成也

五八一　〔一月十九日田端から。中西秀男宛〕

この間はわかさぎを難有うあのわかさぎはお母さんが送つて下すつたのですか

わかさぎを火に炙りつついまだ見ぬ人のなさけを嬉しみにけり

久方の霞が浦にとりにけむこのわかさぎの味のよろしも

羊羹もかたねりでうまいですねあれも難有う

大寒や羊羹殘る皿の底

これはあの羊羹を食ひ／＼夜原稿を書いた時の實景です上浦のお宅を知らせてくれゝばそちらへ御禮狀を出します序の節御しらせなさい小說は出來ましたか今度君にあつたら淺草文庫の批評をします小生は今大阪每日に「奇怪な再會」と云ふ怪談を書いてゐます　以上

一月十九日　　我鬼拜

中西秀男様　まゐる

五八二　〔一月二十三日田端から。下島勳宛〕

啓　唯今人來り居り井月の話出で居り候につき例の扇面と尺牘一寸拜見願はれまじくや御大切のものを粗末に扱ふやうにて氣がとがめ候へども折入つて願上候　以上

一月廿三日　　芥川龍之介

空谷先生　侍史

五八三　〔一月二十五日田端から。室生犀星宛〕

啓　高著難有存じます今度は裝幀も見事ですな御風けのよし御大事になさい僕も鼻風邪をひいてゐます又奥様おんみごもりのよしこれ又御大切に願ひますその中に空谷先生を加へ花でも引きませんか頓首

一月二十五日　　我鬼山人

魚眠洞御主人　座右

五八四　〔一月二十九日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓　風邪の由大切にし給へ二三日前僕の知人一人風の爲死んだ君も今死んでは死にきれまい大事にす

ること大事にすること僕やつと大阪每日の小說すませ小閑を得た明日日曜なれど明日と明後日と小旅行をしてくる心算、その後來る五日は大學の山上御殿へポオの話をしに行かねばならずこれは厄介な聽衆故今から餘り愉快でない手の切れるやうな小說でも何でもどん〳〵書くべし水も洩らぬやうにしつくりしたものを書き上げるのも豆藏が口から玉子を吐き出すやうにひよい〳〵自在に書き飛ばすのも同樣にむづかしい藝當なりどちらでも一つ出來るものは正果を得る事疑ひなしこの頃英語の勉強をしようと思つて Henry James を讀み出した James も中々乙でげす乙と云へば生田蝶介さんの本三四日前に屆いた乙もあゝなると大したものだ今ふと思ひついたのだが乙と云ふ語の語源を「かう(甲)でもげえせん」から乙と云ふんぢやないかもしさうなら古丸などよりは餘程僕の方が國語の先生になる資格がある早く癒り給へ

山畠や日の向き〳〵に葱起くる

コレハ全快を祈ルノ句ナリ下手デモ祈ル心ニマケテ置キ給ヘ

一月二十九日　　我　鬼

大芸居主人　侍史

五八五　〔二月二日田端から。香取秀眞宛〕

冠省わたなべより支那餠もらひ候間さし上げ候　よく御洗ひの上、なる可く薄く切り、金あみにかけて御やきの際ふくれ上らぬやう火箸にてちよい〳〵突ついて頂き、その後何もつけずに上られ度候食べ方御傳授まで如斯に候　頓首

二月二日　　芥川龍之介

香取先生　侍史

五八六　〔二月十二日田端から。端書、小穴隆一宛〕

啓碧童大哥の都合さへよければ十六日に書く會をやらばやと思ふが如何僕校正が未にすまぬ嫌で嫌で眞實へこたれた皆屎(クソ)の臭がする　且急用ありて大阪の社へも行かねばならん苦娑婆苦無限

五八七　〔二月田端から。小穴隆一宛〕

武士あり。郎等四五人と鹿獵に出でし歸途或寺の説法をきき、突然剃髮す。郎等共驚き悲めどせんなし。水干袴の代りに袈裟法衣を著、金鼓(こんく)を胸にかけ、「阿彌陀佛よや、おおいおおい」と呼びながら、西の方へ歩き行く。阿彌陀佛は衆生渇仰の聲に、答へ給ふべしと聞きし故なり。西に大海あり。海邊に二股の枯木あり。その上に登り、海を望んで「阿彌陀佛よや、おおい、おおい」と言ふ。七日にして餓ゑて死す。そのほとりに住む僧一人、尋ね行きて見れば、枯木梢上の屍骸、口中より一朶の蓮華を生ぜしを見る。往生せしを知る。隨喜極りなし。

この物語より畫二枚作られたし。二十六日までに國粹へ送られたし。屍骸は枯木より下さざりしなり。よろしく願ひ奉る。僕は向うより國粹へ原稿を送るべし。二十六日までは好いと言ふ故、無理に書く事と仕つたのなり。

五八八　〔二月十九日田端から。小林憲雄宛〕

啓　大阪より電報參り唯今急に下阪仕る事と相成候間御約束の原稿その次の號へ御まはし下さるまじくや二十日までには如何なる事ありても出來致すまじく恐縮この事に存居候小穴氏にも急報裏繪だけ書くやうに申しやり候尤も廿三四日には歸京今月末までならば何うにか都合つくべく候我儘の罪幾重にも御免下され度願上候右とり急ぎ　頓首

二月十九日午後　　芥川龍之介

小林憲雄様

五八九　〔二月十九日田端から。端書、小穴隆一宛。夜來花洞主とあり〕

急に下阪の爲國粹の原稿延期した裏繪だけ描いて國粹へ送つて頂きます(神田橋本町壹丁目壹番地其社内小林憲雄宛)君がこの端書を見る時僕は濱名湖位にゐます

五九〇　〔二月十九日田端から。小島政二郎宛〕

召波抄

初冬や兵庫の魚荷何々ぞ
夕時雨古江に沈む木の實かな
いささかな草も枯れけり石の間
家遠し枯木のもとの夕けむり
いねかしの男うれたき砧かな
ぬれ色に起き行く鹿や草の雨
川上や黄昏かかる小鳥網
白幣のはや西を吹くくみそぎかな
甘酒の盃に居並ぶ父と母
夕立や市の中行くさざら波
少年の犬走らすや夏の月
道のべの低き匂や茨の花

爐塞いで主をかしや力足
「新酒やあたま叩いてまゐる人」「袂なる頭巾さがすや物忘れ」等召波にこの類の佳句少からず
春深く和布の鹽を拂ひけり
島原に田舍の空や夕雲雀
羽子板の一筆書きや内裏雛
子の顔に秋風白し天瓜粉
露けしや朝草食うた馬の鼻
綿帽子農工商の妻の體
交れば世にむつかしや薄羽織
若竹や村百軒の麥の音
大原や木の芽すりゆく牛の頬
鶯や銅蓮水をただへぬる
ゆつくり一句づつ味はつて見給へ几董輩とは氣品の高下が問題にならぬ程ちがふと思ふが如何

我　鬼　記

古　瓦　樣　梧下

五九一　〔二月十九日田端から。宮本勢助宛(寫)〕

拜啓　先日は參堂御高話を伺ひ難有く御禮申上げます。さてその節申し上げた御手紙歸宅後ずいぶん搜して見ましたが、どうもやはり見當りません。まつたく郵便局ででもなくなつたものと存じます。就いては誠に恐縮ですが、もう一度高教を頂けば幸甚と存じます。
いむしの件歸宅後しらべて見た所博文館の本にもありました。金尾丸も金尾丸とあります。私なぞの本

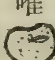
の讀み方は筋ばかり氣にする爲疎末になるのだと思ひます。如何にも情ない氣がしました。
今夕大阪へ參ります　頓首

二月十九日　　　芥川龍之介

宮本先生侍史

五九二　〔二月二十日田端から。小穴隆一宛〕

ぬばたまの夜風に冴えは返る頃を一游亭よ風ひくなゆめ
打ち日さす都をさかる汽車の窓に圓中なんぢを思ふ男あり

一日おくれ今夜發足同行は宇野耕右衞門二人共下戸故やはなし唯ばかり

夜來花庵主

小穴隆一君

五九三　〔二月田端から。端書、小穴隆一宛〕

啓この間御たのみの畫は平安朝時代なりそのつもりに願ひたし〆切りは廿六日と申せどもなる可く早く頂きたき由先方申し居候ボク昨夕歸京これより大急行にて書きはじめる所　頓首

龍

五九四　〔三月二日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　先達はいろ〳〵御世話になり且御馳走を受け難有く御禮申上げます　次の件御尋ねします
(一)旅費とは汽車、汽船、宿料　日當とはその外旅行中日割に貰ふお金と解釋してかまひませんかそれとも日當中に宿料もはひるのですか

(二)上海までの切符(門司より)はそちらで御買ひ下さいますかそれともこちらで買ひますか或男の説によれば上海から北京と又東京までぐるり一周りする四月通用の切符ある由もしそんな切符があればそれでもよろしい
(三)旅行の支度や小遣ひが僕の本の印税ではちと足りなさうなのですが月給を三月程前借する事は出來ませんか
又次の件御願ひします
(一)旅費並びに日當はまづ二月と御見積りの上御送り下さいませんか僕の方で見積るより社の方で見積つて戴いた方が間違ひないやうに思ひますから
(二)出發の日どりは十六日以後なら何時でも差支へありませんこれも社の方にて御きめ下さい自分できめると勝手にかまけて延びさうな氣もしますから
右併せて五件折返し御返事下されば幸甚に存じます

旅立たんとして
春に入る柳行李の青みかな

我　鬼　拜

薄　田　樣　梧右

五九五　〔三月四日田端から。小穴隆一宛〕

今卷紙なしこの惡紙にて御免蒙る
國粹いろいろ御手數をかけ感佩します僕の小説は駄目、急がされた爲おしまひなぞは殊になつてゐなささうです
今日中根氏が見本を見せに來ました表紙の藍の色が薄くなつた爲見返しの色彩が一層派手になつたや

うです表紙の色の薄くなつた事は僕も知らなかつた故少し驚きましたそれから扉と見返しとの續きが唐突すぎる故紙を入れたい旨並に紙の質は何にしたら好いかと云ふ旨御宅へ伺ひに上るやうに云つて置きましたよろしく御取計らひを願ひますそれから見返しは和紙へ刷つた方が手數はかかつても紙代は安かつた由入らぬ遠慮をした事をひどく後悔してゐますまだ本文の刷にも多少不備な點がありしみじみ本一册造る事の困難なのを知りましたしかし新潮社としてはまあ精一杯の仕事故勘辨する外はありません唯一つあきらめられぬのは見返しに和紙を使はなかつた事ですこれは折角の君の畫を傷けたやうな氣がして君にすまないで弱つてゐます
愈月半に立つ事になりましたその前に入谷の大哥と小宴を開きたいと思ひます　以上

三月四日　　芥川龍之介

小穴隆一様

五九六　〔三月四日田端から。宮本勢助宛（寫）〕

拜啓　先達は參堂失禮仕候。さて御手紙この度は確に落手致候間左樣御承知下され度候。再度御面倒をかけ候段申譯無之重重御禮申上候。小生本月中旬支那へ參る事と相成居候爲目下拜趨の機を得ずこれ亦不惡御容捨下され度願上候。右とりあへず當用まで如斯に候

三月四日　　芥川龍之介

宮本勢助様

五九七　〔三月五日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

拜啓送別會の事昨夜又考へるとどうしても小人數の方が好いやうな氣がして來た大人數は僕の神經にこたへるのでその旨菊池へも手紙を出したなる可く內輪だけの會にしてくれ給へ今日小田原へ參る

以上

五九八　〔三月七日田端から。恒藤恭宛〕

啓　今この紙しかない粗紙だが勘辨してくれ給へ僕は本月中旬出發三月程支那へ遊びに行つて來る社命だから貧乏旅行だ谷森君は死んだよ餘つ程前に死んだ石田は頗健康岡には僕が出無精の爲會はない成瀨は洋行した〔此の間削除〕僕は通俗小說なぞ書けさうもないしかし新聞社にもつと定見が出來たら即評判の可否に關はず作家と作品とを尊重するやうになつたら長篇は書きたいと思つてゐるこの頃東洋趣味にかぶれ印譜を見たり拓本を見たりする癖が出來て困る小說は藝術の中でも一番俗なものだね奥さんによろしく

三月七日午後　龍之介

恭　様

五九九　〔三月十一日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　今度はいろ／＼御世話になり難有く御禮申上げます紹介狀も澤山に今日頂きました大阪へは日下寄らぬつもりですが御用がおありなら一日位は日をくり上げてもかまひません折返し御返事を願ひますそれから紀行は每日書く訣にも行きますまいが上海を中心とした南の印象記と北京を中心にした北の印象記と二つに分けて御送りする心算ですどうせ碌なものは出來ぬものと御思ひ下さい一昨日精養軒の送別會席上にて里見弴講演して曰「支那人は昔偉かつたその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考へられぬ支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大をさがして來給へ」と私もその心算でゐるのですそれからお金は一昨々日松内さんに貰ひましたもし足りない事があつたら北京から頂きますそれまでは澤山ですやはり送別會の席上で菊池寛講演して曰「芥

川は由來幸福な男だしかし今度の支那旅行ばかりは少しも自分は羨しくない報酬がなければ行くのは嫌である」その報酬は二千圓ださうです事によると支那旅行と「眞珠夫人」と間違へてゐるのかも知れません以上とりあへず御返事まで　頓首

三月十一日　　芥川龍之介

薄田淳介様

二伸　澤村さんの本はまだ屆きません屆き次第御禮は申上げますがどうかあなたからもよろしく御鳳聲を願ひます　それから何時か御約束した時事新報の通俗小說原稿料は一回十圓だと云ふ事です朝日も恐らくその位でせう但し朝日は谷崎潤一郎に通俗小說を書かせる爲一回二十圓とかの申込みをしたさうです　以上

六〇〇　〔三月十一日田端から。菅虎雄宛〕

拜啓　洋畫家有田四郎君を御紹介申します　同君は忠雄さんなぞも御存じの鎌倉の佳人です同君の友人小山東助氏の全集を出版するにつき表紙の文字を先生に御願ひしたいとか云ふ事でした右よろしく御取計らひ下さらば幸甚です　頓首

三月十一日　　芥川龍之介

菅先生　梧右

六〇一　〔三月十一日田端から。小杉未醒宛〕

拜啓　支那旅行につきいろいろ御配慮に預りありがたく存じそろ漢口に參り候節は必水野先生を御訪ね仕る可くそろなほ次手を以て拙著一册座右に獻じそろ文章のまづい所は皆誤植と思召被下度又嫌味なる所は皆作者年少の故と御見なし下さる可く候　頓首

三月十一日　　　　　　　　夜來花庵主

未醒畫宗　侍史

六〇二　〔三月十三日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　いろいろ御手數をかけ難有く存じます十六日までに出來れば好いがと思つてゐます十五日頃人谷の兄貴や何かと人形町の天ぷらを食ひに行きませんか古原草先生も行けば好都合です兎に角僕は午後三時頃最仲庵へ行きます(これから小澤遠藤兩先生へも手紙を出します)田村松魚と云ふ人が未見なるにも不關新潮の隨筆を見て袮右衞門の鉢を一つ僕にやらうと云つて來ましたその時までに貰つたらおめにかけます空谷老人入谷大哥の「夜來の花」を見て曰「不折なぞとは比べものになりませんな」と頓首

三月十三日　　　　　　　　夜來花庵主

一游亭主人　侍史

六〇三　〔三月十三日田端から。中根駒十郎宛〕

拜啓　お孃さんの御病氣如何ですかさて夜來の花の裝幀につき小澤小穴先生へなる可く早く御禮を上げてくれませんか津田青楓には二十五圓とか云ふ事ですがなる可く御奮發下さい印税は菊池なぞ一割二分の由小生も春陽堂では一割二分ですが「夜來の花」は一割でよろしいその代り兩先生の方へ御禮を少し餘計出して頂きたいと思ひます右とりあへず御願ひまで　頓首

三月十三日　　　　　　　　芥川龍之介

中根駒十郎様

六〇四　〔三月十六日田端から。田村松魚宛〕

拜啓　うづ福の茶碗わざわざ御持參下され恐入りそろ仰せの如く形も色も模樣も見事と申す外無之そろ御祕藏の品を頂戴仕候事心苦しくも難有くそろ早速拜趨御禮申上ぐ可きのところ新聞社より支那旅行を申しつかり居り出發の日どりも二三日中に迫り居る次第につき何かと忙しく候へば失禮ながら書面にて御免蒙り候その段不惡御海恕下されたくひとへに願上そろいづれ歸來の節は拜眉の上御禮申上ぐ可くまづはとりあへず鳴謝まで如斯に御座そろ

渦福のうつはの前に阿彌陀ぐみ夜來花庵主は淚をおとす
手にとればうれしきものか唐草はこと國ぶれる渦福の鉢
渦福の鉢ながむればただに生きしいにしへ人の命し思ほゆ
この鉢のうづの青花たやすげに描きて死にけむすゑものつくり

惡歌一咲をたまはらば幸甚にそろ

三月十六日　　　　　　　　　　　芥川龍之介

田村先生侍史

六〇五　〔三月十六日田端から。澤村幸夫宛〕

拜啓　角山樓類腋昨日落手致しました旅行中御言葉に甘へて拜借致します難有うございました又小生の支那旅行につきいろいろ御配慮下さつた事を厚く御禮申上ます十九日朝東京發廿一日門司出帆の豫定故次便は禹域の地から差上げる事になるだらうと存じます右とりあへず御禮の爲草毫を走せました

留別

海原や江戸の空なる花曇り

芥川龍之介

三月十六日

澤村先生 侍史

六〇六 〔三月十七日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

啓 十八日午後御光來の由申候へども小生風邪につき十九日午後に御くりのべ下され度候十九日午後五時半發門司へ下る可く候 頓首

六〇七 〔三月十七日田端から。端書、小穴隆一宛〕

出發は十九日午後五時半になりましたとりあへず御知らせします碧、古兩先生にも通知しました 頓首

十七日　芥川龍之介

六〇八 〔三月十七日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

啓 十八日午後御光來下さるやう申候も風邪の爲當日面會いたしかね候十九日午後五時半門司へ下る筈に候へば十九日午後にても御ひまの節は御來駕下され度候 頓首

六〇九 〔三月十九日田端から。中根駒十郎宛〕

啓 立つ前に參上する筈の所何かと多用の爲その機を得ず今日に至り候就いては別紙の諸先生へ拙著一部づつ書きとめにて御贈り下され度願上候代金は勝手ながら歸京の日までお待ち下され度候書き留めの受取りは御面倒ながら上海日本領事館氣附にて小生宛御送り下され度願上候とりあへず當用のみ如斯に御座候 頓首

三月十九日　芥川龍之介

中根駒十郎様

菊池寛　久米正雄　里見弴　久保田万太郎　小宮豐隆　齋藤茂吉　島木赤彦　藤森淳三　岡榮一郎　佐佐木茂索　中村武羅夫　岡本綺堂　薄田泣菫　瀧井折柴　與謝野晶子　豐島與志雄　宇野浩二　江口渙　南部修太郎　加藤武雄　室生犀星　谷崎潤一郎

六一〇 〔三月二十六日大阪から。芥川道章宛〕

啓　その後皆々様おかはりなき事と存候　私東京發以來汽車中にて熱高まり一方ならず苦しみ候　その爲大阪に下車致し停車場へ參られし薄田氏と相談の上新聞社の側の北川旅館へ投宿仕りすぐに近所の醫者に見て貰ひ候その醫者至極舊弊家にて獸醫が牛の肛門へ插入するやうな大きな驗溫器なぞを出し候へば一向信用する氣にならずやはり唯の風邪の由にて頓服二日分くれ候へどその藥はのまず私自身オキシフルを求めて含嗽劑を造りそれから下島先生より頂戴の風藥を服用しなほその上に例のメンボウにて喉へオキシフルを塗りなぞ致し候へば三十九度に及びし熱も兎に角三日ばかりの內に平溫まで降り候然れば船も熊野丸は間に合はず廿五日門司發の近江丸に乘らんかと存居候さて大阪まで來りて見れば鋏、萬創膏、驗溫器、ノオトブックなぞいろいろ忘れ物にも氣がつきそれらを買ひ集め候へば自然入れ物が足りなくなりやむを得ずバスケット一つ買ふ事に致し候なほ私病氣は最早全快につき(今朝卅六度四分)御心配下さるまじく候　次便は上船前門司より御手許へさし上ぐべく候　草々

三月廿三日　龍之介

芥川道章様

二伸　中川康子、菅藤高德　武藤智雄　野口米次郎(動坂ノ住人)四氏の宿所並に「新文學」の新年

號の巻末にある文士畫家の宿所録を支那上海四川路六十九號村田孜郎氏氣附芥川龍之介にて送られたし　宿所録は「新文學」から其處だけひつ剝して送られたし
三伸　留守中は何時たん時紀行が新聞に出るか知れぬ故始終新聞に注意し切拔かれ置かれたし
四伸　唯今薄田氏來り愈廿八日の船ときまり候廿六日か七日大阪を立ち候　宿所録はやはり上海へ送られたし　こちらへ送つたのでは間に合はず候
五伸　大阪滯在中大阪毎日に一日書き候（日曜附錄）それをも切拔かれたく候
まだ煙草の味も出ず鼻は兩方ともつまり居り不愉快甚しく候
同封の新聞は上海の新聞に候小生の寫眞あれば送り候
伯母さんの風如何に候や無理をすると私のやうにぶり返し候間御用心大切に候
比呂志事はおぢいさん、おばあさん　もう一人のおばあさんが面倒を見て下さる故少しも心配致さず候
兎に角旅中病氣になると云ふ事はいやなものに候
早速下島先生の藥の御厄介になつた事よく先生に御禮申し下され度願上候
　　二十五日

六一一　〔三月二十六日大阪から。澤村幸夫宛〕

拜啓　支那の本中楊貴妃の×××なぞの事を書いた本と云ふのは何と云ふ本ですか御教示下されば幸甚ですなほそんな本で面白いのがあつたら御教へ下さいませんか僕の知つてゐる誨淫の書は金瓶梅。肉蒲團。杏花天。牡丹奇緣。痴婆子。貪官報。歡喜奇觀。殺子報。野叟曝言。如意君傳。春風得意奇緣。隔簾花影等です以上
　　三月二十六日　　　　　　　　芥川龍之介

澤村幸夫様

六一二　〔三月二十九日筑後丸から。繪端書、芥川宛〕

啓　昨日玄海灘にてシケに遇ふ船搖れて卓上の皿ナイフ皆床に落つ小生亦舟醉の爲もう少しにてヘドを吐かんとす今日は天氣晴朗波靜にして濟州島の島影を右舷に望む明日午頃上海入港の筈　頓首
〔裏に〕叔母さん風如何にや小生はもう全快但し用心の爲禁煙致居候　以上

六一三　〔三月二十九日筑後丸から。繪端書、下島勳宛〕

啓二十八日門司發筑後丸へ乘りました門司を出て玄海へかかると忽ち風波に遇ひ小生も危くへどをはく所でした尤も舟醉をしたのは僕ばかりでなく船客は勿論船員さへ醉つてゐました今日は天氣晴朗かうなると航海も愉快です

二十九日筑後丸船中

芥川龍之介

下島勳様

六一四　〔三月二十九日筑後丸から。小澤忠兵衞、小穴隆一宛〕

啓　出發の際は御見送下され難有存じます　その後汽車の中にて發熱甚しくなりとうとう大阪に下車一週間程北濱のホテルにねてゐました　それから廿七日に大阪を立ち廿八日門司から筑後丸へ乘りました。所が玄海にてシケを食ひ船の食卓の上の皿、ナイフなぞ皆ころげ落ちる始末故小生もすつかり船に醉ひ少からず閉口しました舟醉と云ふものは嫌なものですな　頭がふらふらして胸がむかむかしてとてもやり切れません尤も醉つたのは僕のみならず船客は勿論船員の中にも醉つた先生がありますが船客中醉はなかつたのは亞米利加人一人、この男は日本人の妾同伴ですがシケ最中携帶のタイプライ

タアなぞ打つて悠々たるものでした
今日は天氣晴朗、午前中は濟州島が右舷に見えました　淡路より少し大きい位ですが住んでゐるのが朝鮮人で朝鮮風の掘立小屋しかないせゐか甚人煙稀薄の觀があります
上海へは明日午後三時か四時頃入港の豫定、今日は船醉はしませんが昨日のなごりでまだ頭がふらふらするやうです
この手紙御讀みずみの上は小穴氏におまはし下さい　以上

筑後丸サルーンにて　芥川龍之介

六一五　〔四月二十日支那から。繪端書、小島政二郎宛〕

南京路は上海の銀座通り、僕の行くカツフェ、本屋等皆此處にあり新しい支那の女學生は額の髮へ火鏝を入れ赤い毛布のシヨオルをするそれがこの通りを濶歩する所は此處にのみ見らるべき奇觀ならん
二十日　我鬼

六一六　〔四月二十四日支那から。芥川道章宛〕

拜啓上海着後風邪の全快致し居らざりし爲乾性肋膜炎を起したゞちに里見病院へ入院、治療致し候所幸手當て早かりし爲經過よろしく今日退院致す事と相成候されどこの爲約三週間あまり病院生活を致し候爲豫定に大分狂ひを生じ候へば北京へ參るのも五月下旬に相成る事と存じ候もし今後も體の具合惡く候はば北京行きは見合せ、揚子江南岸のみを見物して歸朝致すべく候入院中手紙書かんかと思ひ候も入らざる御心配をかけても詮なき事と存じ今日までさし控へ候されど一時は上海にて死ぬ事かと大に心細く相成候幸西村貞吉、ジヨオンズなど居り候爲何かと都合よろしくその外知らざる人もいろいろ見舞に來てくれ、病室なぞは花だらけになり候且又上海の新聞などは事件少き故小生の病氣の事

を毎日のやうに掲載致し候爲井川君の兄さんには「まるで×××の御病氣のやうですな」とひやかされ候今後は一週間程上海に滯留の上杭州南京蘇州等を見物しそれより漢口の方へ參るつもりに候　以上

四月二十四日　　上海萬歲館內　芥川龍之介

芥川皆々樣

二伸　宿所錄並に父上文子の手紙確に落手致候今後も北四川路村田孜郎氏方小生宛手紙を下さらばよろしく候その節はなる可く母上伯母上も御かき下され度日本を離れると家書を讀む事うれしきものに候

末筆ながら父上御酒をすごされぬやう願上候病氣以來小生も支那旅行中一切禁煙の誓を立て候兎に角病氣になると日本へ歸りたくなり候されど社命を帶びて來て見ればさうも行かずこの頃は支那人の顏を見ると積にさはり候

六一七　〔四月二十四日支那から。薄田淳介宛〕

拜啓その後御無音にうちすぎました度々御見舞を頂き難有く存じます小生の病氣はやはり大阪の風邪が十分癒つてゐなかつた爲乾性肋膜炎を起したのです醫者は一月程靜養しろと云ひましたが手當てが早かつたせゐか咽喉の加太兒を除き殆平癒しましたから早速見物旅行に出かけようと思ひますもしその途中又惡くなつたら見物は一まづ長江沿岸宜昌までに切り上げ一度歸京養生の上北京へは秋に行かうかとも思つてゐます勿論この儘體の具合がよければすぐに漢口から北京へ向ひます出直すとなると億劫ですから。この手紙はとうに書くつもりでしたが病中病後の懶さの爲今日まで延引しました不惡御ゆるし下さい昨日退院今日はこれから村田君と支那文人訪問に出かける所です。昨日は退院後すぐに城內を見物、乞食と小便臭いのとに少からず驚嘆しました　以上

上海萬歳館　芥川龍之介

四月廿四日

薄田淳介様

六一八　〔四月二十六日支那から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

鄭孝胥章炳麟なぞの學者先生に會つた鄭先生なぞは書ではずつと前から知つてゐたから會つた時にはなつかしい氣がした章先生も同樣。この先生はキタナ好きだものだから細君に離婚を申込まれたさうだが襟垢のついた着物を着て古書堆裡に泰然としてゐる所は如何にも學究らしかつた

上海　龍

二伸「その死次の死」新潮に載る由可賀稻田君にはがきを書きたいが住所不明につき書けないよろしく云つてくれ給へ

六一九　〔四月三十日支那から。澤村幸夫宛〕

拜啓先達は御手紙難有く存じますその後やつと病氣恢復毎日人に會つたり町を歩いたりして居りますさうなつて見ると何處へ行つても必人が「澤村さんから手紙が來まして etc.」と云ひます私の爲にあなたが方々へ紹介狀を出して下さつた難有さが異國だけに身にしみますおかげで短い日數にしては可成よく上海を見ましたこれは村田君も保證してくれます人では章炳麟、鄭孝胥、李經(?)邁等の舊人及余穀民李人傑等の新人に會ひました李人傑と云ふ男は中々秀才です場所は徐家滙以外大抵一見をすませました徐家滙は領事館がまだ見物許可證をくれないのです御教示の書物はまだ見つかりません明後日は杭州へ出かけます　頓首

四月三十日　芥川龍之介

澤村先生侍史

六二〇　〔五月二日支那から。繪端書、松岡讓宛〕

杭州より一筆啓上、西湖は小規模ながら美しい所なりこの地の名產は老酒と美人、
　春の夜や蘇小にとらす耳の垢
　五月二日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

六二一　〔五月二日支那から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

西湖は餘り纖巧な美しさが多すぎて自由な想像を起させない（雷峰塔だけは例外だが）今日西湖見物の序に秋瑾女史の墓に詣でた墓には「鑑湖秋女俠之墓」と題してある女史の絕命の句に曰「秋風秋雨愁殺人」この頃の僕には蘇小々より女史の方が興味がある
　五月二日　　　　　　　　　　　　龍之介
二伸　僕の通信は時事には發表しないでくれ給へ社の方がやかましいから　以上

六二二　〔五月四日支那から。繪端書、南部修太郎宛〕

杭州に來た今新々旅館の一室に名物の老酒をひつかけてゐる窓の外には月のない西湖、もう螢の飛ぶのが見える多少のノスタルジア　以上
二伸　立つ前に寫眞を難有う

六二三　〔五月五日支那から。繪端書、江口渙宛〕

西湖から又上海へ歸つて來たもう上海も一月になる尤もその間二十日は病院にゐた今日は蒸暑い雨降り、隣の部屋には支那の藝者が二人來て胡弓を引いたり唱つたりしてゐる二三日中には蘇州から南京

の方へ行くつもりだ

燕や食ひのこしたる東坡肉

五月五日　　　我　鬼

六二四　〔五月五日支那から。繪端書、下島勳宛〕

昨日杭州より歸來、西湖は明畫じみた景色です夜はもう湖の上に螢が飛んでゐるのに驚きました杭州は名高い老酒の産地ですが僕のやうな下戸では仕方がありません

燕や食ひ殘したる東坡肉

東坡肉と云ふ料理が脂つこい所を見ると東坡も今の支那人のやうに脂つこいものが好きだつたのでせう

五月五日　　　上海　我　鬼

六二五　〔五月五日支那から。芥川道章宛〕

拜啓その後無事消光いたし居候間御安心をねがひます昨日杭州からかへりました二三日中には蘇州南京から漢口の方へ行くつもりです今日五月五日につき比呂志の初の節句だなと思ひました皆々樣御丈夫の事と存じます御用の節は(御用がなくても)支那湖北漢口英租界武林洋行内宇都宮五郎氏氣附僕にて手紙を頂けば結構です梅雨前は日本も氣候不順と思ひます伯母樣なぞは特に御氣をおつけ下さいお父樣もあまり御酒をのむべからず支那にもお母樣のやうな鼻をしたお婆さんがゐます文子よりもつと肥つた女もゐますなほ別封は上海の新聞切拔です僕の事が三日續きで出るなぞは恐縮の外ありませんそれから上海から小包にて本を送りました南京虫をよくしらべた上二階にでもお置き下さいずゐぶん澤山の本ですよ　以上

二伸この間家へかへつた夢を見ました本所の家でした義ちやんが來てゐました皆が幽靈だと云つて逃げました伯母さんは逃げませんでした眼がさめたら悲しくなりました夢の中では比呂志がチヨコチヨコ駈けてゐました

上海の奥さん連が僕に銀のオモチヤをくれました（一つ二十圓位のを二つ）文子の御亭主上海では大持てです　以上

五月五日　　　　龍　之　介

皆　々　樣

六二六　〔五月十日支那から。端書、小穴隆一宛〕

上海にずつと風の爲寢てゐたその爲御無沙汰してすまなく思ひます昨今やつと旅行開始手始に杭州から蘇州へ來ましたこの孔子廟は宏大なものだが蝙蝠の巣になつてゐる行くと廟内に雨のやうな音がするから何かと思ふと蝙蝠の羽音だと云ふから驚く床は糞だらけ、恐る可く臭い明日は揚州へ參る筈以上

二伸　碧童先生宛の手紙は皆よんでくれましたか

五月十日　　　　蘇州　我　鬼

六二七　〔五月十日支那から。繪端書、下島勳宛〕

外はともかくも蘇州だけは先生におめにかけたいと思ひました寒山寺は俗惡無爲ですが天平山の如きは一山南畫中の山景です　以上

二伸明日は揚州に入るつもりです

五月十日　　　　我　鬼

六二八　〔五月十四日支那から。繪端書、中戸川吉二宛〕

蘇州では留園と西園とを見た西園は留園の規模宏壯なのに到底及ばぬしかしどちらも太湖石や芭蕉や巖桂が白壁の院落と映發してゐる所は中々見事だ願くばあんな邸宅に一日中支那博奕でも打ちくらして見たい

六二九　〔五月十六日支那から。繪端書、小穴隆一宛〕

明後日上海發鳳陽丸にて漢口へ向ふ筈、どうも健康が確かでないから廬山に登る事は見合せてすぐに漢口から北京へ行かうと思ふ支那へ來てもう河童の畫を二枚書いた

五月十六日　　　　上海　龍　之　介

〔裏に南京名所烏龍潭の寫眞あり。餘白に〕

支那ノ風景ハ全然西洋ノ文明ト調和シナイ　コノ兵隊ノ無風流サヲ見給へ

六三〇　〔五月十七日支那から。芥川道章宛〕

その後杭州、揚州、蘇州、南京等を經めぐりましたこの分で悠々支那旅行をしてゐると秋にでもならなければ歸られないかも知れませんそれでは閉口ですから廬山、三峽、洞庭等は悉ヌキにしてこれからまつすぐに漢口から北京へ行つてしまふつもりですいくら支那が好いと云つても宿屋住まひを二月もしてゐるのは樂なものぢやありません體は一昨日もここの醫者に見て貰ひましたが、一切故障はたいと云ふ事でした寫眞はとどきましたかもう少しすると揚州や蘇州で寫した寫眞がとどきます南京で比呂志の着物を買ひました支那の子供がお節句の時に着る虎のやうな着物ですあまり大きくないから比呂志の體ははひらないかも知れません尤もたつた一圓三十錢です僕は見つかり次第本や石刷を買ふ

爲目下甚貧乏です北京へ行つたら大阪の社から旅費のつぎ足しを貰ふつもりです（病院費用も三百圓程かかりましたから）一日も早く北京へ行き一日も早く日本へ歸りたいと思つてゐます今晩船に乘り五日目に漢口着そこから北京は二晝夜ですからもう一週間すると北京のホテルに落着けます手紙は北京崇文門內八寶胡同波多野乾一氏氣附で出して下さい皆々樣御無事の事と思つてゐます叔母さんは注射を續けてゐますか、注射は靜脈注射よりも皮下注射の方がよろしいやつてゐなければこの手紙つき次第お始めなさい支那には草決明と云ふお茶代りの妙藥があります僕の實驗だけでも非常に效き目が顯著です歸つたら叔母さんにもお母さんにも飮ませますそれから文子へ、もし人參のエキスがなくなつてゐたら、早速買つてお置きなさいあれば誰でものむけれどないとついのまないから。ついのまないと云ふのが養生を怠る一步です。

五月十六日　　芥川龍之介

芥川皆々樣

二伸　唯今手紙落手しました吳服なぞは目下貧乏で買へません土產は安物ばかりと御思ひ下さい

六三一　〔五月二十日支那から。丁悚油繪（高璞女士像）の繪端書、小穴隆一宛〕

これは現代支那の洋畫なり日本畫でも近頃上海の日本人俱樂部に展覽會を催した支那人ありこの先生は栖鳳なぞの四條末派の影響を受けてゐた要するに現代支那は藝術的にダメのダメのダメなり

五月二十日　　蕪湖　龍

六三二　〔五月二十二日支那から。繪端書、石黑定一宛〕

上海を去る憾む所なし唯君と相見がたきを憾むのみ

留別

廬山に虹立ち消ゆる別れかな

大正十年五月二十二日　　　廬山　芥川龍之介

六三三　〔五月二十三日支那から。繪端書、下島勳宛〕

廬山をすつかり見物するには一週間ばかりかかるさうです旅程を急ぐため山上に一夜とまつて明朝九江へ下りすぐに漢口へ上るつもりです今の廬山は西洋人どもの避暑地にすぎません

二伸　蕪湖にて御手紙拜見、難有く御禮申上げます、廬山行同行は竹内栖鳳氏

五月二十三日　　　龍之介

六三四　〔五月三十日支那から。繪端書、與謝野寛、同晶子宛〕

しらべかなしき蛇皮線に
小翠花は歌ひけり
耳環は金にゆらげども
君に似ざるを如何にせむ

コレハ新體今様デアリマス長江洞庭ノ船ノ中ハコンナモノヲ作ラシメル程ソレホド退屈ダトナ思ヒ下サイ　以上

五月三十日　　　湖南長沙　我鬼

六三五　〔五月三十一日支那から。繪葉書、石田幹之助宛〕

長沙に來り葉德輝の藏書を見たり葉先生今蘇州にありあの藏書三十五萬卷皆賣拂ふ意志ある由君の所では買はないか好ささうな本があるぜ詳しくは觀古堂藏書目四卷を見るべし僕明朝漢口に歸り、二三

日後洛陽へ行く筈　以上

芥　川　生

六三六　〔六月二日支那から。繪端書、瀧井孝作宛〕

君はもう室生氏のあとへ引きこした由僕は本月中旬にならぬと北京へも行けぬ上海臥病の祟りには辟易した長沙は湘江に臨んだ町だがその所謂清湘なるものも一面の濁り水だ暑さも八十度を越えてゐるバンドの柳の外には町中殆樹木を見ぬ此處の名物は新思想とチブスだ　以上

六三七　〔六月二日支那から。薄田淳介宛〕

啓僕最初約束すらく「原稿は途中から送ります」と今にして知るこの約束到底實行しがたしその故は僕陸にあるや名所を見古蹟を見芝居を見學校を見るの餘暇は歡迎會に出席し講演會に出席し且又動物園の山椒魚を見んと欲する如く僕を見んと欲する諸君子を僕の宿に迎へざるを得ず、僕水にあるや船長につかまり事務長につかまり、時にその所藏の贋書僞畫を恭しく拜見せざる可らずその間に想を練り筆を驅らんとせば唯眠を節すべきのみこれ僕を神經衰弱にする所以にして到底長續きすべからず（二日程やつて辟易せり）私に思ふ澤村先生介紹の藥聊利きすぎたるものの如し是に於て僕やむを得ず歸朝後に稿を起さんと欲す、しかも目に見る所、耳に聞く所、忘却し去るを恐るゝが故に、街頭にあると茶樓にあるとを問はず直に手帖を出してノオトを取るこれ僕の近狀なり。僕の約を守らざる、責められざれば幸甚なり。且僕上海に病臥する事二旬、時當に孟夏に入らんとす。卽ち宜昌峽を見るを抛ち、西安行きを抛ち、僅に洛陽龍門を見て匆々北京に赴かんと欲す。蓋宜昌峽を見るは必しも僕の任にあらず。西安は戰塵未收まらずして實は龍門さへ行かれぬやうな風說を途に聞くが故なり。天愈暑からんとして囊底漸冷かならんとす。遊子今夜愁心多し。草々不宣

芥川龍之介拜

薄田先生侍史

六三八　〔六月六日支那から。繪端書、小穴隆一宛〕

子供に御祝の畫を下すつた由家書を得て知る、難有く御禮申上げますこれは朱子の白鹿書院、うしろの山は廬山です僕聊支那に飽き、この頃敷島の大和心を起す事度々

六月六日　　　　漢口　龍之介

金農といふ清朝の畫かき君のやうな書を書く號を冬心先生、詩も作る歸つたら複製を御めにかけます

六三九　〔六月支那から。芥川道章宛〕

拜啓　御手紙漢口にて拜見その後多用の爲御返事今日まで延引しました體はますます壯健故御安心下さい小包の數不審です、今日までに送つたのは

上海より箱六つ　包三つ（コノ内一ツハ後ニテ出シタリ古洋服包）

南京より靴と古瓦（コレハ幾ツニ包ンダカ知リマセン寶來館ノ亭主ニマカセタカラ）

この手紙に書留めの受取りを同封しますから全體の數が合はなかつた節は受取を郵便局へ持ち行き御交渉下さい但し箱幾つ包み幾つと云ふ事は僕の記憶ちがひもあるか知れぬ故全體の數にて御數へ下さい（但シ受取は上海より出した最初の八つだけのです。つまり古洋服包みの外八つあればよいのです）それから箱の上に書いた册數は出たらめです。又中につめた古新聞は當方にてつめたのです。それ故もし小包みの數さへ合へば包みを解き、中の本を揃へて下さい。御面倒ながら願ひます。多分小包みは紛失してもゐず、中の本も紛失してゐぬ事と思ひます　又漢口にて五六十圓本を買ひましたから、明日送ります　包みの數はまだわかりません。僕むやみに本を買ふ爲その他の費用は大儉

約をしてゐます漢口では住友の支店長水野氏の家に厄介になつた爲、全然宿賃なしに暮せました。支那各地至る所の日本人皆僕を優遇します。小說家になつてゐるのも難有い事だと思ひました。明日漢口發、洛陽龍門を見物(三四日間)それから北京へ入ります。漢口を出れば旅行は半分以上すんだ事になります。
小澤、小穴の親切なのは感心です。ハガキの禮狀を出しました
內地にゐるとわからないでせうが、僕晝間は諸所見てあるき、夜は歡迎會に出たり、ノオトを作つたりする爲非常に多忙です。新聞の紀行も歸朝後でないととても書けぬ位です。ですからこの位長い手紙を書くのは大骨です。諸方へはがきを書く爲、睡眠時間をへらしてゐる位です。
もう當地は七月の暑さです。
九江にて池邊(本所の醫者)のオトさんに遇ひました二十年も日本で遇はぬ人に九江で遇ふとは不思議です。今は松竹活動寫眞の技師をしてゐます。
皆様御體御大切に願ひます。夜眠をさますとうちへ歸りたくなる。さやうなら

龍　之　介　拜

芥　川　皆　々　様

二伸　北京の山本へも手紙を出しました。伯母さんは注射を續けてゐますか。あんまり芝へばかり行つてゐると芝の子が可愛くなつてうちの子が可愛くなくなる。なるべくうちにゐなさい。

六四〇　〔六月六日支那から。繪端書、小島政二郎宛〕

今夜漢口を發して洛陽に向ふ、龍門の古佛既に目前にあるが如し然れども漢口に止る一週日、去るに臨んで多少の離愁あり
　白南風や大河の海豚啼き渡る

六月六日

六四一　〔六月十日支那から。端書、下島勲宛〕

やつと洛陽龍門の見物をすませました龍門は天下の壯觀です洛陽は碑林があるばかり城外には唯黄土の如き麥畑が續いてゐます支那もそろそろ陝西の戰爭がものになりさうです小生も御杖を食はない内に北京へ逃げて行く事にしました　以上

（コノ旅行は支那宿、支那馬車の苦しい旅行です）

六月十日　　　　　　　　　　河南鄭州　　我　鬼　生

六四二　〔六月十四日北京から。芥川道章宛〕

拜啓　北京着山本にあひました唯今支那各地動亂の兆あり餘り愚圖々々してゐると、歸れなくなる惧あれば北京見物すませ次第（大同府の石佛寺まで行き）直に山東へ出で濟南、泰山、曲阜、見物の上、青島より海路歸京の筈、滿洲朝鮮方面は一切今度は立ち寄らぬ事としましたその爲旅程は豫期の三分の二位にしかなりませぬが、やむを得ぬ事とあきらめます今度の旅（漢口より北京まで）は至つて運よく、宜昌行きを見合せると宜昌に掠奪起り、漢口を立てば武昌（漢口の川向う）に大暴動起り（その爲に王占元は部下千二百名を銃殺したと云ふ一件）すべて騷動が僕の後へ後へとまはつてゐますこれが前へ前へまはつたら、どんな目にあつたかわかりません體はその後ひき續き壯健この頃は支那の夏服を着て歩いてゐます支那の夏服はすつかり揃つて二十八圓故、安上りで便利ですしかも洋服より餘程涼しい北京は晝暑くても夜は涼しい所です六月末か遲くも七月初には歸れますからそれが樂しみです。漢口よりの本屆きましたかあれは運賃荷造り費共先拂ひ故よろしく願ひますまだ北京でも本を買ひます叔母さんにさう云つて下さい袋はとう

とう使はずじまひです。南京虫に食はるのなぞは當り前の事になつてしまひました。僕が東京へ歸る日は前以て電報を打つ故皆うちにゐられたし伯母さんもその日は芝へ行かずにゐられたし芝と云へば弟は眞面目に商賣をやつてゐますか　以上

六月十四日

芥川龍之介

芥川皆々樣

二伸　文子雜誌に何か書いた由諸所の日本人より聞き及びたれどまだ僕自身は讀まず惡い事ならねば叱りはせねど餘り奬勵もせぬ事とは存ぜられたし山本瑤子よりは芥川比呂志の方利巧さうなりもう立てるやうになりしや否や

六四三　〔六月二十一日支那から。繪端書、室生犀星宛〕

拜啓北京にある事三日旣に北京に惚れこみ候、僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり昨夜三慶園に戲を聽き歸途前門を過ぐれば門上弦月ありその景色何とも云へず北京の壯大に比ぶれば上海の如きは蠻市のみ

六四四　〔六月二十四日支那から。繪端書、芥川宛〕

ボク大同へ行かんとする所にストライキ起り汽車不通となる。やむを得ず北京に滯在、漢口より送りし本とどき候や否やこちらはもう眞夏なり、この手紙に返事出す事勿れ返事が來るには十日かかる十日たてばもう北京にゐない故に御座候　以上

〔裏に〕

下島先生より度々手紙頂き候お禮を申上下され度候

上海より村田君章氏の書を送つた由これ又とどき候事と存じ候

六四五　〔六月二十四日支那から。端書、瀧井孝作宛〕

北京は王城の地なり壯觀云ふべからず御府の畫の如き他に見難き神品多し目下大同の石佛寺に至らむとすれどストライキの爲汽車通ぜず北京の本屋をうろついてゐる　以上

二十四日

龍　之　介

六四六　〔六月二十四日支那から。繪端書、下島勳宛〕

度々御手紙ありがたう存じます僕目下支那服にて毎日東奔西走してゐます此處の御府の畫はすばらしいものです（文華殿の陳列品は脊弱）北京なら一二年留學しても好いと云ふ氣がします又本を買ひこみました

二十四日

北京　我　鬼

六四七　〔六月二十四日支那から。繪端書、中原虎雄宛〕

僕は今北京にゐます北京はさすがに王城の地です、僕は毎日支那服を着ては芝居まはりをしてゐます以上

六月二十四日

北京東單牌樓　芥川龍之介

六四八　〔六月二十七日（推定）支那から。繪端書、小穴隆一宛〕

花合歡に風吹くところ支那服を着つつわが行く姿を思へ

二科の小山と云ふ人に遇つた君と同鄉だと云つてゐた文華殿の畫は大した事なし、御府の畫にはすばらしいものがある畫のみならず支那を是非一度君に見せたい

二十七日

我鬼

六四九 〔七月十二日支那から。繪端書、南部修太郎宛〕

昨日君の令妹の御訪問をうけて恐縮したその時君の手紙も受取つた偉さうな事など云はずに勉強しろよ僕は近頃文壇とか小説とか云ふものと全然沒交渉に生活してゐる、さうして幸福に感じてゐる寫眞中書齋に於ける僕は美男に寫つてゐるから貸してやつても好い窓の所で寫したのは唐犬權兵衞の子分じみてゐるから貸すべからず　以上

六五〇 〔七月十二日支那から。繪端書、小穴隆一宛〕

天津へ來た此處は上海同樣蠻市だ北京が戀しくてたまらぬ

たそがれはかなしきものかはろばろと夷(えびす)の市に我は來にけり

此處にして心はかなし町行けどかの花合歡は見えがてぬかも

七月十二日

天津　我鬼

二伸　一週間後はもう東京にゐる

六五一 〔七月支那から。繪端書、齋藤貞吉宛〕

お前の手紙は英語のイデイオムを使ひたがる特色ありこは無きに若かざる特色なりされど亦お前を愛せしむる特色なり僕お前の手紙を讀んでお前が一層可愛くなつたお前を可愛がらぬ五郎は莫迦なり僕お前の所へ Chinese Profiles と云ふ本を忘れたりあの本紀行を書くには入用故東京市外田端四三五僕まで送つてくれ兎に角蕪湖でお前の世話になつた事は愉快に恩に着たき氣がする僕北京で腹下しの爲め又醫者にかかつた今夜歸國の程に上る一週間後はもう東京にゐるべしお前の健康を祈る北京で蟬の

聲をききお前を思ひ出した蕪湖には今もブタが横行してゐるだらうな何だかゴタゴタ書いたもう一度お前の健康を祈る僕のやうに腹下しをするなよ　さやうなら

天津　我　鬼

六五二　〔八月一日田端から。端書、中根駒十郎宛〕

少々御相談致したき事有之御足労ながら近々中に(なるべく夕方か夜分)拙宅まで御來駕なし下さるまじくや右とりあへず願上候　頓首

芥川龍之介

六五三　〔八月三日田端から。端書、南部修太郎宛〕

來ると云ふ日には何時でも在宅する。前に端書をよこし給へ。外へ出るのにまいつぴらだ。詳細に君の妹さんの話をするから、もう一枚寫眞をうつしてくれないか。毎日紀行書きにへこたれてゐる。

龍　之

六五四　〔八月三日田端から。小穴隆一宛〕

支那がへり我鬼は病みつゝ汝を待てり洗馬ゆかへらばとひ來ませすぐ
病めばまだ入谷もとはずこもり居り草の家にふる雨をききつつ
汝がために筆と墨とは買ひ來しもよきや惡しきやためしもまだせず

八月三日夜

夜來花庵主

一　游　亭　様

六五五　〔八月三日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　中央公論へ御話を頂く件につきもし筆記者をよこすとすれば何時がよろしく候や私まで御知らせ下さらば幸甚に候中央公論七月增刊號一册（八月號は未刊）さし上げ候大抵說苑の方小說よりも面白くそろ新宮の蒔繪檜扇共に人目を驚かし候次手ながら六角氏の文章も人目をおどろかしそろ　頓首

八月三日

芥川龍之介

香取先生　臺啓

六五六〔八月二十一日田端から。下島勳宛〕

拜啓　御宅に現代小說選集有之候節は使のものに御渡し下され度願上候それは井月句集の紙の事につきちと必要を生ぜしのに候　頓首

廿一日

芥川龍之介

空谷先生

六五七〔八月二十七日田端から。齋藤貞吉宛〕

床の上にこの頃わびしさ庭べの百日紅もちりそめにけり
心なき我と思ふな床の上に蟬を聞きつゝ晝もねむるに

八月二十七日

病　我　鬼

さいとういきち樣

二伸　あとは後便筆をもつのは面倒臭い故　支那紀行少し書いたもう見て居るだらう五郞のことももつと傷心せよ傷心はくすりなり

六五八〔九月二日田端から。下島勳宛〕

拜復　おすし頂き難有く御禮申上候昨日鎌倉へ參り虛子に會ひ題句をたのみ候所快諾いたしくれ候兩三日中に題句送る可き旨申し候間御休神下され度候猶句集の假名少々直し候上虛子の題句を得次第早速印刷にとりかかる可く右もよろしく御承知下され度候

夕立や鮎の鮨皆生きつべう

井月ぢや酒もて參れ鮎の鮨

九月二日　　了中庵主

空谷先生

六五九　〔九月七日田端から。端書、小穴隆一宛〕

二科御入選を祝し奉るそれから支那の岡持ち進上仕りたしひまの時とりに御出で下さる可く候日曜でない夜がよろしからむ

六六〇　〔九月八日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　原稿おくれがちにて恐縮仕ります電報料ばかりでも社の負擔がふえた訣ですしかし何分小生の胃腸直らずその爲痔まで病み出し床上に机を据ゑて書き居る次第この頃では瘦軀一層瘦せて蟷螂の如くなつてゐますそれ故上海游記と次の蘇杭游記との間に一週間息を入れさせて頂きます尤も原稿はその間にも送ります一週間ためた上御出し下されば好いのですそれから出版の件社から出す事になつたよし社から出れば賣れさう故結構です但し印税は本屋より安くはないですか本が安く出來、印税の率が安いと千部位の賣れ高の違ひは著者にとり同樣です病中原稿は出來なくてもこの位の欲心はあるものと御思ひ下さい虛吼先生は健在ですか

炎天に上りて消えぬ箕の埃

これは俳賢俳仙どもにほめられた句であります　頓首

九月八日　　我鬼

すゝき田様

二伸　おとぎ話（小生作）日曜附録に出なかつた由御迷惑ながらあの原稿小生まで御返送下さいあの原稿を百圓に買ふと云ふ編輯者が現れましたから

六六一　〔九月十三日田端から。下島勳宛〕

拜啓　虚子へ催促を出しましたが今以て題句をくれません故それだけは後に組ませる事としまづ原稿を刷らせてしまふ事にしました右一存にとり計らひました故あしからず御承知下さいこの旨參上の上申上ぐ可きの所この間の下痢以來痔と云ふものを知り恰も阿修羅百臂の刀刃一時に便門を裂くが如き目にあひ居り候へば書面にて御免蒙ります

秋風や尻ただれたる女郎蜘蛛

九月十三日　　了中庵主

空谷先生

六六二　〔九月十四日田端から。宛名破れたり。森林太郎、與謝野晶子宛（推定）〕

拜啓　明星御發刊のよしまづ御よろこびを申上げますそれから私をも同人の一人に御加へ下すつたよし御厚意難有く御禮申しますしかし明星は同人以上に執筆を許さない雜誌でせうかもしさもなくば私は同人の列に加はらずに寄稿したいと存じますと云ふのは私の我ままですが、どうも同人と云ふ名から生ずる束縛の感じが苦しいのですたとひ實際は自由であつても兎に角同人一人前の責任を持つのが苦しいのですいや責任は持たなくても責任のありさうな氣がする事がそれ自身もう苦しいのです私は

既にその點では大阪毎日新聞社員と云ふ、厄介な荷を背負つてゐますですからもうこの上にはたゞ可く氣樂にしてゐたいのですどうか幾重にも不悪この我儘を御恕し下さいさうしてもし同人以外の原稿も載せる時があれば私の作品を御加へ下さい私は現在四百四病一時に發し床上に呻吟してゐますそれ爲にこれも十分に文意をつくせたかどうかわかりませんどうかよろしく御判讀下さい　頓首

九月十四日　　芥川龍之介

六六三〔九月二十日田端から。佐佐木茂索宛〕

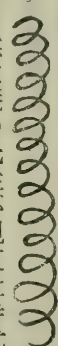
拜啓　君の手紙に返事を書かうと思ひながら今日までのびたり僕改造の爲に小説を書かせられたる故と知るべし但しそれも一日に十枚位書き飛ばす健筆自ら驚くべし尤も小説になつてゐるかどうかわからず

「母」は思ふに(三)悪し　女主人公が人の子供の死んで喜ぶ所をもつとアクションの上より書けばよろしからむかさうすれば中々悪短篇にあらず好短篇になる事受合ひない

上海紀行の諸體を兼備するはあゝする方が樂な故なり小説は坂路を下る如く紀行は平地を行くが如しあたり前に書いてゐては筆者最も退屈なり誤つて感心する事勿れ僕靜養の爲どこか温泉場へ參らむと思ふその上にて紀行を續け小説も少々書く氣なり

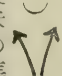
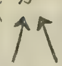
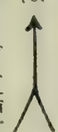
高說の如く中央公論の增刊號なぞよめば文壇沈滯の語も當らざるにあらざるに似たりあれは僕等出世の時より文壇に自由の精神なき故なりよき小説ならばよしと云ふなる程それに違ひござらんしかしよき小説ならばよしと云ふ人各そのよしと云ふ言葉を勝手に理解し居るを如何よき小説とはどんなものかぼんやりしてゐるならまだしもよし現在では各人が肚の底にリアリズムとかロマンティシズムとか人間味とか世帯味とかそれぞれ所謂よき小説に必要な條件を貯へて置いてそれへよき小説と云ふ一般的な言葉をかぶせてゐるないせんずる所莫迦の致す事なれど結果から見れば大山カンされそれより昔

の自然主義者が自然主義以外に小說がないやうな顔をした方がまだしもよし菊池の攻擊するのも尤もだよ但しこの際迷惑するものはまことによき小說ならばよしと致す事拙者の如き達人なり（コノ一段新聞ノ文藝欄ニ載ル位ナネウチアリト獨リ感服ス）

もう一つ名論を披露すべし文壇進まずとの非難はこんな理由より起るならん文壇もあらゆる進步の方則に洩れず  の進步をする故上下の關係を無視すれば又元の所へ還つたやうに見える自然主義の先生が硯友社時代へかへつたと云ふのはこの理由でござるこれは勿論非難する方が莫迦なり（1）

又文壇の進步はあらゆる進步の方則に洩れず  の進步をする故  の所もなき能はず但そこでも幾分かは上へ上へと向つてゐるなりそれを見ずに作家ばかりせめるのは批評家共の間違ひなり（2）

註に曰  の所卽ち new readings of Life の出でざる所なり

その外にまだもう一つ沈滯の理由ありそれは文壇人も人間故獨りなるはさびしき所から（マダイロイロ原因アランモコレガ大キナ原因ナリ少クトモ莫迦ノ雷同以外ニハ最大ノ原因ナリ）  なりしものが  なる傾向、更に甚しきは  なる傾向ある事なりその爲に文壇は同臭味の集りとなり易し（コレハ交際アル作家間ニカギラズ文壇全體ニツイテモ然リ）同臭味の集りとなる時は或曖昧なる view 文壇に跋扈する事となる、（イロンナモノヲ抱ク故）好い小說は好きが如きものなりされば自然 new readings of Life を拒絕する事となり  の狀態を永續させる事となるこは何時もさうなれど現代も亦左樣なり御用心御用心

小說を書けさうもなきは惡い事なり書けさうな氣になる工夫をすべしボクは書齋へとぢこもつてゐるとどうも氣持ちが振はなくなる卽僕には街頭に時々出る事が小說を書きたくなる所以なり君はその反對ならん反對ならば書齋へ立てこもるべし何とかのパロデイでも何でも滅茶々々によむべし社もやむ

たくばすつぽかすべし君の今までの小説にはまだ君が全部出てゐず全部出さへすればよろしいなり君は小説が書けさうな氣がしず從つて書かない一點をのぞき今の小説家の後塵を拜すべき人間にあらずそれを書きたがりつゝ書かずにゐるのは先生御謙遜もすぎたりと云ふべし一體拙者に云はすれば君は君の器を知らず、知らざるが故に尊重せずノンコウの茶碗を灰落しに使つてゐる趣あり僕が君ならば今の君の十倍位うぬぼれるさうして小説を書きながら古今東西の大家の作品をよみそのテクニイクをマスタアして行く。さうすれば何も畏怖心なぞに驅られる所はありやしない公平に考へて見給へ書けなければ君は書けない方が不思議ぢやないか

今日連日の雨晴れボク又小説を脱稿す神暢び氣悠哉これから菊池の所へでもちよいと出かけて見る心算也

西の田のもにふる時雨
東に澄める町のそら
二つ心のすべなさは
人間のみと思ひきや

これは三十男が斷腸の思を托せるものなり一唱三嘆せられたし

炎天に上りて消えぬ箕の埃

これは心境よろしきよし諸先生のおほめに預りし句なり同じく感涙御隨意たるべし　頓首

九月廿日　了中庵主

大芸先生

六六四 〔九月二十日田端から。端書、南部修太郎宛〕

二伸　君、ハムズンは大家だよ

拜啓君はまだ御在京にやボク四五日中に湯河原へ行かんと思ふ御同行如何但し外に伴れを誘ふ可らず僕閑靜を愛する故なり　以上

六六五　〔九月二十三日田端から。端書、南部修太郎宛〕

朶雲奉誦僕は二十七日か八日でないと出られぬその前二十四日にあひたい同日午後二時丸善に來られたし（二時より三時）

龍

六六六　〔九月二十三日田端から。久米正雄宛〕

拜啓　この間は手紙を難有うさて室賀文武氏儀この頃句集を出すにつき君の題句を請ひたい由至急一句小生まで御送り下さらないか題句者は君一人なりその後小生健康勝れず辟易の至廿七八日頃湯河原へでも行かうかと思つてゐる

人あり因に問ふ　如何か是藝術　我鬼先生答へて曰

あらあらし霞の中の山の襞

九月二十三日

龍之介

三汀詞宗　侍史

二伸　題句の件何分たのむ僕出かけて行けばよいのだが病體故御免蒙りたしちよいとはがきか何かへ書いてくれ　急々如律令

六六七　〔九月二十四日田端から。下島勳宛〕

拜啓　いちじく澤山に頂戴致し難有く御禮申上候

即興

これやこの子規のみことが痔をわぶとうまらに食せし白無花果ぞ
廿月も痔をし病めらば何にかへて食しけむものぞこれの無花果

頓首

九月廿四日

空谷先生

一、伸 院展ちよと覗き候へども碌な畫は無之、大觀、溪仙、浩一路、古徑などは僅に見るに足るべく候はむか それよりも美術協會の參考品に山雪の眞鶴の幅ならべあり候これは立派なものに候

六六八 （九月二十五日田端から。香取秀眞宛）

拜啓 たゞ今下島先生御光來中に候へども先生にも御來駕御高話拜聽の機を得させて頂けましきや右御願ひまで如斯に御座候 頓首

九月二十五日 芥川龍之介

香取先生

六六九 （九月二十六日田端から。端書、南部修太郎宛）

拜啓出發日廿八日の所卅日に御延期下さるまじくやごへんじなくば卅日と存候（汽車は十一時何分にや？）

六七〇 （九月二十六日田端から。端書、小穴隆一宛）

三十日に立ちますこの頃又元氣なし君の句「いろくづのあだじほ」敬服

荒々し霞の中の山の襞

六七一〔九月三十日田端から。恒藤恭宛〕

拜啓　先達は高著を難有うあの時の手紙に葉山から端書きを出した旨書いてあつたがその端書は來ないぜ僕は歸朝後健康がすぐれぬ爲もし君が葉山へでも來たら遊びがてら少し君と暮したいと思つてゐたのだだから君から何とも云つて來ない事をどうした事かと思つてゐた位だどうも支那で悪くした腹は容易に恢復しないらしい明日から當分の間相州湯河原へ湯治に參るつもりだ上海では君の兄さんに御飯の御馳走になつたり何かしたこの秋は京都へ老人達と一しよに參るかも知れない

九月三十日　　　　　　　　　　　　了中庵主

恒藤恭様

六七二〔九月三十日田端から。松本鈴吉宛〕

拜啓　度々御手紙難有ういつも早速御返事さし上ぐ可きのところ北京以來の腹下し未に恢復仕らず寝たり起きたり致し居候爲失禮ばかりしてゐます何事もずぼらの小生故不悪御寛恕下さい陳先生の書確に落手いろいろ難有うございましたなほ南宗書集一册さし上げますから何卒陳先生へ御屆け下さいそれから僕の枯木の圖御仕立ての由恐縮ながら嬉しく存じてゐますもう一度北京へ行つてその表裝を見たいが腹下しが少々恐しい君は北京に住みながらちつとも腹を下しませんか（僕のゐた内にやつたのは腹下しプロパアとは認めません此處に質問する腹下しとは二週間以上の腹下しであります）小生の紀行御よみ下さる由面白かつたら本社へ向けオモシロイオモシロイと電報を打つて下さい本社では旅行眼米國記も僕の紀行も同じだと思つてゐるやうですお松さんは健在ですか波多野君はやはり「紙上の建築」を樂しんでゐますか僕もこの頃書齋でも造らうかと思つて「紙上の建築」を時々試みてゐます

中野先生は相不變肥つてゐるでせうナ辻さんとは例の原稿の爲に二度書面を往復しました

ぬば玉の黑き扇に鼻をよせ、臭しと云ひし鎗吉なれは。
大寺の丹塗りの桷仰ぎつつ、餓了と云ひし鎗吉なれは。
初夏の夜をすがしみ、鎗吉は乃木將軍をほめやまずけり。
燕京に秋風立てば鎗吉も、白きズボンを脫ぎにけらずや。

乃木夫人を憶ふ

いにしへの賢き妻がいばりせし、狹山の小萩今かちるらむ。
鎗吉はますらをなれば聽戲にも、馬前撥水を愛すと云へり。
なれ故に無賴の客も燕京を、美しと見にきとなが妻に云へ。
なが妻をいまだ見ざれば禮（キヤ）のべむ、心甲斐なしとなが妻に云へ。

これは手紙代りに三十一字を並べたものと御思ひなさい今になると僕も山東を見なかつたのは心惜しい波多野先生によろしく　頓首

九月三十日　　芥川龍之介

松本鎗吉樣

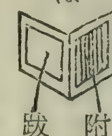
六七三　〔十月一日湯河原から。瀧井孝作宛〕

啓　今日湯河原へ參候井月の句集の事よろしく願上候誤字脫字を拾ふ事は下島先生にも出來得べく候べくも印刷上の習慣その他は全然君の受持ちに願ひたく候なほ念の爲申上候へども

一　附記は子持罫の枠（┓）をとり中にも罫を入れて印刷（▥）せられたし

二　跋は唯の線の枠を入れ（┐）中にも罫は入れずざつと題句の頁を散文にしたやうに印刷せられたし

三　附記の裏は裏白となるべければその場合はやはり┓の枠だけ入れ中の罫なしに印刷されたし從つ

て跋は別丁より起るものと思はれたし
四萬一附記の前の頁即附錄の最終の頁、白紙なる時は附記を前記の體裁通り其處へくむ事にせられた
しつまりその場合は


となるなり
その他は臨機の處置をおとり下され度候下島先生は時々白紙の共へ埋め草の詩或は詩歌など用ひんと云はれ候へどもさう云ふものは一切無用に願ひ候　校正は再校にて大抵了るべきか校了、要再校等の手續きも下島先生は不案内につき御面倒ながら君に願ひたし以上當用のみ

十月一日　　了中庵主

折柴先生

六七四　〔十月八日湯河原から。繪端書へ南部修太郎と寄書、室生犀星宛〕

南部と一しよにここへ來てゐます神經衰弱は中々根治しさうもありません仕事はせず、句を作つたり樂燒きを描いたりしてゐます樂の傑作が出來たらあなたにも一つ進上しますさうしたらコレクションの中へ入れて下さい昨日三彩がかつた物を試みました　頓首

十月八日　　湯河原中西內　芥川生

六七五　〔十月八日湯河原から。繪端書、瀧井孝作宛〕

井月の句集校正が出たらよろしく御面倒を見てくれ給へ僕健康ややよろしし但しまだ夢ばかり見てゐるこの頃新傾向の俳人となり句を作つた

　山に雲下りゐる赤らみ垂るゝ柿の葉

竹むら夕べの澄み峡路透る
家鴨ま白に倚る石垣の乾き
どうだ中々うまいだらう

六七六　（十月九日湯河原から。繪端書、佐佐木茂索宛）

南部と一しよに湯河原に來てゐる南部と如何に消光してゐるかといふに御察しを乞ふ僕神經衰弱ならず無暗に何か書きたくて困る君の一大議論なるもの見たし切拔き持つて來るか送つてくれるかしたいか

山に雲下りゐ、赤らみ垂るる柿の葉
竹むら夕べの澄み、峡路透る

六七七　（十月十日湯河原から。繪端書、齋藤貞吉宛）

その後引つゞき病氣のため湯河原へ湯治に來て居ます僕は元來筆不精の處病氣になつた爲音信甚だ怠けてすまないが勘忍して呉れ給へ　頓首

十月十日　　　　　　　　龍

吾を待つと小夜のハルクに立ちわびし汝を思ひかなしむ吾は
押し照るや月を愛しみ吾と共に草路を行きし貞吉なれば

お前の文章をよんだどうも難有うあれは中々うまい御世辭でも何でもなく中々うまいお前は新聞記者になつても飯が食へるちよいと感服した

六七八　（十月十日湯河原から。繪端書、南部修太郎と寄書、小島政二郎宛）

遊びに來ませんか僕は毎日南部先生の教訓を受けてゐます君も來て薫陶を受けるともつと偉くなるでせう僕はこの頃新傾向の俳人になりました

山に雲下りゐ、赤らみ垂るる柹の葉。

竹むら夕べの澄み峽路透る

以上

我鬼生

〔裏に〕

南部修太郎を句にしました

大いなる帽子野分に黑かりし

六七九　〔十月十一日湯河原から。端書、友常寺一宛〕

御手紙拜見しました私は今當地へ靜養に來てゐます士稿支那旅行以來の病氣の爲未に拜見の機會を得ません體も丈夫になり小閑も得たら拜見したいと思つてゐますあなたの御手紙は大へん好い黃半紙を使つてゐますねあんな紙は東京には稀れです大事に御使ひなさい　頓首

十月十一日

六八〇　〔十月十二日湯河原から。繪端書、塚本八洲宛〕

毎日湯にはひつたり本をよんだりしてくらしてゐます體は大體好いやうです唯神經衰弱が癒らないのに困つてゐますこちらは今日やつと日の目を見ました柹はやや赤らみ蜜柑はまだまつ靑です今山の方へ散歩に行つて歸つて來ました　頓首

中西內　我　鬼

かぎろひの夕澄み渡る薄明り靑垣山はなかぞらに見ゆ

コレハ實景デス景色ハ中々ヨロシイ

六八一　〔十月十二日湯河原から。繪端書、香取秀眞宛〕

拜啓毎日湯にひたつてゐます甚泰平です但神經衰弱は容易に癒りさうにも思はれません暇つぶしに畫を描いたり樂燒を試みたりしてゐます樂燒の一輪ざしなぞは琅玕洞に出品すればまづ安くとも二十七圓五十錢位ですナ　頓首

　世の中のおろかのひとり白がやける樂の茶碗に茶をたうべ居り

　世の中のおろかのひとり翁さび念佛すと思へ湯壺の中に

我鬼

六八二　〔十年(推定)十月十三日湯河原から。繪端書、小穴隆一宛〕

「ホラ、アンナニ水ガ流レテルネ、赤イ花ガ、オヤ　鷄ガカケテキマシタ岩ガ澤山アルネエ」——これは廊下に母親の子供をだましてゐる言葉です實際の景色は室内の僕には見えません唯これを聞いてゐると僕の想像には奇體な風景畫が浮かびます御なぐさみ迄に　頓首

六八三　〔十月十六日湯河原から。繪端書、小穴隆一宛〕

紙どうもありがたう僕その後おひおひ健康恢復、但しまだ安眠出來ぬのに苦しみ居ります仕事は全然せず唯秋の深くなる山色を眺めてゐるばかり湯河原の主よりもよろしくとの事　頓首

六八四　〔十月二十日田端から。松岡讓宛〕

冠省高著難有く存候表紙の荒磯おもしろく金を貼りたるにも似合ひ候中はまだ拜見いたさねど二老人

赤頭巾、御連枝など今よみても上々の作かと存居候但し題名の地獄の門は如何にや小生の趣味には少しいかめしすぎるやうに御座候又この前の「九官鳥」のやうに御禮を出しそびれると悪いと存じとりあへずこの狀相認め候　頓首

十月廿日　　芥川龍之介

松岡讓樣　侍史

六八五　〔十月三十一日田端から。下島勳宛〕

先程は結構なる柹を澤山ありがたうございました

君がたぶ十あまり五つの甘し柹あな尊とぞこやりつゝ見る
君がたぶ十あまりの柹赤ければ赤きをめでて食しがてぬかも
この柹のなり居るところ山川の水を淸しと人住むらんか
君がたぶ柹のこゝだく枕べに赤きを見ればものも思はず
柹の實を畫に描くべくは黃と赤と墨とを融きて描くべかりけり
そがひなるあるはもろむく柹の實のみながら赤く照りにけるかも
ひとり見ても嬉しき柹の甘柹のここだ赤きを母と二人見つ
柹の實の赤きにしるき山國の秋を懷しみくへど飽かぬかも
建御名方神の命も柹食ふと十握の劍捨てたまひけむ

思ふ事を皆歌にしました御笑ひ下さい　それから神經が昂つてゐて睡りにくくて困ります睡られる御藥を少し頂けますまいか熱も少々はあるやうです　頓首

十月卅一日　　病我鬼

空谷先生　梧右

六八六　〔十一月四日田端から。下島勳宛〕

拜啓御使難有く存候御本確に落手それぞれへわけつかはす可く候なほ昨日香取先生の御宅へ參上委細よろしく申上候間左樣御承知下され度候右とりあへず當用のみ　頓首

　井月の句集成る

月の夜の落栗拾ひ盡しけり

　十一月四日朝　　　　　　　　　　了中庵主

空谷先生　梧右

六八七　〔十一月十日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓　別封原稿、時事の文藝欄の一隅に御掲載下さるやう歎願します著者及この文の作者に頼まれたのですどうかよろしく御取り計らひ下さい　頓首

自轉車にまたがる男ペダルふまずまむかひに坂をひた下し來る

車ひき車ひきつつ自が頸に古肩掛の毛布かけたり

　十一月十日　　　　　　　　　　芥川龍之介

笹木さま　まゐる

六八八　〔十一月十五日田端から。池崎忠孝宛〕

拜啓　君の著書に感心した點

一、文章のうまい事、これはうますぎる所もあり

二、事業から人を觀ずる上に犀利の眼光を感ずる事少からず憲法を論ずる章の如きこの例に擧げるの

は平凡なり三經疏の制作の章の如き短しと雖も及び難し

三、時代の理解に略憾なきことこれは容易さうにしてしかも中々むづかしき事なり我等が或時代を再現する際、その現代と共通なる部分は彷彿するに難からずたとへばジヤン・ダアクの降神は必しも再現に苦しまざらんされどコペルニクスの地動説を知らざる事中世の民の如くなるを得るや否や、君は兎も角推古朝の民の如く女帝の即位に驚くを得たり感心せざるを得ざる所以ならずや

右亂筆御判讀を乞ふ君と大阪に別れしより引き續き僕病床にあり高著の御禮の遲れし所以平に御寛恕あらむ事を乞ふ

讀太子所行讃

秋風にゆらぐや蓮の花一つ

十一月十五日　芥川龍之介

池崎忠孝様

六八九　〔十一月十六日田端から。端書、南部修太郎宛〕

拜復高著ありがたう「接吻」よろし、集中の佳作ならん、小生新年號に忙殺されつゝあり、當分どこへも出かけられない右とりあへず御返事まで　頓首

芥川生

六九〇　〔十一月二十一日田端から。下島勳宛〕

みすゞ刈る科野の國の大玉菜ふたつたびたる君はうれしも
みすず刈る科野の國に西洋の玉菜いつより作りそめけむ

十一月廿一日　了中庵主

室谷仁兄　侍史

六九一　〔十一月二十四日田端から。薄田淳介宛〕

拜啓　度々御世話をかけまして申訣ありませんどうも支那旅行の爲文債をのばして行つたのとその後體のわるい爲もろ〳〵の雜誌編輯者より原稿をよこせ〳〵とせめられ病軀その任にたへず實際へこたれ切つてゐます仰ぎ願くは新年號を退治するまで御待ち下さるやう願ひますその代り今度始めたら中絶しませんこの頃神經衰弱甚しく催眠藥なしには一睡も出來ぬ次第、窮狀幾重にも御寛恕下さい右歎願狀まで　なほ旅費の概算表は今日會計部へさし出しました　頓首

十一月廿四日　芥川龍之介

薄田淳介様

六九二　〔十一月二十五日田端から。佐佐木茂索宛〕

敬啓　井月の原稿は讀賣へまはしたいろ〳〵御手數難有うそれから人間十一月號僕の所へ來らず（又郵便局泥棒か）その爲君の小說、今日醫者の所にて一讀過、但順番を待つ間なりし故隨筆までよむに至らず衷懷は書きなぐりと號すれども書きなぐりならざるべし僕は「翅鳥」「その死次の死」よりもよろしと思ふ君自身大いに謙遜してゐたせゐか、それだけ感服の度を增したのかも知れぬあの淡々たる局所に徹すれば君自身の甘露門に入るべし唯難を云へば最後の一節利きすぎる憾あり普通の短篇ならばあの程度のエッフエを要せんも衷懷はもつと悠々とあけつぱなしにした方よからむと思ふそれから前三分の一程の會話にはやや氣取りすぎたる感を催す、如何、僕近々瀧田樗陰に衷懷を一讀させむと思ふすでにあの一篇を書く力あり妄に胡亂の作をなす事勿れ

流蘇女史草堂へ來ると云ふ相成る可くは十二月になつてからに願ひたし十二月も十日過ぎならば猶更

よろし僕小說四つ書かむとす目下やむを得ぬ義理客の外御免を蒙り居る次第窮狀よろしく御察しを乞ふ蕭索たる賣文生涯、女學士の光臨を謝するに至つては我鬼先生苦笑の外なしと知るべし　これから又短篇「將軍」の製にとりかかる　さやうなら

十一月廿五日　　了中庵主

大芸先生侍史

六九三　〔十一月二十六日田端から。井上康文宛〕

拜啓　御返事が遲れて申訣ありません唯今新年號や何かの爲多忙を極めてゐる祟です又わざ〳〵御出の所留守にてこれもお氣の毒に存じてゐます童話選集の件拜承しましたあなたが選をなさる、あなたの知人が御出版になる、それだけはわかりましたしかし私或は我々とその出版書肆の關係はどうなるのですかこれが新しい村の爲に本を出すか誰かの病氣見舞に本を出すとか云ふのならばわかりますしかし童話選集の場合はその誰の爲にするのかが判然しませんその邊をはつきりさせて頂けば好都合です但し私の童話の中からどれでも一篇さし上げる事があなたの御便利になるのならばどうか自由に御選擇下さいみんなあまり子供むきのしない童話のやうな氣がしますがあなたはきつとその中から適當な物を御選び下さる事と思ひます右とりあへず——遲れてあまりとりあへずでもありませんが當用のみ　頓首

十一月廿六日　　芥川龍之介

井上康文樣

六九四　〔十二月一日田端から。佐佐木茂索宛〕

啓今日又御醫者の所にて君の隨筆をよむあの中の恩人云々の所、もし一分でも僕の事を考へて書いて

ゐるのなら（斯く申すは小生が恩を着せた覺えなければない）以後そんな事を考ふべからずそんな事を考へるよい女の一人でも取持つべし僕この頃やたらに原稿を書かされて何かしら書く事のあるのが不思議な位なりその間に讀書もする讀む間のあるのも不思議な位なり讀むといへばこの間渡邊與茂平先生が來て今代の活字本しか讀まぬ事を痛歎して居た僕も活字本しか讀まないが御つきあひに痛歎して置いた與茂平は行年二十一歳だが中々見上げた學者だね長崎史の通はさる事ながら歌俳の事にも精しい男だよあゝ云ふ人間がゐるのだから古瓦樓主人なども しつかりせぬといかん件の小說の結末獨合點なりと菊池云ふ由多少その氣味もあるか知れぬ一體僕は小說を書く時獨合點になりはせぬかなりはせぬかと思つて書くそれでも獨合點になる事あり（勿論駄目を押しすぎる事もあり）菊池などの小說にはそんな所見えず思ふに氣質の相違なるべし菊池の評語を聞き君も獨り合點組かなと思ひし故辯ずる事然り

この頃一句

秋の日や榎の梢の片靡き

十二月一日　　了中庵主

大芸先生　蒲下

一伸三汀作心中後日譚は僕天下に先立つて之を認めたり菊池、山本、何れも僕の烱眼に及はず

六九五　〔十二月二日田端から。小穴隆一宛〕

啓　その後親戚のごた〳〵燃ひろごり新年號の原稿と共に愈小生を多忙になし居り候この頃睡眠は不足食慾は減退、憐むべき狀態なり井月の短尺目つかりしや否や井月は木曾へは少くも三度行つてゐるよし探がせばきつと何處かにあるべし

元日や手を洗ひ居る夕心

秋の日や榎の梢の片靡き

いづれ入谷尊老に叱られる句か今日中央公論の〆切なりこれにて擱筆、勉強し給へ
それから何か欲しいものあらば遠慮なしに申越されたし女房に命じ直に送らせる事とする故

河童の畫に

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはち見ゆる禿のあたま

頓首

臘初二　　了中庵主

二伸君の句「山鷄のかすみ」「木枯に山さへ」「手拭を腰にはさめる」三句うまいと思ふ

一游亭先生　蒲下

六九六　〔十二月三日田端から。瀧井孝作宛〕

啓　君の所に参りをる珍本全集中笠志船物語と云ふものありあの話の作者は村田春海にやあるひは橘千蔭なりやちよいとしらせてくれ給へ手紙にてもよろし小生今日の午後はよその婚禮に行く故るすなり但し今夜までに作者の名知りたし　頓首

臘初三　　了中庵主

折柴先生　蒲下

六九七　〔十二月十七日田端から。友常幸一宛〕

拜啓　あなたの原稿確に落手しました私の作品に厚意を持つて下さる事を感謝します唯目下の私は引續き新年號の創作に忙殺されてゐるので年内には原稿を拜見する時間がないかも知れませんそれでもよかつたら拜見します若し御都合がわるかつたら御返送しますこの手紙もとうに書く可き所毎日原稿

用紙に向ひ合つてゐる爲つい今日までのび〳〵になりましたその點は不悪御寛恕下さい右當用のみ頓首

十二月十七日朝

芥川龍之介

友常幸一様

六九八　〔十二月二十四日田端から。佐佐木房宛〕

拜啓　來る十二月廿九日午後四時より拙宅に小集を開きますが御出席下さいませんか小說家はあなたと菊池寛と僕とだけですあとは山本鼎小杉未醒などの畫かきとなりの鑄物師香取秀眞などです總勢あなた共五六人、至極無事な會ですどうか萬障御繰合せの上御出席下さい當方ではもう當てにしてゐます　頓首

十二月廿四日

芥川龍之介

大橋房子様　粧次

二伸　御面倒ながら御出席の旨御返事下されば好都合です

六九九　〔十二月二十八日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　鹿島先生の御住所は田端何番地にや御敎へ下され度願上候それから鹿島先生の名は龍藏だつたと思ひ候へ共これも間違ひ無之候や次手を以て伺ひ上候

新年の句一つ

元日や手を洗ひ居る夕心

十二月廿八日

芥川龍之介

香取先生

大正十一年

七〇〇〔一月十三日田端から。渡邊庫輔宛〕

冠省　先達は失禮しましたそれからカステラを難有う手紙も難有うその後小生は風を引いたり原稿を書くのに追はれたりしてつい御禮狀を出すのが遲くなりました尤も元來筆無精だから特別な事情がなくとも怠り勝ちなのですどうかなる可く怒らずに下さい　今日は御惠送の長崎新聞落手あなたの序文を拜見しましたあなたはわたくしと書きますね小生はあなたの說通り小說の中の一人稱はわたしとする事にきめてしまひました　それからこの間新小說の編輯人が切支丹文明の事につき筆者の相談に來ましたから林若樹氏や何かと一しよにあなたを推しましたどうか暇があつたら何か書いてやつて下さい但し林氏なぞは個人的に知らないから煽動、あなたは知つてゐるから紹介した事になるのです　明星に觀潮樓主人の奈良五十首が出てゐるのを讀みましたか五十首とも大抵まづいですねこの春京都にしばらくゐた後長崎へ行きたいと思ひますそれまでに何かゆつくり小說を書きたい新年の小說は皆不出來です　蒲原君にもよろしく

一月十三日　　我　鬼　生

渡邊與茂平樣

二伸　この歌わかりますかあらたまの中の歌です

あらはれむことは悲しもたまきはる命のうちに我はいふべし

七〇一〔一月十四日田端から。下島勳宛〕

拜啓　昨日は失禮致候宇野浩二と申す男あんな艶情小説を書きながら陰鬱な顏をしてゐる處幾分は御座興になりしかと存居候それからちと調べたき儀有之候間馬琴の歳事記御貸し下さる間敷候や（小生の歳事記にては無之候）使のものに御渡し下され候はゞ幸甚に存候右御願ひまで如斯候　匆々

十四日　　我　鬼　拜

空　谷　先　生　侍史

二伸

時雨るゝや文衡山もちろり酒

七〇二　（一月十九日田端から。渡邊庫輔宛）

冠省　新小説へ御執筆下されし由今日も編輯者まゐり大よろこび　「戯作三昧」に關する高説拜承僕の馬琴は唯僕の心もちを描かむ爲に馬琴を假りたものと思はれたし西洋の小説にもこの類のもの少からずさう云ふ試みも惡しからずと思ふ但しそれでも事實を曲ぐるは不可となれば又辯ずべきものもあらむなほ現在の僕は短歌も俳句も男兒一生の事業とするに足らぬものとは思ひ居らず

爾來「わたし」御用ひのよし珍重、文章の道豈そんな事に遠慮の入るものならむや鷗外の「わたくし」非か與茂平の「わたし」是か棒喝の間に決する位な意氣ごみを持たれても然るべしと思ふ長崎へ參るは早くも四月中旬なり尤も大した御心配には及ばずやど屋住ひにても差支へなし唯俗客來らず骨董屋でもひやかす餘裕あれば結構なり

今日天陰閑庭所々殘雪擁爐閑書心意蕭索君も實に身體と云はず君自身を大切になされたし大器を粗末にとり扱ふのは天に罪を得る所以なる可く候　頓首

一月十九日　　我　鬼

渡　邊　先　生　蒲下

二仲茂吉の歌わかるのなら御教示を乞ふ僕には曖昧模糊たるものなり（あらはれむ事は悲しも云々の歌）

七〇三　〔一月二十日田端から。端書、佐佐木忠一宛〕

拝啓先達は失禮いたし候さて田端に雲泉、直入、鐵心なぞ一見いたしたしと申すもの有之候へども右三幅小生宅まで至急御持参下さるまじく候やなほ外にも頃合ひの品有之候節は御持参願上候　以上
（イッカンシハ小生少シホシイノナリ）

七〇四　〔一月二十一日田端から。佐佐木茂索宛〕

拝啓　いきどほり消えしよし結構なり平生心にさへなればどんな事をしても後悔少かる可く候　若冲の畫評判よろしく我鬼先生大得意なり　けふ天眞堂主人の來駕を請ひ自笑軒主人雲泉一幅を購ひ候鐵心先生は百三十圓のよしもちろん買ふのを見合せたり　紀行文を書く事面倒にて閉口、茶を喫し香を炷き、若冲の畫を見て溫然と消光したし

　　となりのいもじ秀眞にあたふる書

若冲の木兎の畫見に來久方の雪茶を煮つゝわが待つらくに

　二十一日　　芥川龍之介

大芸　先生

七〇五　〔一月（推定）田端から。佐佐木茂索宛〕

拝啓例の件その後如何相成候や次に大橋房子氏へ本を貰つた禮出さむと思ひ候へど所わすれ候お敎へ下されたく願ひ上げ候　頓首

七〇六 〔一月二十一日田端から。佐佐木房宛〕

拝啓 おとぎばなしの本ありがたうもつと早く御禮を申上げる筈のところ風をひきのどを腫らした爲遲れましたごめんなさい

ベテレヘムの宿よみをれば大人われも心なごみ來るを君につげなむ

頓首

一月二十一日

芥川龍之介

大橋房子様 粧次

二伸 日曜でもおあそびにおいで下されたく候

七〇七 〔一月二十一日田端から。小穴隆一宛〕

拝啓 足の傷よりバイキンはひりし由僕の先見明かなるに感服いたされ候事と存候但し無理に雪中我鬼窟まで御出の祟りならばお氣の毒にたへず候夜半亭の屛風望みかなはざるよしせんなき事なり屛風などはどうでもよろしければ足の傷の手當て肝要になさる可く候屛風もいろいろお骨折りは難有く存じ奉り候若冲眞物まぎれあらざるよし秀眞容谷兩老人いづれも耳木兎に敬禮いたされ候件にもらひし墨臺秀眞老人に見せし所、面の龍は蠟型にとりしもの、壞れしやうなるは鑄し時の失敗、支那の模倣にてはたく日本人の工夫、時代は德川末期のよし判明さすがに專門家は詳しきものと存じ候くれぐれも足の手あて怠るべからず怠ると跛になる 頓首

一月廿一日

澄江堂主人

一游亭先生 侍史

七〇八　〔十一年(推定)一月二十四日田端から。山本有三宛〕

拜啓　松山敏氏を御紹介申上候松山氏は金星堂出版部の人なれど銀皿同人にして詩人兼小說家なりななみの出版業者と御同一視なさらず特別に御引見の上御便宜御取計らひ下され度願上候　頓首

二十四日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

山本勇三様

七〇九　〔一月二十七日田端から。端書、小穴隆一宛〕

啓　講演の加勢をたのまれ、二三日名古やへ參り日曜日は留守にいたす筈故御出無用この間半截二枚出され一枚河童をかきあと一枚書くものなく閉口中忽トンボを思ひ出し二匹かいた のところ中々うまくまゐり候　以上

七一〇　〔二月一日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　おひまならばちよいとお出で下さるまじく候や唯今人參り居りその人かけ物二三幅持ち居り候右當用まで　頓首

二月一日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

香取先生

七一一　〔二月十日田端から。薄田淳介宛〕

啓菊池の病氣や何かの爲江南游記掉尾の原稿遲滯を來たし御氣の毒に存じますさて同游記も廿九回を以て一段落つきましたが今度は長江游記へとりかかる前に一週間程息つぎをしますしますといふより

させて下さい一日四五枚書きつづけるのは中々樂ぢやありませんしかし讀者退屈とあらば何時までも延期してよろしい當方の考へでは長江游記、湖北游記、河南游記、北京游記、大同游記とさきが遼遠故これからはあまり油を賣らず一游記五囘乃至十囘で進行したいと思つてゐます　以上

二月十日　芥川龍之介

薄田淳介様

二伸　四百金難有く頂戴　丁度拙宅へ泥棒はひり外套二着マント一着コオト一着帽子三つ盗まれた爲早速入用が出來ました　あれは大阪から來た泥棒かも知れない

七一二　〔二月十六日田端から。佐佐木茂索宛〕

拜啓　その後ボクも大芸先生にかぶれ今夜一夜に小說一篇を作つた例の爲に大觀へのせるつもり、君も僕に小說を書かせる位何とも思はず中央公論向きの小說一篇草しては如何　それから今度の日曜以後何時でも午前中に篁芸先生の御來臨を請つてくれないか書畫何にてもあらば持つて來て見せて頂くも結構なり

伯母の云ふ

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

二月十六日　澄江堂主

大芸先生

七一三　〔二月十八日田端から。薄田淳介宛〕

冠省度々御手紙いたゞき申訣無之候サンデイの小說は必書くべく候間御休神下され度候支那紀行も廬山まで書き居り、これも書き續けたく存候へども何分にも健康すぐれず、少し暖かにでも相成り候

はゞ書き續けむと存居候この頃雜誌にも小說を書かず舊稿に手を入れたる位にてお茶を濁し居る始末、借金いやが上相殖え結局氣樂には相成候ものの蕭條たる氣もいたす事は事實に候目下病むところ第一胃、第二腸、第三頭、第四心臟、四五日中に又どこか湯治場へでも參らむと存居候　とりあへず御返事まで

　冬の日や障子をかする竹の影

　　春を待つ

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

二月十八日　　　芥川龍之介

薄田淳介様

七一四

（二月二十三日（推定）田端から。佐佐木茂索宛。封筒に田端御ぞんじよりとあり）

〔我鬼先生散策圖（插畫參照）あり〕

あすとらかんの帽子を買ひ散策する所この畫の如し御笑覽に呈すと云爾

二月二十三日　　澄江堂主人

大芸居御主人　座右



七一五 〔二月二十六日田端から。渡邊庫輔宛〕

拜啓 その後御壯健の事と存じますけふとなりの香取先生と話してゐたらあなたの事が出たついでに左記の件御存知ならば高教を請ひたいと云ふ事でした

一、いつか永見氏が脚本にかいた鑄物師(踏繪を造つた男)に羅馬へ行つたのがあつたやうですがあの男の姓名鄕貫並びに年代

二、長崎の人(?)に御花入屋閑入と云ふ鑄物師あり(江戸へ出た人)その男肥前長崎東上山春德寺に慶安三庚寅七月十一日云々の銘ある作品をさめしよしその作品とは鐘か燈籠か又今も存してゐるかもし見る事を得ばその銘文も全部見たいと云ふ事です右二件香取先生の爲御報知下さらば幸甚です御調べになるのが面倒ならやむを得ませぬが、まだ新小説のあなたの文をよんでゐぬ故これぎりにします僕も丸山に鶴の前を捧べたい 頓首

二月二十六日 芥川龍之介

渡邊庫輔樣 侍史

二伸 この頃句を少し作りました その中に

伯母の云ふ

薄綿はのばしかねたる霜夜かな 癡我鬼

七一六 〔二月田端から。下島勳宛。封筒に「二月何日カ一寸ワカリマセン澄江堂主人」とあり〕

拜啓 今日北原樣と御光來下さる由生憎今日は芝へ參る事となり居り候間明後日に御延期なし下さるまじく候や昨日小穴參り候爲北原樣の御厚意に甘え蕃平を一見せしめ候所一方ならず感佩小生も大に

うれしくなり候かたがた是非とも兩先生と蓬平談も試みたく候へば明後日は午後にても夜にてもよろしく候間ひとへに御光來祈上げ候　以上

名古屋道中
風澄むや小松片照る山のかげ

芥川龍之介

空谷先生　侍史

七一七　〔三月十日田端から。小穴隆一宛〕

けふは八日なり君の畫を搬入するは今日ならむ入選の有無は君の知る所にあらず審査員の賢愚による所なれども入選するにこした事なし遙かに吉左右を祈り奉る僕今日愚にもつかぬ芝居を見、その評判をいたさねばならず甚不ゆくわいなり中央公論改造等の小說いづれもまだ出來ずこれまた不愉快なり　頓首

三月八日、午前

澄江堂主人

一游亭先生

二伸
春雨に濡れ細りたる插木かな
この手紙出しおくれ、今日となる今日雨蕭々たり　頓首

十日

我鬼

七一八　〔三月十四日田端から。山宮允宛〕

拜啓　この手紙持參者は小生の從姉の息子に有之中島汀と申し候この度六高の入學試驗を受ける事と

相成候間何かと大兄の御厄介に相成る事も有之る可くその節は何分よろしく御ひきまはし下され度願上候小生その後多病の爲懸疎懶加はりどちらさまへも御無沙汰に相成居候段不悪御ゆるし下され度候その内一度岡山へも參り(未見の地故)大兄にも拜晤したく存じ居候　頓首

三月十四日　　　芥川龍之介

山宮允様

七一九〔三月十九日田端から。齋藤貞吉宛〕

お前は筆不精だと云ふがね僕は東京にゐると家に居る時間の大部分原稿紙に何か書かされるのだその外に筆を持つ苦しさは到底お前の想像するやうなものぢやない僕は漢口の人に二十回、福田君に三回借りてゐるし、島津君村田君にも何一つ御禮をしずにある甚良心に咎めるのだが病つゞきと多忙のため果さないよろしく察して吳れ本もその内送る諸方の義理もその内すませる、それからブロオカア宮崎氏は何と云ふ名だね？　名なしの宮崎ぢあ本も送れない今日から長江游記を書き出した第一回は西村貞吉と云ふ題だからそのつもりでゐろ東京は春暖梅白去つて桃紅來つてゐる又支那へ行きたくなつたが金がないこれだけ書くのでも大變なのだ僕はお前のレタア・ライテイングのキアパシテイには驚いてゐるレタア・ライテイングの本ばかり出す出版やへ紹介してやらうか僕は返事をかかされるのが嫌だからこの頃は來る手紙の封も切らないさういふ手紙が木鉢に一ぱいあるのだ但しお前の手紙はちあんと拜見してゐる感心だらう返事をかくのは面倒だがお前の手紙を見るのは愉快なのだ又一月程たつたら手紙を出す　頓首

芥川龍之介

齋藤貞吉様

二伸　年賀狀は僕は出さない方針なのだよ來年はもつと積極的に「私は年賀狀を出しませんあなたもおよしなさい」と云ふのを出す氣だ

Last but not least（コレハ西村流ナリ）お前の不幸をいたむ但しあんな手紙は貰ひたくない暗澹たる氣が傳染していかん下の句あの手紙を見た時作つたのだ

悼亡

靜かさに堪へず散りけり夏椿

夏椿は沙羅の異名と知るべし

七二〇〔三月十九日田端から。香取秀眞宛。封筒に椎の本石誡呂とあり〕

拜啓　中央公論おんめにかけ候小生の歌は平福、安田兩先生などと比べずに谷崎、田山兩先生と御比べ下され度その方小説家同志故公平に候句は虚子と比べられてもよろしく候なほ別紙渡邊より參り候間さし上げ候　頓首

十九日朝

芥川龍之介

香取先生

七二一〔三月二十二日田端から。山口貞亮宛〕

拜啓　その後御變りもない事と存候さて小生の所へたよつて參りたる田舍青年あり就職口をさがし居り候へども御店に使つて頂くわけには參らず候や年二十五、神奈川縣人、學歴は小學校だけ、機敏と云ふ訣には參らねども正直にして善良なる事は小生の保證する所なり體は丈夫故算筆の外にも勞役出來可く候唯夜だけにても暇ある事必要の由、すでに妻子あれば勿論通勤するわけに候何とか口の御周旋を賜らば幸甚につき右御願申上候　但しこの青年は過日申上候書生の件とは別に候　頓首

三月二十二日

芥川龍之介

山口貞亮様

七二二 〔十一年(推定)三月二十三日田端から。香取秀眞宛〕

冠省今朝野上氏より同封の手紙參り候間御めにかけ候菊池よりはまだ返事參らず候唯今伯母子供等病氣早く暖くなればよいと念じ居り候

この頃

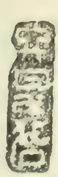
竹の芽も茜さしたる彼岸かな

二十三日　　芥川龍之介

香取先生 侍史

七二三 〔三月二十六日田端から。香取秀眞宛。封筒に椎本石麻呂とあり〕

拝啓　この頃左の印を得ましたが鳳鳴岐は讀めるのですがもう一つのは讀めないのです何哉ですか教へて頂ければ幸甚です又小さい印の中細長い○印○石とか云ふ○印の中も教へて頂ければ幸甚です





作者は皆藏六です　頓首

三月二十六日　　芥川龍之介

七二四　〔三月二十六日田端から。佐佐木忠一宛〕

拜啓　その後無恙御消光の事と存候さてこの頃石印兩三顆手に入れ候につき御鑑裁を經たく存居候へども近々御來駕下さるまじく候や當方より參上致す可きの所何分にも煉瓦程の石印につき途中難澁に候間手前勝手を申上ぐる次第に御座候右とりあへず當用のみ如斯に御座候　頓首

三月廿六日　芥川龍之介

篁芸先生　侍史
　○○○

二伸四月一日は在宅しませぬ

七二五　〔三月三十一日田端から。塚本八洲宛〕

拜啓　その後皆様御變りもありませんかお祖母様の御病氣は如何ですか今度ちと御祖母様に伺ひたい事があるのにつき、參上する心算でゐましたが、何か忙しい爲上れさうもありません故この手紙を書く事にしましたどうか下の三項につき御祖母様に伺つた上二三日中に御返事をして下さい

(一)明治元年五月十四日(上野戰爭の前日)はやはり雨天だつたでせうか

(二)雨天でないにしてもあの時分は雨降りつづきだつたやうに書いてありますが、上野界隈の町人たちが田舍の方へ落ちるのにはどう云ふ服裝をしてゐたでせう？　殊に私の知りたいのは足拵へです足駄、草鞋、結ひ付け草履、裸足、等の中どれが一番多かつたでせう？

(三)上野界隈、今日で云へば伊藤松坂あたりから三橋へかけた町家の人々は遲くも戰爭の前日には避難した事と思ひますがこれは間違ひありますまいか？　念の爲に伺ひたいのです皆面倒な質問ですがどうかよろしく御返事下さいから云ふ點が判然しないと來月の小說にとりかゝれないのです　頓首

三月三十一日　芥川龍之介
塚本八洲様

七二六　〔三月三十一日田端から。渡邊庫輔宛〕

冠省　先達はいろいろ御手數をかけ難有く存じます又玉稿今日落手しました新小說ならば直に頂戴する事と思ひますがその前に中央公論へ見せる事にします　あれは中々面白いですね唯あなたの文章の中には文章語法が時々あります「松飾り立ち並ぶ町々」とか「こもる霞の中」(コレハ直シテアリマスガ)とか云ふ類ですから云ふ語法は永井荷風氏も使用しますがわたしはやはり「松飾の立ち並ぶ」とか「霞のこもる」とかしたいのですあなたは同感できませんか

何時ぞやの茂吉氏の歌わかるだらうと云はれゝばわかるやうな氣もするのですしかし連作の場合でもあれは無理ではないですか　この頃長塚節氏の「山鳥の渡し」を讀みましたあの中の赤光書き入れは面白いが時には感違ひもあるやうですね犬の遠吠の歌などは齋藤氏の歌のまゝでも立派に東京人には通じます

四月下旬か五月上旬頃長崎へ行きたいと思ひます安い氣樂な宿を世話して下さいさうしてあなたの鶴の前にも紹介してくれ給へこの間の端書の寄せ書きの一人はほとゝぎすの島村君ですかわたしはこの頃新傾向舊傾向とも反對ですが以前島村君には一度だけ會つた事があります何でも虛子庵の運座の時でした實は顏もはつきり覺えてゐませんしかしおとなしい人でせうわたしは天の成せる駄辯家故長崎へ行けばあなたにも議論を吹きかけますこれは必中てられるものと豫め覺悟をしてゐて下さい　頓首

三月三十一日　芥川龍之介
渡邊庫輔様

二伸　これは二三日前友だちと作つた句です

庭の花さける日永の駄菓子かな　一游亭
雨吹くやうすうす燒くる山のなり　我鬼

東京の小生の友人仲間では小生の歌の惡口百出してゐます但し谷崎潤一郎君よりはうまい由

我鬼生

破魔山人　蒲下

七二七　〔四月（推定）京都から。端書、恒藤恭宛〕

啓　僕今度飛脚の旅行なり明朝奈良へ參る筈唯今木屋町四條下ル富士亭にあり但し今月末小生もう一度京都へ參る筈その節ゆつくり御目にかゝりたし匆匆難有う

たかんなの皮の流るるうららかな

七二八　〔四月五日京都から。繪端書二枚、佐佐木茂索宛〕

啓過日はいろいろ御世話樣、篁芸先生によればあの印材二十五圓位にてよろしきよし就いては歸京次第代金送りたく候間木曾君の住所と名とを御一報下されたしそれからあの印を押した紙何枚か君の部屋へ忘れて來候へどあつたら御次手の節御送りを乞ふ小生目下花を見たり瓢亭へ行つたり都踊を見物したりのんきなやうな忙しいやうな暮し方をいたし居候

宿の椽の外は鴨川なり

筍（タカンナ）の皮の流るるうららかな

御室仁和寺

花散るや牛の額の土ぼこり

我鬼

二伸　宇野先生まだゐたらよろしく御鳳聲下され度候

七二九　〔四月五日京都から。繪端書、小穴隆一宛〕

瓢亭へ行つたら母と伯母とには細くきざんだ香の物をつけ小生には厚く切つた香ノ物をつけました湯呑みの恰好も老人と僕とはちがつてゐました愉快でした安いのも敬服の至りですまづは瓢亭の御紹介まで

御室仁和寺
花散るや牛の額の土ぼこり
四月五日

我　鬼

七三〇　〔四月六日京都から。繪端書、下島勳宛〕

啓　母や伯母と一しよに花を見たり都踊りへ行つたりのんきなやうな忙しいやうな怪しげた日を送つて居ります

御室仁和寺
花散るや牛の額の土埃
四月六日

京都　龍　之　介

七三一　〔四月八日田端から。渡邊庫輔宛〕

朶雲奉誦僕今京都へ花見に行つて（老親のおともに）かへつた所です宿を早速さがして下すつた由ありがたうございます唯今の豫定では廿五日頃東京發京都邊に二三日低徊した上長崎へまゐるつもりです（宿はどちらでもよろしいあなたの選擇に一任します）

茂吉氏の歌の説全部貴見に贊成、茂吉氏程の抒情詩人は今時は西洋にもゐない位ですアララギの諸先生でも島木赤彦氏になるともうあの脈々たる餘情がない白秋は兎も角も牧水の如きは小兒のみもとより談ずるに足りません
又僕の餘技に關する貴見、これは全部不贊成です僕歌は稽古した事がない故アララギの投歌家の一人にもなれる自信なしされど句は人並みに苦勞してゐる故虛子と比較されてもよろしいその內に何かへ僕の俳論を披露しますからそれに徵して僕の句を見て下さい高慢なるには似たれども一二句はその句の作者たる事を得意にしてゐる句もあるのです　書中意を盡し難し何よりも早く長崎へ行つて大いに俳論を鬪はせたい
中央公論に出た畫や何かは瀧田樗陰の所藏です僕のいたづら書きでよろしければ何時でも(但し急いぢや駄目)獻上します　玉稿の事あしたでも瀧田氏へ返事を催促します推薦大いにつとめて置いたのですがまだどうなるかわかりません
この頃僕書齋の額を改めて澄江堂となす小島政二郞曰澄江と云ふ藝者にでも惚れたんですか僕曰冗談云つちやいけない書齋に名づける程の藝者が日本にゐてたまるものか、これは鶴の前に會つた後だと云ひにくいから次手に唯今披露します　一笑

四月八日　　　　　　　　　　我　鬼　生

破　魔　先　生　帳前

七三二　〔四月二十一日東京芝改造社から。端書、小穴隆一宛〕

拜啓小生の本を出すにつき相談にのつて頂き度候間まことに申兼ね候へども廿三日の日曜日午前御光來下され度同時に改造の横關君も參らるる筈に候　頓首

七三三 〔四月二十二日田端から。渡邊庫輔宛〕

冠省
繪踏み　中央公論
去來　新小説
双車樓　人間
右それぞれ送り候間不日活字になる可く候なほ中央公論だけはその後かけちがひて瀧田氏にあはず未に掲載されるかどうか判然不仕候又人間は貧乏につき御禮は出さざる由これはこの四月以來如何なる大家も無報酬と云ふ事になりし故に候何とぞそれにて御我慢下され度候
蓮子糖難有御禮申上候一年に一度か二度かは結構に候へどもあまり頂いてばかりゐるのは恐縮故向ふ五六月間は何も拜領仰せつけられるまじく候この手紙御地へつく頃には小生も東京發西下の途に就き居る可く候小生宅より囘送の手紙は何とぞ尊家に御留置き下され度願上候
或敎坊に近き御茶屋にて
おかめ笹今年赤める寒さかな
四月廿二日　　我　鬼　生
破　魔　山　人　蒲下
二伸　人間、無報酬にてよろしき時は双車樓漫筆何時にても引きうけ候よし時々書いておやり下さらば大幸に候
三伸　去來の稿頭の悪い所などなしあれにて結構なり唯一二、漢字の熟語に誤字ありしかと思ふ澄江堂は色女の名などならず破魔こそ色女の名なるべし賊心看人人皆賊如何、如何、

冠省　南方紀行今日落手ありがたう中は野依雜誌の分を除き大抵よんでゐる裝幀も大へん美しい唯背の黑文字は贊成しない僕の支那游記は中々出さうもなし新聞社でも僕のなまけるのには呆れてゐる形とりあへず御禮まで　頓首

四月廿二日　　　　芥川龍之介

佐藤春夫様

七三五〔四月二十三日田端から。大月隆仗宛〕

拜啓　××君手もと不如意につき原稿料を頂きたい由云つてゐますどうか先達申し上げた通り御拂ひ下さいませんか　頓首

四月二十三日　　　　芥川龍之介

大月隆仗様

七三六〔四月二十四日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　安代女史の件もし女史上京合點の節は大兄の家をさして上京、大兄に拙宅へつれて來て頂くやう仕りたしと存候へども御聽許下さるまじく候やさうすると小生の家内共も一同安堵のよしに御座候なほ君の梧桐の句「や」と「かな」と切れ字二つある事に異存申し立て候へども偶〻「曠野」を閱するに

夕顔や秋はいろいろの瓢かな　はせを

とあり先例なきに非ざる事を發見いたし候

山徑誰相問

開窓山色青
山頭雲不見
山際一游亭
では明日旅立ち申候　頓首
四月二十四日　我　鬼　生
鶴巣軒御主人　侍史

七三七　〔四月二十四日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省先達は御手紙難有う早速御返事を書く氣だつたのですが病氣をしたり多忙だつたりとうとう今まで延引してしまひました支那紀行もなまけてゐますがその內にそろそろ書き續けますさうしたら又御讀み下さいわたしは日頃文學青年以外に讀者を有する事を自慢にしてゐました偶あなたの御手紙はこの自慢を增長させる力を具へてゐたわけですかたがた難有いと思ひましたから多忙の中にこの手紙をしたためましたわたしは明朝東京發長崎へ遊びに行く所なのです　頓首
四月廿四日　芥川龍之介
眞野友二郎樣

七三八　〔四月二十八日京都から。繪端書、小穴隆一宛〕

汽車中煙草を二本つないでのむ　隣の奧さん呆れたやうに僕を見たり　京都の小林雨郊ルノアルの家へ行き畫を見た話をする、畫百五十枚ある由、それを並べた部屋へはひつた時梅原龍三郎始め同行の士皆一時にアツと云つた由、カンバスの上の石竹、卓上の石竹より美しさを奪ひし由ルノアルの家を出たら、ミモサの花の多い風景も暗く見えた由、

筝（タカンナ）の皮の流るる薄暑かな
二伸　折柴の番地知らしてくれませんか
京都祇園下河原石塀小路抱月內　我　鬼　生

七三九　〔五月十日京都から。繪端書、小穴隆一宛〕

一力のお秋さん曰花の都の一軒屋、六角堂に人住まず、話したさにあひに來る。なにや。僕曰わからん。お秋さん曰自働電話。お秋さんは奈良人形のやうに肥つた仲居なり近作一つ
ひと茂り入日の路に當りけり

如何
女中の件につきいろいろ御配慮に預り忝く存候　相不變僕筆無精、手紙は君と瀧井位、

七四〇　〔五月十二日長崎から。眞野友二郎宛〕

冠省長崎で御手紙拜見しました拜見して甚恐縮しました恐縮した理由の第一はあなたの愛讀（それは殆破天荒な氣がするのです）に價する程わたしの作品が優れてゐるとはうぬぼれる勇氣がないからであります理由の第二はわたしの怠慢があなたを苦しめた事を知つたからでありますわたしはあなたの不快さを想像した時今後御返事の手紙を書くのに吝なるまいと思ひました御手紙はわたしを恐縮させたばかりぢやない同時に又わたしを啓發したのですわたしは時々未見の人から手紙を受取る事がありますす以前はそれらの手紙にも返事を出したものですがこの頃は滅多に書いた事はありませんなぜさう冷淡になつたかと云ふとわたしの愛讀者と稱しながら芥川龍之助樣と書いて來たりわたしを天下の大文豪のやうに褒めたと思ふと自作の長篇小說（不思議にも必長篇です）の出版を頼んで來たり信用の出來ないのが多いからであります現に東京を立つ前にもいきなり短尺を何枚か送つて何か歌を書けと云

つて來た後ゼヒカイテクレと電報を打つた豪傑もありますわたしは書くとも書かないとも返事「[illegible]」さへ與へられずしかも深夜電報の爲に叩き起されるに至つては憤慨せざるを得ないのですしかしさう云ふ先生がある爲にあなたのやうな人も冷淡に取扱はれると云ふのは勿論甚不公平です唯好い加減な「愛讀者」に失望してゐるとその不公平な事に氣がつき憎いこれはわたし一人に限らず誰にでもあ[illegible]い事でせうわたしなぞも御手紙を拜見しなかつたらたしかに氣がつかなかつたかも知れませんどうかわたしの無禮を恕して下さいなほ漱石先生の作品を御愛讀のよし御弟子たるわたしには大慶の至りですわたしは性來傲慢不遜ですが先生の事を考へると未に頭が上りません長崎では渡邊與茂平本名庫輔と云ふ人にいろいろ世話になつてゐますこの詩箋も庫輔のです庫輔は行年二十二歳ですが中々博覽強記の才物ですその内に中央公論新小說などに同人の研究が載る筈ですから御暇の節は讀んでやつて下さい

頓首

五月十二日夜

眞野友二郎様 侍史

芥川龍之介

七四一 〔五月二十日長崎から。繪端書、下島勳宛〕

その後御無沙汰致しました長崎ももう暑くなりました故歸らうかと思つて居ります逸雲梧門など少々買ひましたオランダ物は拂底にて大高價です毎日古書を見たり海を見たりして暮してゐます　頓首

ひと茂り入日の路に當りけり

五月二十日

芥川龍之介

七四二 〔五月二十日長崎から。小穴隆一宛〕

冠省女中の事につきいろいろ御世話に相成り難有存候御兩親様へもよろしく御傳言下され度願上候そ

の後長崎に參り日に成す事もなく畫を觀たり丸山へ行つたりいたし居候唐畫は藍田叔、沈南蘋、王若水、瘦瓢子、蘇東坡、宋紫石など倭畫は逸雲、鐵翁、梧門を始め二天、若冲などいろいろ觀候へど東坡の墨竹ほど感心したるものは無之候蓬平は長崎中人をつかはし隈なく探し候へどもその名を知り居りしは池庄と申す骨董屋の主人一人のみ書畫共作品は無之候逸雲鐵翁などは出物も有之候へども中々高値にて小生如き手もと不如意のものには如何ともいたし難く小品一二點購ふ事と致候當地福地屋と申す宿屋の看板は碧童先生筆なり偶〻その前を過ぎ何かと感慨を催し候明後日か遲くも明後々日は歸程に上る可く餘は拜眉の節を期す可く候　頓首

五月二十日　　我　鬼　生

一游亭先生

二伸　唯今御書到來、將棊おやめの由祝着也靴と𥿻洋服とは小說境と存候

七四三　〔五月二十一日長崎から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

君「ヘエヘエヘエ」と云ふ事がわかるか？　一童子放屁す他の童子その放屁童子に向つて曰「ヘエヘエヘエ」即ち知る「屁かい？」の意なり長崎語と云ふものは妙なものだなほ又佐賀人曰「あんぢやいもんはをんさるかんた？」これは「兄貴ゐるか？」の意、答へて曰「ゐるくさい」かうなると鴃舌だネ　頓首

七四四　〔五月二十二日長崎から。繪端書へ渡邊庫輔と寄書、在 Wien 齋藤茂吉宛〕

與茂平君の世話になつて居ます時々丸山へも行きます美妓照菊、菊千代などをも知りました與茂平君は東京に出る事になるかも知れません

長崎にて　　芥川龍之介

花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり　　我鬼

七四五　（五月二十四日長崎から。芥川道章宛）

拜啓今日御手紙拜見前便落手の節御返事はすぐに出したりまだ屆かぬとは如何なる訣にや又そちらよりお出しの小包、手紙など眞野友二郎氏の手紙一本しか參らず（前の數本は別なり これもどうした訣か判然せず小生の宿は渡邊庫輔の一軒置いて隣故庫輔宅も同じ事なり　屆かざる理由なし小生袷の尻も拔け、氣候も暑くなりし故明日か明後日かへらむと思ふ（今夜「點心」の印税とどきし故拂ひをする事を得るにつき）小生の滯在長かりし代りに得る所少からず書畫の類にても、

一鐵翁小品山水

二梧門端午双幅

三同　扇面（墨畫花卉）

四鄭板橋　墨竹

五逸雲　菊ノ書賛

等を得たり逸雲は川村雨谷の先生にてこの菊中々逸品なり書き落したれど仙厓の鍾鬼も得たり歸京後御一見、吃驚せぬやうに願ひ候　永見は勿論、杉本、松倉、松本等長崎の藏幅家の畫も大抵見たり沈南蘋などにすばらしき作品少からず

カステラもまだ屆かぬにや東京の長崎カステラよりうまき旨、母上叔母上皆々樣大切れに切りて澤山召上られたく候

瀧井、小穴等より手紙を貰ふ　當地は前にも書きし通り炎熱燒くが如し人皆單衣物なれど僕は袷の尻切れたれば永見夫人にたのみ、セル一反ゆづりて貰ひ、今日より着用仕る　着物はかさむ、本は旅中も買ひてはよみためたり、その上懸物も五六本あり、荷物のかさむ事一方ならず大弱りに候さだめし

着物の尻の拔けるまで旅にゐずともよしと仰せられ候べく、これは云はれぬ先に前以て申上げ置き候宿にゐるとは申せ(宿は花屋と申し下等宿なり)一日に一食は必永見家にてしたたむる始末、今日などは朝夕共御馳走になる、その爲永見家は殆小生の宿の如しこれ一重に永見夫婦の客好きの致す所と感佩至極に有之候

溝上何度も訪問、たつた一度しか會はず、新聞記者、文學青年の類來れば永見夫婦、渡邊庫輔、「芥川氏はまだ來ません」と云つて追拂ふ、歸京後原稿ぜめに逢ふ事を思へば難有き境遇なり

この手紙のつく日かついた翌日かはもう歸宅致すべく候　頓首

龍　之　介

芥川皆々樣

二伸　方々飛び廻り居る際は中々手紙のかけるものならずこの手紙をかくも夜十二時也

七四六　〔五月二十四日長崎から。中根駒十郎宛〕

啓小生金星堂の印税をあてに旅行したる所當地より催促するも主人旅行中のよしにて金參らず少々難澁いたし候間この手紙つき次第、金子三百兩御融通下さるまじく候や右平に願上候　宛名は長崎市本(ホン)五島町(トウマチ)渡邊庫輔(クラスケカタ)方小生、電報爲替ならば好都合に御座候暑くはなるし單衣はなし、骨董屋に借は出來るしよわり居る體裁御憫笑下さる可く候　頓首

五月二十四日

芥川龍之介

中根駒十郎樣

七四七　〔五月二十五日長崎から。繪端書、佐佐木忠一宛〕

御起居如何長崎はもう夏も同樣です二三日中にかへるつもり、又イカ物を少々買ひました

筍の皮の流るる薄暑かな
　廿五日　　我　鬼　生

七四八　〔五月二十六日長崎から。繪端書、小林雨郊宛〕

その後御起居如何大彦はどうしましたか小生今浴衣を着、水炊きの鷄を食ひ、丸山の妓と話してゐます郷原先生によろしく
　　　我　鬼

二伸　カステラ一箱送りました御賞翫下さい

七四九　〔五月二十六日長崎から。繪端書、瀧井孝作宛〕

君の小說改造へ出て結構だつた僕は六月號もとうとうすつぽかしてしまつたもう長崎にも飽きた故かへらうと思ふ書畫少し得た句は殆作らず强ひて書けば一句
　花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり
　　長崎本五島町　我　鬼

七五〇　〔五月二十七日長崎から。眞野友二郎宛〕

啓御手紙を難有うもう長崎にも飽きました故二三日中にかへらうと思つてゐますあなたも俳句を作るのですねわたしは今度の旅行中なまけてばかりゐる爲に殆句はありません唯京都で二句長崎で一句作りましたそれを書きます
　筍の皮の流るゝ薄暑かな
　ひと茂り入日の路に當りけり

花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり

筝はタカンナ、荷蘭陀はオランダ、これはオランダ人のつもりですわたしの手紙を屛風に仕立てられる御つもりのよし相成るべくは御見合せ下さいこんな物を貼り交ぜた屛風など出來た日にはそれこそ物笑ひの種になります實はこの間或人の爲に銀屛風へ畫と歌とをかきました(漱石先生は詩半人前書半人前と稱してゐられましたがわたしは御弟子故畫三分の一人前、書三分の一人前、歌三分の一人前併せて一人前にしてゐます)所が畫も歌も字も悉出來損じてしまひましたその爲どうも屛風と云ふものは甚氣味の悪いものになつてゐます

その内に改造社から沙羅の花と云ふわたしの選集が出ますそれは一册さし上げますからどうか買はずに御待ち下さい尤も内容は大抵あなたの御存知のものです　どうか奥様にもよろしく御鳳聲下さい

五月二十四日　　芥川龍之介

眞野友二郎樣

二伸　この前のわたしの手紙に印紙が貼つてなかつたよし宿のものが忘れたのでせう失禮しましたこの手紙は注意して出させます　　我鬼拜

欄外卽景

夏山や薄日のあたる一ところ

七五一　〔五月二十八日長崎から。繪端書、薄田淳介宛〕

拜啓長崎へ參るの途大阪の社へよるべき所長江游記の稿未成らず恐縮の餘り近づきがたし長崎滯在中作る所の小品一篇、マガジンセクションの原稿にさし上げ候間御落手下され度、追つて歸京後はきつと長江游記にとりかかり申すべく候　以上

二十八日　　芥川龍之介

七五二〔五月長崎から。繪端書、小穴隆一宛〕

花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり　　龍

○

花鳥（ハナトリ）の一間に風は吹きかよひ　　龍
茶苔さばきもなれた涵九（唐人の名）　　庫

○

麥稟の家に小人の夫婦住み　　龍
煙管持つ手ものばし兼ねたり　　庫

三十日東京へつきます　以上

七五三〔五月長崎から。繪端書、齋藤貞吉宛〕

長崎へ來たちよいと上海へ行きたくてならぬ四十起などには句も歌もわからんまだ君は日本へ來ないか、蕪湖はもう暑からうな、こゝも暑い浴衣でも好い位だ蟬に似た君の顏を思ふ

我鬼

七五四〔五月長崎から。繪端書、小島政二郎宛〕

妓の扇に
夕立や我は眞鶴君は鷺
同じく
うき人もをさな寂びたり衣更へ

前のは其角調後のは嵐雪調とも申すべき乎　一笑々々

龍

七五五〔五月三十日鎌倉から。渡邊庫輔宛〕

啓滯在中はいろいろ御世話樣になり難有く存候御兩親樣はじめ皆々樣によろしく御鳳聲下され度候汽車の出る時永見こんな紙を投げこむ何の事やらわからず同封貴覽に入れ候

萱草も咲いたばつてん別れかな

お若さんの健在を祈り候　滯在中小生の感じたる事は君の才なり兼ね々々申候通りおのれを大事にすること忘るべからずこれは好き方なれど好からざる方を云へば御尊父なぞにもつと優しくして上げられたし小生の短篇に「父」と云ふものあり年少の作と云ひ拙きものなれどあれは實際の經驗なり君の御尊父などに對する態度を見る時あの短篇を思ふ事なきにあらず苦言不惡御聞きわけ下され度候君の上京は秋頃にならむか

旅立つや眞桑も甘か月もよか

その節を樂しみ居候　半宵長崎を思へばやはりもつとゐたかつたと存候

水飲めば與茂平こひし閑古鳥

卅日　我鬼

庫輔さま　まゐる

二伸　何とか何とか郎氏(お醫者樣をやめて株をしてをられる仁)の姓名宿所御知らせ下され度候御禮狀さし上げたきために候新地の叔父樣のも御教へ下さらば幸甚に候勿論これも御名前さへ存ぜず候

唯今居る座敷の前に小池ありこころみに無季の句を作るこれならば無季にても句になるべしと存

候へども如何にや
　石の垢ものうき水の日ざしかな
　よも平さま　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍之介

七五六　〔六月二十日田端から。小島政二郎宛〕

拝啓　高著御恵送下され難有く御禮申上げ候さて近日森鷗外先生におめにかかり度き事情有之候へども一人參るは少々又閉口する事情も有之かたがた御同行願ひ度存候へども御都合如何に候や小生長崎より少々書など持ち歸り居り候間御笑覽を兼ね令夫人と御一しよに御光來下され、その節森先生訪問の件も御談合下され候はば幸甚と存候
近作左の通り御叱正までに御目にかけ候
　長崎繪
花を持ちて荷蘭陀こちを向きにけり
　○
沼のはに木のそそりたる霞かな
　○
黒南風の海搖りすわる夜明けかな
　○
ひと茂り入日の路に當りけり
　○
　無季の句を試む

石の垢ものうき水の日ざしかな

○

妓お若に

萱草も咲いたばつてん別れかな

六月二日　　　　　　　　　　　　　　　我　鬼

小島政二郎様

七五七　〔六月六日田端から。泉鏡太郎宛〕

冠省わざわざ御狀いただき當方こそ恐縮に存候ペンを御使ひの事も濱野氏より拜承いたし居候へども御手なみのほどは始めて拜見仕り候御筆蹟を永見氏へ御惠送下さるよし同氏も大喜びの事と存候もし何か短篇の原稿でも頂ければなほ更大よろこびいたす可く候この狀御落手ののちもし萬一御狀つかはされ候やうな氣におなりの節は何とぞ御見合せ下され度、さもなき時は當方にて又々恐縮の上塗をいたす可く候　頓首

六月六日夜　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

鏡花泉先生　侍史

七五八　〔六月六日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省長崎より御手紙轉送して參り今日拜見なほ又小生宅宛の御手紙も同時に拜見しました度々御心にかけられ難有く存じます御尋ねの地獄變の屛風は全然小生の空想ですそれから奉教人の死やきりしとほろ上人傳等の慶長譯「黃金傳說」なるものもやはり小生の空想ですあの文祿版イソツプのやうな文體の小說を書いた時は批評家に原書を引き寫したもの故批評の限りでないと云はれましたもつと滑稽な

のは小生があゝ云ふ本を持つてゐるものと思つて何百圓かに買ひたいと云つて來た或會社の社長のあつた事です又長崎小品の中の家(毎日マガジンセクションを御送り下すつたよしまだ落手しませぬが御禮申します)は長崎の金持ち永見德太郎君の家であります小生は長崎滯在中よく永見君の所へ遊びに行きましたあの小品も永見君の家の二階で書いたのですアクネ　ロザッェアの件愉快に拜見しましたアクネ　ロザッェアとはどう綴りますか御序の節御敎へ下さい「沙羅の花」は校正中ですまだ當分出來ませんこの手紙を書いた序に卷紙へ畫を描きました勿論1/3人前の畫故そのつもりで御覽下さい畫の側に書いた歌はおまけであります畫題は河太郎晩歸の圖と御思ひ下さい印は「我鬼山人」が上りすぎた爲やむを得ず押した次第です烏滸がましい氣がしますがやむを得ません句も作り畫も描くとなるとあなたも中々多藝の士ですどちらも折角御勉强なさい但し句は小生の經驗によると今の先生連の句はよまずに元祿びとの句でもよんだ方が好いやうです右小閑あるにより御返事までに認めました忙しい時にはこの半分の手紙も書けませんこれも前以て御含み下さい　頓首

六月六日午後　　芥川龍之介

眞野友二郎様　侍史

二伸　その後句を書いた手紙(長崎よりの)にも印紙がなくはありませんか小生宅は勿論小生の知人へ出した手紙にも悉印紙がないのですきつと手紙を賴んだ宿の女中が印紙代を着服してしまつたのだらうと思ひます甚怪からん次第ですがもし貼つてなかつたらお教し下さい

七五九　〔六月十二日田端より。新原得二宛〕

拜啓　京都ももはや暑かるべしと思ふ東京も今日は八十度に上りし所あるよし僕一月ほど筆をとらざりし罰にて雜誌二つ同時に書かねばならず目下原稿紙と首引きなり御歸京は何時頃にや家を借す件にても御留守にては不便甚しきよし　借主の方にても契約書その他の事にて御歸京後ならでは埓明かざ

る事多き故困り居るならむと存候その爲皆皆御歸京を待ち居るよしに候へば觀光おすませ次第御歸京然る可く候右とりあへず當用のみ、頓首

六月十二日　　　　　　　　芥川龍之介

新原章可樣

二伸　今日宮崎家法事なりをばさん芝へ留守番に參るおやぢも法事に出かけたり僕二階に之をしたたむ齒痛未全く癒えず

七六〇　〔六月十四日田端から。眞野友二郎宛〕

拜啓　點心御らんになり候よし玉石混淆と云はんも憚りありまづ瓦も土くれも交つてゐるものと御思ひ下さい檢印は仰せの通り本屋の小僧の粗忽ですそれにつけてもあなたのやうな細心の讀者のあることを思ふと卒おそろしい心もちがしますどうかあまりわたしを買ひ冠らないで下さいわたしは惡人でもないが格別善男子でもないまあ天人と畜生と交つて孕まれたやうな頗混沌たる合の子であります人殺しは臆病故出來かねますが、竊盜、詐欺、凌辱位はいつ何時やらないとも限りません之を要するにあなたの向ふ三軒兩隣にゐる諸君子と大體同じやうな人間なのですですからどうかそのつもりで御近所なみにつき合つて下さいわたしは妻と男の子一人、外に兩親と伯母と家族六人暮しですなほ又御尋ねの托氏宗教小說は實際十五錢に買つたのですそれからけふ女房に注意されて見るとあなたへ手紙を上げる度に友二郎とばかり書いてゐたやうです僕の友だちに市村友三郎と申す豆腐屋ありその爲神經衰弱の僕は何時かあなたの名を作りかへてゐたと見えます甚失禮な次第ですがどうか不惡御高恕下さい但し市村と申す豆腐屋は賣り子を何人も統率する頗る堂々とした豆腐屋でありますどうかよろしく奥樣にも御傳へ下さい僕は今本の校正と來月の原稿とに忙殺されてゐます

人に園藝の事を問はれて

あさあさと麥藁かけよ草いちご
六月十四日　　　　芥川龍之介
眞野友彦様
二伸　印紙の件やつと安心しました

七六一　〔六月二十四日田端から。渡邊庫輔宛〕

その後御無沙汰して申訣なく存居候小生歸京以來齒を病み喉をいため、その上文字通り忙殺されたる爲、つい手紙を怠りし事と御思下され度御寬恕幾重にも願上候度々御書拜見おはまさんの事御同情に堪へず候おはまさんは成程よき人なり尤も僕には情炎足らずやゝ物足らなき事確に候へども君はあゝ云ふ人を好むなるべしおはまさんをどうして好き乎と云ふ事は僕にもわからず、今よしと思ひてしたる事も後には惡き事あるべく又その反對の場合もあるべしなど思ふ故我等中年者は何事にも斯々せよとは申し難く候おはまさんの場合もその通り、小生には定まりたる方針も無之候へどももし便宜（御上京後の）に即すれば引かさざる方重々君の爲になるべしと云ふよりは引かしたりなどすれば殆ど御上京後の生活の保證立たざる事と存候實際的な問題に就いては小生の申上る事唯これのみあとは君の分別に一任いたし候君も與茂平なり莫迦な事はせざらむと存候何はともあれ有爲の士、眞實女に惚るゝ事、又とあるまじき大慶なり、我人共に孤獨なる事、云はゞ人生の落莫たる事を見るはこの時より外に無之候惚れて一しよになれねばなほ更よしその爲道に近づくもの久米正雄一人とは御思ひなさるまじく候

御上京いつにてもよし芥川龍之介これを引き受けたる上は口の有無など御心配なさるまじく候上京したければしたい時御上り候へ　どうにか必なるものに候仕事山積の爲まだ鷗外老人には拜謁せずそれも此處一週間位の内には兎に角會つて見るつもりに候

今小閑あり之を書き候次手に蒲原君やお若さんにも手紙を書き候蒲原君よりも御若さんよりも枇杷到來、父、女房、母はお若さんの枇杷を旨しとなし伯母は酸い物好き故蒲原君の枇杷を旨しとなすどちらを僕の旨しとせしかはわざと申上ぐる事を憚り候「石の垢」の句捨て候上五重すぎる故に候左の句如何にや高枇を得ば幸甚なり

　黒南風（クロバエ）の海搖りすわる夜明かな

　晝中は枝の曲れる茂りかな

　六月十八日　　　　　　　　　　我鬼老人

破魔公子侍史

二伸小生原稿を書いてゐる中は殆手紙をよまぬ事ありこれは友だち甲斐に御ゆるし下され度候原稿今日落手どうにか片をつくべく候春陽堂より金を貰はれ候や如何に

七六二　〔六月二十四日田端から。蒲原春夫宛〕

冠省びはをありがたう存じます家中皆でたべましたあなたの口の事二三ケ所當つて見ましたがどうも思はしい口はありません唯安い原稿料でよければ仕事のある本屋が一軒ありますレミゼラブルとかアンナカレニナとかを通俗に書き直す仕事です一枚三十錢と云ふのですから餘り御推薦も出來ませんなほ始終氣をつけて置きますあんまり墓原などで忍びあつてはいけません僕はその後齒をわづらつたり何かしてどちらへも手紙が書けませんでした今あなたの所と一しよに東京、地方、合して十八本封書を出すのです　頓首

　六月廿四日　　　　　　　　　　芥川龍之介

百犬青先生

七六三　〔六月二十八日田端から。香取秀眞宛〕

冠省例の印今晩あたりでも御覽にお出で下さるまじく候や御都合御伺ひ上げ候　頓首

芥川龍之介

香取先生

七六四　〔六月二十九日田端から。室生犀星宛〕

拜啓今日御中陰の御法要に連るべきの所大阪より人參りたり何かいたし時間までに御寺へ參りかね候間後刻御宅へ御線香をあげにまゐるべく右とりあへず御詫びかたがた御ことわりまで　頓首

六月廿九日

芥川龍之介

室生犀星樣

七六五　〔七月四日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省この間は古靑英ありがたうございましたけふおとなりの香取先生に見てもらひましたあゝ云ふ薄さに銅を鑄る事は今の人には出來ないのださうですね御禮に短册でもさし上げたいと思ひますが中々書けません選集もまだ校正中です點心の正誤表もありがたう僕の本はいつも誤植だらけですこの頃又新聞へ支那紀行を書くべく餘儀なくされてゐるのは厄介ですあなたの名前の作は滑稽でしたしかし友彥でなかつたのには安心しましたそれ程頭の調子が曖昧になつてゐたら聊悄氣ずにはゐられないからですお宅の奧さんのお產は何時ですか荊妻もこの秋には子を產む筈です唯今伯母が神經痛にて臥床中娑婆界の苦勞は澄江堂でも用捨しませんどうか奧さんによろしく

即興

茨刈る手になつかみそ蝸牛　　　　我鬼生

眞野先生侍史

七六六　〔七月八日田端から。渡邊庫輔宛〕

啓

一、君の原稿中シイボルト、切支丹雜考は大阪に、他は「人間」に廻したり

二、去來は一度新小說に交涉しもしだめならば「思想」にたのむべし

三、森先生まん性腎臟炎になり、命もむづかしきよし面會は勿論かなはず、この口駄目なれば外を氣づけるべし

四、シイボルト續稿出來次第送られたし(大阪へ送つてもよし大阪市北區堂島裏大每社內野村治輔宛)

五、今家內に病人出來、原稿又多忙をきはめ閑文字を弄しがたしこれにて失禮　頓首

我鬼

破魔山人　蒲下

二伸おはまさんおかどさん及びおわかさんに獻上すべきもの末に埒明かず手紙にて獻上のよし申上げたれば噓つきと思ふも知れず然らざる旨辯ぜられたし但勿體をつけるほど大したものを奉る次第には無之候

森先生の事かなしい

ごぞんじより

はまさままゐる

三伸今君の手紙來るシイボルト續稿大阪に送る事とする三番目の稿は前記野村存苑送つてくれ給へ口の有無に關らず上京の準備せらるべし孤月の事まだ出版業者に面會せずし次第永見へ申し送る事とする左の句如何

庭石も暑うはなりぬ花あやめ　一游亭

木の枝の瓦にさはる暑さかな　澄江堂

七六七　七月十四日田端から。井汲清治宛

冠省點心の爲に何か御書き下さるよしどうか御手柔かに願ひ候あれは小生のブロムナアドなれど路傍の寒花見るに足るものなく恐縮この事に存じ居り候幸ひに高橐の警策を得ばわづかに存在の理由ありと申すべき乎

即興

點心はまづしけれども新茶かな

七月十四日　我鬼生

井汲清治樣　侍史

七六八　〔七月十六日田端から。下島勳宛〕

啓　結構な御魚難有く御禮申上げます目下原稿〆切を控へてこの暑さにうんうん云つてゐます

川狩や陶淵明も尻からげ

十六日　我鬼拜

空谷先生　侍史

七六九 〔七月三十日田端から。渡邊庫輔宛〕

朶雲奉誦中央公論の事多分出來る事と存候野村へ交渉の事も承知いたし候國姓爺も御送り候へ玄文社へたのむべく候伯母毎日ラディオレエヤアをかけ居り候へども捗々しからず弱り候其處へ永見德太郎電報をうち深夜叩き起されるのに弱り候何とぞ電報だけ御免蒙りたき旨御鳳聲下され度候僕非常に多忙の爲永見氏始め諸先生に御無沙汰いたし居り候へども手の明き次第手紙をかくつもりに候君へは常に例外なり難有く存ぜらるべく候一笑「暗夜行路」はまだ一册になつて後よまず「毒藥」は女郎の外書けてゐずと存候君の句澄江堂連の批評にては皆落第なり御發奮なさる可く候僕の「木の枝の瓦にさはる」云々の句は及第の由一游亭の花あやめの句も成績優等にて及第に候(御嚴父樣より御手紙頂戴御返事遲れ居候間よろしく御とりなし願ひ候)それから君の歌は何首か及第いたし候御上京後そんな事ぎろんいたさば面白かる可く候一夕話は一夜漬なり但し僕は常にあの小ゑんの如き意氣を壯といたし六の宮の姬君の如きを憐むべしと致し候連日酷暑几に凴り文を作る時に汗の紙上に滴る事あり欄外柘榴花發如火東京もたまらん時々僕は君の笑ひ顏を思ひ出す　頓首

我鬼山人

破魔先生

活水還將活火烹　自臨釣石汲深淸
大瓢貯月歸春甕　小杓分江入夜瓶
雪乳已飜煎處脚　松風仍作瀉時聲
枯腸未易禁三碗　臥聽山城長短更

東坡煎茶詩

七七〇　〔七月三十一日田端から。眞野友二郎宛〕

朶雲奉誦奥さま御産後の御肥立ち如何ですか東京は日々炎暑甚しく几に向つて本をよんでゐても汗が額にたまります花火の御句前に拝見したのより餘程うまいやうに思ひますそのうまいのは見つけ所がよいのですが句づくりはもう一層御工夫の餘地があるかと思ひます沙羅の花はやつと校正を終りましたその内に本になる筈ですあなたは東京へ御出での事は滅多にないのですかもしあつたら尋ねて下さいわたしは來年又京阪の方へ行きますその節御目にかゝれたらかゝりたいと思つてゐます父親になり心はどうですか子供はどんどん可愛くなるでせうわたしの近所にゐる室生犀星と云ふ男はこの間二つになる男の子をなくしましたしかも一人子です昨日會つたら庭に埋めてその上へ石を置いて時々腰をかけてやりたいなどと云つてゐます御同様子を持つと心配ですねあなたは女の御子さんのよしわたしも今度は女の子を持ちたい

花百合や隣羨む簾越し

七月卅一日　　芥川龍之介

眞野友二郎様

七七一　〔八月四日田端から。佐佐木茂索宛〕

もり岡と云ふ男、西田天香の原稿をのせて得々たる位なればさもあるべし僕に縣念すべからず藤森淳三僕論を書くと云ふ好意は感佩するが書いて貰ひたくない僕は毀譽とも頂戴せずに文章を作つてゐたいのである　頓首

大芸先生　　我鬼

七七二〔八月七日田端から。南部修太郎宛〕

拝啓　原稿用紙で失敬する。君の手紙は難有く讀んだ。君はあの手紙を書いて好い事をした。しかしもつと早く書いてくれるとなほ好かつた。僕のした事の動機は純粋ではない。が、惡戲氣ばかりでした事ではない。純粋でない爲にはあやまる。惡戲氣ばかりでない爲にはいつか君にわかつて貰ふ時が來るだらう。人生と云ふやつは妙なものだ。君と僕とはお互に何の惡感も持つてゐない。その癖から云ふ事になるのだ。〔五十九字削除〕それだけは承知してゐてくれ給へ。交を絶つ絶たないは僕がきめるべき事ではない。君の判斷に一任すべき事だ。しかしお互の爲に計れば喧嘩なぞせぬ方がよいかも知れない。

結婚する事は小島に聞いた。君の爲にこの位喜ぶべき事はない。結婚後も君はあすこにゐるのか？もし君が絶交すると云はなければ、君らしい物でも祝はうかと思ふ。わが友南部修太郎よ。結婚し、愛し、而して苦め。作家たる君に缺けてゐるのは、唯この甘酸窮りなきリアルライフの體驗ばかりだ。僕は今忙しい。毎日原稿に追はれてゐる。おまけに僕の家は暑い。一方ならない苦しさだ。君の返事を待つてゐる

七日　　　我　鬼

南部修太郎様

七七三〔八月九日田端から。小穴隆一宛〕

御狀拜見この前の日曜は支那にて世話になりし人まゐり候爲留守にいたし候ごめんなさる可く候越哉かとは清潭老人の知己も申されし由ゆゑ愈〻それなるべく候乎本の表紙いろいろ御心ぱい難有く存候但校正刷を見候へば振假名の誤り又は脫字等も少からず少々又淺間しき心ちになり候數日來の大暑の

爲小生約束の原稿も出來ずよわり居候
　庭芝に小みちまはりぬ花つつじ
御わらひ下さる可く候　頓首
　八月九日　　　　　　　　　　　　　風中龕生
　圓中先生　机下
二伸　婦人公論の小品およみなされ候や最仲先生あれにてもこだはるべきや否や伺ひたく候

七七四　〔八月二十日田端から。岸浪靜山宛〕

金魚の御作ありがたう存じましたつとに御禮申上げるはずのところ多用のためうちすぎましたあしからず御かんべん下さい
　このやうに月玉あぶなき支那金魚林黛玉も飼ひてゐにけり
　藻がくりに光さし入る水の中金魚の腹のい照るかなしさ
　八月廿日　　　　　　　　　　　　　我　鬼
　靜山先生　侍史
二伸　一度參上御禮申上げようと存じながら失禮して居りますこの頃板橋の本物を見わたしが長崎で貰つて來たのは贋だと申す事を知りました

七七五　〔八月二十一日田端から。渡邊庫輔宛〕

〔畫あり。午橋有樹千章と題し、風中畫とあり〕
度々お手がみありがたく存じそろとても君ほどふでまめにはなれん僕はあつくてあつくて仕方がない畫をかいたら畫まであつさうになつた　のむらへは手紙をやりますこのごろは歌も句も出來ない小說

もだめ電報たすかつたのは君のおかげなるべし忝く存候
　ひとり遊びにめづるもの
　たゞ漢國のはにの壺
　ふぢをさゝむとおもへども
　藤もなきこそせんなけれ
〔漢國の右横に「高麗（カウライ）?（ハツキリオボエズ）」と書込みあり〕
これは一燈上人の今様なり近代のひとのやうだろあつくてあつくてやりきれない御尊父さまに暑中見舞をいたゞき候間よろしく御禮願上候
〔松の下に右に石、左に人の畫あり〕
このあひだ大觀にあつたら永見は中々藝者にもてると云つてた女は膚寸にして惚れるんだねとも云つてた　さやうなら

八月廿日　　我鬼老衲

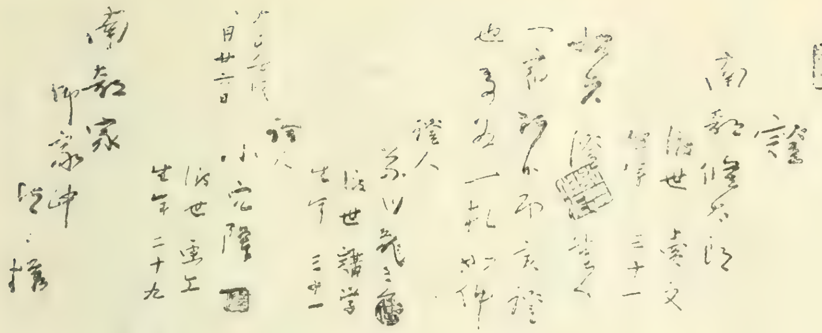
破魔上人　蒲下

二伸　うゐんの齋藤茂吉から手紙が來た君の所へも來たろ蒲原君によろしく、お若さんおはまさんの事も忘れたのぢやない　お門さんはまだ泣いてゐるかな諸姫に上げるもの僕のたのんだやつがなまけてゐてだめだ尤も僕も多忙のため催促に行かん老人病體如何　かなかなの歌落弟
〔判あり〕

七七六　〔八月二十六日田端から。南部修太郎宛。封筒に「南部家御執事」裏に「田端奉行」とあり、下に華押。插畫參照〕

證　　南部修太郎

〔圖〕



渡世 賣文
生年 三十一

〔判〕

右者澄江堂ヘ一宿致候事實證也、その爲一札如件

證人
芥川龍之介〔判〕
渡世 講學
生年 三十一

證人
小穴隆一〔判〕
渡世 畫工
生年 二十九

大正壬戌
八月廿六日

南部家御家中皆々様

七七七 〔八月三十一日田端から。吉田東周宛〕

冠省御手紙拜見仕り候御厚志難有存候魚河岸の露柴は仰せの如く與童氏、如丹は古原艸氏、風中は小穴隆一氏に御座候右あらく御返事まで　頓首

八月晦

芥川龍之介

吉田東周様

七七八 〔九月八日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省 度々御手紙難有うちよいと鎌倉へ遊びに行つてゐた爲に諸方へ御返事が遲れましたこの手紙と同時に沙羅の花を一部さし上げます原稿も御入用ならば送つてもよろしいしかしきたないものですよあなたのポプラアの風に吹かれる光景は愉快ですね西洋女が帽子につける駝鳥の羽根の飾りのやうですこの頃「山鴫」と云ふ小説を獨逸語に譯した人がありますうまいかまづいか私にはわからないが兎に角獨逸語でよむと西洋じみます末筆ながら奧さんによろしくわたしの所でも來月はお産です 頓首

更くる夜を上ぬるみけり鰌汁

小園日長

晝深う枝さしかはす木立かな

九月八日

芥川龍之介

眞野先生

二伸けふは二科會の招待日ですこんどは小穴君の描いたわたしの肖像畫(題は白衣)が出ました實物よりは餘程好い男になつてゐますこれから小穴君と見物にゆきます

オタンチンと云ふ言葉は貴家の女中の國から起つたのではありませんか

七七九 〔九月九日田端から。室生犀星宛〕

冠省 拙著沙羅の花一卷御座右に呈し候御惠存下され度候今月小生毀譽交加り辟易この事に存候殊に小生の身になれば褒め上げらるゝは退治さるゝよりも後めたく、窮狀御察し下さる可く候 頓首

九月九日

澄江堂主人

犀星先生 侍史

二伸　例の書面參候節はよろしく願上候

七八〇 〔九月十二日田端から。工藤恒治宛〕

冠省　楞牛の事は拙著點心の中に一文あり その外は何の感想も無之候唯楞牛ほどの批評家現在は一人も居らざるべき乎楞牛も亦才物と存候　頓首

九月十二日　芥川龍之介

工藤樣　侍史

七八一 〔九月二十一日田端から。後藤肅堂宛〕

朶雲奉誦拙作中の人物は悉架空に有之候間御尋ねの件も全然暗合に御座候實はあのお富と云ふ女中も辻新次氏の令閨ならずやなど尋ねられし仁も有之妄語の罪に世唖子を生ぜずやと惧れをる次第に御座候なほ尊名高作二つながら少時より目に熟し居候間今後御用の節は何とぞ郵券御封入御無用になされ度候右とりあへず當用のみ　頓首

九月二十一日　芥川龍之介

後藤先生　侍史

七八二 〔九月二十九日田端から。中戸川吉二宛〕

朶雲奉誦　御結婚の御祝ひも申上げず失禮仕り候段四郎の件は顏だけ似てゐるのない芥川龍之介論迷惑するものは僕一人のみ御憐察を仰ぎ奉り候高作雜誌に出たものは大抵拜見すん／＼筆の進む具合、青年ならずんば出來ぬ藝なりどうかすると進みすぎる所も青年ならずんば出せぬ足なりいづれにせよ旺盛なるエネルギイを感ずるは愉快に候水守氏とでも式守伊之助とでも御光來下され候はゞ光榮に御

座候但し醉つぱらふ所などは見度く御座なく候それよりも見度きものは中戸川夫人に候　頓首

九月廿九日　我鬼

中戸川吉二様　侍史

七八三　〔九月田端から。下島勳宛〕

冠省　過日は失禮いたし候玉稿一わたり拜見かな使ひ少々改め候その中「於て」は「於いて」に直し候へども慣用により「於て」にてもよろしかる可く候どうにでも御好みの方おん用ひなされ度候又長崎男二人未だに拙宅へ滯在いたし居りその爲小生の原稿捗取らず今日は二人を二科展覽會に出しやりその後にて大忙ぎ執筆中につき御光來二三日御延期なし下され候はば幸甚に候勝手ながら不悪御諒察下され度候右とりあへず當用のみ如斯に御座候　頓首

我鬼生

空谷先生　侍史

七八四　〔十一年九月（推定）田端から。香取秀眞宛〕

拜啓　御狀ありがたく存候小生は二十三四日頃が都合よろしく候廿八日はちと困り候右よろしく御取計らひ下され度候なほ長崎の男渡邊與茂平と申すもの唯今拙宅に罷在り先生に御目にかゝりたきよし申居候間近日同道參上仕る可く候間おんあひ下され候樣願上候與茂平は歌人兼考證家にて行年二十二にはめづらしき生利者に有之候　頓首

芥川龍之介

香取先生

七八五 〔十月三日田端から。小杉未醒宛〕

敬啓　御使ありがたく存じ候大觀先生へも早速御禮申上ぐべく候御出立近く御忙しき事と存じ候へどもその内に一度推參仕るべく候

　偶句あり

線香の束とかばやな桐一葉

　十月三日　　　　芥川龍之介

小杉先生侍史

七八六 〔十月十四日田端から。藤澤清造宛〕

冠省　御約束の原稿おそくなり申訳無之候別封「わが散文詩」さし上げ候少々短けれど出たらめの作にては無之候間その邊は御休神下さる可く候なほ原稿料の儀はなる可く澤山おはらひなさる可く候是はまだいけませんか僕もこの頃煙草をのみすぎ少し心臓の具合がわるい　頓首

　十月十四日　　　　八

權　現　樣　まゐる　　　　幡

二伸　この原稿つゞけてかゝなかつた爲餘白の所が二三枚あります全體で五枚半か六枚に御かん定下さい

清　造　さ　ま　　　　龍

七八七 〔十月十五日田端から。北原大輔宛〕

冠省　先日は御馳走に相成り難有く御禮申上候今日下島先生より陶器澤山お出しのよし承り候明日か明後日まだおしまひにならぬうちに拜見いたしたく候へどもいつが御都合よろしく候や伺ひ上げ候頓首

十月十五日　　　　芥川龍之介

北原先生侍史

二伸　きのふ句を作り候間おわらひ下され度候
線香の束とかばやな桐一葉

七八八　〔十一月十三日田端から。藤澤清造宛〕

この間は留守にして失禮しました泰西名畫展覽會と云ふものを見に行つてゐたのです「わが散文詩」の名は「詩と音樂」のに用ひました今後同じ題であんなものを幾つか書かうとした爲であります併しお店の意見も御尤も故題はかへてもよろしい但し「肉慾」を題にするなどは貴說通りいけませんそんな事を云ふやつは生カシテハオケン位ですまあ強ひてつければ「澄江堂小品」とでもしたいと思ひます　以上

　　　　　　芥川龍之介

藤澤清造様

二伸　封入の三錢切手は今後入りません但しこの手紙には早速利用します

七八九　〔十一月十三日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓いろいろ結構なものを頂き難有く存じます　いづれ拜眉の上御禮申上げます小生この頃不眠症にかゝり大いに弱つて居ります右とりあへず御禮まで　頓首

十一月十三日　　　　芥川龍之介

香取先生侍史

七九〇 〔十一月十三日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓その後御無音に打過ぎ申訣無之候これは家内男の兒を生み何かとごたごたいたし居る爲に候又一つは小生神經衰弱甚しく筆をとるも懶き爲めに候男兒は多加志と命名するつもりに候隆の字をかたよみにいたさせしに候この間の墨畫春服の裏繪にとの思召し結構に候唯あのにじみうまく版になるかどうかと存候新年號の小説皆書かねば伊香保へも行けず神經衰弱なほる事も必定と存候へどもさうはかりも行かず弱り居り候又お金の儀は菊池よりすでに五十金受取り居り久米のとも合せぢきに御送金仕る可く候この頃松本松藏と言ふ金持の家にて大雅蕪村の十便十宜帖及竹田草坪數々見申候大雅の大は申すまでもなく候蕪村も竹田よりは一極上の畫人に候君が在京すればと惜しみ候又泰西名畫展覽會と言ふを見、西洋人も傑作を出すの容易ならざるを知り候いつぞやのルノワル(帽子をかぶつた)セザンヌの自畫像などやはりよろしく候外にモンテイチエリと申すもの、滴る如き味あるものに候贋物も少しはあるやうに見受け候別封「詩と音樂」「純正美術」御閑の節御らん下さる可く候(純正美術には十便帖の寫眞あり實物は着彩に候)又左句送別の爲作り候所家内ども緣起わるしと申し候故その節さしひかへ申候へども今は何と言ふ氣もいたさずなり候間書き添へ候

送一游亭別情愴然

霜のふる夜を菅笠のゆくへかな

十一月十三日夜半　芥川龍之介

小穴隆一様

二伸「湯の花」まだこころ見ず候明日の湯に入れるよしに候君より「湯の花」香取先生より柿と鯉と同時に頂き候茸堂の秋意嬉しきが如く寂しきが如くに候　我鬼生

七九一〔十一月十七日田端から。下島勳宛〕

拜啓　大雅の畫本拜見仰せつけられ難有く存候後刻御光來下され候よしに候へども中央公論の原稿まだ一二枚しか出來上らず今夜は徹夜でも致す覺悟につき甚勝手ながら明日におのばし下さるまじくや右御禮かたがた御願ひまでに如斯に候　頓首

十七夕　　　　我　鬼

空谷先生

七九二〔十一月十八日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　足の痛み中々全治いたさぬよしお困りの事と存候小生も頭は惡し心臟は縮まるし胃腸も變になるしどうにもかうにもやり切れない故新年號の原稿全部斷り、湯治に參る事と決心仕りました但し伊香保は非常にさむさう故南の方へ參らうと存ずるのですが君が歸京され次第一しよに參つてもよろしいと存じ居候　表紙、見返し拜見、非常に結構と存候小峯曰「小穴さんに御禮が少しで恐縮しましたなれども津田青楓さんと同額なのです」寫眞を貼るのは再考中ほんもののブロマイドを貼るも嵩ばるのです、（コロタイプを貼つたのでは貧弱）同封のお金御落手下さい昨日瀧田蓬平一幅持參僕鑑定の上贋となす要するに眞贋は本物さへ見てゐれば出來るものらしく候畫のことなどかまはずに養生し給へ、頓首

十一月十七日夜半　　　芥川龍之介

小穴隆一様

七九三〔十一月二十二日田端から。瀧井孝作宛〕

芭蕉句解爲を得候なるほど「月はやし」は「月迅し」の意なる可く候小生その後健康勝れず新年號の原稿を皆斷り自適いたし居候志賀樣御上京の砌御立ちより下さらば仕合せに候前以てはがき頂き候はゞ御待ち申す可く候一游亭まだかへらず庫輔は毎日まゐり候大芸居尊臺の所へ泊まつたよしいろいろ話し居り候この頃古丹波の壺を見つけ食指大に動き居候も貧困の爲買ふ事ならずざんねんに存居候　頓首

我　鬼

折柴詞宗　侍史

七九四 〔十一月二十七日田端から。小穴隆一宛〕

冠省だつそと言ふおん病のよし驚き入りそろわたくしその後風ひき兩手にはピリン疹と言ふもの出來繃帶いたし居り候故筆とる事も自由ならずつたなき字いよいよ拙く相成り候だつそは田之助のなりし病なり切り遲れはいよ〳〵あしきよしさりながら足切ると申すは容易の事にあらずどうすればよいやらまどふばかりに候わたくし熱あり外出いたしかね候間とりあへず庫輔に名代をたのみ候何にても御用有之候はば同人にお申しつけ下され度もつと書き度く候へども手動かねばこれにてやめにいたし候いづれ手の繃帶とれ熱もさめ候はば早速御見舞にまゐる可く候　頓首

病　我　鬼

十一月二十七日

病鶴巢軒御主人

七九五 〔十二月二日田端から。與謝野寛宛〕

拜啓　度々御手紙頂き大いに恐縮に存じて居ります小生支那旅行以前よりの文債山の如くその上新聞の紀行文も書かねばならずこの頃しみじみ賣文糊口の難きを思ひ居る次第、尊命による隨筆風のもの二三枚したゝめましたが到底一段組にする程の代物にては無之どうか藻風先生や耿之介先生の六號二

段組みの御仲間へ御入れ下さい明星では森先生の「古い手帳から」毎號難有く拜見してゐます但しあの古い手帳の中には大分新しい書き入れもはひつてゐるのでせう小生もその内に奮發して諸先生をあつと云はせる程のものを書くつもりですそれから南部の歌不評のよししかしあれは南部としては一世一代の名作ですまづ嫌味のない素直な所だけお買ひ下さい　頓首

十二月二日　　芥川龍之介

與謝野寛樣

七九六　〔十二月二日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省度々御手紙いたゞき難有存じます又返事をさし上げず失禮しましたその後小生心臟をいため又胃腸をそこなひずつと病臥、新年號の小說の約束も三つ四つありましたが皆斷りました所がこの頃又その上に風をひき醫者の藥をのんだところミグレニンのはひつてゐた爲ピリン疹を生じ兩手に繃帶をかけてゐる始末です五六日したら何處か溫泉地へでも行かうと思つてゐます小生の病は一切神經衰弱より起つたらしく未に睡眠藥を用ひない限り眠る事が出來ません兩手不自由につきこれで御免を蒙ります書帖は確かに落手來年の春頃はさし上げるつもりですもし失敗しなかつたら二册共かきます但し失敗すれば一册、兩方とも失敗すれば好い所だけとつてはぎ合せて一册にします

病懷蕭條

初霜や藪に鄰れる住み心

芥川龍之介

眞野友二郎樣

七九七　〔十二月十七日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省　御見舞の御手紙難有く存じますお藥も確かに落手しました小生如き疎懶の人間にさうさう御親切になさる必要はどこにもありません今後もつとぞんざいにとりあつかつてよろしい尤も親切にして頂けば嬉しい事は事實であります朝鮮の護符は奇抜ですね小生の友人、いつも悪戯をしてくれる小穴隆一と云ふ人が今脱疽（?）で順天堂へはひつてゐますからあの通り書いて送つてやらうと思つてゐます年末或は年始に何處かへ湯治に行く筈ですが目下は寢たり起きたりぶらぶらしてゐますそれからあなたの句は進歩しましたね萬年青の句などは素直でよろしい小生もこの頃一二作りましたから次手にあなたへ吹聽します

　　夜坐

炭取の炭ひびらぎぬ夜半の冬

炭取の底にかそけき木の葉かな

　　閑庭

初霜や藪に隣れる住み心（モウ一度書キマシタ入レナイトサビシイカラ）

時雨るゝや犬の來てねる炭俵

　　送別

霜のふる夜を菅笠のゆくへかな

　　長崎より目刺をおくり來れる人に

凩や目刺にのこる海のいろ

途中紙の切れてゐるのはそこだけ書き損じたのです失禮ですが御ゆるし下さい唯今北海道のホツキ貝と云ふものを食ひ、胃の具合怪しければ早速頂戴の藥をのんだところ

　　即興

凩や藥のみたる腹工合

十二月十五日
芥川龍之介
眞野友二郎様

二伸　數日前の小生の家族の健康如左
主人　神經衰弱、胃痙攣、腸カタル、ピリン疹、心悸昂進、
妻　產後、脚氣の氣味あり
長男　虫齒（齒齦に膿たまる）
次男　赤ン坊ナリ　消化不良
父　膽石、胃痙攣
母　足頸の粘液とかが腫れ入り、切開す
これでは小說どころではないでせう
十七日
我鬼
眞野様

七九八　〔十二月十八日田端から。中戸川吉二宛〕

冠省高著頂戴いたし難有く存じます小生も病氣、家内にも病人多い爲未に拜讀をいたしませんがいづれ拜讀する志を持つてゐます父、母、女房、子供、悉病氣なのだからやり切れません　頓首
十二月十八日
芥川龍之介
中戸川吉二様

七九九　〔十二月十八日田端から。友常幸一宛〕

拜啓　度々御手紙難有う存じます原稿も二包み確に落手しましたそれからのし梅も難有う原稿も徐々

來訪いろいろ切支丹の話など聞きましたアララギの御仲間故一寸申し添へます　頓首
病氣勝ちの爲文債山の如く新年號の〆切日は迫るし少からず弱つてゐます數日前長崎より渡邊與茂平
拜見しないのにあゝ云ふ物を頂いては甚恐縮です小生はもう東京へかへりました支那から歸つて以來

十二月十八日　　　　芥川龍之介

友常幸一様

八〇〇〔十二月二十六日田端から。水守龜之助宛〕

原稿用紙で失禮します。

プロレタリア文藝云々の件、あれは大眞面目なのです。あなたはプロレタリアの文藝家ではないのですか？　二三あなたの評論を拜見したところでは、プロレタリアの爲に戰つてゐられるやうに思はれました。ですからプロレタリアの文藝家の中に數へたのです。佐々木君に水守君の案か云々と云つたのは、直接あなたを擧げたのと關係はありません。僕はあまり他のプロレタリアの文藝家の作品を讀んでゐない。讀んでもうまいと思つたのは少ない。しかしあなたの作品にはうまいと思つたのがある。それ故あなたの名を書いたのです。惡意にとつちやいけません。ひやかしでも皮肉でもないのです。もしさうとれるならば、それはわたしに文壇常識の缺けてゐる罪でせう。もしあなたの名を擧げたことが他に誤解を招くおそれがあるなら、御遠慮なくあの一項を御削り下さい。僕はあなたのはがきを拜見して、實際少しびつくりしました。プロレタリアの文藝家の資格は作品の取材とか何とかに據らず、その文藝家自身の氣もちの左傾的なところにあると思つてゐましたから。右とりあへず御返事まで。なほこの問題の爲に少しでもあなたを不快にしたなら、それは繰返しお詫びします。いづれその上にお目にかかり、本式に御諒解を得るつもりですが。

十二月二十六日　　　　芥川龍之介

水守龜之助様

八〇一 〔十二月二十七日田端から。中戸川吉二宛〕

冠省 けふ北村十吉をよみ了りましたなだらかにむらのない出來だと思ひましたあれだけの枚數をあれだけに書き上げるのは一仕事だとも思ひましたしかしその上にも注文をつければあの作品の主人公(必しも君自身と云はないでも好い)は一方素直な心もちの所有主であると共に一方僞惡家の心もちも持ち合はせてゐる、その二つの心もちがもつと徹底してゐたらもつと好い作品になりはしないでせうかから云ふのは主人公の生活上の批判ぢやない實踐倫理の問題ぢやないのです作品の上、描寫の上での話なのですけふ高作をよみ了つた次手にとりあへずこれだけ書く氣になりましたあとは又拜眉の節申上げます 頓首

十二月二十七日 芥川龍之介

中戸川吉二様

二伸 この間はるすにて失禮しました僕この頃神經衰弱の爲に何をする事も懶い手紙は就中辟易です虫の好い事を並べればこの間不在のおわびを出さなかつた事をかんにんし、併せてけふこれだけ書いたことを感心して下さい

八〇二 〔十二月二十九日田端から。香取秀眞宛〕

拜啓 昨夜は失禮いたしました明星まゐりましたから御目にかけますそれからいつぞやの金鼓も抄しておめにかけます森さんの歌は下手ですね僕の方がうまいでせうすなはち

秋ふくる晝ほのぼのと朝顏は花ひらき居り吳竹のうらに

御一笑下さい

鼠末九

我　鬼　生

香　取　先　生　侍史

今昔本朝之部巻九讃岐國多度郡五位聞法師即出家語第十四

其の後入道着たりける水干袴に布衣袈裟など替つ、持たる弓胡錄（籙の誤か）などに金鼓を替へて、衣袈裟直く着て、金鼓を頸に懸て云く「我れは此より西に向て阿彌陀佛を呼び奉て、金を叩て答へ給はむ所まで行かむとす云々」

コレハ殺生好キノ武士ガ講師の說教ヲキキ忽チ發心スル話デス

大正十二年

八〇三　〔一月六日田端から。渡邊庫輔と寄書。小穴隆一宛〕

その後經過よろしきよし重疊に存候僕齒はいたし風をひきて熱はあり、又又心よわり居候今夜庫輔伽をしてくれ候ままやや氣がろになり候

　山々を枕にしきぬみの蒲團

あとは庫輔こと双車樓先生にゆづり候

我　鬼

ゆうべ大彥まゐり君の事を話したところ大彥の出入の紺屋やはり足を切り候へども今は行步自在にて電車の飛乘りや二階を走り下りる早さ、とても大彥は及ばぬよしに候さうならねば駄目故せいぜい足の御教育をなさる可く候又春服は僕の怠惰と本屋の春休みの爲まだ裝幀の仕事にかからぬのに候そんな事御心配なく御養生專一になさる可く候　頓首

　春王正月陸日

芥　川　龍　之　介

小　穴　隆　一　樣　侍史

八〇四　〔一月二十日田端から。中村武羅夫宛〕

啓　大阪より原稿をせかれる爲隨筆の原稿捗どらず出來ただけ兎に角さし上げます今夜中に殘りを拵へますまづ十五六枚と御見込み下さい來月からはこんな御手數をかけぬつもりです右當用まで

二十日

芥　川　龍　之　介

中村武羅夫様

八〇五　〔二月二十一日田端から。野上豐一郎宛〕

拜啓先夜は失禮いたし候今日は御誘ひ下され難有く存候十二時頃御誘ひ申す可く候何とぞよろしく願上候

芥川龍之介

二伸

今參上するつもりでこの手紙を書いたところ日附をかく時聞けばけふは日曜のよしすると小生在宅の筈の日につき出かける事なり難く候かなしく候日曜の外に御能はないものにや小宮さまによろしく御つたへ下され度候御禮かたがた御わびまで

我鬼拜

野上先生

八〇六　〔二月六日田端から。端書、成城中學校學友會文藝部宛（問に答へて）〕

一　好。數學、博物、物理、漢文

惡。國語、化學（全然實驗をさせざりし故也）

二　支那文學か英文學の學者になるつもりなりき

三　十中八九、友人に創作家ありし惡影響による

二月六日

芥川龍之介

八〇七　〔二月十八日田端から。稻垣足穗宛（寫）〕

大きな三日月に腰掛けてハヴァナをふかせてゐるイナガキ君本の御禮を云ひたくてもゼンマイ仕掛の

蛾でもなけりや君の長椅子へは高くて行かれあしない

芥川龍之介

八〇八 〔三月五日田端から。杉浦翠子宛〕

ツイデ持チ話シ置キタレバ玉稿ハ波多野秋子ニ送リタブベシ
キミモ亦婦人公論ノ女記者波多野秋子ヲ知リタマフラン
アガ歌ヲヨシト見ルキミハロヒビクカミラモハシト食ハセザラメヤ

澄江堂主人

杉浦翠子様　粧次

二伸
コノ次ニミ文タブベクハ三錢ノ切手ヲ中ニ入レタマヒソネ

我鬼

杉浦様

八〇九 〔三月十五日田端から。伊藤貴麿宛〕

冠省　その後御變りもありませんか僕も出しぶつてゐた湯治へ愈明日出かけます就いては袁世凱の小說出來上り次第瀧田樗陰君に見せるやうにして頂けませんかその旨申送つて置きますからあなたの方からは唯送つて頂けばよろしいのです、この間何かの會にて折柴におあひになつたさうですね折柴曰「やはり伊藤などと云ふ人が書けさうな顏をして居ました」折柴の顏はどうですか　頓首

三月十五日

芥川龍之介

伊藤貴麿様　侍史

二伸　行先は湯河原中西です

八一〇〔三月十五日田端から。角田竹夫宛〕

冠省高著御惠投下され難有く存じます丁度病中を幸ひゆるゆる拜見したいと存じますつい數日前竹冷俳話とか申す本を讀んだため何か因緣がありさうに存じて居ります右とりあへず御禮まで

三月十五日　芥川龍之介

角田竹夫様

八一一〔三月二十四日湯河原から。繪端書、芥川宛〕

原稿用紙なくなると困る故急ぎ送つて頂きたし一人故本をよむかものを書くか、煙草をのむかしてゐる爲うちにゐるより勉强する位、鄰室の老辯護士おぢいさん位髯をかくこれだけは閉口　頓首

〔裏に〕

マヅ用ヲ書ク松屋ノ原稿用紙五トヂ　至急送ラレタシソノ後太田サン來ルヤ　來ナケレバ電報ウツベシ　義敏手紙ヲ五本クレタ　宿ガ炭ハフカフカ炭、オバアサンニ見セタイ

八一二〔三月二十五日湯河原から。端書四枚、小穴隆一宛。中西にて了中とあり〕

この間は雨がふつたのと何度美術院へ電話をかけても要領を得なかつた事の爲とうとう畫を見にゆくのをやめここへ來てしまひました君は見た？
ここへ來た翌日から改造社の男來り、つききりで原稿を書かされる始末、それでも結局書かずじまひになりましたここは龜さんの死んだため甚氣のりのしない宿になりました樂燒屋の爺さんの小屋は楠木細工の店に變化しました頓狂庵へはまだ行きません改造に祟られた爲まだ何もやらず氣もちを纏

めるのに弱つてゐます鄰室は小供をつれた老辯護士、癇積を起すと女中でも何でも叱るのと夜恐しい鼾をかくのとが特色ですそれから琴をひく女が下にゐますこれは十二時迄寢てゐる朝ネ坊です顏はチヨット太田看護婦に似てゐますこの人の御亭主が風呂で現像した寫眞を洗つてゐると細君もあとからやつて來て「又下手糞――ヂヤナイ上手糞ノ寫眞？」ト云ひました兎に角恐るべき女です尤も僕のゐるのは本館ぢやない別莊の方です二十六日になると本館に靜な部屋が明くよしそれへ移るのを待つてゐます町には大分新しい店が出來ました一週間に一度位づつ活動寫眞も來るよし、まだ行つて見た事はありませんこの頃犬の交尾期の爲夜は互犬横行し郵便を出しに行くのも物騷なのです義足は出來た？又近日ハガキの駄辯をふるひます　頓首

八一三　〔三月二十五日湯河原から。繪端書、室生犀星宛〕

庭前

春の日や水に垂れたる竹の枝

屋後

篠を刈る餘寒の山の深さかな

鄰の客

膀胱の病にこもるうららかな

どうか奥さんによろしく　頓首

〔裏ニ〕

山徑春寂寞

春風の篠に消えたる麓かな

一日六囘入浴

溫泉の壺底なめらかに日永かな

龍

八一四 〔三月二十五日湯河原から。絵端書、下島勳宛〕

やつとこちらへ來たと思ふとあとより改造の記者おしかけて參りひどいめにあひました やつとひまになりましたがその爲氣分をこはされ辟易してゐます當地も例年よりよほどさむいよし尤も八重の梅さき、橙みのり、鶺鴒とびまはり、のどかはのどかですその内に御出になりませんか日曜や土曜は團體客多き故駄目ですが 以上

湯河原中西 芥川龍之介

八一五 〔四月五日湯河原から。絵端書、室生犀星宛〕

春風の篠に消えたる麓かな
出湯の壺底なめらかに日永かな
皆駄句に候へどスケッチまでにおめにかけ候 頓首

この頃一句
おもひやる餘寒はとほし夜半の山
又五月號の原稿の催促をされ弱つて居ます、湯河原位では韜晦と云ふ所まで行きませんね
四月五日

芥川龍之介

八一六 〔四月五日湯河原から。絵端書、下島勳宛〕

度々御手紙難有存じますこちらへ參つても原稿の催促ばかりされ弱つて居ります又二三日中に何か製

造しなければなりませんこちらは春風詩情を蕩すと云ふけしきです梅桃櫻皆滿開です(但八重)この間は正宗白鳥、上司小劍、佐々木茂索の諸先生が落ちあひました但し皆仕事かたがたに來たのです　以上

四月五日　　　湯河原　芥川龍之介

八一七　〔四月六日湯河原から。繪端書、下島勳宛〕

先生のお名はいさをしでいさをではないこと、今度はじめて知りました御手紙殺氣を帶びてゐます歸京の節いろいろ伺ひたいと存じます僕は餘り人を信用せぬ故人に欺かれぬ方ですが信用する人が僕を欺かぬのは僕の幸福と存じて居ります今お伽噺二篇手をつけてゐます出來たらお孃さんを感心させます　頓首

六日夜　　　芥川龍之介

二伸　忘れてゐましたが××先生にもよろしく御傳へ下さい

八一八　〔四月十三日湯河原から。端書、小穴隆一宛〕

君の自畫像の向うを張り、僕も自畫像を描いたれど自信はあまりなし(保吉の手帳——改造)當地もう新綠掬すべし今年は樂燒どころではなかつた原稿ぜめばかり二三日中歸ります今加藤首相と同宿中

澄江堂老人

八一九　〔四月十三日湯河原から。繪端書、下島勳宛〕

度々御手紙難有存じます皆樣お變りもないことと存じますここは東京へ近すぎる爲むやみに人が來ていけませんやつと小說一篇書きました二三日中にかへります御句月並ではありません今日より加藤首

相と同宿中

菜の花は雨によごれぬ育ちかな

十三日　　　　　　湯河原　我　鬼

八二〇〔四月十三日湯河原から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

萬年筆はないよ君途中で落したんぢやないかなほ僕の部屋をさがして見るが、、本御手數をかけ難有う原始佛教思想論と Life & habits とは同一によむのが奇蹟かと思ふ程似てゐる所が多い諸天善神の擁護を感じた實際偶然にしては變な位だよシカシ實は變ぢやない釋迦流に說明すれば自然なのだその說明は今度キン聽し給へ

八二一〔四月十四日湯河原から。繪端書、南部修太郎宛〕

とつ國に「四月の莫迦」と云ふならひありてふことを君は知らずや
かぎろひの春の四月のついたちにわが書きし文まことと思(も)ひそ
谷川に佐佐木も落ちず我も亦佐佐木を負ひてかへりしことなし

十四日　　　　　龍　之　介

八二二〔四月二十七日田端から。黑須康之介宛〕

原稿用紙で御免蒙ります

先達は失敬しましたその後御體は如何ですか？　痔瘻は余程養生せぬと惡いよし「君は痔瘻か？　痔瘻ならば一月以上溫泉場にゐなくちやいかん」と僕に忠告した男があります。この男はあなたの話を僕の話に間違へてゐたのですから、次手を以てこの忠告もそつくりあなたへ振りむけます。僕はやつ

と安眠出來るやうになりました夢はまだむやみに見ますが
湯河原に行つてゐる內に、僕の知つてゐる古錦畫屋が泥棒に同情を表した結果、未決監へ抛りこまれました　それから結婚せぬと號してゐた男が正式の見合ひをすませてゐました　どうも世の中は物騒です。

かう云ふ調子で辯じてゐると、僕はさもあなたへ敬意を表する爲にこの手紙をしたためてゐるか、或は類ひ稀なる閑人のやうに思はれるでせうが、實は竹內君の德山の住所を知りたいのです。僕を買ひ冠つちやいけません　しかし常住の敬意は持つてゐるのですから、惡意を持つてもいけません。どうか好意と惡意との中位のところで竹內君へ手紙を出すべき便宜の方法を敎へて下さい。

僕は歸京後は雅俗混淆の暮らしをしてゐます。ゆうべ帝國ホテルへ演藝研究會と云ふものを聞きに行きました　勿論退屈しました。一しよに行つた男はお醫者故、一向退屈しなかつたやうです。これは通風の裝置を批評したり、たのまれもせぬのに看客の顏を一一診察してゐましたから――この醫者曰、「醫術の半分はムンテラだネ　小兒科などは全然ムンテラだよ」ムンテラと云ふのはムント・テラピイの略ださうです。だから僕は醫者を信用しません。しかしその男又曰「信用しなければムンテラは利かないからネ　好んで現代の醫術の恩惠を避ける訣になるサ」どうも醫者と云ふものは惡黨です。痔のお醫者もやはり惡黨でせう。まあ精々御用心なさい。

實は――又實はと云ひますが、實は今少し閑なのです。閑なる故にこんなことを書き續けるのです。この間少し學校のことを書きました　その中で×××先生を惡魔にしました　惡魔では勿體ないがまあ大負けに負けておいたのです。尤も先生自身は不服かも知れません。今度は×××先生や××××先生を紹介するつもりです。××××先生の古いオペラハツトや××××先生が淸水寺の鴉に突つかれた話も紹介する光榮を得たいと思つてゐます。兎に角考へて見ると、敎師時代の記憶は不愉快ぢやありません。(その癖夢に敎師をしてゐるところを見ると、夢の中の僕は大いに悄氣てゐるのです。

追想は當にならんものかも知れません。又當にならん追想を持ち得るところが有難いのかも知れません。）一つには誰でも二十五六の記憶は愉快だと云ふこともあるのでせう。しかし愉快なる記憶が有することは感謝して然るべきことと思ひます。どうか玉井先生、宮澤先生、齋藤先生、上村先生等によろしく云つて下さい。××先生にもおまけに一つ、よろしくと云つて下さい。僕は人生を滑らかにする爲にこの頃は時時「おまけ」の油をさします。勿論さしすぎたと思つた時は早速砂をふりまきます。今人が來ましたから、駄辯はこの位できり上げます。今來た男は二三年前、細君になるべき女と共に僕の所へ驅け落ちして來た男であります。但し甚善良なる田舍者であります。以上

四月廿七日　芥川龍之介

黒須康之介樣

八二三　〔五月六日田端から。野上豐一郎宛〕

拜復御手紙難有う存じます生憎けふは在宅して客に接する日につき參りたくも參られませんどうか不惡おゆるし下さいそれから能面大觀の代金もあのまゝに相成り居り甚だ恐縮に存じます近日お金を持つて參上するつもりです右とりあへず御返事まで　頓首

六日朝　芥川龍之介

野上豐一郎樣

八二四　〔五月二十日田端から。野上豐一郎宛〕

原稿用紙にて御免蒙ります。今朝ほどは御手紙を頂き難有う存じます。お能は四人づめの席を一つおとり下さい。但しなる可く前の方が欲しいのです。鼻の先で舞つてゐるのを見たいと思ひますから。それから廿日より廿三日まではずつと先約があります故、鶴田さんの御招待には應ぜられるかどうか

わかりません。廿四日からならば出來ますが。講演はやらずにすめばやらずにすましたいのですが、やむを得なければやらないこともない位の心もちで居ります。どうか御都合でどちらでもよろしく。右出がけにつきとりいそぎ御返事まで。　頓首

五月二十日

龍　之　介

野　上　先　生　侍史

八二五 〔六月二十一日田端から。小穴隆一宛〕

冠省この間はお母樣多加志をお見舞下され難有く存じますその後經過よろしく退院しましたまだ少し消化不良ですが大した事はあるまいと思ひますそれから菅先生の娘さんのお婿さんがあなたの畫を頂きたいと云ふのですが何か靜物を一枚ゆづつてやつてくれませんかどの位お金をさし上げることが出來るかこんどの日曜までに返事をする事になつてゐますその時又お知らせします僕は毎日机に向つてゐます昨日だけ藤澤先生と女性社だの春陽堂だのへ行きました特製本はまだ出來ないよしいづれ一週間位のうちに出來るよし右とりあへず當用のみ

六月二十一日

芥　川　龍　之　介

一　游　亭　樣　侍史

八二六 〔六月二十一日田端から。杉浦翠子宛〕

冠省昨日は不在のところへ御光來下され失禮いたしましたあれは庫輔が悪いのです僕は午前中ならばいつでもゐると言明したのみで午後は保證を與へなかつたのですそれを彼は午後もゐるやうに吹聽したのですどうか不悪御高免下さいいづれ近々拜眉の節のあることゝ思ひます又あの節は結構なものを頂き難有う存じます右とりあへず當用のみ　頓首

六月二十一日
芥川龍之介
杉浦翠子様

八二七 〔六月二十二日田端から。藤澤清造宛〕

冠省　お手紙拜見、先日は色々失禮しました僕今手もとにお金少ししかなき故同封の手紙を中央公論社へ持參、おうけとり下さいもし瀧田君不在の節は誰でも在社の人に手紙を開封して貰つて下さいわざわざ御足勞をかけるのは恐縮故この手紙書きました體を大事にし給へ　頓首

六月二十二日
芥川龍之介
藤澤清造様

八二八 〔六月二十五日田端から。小穴隆一宛〕

お手紙ならびにお句難有く存候菅氏への書をウサギ屋へお斷りの上ポンポンダリアをおつかはしなされ候ては如何に候やさし出がましけれど愚存申上候又菊池寛申し候には何ぶんボオズをする事困難故相成る可くは床の間へかけるもの(小幅にてよろしき)頂きたきよしに候いづれ近日參上バラの畫拜見仕る可くそれまでまづどこへもおやりなさるまじく候　頓首

六月二十五日燈下
龍之介
隆一様　侍史

二伸
藤の花軒ばの苔の老いにけり
一句未定らず候へどもおんめにかけ候　匇々

八二九　〔七月八日田端から。藤澤清造宛。封筒に「君は細い字をきらふ故一生懸命に細く書いた」と傍註あり〕

冠省　度々留守にして申訣ありません前の二度は面會日でなかつた故平然たるものですが今度は日曜故大いに恐縮しました實は有島さんの話より皆々大いに憂鬱になり飯を食ひに出たのです唯今もう十一時故室生氏のところにもゐられぬ事と思ひ早速この手紙をしたためますせめては早速したゝめるところを買つて下さい女性の小説十日一杯に仕上げたいと存じて居ります十一日午前に君を訪問かたがた持つて行きます或は行くつもりです或は又行かれる事を祈つてゐます右とりあへず當用のみ　頓首

七月八日　　芥川龍之介

藤澤清造樣

八三〇　〔七月十六日田端から。小杉未醒宛〕

冠省いつぞやは留守にて失禮いたし候又高著をいたゞき難有く存候快猛和上の話などあの話の中の銃聲の如く人を驚殺せしめ候金冬心と申すもの御めにかけ候但しこれは贋なる可く候贋なりに御賞翫下され度候今日は多用の爲折角ながら參上いたし兼ね殘念に存候いづれ近々拙著獻上かたがた拜趨いたす可く候何とぞ岸田木村兩先生へよろしく御鳳聲下され度候

高著の中の玉句を見いささか吟興を生じ惡句製造仕候御一笑下され度候

藤の花軒端の苔の老いにけり

七月十六日　　龍之介

放庵先生侍史

二伸　近々中に僕と岸浪靜山君のところへ畫を見に行きませんか行つてくれませんか

八三一〔八月一日田端から。小穴隆一宛〕

冠省島流し見たいぢやお困りの事と存候君の立つ時もう少しまではよいのにと思つた僕は今夜甲州へ赴き五日夜か六日朝歸京早速君の所へ出かけるそれまで辛抱して待ち給へ僕も仕事を持つて行く故一しよに勉強しよう三汀、菅先生の日常想察出來る昨夜一時頃迄北原君の所にゐたすゐ大分見た空谷先生は墨竹を描き大得意

〔空谷山人寫墨竹の模寫あり〕

と云つた形のもの但しこのコピイほど棕櫚竹じみてはゐない諸先生によろしくなほ又三汀居士とでも小町園へ行つたらお上さんお菊、お淺の諸麗によろしくぢきに行く故もう少し我慢し給へ昨日朝迄女性の仕事にかかりつきり　頓首

八月一日　　澄江堂

一游亭先生　侍史

八三二〔八月二日山梨縣秋田村清光寺から。繪端書。小穴隆一宛〕

この山中の清光寺にあり日々文學論なるものを講じ居り候清光寺の方丈さんは高橋竹迷氏と申し曹洞宗中の文人なり方丈さん畫を描き僕句を題すこの間多少の魔風流ありと思召され度候　頓首

八月二日

八三三〔八月五日山梨縣秋田村清光寺から。高橋竹迷と寄書、岸浪靜山宛〕

夏期大學の先生に來たところ思ひかけず庵主は竹迷上人なり、爲に教育會のお客だか竹迷上人のお客だかわからぬやうに相成候　頓首

龍之介

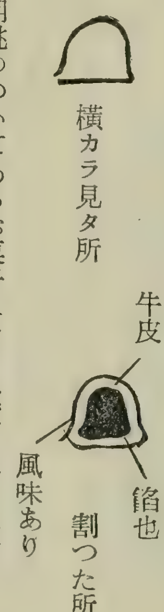
八三四　〔八月九日鎌倉から。庭前小景と題する小穴隆一、渡邊庫輔、芥川龍之介合作の寄書繪端書、下島勳宛〕

描電線者渡邊庫輔、描藤棚者小穴隆一、描松者芥川龍之介

松風や紅提灯も秋どなり　（我鬼）

八三五　〔八月十三日鎌倉から。谷口喜作宛〕

冠省鎌倉に來てうまいお菓子なく困り居り候間お手製のお菓子お送り下され度願上候お菓子は



とまん中に胡桃のついてゐるお菓子になされ度これを二折にて五圓におこしらへ下され度候なほその外に最中我々の食べる分だけよろしく御見つくろひおん送り下され度候なほお金は勝手ながら歸京の節差上ぐ可く候間送り狀御封入下され度願上候右當用のみ　頓首

八月十三日　芥川龍之介



閑心亭御主人　おんもと

おん送りさき　相州鎌倉停車場前平野家內　芥川龍之介

八三六 〔九月十二日田端から。小穴隆一宛〕

冠省 あの蓮と菖蒲と一しよに咲いてゐる句を前書きと共に書いてくれませぬか 大震雜記の中に加へるのですもう原稿は出來てそこだけ明けてあるのですから右當用のみ

二伸 ボクチヤンにお菓子のおみやげ難有う僕も上前をはね、甘納豆に久しぶりでありついた

頓首

九月十二日　　澄　江　堂

一游亭御主人

八三七 〔九月二十八日田端から。中根駒十郎宛〕

拜啓御手紙拜見しました成程印紙は燒けちまつたらうと思ひます八十三圓殘金の旨も承知しましたしかし小生の親族共燒け出されの爲、お金入用なのですが今月卅日ごろまでに百圓程御都合下さいませんか、「夜來の花」の縮刷印税を前借と云ふ事にして、甚勝手がましい御願ひですがどうかよろしく御取計らひ下さい御都合によりお金は使をさし上げても、下すつても結構です 勿論御斷り下すつても好いのですがなる可く御ひきうけ下さい右とりあへず當用のみ 頓首

九月廿八日　　芥　川　龍　之　介

八三八 〔十月十八日田端から。堀辰雄宛〕

冠省原稿用紙で失禮します詩二篇拜見しましたあなたの藝術的心境はよくわかります或はあなたと會つただけではわからぬもの迄わかつたかも知れませんあなたの捉へ得たものをはなさずに、そのまゝずんずんお進みなさい（但しわたしは詩人ぢやありません。又詩のわからぬ人間たることを公言して

ゐるものであります。ですからわたしの言を信用しろとは云ひません信用するしないはあなたの自由です〕あなたの詩は殊に街角はあなたの捉へ得たものの或確實さを示してゐるかと思ひますその爲にわたしは安心してあなたと藝術の話の出來る氣がしましたつまり詩をお送りになつたことはあなたの爲よりもわたしの爲に非常に都合がよかつたのです實はあなたの外にもう一人、室生君の所へ來る人がこの間わたしを訪問しましたしかしわたしはその人の爲に何もして上げられぬ事を發見しただけでしたあなたのその人と選を異にしてゐたのはわたしの爲に愉快ですあなたの爲にも愉快であれば更に結構だと思ひます以上とりあへず御返事までにしたためましたしかしわたしへ手紙をよこせば必ず返事をよこすものと思つちやいけません寧ろ大抵よこさぬものと思つて下さいわたしは自ら呆れるほど筆無精に生れついてゐるのですからどうか今後返事を出さぬことがあつても怒らないやうにして下さい

十月十八日　　芥川龍之介

堀辰雄様

二伸なほわたしの書架にある本で讀みたい本があれば御使ひなさいその外遠慮しちやいけません又わたしに遠慮を要求してもいけません

八三九　〔十月二十九日田端から。香取秀眞宛〕

拜復紙も封筒も無之候間これにて御免蒙り候道閑會はまだ小杉氏へは參らず候へども菊池にはその旨つたへ置き候小杉氏へも今日中に申上ぐ可く候なほ又鹽田さまへお禮をなされ候節は小生へも一口仰せつけ下され度願上候右とりあへず當用のみ　頓首

十月廿九日　　芥川龍之介

香取先生　侍史

八四〇〔十月二十九日田端から。香取秀眞宛。前便の返事へ折返して〕

ふたゝび拜啓　ではさう云ふ事にいたすべく候あまり書く事無之候間ほ句一つお目にかけ候　頓首

朝顏や土に匍ひたる蔓のたけ

廿九日　　　　芥川龍之介

香取先生　侍史

二伸　書く事なしと思ひ候ところいろいろ有之候間追て書きにいたし候道閑會は來月六(火)七(水)の中にては如何に候や又鹽田氏への御禮すでにお加へおき下され候よし難有く存候なほこの御返事は今夜後刻參上の節承り度候　頓首

二十九日　　　　龍之介

香取先生

八四一〔十二年(推定)十一月一日田端から。小穴隆一宛〕

昨日は失禮いたし候つぼなにぶんよろしくねがひ上げ候歌謠類聚ついでを以つて御とどけ申上候右とりあへず當用のみなほ水上君にお米をもらひしお禮遠藤さまに箱や壺の手入をねがひしお禮なにをいたしてよろしかる可きや御考へおき下され度候右とりあへず當用のつづきのみ　頓首

十一月朔夜　　　　芥川龍之介

小穴隆一様

八四二〔十一月二日田端から。下島勳宛〕

まいどいろいろ頂き難有く存候昨夜のまるめろは酸くして小生の胃にはだめなれど姉は大好物故早速

頂戴仕る可く候

卽笑

草の家に柿十一のゆたかさよ

十一月二日　　龍之介

空谷先生

八四三　〔十二年（推定）十一月七日田端から。香取秀眞宛〕

冠省　道閑會の件につき幹事よりも御手數を相かけ申訣無之候扨いよいよ十日午後五時より自笑軒に開催いたす事にとりきめ候間何とぞ右鹿島小杉兩先生へ御申達下され度平に願ひ上候當日は菊池の外に大彥の主人（老人の方と思ひ候へどもこれは多摩川に居り引張り出すのも氣の毒と存候間若い方にいたし候）を出品いたす可く候右とりあへず當用のみ　頓首

十一月七日　　芥川龍之介

香取先生　侍史

八四四　〔十一月七日田端から。勝峯晋風宛〕

冠省その後御無沙汰いたし申訣無之候かつ又おん母上樣おなくなりなされ候砌も病のためえまゐらず御寛恕願上候扨にひはりに何か書けとの仰せ拜承仕り候御厚意難有存じ候ほ句は餘技の又餘技位のところ故活字にするのも臆面なき次第ながら持ち合せ居候句少々おん目にかけ候皆前書き澤山にて恐縮に候へどもこれも餘技の又餘技たる所以とおん見のがし下され度候右とりあへず當用のみ　頓首

七日夜　　芥川龍之介

勝峯先生　侍史

八四五　〔十一月十七日東京神樂坂から。寄書、久米正雄宛。封筒に「十一月十七日夜四海波七人男　註ニ曰孝子ヲ擧グル日」とあり〕

夜寒さを知らぬ夫婦と別れけり　龍之介

〔里見弴筆汽車の畫あり〕

評ニ曰クスティームが洩れたつてれ　弴

追懷

しのぶれど色に出でにけり我戀はくめや思ふと人の問ふまで　薫

十二年地異人變の起る年　三十三

〔プラットホームに差しかゝりし汽車の畫あり、〃新婚旅行大阪までゆきとあり〃〕

大阪でお待ちいたします　なか山　根本

此の欣び頒つ者茲に二百人　菊池寛

十一月十七日

奥野正雄様

神樂坂ゆたかニテ

八四六　〔十二月一日田端から。飯田武治宛〕

冠省雲母落手難有く存じますいろいろ拙句に御高評をたまはり感佩いたして居ります拙句「癆痎の頬美しや冬帽子」と申すのは錞句「死病得て爪美しき火桶かな」からヒントを得たものと記憶しますこの頃舊來の句みないやになりと云つて新しい句境を拓くは容易ならず唯漫然と消光してゐますとりあへず御禮まで

久しぶりに姪を見て

かへり見る頰の肥りよ否いろ
御一笑下され度候
十二月一日
芥川龍之介
飯田武治樣 侍史

八四七〔十二月十五日田端から。石黑定一宛〕

冠省御手紙ならびに奈良漬難有く落掌いたしました君の前に上海から東京へ來られた時日本橋の何處かの宿屋から僕へ手紙を頂いたことがあるでせうあの時僕は病の爲湯河原へ行つてゐたのです湯河原で君の手紙を(附箋のついた)受取つた時はもう君の東京にゐない時分だつたのですが念の爲宿へ長距離電話をかけて見ましたさうしたら昨日お立ちになつたとか云ふ事でしたその次第を手紙に書かうと思つてゐるうちに無精の爲、とうとうお流れになつたのですすると春服の出た時君に手紙を頂いたので、今度こそはと思つたのですがやつぱり天性の疎懶に負けてしまつたので、おわび代りに侏儒の言葉の一章を君に獻ずる事にしましたから云ふ具合にこの手紙を書く迄には何度も書かう〳〵と思つたのですがいつも思ひ思ひ書かずにしまふのですどうか失禮は不悪御高免下さい實はこの手紙ももつと早く差上ぐべきものですが新年號の〆切りや何か控へてゐた爲、又だら〳〵とのびてしまつたのです僕は明朝京都へ行き一週間ばかり遊んで來るつもりです 以上

十五日
芥川龍之介
石黑定一樣

八四八〔十二月十五日田端から。中根駒十郎宛〕

拜啓 昨日は失禮しました今日旅へ出るにつき手紙など片づけたら富士印刷の配當を貰つてゐなかつ

たのを發見しましたゆゑ、貰ふ量見を起しましたどうか然る可く御取計らひ下さい　以上

十二月十五日

芥川龍之介

中根駒十郎様

八四九　〔十二月十六日田端から。渡邊庫輔と寄書、室生犀星宛〕

竹垂るる窓の穴べに君ならぬ菊池ひろしを見たるわびしさ
遠つ峯にかがよふ雪の幽かにも命を守ると君につげなむ
秋たくる庭たかむらに置く霜の音の幽けさを君知らざらむ

詩の御返事

露芝にまじる菫の凍りけり

震災後に芝山内をすぎ

松風をうつつに聞くよ古袷

久しぶりに姪にあひ

かへり見る頰の肥りよ杏いろ

十二月十六日

芥川龍之介

室生犀星様

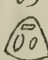
八五〇　〔十二月十八日田端から。室生犀星宛〕

冠省　先達てお菓子を難有う存じました新年號やら何やら忙しい爲、つい御禮も出さず失禮しました又この間は菫の詩をありがたうこれも次手にお禮を申上げます（僕は今度小說の如きもの四つも書きましたその爲大へん忙しかつたのです）やつと仕事も片づいた故けふの夜大阪へ參らんと存じてゐま

す大阪で思ひ出し候へども大阪每日のサンデイの隨筆にちよつと君の事を書いた、活字になつたらよんで下さい君の家には今酒井眞人の一家が住んでゐます菊池はねあの敷石を綺麗に拭つておき、離れと書齋との往來は跣足でしてゐました以下卽席に歌を作ります

君がたびし菓子やくひけむ吾子（アコ）の口赤き涎を垂らしてゐたり

八五一　〔十二月二十二日大阪から。芥川宛〕

拜啓　十七日朝京都着ひどく寒いのに驚きました往來で人が焚火をしてゐる、火がぱちぱち云つて燃えてゐるその火迄寒い位です胴着を着てきてよかつたと思ひました。抱月へ着き、恒藤を訪問、恒藤は香取さんから買つた花瓶を人にやるのが惜しくなつたよし四つとも床の間に並べてゐますヒガキ茶屋を御馳走になる十八日小林雨郊來る（京都の習慣により、小林の僕を紹介した爲、宿では僕の言葉を待たず小林へ通知するのです）一しよに道具屋をのぞきまはり、天祐禪師の一行もの一幅を買ふ、中中よい出來なり、ネダンも東京にて買ふよりは安きかと存じ申し候夜活動を見る十九日雨ふり、炬燵へはひつて（その炬燵はまづ泥のの形をした安全炬燵に火を入れそれを敷布團の上へのせその上へ薄い布團をかぶせその又上へ薄い布團をかぶせる故、二時間もたたねば暖くならず暖くなつても比叡山の向うへ春が來た位の暖さなり）ぼんやりしてゐたら、小林より電話日の暮より万亭（とは一力也）へ參れとの事故、晝のうちに用をすませんと辻氏へ大雅の畫を見に行きたれど留守なり谷崎を訪ねれば一家共に神戸六甲ホテルへ行きしよしにて留守なり山科の瀧井や志賀をたづねんと思ひしかど面倒臭き故やめ、夜一力へ行く。古襖古疊の十五疊、眞鍮の獅嚙火鉢を四つ並べてもまだ寒いのに弱りました。

藝子三人、一人は腹が痛いと云つて藥ばかりのんでゐた　七十二になるお婆さんの舞を見せられる。

二十日鄕原醫學博士に丹榮の御馳走になるここは鰻屋にして鰻なしにも飯を食はせる所のよし庭に石

あり水あり瓢亭じみてゐて甚よし　この料理と後にくひし汁粉の爲胃痛み、少々困る、新京極で偶然瀧井に遇ふ二十二日に引越すよし、志賀さんは二十一日に東京からかへるよしなど聞き、二十四五日頃新居と細君と志賀さんとにあひに行く約束をしました　けふ(二十日)夜やつとこのホテルへ參り、明日社へ行き明後日小山内植村などにあひ、ついで故明後後日はちよいと奈良の博物館へ參り、前の三中の教頭、今の奈良師範の先生佐藤小吉先生を訪問その翌日京都へかへり、恒藤瀧井志賀などにあひ、二十五日頃京都を立つてかへる了見です、なるべく氣樂にぶらぶらしてゐようと思つても人が來ては方方ひつぱりまはす故さほど氣樂にならず、何しろ寒いのにやり切れない家の中でも手拭が凍る

又いづれ

龍　之　介

二伸　義敏伯母さんの肩をよくもむや否や子供どもの病氣もよろしきや否や

恒藤の子供(女)はもう笑ふ名は初子小林はもう四人の子もちになつた

八五二　〔十二月三十一日田端から。下島勳宛。奉書紙に認め袴を包みて〕

たてまつるこれの袴は木綿ゆゑ絹の着ものにつけたまひそね

大つごもり

龍　之　介

八五三　〔十二月三十一日田端から。久米正雄宛〕

旅に病みやうやく昨夜歸京けふ君の所へお祝を持つて行かばやと存候へども多忙の爲果せさうもなければすなはち甥をつかはし大彥のお祝ひをさし上げ奉る僕のお祝は來年になつてから　頓首

大つごもり

芥　川　龍　之　介

久　米　正　雄　樣

二伸　大彥は府下駒澤村住宅地大彥野口功造にて禮狀をお出し下され度願上候　頓首

八五四　〔大正十二年(推定)田端から。與謝野寛宛〕

拜啓　御すすめ難有く存候いろいろ時間の工めん致し候へ共四月はむづかしく五月にては如何に候やそうじて雜誌を書くには新聞を休まねばならず休めば薄田の田守やかましくでん報を打ち候間この頃は小生も進退谷まり居り候何とぞお次手の節あまり原稿をはたらぬやう泣菫先生へ御說得なし下され度願上候　頓首

二月二十七日　芥川龍之介

與謝野寛樣

八五五　〔大正十二年(推定)田端から。小穴隆一宛〕

冠省春服一部たしかにおとどけ申上候なほ四日(土曜)五日(日曜)は留守にしたり留守にしないまでも客が多かつたりする故兎屋さんと來るたらなる可く外の日にしませんかそれから僕の畫(卽ち君の畫)は(庭の畫)は額緣へ入れるなら硝子を入れるやうにして頂き度願上候麤紙草毫字を成さずよろしく御判讀下さい　頓首

三日　澄江堂

一游亭御主人

八五六　〔大正十一・二年(推定)田端から。小杉未醒宛〕

ただに見てすぎむ巖ぞ雲林の弟子とならむは轉生ののち
のみ執るはあなむづかしと麥うるしここだも使ふ指物師われは

天ゝぎらひふるアメリカにわがあらば牛飼ひぬべしジエルシイの牛を
唐くにに生れましかば李義山の家のやつことならんとするらむ

十六日

龍之介

放庵先生侍史

大正十三年

八五七　〔二月二十日田端から。野上豐一郎宛〕

〔冠省先達は御手紙難有うございました唯今京都から人が來て居ります爲御馳走になりに上る事は出來兼ねざんねんに存じますが尾上氏だけは是非きかせて頂きに上りたいと存じてをります右とりあへず（遲れて餘りとりあへずでもありませぬが）御返事まで　頓首

芥川龍之介

野上樣　侍史

八五八　〔十三年（推定）二月二十二日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓格別用はなけれども愚甥、君の畫が見たきよし就いては用を拵へてくれその手紙を持つて行つた次手に見て來ると申せば用のなき手紙をしたゝむる事如斯しけふ千葉縣下へちよつと出かけ遲くも明日はかへるつもり　頓首

二十二日

澄江堂

一游亭御主人

八五九　〔二月二十七日田端から。小穴隆一宛〕

歌謠類聚ながなが難有存候子供に命じおん返し申上候

この頃の句

春雨の中やいづこの山の雪
おらが家の花も咲いたる番茶かな

御一笑まで

二十七日　　　　　澄江堂

一游亭御主人

八六〇　〔三月十二日田端から。瀧井孝作宛〕

この頃の句

蛇笏に

春雨の中や雪おく甲斐の山

南京城中の五分の三は麥隴なり

市中の穗麥も赤み行春ぞ

夜宿清光寺

木石の軒ばに迫る夜寒かな

小閑を得たり

おらが家の花も咲いたる番茶かな

乞玉斧

十二日　　　　　龍

折柴さま

八六一　〔三月十三日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓御入選おん祝ひ申し候一點だけと申すは沙汰の限りなれど人間萬事沙汰の限りとあきらめ祝意を表すことと致し度く候招待日には二時頃參る筈、その頃お出になればお目にかかれる事と存候但し仕事未だ片づかず、餘りゆつくりは出來ぬ事と存候右とりあへず當用のみ　頓首

三月十三日　　芥川龍之介

一游亭先生　侍史

八六二　〔三月二十五日田端から。齋藤貞吉宛〕

原稿用紙で失禮する。君の手紙に返事を出さなかつたのは三重四重五重にもあやまる。しかし俺の受け取つた手紙は今度のとも三本しかないぜ。(君は第四信と云つてゐるが)それから別府まで來たものならどうせ東京へも來るだらう東京へ來たら勿論一しよに遊べるだらうと高を括つてゐた爲もあるのだからむやみに憤慨したり何かしちあいかんなぜまた無暗に支那へかへるのを急ぐのだ漢口なんかつまらんぢあないか。用さへうまく胡麻化せればちよつと東京へ出て來ちあどうだ？　東京滯在費位は俺が負擔するよ(これまた見縊るなどと憤慨しちあいかん。)ほんとうにさうしないか？　俺は來月五日位になるとひまになるその頃出て來て俺のうちの側の旅館に宿をとるのだ澤正や左團次も芝居をやつてゐるし東京の燒跡を一見するのもお前のやうな人間には多少の利益のあるのを確信するねどうだ一つ奮發しないか？　俺もお前の蟬に似た顏を見たいから　お前の第一信は忙しくなる最初に來今度のは忙しさの終らんとしてゐる所へ來たのだ去年の九月十日頃には西川と一日日を暮した西川は可愛さうに洋行土産をみんな燒いてしまつたよ中原も橫濱で睫毛までも焦がしたさうだ俺は泰然自若としてゐた何しろ風を引いてゐたから動くと熱の出るのが怖かつたからね三中金燒吉田の惣ちやん(大工の子)は燒死したけふは滕固といふ支那留學生に會つた上海の「創造」同人のよし又支那が戀しくなつたもう一度豚のゐる町を歩いて見たいしかし今度は西洋へ行つて見ようかと思つてゐる尤もこれは金

の融通のつき次第だからいつの事になるかわからないお前は金儲けを使命とする實業家なんだから早く金を儲けて俺のペエトロン位にならなくつちやいかん

俺の本も春陽堂や改造のはみんな燒けてしまつたおかげ樣でサバサバした「羅生門」「傀儡師」の類は未だに罪障消滅せず本屋の店に殘つてゐる

來月中旬頃は菊池と二人で熊本まで行くかも知れないがあまり當にならない行けば而してお前がその頃も別府にゐれば訪問する志はあるしかし相成る可くは前に書いたやうに電報を一本俺へよこしそれからちよつと上京しろよ以上ざつと當用のみ

三月廿五日　　　　龍　之　介

貞　吉　樣

二伸　お前はまだ獨身かい俺はもう倅を二人持つて居る

八六三　〔四月四日田端から。泉鏡太郎宛〕

拜啓先夜はお招きに應ぜず失禮いたし候又今日は高著おん送り下され難有く存候實はもう四五日前に一本――と申上げ度くは候へども二本ばかり購ひ居り一本は西洋にゐる友だちへ送つてやつた次第に御座候七寶の柱三本と申せば何やら極樂の請負めき候へどもまことに三本手に入り唯今はさきの一本を如何なる善男子善女人に拜領させんかと考へ居り候右とりあへずお禮まで如斯に御座候　頓首

四月四日　　　　龍　之　介

泉　先　生　侍史

八六四　〔四月十日田端から。小澤忠兵衞宛〕

冠省御手紙難有うございました先だつての硯のお代もあり是非々々參上せねばならないのですが

つい〳〵手前にかまけ失禮して居りますどうか平におゆるし下さいいづれ十五日すぎには小閑を得る事と存じますからその節は拜趨、いろいろ御話を伺はうと思つて居りますこの頃

黑南風(クロバエ)の大うみ凪げるたまゆらや

うすうすと曇りそめけり星月夜

南京

市なかの穗麥も赤み行春ぞ

龍門

莊嚴の梁をまぶすや麥ほこり

春雨の中や雪おく甲斐の山

など作つて見ました相不變ものになりませんが、御高批を賜れば幸甚と存じます半月ばかり女中の一人もゐない爲、子供二人をかかへ、小生まで忙しい思ひをして居ります

咳ひとつ赤子のしたる夜寒かな

頓首

四月十日夜　龍之介

小澤先生侍史

八六五　〔四月十四日田端から。香取秀眞宛〕

冠省先夜御光來下され又おやぢに美酒をいただき難有く存候　同封子規居士の短尺一葉御らんに入れ候これも百年位立ち候はゞ價も出づ可く候これにても拜受の短尺は天下有名のものなるを知り愈難有く相成り候右おん禮かたがたおなぐさみまで　頓首

四月十四日　龍之介

香取先生

八六六　〔四月十五日田端から。畑耕一宛〕

拝啓いつぞや君のパイプをあづかり放しにし、申訣無之候扨同封の原稿は小生の知人持田日澄と申す宗教改革家より「角笛」に出したきよし、頼まれしものに候唯「角笛」係御中に送るよりは大兄のおん口添へを得し方間違なしと存じ、同封仕り候間何とぞよろしく御世話下され度平に願上げ候　頓首

四月十五日

芥川龍之介

畑耕一様

八六七　〔四月二十日田端から。香取秀眞宛。封筒に「堂余利須無子とあり」〕

拝啓先夜は失禮いたし候さて女史儀同封の通り申し參り候間御都合よろしき日を御敎へ下され候はゞ參上いたさす可く候二十二、三、四日中いつの午後がよろしく候や伺上候早速參上仕る可きの所日曜故客まゐり居り手紙にて失禮仕候右とりあへず當用のみ　頓首

四月二十日

龍之介

香取先生

八六八　〔四月二十三日田端から。小穴隆一宛〕

はいけい廿四日にいよ〳〵きまり候や否やちよつと伺ひ上げ候小生未だに來月分の文債を果さず弱り居り候なほ甥の坊主君の所へ行く度に何かにありつく習慣ありあれは御心配御無用になされ度候右とりあへず當用のみ

四月廿三日

龍之介

八六九　〔五月二日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓玄文社の小林德三郞氏を御紹介申上候用向は玄文社より小生の平安朝もののみを集めたる短篇集「泥七寶」を出すにつき裝幀をおたのみする爲に候(新聞社のとは別なり)表紙、扉、見返し、にて四十圓のよしその範圍にてお骨折り下され度、どうにか平安朝じみて居さへすれば結構に御座候　頓首

五月二日　芥川龍之介

小穴隆一様

八七〇　〔五月八日田端から。香取秀眞宛〕

冠省昨日は失禮いたし候書物往來出來致候間一部獻上仕り候なほ又唯今鹽田先生より芳翰拜受、餘り長い故、中途まで讀みかけ、この手紙を先にしたゝめ候　頓首

八日　芥川龍之介

香取先生

八七一　〔五月九日田端から。端書、安成三郞宛〕

御手紙拜見しました小生も趣味上の不見轉ですがどうも建築の事を云々するほど勇氣はありません何とぞその邊御領承の上御かんべんに預りたいと存じますなほ瀧澤眞弓君は僕と同じ中學を出た人ですが、御誌に論文を書いてゐるのを見、ちよつとなつかしく感じました　頓首

八七二　〔五月十二日田端から。香取秀眞宛〕

冠省菊池寛より讃岐の國の鹽釜にて燒きたる鯛を貰ひ候間少々ばかりおすそわけいたし候王子に御來知のとほり鯛の腹の中より出でしものに御座候さのみ風味は無之候とも

鹽釜のけぶりをおもへ春のうみ

五月十二日　　龍之介

香取先生

八七三〔十三年（推定）五月十三日田端から。蒲原春夫紹介狀、鎌倉小町園宛〕

はいけい、この手紙持參のひと參り候節はおとめ下され度、但しわたくしほどえらい人には無之候あひだ、あまりおかまひなさらぬやうに願上げ候。

五月十三日　　芥川龍之介

小町園御中

八七四〔五月十六日金澤から。繪端書四枚、小穴隆一宛〕

啓出發前に一度お目にかかるつもりの所、立つ二三時間前までものを書かされ、つひに參上の機を得ず殘念に存候泥七寶の裝幀出來候よし水上君より承り候珍重に存候なほ黃雀風と申す題は未定につき、その方の御考はもう少しお待ち下され度候（題に餘りかかはらぬものならば結構也）僕今犀星先生の世話にて兼六公園の中の三よしと申す御茶屋に居り豪奢をきはめ居り候見とり圖を書きかけたれど面倒故おやめ、まづ十五疊の座敷、十疊の次の間　八疊の茶の間、六疊の女中部屋、四疊半の茶室、四疊の玄關、臺所、二疊の後架等全部僕のものになり居り候へばそれだけでも甚僭上の所、屋を繞つて老扶疎、樹間に瓢池を臨み、茶室の外には瀧のある次第、風流おん察し下され度候なほ明日一日滯在直ちに京阪へ向ふつもり、二十三四日位には歸りたしと存居候それから長生殿と申すお菓子一折お送り

申候間小さいかたにさし上げて下され度候、犀星先生よりもよろしくとの事に御座候

五月十六日　龍之介

八七五　〔五月十六日金澤から。繪端書二枚、下島勳宛〕

昨日は御見送り下され恐縮に存候小生唯今兼六公園内三よしと云ふお茶屋に居り、十五疊の座敷、十疊の次の間、八疊の茶の間、四疊半の茶室、四疊の玄關、六疊の玄關次の間、臺所、湯殿等を一人に使ひ居り候、屋を繞つて大樹扶疎、殆ど錢叔莫の畫中にある想ひ有之候、是皆犀星老人の心配によるもの、大いに恐縮に存居候（もし先生御出での節はやはり此處に御泊らせ申すとのこと）紅殼塗りの欄干によれば瀧あり、新綠の間に落つ、老鶯處々、久しぶりにて俗腸を洗ひ申候　以上

十六日　金澤　龍之介

八七六　〔五月二十日大阪から。能澤かほる宛（寫）〕

はいけい　この人はおのぶさんと申し、大阪南の名妓にござ候　この人に君のことを話し候ところぜひおしへて上げたいことがあると申し候間御紹介申上げ候

龍之介

久しぶりで先生にお目にかゝりあなた樣のお話をきゝました　おからだがおよわいさうですがおさつし申します　私は病氣でおねがいいたしたとはちがいますが　心配事がありましてそれを金神樣でお話をきゝ助けていたゞきました　それで今日ではほんとによろこんでをります　どんな病氣でも心配事でもお助け下さいますゆへそちらに金神樣の敎會がありましたらおまいりにおいでになってはいかゞです　なるべくおいでになりましたらよくお話をおきゝになつたほうが　よくわかりますしましたおかげもいたゞけますすゆへぜひおまいりなさいませ　私もそちらへ行ける時がありましたらお目にかゝります　あなたも大阪へおいでになりましたらおより下さいませ　これにて失禮致します

のぶ事　一　勇

かほるさまへ

このおのぶさんと申す人は善い人にござ候間おのぶさんの申すことは御信用なさりてよろしく候頓首

五月二十日　龍之介

子

とんだや　三代鶴

丘郎

かつらや　たみ歌

大和家　福太郎

直木や　三十三

この直木や三十三と申すは男にて悪たう也この男の申すことは御信用なさるまじく候

龍

八七七　〔五月二十二日京都から。端書、瀧井孝作宛〕

拜敬今日入洛いたし候明廿三日午後二時頃ちよつと志賀様へ参上仕り度き用事有之候へども御在宅願はれまじく候や、志賀様の宿所不明につき君までこの状奉り候宿は安井北門拘月、今日はずつと夜も留守にいたし候　頓首

八七八　〔五月二十五日京都から。室生犀星宛〕

京都に來たり、旅疲れの爲にねたり。東山の若葉、今更のやうに見事なり。大いに君の來なかつたことを遺憾とす。

瀧井折柴、志賀直哉兩先生に會ふ。兩先生に送つた筈の長生殿、未だにとどかず、當時例の箱を三箱送る、薄田氏への一箱は確かに屆きたり。京都市吉田中大路町三十二瀧井孝作、並びに同氏氣附志賀直哉兩氏宛の長生殿はとどかず。少々業腹故、同封の受取を以て一度おたしかめ下さらば幸甚。但し埒明くや否や疑問なり　今日の特急にて歸京、早く東京へ來給へ。なほ又大阪から送つた陶書御落手の事と思つてゐる。長生殿の前例ある故、念の爲つけ加へ候　頓首

二十五日

芥川龍之介

室生犀星様

八七九　〔五月二十八日田端から。桂井未翁宛〕

冠省金澤に參り居り候節は種々御厄介に相成り殊に三芳庵の別莊を御世話下され候段難有く御禮申上げ候あれより大阪京都をへて二三日前歸京いたし候へどもアンマリアセナイ旅デスサカイ一日あまりは病人同樣に相成り候なほ又頂戴の可觀小說ぽつぽつこの頃よみはじめ候所備後の大蛇退治やら六蔦坪の土左衞門やら柳三省の文章やらいろいろ面白きもの出て參り、是亦大いに忝く存居り候東京へ歸れば日々塵勞、はるかに名園の新綠を想ひ候こともすでに一再には無之候右とりあへず御禮まで如斯に御座候　頓首

五月二十八日

芥川龍之介

桂井未翁様

二伸過日申上げ候句空秋の坊等の句集は是非共おまとめに相成り候やう念には念を入れておんすゝめ申上げ候　草々

八八〇　〔五月二十八日田端から。中根駒十郎宛〕

拝啓先達は失禮しました扨旅行中お金をつかひ果し、貧乏して居り候間今日午前、蒲原春夫君にたのみ、お店へお金百五十圓ばかり拝借にやりし次第、もし午前中に同君にお金を渡されざる節は御光來の折御持參下され度、よろしく願上候實は昨日壺一つ買ひ、今にもお金と引きかへに持つて來るかと思ひ居る所胸中御同情下さる可く候もちろん午後は在宅仕り候右とりあへず當用のみ　頓首

五月二十八日　　龍　之　介

中　根　様

八八一　〔五月二十八日田端から。室生犀星宛〕

冠省二十六日に東京へかへりまる一日病人のやうにねてしまつた落雁の件いろいろ御面倒をかけて恐縮、瀧井の宿所はちやんと紙へ書いてやつたのに怪しからんものは落雁屋の番頭なり

それからお國産を澤山ありがたうお鄰の香取先生や下島先生にもお裾分けしたらうちの下の子供があの干ものを生のままかじりたがつて仕方がない君はいつ東京へ來る？君と一しよに行かうと思つてザイバイ堂へもまだ行かずにゐる　なほ末筆ながら奥さん、小畠さん、小畠さんの弟さん、女中さんにもいろいろ御世話になつて難有うございましたとお禮を云つてくれ給へ小畠さんへは手紙を出したくてもつい宿所を聞き忘れた故、桂井太田兩老人にもよろしく

金澤の作句左のとほり改作

　乳垂るゝ妻となりつも草の餅

この手紙の行きちがひになるほど、君の上京が早いと好いと思つてゐる　頓首

五月二十八日　　芥　川　龍　之　介

室　生　犀　星　様

八八二　〔五月田端から。濱野英二宛〕

崎ノ字ヲ正シト聞ケリ崎ノ字ハミナ崎ノ字ニナホシ給ヒネ
日ノ本ハ「ニッポン」ニセン「ニホン」ヲモ正シカラズト言フニアラナク

ニハタヅミノ辰マロ

ハマノノ朝臣ヒデツグ様

八八三　〔六月四日田端から。岡本敬二宛〕

冠省先達は高著御惠投下され難有く御禮申上げます大抵一度は拜讀したばかりか舞臺の上でも拜見したものばかりですが、全集と申すことを何かなしに愉快に存じて居りますなほ次手に申上げますが、數日前雜誌の批評などを見ると、高作「筑摩の湯」を久米の「地藏敎由來」に若かぬと云つてゐるのを見ましたしかし小生は久米の作よりも數等フィニッシュしてゐると存じましたこれは久米にも吹聽したこと故伯樂顏につけ加へる次第であります但し伯樂顏をする失禮はどうか不惡御ゆるし下さい右とりあへず御禮までにこの手紙をしたゝめました　頓首

六月四日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

岡本先生　侍史

八八四　〔六月六日田端から。中根駒十郎宛〕

冠省隨筆の題は「全家寶」をやめ、「百艸」といたし度候この方ゴタ〱いたさず、ハイカラなりと存候この間女性改造を書かず、又々欲しきものありても買はれぬ故お金二百圓ばかりどちらかの印税の中よりお借し下されたく願上候「黄雀風」の見返しはすでに出來、甚だ爽快なる趣あり、裝幀は見事な本に

なることと存候右當用のみ

芥川龍之介

中根駒十郎様

二伸お金は使の人にお渡し下され度候

八八五 〔六月十一日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　原稿用紙にて失禮いたし候裝幀のことといろいろ御配慮にあづかり、難有く存候唯小生の詩を出すのは少々恐縮に候へば、何とぞ下の詩の中より適切なるものを選びお書き下され度、お書きになることの容易ならざることは重々承知いたし居候へども、枉げてこの案を御採用下され度候

首夏清和新雨晴　綠荷細軟不妨行
園夫遮道自何事　梔子花開斑笋生
司馬光

榴花映葉未全開　槐影沈沈雨勢來
小院地偏人不到　滿庭鳥跡印蒼苔
司馬光

無數山蟬噪夕陽　高峯影裏坐陰涼
石邊偶看清泉滴　風過微聞松葉香
徐璣

なほこれは詩には候はねど、或はお役に立つかと思ひ

〔周處風土記〕仲夏長風扇暑　〔注〕此節東南常有風俗名黃雀長風、
〔藻林〕五月海魚變黃雀

右とりあへずおん願ひまで　頓首

六月十一日　芥川龍之介

一游亭先生

二伸なほこの中の詩をお用ひの節は「錄○○詩」となさらばよろしかるべく、「彷○○」では書のことにもなるかと存じ候　頓首

八八六　〔六月十二日田端から。香取秀眞宛〕

朶雲拜誦仕り候別封の手紙を玉稿に添へ東京日々新聞社内畑耕一宛おん送下され候はば同人よろしく取計らふ事と存候なほ昨日申上候銅印の儀寸法は左の通りに御座候間何とぞ御次手の節箱つくりに然る可く御下命下され度候

〔寸法書きの繪あり〕

寸法狂ふなと前書して

曉のちろりに響けほととぎす

六月十二日　龍之介拜

香取先生侍史

八八七　〔六月二十三日田端から。小澤忠兵衞宛〕

拜啓御手紙拜見いたしました「にひはり」御落手かどうかわからず、勝峯君は旅に出てゐる爲、ちよつと氣がかりでした「今朝冬や格子から來る」のおん句、非常に感心しました(原稿で拜見した時にはさのみにも思はなかつたですが)實にしつかりした、氣合の強い句だと思ひますその後小生は一向句作も振はずにゐますが、出來たゞけお目にかけます故、どうか御高批をお加へ下さい

乳垂るゝ妻となりつも草の餅
秋風や甲羅をあます膳の蟹
苔じめる百日紅や秋どなり
木石を庭もせに見る夜寒かな

以上

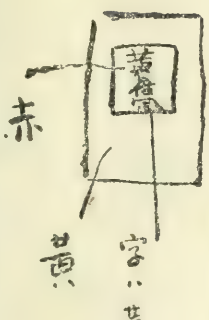
芥川龍之介

六月二十三日

小澤忠兵衛様

八八八〔六月二十六日田端から。小穴隆一宛〕

冠省黄雀風裝幀いろいろ御苦心下され難有く存候扉箱張とも結構に御座候箱は黄唐紙にて張り、黄雀風云々は黄紙へ白ヌキの赤にて刷りそれを貼りては如何に候やつまり



本の背中と同じく
□内は赤

地に黄いろく字の出る訣に候但しこれも御随意にてよろしく候それから見返しも結構に御座候あやめは結構すぎるほどに御座候下の  はお省きの方よろしかるべき乎線の定木を當てしやうに彫られ居り候爲或は奔放なる畫力を害するかも知れずと存候表紙は論ずるに及ばず唯凡骨、  等の力を忠實に現さざるは不とどきなりきつと御注文出さる可く候　昨夜は留守にて殘念岡の婚禮へ出し爲也けふは又京都のお客二人、但し明にち明後日には參上仕る可く候　頓首

近頃
苔ばめる百日紅や秋どなり
木石を庭もせに見る夜寒かな

頓首

六月二十六日　　澄　江　子

一　游　亭　先　生　侍史

八八九　〔六月三十日田端から。南幸夫宛〕

冠省御手紙拜見しましたあなたには何度も御手紙を頂戴してゐたのに當方こそいつも御返事を怠り勝ちにて恐縮に存じてゐます扨ゲエテ全集の事、聚英閣のは小生の友人も關係してゐる事であり、推セン出來ると好いのですがどうも公平に考へて大村の方のが好くはないかと思ひます少くとも大村の方が粗製濫造の弊がなくはないかと思ひます(聚英閣のゲエテ全集の廣告中豫約申込者の名前のうちに小生も加はつてゐるのは本屋の猾手段です信用してはいけません小生は目下その爲に聚英閣の松山氏と喧嘩中です) 英吉利譯のゲエテ全集といふものはあるのやらないのやらも知りません Bohn's Libraries のゲエテを買ひ集めればまづ一通りは集まります但し飜譯は保證しませんこれは次手に申上げるのですが Shelley の全集(詩だけの)の中にはファウストのブロッケン山の魔女の饗宴の件を飜譯したのがありますベンネットなどに云はせると餘りにシエリイすぎる飜譯ださうですが兎に角中々の名譯ですから御暇の時には讀んでごらんなさい
あなたはいつまでそちらにゐますか、この夏は少々覺束ないもの丶是非あなたのゐるうちに和歌山と云ふ所も見て置きたいと思つてゐます　五月雨の爲、東京はまだ甚しく暑くはありません右とりあへず當用まで　頓首

六月三十日

芥川龍之介

南幸夫樣

八九〇　（七月二十二日輕井澤から。繪端書、下島勳宛）

今日午後一時頃この宿に落つきましたここは夕方七十三四度、雨の日は六十四五度に存るさうです、まだちよつと落つきません、町には西洋人が多い故中々ハイカラです　頓首

二十二日　　かるゐ澤つる屋　芥川龍之介

八九一　（七月二十二日輕井澤から。繪端書、渡邊庫輔宛）

途中の汽車には退屈した、ここは非常に涼しい西洋人が多い故中々ハイカラである山國故鯉が食へる

日ざかりや青杉こぞる山の峡

二十二日夜　　輕井澤鶴屋內　龍

八九二　（七月二十三日輕井澤から。草津鐵道の繪端書、芥川宛）

昨日カルヰサハの停車場より宿へ行く途中、自働車にのりしにその自働車、向うより來る自働車をよけんとして電柱に衝突し、乘合ひの中學生一人重傷を負ひ僕は田の中へ投げ出され、その拍子に左の腕を折り、目下輕井澤病院に入院中院長は亞米利加人にて中々親切なり誰も來る必要なし一週間中に退院の筈。（但シコレハミナウソ）

コノハガキヲ多加志へ見セ、コレハ何ニトキクベシ

八九三　（七月二十三日輕井澤から。繪端書、室生犀星宛）

鶴屋にゐます君も來ればよいと思つてゐます來月十日頃迄ゐて、少し仕事をするつもり小畠君や何かによろしく、堀君ももう行つてゐるでせう俳句などを弄すると、小說を作る氣がなくなる故、我慢して何も作らずにゐます　頓首

二十三日　　輕井澤　芥川龍之介

八九四　〔七月二十三日輕井澤から。繪端書、蒲原春夫宛〕

「百艸」の校正中、中央公論所載の「地震雜記」(?)の分を至急こちらへ送られたし。ここは大へん涼しい夕方は七十三四度、何だか張合のぬけたやうな氣がして反つて落着かない

長野縣輕井澤町鶴屋　芥川龍之介

八九五　〔七月二十五日輕井澤から。繪端書、芥川宛〕

昨夜淺間山大いに鳴動し、戸をあけて外に出て見れば、まつ赤なる煙、去年の震災の火事の如く立ち居たり。灰少々ふる。今日は爆發を恐れ、歸京する人多し。一昨日來た市川左團次一行も歸る。鳴動は未だにやまず。伯母さん、伊藤さんに來て貰ひしや左團次は滿洲へゆくよし

八九六　〔七月二十六日輕井澤から。蒲原春夫宛〕

啓別紙の中、名前だけありて宿所なきものへ宿所をおん加への上、新潮社へお送り下され度、なほそれへ拙宅より名刺十六枚お貰ひなされ、御同封下さらば幸甚に御座候、即ち宿所のなきは鏡花、白鳥、碧童、晶子の四人に候。まづは是にて大兄を煩す用事も無之事と存候。では點呼にお出でなさる可く、はるかに送行の意を表し候　頓首

芥川龍之介

蒲原春夫様

二伸碧童は小穴、水上いづれにてもわかるべく、又あなたは文藝年鑑にてわかる可く候。

八九七　〔七月二十六日輕井澤から　繪端書、蒲原春夫宛〕

新潮から黄雀風を送らせる目録の中に下谷區櫻木町××宇野浩二を加へられたし番地は文士録にてしらべられたしとり急ぎ追加

かるゐ澤つるや　芥川龍之介

八九八　〔七月二十七日輕井澤から。山本有三、高田保と寄書の繪端書、久米正雄宛〕

靜脈の浮いた手に杏をとらへ(グリインホテルにて)　龍之介

落葉松の山に
白塗りのホテル
平らか　龍

來い來い

八九九　〔七月二十七日輕井澤から。繪端書、室生犀星宛〕

けふ山本有三君がゐる故グリーンホテルへ一晩とまりに來ました
　靜脈の浮いた手に杏をとらへ
二十七日　龍之介

九〇〇 〔七月二十八日輕井澤から。繪端書、室生犀星宛〕

この里にも鮎はあるゆゑ賜ぶとならば茶うけに食はん菓子を賜びたまへ
左團次はことしは來ねど住吉の松村みね子はきのふ來にけり
七月二十八日　　　龍

九〇一 〔七月。名刺へ、土屋文明宛〕

二伸　クチナシの句ウマイナアと思ひましたボクにはとても出來ない

けふ島木氏に君の東京へ出てゐる事を聞いた故ちよつと寄つて見た、又來る　拜
土屋君

九〇二 〔八月八日輕井澤から。小島貞一宛〕

この間は鮎をありがたうございました室生君は早起、小生は朝寢頗るちぐはぐに暮らしてゐます
日ざかりや青杉こぞる山の峽
山中の夜秋多し
据ゑ風呂に犀星のゐる夜寒かな
八月八日　　　龍之介

九〇三 〔八月十日輕井澤から。繪端書、小穴隆一宛〕

一、十五日位に仕事すむ故そちらの仕事に差支へなければ御來遊如何
二、道程は何時にても上野を發し、輕井澤下車、そこより車に乘る、二十分位にて鶴屋に來るべし

三、御來遊と定まらば一報を乞ふ、室生犀星もゐるなるべく都合をつけ御來遊になりたし　以上

十日

九〇四　〔八月十三日輕井澤から。繪端書、芥川富貴、芥川儔宛〕

をばさんとおばあさんと無精を云はずに來なさい切符を買つて送つてもよろしい晝は八十五度位になれど朝夕は非常に涼しい中央公論まだ出來ず弱つてゐる　十六七日頃かへるつもり、ぜひ來なさい
來れば二三日近所を御案内申上候

龍

〔裏に〕
コノヲンナノコハヲトコノコガネマシタカラ、シヅカニオシナサイト、イツテキルノデス

ヒロシニ

九〇五　〔八月十三日輕井澤から。繪端書、芥川文宛〕

こちらは涼しいと云ふよりも夜は非常に冷える三十錢の懷爐を買つた。ビオフェルミンはみんなのんでしまつた。但し藥屋は賣ルカもある。横文字の本を二十圓はかり買つた。岡から結婚届の印をとりに來たら（ホシヨウ人の）捺つてやつてくれ同じ宿に原善一郎もゐる。片山廣子女史もゐる

龍

九〇六　〔八月十三日輕井澤から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

お手紙拜見御無沙汰してすまない時事はほんたうにもうよしたの？こちらは日中八十三四度、夜は涼しいよりも冷える位、僕は腹を下して弱つた、外國人はアメリカ人、ドイツ人、ドイツの女の嬌喉宛轉

と「ヤア」といふのには感心した

九〇七　〔八月十三日輕井澤から。繪端書、葛卷義敏宛〕

お前にレムブランのエッチング一枚おみやげに買つた。似せものかも知れない。しかし寫眞版ぢやないんだからまづ本ものと同樣だ歸るのを樂しみに待つべし、但しおばあさんたちにこつちへ來るやうにすすめる事に成功したらやるのだよ、おばあさんたちが來なければやらない。

十三日　龍

九〇八　〔八月十九日輕井澤から。淺間山風景の寫眞の裏面に、室生犀星宛〕

御手紙拜見

つくばひの藻もふるさとの暑さかな

朝子孃前へ這ふやうになつたよし、もう少しすると、這ひながら、首を左右へふるやうになるさうすると一層可愛い雛子車は玩具ずきの岡本綺堂老へ送る事にした、けふ片山さんと「つるや」主人と追分へ行つた非常に落ついた村だつた北國街道と東山道との分れる處へ來たら美しい虹が出た廿日か廿一日頃かへるつもり

十九日　龍之介

室生君

九〇九　〔八月十九日輕井澤から。繪端書二枚、小穴隆一宛〕

君の來られないのに少々失望した。萬事その手筈にして置いたから。廿二日の搬入には吉例により、

手傳へる事と思ふ。僕は短篇を一つしか書かず、無暗に本をよんでゐるしかしもう一度廿五歳になつたやうに興奮してゐる　事によると時候のせゐかも知れない。事によると、何か書けるかも知れない此處へ來る前に石川君に「碧」を送つて貰つたり何かいろいろ世話になつてゐる。しかし宿所のわからない爲つい御禮も出さずにゐる。どうかお會ひの節はよろしく。

黄雀風一讀。神代の校正に少々憤慨してゐる。

世帶を持つ件はどうにでもなる氣を廣く持つ事なりこれは又いづれ拜晤の節。

室生がかへり、この數日全然一人暮らしてゐる。内田マコがちよつと來た。マコの渾名は河馬と云ふよし。皆に莫迦にされてゐて可哀さうな男なり　以上

九一〇　〔八月二十日輕井澤から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

本が出るよし何よりも大慶に思ふ、二三箇月前に菊池からちよつとその話の出た時に心配してゐた事が無恙出來たのはうれしい僕、此處へ來てから短篇を一つしか書かず本ばかり讀んでゐるしかしもう一度廿五歳になつたやうな興奮を感じてゐる事によると陽氣のせゐかも知れないグレンショウに會つた。以上

九一一　〔八月二十日輕井澤から。繪端書、葛卷義敏宛〕

おばあさんたちの來ないうちはかへらない、これから炬燵と蒲團とを買つて冬ごもりの用意をするぞ、少くとも十月一ぱいはゐるレムブラントの畫などは勿論やらない蒲原など來ても逐ひ返してしまふ

　鯛の骨疊に拾ふ夜寒かな

これは犀星作、

九一二〔八月二十三日輕井澤から。繪端書、鹽田力藏宛〕

度々御手紙頂き恐縮に存じます香取先生や脇本先生の御盡力とは違ひ、小生は唯岩波氏を兩先生へ御紹介申上げたのにすぎませんその他は岩波君の好意の爲にまづ好都合に事がはこびました十分には御希望に副はないかも知れませんが御不承下されば幸甚に存じますなほ小生は病的の筆無精の爲、兎角御返事を怠り勝に致しますがどうかそれは不惡御寛恕下さい右とりあへず當用のみ

八月廿三日　　　　芥川龍之介

九一三〔八月二十六日田端から。室生犀星宛〕

冠省二十三日に歸京、中央公論はとう〳〵出來ず改造のは全然失敗し不愉快に消光いたし居候「鯛の骨」の句は今もなほ精彩を減ぜず大兄一代の名什と存候追分の近く假宿(カリヤド)と云ふ所に坪一圓五十錢の地所あり林間の地にて、もしよければ山梔子夫人も買ふよし僕も買ふ氣なり君は如何　つくばひの句、藻もふる鄕は僕の句也大兄の句を添削した次第にあらずたとへば

室生犀星、金澤より「つくばひの藻も青黑き暑さ哉」と言ひ漊しければ返す文に

つくばひの藻もふる鄕の暑さかな

と云ふ句になるのに候

輕井澤土産は男もち麻の手巾一打、女もち絹の手巾二打半、毛糸の子供用スウェタア二つ、淺間葡萄飴、いそ部せんべい、その外は何やらわからぬ愁心のみ　匆々

八月二十六日　　　　澄江子

犀星先生侍史

二伸　神代君の談によれば「高麗の花」近々出來のよし神代君はもし輕井澤へ行つたら室生さんに

さう云つてくれと中根に言づかつたよし神代君は僕と行き違ひに輕井澤へ行つた故けふ僕に云い言づてをする也

九一四　〔八月田端、家にて。葛卷義敏宛〕

ハリガミ一枚〔ハリガミとは原稿用紙のつぎ貼りなり〕

ヨ　シ　坊

リ　ウ　大　人

九一五　〔九月六日田端から。得能文宛〕

冠省その後御無沙汰いたして居りますが御變りもない事と存じます扨この狀を持參する人は菅忠雄君と申し一高の菅教授の令息であります、何か文藝講座と申すものの事につき、お願ひいたしたい事がある由御多用中恐縮でありますが御引見下さらば幸甚に存じます右當用のみこの手紙をしたゝめました　頓首

芥川龍之介

九月六日

得　能　先　生　侍史

九一六　〔九月二十三日田端、家にて。葛卷義敏宛。封筒に婆加義敏佐麻、江良以叔父様とあり〕

この中にお金十圓ありこれにてルナアルの「葡萄園の何とか」と原稿用紙十とぢとを買ひ、餘りたるお金にて足りない畫の具を買ふべし筆も入れば買つてもよし

エ　ラ　イ　叔　父

二十三日朝

バ　カ　甥　さ　ま

九一七　〔九月二十五日田端から。室生犀星宛〕

冠省高麗の花難有く存じ候裝幀は大兄の詩集中一番よろしきのみならず劉生の裝幀中にても一番よろしかる可く候今曉床の中にて髣髴として句を得たり御笑覧までに　頓首

　鐵線の花さきこむや窓の穴

　九月二十五日　　　　　　　　　　　　澄　江　子

魚　眠　先　生　侍史

九一八　〔九月二十五日田端から。小酒井光次宛〕

冠省過日は高著を頂戴いたし難有く存じます又拙作をおよみ下さるよし御厚志を忝く存じます伊藤女史より御病臥のむね伺ひましたが季候不順の節どうか一層御大事にお體をおいたはり下さいとうに御禮の手紙をさし上げる筈の所、ついつい延引し申訣ありません小生も持病の胃腸を患ひ、床の上に日を送つてゐる始末であります

　　卽景

　朝寒や鬼灯のこる草の中

御一笑下さらば幸甚です　頓首

　九月二十五日　　　　　　　　　　　　芥　川　龍　之　介

小　酒　井　先　生　侍史

九一九　〔十月三日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省君のかへるまでに一度あひたいと思つてゐたが水上氏の傳言によれば君が來てもよいよしそれな

らば明四日土曜日に來て貰へれば甚都合が好いがどうだらう右とりあへず當用のみ　頓首

芥川龍之介

三日

佐藤春夫様

九二〇〔十月八日田端から。瀧井孝作宛〕

冠省短尺二枚書き損じ、四枚出來故進上いたします藍のは夜にて字が見えぬ故書かず十圓札は後半一三時間中に落筆をいそがれ、どうも自信なし昨日志賀さんと畫を見に行きましたいま少し長いものを書いてゐます君も勉強し給へ、改造九月號所載の小說中一番の白眉は君のものならん

即景口占

朝寒や鬼灯垂るゝ草の中

十月八日夜　澄江子

折柴さま　侍史

一佃高山に手織木綿の反物があつたら買つてくれ給へお金は送る故

九二一〔十月十一日田端から。佐藤春夫宛〕

染雲奉誦實はこの頃叔父が病氣の爲時々外出する故君が來た時に留守にでもしてゐると太だ不本意だ來る前日にちよつと知らせてくれないか參上してもよいのだが、ちと惡だくみあり來て貰つた方が餘程好都合なのだ田端は速達もきかず手紙も遲れ勝ち故電報でもよい　昨日谷崎潤一郎に會つた同日夜岡本へ歸つた右當用のみ　頓首

十月十一日朝　澄江子

曾枝亭御主人　侍史

九二二　〔十三年（推定）十月十一日田端から。石原新之助宛〕

冠省御手紙拝見しました兎に角強盗と云ふものは恐しいものに違ひありませんわたしも大いに恐しく感じました殊にその青年強盗が甚だ強盗的訓練を缺いてゐるのを發見した時は一層恐しく感じたものですそれから金をやつたのは勿論怪我でもさせられるのはいやだと思つた結果です尤も強盗は五十圓出せと云ふのですが五十圓やるのは困りますから、然る可く交渉を重ねた末、二十圓に値ぎりました兎に角わたしの經驗によれば、强盗にはひられたり何かしても、餘り狼狽はしずにすみますが恐しい事は確かですまづ、ちつとも恐しくなかつたと云ふ人がゐたら、嘘をついてゐるとお思ひなさい少くともわたしならばその人を嘘つきだと思ひます勿論強盗をつかまへても、强盗に道を說いて聞かせてもその人は必ず怖しかつたのに違ひないと思ふのですね尤も恐しさの持續する時間は人によつていろいろ違ふ筈ですが、――わたしなどはその後考へて見ると、三分以上は確かに恐しかつたやうですなほ又金をやる事の可否は生命を失ふのをいやだとすれば可否の問題ではなくなる訣でせうわたしは由來手紙の返事などは滅多に書かぬ人間ですが餘りあなたの手紙が青年らしい質問故、これだけの事を書きましたどうかこれを例とせずに下さい右とりあへず御返事まで　頓首

十月十一日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

石原新之助樣

九二三　〔十月十五日田端から。太田正雄宛〕

冠省御招待を蒙り難有く存じます只目下小生の親類に瀕死の病人有之參上致されるかどうか懸念いたして居ります尤も萬やむを得ない限り參上いたしたい心ぐみで居りますが何分右樣の次第故勝手ながら餘り當てになさらぬやうにお願ひいたしたいと存じます昔久米正雄と新思潮の表紙畫を描いて頂き

に參上した事がありますが御覺えになつて居るでせうか兎に角都合さへつけば是非久しぶりに御目にかゝりたいと存じて居ります右とりあへず當用のみこの手紙をしたゝめましたどうか木村莊八樣にもよろしくその旨を御傳へ下さい　頓首

十月十五日　　芥川龍之介

太田正雄樣

九二四　〔十月（推定）田端から。小穴隆一宛〕

冠省僕の叔父瀕死の狀態にある故明日の日曜はお客に會はれまいと思ふそれから例の半截の殘餘のお金御入用ならばいつにてもさし上げ候間御遠慮なく御申出下さい先方は半截二枚或は全紙一枚百圓にして頂ければ幸甚と言つてゐた僕この頃靜動別ありの說あり又賣文而不賣文の說あり拜眉の節御披露仕る可く候きのふの時事に水谷某、君の裝幀を神品と稱してゐた尤もツマラン奴の事も褒めてゐる故當にならず數日前梅原の家へ行つた時、談、君に及んだら餘事は知らず小穴君の樂しんで畫を描いて居る事はわかると言うてゐた　頓首

澄江子

一游亭先生

九二五　〔十月二十二日田端から。室生犀星宛〕

冠省その後如何けふ平木君下島さんへ來り、君が東京へ出る事を話したよし、酒井に家を明けさせる件ならば下島さんと僕とで引受けてもよい又渡邊町邊へ家を探がす事も引受けてもよい御命令を待つてゐるから遠慮なしに言つてくれ給へ片山さんへは訪問する機會を得ない胃病になつたり食道痛の叔父に死なれたり、蕭條と暮らしてゐる

朝寒や鬼灯垂るゝ草の中

あの句はかう作定した　頓首

十月二十二日

照道先生侍史

澄江子

九二六　〔十月二十二日田端から。石川太一宛〕

冠省今日麻生君の著書をうけとりました。どうも難有うございます僕は小穴君と違ひ、いろいろ氣の多い人間ですから社會問題でも何でも興味を持ちます、どうか又論戰をしに來て下さい御都合によりお友達の方をつれて來て下すつても結構です、僕は剛情ですから容易に議論を讓りませんしかしその間に利益を受ける事はいつも論敵に感謝してゐます右とりあへず御禮のみ　頓首

十月二十二日

芥川龍之介

石川曉星樣

九二七　〔十月二十二日田端から。岡本敬二宛〕

冠省いつも高著を頂き難有く存じます早速御禮を申上げる所親戚に不幸のあつた故今日に及びましたどうか不惡おゆるし下さい

この頃

朝寒や鬼灯垂るゝ草の中

十月二十二日

芥川龍之介

岡本先生侍史

九二八　〔十月二十二日田端から。高橋健二宛〕

冠省原稿用紙で失禮いたします。二度とも御手紙難有う存じます。あなたのやうな好學の士にわたしの文章の讀まれてゐることは頗る欣快に思ひます。扨 Ich-Roman ですが、エアツェラアが Ich で書くと言ふ事は必しも自敍傳小說とは限らないのぢやないでせうか。マイエルのエンティクロペディの解釋ではどうも自敍傳小說とばかりは云はれぬやうです〔九字削除〕あなた及び山岸說もまだ一考の餘地があると思ひます。小生はマイエル及びオオフェルマンス說の信者ですが、何か確證でも見つかれば忽ち變節しても差支へありません。小生もなほ考へますから、あなたもお序の節お調べ下さい。文壇の士は由來早のみこみで、藝術は長く人生は短しと云ふ事も小生の言を立てるまでは西洋人には通じない解釋のしかたをしてゐたものです。それから Ich-Drama と言ふ事ですが Ich-Drama と言ふ事はそれ自身成立つ道理はありません。ディボルドと言ふ人の說は至極尤もだと思ひます。この間も獨文科の學生子見え、大いにシルレルを辯護しました　僕のシルレルに對する評價は御承知の事と思ひます。僕は日曜日には在宅します。實はあなたのやうな好學の士をお客に持ち、大いに啓發されたいのですが、生憎さう云ふお客は滅多に來ません。大抵は文壇の毒瓦斯を愛する他稱文學青年、自稱將來の作家に惱まされてゐます。以上

十二月二十二日夜　　芥川龍之介

高橋健二様

二伸　シュピイルハアゲンなるものの Ich-Roman 根原小說を讀んだら、一番近路ですが、――ですがと言ふよりも、であり得るのですが、生憎これは小生の名も知らぬ小說であります。それ故どうすることも出來ません。

九二九　〔十月二十二日田端から。小林雨郊宛〕

冠省その後御無沙汰に打ちすぎ申訣ありません御健勝の事と存じます扨妙なお願ひですが京都の丸善に二冊ものの Life of Goethe がありました(勿論題名の通り英語の本であります)この初夏に見た時にはほひつて左の高い所にあつたのですあれは今でもあるかどうかもしあれば丸善に命じ、代金引換へにて東京市外田端四三五小生迄送らせて頂きたいのですが如何ですか誠に御面倒なお願ひで恐縮ですが、恒藤洋行し、京都にはあなた以外にお願ひする人のない爲にお手數を煩はす次第ですどうぞよろしく御取計らひ下さいなほ著者の名前はトマス何とか言つたやうに思ひますがはつきりした事はわかりません　數日前梅原君の所で師宣を見ました中々立派でした僕も今師宣を心がけてゐます

十月二十二日　　　　芥川龍之介

小林雨郊樣

二伸それから小杉君の所で新井君の造つた水瓶を見ましたひどく好い調子に出來てゐました

九三〇　〔十月三十日田端から。江口渙宛〕

朶雲奉誦僕は作家協會の外當分何協會も御免だ今でさへ何かと時間がなくつて弱つてゐる始末だどうか會員諸君によろしく辭意を傳へてくれ給へ君の朝鮮の紙を見て懐しさを生じた僕はもうあの紙をみんな使つてしまつたそれからあの黃色い封筒も敬服したあれは町に賣つてゐるものかネ賣つてゐるのならば僕も買ひたい田端笹塚相隔つてゐるが、暇の時に遊びに來ないかはがきをくれれば萬障を排して待つてゐる尤も來月四五日から二三日ちよつと旅行するが

朝寒や鬼灯殘る草の中

十月三十日　　　　芥川龍之介

江口渙君

九三一 〔十一月十二日田端から。佐佐木茂索宛〕

朶雲奉誦原稿相おくれ申訣無之候何か等閑に附してゐるやうに思はれる事心苦しきもの也御諒察いのり上げ候今日小島の所へ行きたれど留守なり山茶花の咲けると小島のはし妻のめぐし妻のをさな妻のえやし妻の日本髪に結ひたるとを見てかへる僕も大工の槌音に煩されほとほと神經衰弱にならんとする次第これも次手に御憐びん下され度候

十一月十二日　　澄江老人

大芸先生侍史

九三二 〔十一月十七日田端から。端書、室賀文武宛〕

御返事遅れて相すみませんつい今一年中一番忙しい時だものですから。但し小穴君の畫は到底その方の思召しには向きません。描いてくれる、くれないよりもよした方がよいと思ひます。やはり普通の日本畫家に普通の日本畫を描いて貰ふ方が先方の西洋人も悦びます。「秋風や」の句は近來の白眉と存じます感心しました。

十七日朝　　芥川龍之介

九三三 〔十一月二十三日田端から。南幸夫宛〕

敬啓先達は壁上の件御親切に御言葉をたまはり難有く存候その節家内より御返事申上げしつもりの所まだのよし大に狼狽しこの手紙をしたゝめ候壁土は君の所のもの故悪い事なしと存じ大いに使ひたがりしも大工の棟梁に申し候所左官屋に既にひき受けさせた上中塗りの土だけこちらからと言ふと左官

のやつ兎角彿頂面をいたすよし棟梁もこれを難澁がり居り候間やむを得ず斷念いたす事にとりきめ候今まで御返事相遲れ、その上御厚意を無にいたし候だん何とも恐縮に御座候へども平生のずぼらに免じ不惡御高免下され度候君の四つ谷の家なるものは大へん立派なもののよしこの間味津三より聞き及び候併し小生の普請は安くする事に經營慘澹いたすのみにて甚だ心細く今日も床がまちを一本奢らうかどうしようかと考へ、とうとう奢らずに我慢いたす事とせし次第に候右御詫びやら御斷りやら御愚痴やらいろいろとりまぜ亂筆をふるひ候間よろしく御判讀下され度まづは大體恐縮の意までに如斯に御座候　頓首

十一月二十三日　　　　　　　　芥川龍之介

南幸夫樣

九三四　〔十一月二十四日田端から。香取秀眞宛〕

敬啓豐後之國臼杵のかまぼこ一本さし上げ候能書によればこのかまぼこ屋は天才にてよき材料なき時はねてゐるよしに御座候　草々

十一月廿四日　　　　　　　　龍之介

香取先生

九三五　〔十一月二十四日田端から。薄田淳介宛〕

冠省御返事相おくれ申訣ありません但し半分は春陽堂の爲と御諒察下さい春陽堂曰「象牙の塔」はさし支へございませんそれで安心した所、又曰象牙の塔の版權は手前の方にありません僕曰それなら好いのはわかつてゐる春陽堂三度曰しかし二十五絃の版權は手前の方にありますが如何致しませう僕曰あるのならそれは讓つてくれ給へ春陽堂曰兎に角薄田さんに一度伺つて下さい僕曰伺はなくとも讓つて

貰へば好いのだ春陽堂日ムニヤ／＼／＼／＼就いては二十五総の版權は春陽堂にあるや否や一寸僕までお知らせ下さい今度は大至急事を運び、或は運ばさせます(實は菊池や小生の春陽堂の編輯顧問と言ふのは少くとも小生のは名ばかりにて出張もしなければ相談にも來ないのです)なほ末筆ながら高著頂戴いたし難有く御禮を申し上げます只今新年號と申す厄介ものにおはれ、朝夕特急の勢で原稿を書いてゐる次第、右とりあへず御通知まで　頓首

十一月二十四日　　芥川龍之介

薄田淳介様

九三六〔十一月二十四日田端から。泉鏡太郎宛〕

冠省「愛府」を頂戴いたし難有く存じます

目下新年號と申す厄介物の爲人よりも一月先に大つごもりの苦しみを嘗めて居りますが、早速拜見したいと思つてゐます實は拜見するとつい書く方を怠る爲拜見せずにすめば幸運なのですが、實はもうこの手紙をしたゝめるまでに趙城のおとみさんと人子話とを拜見してしまひました尤も雜誌で拜見したものもありますからまづ拜見した所が精々メ切に遲れること一日乃至一週間位と高を括つて居ります右とりあへず御禮まで　頓首

十一月二十四日　　芥川龍之介

泉先生侍史

九三七〔十一月二十五日田端から。西川英次郎宛〕

冠省術を澤山ありがたうはじめは少し澁かつたが後に食つたらうまかつた君にはハトラアの本を獻上する約束のところ未だ約束を果さず大いに恐縮に存ずる次手を以てあり合せを送る御落手下されたし、

鳥取は君、癩病が多いよしうつらぬやうに氣をつけ給へ僕は今新年號の原稿の爲にウン〳〵云つてゐる右遲れながら御禮まで、君はまだ結婚しないのか正月に東京へでも來たらよらないか　頓首

龍　之　介

西川英次郎樣

九三八　〔十二月十九日田端から。端書、中根駒十郎宛〕

冠省「羅生門」「傀儡師」なる可く澤山刷ることとし、その印稅の餘分及「煙草と惡魔」印稅至急おとどけ下され度候新年號に原稿かゝぬ爲貧乏にて弱り居候兩方合せ二百圓位にならば幸この上なしと存居候何とぞ一兩日に御工めん下され度候

十九日　芥川龍之介

中根樣

九三九　〔十二月二十五日田端から。犬養健宛〕

又原稿用紙で御免蒙ります。

先達暮中にいらつしやいと申上げましたが急に雜用多くなり、（僕には閉口な親戚づきあひ上の雜用なのですが）どうも落ちついてゐられませんから、春に御出で下さるやうにしてくれませんか。さうして日曜以外の日にゆつくり一日遊びませんか。

けふ久保田君にあつたら、あなたの改造の小說に感心してゐました。あなたが通俗的ではないかと言ふ所も念の爲に久保田君に質して見たら、やはり少しも通俗的とは思はぬと言つてゐました。久保田君又曰ひと夏ひと冬と言つてもひと春ひと秋とは言はないでせう。僕曰それはさう言ふ言葉を拵へてもかまはんでせう。久保田君押し返して曰しかし場面と言ふ言葉にぴつたりしなかありませんか。僕

思ふにそれほどぴつたりしないことはありません。久保田君の註文などは無視してよろしい。なほ久保田君は八重子の描寫に敬服してゐました。下町試驗は及第です。

それからこの間(一)の芝生の一行云々と申上げましたが、あれは後に讀んで見ると、唯「もう」と云ふ二字の落着きが惡いだけです。尤も僕の申上げた意味は始から純粹に耳の上の、極瑣末なことだつたのですが。それから菅忠雄も感心してゐました。これも次手に御吹聽します。世評も多分好いでせう。

なほ久保田君の話や何かは御目にかかつた時申上げます。

僕の中央公論の小說は妙なものですが、御暇の節およみ下さい。作者はいろいろな點で少々弱氣になつてゐます。これから又外へ出かけます。その前にとりいそぎこの手紙を書きました　以上

十二月二十五日夜　　芥川龍之介

犬養健様

九四〇〔十二月二十六日田端から。室生犀生宛〕

原稿用紙で失禮(原稿用紙で手紙を書く時はから斷らなくちやいかん。罫のある紙へ手紙を書くのは失禮だからね。)

君のまだ來ないのに少し癇癪を起してゐる。下島先生と僕とにまかせれば、××へかけ合つても好い。××はわかつてゐても、××の親父がわからないらしいから。まかすのならばまかすと言ふ手紙を一本くれないか？　未翁南圃兩氏の句集を出すのは結構この上なし。序文はいつ誰へ送れば好いか知らせてくれ給へ、出版費も少しならば奉加帳に加はつても好い。僕は昨日やつと新聞の新年號を了つた。スグに又二月三月號だ。外にも家があるさうだが、成る可く田端に住まないか。我等一同何かに氣強く感じるから。

少し古いが

ぬかるみにともしび映る夜寒かな

二十六日朝　　　　　　　　　　澄

魚　先　生

九四一　〔十二月二十九日田端から。泉鏡太郎宛〕

冠省昨夜は大へん御馳走に相成り難有く存じますしかしあゝいろいろ氣をお揉みになるとこちらで痛み入ります故今後は御かまひ下さいませぬやうに右とりあへず御禮までにこの手紙をしたゝめました　頓首

十二月二十九日　　　　　　　　芥川龍之介

泉　先　生　侍史

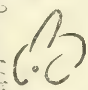
九四二　〔十二月二十九日田端から。増田渉宛〕

冠省渭塘奇遇記は剪燈新話にありますどこにでもある本です御手紙の御返事のおくれたのはお氣の毒ですが、多病と多忙の爲と御ゆるし下さいその代りに誰も知らぬ事を申し上げますわたしは松江にゐた時、松江紀行のやうなものを書いて松陽新報にのせて貰ひましたこれがわたしの芥川龍之介と署名して書いた第一の文章です。當時わたしは恒藤恭の(今の京大の助教授の)お花畑の家に同居してゐました新聞へ文章を書いたのも恒藤の紹介です勿論原稿料などは一文も貰はずに書いたのですその時文中、永坂石埭氏の悪口をちよつと云つた所が新聞社の人は其處だけ削つてしまひました以上つまらぬ事ながら、小閑を得たのを幸ひに書き加へました　頓首

十二月二十九日　　　　　　　　芥川龍之介

増　田　渉　様

九四三　〔大正十三年田端から。小穴隆一宛〕

せつかくやさんとお出で下され候にも不關留守にてくやしがり候あの日は虫の知らせたのか誰か來るやうな氣がして何度も出るのをためらつたのだが愚妻スケッチ箱を買へとせびるよりつい出る氣になつたのなり尤も僕の瀆職事件が起つた爲ちよいと社へ行く用もあつたけれども、この間は硯の事難有うお金が月末でもよければ買ひたいと存候へども如何なものにやアラビヤ物語を買つたので今非常に貧乏たりどうでも月末ではいかんと言へば何とか工面は出來る故ちよいとその邊の消息をおしらせ下され度願上候額縁は上等のになされ候よし恐縮と存居候もちろん上等の方よろしく虫のよき事なれど)候希臘陶器の箱の事お金をとつてくれないと困るがナおみつちやんにあつたら何とか言つておいて下さいナ

菊池、啓吉ものばかり集め「啓吉」と言ふ本を出すよし何とか句を題せと申候間

　元日や啓吉も世に古簞笥

としたため候なほいろいろしやべり度きことあれど拜晤の節にゆづり申候　頓首

　　十一日夜　　　　澄江堂

　一游亭御主人

九四四　〔大正十三年田端から。小穴隆一宛。封筒に聽香洞主とあり〕

冠省畫を難有う椿岳も愛すべし早速畫を送り金をとらん差當り封入の五十圓だけお立替へ申す殘金三十圓は後ほどに致されたし僕叔父の喪にあへば今度八洲咯血す娑婆界の苦勞にて持ちきるものと覺悟したり脚を大事に御精進を請ふ僕瀧田の畫帖に序する文一篇を作り大いに疲る但し作るのに疲れたるに非ず畫箋へ書するのに疲れたる也

鐵線の花咲き入るや窓の穴

二十九日　　　　　　　　　　　　　　澄　江　子

一游亭先生

九四五　〔大正十三年田端から。小穴隆一宛。封筒に二十八仁知利宇乃須計とあり〕

はいけいこんやちよつと參上仕る可く候君の畫を欲しいと云ふ人を同伴、この人は臺灣の內田嘉吉の息子なれど大きい畫は買ふかどうかわからずスケッチ版は必ず買ふだらうと存ずをとつひ碧童老人にあつた頓首

老人相不變なり

幾秋を古盃や酒のいろ

廿八日　　　　　　　　　　　　　　龍

隆　　樣

九四六　〔大正十三年田端、家にて、机の上に。芥川宛〕

この上に手をつけるべからず

なほ義ちやんの寫した芭蕉のカアド(原稿紙の裏に書いた)を出しておくこと

九四七　〔大正十三年田端、家にて、「芭蕉雜記」の原稿と共に。葛卷義敏宛〕

この外にずゐひつの原稿を忘るなよ

龍

大正十四年

九四八　〔一月三十一日田端から。室生犀星宛〕

御見舞ありがたく存候まだ喉いたくねてゐる次第、から言ふ時には谷先生ばかりたのみ也講演も出來ずタッチヤンコに氣の毒なれど致し方なし頂戴の籠の中を覗けば大いなる魚籃を食ひしばり、圓い眼を見開いてゐる可笑しくもあはれなり僕の床の中にねてゐる容子も大體ああ言ふ恰好と御想像下され度候　頓首

一月卅一日　　　　芥川龍之介

室生犀星様

九四九　〔二月一日田端から。香取秀眞宛〕

冠省金澤より烏賊の黑作りを貰ひました故少々ばかりお裾わけいたします　頓首

二月一日　　　　龍之介

香取先生

九五〇　〔二月一日田端から。蒲原春夫宛〕

冠省大彥の老人が頓死したので元來ならば僕の飛んで行く所なれど、御承知の通り寢てゐる故どうにもならず御足勞ながら今日午後一時より二時迄告別式あるよしなればその時間に多摩川へ僕の名代に御足勞をかけたいと存候供物等は當方に支度いたし置き候間紋付袴にて御出下され度、なければ、小

生のを御貸し申し候間、兎に角この手紙御覽になり次第小生宅まで御出で下され度願上候　頓首

二月一日　　芥川

蒲原春夫様

九五一　〔二月一日田端から。水木京太宛〕

冠省昨夜あなたのドラマを讀みました細かく神經が行き屆いてゐて、力作らしい厚味があつて、甚愉快に思ひました尤も末段はもう一押し押してあつても好いと思ひましたわたしは演劇新潮のドラマを一つ殘らず讀まうと思つたのですが金子洋文先生に辟易し、北尾龜男先生に逡巡し行路難の歎に堪へなかつた所やつとあなたのドラマに逢着し一息ついた形ですどうか家の三部作を終つたら猛然と何かその外の四部作でも六部作でも書いて下さい世評はどうか知りませんが(わたしはわたし自身の作品の世評のどうかも知らないのです)一般に世間はあゝ言ふ作品に冷淡ではないかと思ひますしかしそれは世間の不名譽であなたの不名譽ではないのだから、知らん顔をして書く事ですわたしの知つてゐる若い人では犬養健君が力作をしましたあなたは讀んだかどうか知りませんが、「ひと秋の場面」は現在の犬養健君にはあれ以上書けない所まで骨を折つてゐますわたしはその點を愉快に思ひましたからあなたにも同感して貰ひたいと思つて次手にこれだけつけ加へましたこの間小島に會つた時、あなたの作品を讀めと言はれましたしかし別に言はれなくても讀む事だけは確實なのですから小島に感謝の意を表せずともよろしい只その友情のけなげなるを嘉して次手にこれもつけ加へます右あなたでも褒められる事は不愉快ではなからうと思ひこの手紙をしたためましたなほ小島や南部にも鞭を與へて好いものを書かせて下さい小島も新小說の作品を見ると、「畫の具のやうな青い空」などを出してすましてゐますから　頓首

一月十三日　　芥川龍之介

水木京太様

二伸この手紙は餘程前に書いたのですがつい今日になりましたそれから本の事をいろいろ難有う存じます

春雨や檜は霜に焦げながら

この句はけふ作り、少々得意故書き加へます

二月朔　　病中　　龍

九五二　〔二月二日田端から。室生犀星宛〕

冠省先達は御見舞の品品難有く存候きのふ一游亭より水墨の山茶花圖一幀とゞき候間お目にかけ候お氣に入り候節は御手もとにお置き下され度候病中消閑の作句次手を以てお目にかけ候間御笑ひ下され度候

春雨や檜は霜に焦げながら

與一游亭話

枝炭の火もほのめけや燒林檎

二月二日　　澄江生

魚眠洞主人　稟下

九五三　〔二月五日田端から。香取秀眞宛〕

鴨ヲ難有ウ存ジマス

たてまつる蕪の鮓は日をへなばあぶらやうかむたゞに食したまへ

二月五日　　龍之介

九五四　〔二月十二日田端から。正宗白鳥宛〕

冠省文藝春秋の御批評を拜見しました御厚意難有く存じました十年前夏目先生に褒められた時以來最も嬉しく感じましたそれから泉のほとりの中にある往生畫卷の御批評も拜見しましたあの話は今昔物語に出てゐる所によると五位の入道が枯木の梢から阿彌陀佛よやおういくと呼ぶと海の中からも是に在りと云ふ聲の聞えるのですわたしはヒステリックの尼か何かならば兎に角逞ましい五位の入道は到底現身に佛を拜することはなかつたらうと思ひますから（ヒステリイにさへかからなければ何びとも佛を見ないうちに枯木梢上の往生をすると思ひますから）この一段だけは省きましたしかし口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないかと思つてゐます　最後に國粹などに出た小品まで讀んで頂いたことを難有く存じます往生繪卷抔は雜誌に載つた時以來一度も云々されたことはありません　頓首

二月十二日　　　　　　　　　　芥川龍之介

正宗白鳥樣　侍史

九五五　〔二月十四日田端から。與謝野晶子宛〕

冠省先達は御本をありがたうございました。病中床の上でゆつくり拜見しました。あの連作のお歌は地震のならば地震の、溫泉のならば溫泉のと言ふやうに別丁を一頁づつ入れて頂くと讀む方で大へん助かりますが如何ですか。それから假名づかひ改定案につき、小生も改造に（三月の）惡口を書きました。但し小生のは要するに咳呵を切つたやうなものですが。この手紙と同封して旋頭歌を少々御覽に入れます。御採用下さるのならば明星におのせ下さい。落第ならば御返送下さつても結構です。小生

自身には大抵落第してゐる歟ですから。右とりあへず當用のみ　頓首

二月十四日　　　　　芥川龍之介

與謝野晶子様

九五六　〔二月十四日田端から。和氣律次郎宛〕

冠省御手紙難有うどうも君にはいつも手紙を貰ひ放してゐるので義理が悪くて弱つてゐる次第です御洋行のよし、この間久保田君とたいに君の爲に祝しましたせいぜい面白い事をして來給へ又東京へお出かけの節は御立寄りを乞ふ船はいつですか、又東京へはいつ來ますか、この間は又「雙生兒の復讐」を難有うあの續篇は出さずに行くのですか小生は數日來流行感冒の爲にとぢこもつてゐましたそれももう大丈夫です君の洋行は結構だけれど、その間大阪の社に僕との繋ぎになる君のゐなくなるのは困るこの手紙も恐縮の爲大分出すのを遅れましたが、けふは思ひ切つて書きました　以上

二月十四日　　　　　芥川龍之介

和氣律次郎様

九五七　〔二月二十一日田端から。清水昌彦宛〕

冠省君の手紙を見て驚いたそんな病氣になつてゐようとは夢にも知らなかつたのだから、第一君が呼吸器病にならうなどとは誰も想像出來なかつた筈だ。君の手紙は野口眞造へ郵便で送る。僕は胃を患ひ、腸を患ひ、神經衰弱を患ひ、悪い所だらけで暮らしてゐる。生きて面白い世の中とも思はないが、死んで面白い世の中とも思はない。僕も生きられるだけ生きる。君も一日も長く生きろ。實は僕の妻(山本喜譽司の姪だ)の弟も悪くて今度二度目の喀血をしたのでいま見舞に行くやら何やらごた〳〵してゐる所だ。其處へ君の手紙が來たので餘計心にこたへた。何か東京に用はないか。あつたらいつで

も言つてよこさないか。もつと早く知らせてくれれば何かと便利だつたかも知れないと思つてゐる。この手紙は夜書いてゐる。明日近著「黄雀風」を送る。禮狀、返事等一切心配しないでくれ給へ。

冴え返る夜半の海べを思ひけり

二月二十一日夜　　龍之介

昌彦様

九五八 〔二月二十二日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

朶雲奉誦話ききたし火曜日(24)に來てくれないかいま親戚に病人出來弱つてゐる　頓首

二十二日夜　　龍之介

九五九 〔二月二十二日田端から。阿部章藏宛〕

冠省先夜は失禮いたし候さて金澤より「黒猫」につき下の如く申來り大いに心細く相成り候前半はなくとも後半だけ寫して貰ふべきや否や御指圖下され度願上候右とりあへず當用のみ如斯御座候　頓首

二月二十二日　　芥川龍之介

水上瀧太郎様

一伸なほ桂井翁は金澤の俳人兼新聞記者の古參底につき同翁が探して無いといふ時はまづあきらめる外はなきかと存候

龍之介

九六〇 〔二月二十八日田端から。土屋文明宛〕

冠省「冬くさ」を難有う去年の夏君にはがきを貰つた時返事を出さずにゐてすまないあの時いろいろ厄

介な事が起つてゐた爲にとう〳〵それなりになつてしまつたのだ君の學校をやめた事や何かは島木さんに聞いた僕はあひかはらず漫然と消光してゐるいつか遊びに來てくれないか月初めは原稿や何かあつて落つかないが二十日頃から大抵ひまだ多くさの裝幀は大へん氣もちが善い唯背文字は「太虚集」などもさうだが活字でない方が善いやうに思ふ卷末雜記は「あらゝぎ」で見た時に君の作品を知るに大事な鍵のやうなものだと思つた　歌は今夜これから讀むつもりだ右とりあへず御禮まで

庭前

春雨や檜は霜に焦げながら

この頃發句を時々作つてゐるこれは景物までに　頓首

二月二十八日　　龍之介

文明様

九六一　〔二月二十八日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省歌を難有う君が來ると云つて來ずに國へ歸つた時少し怒つた（實は香取先生に書帖を一つ賴まれてそれに畫か字かを書いてもらひたかつたのだ）しかし大阪からの手紙を見て怒るのをやめた君のゐる下里村とは新宮のうちやら外やら知らないが多分近所だらうと思ふ新宮はよいよし度々鄰の先生（香取さん）に聞いてゐるので行つて見たい氣もする僕は雅俗いろいろ混用の爲仕事も何も出來ず不愉快に消光してゐる田舍に落ちついてゐるのは羨しいそれから君がそちらにゐる間に本を出す事があつたら雜用は僕が引受けてもよい故遠慮なく言つてよこしてくれ給へ

庭前

春雨や檜は霜に焦げながら

二月廿八日　　龍

九六二　〔三月九日田端から。小穴隆一宛〕

けふどうしてもうごきがとれません故義敏をさし上げます役には立つまいと思ふけれど、面會日も何も廢止にて二三日は大急行です　頓首

三月九日　　　　　　　　　　　　　龍

一　游　亭　様

二伸　同封自働車代にお當て下さい

九六三　〔三月十二日田端から。泉鏡太郎宛〕

朶雲奉誦仕候開口の拙文御よろこび下され忝く存候何度試みても四六駢儷體の評論のやうなものしか書けず、今更あゝ言ふもののむづかしきを知りし次第、垢ぬけのせぬ所はいくへにも御用捨下され度候、御言葉に甘え、味噌に似たものを申上げ候へばあの中　野に白鶴の云々より先きを書き居候時は少々逆上の氣味にて瞳のうちに異狀を生じ候目下仕事やら何やらにて閉口致し居候へどもいづれ拜眉仕る可くまづ御禮まで如斯に御座候　頓首

附錄に一句御披露申し候間御一笑下され度候置酒と前書して

明星のちろりにひゞけほとゝぎす

十二日夜半　　　　　　　　　　　　龍　之　介

泉　先　生　侍史

九六四　〔三月十三日田端から。大和資雄宛〕

冠省ボナドはバアドの誤りたる事、ファンクティオネンのフンクチオネンの誤謬たる如くに候後者は再版に有之候小生の文中の外國語小生の無學に加ふるに校正子の大無學を以てし千古の偉觀を極め居り候但しまた御讀過の際御氣づきの事だけにても御教示下され度願上候責任校正と稱する「黄雀風」なども、初版の誤植三十餘りに及び、著者は手のつけやうなく弱り居る次第、御憐察下され度候　頓首

三月十三日

芥川龍之介

大和資雄様

九六五　〔三月十七日田端から。谷崎潤一郎宛〕

冠省その後御無沙汰してゐます。扨來月新小説から鏡花號が出るのにつき、大兄にも小説を一篇書いて頂きたいと言ふことです。泉さんはどうも自分からは賴み惡いから、僕から賴んでくれと言ふことです。それを賴まれたのは半月ばかり前ですが、又その時手紙を書いたのですが、うつかり出し忘れて今になつてしまひました。若し出來ないと、聊か僕の責任にもなる故、大いに閑日してゐます。なる可く都合して書いて頂けませんか？　どうかよろしく願ひます。原稿用紙を用ひた段、末筆ながらおゆるし下さい。

それからこの間久しぶりに鏡花全集の廣告文を作りました。久しぶりにと言ふのは「人魚の歎き」以來だからです。又沈香亭の牡丹を使つたので少々可笑しくなりました。小説の件何分よろしく

十七日

龍之介

谷崎潤一郎様

九六六　〔三月十九日田端から。小澤忠兵衞宛〕

敬啓先頃は蔵且帖頂戴いたし難有く存じます早速御禮を申上ぐる筈の所、病氣の上、小生の仲人をし

た御夫婦の間に離婚問題が持ち上るやら、義弟が咯血するやら致し、どちらへも失禮をしてしまつた次第、不悪御寛恕下さい今日も、なほその餘波にて何も出來ず、いら〳〵ばかりして弱つて居りますなほ昨日の大火には御無事だつた事とは存じますが、御騒ぎになつた事とは存じますいづれ拜眉の上御見舞もお詫びも申上げるつもりで居りますが、今日雜紛の爲、約束の原稿を皆なげ出し、編輯者の困るのをかまはず、兎に角小閑だけ得た機會にこの手紙を書きました　頓首

三月十九日　　龍之介

小澤忠兵衛樣　侍史

九六七　〔三月二十日田端から。佐佐木房宛〕

冠省上ると言つて上らずに居り候段何とも申訳無之候但し無責任に打捨て置く次第に無之、いろいろ俗用の多き爲に候間不悪御勘辨下され度候　扨いよいよ廿三日には佐佐木君同道參上仕り候につき左樣御承知下され度候實は廿二日と思ひ候も丁度日曜に當り、會ふ事を先約した人も有之候爲、やむを得ず廿三日といたし候始末これ亦御次手をもち、不悪御勘辨下され度候なほ佐佐木君より承り候へばあなたは小生は人が悪くて何でも笑つて見てゐるだけ故相談しても駄目だと仰せられ候よし、それは大間違ひにて、小生の人が善くて何でも笑つて居られぬ事は日星河嶽と共に明らかなる事實に候間早速右御偏見をお改めなされ下さる可く末筆ながら願上候　頓首

三月二十日　　芥川龍之介

大橋房子樣　粧次

九六八　〔三月二十四日田端から。山宮允宛〕

冠省毎度高著を頂戴いたし難有く存候今度の御著書とりわけ珍重、今夜樂しんで拜見仕る可く候唯今

ちよつとあけて見候ても Yeats が Shy one, shy one, の如きは古今の名譯と存候大兄は上田敏氏のボオドレエルやヴェルレエンをもとの詩と對照しておよみになりし事有之候や若しまだならばちよつと御覽なさる可く、あれ等はいづれもこの Shy one, shy one, の高譯よりも數等下位にあるもいに御座候なほ又中島汀何かと御厄介に相成り、汀の母よりも大兄に御禮を云つてくれとたのまれ居候、とも筆不精の爲、つい／＼失禮致し居候始末、末筆ながらここに厚く御禮申上候近々御外遊のよし健羨に不堪、小生などは毎日文債に追はれ、三文文士に惱まされ寧日なき始末御憐憫下され度候右とりあへず御禮のみ　頓首

三月二十四日　　芥川龍之介

山宮允様

九六九〔四月一日田端から。端書、吉田吉五郎宛〕

冠省一寸願ひたき事有之、二三兩日の中御光來下されまじく候や伺上候　頓首

芥川龍之介

九七〇〔四月六日田端から。小穴隆一宛〕

お金同封さし上げ候ゆうべ林ごだけ書き了り、けふはピアノへとりかかり居り候小生湯治に出るは明後日以後ならん　頓首

龍之介

隆一様

九七一〔四月十日田端から。佐佐木茂索宛〕

冠省過日は失禮いたし候、扨お送りの紙或は絹目下病氣の爲到底書く事あひかなはず、殘念ながら御手もとへ御返送申上候間不惡御落手下され度候　頓首

四月十日　　芥川龍之介

佐佐木茂索樣

上は表向きの手紙なり、誰かに見せて斷つてくれ給へとてもあんなものを書く元氣なしそれからこの間は途方もないお禮を貰つて迷惑したいづれ御返禮はするがあんまり氣張つてはいかん僕は茶寮會員になつた

出發前半時間　　澄

茂さま

九七二〔四月十三日修善寺から。繪端書、西川英次郎宛〕

この溫泉にひとり來てゐる。來月の「改造」に支那日記を出したから讀んでくれ。それから東京へ出て來たらよつてくれ。但し夏はゐないよ。淸水昌彥が死んだ。喉頭結核と腸結核とになつて死んだのだ。死ぬ前に細君に傳染してこの方が先へ死んでしまつた。孤兒四歲。

二伸　柹を難有う中央公論に友だちの事を書いた時文中お禮を言つて置いた。但しよまなければよむ必要なし。

九七三〔四月十三日修善寺から。繪端書、葛卷義敏宛〕

○原稿用紙至急送られたし

○「竹の里歌」（小さい本カミトヂ）パピニの A Finished Man（コレハ杉戸ノアル書棚ノ下カラ二番目ニアル。エビ茶ノ大キイ本、パピニは Papini ナリ。）コノ二册モ至急送ラレタシ。

○ソノ二ツヲ送ツテ貰ヘバアトハ用ナシ電車ニヒカレテ死ンデモヨシ。

十三日　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

コノ葉ハガキハオ前ニヤルノ故ニ一番イヤナノヲ選ンダト知ルベシ。温泉ハハヒツタ一日二日ハ興奮シテ夜ネラレナイ三日位カラ湯ヅカレガ出テヘタヘタニナルソノ興奮トヘタヘタトノ中間ニヰルツマリヘタ奮ダネモウ本ヲ四册ヨンデシマツタ何モヨムモノガナクナツテ弱ツテヰル

二伸お前の寫した句集の行狀も送つてくれ二階にあつたと思ふ いろいろしたい事が出來た。

九七四 〔四月十五日修善寺から。繪端書、佐佐木房宛〕

平田伯御長逝の趣今日の新聞にて拜見あなた樣まで失禮たからはがきにて御悼み申上候　不具

十五日　　　　　　　　　　　　　　　　　龍　之　介

九七五 〔四月十六日修善寺から。芥川文宛〕

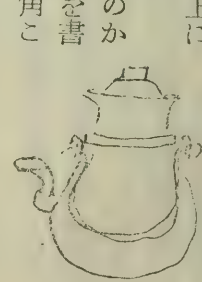
比呂志毎日欣々として幼稚園へ通ふよし珍重、何でもひとりでさせるがよし。お祈りは少々困れど、こちらで考へずに入學させたの故文句も言はれず。

お前の手紙半紙の方はよけれども卷紙の方はくしやくしやしてゐてよむのに骨が折れる　もつと綺麗にかくべし

大金とは何の事だかわからん。立つ時におぢいさんに百圓、をばさんに百圓渡して來た。おぢいさんにもう百圓渡さうかと思つたが、勘定が足りないと困るので持つて來たのだ。尤も大金が入用ならばここにゐても、電報爲替でどこからでもとりよせらせる。目下そんな必要はない。紙入れにあるのは全部で三百圓の小金だ。植木屋の勘定が入ると言つたら新潮社へでも興文社へでも行つてやれ。千圓位までは渡してくれる。

ここへ來て改造の旅行記、文藝講座、文藝春秋の三つだけ片づけた。これから女性へとりかかる。電報はもう四五本たまつた。お客は少くなる一方らしい。久米　里見　吉井　中戸川　泉等皆ここへ原稿を書きに來てゐるので女中は心得たものだ。用だけさつさとすまして無駄話や何かはしない。飯なども湯にはひつてゐる留守に持つて來ては鐵瓶の上へ茶碗盛りをかけ、机の上に膳を置いて引き下つてゐる從つて手盛りだ。

それから本は蒲原から送つたよし、蒲原の莫迦野郎、何を愚圖々々してゐるのかまだ何もとどかん　ちよつと幼稚園の歸りにでも寄つて催促してくれ。ものを書くのに入用な本があるんだから、甚だ困る。原稿紙ももう一帖きりだ。兎に角これぢや困る。



朝　牛乳一合、玉子一つ、バナナ三本、珈琲
晝　茶碗盛り或は椀盛り　さしみ
晩　同上。外に生椎茸、蕗の煮つけ。

晝と晩とは違ふ事もあるが大體こんなものを食つてゐる。食後角砂糖三つか四つ。こいつは癖になつた。菓子など菓子屋の前を通つても買ふ氣にならん。黑羊羹など入らん。カステラも實は不用だが、送つたのなら、やむを得ず食つてやる。

歸つたら、一度幼稚園へ比呂公の迎へに行つて見たい。

この頃雨ばかり。山々は櫻滿開。

十六日　　龍

文　子　へ

二伸呉れ呉れも本と原稿用紙とをたのむ。もう二日も來なかつたら、皆〆切りに遲れるのだ。さうしたら、怒る。

九七六 〔四月十六日修善寺から。繪端書、葛卷義敏宛。宛名に公とあり〕

もう一枚このゑはがきをやる。中々好い鐵橋だらう。A man finished は A finished man に同じそれだから英語を知らんものは困る。竹の里歌はなければやむを得ない。茶色の表紙の本だ。但し十年も前に持つてゐたのだからもうないかも知れない。選歌では困るがいやいやながら間に合せてやる。もまないとここから手紙を北海道へ出して送金をさしとめるゾヨ

龍

十六日朝

本も紙もまだつかないぞ。困る。

義敏公の公の字は熊公八公の公の字なり。

九七七 〔四月十六日修善寺から。渡邊庫輔宛〕

この間はいろいろ難有う例の筆不精で御無沙汰した。羅紗は幕末にや二三十年この方のもののやうに見えるが。更紗は花の大きい方結構なり。この間齋藤さんに會つた。一しよに飯を食つた。君の噂も出た。但し勿論惡口を言つたと知るべし。今つらつら君の身の上を案ずるに、異國關係の歷史などはいくらやつても語學の出來ぬ君には駄目なり。（語學をこれからいくつもやれば格別）精々長崎の考證家、——古賀さんよりも無學なる古賀さんになるだけならむ。然らば何になるかと言ふに、それは何になれと言つても、なれねば仕かたがなけれども、まづ小說家になるとすれば、傑作三篇以上を提げて再度上京の計を成すに若くはなかるべし。（尤も自稱傑作にては駄目なりと知るべし。）いま青年作家輩を見るに皆碌々言ふに足らず。覇を天下に唱ふるは勿論、一方の雄になるものさへなし。文壇は擧げて有爲の年少作家を待ちつつありと言つても可なり。この時に當り、空しく長崎の親父の二階に握り金玉ばかりして將來の大計を考へずにゐるとすれば、庫輔の莫迦も極まれりと言ふべし。よろしく

前人喫緊の處を看破せよ。君は相當にものもわかれど、小說修業の上にどうしてもまだ拔けぬ所あり。はたから見てゐれば、齒痒くてならぬが、君自身拔かねば拔かれぬこと故何とも助力する事能はず。この一關は君自身も旣に悟れるならん。そこが透過せぬ故、君は文章は書けても、或は小品はかけても、小說が書けぬのなり。況や、名作と稱せらるゝものをや。一月に一度、二月に一度でも兎に角小說らしきものを書き、僕の所へ送つてよこせば惡口位は申してもよし。兎に角小說の壺を發見すること、現在の君には急務なり。さもなければ、いつまでたつても空腹高心の譏を免れざらむ。君が去つた後の東京の評判を聞くに、不しだらはするが可愛げのある男と言ふに一致するやうなり。これは無爲無能の愛嬌者と言ふ意味と心得べし。勿論名譽にはあらず。この評判を叩き壞し、彼等をして君を小面憎い男と思はせる爲には仕事にて押すより仕方はなし。且又從來君が書いてゐたやうなものでは再度上京しても君の生計を立つるに足らず。足る足らぬの問題よりも、編輯者どもの機嫌を損じてゐれば第一買はせることむづかしからん。かたがた腕を上げるより外なし。君も行年二十五なり。この二三年の間に腕を上げねば、文學老年になり了るべし。わかりたりや。こちらは皆壯健、この間は佐佐木とお房さんとの媒酌人みたいな役をつとめた。下働きには小島をたのんだ。日曜の接客も例の通り、常連の一人に明石と言ふ青年あり。正宗白鳥の紹介にて來る人。この間三百枚ほどの長篇を讀ませられ、相當に書けてゐる故、ちよつと感心し、大分かかつたらうと言つたらええ二年かかりましたと言つた。この人、フロオベル流の客觀主義者にて堀辰雄と正反對の藝術論を爲す。堀は勿論主觀派なり。兩人の論爭中々面白し。これ等の諸公或は作家とならん乎。佐佐木はもう大家なみなり。八重垣町の停留場の近くに家を持つてゐる。

君の大導寺信輔評、カナ遣ひ評、多謝、但し一笑しながらと知るべし。

この頃

臘梅や雪打ち透かす枝の丈（タケ）

四月十六日　　　　　　　　　　　　豆州修善寺町新井旅館内宮分滞在　　　龍

庫　輔　様

九七八　〔四月十七日修善寺から。室生犀星宛〕

潤蘚の中に起伏いたし居候。ここに来ても電報ぜめにて閉口なり。二階の一室に孤影蕭然として暮らし居り、女中以外にはまだ誰とも口をきかず、君に見せれば存外交際家でないと褒めらるる事うけ合なり。又詩の如きものを二三篇作り候間お目にかけ候。よければ遠慮なくおほめ下され度候。原稿はそちらに置いて頂きいづれ帰京の上頂戴する事といたし度。

歎きはよしやつきずとも
君につたへむすべもがな。
越のやまかぜふき晴るる
あまつそらには雲もなし。

また立ちかへる水無月の
歎きをたれにかたるべき
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

但し誰にも見せぬやうに願上候（あまり悪ければ）尤も君の奥さんにだけはちよつと見てもらひたい氣もあり。感心しさうだつたら御見せ下され度候。末筆ながらはるかに朝子孃の健康を祈り奉り候この

間君の奥さんの抱いてゐるのを見たら椿貞雄の畫のとよく似た毛糸の帽子か何かかぶつてゐた。以上

十七日朝　　　　　　　　　澄　江　生

魚　眠　老　人　梧下

二伸　例の文藝讀本の件につき萩原君から手紙を貰つた。東京へ歸つたら是非あひたい。御次手の節によろしくと言つてくれ給へ。それから僕の小説を萩原君にも讀んで貰らひ、出來るだけ啓發をうけたい。何だか田端が賑になつたやうで甚だ愉快だ。僕は月末か來月の初旬にはかへるから、さうしたら萩原君の所へつれていつてくれ給へ。僕はちよつと大がかりなものを計畫してゐる。但し例によつて未完成に終るかも知れない。

九七九　〔四月十七日修善寺から。阿部章藏宛〕

冠省、先達は久保田君にあなたと自笑軒へ呼ばれてゐたよし、ここへ參つてから承りました。御目にかからないで遺憾に思ひました。扨今度興文社と申す本屋にたのまれ、近代文藝讀本と言ふ大へんなものを編する事になりましたが、高作「祭の日」の畫一篇御揭載を御許可願へますまいか？　實はとうにお願ひ致す筈であり、又お目にかかる度に忘れてゐた訣ではないのですが、お目にかかつた次手と申すのも如何と思ひ、一度參上しようと思ひ〱やはり、かう言ふ手紙をさし上げる事になつてしまつたのです。（これは泉先生も同樣です。）なほ又「勤人」の中の「喧嘩」も大いに未練があるのですが、唯今のところは「祭の日」の方が揭載を許して頂きたいのです。右御諾否御知らせ下さらば幸甚に存じます。頓首

四月十七日　　　　　　　靜岡縣修善寺町新井　　芥　川　龍　之　介

阿　部　章　藏　樣

二伸なほこの手紙は明日東京へかへる男にたのみ東京から投函させます。

九八〇

〔四月十九日修善寺から。修善寺虎溪橋の繪端書、小穴隆一宛〕

不相變義敏御厄介になる事と存候。ここにゐても電報ばかり來やがつてやり切れない。女中以外誰も交渉を持たず、閑寂に暮らし居り候。朝は飯の代りにバナナを食ふ事に致し居り、平均一朝十五錢だけ食ひをり候。

十九日　　新井内　　龍

〔裏の寫眞に〕

コノウチノウシロノ一棟ニヰル

コノ橋ノランカンハペンキヌリ

コノ白イ鳥ハアヒル

コノ山々ハ櫻（但シサカリハスギタ）

九八一

〔四月十九日修善寺から。繪端書、下島勳宛〕

ここにゐても電報ぜめで（もう電報を十本貰つてゐます）おまけに原稿催促人までも出張するので、甚だはかない日を送つてゐます。恐らくはここに命を落した範頼だの賴家だのにしても、もう少し氣樂だつたらうと心得ます。溫泉は人を昂奮せしめるものですね。この間湯の中で無禮なるやつを一人叱りつけました。喧嘩をしたら負けたのに違ひないのですが幸ひ向うからあやまりました。

十九日　　修善寺　　芥　　川

九八二

〔四月十九日修善寺から。石黑定一宛〕

唯今修善寺にゐます。もう一週間ばかりゐます。まだ當分ゐるつもりです。木の芽が非常に美しい。

水の音が毎日してゐる。その中にごろごろしてゐるのは甚だ幸福で閑寂です。
太田さんへの紹介狀は同封します。太田さんは博學で藝術家で後進に親切な人ですから、時々訪問して御覽なさい。益を受ける事も多いでせう。僕も名古屋の方へ出かけたら是非一度太田さんの門を叩きたいと思つてゐます。どうか御面晤の節はその旨話して下さい。
このあとに歌か句かを書くと好いのですが、生憎近頃は何も製造しません。あなたはもう何人のお父さんですか？　どうか何人でもそのお子さんやお子さんのお母さんによろしくと申上げて下さい。
ああ、いつかあなたが東京へ來られた時、丁度湯河原へ湯治に行つてゐて、お目にかかりそくなつた事を思ひ出しました。あれも丁度今時分、――今時分よりもちよつと前でしたね。
僕の本はどうも著者無精の爲に中々出來ません。「お律と子等」の原稿だけでも今月中に拵へたいと思つてゐますが、これも少々怪しいやうです。製作するのは面白いのですが、本にする努力は面倒臭いのです。
もう少し近いとあなたに一晩遊びにお出でなさいと云ひたいのですが、ここではおすすめしても駄目でせう。萬一土曜から日曜へかけて御出になれるやうだつたらばいらつしやい。今は客も少ないやうです。しかしこの町の芝居には安來節芝居などもかかつてゐます。一昨晩ちよつと覗きに行つたら、五つになる女の子が「蛸にや骨なし何とかには何とかなし、わたしや子供で色氣なし」とうたつてゐました。奴隷市場を見たやうな氣がしました。ではこれでやめにします。

四月十九日　　　　芥川龍之介

流翠莊御主人　侍史

九八三　〔四月二十一日修善寺から。下田たい宛〕

お手紙拜見いたしました。淸水君のことは何と申し上げやうもございません。わたくし自身體の弱い

だけに一層身にしみて御氣の毒に存じます。廿六日に御葬儀のありますよし、在京いたせば勿論御會葬いたすのでございますが、生憎わたくし自身體を痛め、目下當地に湯治に參つて居ります。清水君がもう少し生きてゐるか、わたくしがもう少し早くこちらへ參れば、御近所でもあり、お目にかかれる所だつたなどと考へても仕かたのないことを考へて居ります。いづれ當日は誰か家内のものでも御會葬いたさせますが、とりあへずこちらから御返事を兼ね、不參のお詫びを申し上げます。なほ又大西新藏様よりわたくしに弔辭を讀めと仰有つて頂きましたが右様の次第故、それはどうか不悪御免下さいまし。それからやはり大西様より三中の同期生へ知らせてくれとの仰せを受けましたが、それも日常わたくしと手紙を往復する連中は皆遠方に居りますしその他の連中の宿所になると、到底こちらに居つてはわかりません。唯三中は少時措き、清水君と一しよに江東小學校を出て兎に角中學へはひつたのは上瀧嵬、伊藤和夫、野口眞造、能勢五十雄、わたくしの五人でございます、そのうち能勢は三中卒業後直に故人になり、上瀧は震災以來支那の廈門に移り、伊藤は名古屋の銀行にゐるよしでございますから、東京にゐるのはわたくしの外に野口眞造しかございません。清水君のお手紙を拜見した時にも、わたくしは早速その旨を野口眞造に知らせました。これも東京とは申すものの、多摩川に住んで居りますから、中々遠方ではございますが、野口には確かに御葬儀の時と場所とをわたくしから通知いたします。右當用のみこの手紙をしたためました。末筆ながら清水君のお孃さんの御丈夫にお育ちになることを祈ります。頓首

四月二十一日　芥川龍之介

下田たい様　粧次

九八四　〔四月二十二日修善寺から。芥川文、芥川富貴宛〕

改造の紀行、文藝講座、文藝春秋、女性、とこれだけ書いた。今文藝講座をもう一つ書いてゐる。ま

だその外に鶴田の爲に「平田先生の飜譯」と云ふものを書いた。根本(女性)と鶴田の所の男とつききりだつた。泉さんの奥さん曰「あなた、何の爲に湯治にいらしつたんです？」

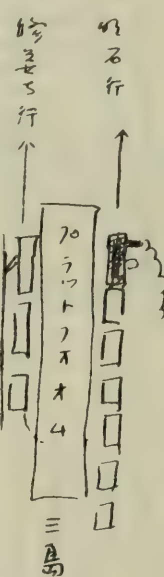
二階の壁ぬりや庭も出來つゝあるよし、おぢいさんいろいろお骨折りの事と存ず　よろしく御禮を申されたし。

八洲の所へ行つたのなら、八洲の事をもつと詳しく書け。あちらから甘栗を貰つた。原稿ぜめでまだお禮も出さない。これと一しよに出す。但し栗はみんな食つてしまつた。

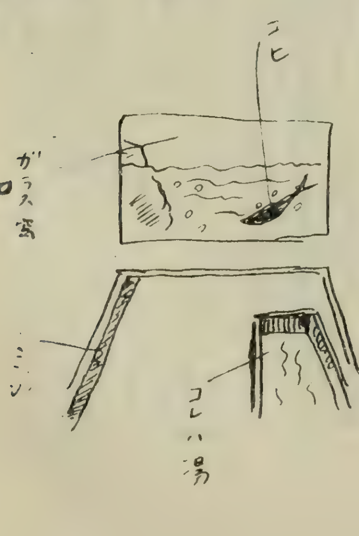
それから今客がなくて閑靜故、をばさん、おばあさん二人でちよつと遊びに來ないか。汽車は十二時キッチリの明石行にのると四時三十九分に三島へつく。三島へついたらプラットフォームの向うに側に修善寺行の輕鐵がついてゐる故、それへ乘れば六時には修善寺へつく。修善寺驛から新井までは乘合自働車、人力車何でもある。時間がわかれば僕が迎ひに出る。

切符は東京驛より修善寺迄買つた方がよし。(三島迄買ふと又買はねばならぬから面倒臭い。東京驛で修善寺までのを賣つてゐる)

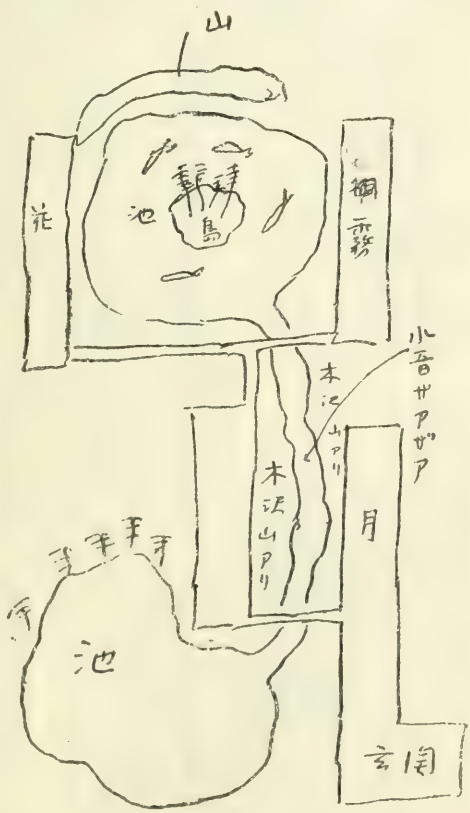
來れば一しよに鎌倉まで歸る。修善寺も湯が昔から見ると、へつたよし。それでも唯今風景は中々よろしい。考へてゐると億劫だが、汽車にのつて見れば訣なしだ。シヤ官



ツマリノリカヘハ
コノ□ヲ右カラ
左へ二三間歩クダ
ケユヱ造作ナシ。



や植木屋位文子にまかせておけばよろし。シヤ官はもうすんだらう
泉さんはあしたかへる。奥さん中々世話やきにて菓子を買つてくれたり、お菜を拵らへてくれたり、
もう原稿はおよしなさいなどと云ふ。下齒が上齒よりも前へ出てゐるお婆さん也。泉さんは來て腹は
かり下してゐる。床をしき
づめにしてごろごろねてば
かりゐる。誰も來なければ
月末にかへる。をばさん、
おばあさん、ちよいと二三
日お出でなさい。ここのお
湯は〔前頁圖參照〕言ふ風に
なつてゐて水族館みたいだ。
これだけでも一見の價値あ
り。この家も〔下圖參照〕と
言ふ風に建つてゐる。僕は
月の五番即ち三階にゐる。



九八五　〔四月二十四日修善寺にて。同宿の泉鏡太郎宛〕

冠省ながさきのそばぼうると東京のちもとの黒すけと參り候間少々おすそわけ仕り候召し上つて頂ければ仕合せと存候　頓首

二十四日　　　　　　　　龍　之　介

泉　先　生

九八六　〔四月二十九日修善寺から。佐佐木茂索宛〕

不可出於新聞長歌幷短歌

空ゆくや、照る日も見えず、湯けむりの、立ち立つむろに、さにづらふ、赤裸なる、二はしら、神のみことの、老いたるは、請負師かも、若かるは、官吏なるらし、二人とも、流しにゐまし、たるちしら、うら樂しけく、天ざかる、鄙の藝者に、惚れられし、話をすると、えらえらに、笑ひどよもし、ざぶざぶに、湯をあみませば、鴨じもの、わが沈みゐる、石ぶねの、湯ぶねの空ゆ、時じくに、雨ぞふりくる、ぬえ鳥の、なげかひ居れど、神ゐらぎ、やむときしらに、今しかも、醜(しこ)のつかひ湯、わが顏に、さとぞたばしる、ますらをと、おもへる我の、丸ビルは、海に入るとも、口つぐみ、あるにたへめや、湯の中に、い立ち上らひ、「おい、こら」と、雄たけびすれば、老いたるは平にあやまり、若かるは、あつけにとられ、湯けむりの、千重(チヘ)に五百(イホ)重に、なびかへる、着ものぬぎ場へ、こそこそに、逃げてぞゆける、千早ふる、神わざならず、現し世の、人わざにして、二はしら、神のみことを、やらひたる、我はも美(は)しと、己(し)が姿、かへり見すれば、翠鳥(ソニドリ)の、青き湯のへに、かなしもよ、天津麻宇羅は、ながながと垂れゐたるかも、

二はしら神の命をやらひたる天津麻宇羅見らく愛(カナ)しも

龍

大芸先生　梧右

二伸一月ほど文藝欄を見てゐると、いろいろ面白い。廣津和郞先生は higher 文學青年だね。

九八七　〔四月二十九日修善寺から。小穴隆一宛〕

原稿の居催促をうけて弱つてゐる。この間例の大男の話を急行にかいてしまつた。勿論書けてゐるかどうか心もとない。今泉鏡花先生滯在中、奥さん中々世話やきにて、僕が仕事をして居ると、「あなた、何の爲に湯治にいらしつたんです?」などと言ふ。屋前屋後の山々は木の芽をとほり越して若葉なり。一夜安來節芝居を覗いたら、五つになる女の子が「蛸にや骨なし何とかには何とかなし、わたしや子供で色氣なし」とうたつてゐた。大喝采だつた。うちの子も五つになるが、あゝ言ふ唄をうたつて大喝采をうけぬだけ仕合せならん。この間又夜ふかしをして、湯がなくなつた故、溫泉で茶を入れたら、變な味がしたよ。ちよつと形容の出來ぬ、へんな味だ。その癖珈琲に入れると、餘り變でもない。僕はいつも溫泉へ來ると肥るのだが今度はちつとも肥らん。遠藤君によろしく。前の家だと尾張町だけでも手紙が出せるが今度はさうも行かない。又今樣を作つて曰く、

歎きはよしやつきずとも
君につたへむすべもがな
越の山かぜふきはるる
天つそらには雲もなし

二十九日　龍

隆　樣

二伸　惡錢少々同封す。支那游記の裝幀料と思はれたし。

九八八　（四月（推定）修善寺から。女性校正掛（岡菊次郎）宛）

拜啓　拙作「溫泉だより」の中に主人公半之丞の遺書と申すものあり。その次の一節、——卽ち「この遺書だけにも小說家のやうに推理や想像を加へれば」云々に始まる一節は同封の一枚にとりかへ下され度願上げ候。卽ち上記「この遺書だけにも」より「と思つたと云ふことです」までを新たに致すのに

御座候「ふ」の字軒は「か」の字川に面し居らざる等、事實の相違も有之、舊稿にては困り候間、是非是非お取かへ下さるやう、伏して願上げ奉り候。なほ次手を以て胡麻をするやうには候へども、拙作「春」の校正は大へん正確にて、以前大毎へ「地獄變」(?)を書きし時以來、あの位の校正を見しこと無之、感謝いたし居り候。以上。

芥川龍之介

女性校正掛御中

九八九 〔四月三十日修善寺から。阿部章藏宛〕

冠省、讀本の件早速御承知下され難有く存じます。小生の廣告文の如きはどうか何にでも御使ひ下さい。泉先生折角御來遊にも不闕、小生は生憎原稿の居催促をうけ居り、中戸川吉二の如く奥さんとてんめんたる所を拜見する機會もなく甚だ遺憾に存じて居ります。この頃やつと仕事片づき、小閑を得たと思へばそろ／＼かへらねばならず、人生太匆忙と泣き言を言ひたくなります。泉先生の奥さんからそばボオロや何かを頂きましたから、その御禮を兼ね、ちよつとこれをしたためました。

三十日　龍之介

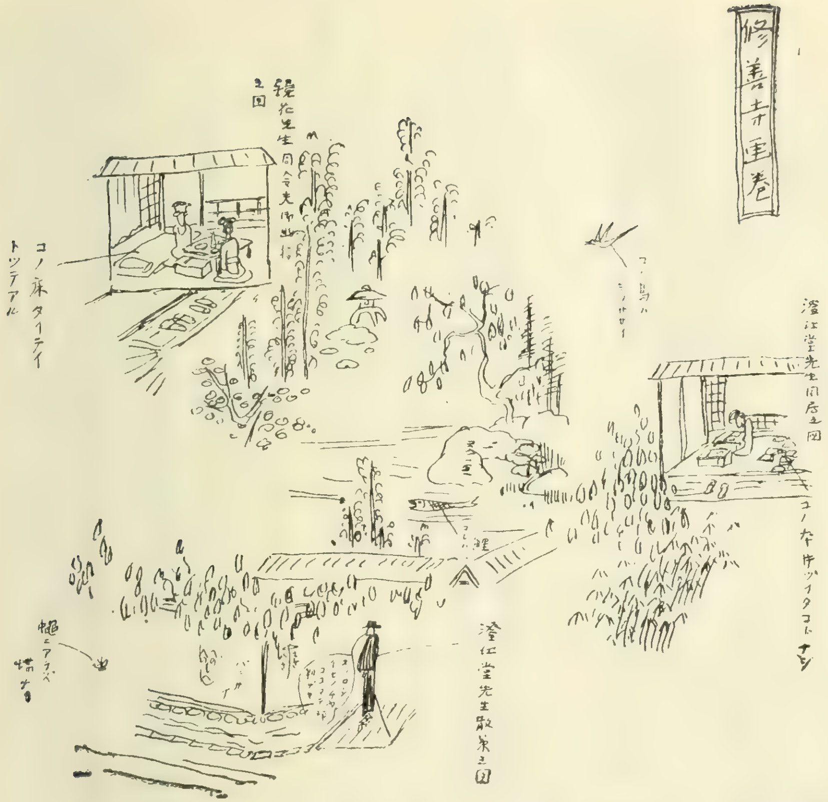
水上瀧太郎様

二伸　泉先生の文章論は非常に面白く且有益だと思ひますが、あなたからも先生におすすめして是非書かれるか、誰か筆記するかしては如何ですか

九九〇 〔五月一日修善寺から。佐佐木茂索宛。修善寺畫巻(插畫參照)同封〕

新曲修善寺　いでゆもすみえ太夫作

思へば九月一日の、地震に崩れかかりたる、門や土塀を修善寺や、五分すすみし時計ゆゑ、六



時五分は午後六時、君をはじめて御幸橋（みゆきばし）、酒のまぬ身のウウロン茶、カフエ、コカコラ、チヨコレエト、ヴイタミンCのありと言ふ綠茶はのめど忘られぬ君を藝者と菊屋にも、電燈ともる夕まぐれ、2×2=4（ににんがし）とは思へども 2×2=5六（ににんがごろく）、七八度（ななやたび）、橋のたもとへ出て見たる、人の心も白糸の、瀧の英語はカタラクト、ラクトオゲンは滋養劑、自由にならぬ世の中の、波も新井屋（ウタにガカリ）わが宿に晝間來てゐる君見れば、あらかなしや、雪と見えしはおしろいの、剝げてわびしきエナメルやく額はビルデイング千丈の壁を削り、眼凹（まなこくぼ）める凄（すさま）じさはリフトの穴と申すべし、さりとはよもや賴家の墓もはかなき夕明り、ちらりと見たる祟りかや、女を見るはゴオギヤンの、晝の光がかんじんと、悟つてみれば百八の、衆（しゅ）煩惱にも桂川、

行なひすましてゐたりける。

九九一　〔五月一日修善寺から。繪端書、小島政二郎宛〕

恩借の金子御返濟相おくれ申訣無之候へどもいづれ歸京の上は家具家財を賣り拂ひ候てもきつと御辨償仕る可く候也。

五月一日　　　　　　　　　　　　　たばたやすみえ

ねぎしやおまさどの

ミコチヤンやオクサンによろしく。この頃雜用繁多の爲、戀愛をいたす暇も無之、胸中御憫察下され度候。但しいたされる(passive tense)ことは有之、これ亦胸中おん憫察下され度候いづれ歸京の上萬々　謹上再拜

九九二　〔五月一日修善寺から。南部修太郎宛〕

冠省この間は折角のお誘ひにも應ぜず、御返事もさし上げず、大へん失禮した。實はどうにもからにもならぬ事件の中に立ち居り(僕自身の事件ぢやないが)東奔西走してゐた爲についその機を失してしまつたのだ。やつと解決がつきかかつたのを幸ひ、僕は中に立つのを御免を蒙り、ここに避難したが、今度は原稿の居催促を食ひ、これ亦湯にもはひつてゐられぬのに難澁した。但し昨日やつとそれも片づいた故、明日あたり出發、ちよつと鎌倉の久米の病氣を見舞つて東京へ歸らうと思ふ。どうか惡しからず。この頃多忙の爲女に惚れてゐる暇もない。奥さんによろしく、それからまだお出でになるのならば妹さんにもよろしく。吉田夫人は大分大人になつてゐたので敬服した。僕はこの頃ナポレオンの傳記を讀んでゐる。ナポレオンと言ふ奴は人中の龍か何か兎に角手のつけられぬ怪物だよ。あんな

に人類を輕蔑したやつはない。ちよつと逸話を二つ三つ披露したいのだが、長くなるからよす。頓首

五月一日　　芥川龍之介

南部修太郎様

九九三　〔五月一日修善寺から。繪端書、西川英次郎宛〕

まだ當溫泉にぶら〳〵してゐる。（手紙は鳥取市高等農林學校内君でとどいてゐるのかな今度とどいたら、とどいたと言ふ證據に田端四三五僕宛はがきを出しなさい。柿についてゐた宿所は忘れてしまつた。從つて先約の本も送られん。）明日か明後日かへらうと存じてゐる。昨日まで泉鏡花老が夫人同伴で來てゐた。あの老は僕より氣が若い。メリメエはうまがすなどと言つてゐる。（ああ、それから君も金があつたら鏡花全集の會員になつてくれないか？　あつてもならないかな）山々はもう新綠なり。目下プリニアツクと言ふロシア人のもの勉強中。但しこの作者、莫迦ならん。ソヴイエツトのロシアでは評判よろしきよし。評判も當にならず。

五月一日　　龍

九九四　〔五月一日修善寺から。渡邊庫輔宛〕

この手紙を書いて出すのを忘れてゐたらば、うちより君のくれたボオロをとどけて來た。あまり心配されると、こちらも心がいたむ故、今後、氣にかけぬやうに御兩親へ申されたし。それよりも一勉強して貰ひたし。長崎の噂も時々傳はる。結婚の話なども聞いたれど、僕はどちらかと言へば不贊成なり。自分にも親にも親類にも手數をかける機會がふえるだけなりと思ふ。君に必要なるは金なり。金を得るのに必要なるは君の文章の賣れることとなり。文章の賣れるのに必要なるは君の力量の出來ることとなり。その外に何もなしと思ふ。ズボラならばズボラなりに腕を拵へる工夫をすべし。それを拵へ

て出來ぬ腕とも思はれず。拵へようとしたが出來なかつたと言ふ時が來れば僕が買ひ冠つてゐたとあきらむべし。今の所は君の能力になほ幾分の望を囑しをる次第、——と言ふ理窟がわからねば、よしべいの子になれと言ふだけのことよ。手紙でえらさうな見得を切るだけは誰にも出來る。善惡とも底のぬけた、圖々しい人間に(一例を擧ぐれば僕の如き)なつた證據には作品を一つお見せやれさ。これも常談ではない、眞面目な話だよ。ここが思案のしどころだよ。茂吉も君のことを心配してゐたぜ。僕等は皆亂倫不逞の徒だつたし、今でも亂倫不逞の徒だが、君よりはちつと工夫をしてゐるやうだぜ。わかつたりやどうでえすと云爾。

二伸明日頃ここを引き上げ、歸京するつもり。

五月一日　　龍

庫　ど　の

九九五　〔五月二日修善寺から。阿部章藏宛〕

冠省。當用だけ申上げます。『「鏡花全集」に就いて』と言ふ五枚ばかりの文章を書き、三宅周太郎君に送りました。(小生は大毎、東日の外新聞にはちよつと書けないのです。)多分五月五日の〆切り前に間に合ふことと存じますが、萬一間に合はぬ節は不本意ですから、御面倒でも三宅君に電話をかけてあなたからもお賴み願ひたいと存じます。三宅君は本郷の菊不二ホテルです。小生の原稿もやはり菊不二ホテルへ送りました。右とりいそぎ匆々。

五月二日　　芥川龍之介

阿部章藏樣

二伸失禮ながらこの字實に書きにくい、むづかしい字です。僕はこの字を書くのがつらい爲に

時々水上瀧太郎様を用ひます

九九六　〔五月二日修善寺から　繪端書、中根駒十郎宛〕

啓。病弟のこといろいろ御世話になつたよし難有う存じます。家内より參つた手紙によれば母は涙をこぼして喜んだと言ふことでした。とりあへずはがきで失禮ながら御禮までにこれをしたためました。四五日中に歸京するつもり。頓首

五月二日　　芥川龍之介

九九七　〔五月二日修善寺から。修善寺停車場前の繪端書、葛卷義敏宛〕

又好い畫はがきをやるから感謝いたすべし。明日出發、大磯と鎌倉とにより、ゆるりと歸京。早くば五月十日頃、遲くば來年になるかも知れず。むやみに原稿ばかり書いたせゐか、右の目がへんになつた。或は蜂蜜のなめすぎかも知れない。をばさんやおばあさんに折角來いと言つても來ないで思ひ知れと言つてくれ。おみやげなどは汚れたシャツや猿またの外に何にも持つて行かない。

五月二日　　龍之介さまより

〔裏の寫眞に〕

コレハヲバサンノ頭ダケ出シタトコロナリ虫メガネデゴラン。ヨク似テキル

コレハウチノオバアサン犬ヲカラカツテキル所。虫メガネニテ見ルベシ。

コノ中ニ轢死人のシガイアリ。葛卷義敏トイフ名ノヨシ

コノ地面雨ガフルトブクブクナリ。

九九八　〔五月七日田端から。赤羽根健介宛〕

啓、昨日修善寺より歸京。今朝この手紙を書きます。但し君の宿所がわからぬ故(君の手紙には書いてなかつた)學校宛にして出すことにします。君のやうに感激したり苦しんだりしたものは古來何千萬人もあつたのです。しかしその中から逞しい魂の持ち主になつたものは一パアセントにも足りなかつたのです。これは殘酷な事實ですが、兎に角事實には違ひありません。この事實を目前に据ゑて、君自身の實力をお鍛へなさい。「我笛吹けども汝等踊らず。」笛を吹いてさへ踊らない彼等は笛も何も聞かないのに踊る筈はありません。それを彼等に期待するのは期待する方が間違つてゐます。何を措いてもあなた自身笛の吹けるやうにおなりなさい。その後でなければ「汝等踊らず」の歎を放つ資格は出來ないのです。君はマテリアリストでせう。それならば一層勇敢にこの殘酷な事實をお認めなさい。カラマゾフを讀んだのは甚だよろしい。小生もカラマゾフをドストエフスキイの作中の第一位に數へてゐます。その外のドストエフスキイの作品も暇があつたら讀んでごらんなさい。

それから小生はせつかちな革命家には同情しません。(あなたは若いから仕かたがないが)ブルヂョアジイは倒れるでせう。ブルヂョアジイに取つてかはつたプロレタリア獨裁も倒れるでせう。その後にマルクスの夢みてゐた無國家の時代も現れるでせう。しかしその前途は遼遠です。何萬人かの人間さへ殺せば直ちに天國になると言ふ訣には行きません。あなたはコンミュニズムの信徒でせう。それならば過去數年來、ソヴィエット・ロシアが採つて來た資本主義的政策を知つてゐる筈です。又資本主義的政策を採ることを必要としたロシアの、――少くともレニンの衷情を知つてゐる筈です。我々は皆根氣よく歩きつづけなければなりません。あせつたり、騷いだり、ヒステリイを起したりするのは畢竟唯御當人の芝居氣を滿足させるだけです。尤も小生自身にしても、悠々迫らずなどと言ふ大自在は得てゐません。まづ多少役立ち得る齒止めを具へた馬車位の極小自在を得てゐるだけです。しかし

まあ餘り摑をたかぶらせずに歩いて行きたいとは思つてゐます。あなたも息切れのしない爲にはやはり氣長になる工夫が必要でせう。現に西洋の革命家も存外短兵急ばかりではないやうです。あなたはさうは思ひませんか？

これから毎日の仕事にとりかかりますから、この手紙をやめることにします。なほ小生の筆不精は今後あなたに對しても返事を怠らせることが多いかも知れません。それは豫め承知してゐて下さい。以上

五月七日　芥川龍之介

赤木健介様

九九九　〔五月十日田端から。阿部章藏宛〕

朶雲奉誦仕り候鏡花全集景氣よろしきよし何よりの事に存候但し五千は如何にや春陽堂は昔風に振替は一週間も十日もかかると思つて算盤を取つてゐなければ好いがと存候然れど今度の全集の事を見るに大兄はじめ濱野君の鞭撻によるは勿論ながら兎に角春陽堂としては努めたるものなりそこだけは買つてやつてもよろしかる可く候貝殼追放は修善寺にて一、二、の兩囘だけ拜見あとはこちらへ參り候爲拜見する事を得ず、いつか切りぬきでも拜見させて頂ければ幸甚に御座候右當用のみ　頓首

五月十日　芥川龍之介

水上瀧太郎様

一〇〇〇　〔五月十三日田端から。鈴木三重吉宛〕

冠省先達は御親切な御手紙を頂き難有く存じます。又早速作品の掲載を御許し下すつて難有く存じます。扨高作は勿論全集によりましたが、十吉が万千子と喧嘩をして外へ出てかへつて來る、それを万

千子がむかへに出る所をとつたのですが、あすこには全集にも「のい十さん、屋根の燕がのい」と言ふ言葉があります。小生は昔よりあの一段を愛讀し、今日もなほ愛讀してゐます。どうか今度は小生の我儘を通させ、あの一段にさせて下さい。あの一段は小生の過去の記憶がまとひついてゐるせゐか、どうも割愛する氣になりません。實は御手紙を頂いた後、「桑の實」のみならず、外にシルシをつけて置いた作品もよみかへしたのですが。なほ小生の讀本はやり出して見ると、大仕事の爲、中々完全とは參りません。この頃は殆ど匙を投げた形です。御手紙を拜見し、あなたの大仕事と言つてゐられるのに對し、赧然たるものがありました。それでもまあ片手間仕事にぎり／＼結着の所までやりました。どうか出來上つた節は坊間の同種の本よりは少し好い位の所で御あきらめ下さい。一月ほど旅先にゐた爲、大へん御返事が遲れました。どうかそれも惡しからず御高免を願ひます。頓首

五月十三日　　芥川龍之介

鈴木三重吉樣

一〇〇一 〔五月十七日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省ここに下山霜山と言ふものあり。今度作家十二人に短尺を書かせ、大いに私腹を肥やさんとす。就いては君にも彼を儲けさせる一人になつて貰ひたきよし、僕から頼んでくれろと言ふ。それを引受けしはずつと前なれど、荏苒として今日手紙を書くに至る。尤も小山內氏より前にちよつと手紙の行つたことと思ふ。正直に言へば、この擧は千枚や二千枚の短尺を書かされる事故、必しも樂ならざるべし。然れども君にはひつて貰へば啻に下山霜山の喜びのみにあらず、僕や室生犀星も同じ地獄に君と相見する底の惡魔的歡喜あらん。君の外に書かされる連中は泉、德田、永井、里見、長田(幹)、久米、小山內、久保田、上司、室生、僕の十一人なり。書くものは俳句。何分よろしく願ひ奉る。下山むやみに急いでゐれば、電報位打つかも知れず。それも前以て斷り奉る。この頃田端に萩原朔太郎來

り、田端大いに詩的なり。僕は軒前に竹三百竿を植ゑた。矢竹は三百竿二三坪にをさまる。風流下圖の如しと知るべし。頓首々々　〔ペンの小さき畫あり〕

五月十七日　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

佐藤春夫様

一〇〇二　〔五月二十一日田端から。齋藤茂吉宛〕

原稿用紙にて御免蒙り候。先だつては高著頂戴いたし、難有く存じ候。温泉にひたりに行き候爲、高著留守中にとどき、おん禮延引いたし申訣無之候。改造の童馬山房漫筆まことに面白く拜見いたし居り候。なる可く長くおつづけなされ度候。（あの「玉菜ぐるま」の中の「じやうめ」は乘馬には無之候や。）それから島木さまよりもお手紙あり、來月のはじめに島木さまともう一度拙宅へお出で下され候はずや。島木さまに舊生徒を拜眉させたしと存候。日はいつにても御都合のよろしきに從ふ可く候。この頃中村憲吉氏の「柵」を讀み候。なかなか名歌あり、感心いたし候へども、名歌は大抵雨がふつてゐるか、川の流れてゐるのをうたひしものに候。昔者許渾の詩水に及ぶもの多く、許渾萬首濕ふと言はれたること有之候。「柵」も亦憲吉萬首濕ふものに候はむ乎。一笑。

五月二十一日夜　　　　　　　　　　　　龍之介

齋藤様侍史

二伸一八八三年（明治十六年）版の the Rev. Lobscheid の英華字典（井上哲次郎補）には Kiss に親嘴の外に啜面、啜、歠とあり。「口すひ」の亞流にて珍らしからねど、漢譯聖書の出たのと同じ年の出版ゆゑ、御一笑までにお目にかけ候。次手にちよつと金瓶梅をあけて見候へば、咂舌、嗚咂舌頭、などとあり、その他の小説も大同小異に候。どうも接吻は近年の造語と存ぜられ候

冠省高著難有く存候又先達は切拔を拜借いたしこれ又難有く御禮申上げ候高著の中の作品は大抵拜見いたし居り候へども二三未見のものも有之、早速拜見仕る可く候裝幀は製本よろしく羨望にたへず候紙は少しわろし表紙の羽二重(?)の染めは御注文はもう少し落ちついた色なりし乎と拜察仕候それから箱に貼れる目次の紙は宋朝活字めきたる文字面白く存候唯あれは凸版に候べし木版ならばもつと面白く上つた事と存候これは皆小村さんがかりの事に候へども次手を以て饒舌をふるひ候段不惡おゆるし下され度候切拔きの文章面白く――と申す意味は小生も知り居る事は失禮ながら甚だ正確にお書きなされ居候爲藝術的に面白く又小生の知らざる事はその外にも事實として面白く拜見いたし候泉先生のあすこだけちよつと削つてくれと濱野さんにたのまれたる時の風貌を想見すれば太だ愉快に御座候先生にはああ言ふ事件にあゝ處されさうな一面あり小生などのまだ直接あゝ言ふ事件にぶつからざるは一幸に候はん乎下らぬ事をなが〳〵と書き恐縮に存候　泥黎口業泥黎口業

五月二十二日　　芥川龍之介

水上瀧太郎様

一〇〇四〔五月二十九日田端から。佐藤春夫宛〕

朶雲奉誦短尺の件小山内氏より何にも言つてないよし水上君に聞き、今にして斯老の好い加減なるを知つたこれは下山霜山と言ふ書畫屋の企てなり霜山は俳句なども作り人皆快男兒と稱すれども兎に角書畫屋には相違なしこの男、諸家短尺十二枚を一組にして賣らんと欲すそれも金にでもなるのならば人にも勸められ共一枚一圓と言ふに至つては勸めらるも氣の毒なり但し吉井勇の說によれば、兎に角下山は千枚でも二千枚でもまとめる故やり甲斐があるよし今度も多分二千枚は越ゆるならん僕は鈴

木三重吉に頼まれ承諾せざる可らざる羽目になりて承諾したい君に承諾して貰つたのには學恐縮してゐる僕は賣りものの短尺で手習ひをする氣だ、君もそのつもりで氣樂にやつてくれ給へ。なほ高需により今樣三首書いて送る今樣も字も下手なれども紙は朝鮮の男女相聞の時に使ふ紙のよしまづ紙を珍重してごらん下さるべし。富の澤君の問題などは誰か活字で何か言つたらその時叩き返してやり給へ、僕はそれで澤山だと思ふ。それから短尺を難有う下山にやる見本は二三枚あれば好いと思つたゆゑ「水仙に殘菊活けて紅茶哉」と言ふ短尺は次手に僕が貰ふことにした。今日輕雨霏々もう梅雨に入れるが如し折角植ゑたる竹根づかずして葉の枯れたるもの二三竿南紀はすでに柑橘に花あらむ借問す曾枝亭主人の相思相々思々今に到つて衰へざるや否やを

五月二十九日

コレハ蔓性神經衰弱ヲ洒落レテ號トシタルモノト心得ラルベシ　曼　青

曾枝亭御主人　梧下

一〇〇五　〔六月六日田端より。端書、佐佐木茂索宛〕

お約束の御能今日（六日）午後五時より細川邸に催され候間御出で下され度、場所は先日申上候通り、軍醫學校の前に候。（放下僧　道成寺　外に狂言一番）右當用のみ

一〇〇六　〔六月二十一日田端から。小林雨郊宛〕

朶雲奉誦いろいろ御配慮を辱うし感佩いたし候。蓬平の畫はその位のねだんならばお求め下され度願上候。いつも御厄介をかくるばかりにて恐縮に存候。大彥の綾子さん可哀さうな事を致し候。小生も仲う人は懲り懲りいたし候。右當用のみ。

六月二十一日

芥　川　龍　之　介

小林雨郊様

一〇〇七　〔六月二十三日田端から。吉田東周宛〕

冠省御手紙難有く拝見いたし候又拙作を御愛讀下され候よし感佩いたし候なほ草堂を御尋ね下さる思召しも有之候段いよ／＼恐縮に存候へども性來の疎懶習ひをなし客を謝し居候次第につき御來駕を請ひ候儀も相成り難く何とぞ右勝手ながら不惡御高免下され度願上候

甲比丹乃つんぼ咎めそほととぎす

御一笑下され度候　頓首

六月廿三日　芥川龍之介

吉田東周様

一〇〇八　〔七月四日田端から。齋藤茂吉宛〕

朶雲奉誦上馬にまぎれざる事得心仕り候どうも考證業は落第の形なれどもそのうちあつと言はせるほどの名考證を御らんに入れ候間それを樂しみにお待ち下され度候童馬山房漫筆好評如湧御同慶の至りに不堪但し小生の最も敬服したるはドナウ河や古湯帷子也これはこの前に申漏らしたりと存候間次手を以て御披露に及び候なほ「點心」などは昨日の口業眞面目にはお讀み下さるまじく候その後目を黒くしとう／＼眼科のお醫者にかかり候所唯の結膜炎のよし讀書萬卷に至らざるに眼精涸れてはと聊か心細く存居り候あらあら貴酬まで　頓首

七月四日　芥川龍之介

齋藤詞兄　侍史

一〇〇九 〔七月十二日田端から。渡邊庫輔宛〕

この間は結構なものを難有う。又曰、但し死んで居らぬのには驚いたぞ。如何。又曰、近狀をしよつと報ずれば、格別門戸を鎖さぬのに一人の草賊も來ぬ始末。撃壌の歌亦人を愁殺す。又曰、犬は吠え、馬は嘶く。ワンワンを以てヒンヒンと倣すこと勿れ。

十二日　　龍

庫　輔　様　侍史

一〇一〇 〔七月十二日田端から。土屋文明宛〕

この間は失禮、あの日は君の來るまでに病人の弟の所へ行き、轉地などの相談をする爲に外出したさうして又君と一足ちがひに歸つた女房の氣の利かぬ爲に君を歸してしまつて殘念でならんすぐに前の坂へ女中を見にやらせたが、お見えにならんと言つて歸つた君はどちらへ行つたのだ僕は八幡坂から歸つた故、君が垣根に沿ひ僕の門を右へ行つたなら逢はぬ筈はない又僕の門を出てまつ直に與樂寺坂へ出たなら女中に見えぬ筈はない女房はほんの二分か三分のちがひだと言ふ故香取さんの前へ出たか、與樂寺坂を上へ行つたのかと思つてゐる。その後女房の產などの爲にごたごたしてゐる。又男の子也僕は暑い日に歩くのは厄介だが、雨の日に歩くのは恐れない今のうちに家をきめ一日も早く妻子と一しよになつては如何僕も子どもは三人になり、體は寒暑にこたへ易くなり大いに憮然としてゐる

匆々

七月十二日　　龍　之　介

土屋文明様

二伸　古泉氏や何かの宿所難有う叡山の夏行前に一度會ひたし

一〇一一〔七月十七日田端から。犬養健宛〕

冠省昨日は失禮仕候實は小穴君の結婚問題の爲、二三人小生の宅に來る事に相成り居り、客を謝し居り候爲大兄も側杖を食ひし次第、大兄と知らばちよつとにてもお目にかかりたかりしものをと思へども今更女中を叱る訣にも行かず殘念に存候。
北京の蒐集家にては陳寶琛の外に景賢、寶熙などの先生有之候よし又ジェネラル・モントと申す豪傑も偉い蒐集家のよし竹內栖鳳の息子さんより贈られたる本にて知り候間御存知の事かと存じ候へども婆心にもちよつと申上候若し陳寶琛先生を御訪問なされ候はゞ默つてゐても見せる事と存候へども徽宗臨古、郎世寧の百駿圖、唐守元畫册、李龍眠の五馬圖など御覽になる方よろしかるべく候。然れども大同石佛寺を御らんになり候はゞ他は御覽にならずともよろしかるべき乎石佛寺のある村には猛犬數頭あり、東方の客を見れば忽ち狺狺の聲を爲す、あれだけは思ひ出しても無氣味に御座候。
右とりあへず當用のみ。

七月十七日朝　芥川龍之介

犬養健様

一〇一二〔七月二十日田端から。堀辰雄宛〕

冠省。原稿用紙で失敬。この前君が小說を見せた時、「ハイカラなものならば書き易いんだけれど」と言つた。それに僕は「そんならハイカラなものを書くさ」と言つた。しかし今考へて見ると、そのハイカラなものと言ふのが寫生的なものの反對ならばやはりどんなに苦しくつてもハイカラなものを書くよりも寫生的なものを書くべきだと思ふ。その方が君の成長にずつと爲になると思ふ。これは大事なことだから、ちよつと君に手紙を書くことにした。この前君の見せた小說でもハイカラは可成ハイカ

ラだ。あれ以上ハイカラそのものを目的にするのは君の修業の上には危險だと言ふ氣がする。君はどう思ふ？　とりあへず前言とり消しまでに。

二十日夜　　　龍

堀　　君

一〇一三〔七月二十七日田端から。端書、小穴隆一宛〕

冠省僕の句は逆編年順に新しいのを先に書く事にする。君はどちらでも。僕は何年に作つたかとんとわからん。唯うろ覺えの記憶により排列するのみ。これだけ言ひ忘れし故ちよつと

一〇一四〔七月三十一日(推定)田端から。佐佐木茂索宛〕

先日は失禮仕候小說出來ず未だに輕井澤へも參らざる始末御憐憫下され度候又今日は子供に帽子を頂き難有く存候

扨證人なるものは小生一人にてよろしく候や實は女房も書くのかと思へど判然せぬ故小生だけにいたし候若し女房も書く場合はもう一度この屆を御使にてもおよこし下され度候　頓首

三十一日　　　澄

芸　兄

二伸　奥さんにもよろしくそれから文藝春秋の小說も拜讀仕り候間いづれ敬意を表すべくその旨もおん傳へ下され度候　以上

一〇一五〔八月五日田端から。小穴隆一宛〕

はいけい忘れてゐてお氣の毒さまとりあへずいつもだけ入れておきますあのつけ句省くのは惜しいが

考へて見ると僕の立句に君の脇だけついてゐるのは君に不利な誤解を岡やき連に與へないとも限らずそれ故見合せたいと存候へばもう二句ほど發句を書いて下さい洗馬の句などにまだ佳いのがあつたと存候右當用耳

八月五日　澄江子

一游亭御主人

二伸金澤へは手紙を出しましたそれから改造の稿料は今月末か來月初めに送らせます　頓首

龍之介

隆一様

一〇一六　〔十四年(推定)八月十一日。渡邊與四郎宛〕

ウツシ身ハ恙ナケレド汗ニアヘテ文作ラネバナラヌ苦シサ

君ガ讀ミシ高須ノ朝臣梅タニノ議論モヨマズ事ノシゲサニ

サマザマノ氣モチヲ持テバソノ中ニホ句ニスベキヲホ句ニス我ハ

ココニ書ケルハ歌ニハアラズ返リ事ヲ三十一文字ニツヅリタル文

八月十一日　芥川龍之介

渡邊與四郎様

一〇一七　〔八月十一日田端から。高野敬錄宛〕

冠省今夕は失禮仕り候明日夕刻お出で下され候やうに申上候へどもそれにては氣がせき候間明後日の朝にして頂きたく、ねてゐてもわかるやうに致す可く候間何とぞ右樣に願ひ度候　頓首

十一日　芥川龍之介

高野敬錄樣

一〇一八〔八月十二日田端から。小穴隆一宛〕

拜啓　原稿用紙にて失禮きのふ足るの足らぬと言ひしがけふ清書して見れば、君の句は五十四句あり、從つて四句だけ削る事となる就いては五十四句とも改造へまはしたれば、校正の節どれでも四句お削り下され度し。愚按ずるに大利根やもらひ紙は削りても、お鑑樣の祝ひ酒や米搗虫は保存し度し。匆々。

龍之介

隆一樣

一〇一九〔八月十二日田端から。高野敬錄宛〕

冠省明朝と申上げ候へどもどうも捗どらず候間明夕までお待ち下され度候。間に他の仕事などはまぜずに書きつづけ候間その點は御休神下され度、右當用のみ　頓首

十二日

龍之介

高野樣

一〇二〇〔八月二十日田端から。吉田吉五郎宛〕

冠省當用のみ申上げます短尺帖儀お金も拂はず永々手もとにとゞめおき申訣ありません扨右短尺帖のうち其角、惟然、去來、杉風、言水、鬼貫、路通の七枚だけ外にお讓り下さる訣には行きませんか今更こんな事を申上げるのは甚恐縮ですが、右七枚を除いた外のだけ相當の値段にして頂くと難有いと存じます何とも勝手なお願ですが餘り金に困らぬ身分でも無之候につき右どうかあしからず　頓首

八月二十日

芥川龍之介

吉田吉五郎様

一〇二一〔八月二十日田端から。小林雨郊宛〕

冠省留守にしてゐた爲、御返事相遲れ申訣ありませんあの書帖はどうも飯田邊にて出來た贋らしく蓬平をシンにして造つたものかと存じます構圖だけ蓬平のを寫したのでせう御言葉に甘え早速御返送申しますが若し先方に惡いやうたらば大金の品にても無之候間買つておいてもよろしくその邊はどうか御遠慮なく御申し聞け下さいなほ御次手の節は田中君や新井君にもよろしく。春陽會で田中さんにお目にかかつた時はもう少しで外の人かと思ふ所でしたなぜかと思つていろいろ考へて見たら、小生は田中君の洋服を着てゐられる所は見てゐるのですが、オオヴアコオトを着て帽子をかぶつてゐられる所は始めてだつたのです右御返事まで

八月二十日

芥川龍之介

小林雨郊様

二伸小生は今夕又輕井澤へ參ります故若し御用の節は長野縣輕井澤町つるや內小生にて御手紙を頂きたう存じます

一〇二二〔八月二十五日輕井澤から。小穴隆一宛〕

御手紙拜見仕り候。改造の廣告に君の名前出て居らず、不愉快に存候。それから〔八十二字削除〕云々の語有之候。いづれ歸京後は君も小生と共に××さんに會ふ事と相成る可く、その段御覺悟ありて然る可く候。輕井澤はすでに人稀に、秋冷の氣動き旅情を催さしむる事多く候。室生も今日歸る筈、片山女史も二三日中に歸る筈。二三日前室生と碓氷峠へ上り候所、室生妙義山を眺めて感歎して曰、「あ

い山はシヤウカのやうだね。」小生も九月の始めにかへる筈、その頃七十五圓を利用し、ちよつと一度御來遊ありては如何(七十五圓とはケチ也百圓くれるかと思つてゐた)但し前にて申上げ候如く既に避暑地情調は無之ものと御覺悟なさるべく候　頓首

八月二十五日　　　　龍　之　介

隆　　樣

一〇二三　〔八月二十六日輕井澤から。齋藤茂吉宛〕

童馬山房雜歌一百首詩思湧泉の如き御近狀健羨に堪へず候。二三日前にも碓氷峠にのぼり、成程雲はひそかなと感歎いたし候。改造の小生の小說は雲煙の如く御覽下され度、義理合ひにからまれての一夜づけは毎度の事ながら、今度は原稿とりの使を待たせ置きて後半數枚を書き上げし次第、赧顏の外無之候。ここは連日の雨にて寒さ加はり、セルに袷羽織を重ねて暮らし居り候　町は西洋人相手の骨董屋、洋服屋雜貨屋など軒を並べ、中々ハイカラに候へども偶、菓子を買ひ候へば主人は「つきは」(竹の皮)に包みませうかなどと申し居候。一昨日室生、東京へかへりてより聊か無聊を覺え候まま、漫にペンを執つて手紙をしたたむる事如斯に御座候　頓首

八月二十六日　　　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

一〇二四　〔八月二十九日輕井澤から。塚本八洲宛〕

その後體は日にまし好い事と思ひます。こちらもお客はもう大抵かへり、宿もがらんとしてしまひました。餘り颱風が來たり何かする故、わたしも碓氷あたりで生埋めにならぬうちに歸ることにしようかと思つてゐます。二三日前文子より手紙參り、オバルチンを送つて頂いた事を知りました。どうも

難有う。文子の手紙に曰「自分が病氣にかかつてゐる爲でせう私の事まで氣を揉むで居ると見えます。何となくやしまがかわい（コノ「ワ」ノ字原文ドホリ）さうになつてしまひました。」文子の爲にも勉强して早く丈夫におなりなさい。目下同宿中の醫學博士が一人ゐますが、この人も胸を惡くしてゐたさうです。勿論いまはぴんぴんしてゐます。この人、この間「馬をさへながむる雪のあしたかな」と云ふ芭蕉の句碑を見て（この句碑は輕井澤の宿(シユク)はづれに立つてゐます）「馬をさへ」とは「馬を抑へることですか？」と言つてゐました。氣樂ですね。しかし中々品の好い紳士です。それからここに別莊を持つてゐる人に赤坂邊の齒醫者がゐます。この人も惡人ではありませんが、精力過剩らしい顏をした、ブルドッグに近い豪傑です。これが大の輕井澤通(ツウ)で、頻りに僕に秋までゐて月を見て行けと勸誘します。その揚句に曰、「どうでせう、芥川さん、山の月は陰氣で海の月は陽氣ぢやないでせうか？」僕曰、「さあ、陰氣な山の月は陰氣で陽氣な山の月は陽氣でせう。」齒醫者曰「海もさうですか？」僕曰「さう思ひますがね。」かう言ふ話ばかりしてゐれば長生をする事は受合ひです。この人の堂々たる體格はその賜物かも知れません。僕はこの間この人に「あなたは煙草をやめて何をしても到底肥られる體ぢやありませんな。まあ精々お吸ひなさい」とつまらん煽動を受けました。けふは幸ひ晴天です。しかし雨がふると、セルに袷羽織を重ねなければなりません。桔梗が咲きつくつく法師がなき、あたりの風光はもう殆ど秋です。九月にはひればわたしの外に滯在客は一人もゐなくなるかも知れません。右いろいろ暇つぶしまでに。

芥川龍之介

八洲様

一〇二五　〔八月三十日輕井澤から。繪端書、葛卷義敏宛〕

輕井澤は涼しくて、ハイカラで、うまいものが澤山あつて、天國のやうなり。小穴、佐佐木夫婦が來

てゐる上、堀もゐる故、一層賑かなり。どうだ、羨しからう。この畫はがきの氷庫は僕の好きな建物故、ちよつとをがませる。感涙にむせぶこと隨意なり。

卅日　　　　　　　　　　　　　　　　　　龍　之　介

一〇二六〔八月三十日輕井澤から。繪端書、下島勳宛〕

この二三日はこちらも可成りの暑さです。唯今同宿、小穴、佐々木、佐々木夫人、堀等にて賑かなことです。奧さんはその後引きつづきおよろしい事と存じますが如何ですか? 小生も五日頃にはかへるつもりです。頓首

八月卅日　　　　　　　　　　　　　輕井澤　龍　之　介

一〇二七〔八月三十一日輕井澤から。繪端書、芥川比呂志宛〕

コレハアタゴヤマトイフ山デス。アタゴヤマニハセイヤウジンノベツサウガタクサンアリマス。ソレカラ多加志ニヤツタノハウスヒタウゲノトンネルデス。イマハキクワンシヤハツカズ、デンキキクワンシヤガキシヤヲヒイテヰマス

一〇二八〔八月三十一日輕井澤から。室生犀星宛〕

三好さんへ四十錢かへせと言ふことづけ、うれしく思つた。君の癇積を起したあとだつたから、餘計嬉しく思つたのかも知れない。三好さんにすぐにかへすのは嬉しさの手前ちよつと勿體ない氣がした故、二三日おいてから返した。かう言ふ心もちは君もわかつてくれることと思ふ。三好さんはあしたかへる。片山さんも二十七日か八日かにかへつた。その代り今は小穴や佐々木夫婦が來てゐる。小穴は毎日義足をつけて午前と午後と二囘づつ寫生に出てゐる。

この二三日は輕井澤も非常に暑い。かう言ふ暑さでは萩原君の會も少し延ばしてはどうか?「妻が里」を讀んだ。君はやはり豫想したやうに僕の失敗する所を如何にも樂々と成功してゐる。小穴と一しよに道具屋をまはり、古い布を一枚買つた。その外には殆ど買ふべきものなし。けふは最後のオオクシヨンへ行き、安ものを少し買つて來る筈。その後句を一つ作つた。しかし御覽の通り、輕井澤の句ではない。

東雲(しののめ)の煤降る中や下の關

八月卅一日　　龍之介

犀星詞兄　侍史

一〇二九　〔九月七日輕井澤から。齋藤茂吉宛〕

冠省先達は御手紙難有く存候。但し「死後」をお褒め下され候は餘り難有からず、これは正直な所に御座候。「ふゆくさ」評相遲れ申訣無之候。實はこの間より風を引き、臥床致し居り候まま、書く元氣なかりし次第、旅に病んで夢に締切り日を考へるのは枯野を駈けめぐるよりも苦勞に御座候。今日はまだ咳も出れど押して東京へ歸るつもり、いづれ拜眉の機を得ることと樂しみに致し居候。なほ又先達土人は竹の皮をつきはと申すと認め候へどもそれは碓氷峠の力餅屋の小婢の教へ違ひにてつきはは木をつきたる竹の皮代用のもののよし、宿の主人に教はり候間次手を以て訂正仕り候。頓首

九月七日　　芥川龍之介

齋藤茂吉様

一〇三〇　〔九月七日輕井澤から。塚本鈴宛〕

冠省。栗と煙草とありがたうございます。栗は黴びたのも交つてゐました。どうか栗屋をお叱り下さ

い。あれから風を引き、四五日ねてしまひました。熱が少しあり、それに咳が出て弱りました。小穴君や堀君がゐて看病してくれたので大いに助かつた形です。そこへ東京から蒲原君が比呂志をつれて來ました。比呂志はもう三晩とまり、今日一しよに東京へかへる筈です。昨夜は小生がここの政治家や實業家と御飯に呼ばれ、九時頃までかへらなかつた所、比呂志は寂しがつて泣き出してしまひました。その御飯の時に聞いた話ですが、靑山胤通、高木兼寛などと言ふ醫學博士連中は皆一二度咯血してゐたさうです。當地はもうすつかり秋めき、レエス屋や道具屋もそろそろ戶をしめて歸り出しました。小生はまだ咳が出て弱つてゐます。しかし大した事はありません。どうか八洲さんによろしく、

九月七日　　　　龍　之　介

塚本のおかあ様

一〇三一　〔九月七日輕井澤から。繪端書、穎原退藏宛〕

度々御手紙難有く存候序文相遲れ何とも申訣無之候。二三日中には必ず差上げ候間何とぞもう少々書肆をおなだめおき下され度願上候この頃當地にて寢冷を煩ひ、いろ〳〵の仕事に狂ひを生じ候爲、床上夢は〆切り日を繞りし事も少からず御憫笑下され度候。

九月七日　　　　輕井澤にて　芥　川　龍　之　介

一〇三二　〔九月八日輕井澤から。穎原退藏宛〕

冠省。御約束の拙文お送り申上候。體も何も成さず候へども、よろしければ御のせ下されたく候。それから小生は鷗外流に「わけ」は「譯」を用ひず「訣」を用ひ候間、それだけは拙文を御校正なさる方へよろしくおん傳へ下され度候。序文に僞なし、蕪村全集の市に出づる日を待ち焦るゝ事一方ならず。但しそれならばなぜ早く書かなかつたなどとお叱り下さるまじく候　頓首

九月八日
芥川龍之介

潁原様

一〇三三〔九月十二日田端から。有田四郎宛〕

朶雲奉誦。僕の畫などはお安いものだ。但し今は風を引いて、熱を出して、うんうん言つてゐる故、だめなり。平癒に及び次第けん上する。それから陳勳の畫は貰つてはすまぬやうな氣がする。尤も陳勳に對して有田四郎を思ふのもよいが有田四郎に對して有田四郎を思ふのに若かず。陳勳は返す故、君の畫を一枚くれ。但しトワルや板はいけない。畫學紙か和漢の紙に書いてくれ給へ。奥さん健在なりや。子孫繁昌なりや。僕も豚兒三人あり。三人目は生まれ立て故、ほんたうにまだ豚の兒のやうだ。かくしてだん〳〵女にも惚れなくなるならん。君の手紙に對して往年を憶ふ、多少の感慨なきにあらず　頓首

九月十二日
芥川龍之介

有田四郎様

二伸。君は白くなるたちか禿げるたちか僕はもう七年前から見ると一寸弱る位額が禿げ上つた。

一〇三四〔九月(推定)十二日田端から。下島勳宛〕

拜啓　今日參上の筈に候ひし所朝より原稿を催促され上り兼ぬる事と相成候間明晩御差支へ無之候節は拜趨致し度存居候右とりあへず御斷りまで如斯に御座候　頓首
近作一つ御眼にかけ候御笑ひ下され度候
野茨にからまる萩の盛りかな
十二日夜
芥川龍之介

空谷先生　梧右

一〇三五　〔九月十七日田端から。瀧井孝作宛〕

冠省。御手紙拜見。目下風を引いて、熱を出して、うんうん言つてゐる。「ゲテモノ」は九月小說中の白眉なり。室生なども大分感心してゐた。もろこしの餅のやうな味があつて中々好い。「海のほとり」は兎も角も、「死後」は〆切り前一日で書いた。作者の考へによれば、夢でうちへ歸つて來る所から先は甚だ不滿だ。本にする時あすこから先を直さうと思つてゐる。「改造」は志賀さんの「瑣事」や僕の「死後」が來たものだから、中條百合子の百五十枚の長篇を十月號にまはしてしまつた。僕だけこの事を知つてゐるのは僕だけ中條百合子に罪を負つてゐるやうな氣がするから、御次手の節志賀さんにもその旨申し上げてくれ給へ。頓首

芥川龍之介

瀧井孝作様

二伸　字の曲るのは橫にねたまま書いてゐる爲とかんにんし給へ

一〇三六　〔九月十八日田端から。南條勝代宛〕

冠省。御手紙拜見仕り候。小生の所へお出でなさり候ても餘りお爲にもなるまじき乎。然れども會ひたしと仰せられ候はゞ、二十三日午後二時頃御光來下され度候。頓首

九月十八日

芥川龍之介

南條勝代様

二伸　市內電車ならば動坂、山手線ならば田端、但しどちらも三四町はお步きなさる事と御覺悟なさる可く候。

一〇三七 〔九月二十二日田端から。得能文宛〕

冠省その後御無音に打ちすぎ恐縮に存じて居ます。輕井澤の風邪を持ち越し、一昨日やつと床を離れた次第、どうか不惡御ゆるし下さい。扨××君のことにつき、御都合のよろしい時に參上したいと存じますが、いつがよろしうございませうか？　なほ甚だ勝手がましい次第でございますが、日曜以外の日をおえらび下さらば幸甚に存じます。頓首

九月二十二日朝　　　　　　　　　　龍之介

得能先生侍史

一〇三八 〔九月二十三日田端から。齋藤茂吉宛〕

お歌かける紙どもたしかに拜受、ありがたく存じ奉り候。贋良寛などどうなつてもかまはず、よし文君に百歩をゆづりにせ良寛ならずとするもあの良寛よりはこの茂吉の方兒孫につたふるに足る可く候。末筆ながら小病平癒、日々少しづつもの書き居り候。頓首

九月二十三日夜　　　　　　　　　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

二伸　今日はお歌をかける紙とともに美人一人（洋行がへりの少女）參り、大いにうらうらと致し居り候。御健羨下され度候。

一〇三九 〔九月二十五日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省、小病小閑を得、この手紙をしたためる。濱木綿の畫ありがたう。それから女性の隨筆で例の短尺の件、十二ヶ月の事を君に傳へ忘れたのを知り、大いに恐縮した。君はもう書き了つたか。僕はま

だ百枚ばかり殘つてゐる。この頃なる可くものを書かずに飯を食ふ工夫をしてゐるが、それは却つてものを書くより骨が折れる事になりさうにて所詮は賣文到死かと思つてゐる。目下支那游記の校正中。床の上にて校正の傍ら別紙抒情詩一篇を作る。御愛誦御隨意たるべし。この頃諸詩人の集を讀み、つらつら考ふる所によれば、どうも日本の詩人は聾だね。(歌人は例外)少くも視覺的效果に鋭い割に聽覺的效果には鈍感だね。君はさうは思はぬか？　長歌、催馬樂、今樣などのリズムもどうかもう一度考へ直して見る必要がありさうだ。夜來秋雨。隊葉處々黄なり。ワギモコによろしく。(夜長如年把燭寢顏を見よや。)

九月二十五日　澄江子

曾枝亭先生

風きほふゆふべなりけむ、
窓のとにのびあがりつつ
オルガンをとどろとひける
女わらべの君こそ見しか。
男わらべのわれをも名をも
年月のながるるままに
いまははた知りたまはずや。
いまもなほ知りたまへりや。

一〇四〇　〔九月二十五日田端から。中根駒十郎宛〕

冠省。先達渡邊君より尊臺御光來下さるやうに伺ひ居り候へば、御光來下さるものと相定め、この手

紙したため申候。其角の句に曰、「爐寒ぎや汝を呼ぶは金の事」古今同歎とはこの事なり。何とぞ御光來の節はお金三百圓ばかり御融通下され度願上候。文章倶樂部のゴシップによれば千葉の海に命を失はむとなされ候よし、それは小生にお金を渡さざる祟りなり。今度のお金も御延引なされ候に於ては自動車か電車に轢かれ御落命の惧有之るべき乎。急々如律令。急々如律令。

九月二十五日　　　龍之介

駒十郎様

一〇四一〔九月二十九日田端から。神崎清宛〕

冠省。突然手紙をさし上ぐる無禮をおゆるし下され度候。さて尊臺の「黄色評論」中拙作「死後」の高評あり。あの結末は尊臺の烱眼に御らん下され候如く故意に筆を弄したるものには無之、單に〆切りに間に合せんと急ぎたる爲に御座候。本町二丁目の糸屋の娘にして恰も手れん手くだに富めるお職の如く思はるゝは面映ゆくも心外に存候間何とぞ左樣御承知下され度候。なほ又小生の作品の過去派の影を宿せるはまことに貴意の如くならむ乎。ひとり新進の諸大家の傑作に限らず大戰後の西洋の文藝的貨物も大半は小生などの趣味には慊焉たるもののみに御座候。昨日聲變りせしかと思へば、今日は既におのづから額の禿げ上るをとどむる事能はず。三十にして老を歎ずるの情、よろしく御憐憫下さる可く候。頓首

九月二十九日　　　芥川龍之介

神崎清様　侍史

一〇四二〔十月九日田端から。村上成滿郎宛〕

冠省、御手紙拜見仕り候。翠微御惠投下され候よし、難有く御禮申上げ候。村上先生のことは土屋君

よりも承り居り、又高吟も(句は)二三拜見致し居り候。先生は小生にもう一度一茶を讀めと仰せられ候よし、小生は既に一茶句集を讀み返し、往時とは所見を異に致し居り候爲、先生の仰せを知り、いたく感動仕り候。高作感化も文藝春秋にて拜見致し居り候。小島君の拙作をお愛讀下され候は或は小說にやと存居り候所、御手紙にて事實なるを知り、しかもその小島君の夭折せられしを知り、愴然の感に堪へず候。小生は薄劣の性に多病の軀を兼ね居り候へども、かう云ふ讀者のある事と知りし上は、どうしても勉强せねばならずと存候。尊臺も御病臥中のよし、御微恙のことゝは存候へども、世の中には年をとらねばわからぬ苦しみも喜びもあり、折角長生きをなさるやう御養生專一に願上げ候。右とりあへず御禮まで。頓首

十月九日　芥川龍之介

村上成滿郞樣　侍史

一〇四三　〔十月十一日田端から。土屋文明宛〕

御手紙拜見。島木さんから誤植の事を言つて來た。誤植などはかまはない。○あの文章を書いた事により、村上さんの息子さんから手紙を貰つた。それから又大和と言ふ人からも手紙を貰つた。どちらも僕には愉快な手紙だつた。今度あつた時に君に見せる。○借家は不相變多い。十六七日頃にやつて來ないか。○唯今一篇の論文を製造中。久しぶりに頭腦の論理的中樞を働かすのだから中々うまく働いてくれない。しかし活字になつた後は御一讀を乞ふ。○いつでも來る前にはちよつとはがきをくれ給へ。留守にするといけないから。○「ゲテモノ」讀みしや否や。

十月十一日　芥川龍之介

土屋文明樣

一〇四四　〔十月十八日田端から。室生犀星宛〕

冠省御手紙度々ありがたう。その後子供ひきつゞき病氣がちにて難澁、二三日前には也寸志夜中に熱出で、小生迄起き出でて水枕へ水を入るゝ始末也。〔五十二字削除〕

○瀧田君急變あらば早速お知らせ申すべし。一昨日高野君見えての話によれば、又持ち直したるよし。安心はならねどさし當り大した事はなからん乎。○今日日曜にて客に大勢あひ、唯今疲れて床に入らんとする所。この頃庭に棕櫚十株ほど植ゑ、聊か趣の變りたるを愛し居り候。芭蕉は秋芽二本出たり。追々寒くなれば魚眠洞の庭の芭蕉も芽を出したらば、今より寒さにいたまぬ工夫肝要ならん。芭蕉の留守見舞に參上してもよろし。桂井、太田先生へよろしく。北國の諸麗人健在なりや　頓首

十月十八日　　龍　之　介

犀　星　詞　兄

二伸　あの紙二帖ばかりほしく候

一〇四五　〔十月二十日田端から。阿部章藏宛〕

冠省高著を頂き難有く存じます。大抵女性にて拜見してをりますが、小閑を得次第改めて拜見したいと思ひます。頓首

十月二十日　　芥　川　龍　之　介

水上瀧太郎樣

一〇四六　〔十月二十四日田端から。齋藤茂吉宛。封筒にたばた良寛（絵）ききとあり〕

ちよつと申上げ候只今博物館に陳列中の佛畫御らんになり候やまだの節は是非々々御一見なされ度お

んすゝめ申上候大したものがならび居候（期限はたしか來月七日迄）

十月二十四日　芥川龍之介

齋藤茂吉様

一〇四七　〔十月二十四日田端から。室生犀星宛〕

冠省御不幸ありしよしおくやみ申上候この間ちよつと御留守宅へよりし所、芭蕉はまだ芽を出さざるよし承り安心仕り候こちらは子供の病氣未だに癒らず、但し大した事はなきよし空谷先生も申され候へば御休神下され度候その後何も書かず、來週位よりぽつ／＼新年號にても書き始めん乎と存じ來月の新潮に論文一篇を書きたい君は議論嫌ひなれども御一覽下さらば幸甚也次手を以て近作一句御披露に及び候

庭つちに皐月の蠅のしたしさよ

十月廿四日　芥川龍之介

室生犀星様

〔同封室生とみ子宛〕

拜啓御父上樣御長逝の趣謹んで御悔み申上候かかる紙にて申訣無之候へどもあしからずおゆるし下され度候　拜

十月二十四日　芥川龍之介

一〇四八　〔十月二十七日田端から。齋藤茂吉宛〕

染雲奉誦仕り候博物館の佛畫ごらんのよし申上げ甲斐ありてうれしく存候。改造の御作中々面白くいつか一生懸命になつて拜讀仕り候。是非々々あの類のものもお書きなされ候やう切望仕り候。歌の事

は安心なり。大兄にして歌をおすてなされ候ても歌は大兄を離れまじく候。今朝十時瀧田哲太郎君長逝唯今悔みに參りてかへりし所、この手紙は長崎へお立ち前に屆くや否や心もとなく存候へどもとりあへず御返事までに筆をとり候。頓首

十月二十七日　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

二伸　土屋文明けふ引越しの所明日にのばし候よし庭に蒟蒻玉を澤山植ゑて蒟蒻園造るよし申居候。

一〇四九　〔十一月一日田端から。南條勝代宛〕

オケイコハサハリアル故コノ次ノ月曜日マデノバシテ下サイ

（これは三十一文字の手紙です）

十一月朔　　芥川龍之介

南條勝代樣

一〇五〇　〔十一月四日田端から。古賀殘星宛〕

原稿用紙で御免下さい。度々御手紙を頂き恐縮に存じます。しかし折角の仰せながら、「若き詩人に斯く希望す」と申すほどまとまつた意見を持ち合せてゐません。從つて何の御返事も申上げられない訣です。どうか右あしからず御ゆるし下さい。頓首

十一月四日　　芥川龍之介

古賀殘星樣

一〇五一〔十一月五日田端から。永見德太郎宛〕

冠省この間はかまぼこを難有う存じます。御出の節は何のおかまひもせず恐縮に存じて居ります。唯今新年號にて手が六本あつても足らぬ始末也。新年皆樣のお出でをお待ち申して居ります　頓首

十一月五日　　芥川龍之介

永見德太郎樣

一〇五二〔十一月十三日田端から。神崎淸宛〕

冠省。「みやうごにち令孃」や何かは到底誰にもわかりませんよ。主人役は多分伊藤さんでせう。これも或は井上さんかも知れません。唯僕のロティの本で面白く思つたのはあの日本人が皆ロココの服裝をしてゐる事です。つまりあの舞踏會はワトオの匂のある日本だつたのですね。頓首

十一月十三日　　芥川龍之介

神崎淸樣

一〇五三〔十一月十四日田端から。南條勝代宛。封筒に十一月?日とあり〕

冠省。新年號の〆切りが迫つて忙しくなつて來ましたから來月の廿日頃までお稽古をやめにします。勝手ながら右御承知下さい。これから短篇を三つばかり拵へなければならないのです。尙又お次手の節森先生の「黃金杯」「顏」「ソクラテスの死」などと言ふ飜譯もよんでごらんなさい。頓首

十一月何日かわかりません　　芥川龍之介

南條勝代樣　粧次

一〇五四 〔十一月二十一日田端から。香取秀眞宛〕

冠省昨夜はおそくまで御邪魔いたし申訣無之候今日淺野家へ參り結構なる畫いくつも拜見仕り候厚く御禮申上げ候尚次手を以て支那游記一卷けん上仕り候　頓首

十一月二十一日　芥川龍之介

香取先生

一〇五五 〔十一月二十五日田端から。穎原退藏宛〕

冠省先達はカステラ難有く存じ候それから又蕪村句集をも拜受厚く御禮申上げ候唯今新年號の小說を書かされ居り候へどもあひ間あひ間に拜見致し居候蕪村は句もうまけれど文章も中々うまくやはり才人だなと感服致し候妙法寺の畫も中々よささうにて是非一度實物を見たしと存候何はともあれ當分蕪村全集に親まれる事難有く但し時々原稿を書く事を怠るやうになるのは弱り候右御禮かたがたいつも筆無精の御わびまで　頓首

十一月二十五日　芥川龍之介

穎原退藏樣　侍史

二伸この手紙を書きし所へ御手紙參り候間又一筆申上げ候過日御上京の節頭註を入れるので大變だと仰せられ候へども又あれだけ入れるのは大變に相違無之候へども讀む方には大いに便利なり、殊に付け合などでは大分頭註の御厄介に相成り候　東京は中中寒く今夜も行火の上にこの手紙したゝめ居り候　匆々

二十五日　芥川龍之介

穎原樣

一〇五六 〔十一月二十五日田端から。小手川金次郎宛〕

冠省かまぼこ澤山ありがたう存じました河童の圖は野上さんの御馳走になつた時に誰の書帖とも知らずにかきました次手を以て河童の歌を一首御披露いたします　頓首

ワガ愛ヅル河ノ太郎ヲ畫ニカケリコハクナクトモ少シコハガレ

十一月二十五日　芥川龍之介

小手川金次郎様

一〇五七 〔十一月二十六日田端から。堀口大學宛〕

冠省その後は御無音にうちすぎ申訣無く存じて居ります いつぞや拙作を飜譯して下さると云ふ御手紙を頂いた節、生憎支那へ遊びに行つてゐた爲御返事をさし上げる機會を失ひ、その儘になつてしまひましたどうか不惡御高免下さいこんにちふと改造の御作の中トルストイに關する一章を讀み、往年の失禮を思ひ出しましたからこの手紙をしたゝめます　目下新年號の原稿を書かされる爲賣文生活の忙しさに追はれてゐますがいづれ拜眉の上高話を伺ひたいと存じてゐます　頓首

十二(原)月二十六日　芥川龍之介

堀口大學様

一〇五八 〔十二月一日田端から。佐佐木茂索宛〕

冠省御手紙度々難有く存候君のはがきは早速校正の神樣へまはしたあの校正では長文の正誤表が讀者から二本も來てゐる神樣大閉口の體僕ぶらり〳〵執筆中

前略原稿一囘だけさし上げます卷頭はどうかおやめ下さい誰か先輩がよろしいでせう　匆々
十二月朔
芥川龍之介
高　野　樣

一〇五九　〔十二月一日田端から。高野敬錄宛〕

一〇六〇　〔十二月一日田端から。宇野浩二宛〕

朶雲奉誦新年號出來しや上海游記の事、君に關する分だけ讀んでくれ給へ君が小說と小品との別を云々したから僕が「私」小說論私見を書いたと言ふ藤森の說には驚いたねああなるとてもかなはん僕は兜をぬぐ
十二月一日
芥川龍之介
宇野浩二樣

一〇六一　〔十二月六日田端から。濱野英二宛〕

冠省、御手紙拜見しました。鏡花全集はやはり並製が參りどうしたのかと思つてゐました。お取りかへを願へれば幸甚です。支那游記は御讀みをねがふのも汗顏のしろものです。泉先生へも御無沙汰して居ります。どうかお次手の節によろしく。いづれ又近々お目にかゝる事と存じます。頓首
十二月六日
芥川龍之介
濱野英二樣
二伸　いつぞやは柳田さんたちの本の目錄を難有う存じます

一〇六二　〔十二月十日田端から。佐佐木千之宛〕

冠省、罷茶の爲大いに怠業氣分となり、未だに中央公論も出來上らず、あした中には出來上らせ候間もう三四日お待ち下され度願上候。頓首

十二月十日　　芥川龍之介

佐々木千之君

二伸　改造を斷り候へば中央公論をすまし次第新潮へとりかかる可く候

一〇六三　〔十二月十一日田端から。佐佐木茂索宛。封筒にサカサマデ失敬とあり〕

朶雲奉誦僕まだ原稿出來ずもう一週間お待ち下され高野さん曰、「佐々木さんのものは大へん好いものです」僕のはヘンテコなものだ

十二月十一日　　澄

芸　先生

一〇六四　〔十二月十五日田端から。高野敬錄宛〕

冠省　昨夜は炬燵に火を切らし候爲、しまひの方大急ぎにて書き、甚だ不滿に候間、同封の原稿とおとりかへ下され度願上げ奉り候。以上。

十二月十五日　　芥川龍之介

高野敬錄様

一〇六五　〔十二月十六日田端から。中根駒十郎宛〕

(一)紙はあれにて結構に候あれへヤヤ黒みたる朱にて白ヌキに表題を入れたし如何にや
(二)藤澤清造君、劇作家協會の金を預り居り、(百八十圓)それを爲替に組みに行く途中落したよしあなたに話し「根津權現裏」を新潮社より出してくれないかと申し居り候へども如何にや同書は田山花袋、生田長江、島崎藤村諸先生の稱讃つき居り候へば、廣告の便は有之候出版元は小西書店なれど版權はスグにとり上げられるよし同人この頃は首でもくくりたいなどと申居候へばなる可く本になるやうにおとり計らひ下され度候
(三)小生の本は芥川龍之介選集と云ふ事にいたし、序文をつけ、來月はじめにさし上げるつもりに御座候間左樣おんふくみ下され度候　頓首

十六日

芥川龍之介

中根駒十郎樣

一〇六六〔十二月二十四日田端から。端書、佐藤春夫宛〕

先達は失禮明二十五日午後三時四時の間に參上仕るべし御在宅を得ば幸甚也　頓首

一〇六七〔十二月二十九日田端から。小手川金次郎宛〕

冠省この間はかまぼこを頂き難有く存じます早速となりのいもじ秀眞先生に御裾わけして頂だい仕りました早速御禮申上げるつもりでしたが、新年號なるものにひつかゝり居候爲、ついつい今日に相成り甚恐縮に存じてゐます次手に河郎の歌を御披露します

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはち見ゆるかぶろのあたま
わがめづる河の太郎を畫にかけり怖くなくとも少し怖がれ

御一笑下さい

十二月二十九日　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

小手川金次郎様

一〇六八　〔十二月三十日田端から。香取秀眞宛〕

冠省かかる人參られ候間御引見下され候はば幸甚に御座候小生にはよくもわからねど古き硯古き墨いろいろ有之候小生もこの不景氣の師走に巾着の底をはたき候

十二月卅日　　　　　　　　　　　　龍之介

香取先生侍史

一〇六九　〔十二月三十一日田端から。齋藤茂吉宛〕

冠省この間は御手紙を頂き難有く存候年末は小生にもいろいろ不快なる用事起り弱り入り候改造の御歌「折に觸れたる」は弱り入りたる小生には何とも言はれぬ感銘あり「娑婆苦より」「いのちさへ」「うつしみは」「まどかなる」等は巧拙は知らず、ただに小生をセンティメンタルに致し候今日大晦日なり青年團員の喇叭の音を聞きつつ、置炬燵の中にこの手紙を書けば尊豪の顏目にあるが如しまことにまことに小生などは「山のなかにも居りけむもの」と存じ居候　頓首

芥川龍之介

齋藤茂吉様

二伸　小生はいろいろ不快な中に短篇二つ拵へ候へども中央公論の方は出來損ひなりもし御覽下され候はば新潮の「年末の一日」を御覽下され度候

一〇七〇　〔十二月三十一日田端から。岸浪靜山宛〕

冠省御手紙拜見仕り候いつぞや支那游記の事お尋ねをうけながら仕事中つい御返事をさし上げず申訣無之候島木さんへの紹介狀は郵便にてさし上げてもよろしく候又小生よりも平福さんに紹介狀をお貰ひなすつた方がよろしいかも知れないとも存じ居候右とりあへず御返事まで　頓首

大みそか　　　　芥川龍之介

岸浪靜山樣

一〇七一　〔大正十四年田端、家にて。葛巻義敏宛〕

よつちやん大王閣下

「戰爭と平和」の上卷を出しておいて下され給へ　願ひ奉る

一〇七二　〔大正十四年田端、家にて。葛巻義敏宛〕

庭つちに皐月の蠅のしたしさよ

名句一つ　今日製

龍

義　公

一〇七三　〔大正十四年（推定）田端から。下島勳宛〕

冠省けふひるごろはまだうちに居り候間御光來下さるまじく候や長崎よりあやしげなる屛風到着いたし居り候間お目にかけ申す可く候　頓首

十六日　　芥川龍之介

空谷先生

大正十五年　昭和元年

一〇七四　〔一月一日田端から。年賀状に、石黒定一宛〕

あなたも二人のお子さんのお父さんにおなりだと思ふと實際年月の流れるのを感じます

一〇七五　〔一月八日田端から。谷口喜作宛〕

冠省無精の爲御年始も申上げず失禮いたして居ります又昨日は結構なものを頂き、難有く存じます尤も小生目下胃腸を害し居る爲あの一口最中も一度に三つしか食べられず太だ殘念ですが如何とも致されません右とりあへず御禮まで　頓首

正月八日夜　　芥川龍之介

谷口喜作樣

一〇七六　〔一月九日田端から。端書、南部修太郎宛〕

謹賀新年

十二三日頃湯河原へ湯治に出かける筈、一二三週間はゐる、君は來ないか？　奧さんにもよろしく

芥川龍之介

一〇七七　〔一月十二日田端から。佐藤豐太郎宛〕

冠省朶雲奉誦仕り候御令息にはいつも御厄介に相成り居り候次手を以てお父樣にもお禮申上候扨小生

は小學時代より字は下手にていつも乙や丙ばかり貰ひ居り、今日も誰にも褒められたる事無之、小生自身も古今の下手を以て任じ居り候所思ひがけなくもお褒めにあづかり大いに嬉しく候へども汗顔千萬にも存じ居り候就いては御令息の御煽動により、大膽にも駄句を書きたる小帖一册お手もとにさし上げ候間御笑覽下され候はば幸甚と存候なほ末筆ながら寒氣きびしき折から御健勝のほど祈り上げ候　頓首

一月十二日　龍之介

佐藤様

一〇七八〔一月十三日田端から。東宮豐達宛〕

朶雲奉誦どうか御遠慮なくお譯し下さい名前はアクタガハリユウノスケであります　なほ又どうかこれをお譯し下さいと申上げるほど自信のある作品もありません右とりあへず御返事まで　頓首

一月十三日　芥川龍之介

東宮豐達様

一〇七九〔一月十四日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省先達は御馳走さま、書帖は小さいのを一つ君のお父さんに贈つたそれから堀口君に支那游記を送らんとするに「冥途」を送る次手あれば、君の所へ一しよに送る同君に獻上されたし僕胃を病み、腸を病み、更に神經性狹心症を病み、今夜か明日湯治に出かけるこれでもう雜用紛々の爲、三日も四日も延ばしたのだ、新年の句なぜ「いかのぼり落ち行くかたや波がしら」とせざりしや「戀の歐羅巴」は奔放自在なる餘り却つて人をして憂鬱ならしむ、どうも僕の狹心症は多少あの本に祟られたやうだ　頓首

芥川龍之介

佐藤春夫様

二伸　生田さんの會のこと僕の權利は全部君にまかせる適當に所理してくれ給へ

一〇八〇〔一月十五日田端から。齋藤茂吉宛〕

冠省先日はいろいろ御厄介に相成り難有く存じ奉り候友人蒲原君に持たせ候品つまらぬものながらおん目にかけ候なほ伊藤左千夫先生の御遺族の宿所、蒲原君にお敎へ下され候はゞ幸甚に御座候　頓首

一月十五日　　　　芥川龍之介

齋藤茂吉様

二伸　今日これより湯河原へ參り候　頓首

一〇八一〔一月十五日田端から。菅虎雄宛〕

冠省先生には不相變益〻御健勝の事と存候先達は又忠雄さんを煩はし箱書きのことを御願ひ致し、失禮の段不惡御ゆるし下され度候右夏目先生の短尺の箱はいづれ小生參上頂戴仕る可く候間それまで御手もとにおとどめ置き下され度候右我儘ばかり申し恐れ入り候へどもよろしく御取り計らひ下され度願上げ候小生目下胃腸を害し居りこれより湯河原へ避難する所に御座候　頓首

一月十五日　　　　龍之介

菅先生

二伸不相變惡筆無双なる事おわらひ下され度候

一〇八二〔一月十五日湯河原から。山本有三宛〕

冠省、その後胃腸は惡いし神經衰弱は强いし、痔は起るし、大いに閉口　唯今ここに半病人生活を送

つてゐる。

扨著作權法の事なるが

(一)有報酬たると無報酬たるとを問はず作家の許可だけは請ふ事にしたし。これは若し請はれれば、テキストを教へられるだけにても便宜なり。

(二)それから遺族は少し古くなると中々宿所わからず、その宿所錄を作る事も著作家協會の仕事としてよからん。

(三)それから「正當の範圍内にて拔萃蒐輯する事」と言ふのは如何にや。十七字の俳句、三十一文字の歌などは五六字づつとられるやうに聞えざる乎。拔萃は選擇とか何かした方よからん

(四)「正當の範圍内にて」も曖昧なり。僕の讀本なども知らず識らず頁數殖えたれば正當の範圍を越えたるやも知れず。正當の範圍を越えたりとて罰せられればそれ迄なり。(勿論罰せられては困るが)何册何頁以下と制限する方よろしからん乎。尤も活字の號や行數によりてはそれも確かには行かなかるべし。

宿所錄を拵らへる事等の費用には僕の讀本の印稅を當ててもよろし。

今日夕刊にて大橋さんの變死を知り、なぜ僕の關係する緣談はかう不幸ばかり起るかと思つて大いに神經衰弱を增進した。菊池は旅行中のよし保險會社の人に聞きし故とりあへず君にこの手紙を出す。

なほ上記四件は委員會へかける前に菊池に一應話して見てくれ給へ

一月十五日　　　芥川龍之介

山本有三様

一〇八三　〔一月十六日湯河原から。繪端書、下島勳宛〕

昨夜ここへ參りました地震で山が崩れたり宿(中西)が全く別な所に移つてゐたりして甚だ有爲轉變な

感じましたどうかそのうちにお遊びにお出で下さい　頓首

十六日　　　相州湯河原中西　龍　之　介

一〇八四　〔一月十六日湯河原から。繪端書、室生犀星宛〕

湯河原中西の二階に在り、ちよつと遊びに來ては如何、梅は既に開きたれど、寒さは大して東京と變らず、(尤も女中に聞けば、これは今日だけのよし)

梅檀の實の明るさよ冬のそら

十六日　　　龍　之　介

一〇八五　〔一月十六日湯河原から。大橋繁宛〕

拜啓御主人御長逝の趣承り御哀悼の情に堪へず候小生自身も神經衰弱の爲、當地に養生致し居り候へば一層黯然たるもの有之候　頓首

一月十六日夜　　　芥　川　龍　之　介

大　橋　樣

一〇八六　〔一月十八日湯河原から。繪端書、小穴隆一宛〕

毎日退屈に日を暮らしてゐます。大橋女史のお父さんが變死したのでそぞろ少々憂鬱になりました。どうも小生の關係する緣談は皆惡い事を招くやうな氣がする。君も精々氣をつけ給へ。どうもから內外多事ではやりきれない。春陽會の畫出來つつありや否や。

十八日　　　龍

こちらはさすがに暖く梅花も滿開に御座候但し胃の具合あひかはらずよからず、就いては散藥儀あます所二日半と相成り候へば、もう二週間分ほど頂戴仕り度候。尤も次手有之候へば、わざわざお送り下さらずとも宅より頂戴に出るものにお渡し下され候はば結構に御座候。

一〇八七〔一月二十日湯河原から。繪端書、下島勳宛〕

一月二十日　湯河原　龍之介

一〇八八〔一月二十日湯河原から。佐佐木茂索宛〕

冠省。御手紙東京より囘送し來りて拜見、尤もその前に大橋樣へはお悔み狀を差し上げ、（番地わからねど、三溪園近傍としたり）宅へは荊妻に大橋樣へお悔みに參るやうに申しつけ候。小生自身參上しなければならぬ所なれど、何分胃は惡し、腸は惡し、神經衰弱は甚しいし、大いにへこたれ居り候へば、歸京の節にても大橋樣へは參上仕るつもりに候。どうか右惡からず思つてくれ給へ。小生は二月近くの不眠症未だに癒らず、二晩ばかり眠らずにゐると、三晩目は疲れて眠るには眠るが、四晩目は又目がさえてしまふ。かかる間に大橋樣の訃に接し、すつかり神經的に參つてしまひ候。岡と云ひ、君と云ひ、僕の關係する緣談は悉不幸を齎すに似たり。實際ここに鬱々と日を送つてゐると、（それも下島先生處方の胃の藥と齋藤茂吉處方の神經衰弱の藥とをのみつつ）遁世の志を生じ候。奧さんも定めし弱られ居るべし。どうかよろしく申上げてくれ給へ。兎に角生きてゐるのは樂ぢやない。正宗白鳥は國へひつこむよし、健羨に堪へず。右とりあへずお悔みかたがた御返事まで　頓首

一月廿日　芥川龍之介

佐佐木茂索樣

二伸　高作「靑きを踏む」第一ならん乎。「ふるさとびと」も結構なれど少々書きかた不丁寧なり。

僕の夢を冒頭に使つたのは前には唯「子供の病氣」あるのみ。「度々使つた技巧」には抗議を言ふよ。この頃サラベルナアルのことを書いたメモアを一讀、これも遁世の念を生ぜしめただけだ。横濱まで參らるる次手にちよつとここまで足をおのばしになることは出來ずや。世の中の憂きことどもの話をしたい。

一〇八九　〔一月二十一日湯河原から。端書、山本有三宛〕

冠省　この間は秦へお金や雜誌をとどけて頂いて難有う。秦のお父さんからお禮狀を貰ひ大いに恐縮した。ここも毛の足袋を必要とするほど寒い。但し梅花は滿開。

一月二十一日　芥川龍之介

二伸それからこの前書き落したが著作權法の「修身書及讀本」も變だね。「教科書及副讀本」位ではどうかね？

一〇九〇　〔一月二十一日湯河原から。小穴隆一宛〕

冠省、君の手紙を見てまた少しまゐつた。お腹立ちの事など何にもない。唯、この頃鬱々として日を送つてゐるものだから、大橋さんの變死に神經を起しただけだ。それから本の名は「或る日」を用ひず「或日」を用ひて頂きたく候。內藏之助も內藏助にしたし。（これは改めんと思ひつついつも忘れしもの）それから〔六十五字削除〕何かに話した事だらう。不眠は相かはらず。胃は未だ痛む。小康を得たのは痔だけ。實際くさくさしてしまふ。春陽會のハンス入の節は御遠慮なく義ちやんを使つてくれ給へ。君の畫の展覽される頃にはもう少し樂な氣になつてゐたい。

一月二十一日　澄

一游亭様

一〇九一　〔一月二十一日湯河原から。芥川道章宛〕

一、御手紙二通拜見、比呂志箋に通りたる段祝着に存候文子、佐佐木へ參り候事も名案に御座候。小生は大橋さんへ悔み狀を出し置きたり。歸りにでもちよつと寄るか、出直して悔みに參るべし。文子御苦勞様に御座候。
二、女中力石にたのみやり候へば、そちらにても精々御さがし下され度候。
三、をばさんなる可く早くお出で下され度候。一人にてぽつねんとしてゐるのはやり切れず、今月中にお出で下されずは歸京する外は無之候。アダリンを使はず、夜中起きてゐる時などは實に閉口致し居候。
四、本の外に心を慰むるものなし。この手紙つき次第、蘇峰の近世日本國民史豐臣時代三册（合計九圓）至急お送り下され度候。先便お送りのはもう一册讀了いたし候。なほ又それをお送り下され候節、梁塵祕抄（これは書齋の床の間の側の芭蕉布の戸棚の中にあり）もお送り下され度候。本は義ちやんにもおたのみ下され度候。
五、小包みは二つ受けとり候一つは明石の原稿と近世日本國民史、一つは猪狩史山の女禍傳（大阪屋出版）に御座候。義ちやんより大雅堂の本を送りし由なれど、それはまだとどかず候。
六、胃の具合未だわるく、散藥缺乏につき、下島さんへもう二週間分願ひ候へども、御發送の手數をかくるは御氣の毒につき、本を送る中へ入れてお送り下され度候。
七、寒きうちは腦溢血患者多きよし、平生よりお酒すごさるる事禁物に御座候。おばあさんも炬燵にゐて風をひくべからず。
八、小生留守中は義ちやんも何かと不便多からん。よろしく御面倒を御覽下され度候。
九、也寸志の便祕なほりたりや。湯河原は下痢を直すのに特效あるせゐか、小生も便祕して困り居り

候。(伯母さんお出の節ビオフェルミン一罎御持參下され度候。お送りには及ばず)比呂志、試驗に通るやうに存じ候へども親の慾目にや。

十、土屋の番地知らねば、小生宅氣附にて手紙を出し候間、ちよつとおとどけ下され度候。土屋のうちの位置は左の通り。

〔ペン書きの地圖あり〕

十一、當地は梅も開き居り候へば、幾分か東京よりも暖からん乎。宿は目下滿員にて朝夕は湯にはひるのに困り候。

一月二十一日　　　　龍　之　介

父　上　様

一〇九二　〔一月二十二日湯河原から。端書、蒲原春夫宛〕

冠省。毎日無聊に消光、但し胃はあひかはらず惡い。不眠もなほらん。讀本の方はどうなりしか。氣になるゆゑ、ちよつと知らされたし。まだ皆すまずば、薫さんと協力し、お骨折りを得ば幸甚。神經衰弱は如何せしや。湯にはひるか、散歩するか、つとめて血行をよくし、僕のやうにヒドイ目にあふことなかれ。

相州湯河原中西内　　芥　川　龍　之　介

一〇九三　〔一月二十二日湯河原から。佐藤豐太郎宛〕

冠省、かかる紙にて失禮に候へども當地にはこの書簡箋の外無之候間これにて御免下され度候。御臥床中のよし、寒氣嚴しき折から何とぞ御大事に願上げ候。拙句惡詩多少なりとも御病間を慰め候はば幸甚と存候。小生も若き癖に寒さに中てられ、胃を損じ、腸を害し、おまけに神經性狹心症さへ生じ

今月半ばより當地に入湯罷在候。とりあへず御見舞まで　頓首

一月廿二日　　龍　之　介

佐　藤　様

一〇九四　〔一月二十六日湯河原から。繪端書、南條勝代宛〕

この間は病氣の爲不愉快な顔をしてゐてあなたまでも不愉快にしたらうと思つてゐますさうしてお氣の毒に思つてゐますわたしは來月中旬までこちらにゐようかと思つてゐます「思つてゐます」ばかりつづいて變ですが當用のみ。

二十六日　　中西にて　芥川龍之介

一〇九五　〔一月二十六日湯河原から。繪端書、土屋文明宛〕

朶雲拜誦來月十五日頃迄はゐるつもりだが、來月はじめには伯母が來るかも知れない。ぜひ來給へ。僕も體力恢復次第、仕事にとりかからうと思つてゐる

二十六日　　ゆがはら中西　龍　之　介

二伸　待つてゐるよ。

一〇九六　〔一月二十七日湯河原から。佐佐木茂索宛〕

冠省、やうかんお送り下され難有く存候。勿論奥さんの御厚意ならんと存じ候。但しあれを食ひすぎ候せゐか昨今腹中異狀を生じ、屁も何も出ず、何やら鳴動致し居候。この宿のお上さんと病を語り候へば何も彼も割り符を合はすやうにて得體の知れぬ胃腸を患ふもの小生一人のみにあらざるを知り、何やら天下を擧げて病人なる乎の感を生じ候。當地は梅など開き居り候へども寒氣中々きびしく（梅

も唯習慣上開きしにや）これにも亦難澁致し居り候。この分にては來月もここにゐることとならん乎
思へば、思へば、時云々のはがきを拜受したる頃はまだしも健康なりしの感に堪へず。ひそかに維兆
曼靑居士と號さん乎と思ひ居り候末筆ながら奥さんによろしく　頓首

廿七日　　澄

芸　先　生

二伸　この前の手紙はゆきちがひになりたりと覺ゆ。御一遊の志なきや。

一〇九七　〔一月二十七日湯河原から。繪端書、佐藤春夫宛〕

君のお父さんよりお禮狀を貰ふ。御病中のよし字も亦仰臥して書かれたらしかつた。ちよつと氣になり、このはがきを認む。どうか君からもよろしく。

二十七日　　相州湯河原中西　芥川龍之介

一〇九八　〔一月二十八日湯河原から。菅虎雄宛〕

冠省その後御清適の事と存じます先達お願ひいたした箱書を來る卅一日の日曜の午後（四時頃になるかと存じます）頂戴に上るつもりでございます恐縮ながら御在宅を願へれば幸甚に存じます右とりあへず當用のみ　頓首

一月廿八日夜　　龍之介

菅　先　生

一〇九九　〔二月五日湯河原から。齋藤茂吉宛〕

冠省、御手紙拜見仕り候。いろいろ御親切に預り、難有く存候。煙草は早速節すべく候。それから神

保さんは診察料、處方料ともとつて下さらず、困り居り候間、御次手の節御宿所お知らせ下され候はば幸甚に存候(コレハ本當ニ御次手ノ節ニテヨロシク候)なほ又神保さんのお名前も伺ひたく存候。土屋君と當地へお出でのよし承り居り候へども、その後如何に相成り居り候や。小生は十五日より二十日までの間に歸京仕らん乎と存じ居り候。書きたきものも病弱の爲書けず、苦しきことは病弱の爲一層苦しみ多し、御憫笑下さるべく候。頓首

二月五日　芥川龍之介

齋藤茂吉様

一一〇〇〔二月八日湯河原から。片山廣子宛〕

冠省、唯今宅より手紙參り、御見舞のお菓子を頂いたよし、難有く存じます。この前のはがきにはこちらの宿所を書かなかつたものと見えます。さもなければ、こちらへ頂戴いたし、この手紙をしたゝめる頃には賞玩してゐたらうと思ひますから。僕は神經衰弱の上に胃酸過多症とアトニイと兩方起つてゐるよし、又この分にては四十以上になると、とりかへしのつかぬ大病になるよし、實に厄介に存じてゐます。何を書く氣も何を讀む氣もせず、唯德富蘇峰の織田時代史や豐臣時代史を讀んで人工的に勇氣を振ひ起してゐる次第、何とぞこのリディキュラスな所をお笑ひ下さい。(但し僕自身は大眞面目なのです。)湯河原の風物も病人の目にはどうも頗る憂鬱です。唯この間山の奥の隱居梅園と申す所へ行き、修竹梅花の中の茅屋に澁茶を飮ませて貰つた時は、僕もかう言ふ所へ遁世したらと思ひました。が、梅園のお婆さん(なもと言ふ岐阜辯を使ひます。)と話して見ると、この梅園を讓り受けるとして、地價一萬二三千圓、家屋新築費一萬圓、溫泉を掘る費用一萬圓、今計少くとも三萬二三千圓の遁世費を要するのを發見しました。その上何もせずに衣食する爲に信託財産七八萬圓を計上すると、どうしても十萬圓位入用です。西行芭蕉の昔は知らず遁世も當節では容易ぢやありません。さう考へ

たら、隱居梅園も甚だ憂鬱になつてしまひました。いづれ一度お目にかかり、ゆつくり肉體的並びに精神的病狀を申し上げます。

道ばたの墓なつかしや冬の梅

二月八日　　　芥川龍之介

片山廣子樣　粧次

一一〇一　〔二月九日湯河原から。小穴隆一宛〕

冠省その後御變りなく御消光の事と存候。この間遠藤光子孃來られたれど、不幸にもまはり合せ惡く一度も拜顏の機を得ず大いに殘念に存候。それからけふは兎屋居士よりお菓子を澤山頂き、大いに恐縮に存候。どちらも御次手の節よろしく申上げてくだされたし。又小峯よりも手紙參り、裝幀出來のよし承り難有く存候。小峯へは既に當方より手紙を遣し居り候間お小遣ひ御入用の節は御遠慮なく御徵發下されたく候。伯母は十二三日頃に來るよしさすれば小生も二十日前には歸らるるや否やわからず、しかしなる可く二十日までには歸らんと存居り候。この頃も不相變不眠にて弱り居り候。但しアダリンを用ひぬだけ幾分快方に向ひしならん乎。數日前佐佐木茂索遊びに參り、一泊して歸り候。滯在中大いに小生の不養生を苦諫致しくれ、澄江堂主人一言も無之仕義に立ち至り候。實はかかる駄辯を弄しながら××さんの一件氣がかりなり。尤もこれは神經の弱り居る爲かも知れず、遠藤君の手紙によれば、每日元氣に御制作中のよし、そんな事を考へて多少の安心を強ひ居り候　匆々

二月九日　　　龍之介

隆一樣

一一〇二　〔二月九日湯河原から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

固形スウプありがたう。はたきを送つた後で落手。頂戴ばかりして汗顏の至りなり。久米をピカ一と言ふ、按ずるに合評會のくづれに花をひきしならん。(サイコアナリシスの手腕驚くべし。)大橋さんへは月末參上仕るべし。どうもまだ僕の神經は弱つてゐる。夜など時々思ひ出していかん。頓首

九日　　龍之介

奥さんによろしく。

一一〇三〔二月九日湯河原から。繪端書、蒲原春夫宛〕

御手紙拜見。いろいろ御苦勞さま。三人となると、三人だけのこすのは殘念な心もちもする。乙字は碧童さんにこちらから問ひ合せよう。美妙、篁村、わかる方法なきや。それから加能君から借りた本、訂正をすませたら、加能君へ返却してくれ給へ。大阪よりまだ返事なきや。右こちらも要件だけ。

九日　　龍

一一〇四〔二月九日湯河原から。谷口喜作宛〕

冠省、今日お菓子澤山頂き、難有く存候。小生は目下神經衰弱の外にも胃酸過多症とアトニイとを併發致し居り候へば少々づつ食後に頂戴仕る可く候。當地の風物、孟宗は黄に梅花は白く既に春意を帶び居り候へども病人の目には憂鬱に相見え、怏々と日を暮らし居り候右とりあへず御禮のみ　頓首

二月九日　　芥川龍之介

谷口喜作様

一一〇五〔二月九日湯河原から。繪端書、土屋文明宛〕

山峽の雪消えにけりいたづらにきのふもけふも君を待ちつつ

モウ一二首速成シヨウト思ウタガ面倒故ヤメニスル。コノ頃沈丁花ノ蕾大イナリ。來レバイイニ。僕ハマダ不眠ダ。

九日　　　中西うち　龍之介

一一〇六　〔二月十二日湯河原から。里見弴宛〕

冠省、高著緣談窶を頂き、難有く存じます。東京から廻送して二三日前に落手しました。早速拜見するつもりです。なほこの頃滿潮を拜見しましたが、作者の滿潮を好まれないのは部分的の出來不出來を誇張して考へられるからではないでせうか？「惡き讀者」僕はやはり中々感心しました。右とりあへず御禮まで　頓首

二月十二日　　　芥川龍之介

里見弴様

一一〇七　〔二月十四日湯河原から。繪端書、芥川比呂志宛〕

コレハダルマダキトイフタキデス。コノタキハオトウサンノヰルトコロノスグソバニアリマス。ヲバサンモ、オトウサンモ二十三チゴロカヘリマス。タカシトケンカヲシナイヤウニ、オトナシクオアソビナサイ。

二月十四日　　　龍

一一〇八　〔二月十五日湯河原から。端書、蒲原春夫宛〕

御手紙拜見いろいろ御手數をかけ多謝。水滸傳所々拜見。思つたよりも上出來なり。裝幀もそんなに惡くないぢやないか？　近世日本史もう皆讀んでしまつた。頭の具合惡く當分仕事は出來さうもない。

一一〇九〔二月十五日湯河原から。繪端書、下島勳宛〕

この頃伯母東京より參り、一しよに暮らし居り候。胃腸の具合も神經衰弱も同じやうにて閉口致し居り候。

二月十五日　　湯河原　龍　之　介

一一一〇〔二月（推定）十六日湯河原から。繪端書、小穴隆一宛〕

一昨日小峯、拙著二種持參致候裝幀瀟くして上等なり。第一朱字のうまいのに驚嘆致し候。お禮はあの本より印税に致し度、爾今二分だけお納め申さす可く候、それからお尋ねの件、ポルトレエにてよろしく候。小生病狀依然。

十六日　　龍

一一一一〔二月十六日湯河原から。繪端書、室生犀星宛〕

その後御淸適なるべしこの間こちらへ來る途中、ちよつと萩原君を見舞つた。熱を出してゐた、この頃伯母東京より參り、一しよに入湯中、胃に未だ鈍痛あり春光太だ晴やかならず。頓首

二月十六日　　龍　之　介

一一一二〔二月十六日湯河原から。眞野友二郎宛〕

冠省。度々御手紙難有く存じます。小生は先月以來當溫泉に靜養して居ります。今月末には歸京致しますから、畫帖はその節必ず何か書きなぐります。（前に送つて頂いた畫帖もそのままに相成り居り、

厚顔なる小生もさすがに恐縮に存じて居ります。小生の病はアトニイと酸過多と神經衰弱とのよし、日々藥を三つものまねばならず、不景氣な顏をして暮らして居ります。右とりあへず、(お手紙は東京から轉送して來る爲、大分遲れましたが、御返事までにこの手紙をしたためました。頓首

二月十六日　　芥川龍之介

眞野友二郎様

一一一三〔二月十九日湯河原から。繪端書、鹽田力藏宛〕

御手紙ありがたく拜見仕り候、仰せの旨菊池へ申し遣り候間返事有之次第、高教を仰ぐ事も御座候べくその節は何分よろしく願上げ候右とりあへず御禮まで

十九日　　相州湯河原　芥川龍之介

一一一四〔二月二十日田端から。佐藤春夫宛〕

冠省改造社の人に聞けば君のお父さまの御病氣の爲君も國へ行つたよし御容態如何かと思ひ、この手紙をしたゝめ候僕の病は君の奧さんの御料理の所爲ならば幸福だが酸過多とアトニイと神經性消化不良と併發しこの儘齢四十になると潰瘍か癌になる事うけ合ひと云ふのだから往生した目下詩も何も作る勇氣なし況や小說をや何だかお父樣の御病氣見舞の手紙に駄辯を弄して相すまぬがこの前の手紙に返事を書かなかつた故それを兼ねたものと勘辨してくれ給へ　草々

二月二十日　　龍之介

春夫兄　侍史

二伸　僕の叔父腦溢血にて半身不隨になり、その爲に昨日湯河原から歸つた

一一一五〔十五年（推定）二月二十一日田端から。與謝野寛宛〕

冠省御手紙ありがたく拜見仕り候但し小生は舊臘來體を損じ居り月々の仕事も出來ず、難澁致し居り候間まことに恐縮には候へども講演の儀は當分御免蒙り度願上候なほ又末筆ながらこの間は奥様にラディオにて拙作を褒めて頂き候よし難有く御禮申上候右とりあへず御返事まで　頓首

二月念一日　　　　龍　之　介

與　謝　野　樣

一一一六〔二月二十三日田端から。竹中郁宛〕

冠省　黄蜂と花粉　を頂きありがたく存じますいつぞやお約束した「樹」はもう少々お待ち下さい右とりあへず御禮までにこの手紙をしたゝめました　頓首

二月念三日　　　　芥川龍之介

竹　中　郁　樣

一一一七〔二月二十六日田端から。室生犀星宛〕

昨日は失禮仕り候石油ストオブこの手紙持參のものに御渡し下され度願上げ候なほ又女性六月號おかし下され候はば幸甚に御座候いつもいろいろ御厄介ばかり相かけ恐縮の外なし右あらあら當用のみ頓首

二月念六日　　　　澄

魚　先　生

一一一八　〔二月二十八日田端から。南條勝代宛〕

冠省、御手紙拜見仕り候。來月四日午後二時にお出で下され候はば幸甚に御座候。但しまだ健康恢復せず、元氣無之候間碌な事はしやべられぬものと御覺悟なされ度願上候。頓首

二月二十八日　　　芥川龍之介

南條勝代様

二伸「お安じ」はいけません。「お案じ」です。

一一一九　〔三月五日田端から。室賀文武宛〕

冠省。聖書けふ頂きました。難有く存じます。今山上の垂訓の所を讀みました。何度も今までに讀んだ所ですが、今までに氣づかなかつた意味を感じました。右とりあへず御禮まで。

三月五日　　　芥川龍之介

室賀文武様

一一二〇　〔三月十一日田端から。杉本わか宛〕

拜啓、わざわざ御見舞を頂き難有く存じます。蔓性の神經衰弱故徐ろに恢復を待つ外はありません。別封の品は御返しまでに差上げます。お氣に入らぬかも知れませんがどうか御落手下さい。頓首

三月十一日　　　芥川龍之介

杉本わか様

二伸　けふ午後永見君が來ることになつてゐます。逢つて又氣の毒な思をすることを考へるといやになります。

冠省、君に手紙書かずにゐてすまない。しかしその後あひかはらず神經衰弱はひどし、胃腸は悪いし、痔にも惱まされて鬱々と日を送つてゐる始末だ。君のゐた頃を何度もなつかしく思ふ。新聞まい度ありがたう。あれは齋藤さんからでも古今書院へ話して貰つてはどうか。この體では今どうにも出來ない。お父さんやお母さんによろしく。

四月五日夜　床上にて　龍

庫　輔　樣

一一二一【四月五日田端から。渡邊庫輔宛】

一一二二〔四月九日田端から。佐佐木茂索宛〕

冠省、いろいろお見舞の品を頂き、難有く存じ奉り候。いつも頂戴ばかりしてゐて申訣無之候。さてアロナアル・ロツシユ、君は一錠にて眠られると言ひし故一錠のみし所、更に眠られず、もう一錠のみしが、やはり眠られず、とうとうアダリン一グラムのみて眠りしが、アロナアルの效力は細く長きものと見え、翌日は一日懜々然として暮らしたり。右御禮かたがた御報告まで。頓首

四月九日夜　芥川龍之介

佐佐木茂索樣

二伸　奥樣にもよろしく願ひ奉る。この頃下島さんに賴まれ、悼亡の句一つ。

更けまさる火かげやこよひ雛の顏

一一二三〔四月二十二日田端から。端書、南條勝代宛〕

冠省　御手紙拜見仕り候今日よりちよつと鵠沼へ養生に參り候間來月廿日以後にお出下され度願上

候　頓首

四月廿二日

芥川龍之介

一一二四　〔四月二十三日鵠沼から。繪端書、葛卷義敏宛〕

「馬の脚」の出てゐる新潮二册蒲原の來る時に託されたし。間に合はねば小包みにて送られたし。以上

二十三日

龍之介

二伸伯母さんの健康に氣をつけられたし。又カラカミの本棚の一番上の段に山路愛山著孔子論並びに何とか氏著孔子とその徒ありそれもついでに送られたし。

一一二五　〔四月二十五日鵠沼から。渡邊庫輔宛。封筒に一人にて見るべしと斷り書あり〕

冠省。この間君のことで武川君が來た。君の手紙も見た。僕が永見よりも君を重んじてゐる事は君自身も知つてゐる筈だ。破門されたなどと莫迦なことを言ふものには僕の手紙を見せろ。僕はまだ體惡く弱つてゐる故、長い手紙は書けない。僕は時々君がゐれば好いにと思つてゐるぞ。右當用のみ。頓首

四月二十五日

芥川龍之介

渡邊庫輔様

二伸　僕は女房や子供と鵠沼の東屋へ來てゐる。好學心もなければ性欲もなし。鬱々たるばかりだ。

一一二六　〔四月二十六日鵠沼から。端書、葛卷義敏宛〕

冠省伊藤さんは時々來てくれるか？　猿山の卓の如きものは預つておいてよろし。きのふの朝ひどい胃酸を吐きさうになつた。又昨日蒲原が來て夕がたかへつた。お前の風は如何。文子曰多加志の病氣

は如何？

四月二十六日

芥川龍之介

一一二七　〔五月一日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

拜啓、君、或は君の奥さんに頂戴した栗は非常にうまかつた。但し食ひすぎて胃中の酸が殖え、翌朝非常に難澁した。健全なる君はあれを試みて見給へ。實にうまいよ。ここにゐると割合に好い。齋藤博士の診察によれば血壓百十故海岸も差支へなきよし。但しまだ疲れ易いのに弱る。目下散策、水藥、注射藥幷用。定刻散歩。屁も餘り出ない。

一一二八　〔五月九日鵠沼から。山本有三宛〕

冠省。御手紙ならびに高著ありがたう。あのお禮は口數が多いので弱つた。興文社から少し借金した。編サンものなどやるものぢやない。唯今當地に義弟のゐる爲、しばらく女房と滯在してゐる。催眠藥の量はふえるばかり。頓首

五月九日　　鵠沼にて　芥川龍之介

山本有三様

一一二九　〔五月二十一日鵠沼から。繪端書、平木二六宛〕

おん句拜見、皆々近頃のおん句よりも面白く存候小生も句あり

さみだれや青柴つめる軒の下

うららかに毛虫わたるや松の枝

二十一日

龍之介

又々栗を頂戴し何とも御禮の申上げやう無之候。佐々木君と二人にて仲よく食べ候間左樣御承知下され度候。今度は食ひすぎぬやうに氣をつけ居り候。頓首

房子女史十歲の像〔繪端書の草原に坐せる少女の姿を指す〕

一一三〇 〔五月二十二日鵠沼から。繪端書、佐佐木房宛〕

一一三一 〔五月二十四日鵠沼から。山本有三宛〕

拜啓、手紙をありがたう。そんなに心配して貰ふと、恐縮に堪へない。しかし吉祥寺から市ヶ谷まで五箇月も通ひつめる勇氣があればそれはもう病氣でも何でもない——と云ひたくなる位だ。中々そんな勇氣は出ない。しかし藥や溫灸はやつてゐる。それから何月號といふ約束はおやめにした。唯今芝居を一つ製造せんとしてゐる。右御禮かたがた御返事まで。

五月二十四日　　芥川龍之介

山本有三樣

一一三二 〔五月二十五日鵠沼から。渡邊庫輔宛〕

冠省御手紙拜見仕り候。上京するならば五月二十五日より六月中旬までに來給へ。その後は東京にゐないかも知れない。君の字變に角張つて來て、どうも愉快に眺められない。神經衰弱には毒だよ。今度からはもう少し柔かにしてくれ給へ。頓首

二十五日　　芥川龍之介

渡邊庫輔樣

一一三三　〔五月三十日田端から。室生犀星宛〕

冠省今平木二六の下宿に來てゐる日本詩人所載野口米次郎氏の會の事を書いた萩原朔太郎君の文章を見て大いに感動した敬愛する室生犀星よ、椅子をふりまはせ椅子をふりまはせ

破調

兎も片耳垂るる大暑かな
さみだれや青柴つめる軒の下

五月二十九日　　龍　之　介

室　生　犀　星　様

一一三四　〔六月一日田端から。佐佐木茂索宛〕

同憂同歎二三日中には參上すべし。鵠沼に一月ゐる間の客の數は東京に三月ゐる間の客の數に匹敵す。唯今又々痔を起し、泉さんより贈られたるお百草を尻へあてがつてゐる。この間の句は改作した。(チヤコ樣によろしく。)

破調

兎も片耳垂るる大暑かな

按ずるに「垂らす」或は「垂らしたる」とSの音はひりては大暑の感じかぶさり來たらず。「垂るる」と改めたる所以なり。

六月一日　　芥　川　龍　之　介

佐　々　木　茂　索　様

二伸「春の外套」に對する題など痔を起してゐては考へられん。唯僕のとつときの題に「南京の皿」

「昨日の風景」などあり。御用には立ち難からんも、次手を以て披露に及ぶこと然り。

一一三五 〔六月七日田端から。蒲原春夫宛〕

手紙をありがたう。君の病状を下島さんに話したら、ヂフリスぢやないかと言つてゐたぜ。僕はもうそろそろものを書いてゐる。あした又鵠沼へ行く。月末にはかへる故、ゆつくり出京し給へ。

六月七日夜　　芥川龍之介

蒲原春夫様

二伸　御芳志のカステラ今とゞいた。ありがたう　渡邊によろしく。

一一三六 〔六月十一日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

冠省。いろいろ御教誨にあづかり難有く存じます。眠り藥の方はこの頃又ものを書き候爲、用ひる癖あり弱り候。日曜日にでも土屋君と御一しよにお遊びにお出で下さるまじく候や。近頃日のさめかかる時いろいろの友だち皆顔ばかり大きく體は豆ほどにて鎧を着たるもの大抵は笑ひながら四方八方より兩眼の間へ駈け來るに少々悸え居り候。頓首

六月十一日　　龍之介

齋藤茂吉様

一一三七 〔六月十四日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

君が來ないものだから(卽君が來らずアロナアルロッシユも來らざる故)けふもひどい下痢を二囘起し、へこたれ切て仰臥してゐる。僕の甥今死にさうなれど動くこともならず。怨、モサとチヤコとにあり。化けて出るぞ。

一一三八　〔六月二十日鵠沼から。小穴隆一宛〕

拜啓度々御手紙ありがたう。僕はここへ來る匆匆下痢し、二三日立つて又立てつづけに下痢し、とうとうここのお醫者にかかつてしまつた。お醫者の姓は富士、名は山、山は「たかし」と讀むよし、唯今弟についてゐる看護婦について貰らひ、やつとパンや半熟の卵にありついた次第、下痢のとまり次第歸京したい。一人で茫漠の海景を見ながら横になつてゐるのは實に寂しい。以上

六月二十日　　　　　芥川龍之介

小穴隆一様

一一三九　〔六月二十日鵠沼から。神崎清宛〕

何よりも先に御厚志を難有う

君は好い日に來た。あの翌日以來腹を下し從つて痔を起し、一かたならぬ苦しみをした上、とうとう鵠沼のお醫者にかかつてしまつた。腹の止り次第一刻も早く歸りたい。僕はもう尾籠ながらかき玉のやうな便をするのに心から底から飽きはててしまつた。菅忠雄君曰痔の痛みなんてわかりませんね。僕曰、たとへばくろがねの砦の上に赤い旗の立つてるやうな痛みだ。わかる？　わからなければ度す可らずだ。

六月二十日　　　　　芥川龍之介

神崎清様

一一四〇　〔六月二十九日田端から。佐佐木茂索宛〕

前略君がかへつた翌日から又腹を下し、少からず難澁した。おまけに一人になつて(尤も甥が來てゐる

たが）今にも死にさうな氣がしたから、冷たい番茶を茶罐にしこみ、それを飲み／＼東京へかへつた。それから下島さんに見て貰つて少康を得たからきのふちよつと室生を訪問したら、忽ち又冷えたと見えてけふは下痢と軟便との中間位になつてしまつた。五月三日には傍聽にでも參上したいと思つたがどうだかわからん（五月三日と言へば御迷惑を相かけ候段不悪おゆるし下され度）腹の固まり次第鵠沼へ行き何か少しでも仕事をしたいと思つてゐる。下痢ほど身心とも力のぬけるものはない。字までひよろ／＼してゐるのはあしからず。

六月二十九日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

佐佐木詞兄（コレハ德田流）

二伸　奥さんによろしく。栗のお禮をよろしく。尤もあれは腹下しの種になつたが。

一一四一　〔六月三十日田端から。小島政二郎宛〕

冠省御手紙ありがたう。僕目下胃のみならず大腸加太兒を起し居り、お醫者に相談した所、痔の手術をするにはもつと營養がよくならねば駄目のよし。する時には岩佐病院へ御紹介を願ふべし。兎に角唯今はひよろひよろしてゐます。實は君の手紙を見てあの長さに感謝すると同時にあの長さをものともしない君の魄力に敬服してしまつた。何しろ僕は七月になると云ふのに足袋をはき足のうらへカラシを貼り、脚湯まで使つてゐるのだから。もうこれでおしまひ。どうか奥さんによろしく。美籠ちやんの顏も見ざること久し。大きくなつたらうなあ。

六月三十日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

小島政二郎樣

一一四二　〔七月十四日鵠沼から。南條勝代宛〕

冠省、この間はお見舞のオレンヂをありがたう。その後又腹をいため、唯今ここにごろごろしてゐます。十月末までには東京へかへれるつもり。憚りながら御心配なく。どうかもう御見舞など御無用になすつて下さい。頓首

七月十四日　　　芥川龍之介

南條勝代様

一一四三　〔七月十四日鵠沼から。室生犀星宛〕

冠省、手紙をありがたう。まだ君は東京にゐることゝ思ふ。僕は腹工合だけ少しよくなつた。その代りに便祕してゐる。こちらは不景氣のせゐかまだ寂しい。二十日過ぎに子供でも來たら、ちよつと海へはひり、砂に腹を暖めてゐようと思ふ。輕井澤へ行つたら、片山さんや何かによろしく。それから奥さんもお大事に。

七月十四日　　　芥川龍之介

室生犀星様

一一四四　〔七月二十四日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

君の鎌倉の宿所がわからぬ故多分廻送してくれる事と思ひ、中目黒へこの手紙を出す。ここも中々暑い。時々軟便になるので海へもはひれぬ。おまけに無暗にヴアイオリンを引く青年が近所にゐるのでやり切れない。何も書けず、不快極まりなし。一そ東京へかへらうかとも思つてゐる。藥を教へてくれてありがたう。あいつは早速一瓶買つたが、鐵分故、胃にこたへて閉口する。僕はこの頃やはり砒素のオプタルソンと云ふものの注射をはじめた。まだ粥しか食へない。頓首

七月二十四日　　　芥川龍之介

佐佐木茂索樣

一一四五 〔七月二十七日鵠沼から。端書、高野敬錄宛〕

拜復御手紙拜見しました。大暑の候こちらまで御足勞をかけるのは恐縮ですから組み方その他の事は碧童先生御自身へ御相談下さいませんか。碧童先生の宿所は下谷區上根岸町百十七です。中村不折氏邸のすぐ側です。右とりあへず當用のみ。匆々

芥川龍之介

一一四六 〔七月二十九日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

朶雲奉誦、山本改造かへりて後、黑パンを食ひすぎて又々一日三四囘下痢し、再び富士さんの厄介に相成り候所、僕の胃腸の如きは藥餌療法では駄目なりと言はれ、悲觀する事少からず。それでも兎に角藥を貰ひ、やつと下痢だけとまることを得たり。海水浴をする土地にゐながら海へもはひれぬほど悲慘なるはなし。おまけに僕の家の前はヴァイオリン、後はラディオと蓄音機、左はラッパ、右はハアモニカ、後の又後は謠と鼓、と云ふ始末故、都合がつけば西海岸へ引き越さうかと思つてゐる。兎に角體を恢復するのは一事業だ。鎌倉へもちよつと行つて見たいが、足が寢足になつてゐるので三四町歩くとへこたれてしまふ。尻へはもう尾テイ骨が出て來たよ。匆々

芥川龍之介

佐佐木茂索様

二伸この手紙を書き了つた時、西海岸の家ふさがりしことを知る。憮然たり。そこへ君の本が來る。箱張りは餘り感心せず。見返しはよろし。しかし概して裝幀は内容よりも落ちるかと思ふ。影などはうまいもんぢや(コレハ室生調)

一一四七 〔七月二十九日鵠沼から。室生犀星宛〕

ここにはこんな紙しかない。暑いことは東京と大差ないらしい。海へもはひらずに暑い思ひをしてゐるのは中々つらい。大喜びなのは子供ばかりだ。齒いしやや博士の健在を祈る。

花はちす雀をとめてたわみけり

白じろと｛ほそれる犬か｝松の風（コレハ未定稿）
｛犬もほそるか｝

二十九日

龍之介

犀生兄

一一四八 〔七月鵠沼から。芥川宛〕

皆様御變りない事と存じます。多加志こちらへ參つた晩より發熱いたし、こちらの醫者にかかりし所、胃腸悪きよしにて、ずつと床に就きをり候所、昨夜のませしヒマシ油の爲、今朝は床の中にウンコをし、大騷ぎに相成り、それよりおも湯をのませしも、皆吐いてしまひ、唯今又醫者に來て貰ひ候。熱も今は下り大した事は無之とは存候へども松ちやんも明日より村のお祭りにて家へかへることに相成り居り候へば、人手足らず、比呂志を四五日そちらへお預り願上げ候。右とりあへず當用のみ。

龍之介

芥川皆々様

一一四九 〔八月三日鵠沼から。室生犀生宛〕

冠省、こちらは實に暑い。その上又下痢をした。何も書けずいらいらしてゐる。この間の句はかう改

めた。奥さんのお體を御大事に。頓首

花はちす雀をとめてたわわなる

松風に白犬細うすぎにけり

八月三日

芥川龍之介

室生犀星君

二伸夏目先生の句のことに僕を引き合ひに出して貰ひ少からず恐縮した。

三伸君の手紙を拜見、こちらの地震は何ともなかつた。東京よりもずつと輕かつたらしい。

一一五〇〔八月九日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

何や彼や人ばかり來る爲、御返事が遲れた。國木田君の家へは早速出かけた。月半ばに轉居するよし、少し假住ひには上等すぎるが借りようかと思ひをり候。烟突みたいな赤塗りの洋館、前には岸田劉生がゐたよし、今の所はヴアイオリン、ラヂオ、蓄音器、笛、ラツパ、謠、鼓、の上にこの二日はお祭りにて馬鹿囃しあり、ほとほと閉口した。病體依然、きのふ小穴が來てトランプをしながら、尻へばかり手をやる爲、トランプが臭くなると言はれた。こんなことまで君に訴へたくはないが、〔二十六字削除〕神經衰弱癒るの期なし。しかし君が家を敎へてくれたのでちよつと世の中が明るくなつた。多謝。

八月九日

芥川龍之介

佐佐木茂索様

一一五一〔八月九日鵠沼から。端書、渡邊庫輔宛〕

○こちらは地震それほどではなし。

○僕の「るしへる」の書後に「蔓頭の葛藤截斷し去る」云々の語あり。蔓頭は巖頭の誤にあらずや。僕の家に和譯碧巖錄あり。その中にある筈、ちよつと調べて貰ひたし。○君の杖の頭を折つてしまつた。但しこれは女中の罪也。
○十日以內にもう少し靜かな所へ轉居する筈。

八月九日　　　　龍

一一五二〔八月十二日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

モサとチヤコと來給へ。お土產は入らぬ故、アロナアルロッシュを二びん買つて來てくれ給へ。兎角閑居してゐるのは寂然たるものだ。

一一五三〔八月十二日鵠沼から。下島勳宛〕

冠省　御無沙汰致してをりますがお變りない事と存じます。二三日前に堀辰雄參り、甥御樣御上京のよしを承りました。先達は奧樣にお鉢を貸して頂き難有く存じます。御馳走は出來ませんが御中食御休み所位の御役には立ちます。唯今をる所はヴァイオリン、ラヂオ、蓄音機、莫迦囃し、謠攻めにて閉口、近々もう少し閑靜な所へ引き移らうと思つてをります。しかし海を御らんになつたりなさるのには今ゐる家の方が好都合です。右當用のみ。頓首

八月十二日　　　　鵠沼イの四號　龍之介

下島先生侍史

一一五四〔八月二十三日鵠沼から。蒲原春夫宛〕

冠省この間は失禮、ゆうべ六百のうまい男が來て敎授を受けた。君の法律とは大分ちがふ。近々に來

ないか。一戰したいから。鵠沼ももう大分靜かになつた。渡邊によろしく。以上

二十三日　　　　芥　川

蒲　原　君

一一五五　〔八月二十四日鵠沼から。下島勳宛〕

冠省。大分お涼しくなりました。當地も避暑客は大分へりました。しかしまだ少しは避暑地らしい氣もちも殘つてゐます。二三日中にお出かけなさいませんか。ちよつと我々の二度目の新世帶に先生をお迎へして、御飯の一杯もさし上げたい念願があります。どうか何とか御都合をおつけ下さい。右御勸誘まで　頓首

八月二十四日　　　　鵠沼イの四號　芥　川　龍　之　介

下　島　先　生

二伸　もうお孃さんと同じ位の令孃は餘りをりませんから、その邊はどうか御心配なく。

一一五六　〔八月二十四日鵠沼から。端書、中根駒十郎宛〕

拜啓先達羅生門の印紙500枚、今日將軍の印紙1000枚落手、どちらも田端の方へ廻送しましたから、どうかあちらへとりにお出で下さい。なほ又右印稅はこちらへお送り下されば好都合です。頓首

八月廿四日　　　　鵠沼イの四號　芥　川　龍　之　介

一一五七　〔八月二十四日鵠沼から。端書、遠田信太郎宛〕

冠省、度々御親切にお手紙ありがたう。櫻桃は送つて頂かなくとも御好意だけで結構です。

卽景

花はちす雀をとめてたわわなる

八月廿四日　　　　　　　　　　　　　　　鵠沼　芥川龍之介

一一五八　〔九月二日田端から。室生犀星宛〕

冠省ちよつと東京にかへつたがまだ中々暑い今明日中に鵠沼へかへるつもりやつと小説らしいものを一つ書いた今日は植木屋がはひつて刈りこみをしてゐる體力稍恢復したれども腎氣乏し奥さんお大事に

秋の日や疊干したる町のうら

九月二日　　　　　　　　　　　　　　　　　龍

犀　君

二伸　唯今也寸志鵠沼にて寝冷發熱中、田端にては多加志腹をこはし臥床中丈夫なのは比呂志ばかり僕もこの間催眠薬をのみすぎ夜中に五十分も獨り語を云ひつづけたよし。

一一五九　〔九月二日田端から。中根駒十郎宛〕

冠省。まだ佐藤君の所へ行かないならば、裝幀をたのむことは見合せて頂きます。どうも餘り勝手がましいし、もう一つは小穴君も今は多少の金でも必要ではないかと思ひますから。どうか佐藤君には西洋封筒の手紙だけ渡して下さい。それから又お次手によろしく言つて下さい。

九月二日　　　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

中根駒十郎様

二伸　隨筆集の題は「梅・馬・鶯」とすることにしました。

一一六〇 〔九月十日鵠沼から。土屋文明宛〕

朶雲奉誦。あの大家の婆さんは僕の所へ來て三十分も辯じて行つたよし、君もなやまされたらうと思つて大いに同情した。近々にぜひ來ないか。君が來ると、近々隨筆集を出すにつき、その中に入れる歌の甄別をして貰ふ。僕はあひかはらず元氣なく不愉快に暮らしてゐる。頓首

九月十日　　芥川龍之介

土屋文明様

一一六一 〔九月十日鵠沼から。室生犀星宛〕

冠省、東京へちよつとかへつてゐた爲、返事が遲れて相すまない。桂井さんに御願ひしたのは七もと櫻にあらず、黑猫と云ふのだつた。こちらはまだ中々暑し。この頃は弟の一家も來てゐる。小穴君も來てゐる。避暑客はもう大がい引き上げた。この間の句は二句とも捨てた(松風に、花はちす)　頓首

九月十日　　芥川龍之介

室生照道様

一一六二 〔九月十六日鵠沼から、佐佐木茂索宛〕

尊翰度々ありがたう。その後例の如く時々風を引いたり腹を下したりしてゐる。點鬼簿に數枚つけ加へて改造に出したれど、その數枚に幾日もかかり、小生亦前途暗澹の感あり。目下小穴君例の件もあり、ヴアイオリンの家へ住んでゐる。これは感謝すれど、〔十三字削除〕鵠沼へ來た。そこで鎌倉か逗子かへ移らんと思へど、家内ここを離れたがらず、移つては小穴君も困るだらうと思ひ逡巡決せず。多事、多難、多憂、蛇のやうに冬眠したい。御閑暇の節御光來を待つ。さもないと小生も東家へ義理

が惡い。

この頃一句

据ゑ風呂に頸骨さする夜寒かな

九月十六日　　　　　　　　　　澄

芸　先　生　侍史

一一六三　〔九月二十二日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

冠省、二三日前堀の辰ちやんが來て一晩とまつて行つた。その時君の御光來あるよし承つたが、僕は二十六日か七日かにちよつと上京するつもり。行きちがひになるといけない故、この手紙を差し上げることにした。けふも亦屁をしたら、便が出てしまつて、氣を腐らせてゐる。屁の話のあとにて失禮だが讀脣難は「亡びる」よりも感服。「女性」中の傑作かも知れない。頓首

九月二十二日　　　　　　　　　　芥川龍之介

佐佐木茂索様

一一六四　〔九月二十二日鵠沼から。端書、東宮豐達宛〕

冠省御申越しの旨承知しました但「きりしとほろ」上人傳などはエスペラントになつてもなさり榮えがあるまいと存じますが　頓首

九月二十二日　　　　　　鵠沼にて　芥川龍之介

一一六五　〔九月二十二日鵠沼から。端書、土屋文明宛〕

拜復、當日お待ち仕る故遊びに來てくれ給へ。この頃大正十年頃の「アララギ」を見たら、「傾ける麓の

原」の歌の原作が出てゐた。大分手を入れたね。匆々。

九月二十二日夜

芥川龍之介

一一六六　〔九月二十三日鵠沼から。端書、麻生恒太郎宛〕

冠省、高著頂戴いたしたよし、まだ東京から送つて來ませんが、落手し次第拝見したいと存じます、右とりあへず御禮まで　頓首

鵠沼イの四號　芥川龍之介

一一六七　〔十月三日鵠沼から。端書、東宮豐達宛〕

冠省御申し越しの件、開化の殺人にてよろしく候なほ寫眞は現代小說全集のをお用ひ下され度候。それから集末の年譜中、處女作「芋粥」は「鼻」の誤りにつき左樣御承知下され度候　頓首

十月三日

芥川龍之介

一一六八　〔十月六日田端から。大木雄三宛〕

冠省　藤澤衛彦氏の使に立ちしは貧豪なりしよし蒲原君より聞きて大に恐縮致し候失禮の段まつぴら御免下さる可く候　頓首

芥川龍之介

大木雄三様

一一六九　〔十月十七日田端から。廣津和郎宛〕

冠省。けふ或男が報知新聞を持つて來て君の月評を見せてくれた。近來意氣が振はないだけに感謝し

た。僕自身もあの作品はそんなに惡くはないと思つてゐる。明日又鵠沼へかへる筈。この手紙は簡單だが(又君に手紙を書くのは始めてかと思ふが)書かずにゐられぬ氣で書いたものだ。頓首

十月十七日　芥川龍之介

廣津和郎樣

一一七〇〔十月二十二日鵠沼から。中根駒十郎宛〕

拜啓　校正遲れて申訣がありません　再校は見ても見なくつてもよろしいもう小說を書き上げたから見るなら今度は早く見ます都合でよろしく取計つて下さい　日記の件勿論承知それもよろしく願ひます

十月廿二日　芥川龍之介

中根駒十郎樣

一一七一〔十月二十九日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

冠省、きのふはじめて中央公論の散步を拜見、何かと君の心づかひを感じ、ありがたく思つてゐる。僕の頭はどうも變だ。朝起きて十分か十五分は當り前でゐるが、それからちよつとした事(たとへば女中が氣がきかなかつたりする事)を見ると忽ちのめりこむやうに憂鬱になつてしまふ。新年號をいくつ書くことなどを考へると、どうにもかうにもやり切れない氣がする。ちよつと上京した次手に精神鑑定をして貰はうかと思つてゐるが、いつも億劫になつて見合せてゐる。節煙節茶の祟りもあるのだらう。この三四日碧童老人が泊りがけに來てゐる。小穴君もあひかはらず。僕は小穴君のフイアンセ(になるかどうかゴタゴタしてゐるが)に讀ませるつもりで「O君の新秋」を書いた。しかし原稿料も必要だつたから、小穴君の俳句を貰つて六枚合計三十圓にした。當分はこちらにゐるつもり。お次手

の節はお立ち寄りを乞ふ。×××がまだ僕に祟つてゐるのには閉口した。以上

十月二十九日　　　　　　　　　　芥川龍之介

佐佐木茂索様

一一七二〔十一月一日鵠沼から。小穴隆一と寄書、小澤忠兵衛宛。十一月一日鵠沼隆龍と署名あり〕

先達は失禮致しましたその節停臺の下駄を間違へてかへりました早速小包みにてお送り致しますけどうかおゆるし下さい

戯れに

ふりわけて片荷は酒の小春かな

〔小穴隆一の繪あり〕

龍之介

忠ゑるし様〔小穴隆一の筆〕

一一七三〔十一月十日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

原稿用紙で失禮。御手紙拜見。僕も新年號で手こずつてゐる。實に海邊の憂ウツだ。××は×の叔父だけある。×君は餘り幸福ぢやないよ。この頃の寒氣に痔が再發。催眠藥の量は增すばかり。ちと東家へでもやつて來ないか？　僕の家でもお宿位はする。兎に角君の顏が見たい。この頃君のことを考へてゐると、必ず君から手紙が來る。この前の手紙などは行き違ひだつた。それも少からず氣味が惡い。

十一月十日　　　　　　　　　　龍之介

佐　茂　様

一一七四 〔十一月二十一日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

敬啓 原稿用紙にて御免下され度候。唯今新年號の仕事中、相かはらず頭が變にて弱り居り候間、アヘンエキスをお送り下さるまじく候や。御多用中お手數を相かけ申訣無之候へども、右當用のみ願上げ候。なほ又失禮ながらアヘンエキスのお代金はその節お教へ下され候はば、幸甚に御座候。頓首。

十一月二十一日　　芥川龍之介

齋藤茂吉様

一一七五 〔十一月二十八日鵠沼から。佐佐木茂索宛〕

羊羹をありがたう(羊羹と書くと何だか羊羹に毛の生えてゐる氣がしてならぬ)お手紙もありがたう。君が餘り氣を使つてくれると、それが反射して苦しくなる事もある。(手紙ばかりならば助かるだけだが)何しろふと出合つた婆さんの顔が死んだお袋の顔に見えたりするので困る。今はどんな苦痛でも神經的苦痛ほど苦しいものは一つもあるまいと云ふ氣もちだ。數日前に伯母が來てヒステリイを起した時に君に敎へられたのはここだと思つて負けずにヒステリイを起したが、やはり結局は鬱屈してしまつた。我等人間は一つの事位では參るものではない。しかし過去無數の事が一時に心の上へのしかかる時は(それが神經衰弱だと云へばそれまでだが)實にやり切れない氣のするものだよ。その中で兎に角小說を書いてゐる。我ながら妙なものだと思ふ。昨日宇野浩二がやつて來た。何だか要領を得ない事を云つて歸つて行つた。以上

十一月二十八日　　芥川龍之介

佐佐木茂索様

二伸小穴曰「よろしく」と

一一七六　〔十一月二十八日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

御手紙ならびにオピアムありがたく頂戴仕り候。胃腸は略〻舊に復し候へども神經は中々さうは參らず先夜も往來にて死にし母に出合ひ、（實は他人に候ひしもびつくりしてつれの腕を捉へなど致し候。「無用のもの入るべからず」などと申す標札を見ると未だに行手を塞がれしやうな氣のすること少からず、世にかかる苦しみ有之べきやなど思ひをり候。小說はやつと一つ書き上げ唯今もう一つにとりかかり居り、それを終らばもう一つと存じ候へども如何なる事やらこの不安も亦少からず候。なほ又お金の儀お知らせ下され候やう無躾ながら願上げ候。數日前小澤碧童、遠藤古原艸など參り候その節碧童老人の句にかう云ふ作有之候。頓首

行秋やくらやみになる庭の內

十一月二十八日　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

一一七七　〔十二月二日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

拜啓父君の手紙と入ちがひになつた。どうもへんだよ。小穴君曰、「それは呼吸困難などにさせるからさ。」鴉片エキス、ホミカ、下劑、ヴエロナアル、――藥を食つて生きてゐるやうだ。頓首

十二月二日　　芥川龍之介

一一七八　〔十二月三日鵠沼から。端書、柳田國男宛〕

君ガ文ヲ鐵箒ニ見テ思ヘラクアモマタ「ケチナ惡人」ナルラシ

シカハアレ「山ノ人生」ハモトメ來ツイマモヨミ居リ電燈ノモトニ

足ビキノ山ヲ愛(カナ)シト世ノ中ヲ憂シト住ミケン山男アハレ
歌トハオ思ヒ下サルマジク候

十二月二日夜半　　龍之介

一一七九 〔十二月三日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

又々手紙が入れちがひになつた。これはテレパシイだよ。僕は暗タンたる小説を書いてゐる。中々出來ない。十二三枚書いてへたばつてしまつた。冬眠、冬眠、その外のことは殆ど考へない。花札をいぢるのにもあきた。

十二月三日　　芥川龍之介

一一八〇 〔十二月三日鵠沼から。端書、眞野友二郎宛〕

冠省なるとづけありがたう存じます。唯今新年號と云ふものを控へ居り、多忙の爲これで失禮します。右御禮まで

十二月三日　　鵠沼海岸　芥川龍之介

一一八一 〔十二月四日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

冠省　原稿用紙にて御免下さい。毎度御配慮を賜り、ありがたく存じます。オピアム毎日服用致し居り、更に便祕すれば下劑をも用ひ居り、なほ又その爲に痔が起れば座薬を用ひ居ります。中々樂ではありません。しかし毎日何か書いて居ります。小穴君曰この頃神經衰弱が傳染して仕事が出來ない。僕曰僕は仕事をしてゐる。小穴君曰、そんな死にもの狂ひミタイなものと一しよになるものか。但し僕のは碌なものは出來さうもありません。少くとも陰鬱なものしか書けぬことは事實であります。お

ん歌毎度ありがたく存じます。僕の仕事は殘らずとも、その歌だけ殘ればとも思ふことあり。かかる事はお世辭にも云へぬ僕なりしを思へば、自ら心弱れるを憐まざる能はず。どうかこの參りさ加減を御笑ひ下さい。

文書カンココロモ細リ炭トリノ炭ノ木目ヲ見テヲル我ハ
小夜フカク厠ノウチニ樟腦ノ油タラシテカガミヲル我ハ
夜ゴモリニ白湯ヲヌルシト思ヒツツ眠リ藥ヲノマントス我ハ
タマユラニ消ユル煙草ノ煙ニモ vita brevis ヲ思ヒヲル我ハ
枕ベノウス暗ガリニ歪ミタル瀬戸ヒキ鍋ヲ恐ルル我ハ

これは近狀御報告まで。勿論この紙に臨んでこしらへたものです。歌と思つて讀んではいけません。なほ又岡さんに庭苔を頂き、あらまし拜讀。あの歌集は東京人の所産と云ふ氣がします。どうかお次手の節によろしく。土屋君にもよろしく。頓首

十二月四日　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

二伸なほ又重々失禮は承知しながら、お藥のお金だけはとつて頂けますまいか。氣が痛んで弱りますゆゑ。

三伸點鬼簿評には風馬牛です。他人評よりも當人評が一番大敵です。或は當人評が怪しいかも知れぬと云ふ第二の當人評が一番大敵です。

一一八二　〔十二月五日鵠沼から。端書、下島勳宛〕

御手紙ありがたう存じます。こちらは新年號と云ふものにて弱つて居ります。小穴君からもよろしく。

かひもなき眠り藥や夜半の冬

五日　　　　　　　　　　　　　　鵠沼　龍之介

二伸　毎度お薬をありがたう存じます

一一八三　〔十二月五日鵠沼から。室生犀星宛〕

用箋を咎むる勿れ。梅馬鶯未だ出來ず。出來次第送らせる。山茶花の句前の句に感心。僕今新年號に煩はさる。「近代風景」君よりも賴むと云ふ事故、萩原朔太郎論を五六枚書いた。日々怏々

文書カン心モ細リ炭トリノ炭ノ木目ヲ見テ居ル我ハ
小夜フケテ厠ノウチニ樟腦ノ油タラシテカガミ居ル我ハ
門（カド）ノベノウス暗ガリニ人ノヰテアクビセルニモ恐ルル我ハ

僕ハ陰鬱極マル力作ヲ書イテヰル。出來上ルカドウカワカラン。君ノ美小童ヲ讀ンダ、實ニウラウラシテヰル。ソレカラ中野君ノ詩モ大抵ヨンダ、アレモ活キ活キシテヰル。中野君ヲシテ徐ロニ小說ヲ書カシメヨ。今日ノプロレタリア作家ヲ拔ク事數等ナラン。

十二月五日　　　　　　　　芥川龍之介

室生犀星様

二伸この間のよせ書は「行秋やくらやみになる庭の內」碧童、魚を描いたのは隆一、梅花を描いたのは龍之介

一一八四　〔十二月九日鵠沼から。下島勳宛〕

原稿用紙で失禮します。

お手紙拜見。こちらは唯新年號に追はれてゐるだけ。家へは新年は勿論、新年號の一部を書く爲にもかへるかも知れません。こちらのことは御心配なく。それよりもどうか老人たちのヒステリイをお鎭

め下さい。今度は力作を一つ書くつもりです。右當用のみ。

十二月九日　　　　鵠沼　龍　之　介

下　島　先　生

二伸この手紙は小穴君にたのみ、東京から投函して貰ひます。小穴君は妹さんが危篤の爲にかへるのです。

一一八五　〔十二月十二日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

小説かけたりや、僕は今二つ片づけ三つめを書いてゐる。捗どらず。痔猛烈に再發、昨夜呻吟して眠られず。小穴の妹危篤。多事、々々、々々。

一一八六　〔十二月十三日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

冠省、まことに恐れ入り候へども、鴉片丸乏しくなり心細く候間、もう二週間分ほど山端四三五小生宛お送り下さるまじく候や。右願上げ候。中央公論のは大體片づき、あと少々殘り居り候。一昨日は浣腸して便をとりたる爲、痔痛みてたまらず、眠り藥を三包のみたれど、眠る事も出事かね、うんうん云ひて天明に及び候　以上。

十二月十三日　　　　芥　川　龍　之　介

齋　藤　茂　吉　樣

一一八七　〔十二月十三日鵠沼から。端書、佐佐木茂索宛〕

あの手紙を書き了るや君の手紙來る、いつも斯くの如し

ヨロシ、五〇四光六〇〇一シマ五〇大三光一〇〇犬鹿蝶三〇〇二杯三〇〇一杯一〇〇二ゾロ二〇〇七

短六〇〇松桐坊子一〇〇草（萩藤菖蒲の短）一〇〇也、但しこれは僕の教はつたもの、他にも數へ方あるべし。

一一八八 〔十二月十六日田端から。高野敬錄宛〕

拜啓昨夜は二時すぎまでやつてゐたれど、薄バカの如くなりて書けず、少々われながら情なく相成り候次第、何とも申訣無之候へども二月號におまはし下さるまじくや。これにてはとても駄目なり。二月號ならばこれよりやすまずに仕事をつづく可く候。齋藤さんにも相すまざる事になり、不快甚しく候。頓首

十六日　　芥川龍之介

高野敬錄様

一一八九 〔十二月十九日田端から。端書、佐佐木茂索宛〕

君はもう逗子へ移つたか、僕は原稿の爲こちらへ歸り、いろいろ書いた。が中央公論はとうとう出來上らなかつた。二十日は明日也。赤倉行は如何なりしか。僕は到底だめならん。

十二月十九日　　芥川龍之介

一一九〇 〔十二月十九日田端から。端書、齋藤茂吉宛〕

お藥お送り下され、ありがたく存候。中央公論は前後だけ出來て中間出來ず、とうとう二月に出すことに相成り、尊臺にも申訣無之心地あり、怏々として暮らし居候

十二月十九日　　芥川龍之介

一一九一〔昭和元年十二月二十五日鵠沼から。端書、瀧井孝作宛〕

御手紙拜見。僕は多事、多病、多憂で弱つてゐる。書くに足るものは中々書けず。書けるものは書くに足らず。くたばつてしまへと思ふ事がある。新年號の君の力作をたのしみにしてゐる。頓首

十二月二十五日　　鵠沼イの四號　芥川龍之介

一一九二〔大正十五年鵠沼から。葛卷義敏宛〕

バスケットの中の原稿、
風呂敷に包んだ原稿、
鼠色の舊小說、金元明の部（コレハ義チヤンニ見テ貰ヒタシ）

一一九三〔大正十五年田端、家にて。葛卷義敏宛〕

封筒を一束買はせにやつてくれ。[註]

註　五十束でもいいよ　　龍殿さま

義べい殿

昭和二年

一一九四　〔一月八日田端から。端書、野間義雄宛〕

冠省　拙作をおよみ下されありがたく存じます。なほ又支那語の發音を御注意下され愈ありがたく存じます。本にでも入れる時は改めさせたいと存じます。右とりあへず御禮迄

一月八日　　二伸　なほ又親戚にとりこみ有之はがきにて御免蒙り候

一一九五　〔一月九日田端から。端書、宇野浩二宛〕

冠省、先夜はいろいろありがたう。その後又厄介な事が起り、毎日忙殺されてゐる。はがきで失禮頓首

一月九日　　芥川龍之介

一一九六　〔一月十日田端から。端書、藤澤清造宛〕

冠省　御見舞ありがたう。唯今東奔西走中。何しろ家は燒けて主人はゐないと來てゐるから弱る。右御禮まで。

一月十日　　芥川龍之介

一一九七　〔一月十二日田端から。端書、佐藤春夫宛〕

冠省君の所へ裝幀の禮に行かう〳〵と思つてゐるが、親戚に不幸出來、どうにもならぬ。唯今東奔西走中だ。右あしからず。錄近作一首

ワガ門ノ薄クラガリニ人ノヰテアクビセルニモ恐ルル我ハ

一一九八　〔一月十二日田端から。端書、南部修太郎宛〕

はがきにて失禮。御見舞ありがたう。又荷が一つ殖えた訣だ。神經衰弱癒るの時なし。毎日いろいろな俗事に忙殺されてゐる。頓首

一月十二日　　芥川龍之介

一一九九　〔一月十五日田端から。伊藤貴麿宛〕

冠省御手紙ありがたく存じます。大騷ぎがはじまつたので、唯今東奔西走中です。神經衰弱なほるの時なし。とりあへず御禮まで。頓首

一月十五日　　芥川龍之介

伊藤貴麿様

一二〇〇　〔一月十五日田端から。横尾捷三宛〕

冠省、創作月刊の件は菊池へでも直接おかけあひ下さい。原稿は同封御返送します。この頃親戚に不幸有之、多用の爲これにて御免下さい。頓首

一月十五日　　芥川龍之介

横尾捷三様

一二〇一〔一月十五日田端から。福島金次宛〕

拜復、度々御手紙ありがたう。拙作を讀んでゐて頂いて恐縮です。「鴉片」や何かは「梅・馬・鶯」を本にまとめた後に書いたのです。茂吉さんの事はあの文章にては不十分にてすまぬ故、删ることにしました。舊臘來多病の上多忙の爲、手紙も書けず、今夜あなたへもやつと義務をはたす事が出來ました。唯今犬養、瀧井兩君と夕飯を食つて歸つて來た所です　頓首

一月十五日　　芥川龍之介

福島金次様

一二〇二〔一月十五日田端から。海老原義三郎宛〕

朶雲奉誦、夏目先生の書は小生の鑑定にては目がとどかず、何とぞ小宮豐隆氏か野上豐一郎氏にお願ひ下され度、右とりあへず當用のみ。

一月十五日　　芥川龍之介

海老原義三郎様

二伸御封入の爲替及切手は同封御返送申上候間左様御承知下され度候。

一二〇三〔一月十六日田端から。齋藤茂吉宛〕

御手紙ありがたく存じます。それから「文藝春秋」のお歌も。尊堂へは是非上らねばならぬ所、又親戚中に不幸起り、東奔西走致しをる次第、惡しからず御無沙汰をおゆるし下さい。唯今新年號の小說の續きを書きをり候へども心落着かず、難澁この事に存じてゐます。來世には小生も砂に生まれたし。然らずば、

來ム世ニハ水ニアレ來ソ軒ノヘノ垂氷トナルモココロ足ラフラン

一月十六日夜　　　　龍之介

齋藤茂吉様

一二〇四〔一月(推定)田端から。高野敬録宛〕

頭くたびれをり、如何にしてもこれより出來ず。なほ又前の最後の半ピラ中、「お鈴は夫が銀行へ行き」云々の一節はとりすて、今度のをお用ひ下され度候

芥川龍之介

高野敬録様

一二〇五〔一月(推定)十九日田端から。高野敬録宛〕

これでおしまひです。「五」は出來損ひかもしれません。しかしもう時間がありませんから、あきらめることにしました。又實感の乏しい爲、手を入れてもだめかと思ひます。

十九日午前五時　　　　龍之

敬録様

一二〇六〔一月二十一日田端から。野村治輔宛〕

原稿用紙で御免下さい。飜譯の件は勿論よろしい。序文も同封してお送りします。どうかよろしく。「じゆりあの吉助」は御らんになるほどのものではありません。僕もモスクワ大學の日本文學科の先生か何かになりたい。原稿に追はれて暮らしてゐるよりもその方が遙かによささうです。右當用のみ。頓首

一月二十一日

野村治輔様　　芥川龍之介

一二〇七〔一月二十一日田端から。岩野英枝宛〕

原稿用紙にて御免下さい。雲林、藍瑛どちらも持ち合せません。のみならず書帖を見た位では中々御鑑定の出來るものではありません。小生は唯今親戚に不幸有之、その上その方の衣食の計立たざる爲、東奔西走中。どうかこれにて御勘辨下さい。いつか越後へでも遊んだ折はあなたの御紹介を得、御藏幅を拜見したいと存じてゐます。以上。

一月廿一日夜　　芥川龍之介

岩野英枝様

一二〇八〔一月二十八日田端から。齋藤茂吉宛〕

敬啓今夜は失禮仕り候うつかり「月の光は八谷を照らす」を書いて頂く事を忘れ殘念なり二三日中に使のものをさし上げ短尺をおとどけ申上げ候間、おひまの節お書き下さらば幸甚に存候ソレカラ Veronal と Neuronal ともおとり置き下さるまじく候やこちらのお醫者に賴む事は阿片丸を頂きをり候ことも申居らず候爲ちと具合惡く候へばよろしくお取り計らひ下さらば幸甚に存候　頓首

昭和改元一月廿八日　　龍之介

齋藤様

二伸　なほ又お藥は使のものにお渡し下さらば幸甚に存候唯今この手紙に似合ふ封筒なしこれも御免蒙り度候

卽興

尿する茶壺も寒し枕上（ガミ）

一二〇九　〔一月二十八日田端から。西川英次郎宛〕

冠省久しぶりに君の手紙を貰ひ愉快だつた短尺は小包みにするのが厄介故詩箋で御免蒙る元來君のやうに字のうまい兄貴を持ちながら俺の書いたものなど欲しがる必要はないのだだから發句三分の一人前字三分の一人前、紙三分の一人前と思つて貰つてくれ給へこの頃多事多難多憂弱つてゐる

昭和改元一月廿八日　　　　龍　之　介

英　次　郎　様

一二一〇　〔一月三十日田端から。佐佐木茂索宛。封筒に武州田端芥川龍之介とあり〕

朶雲奉誦、唯今姉の家の後始末の爲、多用で弱つてゐる。しかも何か書かねばならず。頭の中はコントンとしてゐる。火災保險、生命保險、高利の金などの問題がからまるのだからやり切れない。神經衰弱癒るの時なし。六七日頃までは東京を離れられまい。拜眉の上萬々。姉の夫の死んだ話は殆どストリントベルグ的だ。匇々。

一月三十日　　　　芥　川　龍　之　介

佐佐木茂索様

一二一一　〔一月三十日田端から。宇野浩二宛〕

拜復。まつたく寒くてやり切れない。お褒めに預つて難有い。あの話は「春の夜」と一しよに或看護婦に聞いた話だ。まだ姉の家の後始末片づかず。いろいろ多忙の爲に弱つてゐる。その中で何か書いてゐる始末だ。高野さんがやめたのは氣の毒だね。餘は拜眉の上。多忙兼多患、如何なる因果かと思つ

てゐる。

一月三十日　　　　芥川龍之介

宇野浩二様

一二一二　〔二月二日田端から。齋藤茂吉宛〕

冠省。御藥並びに御短尺ありがたく存じ奉り候。唯今夜も仕事を致しをり候爲、朝ねを致し、山口樣にはお目にかかる機會を失ひ、殘念にも恐縮にも存じ居り候。お次手の節よろしく御鳳聲願上げ候。先夜來、一月や二月のおん歌をしみじみ拜見、變化の多きに敬服致し候。成程これでは唯今の歌つくりたちに idea の數が乏しと仰せらるる筈と存候。(勿論これは小生をも憂ウツならしむるに足るものに候)小生の短尺はどうも氣まり惡き故御免蒙り度候へども、一二枚お送り申上ぐ可く候。(句1/3人前、字1/3人前、短尺1/3人前の割にて御らん下され度候。)唯今「海の秋」と云ふ小品を製造中、同時に又「河童」と云ふグァリヴァの旅行記式のものをも製造中、その間に年三割と云ふ借金(姉の家の)のことも考へなければならず、困憊この事に存じ居り候。餘はいづれ拜眉の上。右とりあへず御禮まで。頓首

二月二日夜　　芥川龍之介

齋藤茂吉樣

二伸唯今でも時々錯覺(?)あり。今夜はヌマアルを用ふべく候。

一二一三　〔二月三日田端から。河西信三宛〕

原稿用紙にて御免蒙り候。あの詩は唐の蒲州永樂縣の人、呂巖、字は洞賓と申す仙人の作に有之候。年少の生徒には字義などを御說明に及ばざる乎。なほ又拙作「杜子春」は唐の小說杜子春傳の主人公を

用ひをり候へども、話は2|3以上創作に有之候。なほなほ又あの中の鐵冠子と申すのは三國時代の左慈と申す仙人の道號に有之候。三國時代には候へども、何しろ長生不死の仙人故、唐代に出沒致すも差支へなかるべく候。呂洞賓や左慈の事はいろいろの本に有之候へども、現代の本にては東海林辰三郎氏著の支那仙人列傳を御らんになればよろしく候。右御返事まで　頓首

二月三日　　芥川龍之介

一二一四　〔二月四日田端から。山口茂吉宛〕

原稿用紙にて御恵蒙り候。先達はわざわざお使ひにお出で候にも關らず、朝寢坊にてお目にかかる機を失し、申訣無之候。右お禮かたがたおわびまで　頓首

二月四日　　芥川龍之介

山口茂吉様

一二一五　〔二月五日田端から。小松芳喬宛〕

冠省お手紙ならびに六神丸ありがたく存じます。いろいろお心にかけられ、恐縮に存じます。多用中親戚に不幸有之、御禮が遲れ申訣ありません。北京はよかつたでせう。僕は東京以外の都會では一番北京へ住みたいと思つてゐるものです。頓首

二月五日　　芥川龍之介

小松芳喬様

一二一六　〔二月五日田端から。渡邊庫輔宛〕

お父さんの長逝を悼み奉る。今春匆々親戚に不幸あり。多病又多憂、この手紙おくれて何ともすまぬ。

蒲原君によろしく。まだ多忙で弱つてゐる。頓首

二月五日　　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

渡邊庫輔様

二伸けふは手紙を七本書いた。これは八本目。

一二一七　〔二月七日田端から。蒲原春夫宛〕

支那餅をありがたう。比呂志からも禮狀を出す筈。小説は捗どれりや。僕は多忙中ムヤミに書いてゐろ。婦人公論十二枚、改造六十枚、文藝春秋三枚、演劇新潮五枚、我ながら窮すれば通ずと思つてゐる。庫公によろしく。

即興

春返る支那餅食へやいざ子ども

御大喪の夜　　　　　　　　　　　　芥川龍之介

蒲原君

一二一八　〔二月十一日田端から。佐佐木茂索宛〕

常談言つちやいけない。六十枚位のものをやつと三十枚ばかり書いた所だ。「河童」は僕のライネツケフツクスだ。しかし婦人公論へ書いた十枚ばかりの小品、或は御一讀に堪ふるならん。内田百間曰「芥川は病的のある氣違ひ、自分は病的のない氣違ひだから自分が芥川を訪問してわざと氣違ひじみた行動をして歸る。芥川は自分を氣違ひだと思ふ。自分は得意になつて歸つてくるうちにいつか氣違ひになつてゐる。同時に又芥川も氣違ひになつてゐる。——と云ふ話を書く爲に近々芥川を訪問するつもりだ。しかしどうも自分ながら「コハイ」コハイのは寧ろこつちぢやないか。僕は姉の亭主の債務など

の事を小説を書く間に相談してゐる。年三割の金と云ふものは中々莫迦に出來ないものだよ。十五日頃にはそちらへかへれるつもり。夫人によろしく。以上

二月十一日　芥川龍之介

佐佐木茂索様

一二一九　〔二月十二日田端から。小穴隆一宛〕

長く留守にして實にすまない。その後姉の家の生活のことや原稿の爲にごたごたしてゐる。年三割の金を借りてゐる上、家は燒けてゐるし、主人はない爲、どうにも始末がつかないのだ。(僕でももつとしつかりしてゐれば善いのだが)「河童」はだんだん長くなる。しかし明日中には脱稿のつもり。その校正を見次第、東京を脱出する。君が近所へ來てくれれば三月後は東京にゐても差支へない。今日は「サンデイ毎日」と「婦人公論」と「改造」とへ書いた。婦人公論のはしみじみとして書いた。大兒や女房も登場させてゐる　以上

二月十二日　芥川龍之介

小穴隆一様

二伸兎屋さんにも逢ふ間がない。佐藤(春)にはちよつと會つた。齋藤さんにも。僕はヴエロナアル〇・四だが齋藤さんは〇・七乃至八のよし上には上のあるものだ。

一二二〇　〔二月十五日田端から。小穴隆一宛〕

原稿用紙にて失禮。やつとけふ校了。これから親族會議をすまさなければならん。君には氣の毒で弱る。しかし二十日にはかへる。僕だけでも。河童を106枚書いた。それから「三十六歳の小說論」を書いて谷崎潤一郞君の駁論に答へた。毎日多忙。ます子女史健在。頓首

芥川龍之介

二月十五日

小穴隆一様

一三二一〔二月十六日田端から。佐佐木茂索宛〕

原稿用紙にて失禮。河童百六枚脱稿。聊か鬱懐を消した。改造社の招待の芝居へ來ないか。君の顔が見たい。火災保險、生命保險、親族會議、——何や彼やゴチヤ〳〵で弱つてゐる。が、それだけに何か書いてゐるのは愉快だ。ヴエロナアル○・七常用。アロナアルよりもヌマアルの方が眠るのに善い。やはりロッシユ會社製。

芥川龍之介

佐佐木茂索様

二伸東京に用向きなきや。今度こちらから栗位送る。堀の小說は一度僕や室生が讀んで二度目にフラグマンにしたもの。よろしくお引立てを乞ふ。

一三二二〔二月十六日田端から。秦豐吉宛〕

原稿用紙にて失禮。

Legenda Aurea は黄金傳說の意、Jocobus de Voragine は十三世紀の初期の人だ。(檢べるのは面倒故これでまけてくれ給へ)本の內容は僕の「きりしとほろ上人傳」の如き話ばかり。但しもつと簡古素朴だよ。英吉利では William Caxton の譯が有名だ。今度獨逸で出た本は近代語に譯されてゐるかどうか。Caxton は十五世紀頃の人だから、この英語は大分古い。のみならず原本にない話——たとへばヨブの話などを加へてゐる。僕は黄金傳說を全部讀んでゐない。(第一全部は浩翰だらう)が、Caxton のセレクションは一冊持つてゐる筈だ。御入用の節は探がすべし。しかし黄金傳說は兎に角名高

いものだから、ゲスタ・ロマノルムと一しよに買つて置いても善い本だよ。右當用のみ。

二月十六日　　芥川龍之介

秦豐吉様

二伸日本版「れげんだ・あうれあ」は今から七八年前に出てゐる。但し僕の頭でね。一笑

一二二三〔二月十七日田端から。大熊信行宛〕

原稿用紙で御免下さい。御手紙並びに高著、鵠沼へ參りし爲、遲れて落手、高著は唯今拜讀致し了り候。小生はラスキンには全然手をつけし事無之候へども、モリスに關するものは少々ばかり讀みをり候爲、高著に對し、多少の感慨を催し候。（モリスに關する在來の日本人の著書は出たらめ少からず、それも聊か讀みをり候へば、愈感慨多き次第に有之候）ラスキンよりモリスへ傳へたる法燈はモリスより更にショウに傳はりたる觀あり、その中間に詩人、兼小說家兼畫家兼工藝美術家兼社會主義者として立てるモリスは前世紀後半の一大橋梁と存候。但し老年のモリスの社會主義運動に加はり、いろいろ不快な目に遇ひし事は如何にも人生落莫の感有之候。（そは勿論高著の問題外に屬し候へども）小生は詩人モリス、――殊に Love is Enough の詩人モリスの心事を忖度し、同情する所少からず、モリスは便宜上の國家社會主義者たるのみならず、便宜上の共產主義者たりしを思ふこと屢々に御座候。以上

二月十七日　　芥川龍之介

大熊信行様

一二二四〔二月二十三日田端から。赤井三郎宛〕

原稿用紙で失禮します。玉稿は拜見しました。ああ云ふ有り合せの文句で書いては駄目です。もつと

ぶつ切ら棒でも善いから、ヂカに迫るやうに書かなければ。玉稿は佐佐木君に讀んで貰つた方が善いと存じます。右當用のみ。

二月二十三日　芥川龍之介

赤井三郎様

一二二五　〔二月二十六日田端から。端書、赤井三郎宛〕

南京新唱をありがたう右お禮まで　頓首

二月二十六日夜　芥川龍之介

一二二六　〔二月二十七日田端から。端書、瀧井孝作宛〕

御手紙拜見。「玄鶴山房」は力作なれども自ら脚力盡くる所廬山を見るの感あり。河童は近年にない速力で書いた。蜃氣樓は一番自信を持つてゐる。僕は來月の改造に谷崎君に答へ、并せて志賀さんを四五枚論じた。これから大阪へ立つ所。頓首

一二二七　〔三月一日大阪から。芥川文宛〕

拜啓、まだ三四日はこちらに滯在致すべく候。今日は谷崎、佐藤兩先生と文樂座へ參る筈、右當用のみ　頓首

三月朔　龍之介

文子どの

二伸　比呂志に西洋象棋を買つてやつた

一二二八〔三月一日大阪から。葛卷義敏宛〕

冠省一度やつたものをとり上げ、まことにすまぬが、森さんの即興詩人二册を小包にし谷崎氏へ送つてくれないか。宿所は文藝日記の末にあるべし。右當用のみ。小穴君によろしく。頓首

三月朔　　　　　　　　芥川

義敏様

一二二九〔三月二日大阪から。齋藤茂吉宛〕

冠省岡さんより御手紙有之小生にも「庭苔」に就いて何か書けと仰せられ候まゝ二三枚相したゝめ御手もとまでさし上げ候なほ又下阪前短尺二三枚お送り申上候も御落手の事と存候右とりあへず當用のみ

頓首

三月二日　　　　　　　　龍之介

齋藤茂吉様

一二三〇〔三月六日田端から。青野季吉宛〕

原稿用紙で御免下さい。「新潮」の合評會の記事を讀み、ちよつとこの手紙を書く氣になりました。それは篇中のリイプクネヒトのことです。或人はあのリイプクネヒトは「苦樂」でも善いと言ひました。しかし「苦樂」ではわたしにはいけません。わたしは玄鶴山房の悲劇を最後で山房以外の世界へ觸れさせたい氣もちを持つてゐました。（最後の一囘以外が悉く山房内に起つてゐるのはその爲です。）なほ又その世界の中に新時代のあることを暗示したいと思ひました。チエホフは御承知の通り、「櫻の園」の中に新時代の大學生を點出し、それを二階から轉げ落ちることにしてゐます。わたしはチエホフほど

新時代にあきらめ切つた笑聲を與へることは出來ません。しかし又新時代と抱き合ふほどの情熱も持つてゐません。リイプクネヒトは御承知の通り、あの「追憶錄」の中にあるマルクスやエンゲルスと會つた時の記事の中に多少の嘆聲を洩らしてゐます。わたしはわたしの大學生にもかう云ふリイプクネヒトの影を投げたかつたのです。わたしの企圖は失敗だつたかも知れません。少くとも合評會の諸君には尊臺を除き、何の暗示も與へなかつたやうです。それは勿論やむを得ません。しかし唯尊臺にはこれだけのことを申上げたい氣を生じましたから、この手紙を認めることにしました。

なほ又わたしはブルヂヨオワたると否とを問はず、人生は多少の歡喜を除けば、多大の苦痛を與へるものと思つてゐます。これは近頃 Nicolus Ségur の書いた「アナトオル・フランスとの對話」を讀み、一層その感を深くしました。ソオシアリスト・フランスさへ彼をソオシアリズムに驅りやつたものは「輕侮に近い憐憫」だと言つてゐます。右突然手紙をさし上げた失禮を赦して頂ければ幸甚です。頓首

昭和二年三月六日　　　　芥川龍之介

靑野季吉樣

一二三一　〔三月十一日田端から。谷崎潤一郎宛〕

冠省、先日來いろいろ御厄介に相成りありがたく存じます。どうも御迷惑をかけすぎたやうな氣がして恐縮です。本は御氣に入れば幸甚です。實は善いゴヤを見つけ、さし上げようと思つたのですが、金がなくてあきらめました。Los Caprichos の複製です。唯今大いに筋のあるシナリオを製造中　頓首

三月十一日　　　　芥川龍之介

谷崎潤一郎樣

一二三二 〔三月二十八日鵠沼から。齋藤茂吉宛〕

原稿用紙にて御免蒙り候。度々御手紙頂き、恐縮に存じ候。「河童」などは時間さへあれば、まだ何十枚でも書けるつもり。唯婦人公論の「蜃氣樓」だけは多少の自信有之候。但しこれも片々たるものにてどうにも致しかた無之候。何かペンを動かし居り候へども、いづれも楠正成が湊川にて戰ひをるやうなものに有之、疲勞に疲勞を重ねをり候。(今日は午後より鵠沼へ參る筈。)尊臺のことなど何かと申すがらにも無之候へども、あまりはたが齒痒き故、ペンを及ぼし候次第、高免を得れば幸甚に御座候。一休禪師は朦々三十年と申し候へども、小生などは碌々三十年、一爪痕も殘せるや否や覺束なく、みづから「くたばつてしまへ」と申すこと度たびに有之候。御憐憫下され度候。この頃又半透明なる齒車あまた右の目の視野に廻轉する事あり、或は尊臺の病院の中に半生を了ることと相成るべき乎。この頃福田大將を狙撃したる和田久太郎君の獄中記を讀み、「しんかんとしたりや蚤のはねる音」「のどの中に藥塗るなり雲の峯」「麥飯の虫ふえにけり土用雲」等の句を得、アナアキストも中々やるなと存候。(一茶嫌ひの尊臺には落第にや)殊に「あの霜が刺つてゐるか痔の病」は同病相憐むの情に堪へず、獄中にての痔は苦しかるべく候。來月朔日には歸京、又々親族會議を開かなければならず、不快この事に存じをり候。そこへ參ると菊池などは大した勢ひにて又々何とか讀本をはじめ候。(小生は名前を連ねたるのみ。)唯今の小生に欲しきものは第一に動物的エネルギイ、第二に動物的エネルギイ、第三に動物的エネルギイのみ。

冴え返る枝もふるへて猿すべり

三月二十八日　　　　龍之介

齋藤樣

一二三三　〔四月三日田端から。吉田泰司宛〕

冠省、あらゆる「河童」の批評の中にあなたの批評だけ僕を動かしました。あなたは僕を知らないだけにこれは僕には本望です。河童はあらゆるものに對する、——就中僕自身に對するデグウから生まれました。あらゆる「河童」の批評は「明るい機智」を云々してゐます。恰も一層僕自身を不快にさせる爲のやうに。右突然ながら排悶の爲に。（御禮の爲と云ふよりも）頓首

四月三日朝　　芥川龍之介

吉田泰司様

一二三四　〔四月三日田端から。稲垣足穂宛〕

高著をありがたう、文壇はあなたのやうな fancy の所有主に冷淡です。しかし fancy それ自身に價値のあるのは勿論です。書けるまでどんどんお書きなさい。僕などはもう fancy に見すてられた方です。しかし今牛乳をのんでゐると、第三半球がぼんやり浮かんで來ました。頓首

四月三日朝　　芥川龍之介

稲垣足穂様

二伸ゆうべまで鵠沼にゐた爲に御禮が遲れました。

一二三五　〔四月四日田端から。端書、芥川文宛〕

多加志熱を出したよし、石川さんから聞いた。こちらも義敏熱を出し（インフルエンザ）ねてゐる。多加志はすつかりなほるまでそちらに置いた方がよいかも知れない。六日或は七日に種やをやる筈。お母さんによろしく。

一二三六 〔四月十日田端から。飯田武治宛〕

冠省「雲母」の拙句高評ありがたく存候。專門家にああ云はれると素人少々鼻を高く致し候。但し蝶の舌の句は改作にあらず、おのづから「ゼンマイに似る」云々と記憶せしものに有之候。當時の句稿を保存せざる小生の事故「鐵條に似て」云々とありしと云ふ貴說恐らくは正しかるべく、從つて、もう一度考へ直し度候。唯似る——niruと滑る音、ゼンマイにかかりてはよつぽど未練あり、このラ行の音を欲しと思ふは素人考へにや。なほ又「かげろふや棟も落ちたる」は「棟も沈める」と改作致し候。ああ、何句もならべて見ると、調べに變化乏しくつくづく俳諧もむづかしきものなりと存候。この頃久保田君、句集を出すにつき、序を書けと云はれ、

「冴返る鄰の屋根や夜半の雨」

御一笑下され度候。二月號「山廬近詠」中、

「破魔弓や山びこつくる子のたむろ」

人に迫るもの有之候。ああ云ふ句は東京にゐては到底出來ず、健羨に堪へず候。頓首

四月十日　芥川龍之介

飯田蛇笏様

一二三七 〔四月二十五日田端から。室生犀星宛〕

冠省藏六刻の印二顆、小生よりけん上せしもの一寸お貸し下され度、なほ又肉池もお借し下され候はゞ幸甚　頓首

二十五日　龍之介

犀星様

一二三八　〔五月二日田端から。恒藤恭宛〕

手紙をありがたう。頭の中はまだ片づかない。從つて未だに病氣だ。唯書かざる可らざる必要があつて書いてゐるのだから、憫み給へ。來月も亦谷崎君に答へることにした。僕等の議論は君などには非論理的だらうが、僕の現在の頭の中を整理する爲には必要なのだ。そのうちに京都へ行くかも知れない。右御返事のみ。奥さんによろしく。誰か君が大醉して下立賣を歩いてゐるのを見たとか言つた。大いにわが意を得た。時々は大いに飲み給へ。

こぶこぶの乳も霞むや枯れ銀杏

五月二日　　芥川龍之介

恒藤恭様

二伸　さう云ふ暇もなからうが、若しあつたら、僕の説を批評した手紙をくれ給へ。ちつとは阿呆以外の説も聞きたい。尤も夫子自身阿呆だが。

一二三九　〔五月二日田端から。眞野友二郎宛〕

冠省、鯛をありがたう存じます。あなたは悠々自適してゐられる容子、健羨に堪へません。右とりあへず御禮まで。

こぶこぶの乳も霞むや枯れ銀杏

五月二日　　芥川龍之介

眞野友二郎様

一二四〇　〔五月六日田端から。里見弴宛〕

冠省大道無門ありがたく存じ候。來月の改造にてお禮かたがた妄評仕らんと存じ居り候所、大事をとりすぎ、とうとう今日の〆切りに間に合はず、斷念致し候間、この手紙を差し上げ候。御禮相遲れ候段あしからずおゆるし下され度候。頓首

五月六日　　芥川龍之介

山内英夫様

一二四一　〔五月六日田端から。宇野浩二宛〕

冠省　君の本の題を知らせてくれぬか。好意に甘えて序文を作ることにする。但しそれは一度「文藝春秋」にのせる事にしたい。さうすると、僕も大いに助かるから。餘は拜眉の上萬々、頓首

五月六日夜　　芥川龍之介

宇野浩二様

一二四二　〔五月十七日北海道から。繪端書へ里見弴と寄書、志賀直哉宛〕

双鳬眠圓

孤雁夢寒

旅情御想察下され度候。

五月十七日　　龍之介

一二四三　〔五月十七日北海道から。繪端書へ里見弴と寄書、佐佐木茂索宛〕

汽車にのる、しやべる、ねる、又汽車にのる、のべつ幕なしの精進には少からず弱り居り候但し鴛鴦眠暖　孤鶴夢冷

龍

一二四四　〔五月十七日北海道から。小穴隆一宛〕

敬啓　仙臺、岩手と巡業し、やつと津輕海峽を渡りて函館へ參り候函館は殺風景を極めた所なり、匆々湯の川溫泉へ避難、こちらは櫻さき蒲公英さき黃水仙さき櫻すずめと云ふ鳥啼き居り候あひ變らず憂鬱夜々即時に死ねる支度をして休みをり候これより札幌、旭川、小樽をまはり、新潟を經て二十四五日頃にかへる筈、文中さしつかへなき所だけ宅へもお洩らし下され度候

　盛岡

　啄木は今はあらずも目なぐもる岩手の山に鳥は啼きつつ

插し畫日々大へんなるべし女の子の鞠をつける畫より後は見ず不本意この事也　頓首

　五月十七日　　澄

一游先生

一二四五　〔五月二十四日新潟から。繪端書、佐佐木茂索宛〕

やつと新潟着、これはプライヴェエトだから氣樂だ。尤も大きな部屋にたつた一人坐つてゐるのははかない。

　憶北海道

　冴え返る身にしみじみとほつき貝

このほつき貝と云ふ貝は恐るべきものだ。どこの宿へとまつても大抵膳の上に出現する。

　五月二十四日　　龍之介

一二四六　〔五月二十四日新潟から。繪端書、小穴隆一宛〕

北海道二句

ひつじ田の中にしだるる柳かな

　ほつき貝と云ふ貝ありいづこの膳にものぼる

冴え返る身にしみじみとほつき貝

　五月二十四日

二伸繁昌記十三、十五回だけ拝見。長明先生云々の字は下島先生乎。

一二四七　〔五月二十四日新潟から。繪端書、芥川文宛〕

おととひの夜新潟到着、八田さんにいろいろ御厄介になる。二十五日か六日にはかへるつもり。くたびれ切つてゐる。東北や北海道を廻つて來ると食ひもののうまいだけ難有い。

龍

〔裏に〕

どこへ行つても御馳走ぜめに弱つてゐる。就中北海道の「ホツキ」と云ふ貝はやり切れない。

　五月二十四日　　志の田にて

一二四八　〔五月二十四日新潟から。繪端書、芥川比呂志、同多加志宛〕

コレハニヒガタノマチデス　ムカシノ東京ノヤウナキガシマス　ソレデモジドウシャハトホツテヰマス

へチマ

　五月二十四日

ヒロシサマ
タカシサマ

一二四九　〔五月二十四日新潟から。繪端書、室生犀星宛〕

鍋茶屋はつひに鍔甚に若かず。金澤にありし日の多幸なりしを思ふ事切なり。

北海道

ひつじ田の中にしだるる柳かな

新潟　龍之介

一二五〇　〔五月二十四日新潟から。繪端書、里見弴宛〕

青森では貴意の通り「のがれざるや」と相成り、その上例の茶話會と云ふやつにて往生すること一かたならず、新潟にてやつと人並みの食物にありつきほつと致し候。尤も鍋茶屋も鍔甚に及ばず、美人にも生憎邂逅不仕候

遠藤さまによろしく。魚は東京よりも新しいことを御吹聽下さらば幸甚。

北海道を憶ふ

冴え返る身にしみじみとほつき貝

一二五一　〔五月二十八日田端から。福島金次宛〕

御手紙拜見しました。何かとムヤミに書いてゐます。「蜃氣樓」をほめて頂いて恐縮です。しかし或友だちは小生の作品中、あれを一番無感激のものに數へてゐます。小生自身は一番無感激とも思つてゐないのですが。

五月二十八日

芥川龍之介

福島金次様

二伸北海道よりかへり、いろいろ手紙ばかり書いて大分くたびれました。これは四本目です。

一二五二 〔六月十日田端から。柳田國男宛〕

冠省、先夜は失禮仕り候。「まひまひつぶろ」のぬき刷り、ありがたく拜受致し候。尙又近頃泉先生より河童の話をいろいろ伺ひ候。

舊句　金澤にて

簀むし子や雨にもねまる蝸牛

御一笑下され度候。頓首

六月十日夜

龍之介

柳田國男様

一二五三 〔六月十四日田端から。齋藤貞吉宛〕

原稿用紙で失禮。日本では滅多に吸へぬ煙草をありがたう。不相變たつしやかね。この間大東京繁昌記と云ふものの中でちよいとお前に言及した。それから北海道へ行つた。

雪どけの中にしだるゝ柳かな

これは旭川の吟だ。

六月十四日

龍之介

齋藤貞吉様

一二五四　〔六月二十一日田端から。小手川金次郎宛〕

冠省度たび頂戴ものを致しありがたく存候右とりあへず御禮まで　頓首

六月二十一日　　龍之介

小手川金次郎様

旭川

雪どけの中にしだるゝ柳哉

御一笑下され度候

一二五五　〔六月二十四日田端から。大岡龍男宛〕

冠省高著お贈り下されありがたく存候　唯今序文だけ拜見致し候高濱さんの序文は小生などにも藥に相成り候　いづれゆつくり拜見仕る可く候右とりあへず御禮まで　頓首

六月二十四日　　芥川龍之介

大岡龍男様

一二五六　〔六月二十九日田端から。遠田信太郎宛。封筒に遠田一路風様とあり〕

冠省さくらんぼありがたく存候まい度御配慮にあづかり忝く右とりあへず御禮まで　頓首

六月二十九日　　芥川龍之介

遠田信太郎様

一二五七　〔六月二十九日田端から。東宮エルザ宛〕

敬啓　東宮様御長逝のよし承り候謹みて御悼み申上候　頓首

六月二十九日

芥川龍之介

東宮エルザ様

一二五八〔七月八日田端から。金九經宛〕

前略、原稿用紙にて御免蒙り候。「書物禮讃」ありがたく存候。訣、譯、ともにあて字たる國に生まれたること我ながら笑止千萬に存じ候。所詮わけと假名にするに若かず。唯訣字を用ひたるの校正者の誤りならざることを御承知下さらば幸甚に存候。（「慢性出鱈目」の慢性も言海には慢性とあり、新聞雜誌などには蔓性とあれども、しやれて慢性といふさへしやれと聞え難き世の中に候。）高須氏の著書は拜見不仕、高評によりて大體を窺ひ申し候。右とりあへず御禮まで。頓首

七月八日

曼青

金九經先生

一二五九〔七月田端、家にて、「西方の人」原稿と共に。葛巻義敏宛〕

この原稿の番號を打ち直し、改造社の使に渡して下さい。

龍之介

義敏様

索引

佐佐木房 六九八 七〇六 九六七 九七四 一一三〇
佐佐木茂索(舊姓大橋) 二七四 三〇五 三二八 三三二 三三四 三四二 三四四 三四九
三五二 三五五 三六三 三六五 三七〇 三七四 三八一 三八六
三八九 四〇四 四〇五 四二八 四三一 四三六 四五七 四六〇
四六六 四七五 四八一 四八三 四八四 四九三 五〇二 五〇七
五一九 五二一 五二三 五二六 五三〇 五三九 五四一 五四五
五五一 五五九 五六一 五六二 五八四 五九七 六〇六 六一八
六二一 六六三 六七六 六八七 六九二 六九四 七〇四 七〇五
七一二 七一四 七二八 七四三 七七一 八二〇 九〇六 九一〇
九三一 九五八 九七一 九八六 九九〇 一〇〇五 一〇一四 一〇五八
一〇六三 一〇八八 一〇九六 一一〇二 一一二二 一一二七 一一三四 一一三七
一一四〇 一一四四 一一四六 一一五〇 一一五二 一一六二 一一六三 一一七一
一一七三 一一七五 一一七七 一一七九 一一八五 一一八七 一一八九 一二一〇
一二一八 一二二一 一二四三 一二四五

佐藤豐太郎 一〇七七 一〇九三

佐藤春夫 一一二一 一一三三 四〇九 四五一 七三四 九一九 九二一 九六一
一〇〇一 一〇〇四 一〇三九 一〇六六 一〇七九 一〇九七 一一一四 一一九七

里見弴 一一〇六 一二四〇 一二五〇

澤村幸夫 六〇五 六一一 六一九

山宮允 九六 一一三 七一八 九六八

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十五日發行

芥川龍之介全集第十卷

著作者　芥川龍之介

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所　精興社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店

電話九段(33)一八七・一八八番
一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

（大森製本）

古谷夏子
Natsuko Y. Furuya

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03185 4961